

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第234集

中屋遺跡

(第二東名No.130地点)

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市 - 2

(第1分冊)

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第234集

中屋遺跡

(第二東名No.130 地点)

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市 - 2

(第1分冊)

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

本書は、浜松市浜北区に所在する中屋遺跡の発掘調査報告書です。第二東名高速道路の建設に伴って行われた浜松市内の発掘調査では、すでに刊行しました大門西遺跡・大平遺跡に次ぐ、2冊目の報告書となります。

中屋遺跡では、溝と土壘で囲まれた大規模な施設や、国内で初めての出土となる中世螺鈿鞍など、当初予想だにしなかった数多くの発見があり、マスコミに大きく取り上げられたこともあって、調査中から話題となっていました。

本書では、調査によって発見された遺構や遺物を報告するとともに、それらを検討することで得られた新たな知見も提示されています。例えば、当研究所が誇る高度な保存処理技術によってよみがえった螺鈿鞍には、螺鈿装飾に加えて覆輪が装着されていた痕跡が確認されていますし、溝と土壘で囲まれた大規模な施設については、瓦などの分析から寺院である可能性が高いという見解が示されています。そして、数百年におよぶ遺跡の盛衰や集落の移り変わりなど、現在の地割りにつながる各時代の土地利用の様子も明らかになっています。

中屋遺跡の調査は端緒についたばかりですが、個別の遺構・遺物の分析にとどまらず、様々な視点から地域の歴史の一端を明らかにできたことが、今回の調査の大きな成果であるといえます。

現在この地域では、産業や自然、史跡、文化財といった地域資源つなぐ散策コース「遠州山辺の道」の整備事業が進められており、中屋遺跡もそのルートの一つとなっています。中屋遺跡では、現在でもいくつかの場所で土壘の高まりなどをみることができます、本書にまとめた成果は、訪れた方が遺跡の姿をより具体的にイメージいただける内容になっていると思います。

今回得られた多くの成果は、猛暑や極寒のなかでも日々地道な調査に取り組んだ調査担当者、限られた期間の中で膨大な遺物や記録に向き合った報告書執筆者、そして作業に携わった多くの作業員諸氏の労苦の賜物といわねばなりません。最後に、調査に多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様、中日本高速道路株式会社、静岡県教育委員会、浜松市教育委員会をはじめとする多くの方々に、心から御礼申し上げます。

平成 22 年 12 月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 石田 彰

中屋遺跡

目 次

〔第1分冊〕

第1章 調査の方法と経過	1
1 調査に至る経緯	(及川) 2
2 調査の体制	(武田) 4
3 調査の方法	(武田) 5
4 調査の経過	(武田) 7
第2章 位置と環境	15
1 遺跡の位置	(武田) 16
2 地理的環境	(足立) 17
3 歴史的環境	(足立) 20
第3章 中世～近世	25
1 概要	(武田) 26
2 大溝・土壙	(武田) 32
3 溝	(武田) 80
4 河川	(武田) 123
5 掘立柱建物	(溝口) 174
6 小穴	(溝口) 220
7 井戸	(溝口) 229
8 土坑	(溝口) 239
9 埋葬遺構	
(1) 埋葬方法と年代	(足立) 276
(2) 遺構と遺物	(武田) 277
10 包含層・擾乱出土遺物	(溝口) 306

〔第2分冊〕

第4章 古代	323
1 概要	(武田) 324
2 積穴建物	(武田) 326
3 堀立柱建物	(武田) 347
4 小穴	(武田) 385
5 土坑	(武田) 389
6 溝	(武田) 397
7 包含層・攪乱出土遺物	(武田) 400
第5章 保存処理	405
1 瓜文螺鈿鞍の保存処理	(西尾) 406
2 金属製品の保存処理	(大森) 416
第6章 理化学的分析	417
1 出土木製品の樹種	(小川・鈴木三男) 418
2 鉄滓の金属学的調査	(大澤・鈴木瑞穂) 449
第7章 総括	457
1 中屋遺跡出土瓜文螺鈿鞍について	(小松) 458
2 中世瓦	(武田) 464
3 中世土器・陶磁器について	(溝口) 475
4 中世の墨書き土器	(武田) 480
5 まとめ	(足立) 491

図版 / 抄録

例　言

1. 本書は、静岡県浜松市浜北区根堅に所在する中屋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書では、基本的に平成22年4月現在の市区町名で記し、必要に応じて旧市町村名を併記している。なお、所属については、当時の所属機関名を記している。
3. 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、市町村単位にて実施している。浜松市では本報告書が2冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 浜松市-2」とした。
4. 本報告書は「第1分冊」と「第2分冊」によって構成されている。
5. 調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中まで日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化財保護課（平成21年度まで文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
6. 現地調査・資料整理の期間と担当者については、第1章に別記した。
7. 本報告書の執筆は、及川司、武田寛生、足立順司、溝口彰啓、西尾太加二、大森信宏（以上、当研究所）、小川とみ（東北大学植物園）、鈴木三男（東北大学植物園）、大澤正己（九州テクノリサーチ）、鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ）、小松大秀（東京国立博物館）がおこなった。
8. 各章・節・項の執筆者は、目次に名前を明記した。
9. 本書で掲載した写真のうち、遺構写真は各調査担当者と富樫孝志、井鍋聟之が、遺物写真は杉山すず代が、作業状況写真等は各調査担当者が撮影した。
10. 木製品と金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
11. 螺鈿駒の復元イラストは、西尾太加二が作成した。
12. 現地調査においては、小和田哲男氏（静岡大学）、中井均氏（米原町教育委員会）、向坂鋼二氏（当研究所評議員）、村田修三氏（大阪大学）に調査指導を賜った。
13. 整理作業においては、上原真人氏（京都大学）、小松大秀氏（東京国立博物館）、藤澤良祐氏（愛知学院大学）に調査指導を賜った。
14. 基準点測量・グリッド杭の打設および空中写真撮影、空中写真測量は、株式会社フジヤマに委託して実施した。
15. 出土木製品の樹種同定は、鈴木三男氏（東北大学植物園）に依頼して実施した。
16. 鉄滓の金属学的分析は、株式会社九州テクノリサーチに委託して実施した。
17. 本書の編集は、武田寛生がおこなった。
18. 註・引用・参考文献については、各章または各節の文末に記した。
19. 各調査の概要は、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
20. 発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。
21. 現地調査および整理作業にあたっては、多くの方々から助言・協力を賜った。記して深謝の意を表する。（順不同・敬称略）
浅野啓介、新井権名、太田好治、大林元、大谷宏治、小野正敏、片山一道、加藤理文、河合修、久野正博、柴田稔、鈴木京太郎、中川律子、八賀晋、本田祐二、松井一明、森部夫。

凡 例

1. 座標は平面直角座標系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。
2. グリッド（方眼）は、1の座標を用いて設定している。グリッドの一辺は10mとし、アルファベット（A～）と算用数字（1～）を用いて、その位置を表示している。東西方向が西から1・2…、南北方向が北からA・B…と設定している。
3. 方位については、1の座標による方位（座標北）を基準として表示している。
4. 発掘遺構は、遺構の種別を示す次の記号と、一連の番号の組合せにより表記した。

SA 土星	SB 穴穴建物	SD 溝	SE 井戸	SF 土坑
SH 掘立柱建物	SR 河川跡	SP・P 柱穴・小穴	SX その他	
5. 遺構番号は、遺構種類ごとの通し番号としている。番号は、基本的に現地調査で付されたものをそのまま使用したが、遺構種類が変更されたものについては、新たに別の番号を付している。また、現地調査では調査区ごとに通し番号が付与されていたため、本報告書では上一桁に調査区名を付した4桁の番号で表示して区別した。
6. 遺物番号は、種類・出土遺構・挿図の別に関わらず、すべて通し番号を付している。
7. 図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図中に表記している。
8. 遺物の実測図の縮尺は、土器・陶磁器類は1:3、瓦は1:4、呪符木簡と 笹塔婆は1:2、木杭・矢板は1:8、漆椀は1:3、他の木製品は1:4、金属製品（銭貨を除く）は1:2を基本とし、各図にスケールを付した。
9. 銭貨の拓本は、すべて1:1で掲載している。
10. 周辺の地形図については、国土地理院「二万五千分の一地形図（平成19年発行）」および浜北市「二千五百分の一地形図（平成3年発行）」を複写・加筆して使用した。
11. 土器・陶磁器の分類・編年に関しては、主に以下の文献に依拠した。

松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究 25』静岡県考古学会

中野晴久 1994 「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター
蘿澤良祐 2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院

鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム

菊川町教育委員会 2000 「横地城跡総合調査報告書 資料編」

瀬戸市 1998 「瀬戸市史 陶磁史篇六」

鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器の出現から消滅 補遺・論考編』

浜松市文化協会 1998 「梶子北遺跡 遺物編（本文）」

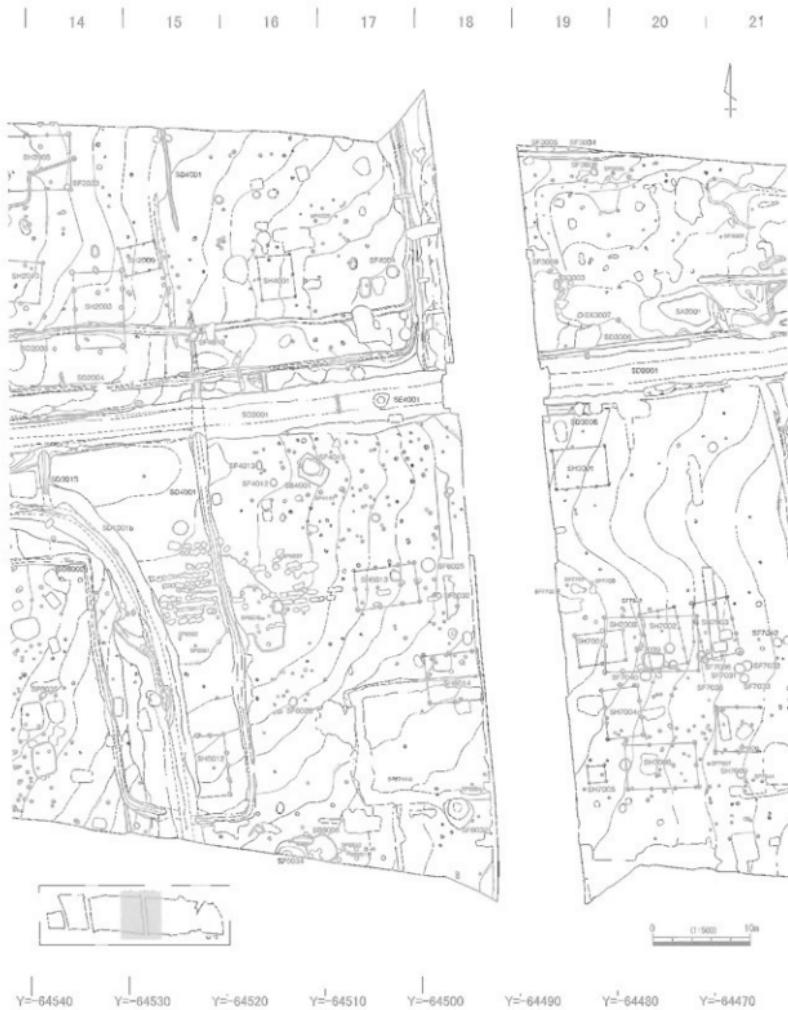
図面1 遺構配置図（1）



造構配置図（2） 図面2



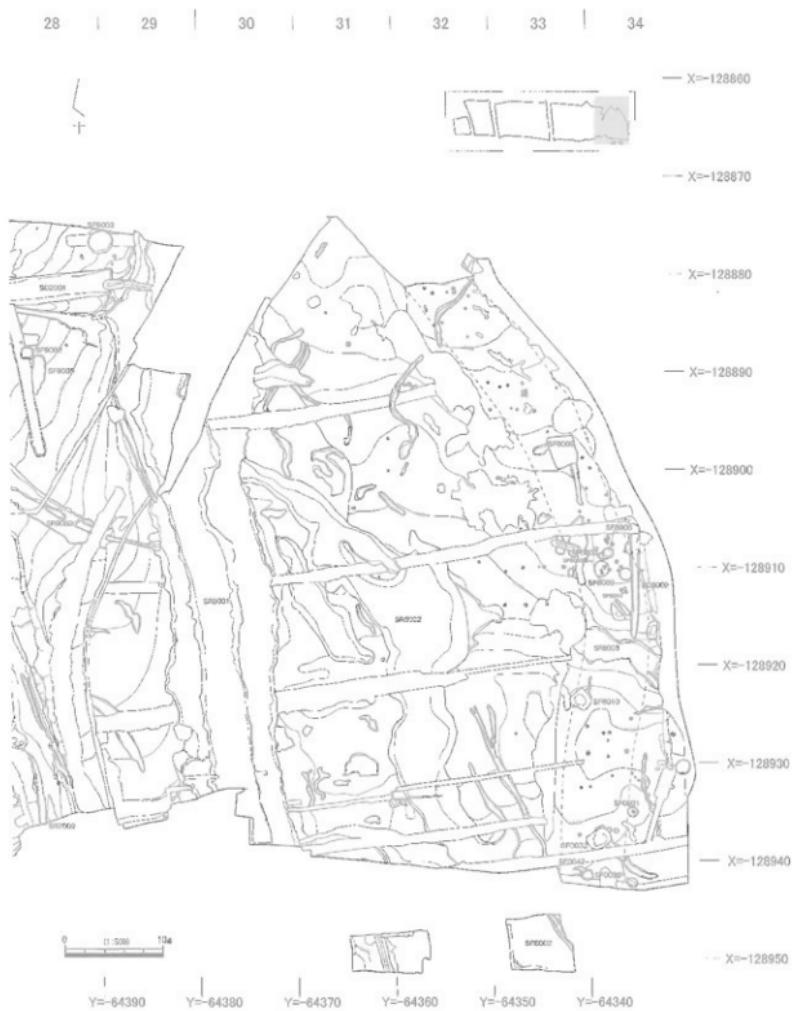
図面3 遺構配置図（3）



遺構配置図 (4) 図面4



図面5 道構配置図(5)



第1章 調査の方法と経過

1. 調査に至る経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては、東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成4年2月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成4年5月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付で日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けた県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象面積が1,453,518m²となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成5年11月19日付で日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成6年には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象面積は1,286,756m²となっている。

平成7年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名開通埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取り扱いについては、この会議において協議していくことになった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成8年7月1日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組している。

平成 8 年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成 8 年 9 月 24 日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに調査実施機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成 8 年 9 月 25 日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成 8 年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真の No.94 地点、浜北市大平の No.136 地点、同市四大地の No.137 地点の確認調査が実施されている。その後、平成 9 年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地において確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成 9 年 1 月 31 日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成 9 年 12 月 25 日付で施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により、平成 6 年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成 10 年 9 月 2 日日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成 10 年 9 月 25 日付で再踏査の依頼をするとともに、10 月 2 日には踏査の実施に関する打ち合わせ会を行った。11 月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成 10 年 12 月 17 日付で県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は 21 地点、調査対象総面積は 108,734 m² であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成 11 年 3 月 5 日付で協定変更を行っている。なお、平成 17 年度の日本道路公団の民営化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査は、中日本高速道路株式会社東京支社に引き継がれています。

第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パークリングエリア、排水処理場について財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜松市、富士宮市、裾野市、富士市の教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

浜松市（旧浜松市と旧浜北市）内における、確認調査を必要とする対象地点とその範囲の選定は、静岡県教育委員会の指導のもと、浜松市教育委員会及び、浜北市教育委員会が行った。その後、路線範囲の変更、側道やサービスエリアなどの本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡所在の再確認によって、対象地点範囲の変更や新たな対象地点の追加が行われた。最終的に、浜松市域では、本線およびサービスエリア建設範囲内で 10 箇所、工事用道路建設範囲内で 2 箇所の対象地点が選定された。この内、周辺の発掘調査や分布調査などによって、周知の遺跡となっていたのは、5 地点である。その他の 7 地点については、周知の遺跡を含まないが、踏査や周辺環境等の検討の結果、遺跡の存否を含めて確認調査を行う必要があるとされた場所である。

なお、調査を必要とする対象地点には、静岡県内で通し番号による地点名が付けられており、浜松市域において対象となった 10 地点については、No.129～139 地点となっている。ただし、いずれも確認調査の着手前に付けられたため、周知の遺跡を含んでいなかった地点に関しては、必ずしも地点名と遺跡の範囲とが合致していない。本書で報告する中屋遺跡の範囲は、No.129 地点と 130 地点の 2 地点が相当する。また、No.130 地点については、中屋遺跡以外にも篠場瓦窯、上海土遺跡、大門西遺跡、寺海土遺跡、中通遺跡の 5 遺跡が含まれている。

2. 調査の体制

中屋遺跡に関する調査体制は、表1の通りである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）は、日本道路公團静岡建設局における各工事事務所の範囲に合わせて「工区」を設定し、各工区単位で調査体制が組織されている。そのため、表1は浜松工区として組織された体制の一部となっている。

中屋遺跡の確認調査および本調査（以下、現地調査）は、浜松市浜北区尾野の浜北現地事務所を拠点にして、平成10～17年に実施した。

本事業については、現地調査を優先するという方針から、浜松工区における全遺跡の現地調査が終了した後に、整理作業を実施している。本遺跡の資料整理および報告書作成業は、袋井市小山の袋井整理事務所において、平成19～22年度に実施した。ただし、出土遺物の洗浄、注記、写真の整理・収納、各種台帳作成などの基礎的な整理作業の一部については、現地調査と並行して浜北現地事務所で実施している。

出土遺物の保存処理作業については、金属製品は静岡市駿河区谷田の当研究所本部、木製品は静岡市清水区江尻町の清水整理事務所において実施した。

なお、本書では、資料整理の「調査担当者」（表1）と「執筆・編集者」（例言）が一致していない。この点に関しては、「4. 調査の経過」において、その経緯を記している。

表1 調査体制

	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H20年度	H21年度	H22年度
所長	齋藤 忠	清水 哲	天野 忍	石田 彰							
副所長	山下 昇	山下 昇	山下 昇	山下 昇	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	天野 忍	石田 彰
常務理事	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤徳幸	伊藤徳幸	伊藤徳幸	伊藤徳幸	平松公夫	清水 哲	清水 哲
部長	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤徳幸	伊藤徳幸	伊藤徳幸	伊藤徳幸	平松公夫	平松公夫	石田 彰
次長					鈴田英巳	鈴田英巳	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村 実	松村 実
課長					鈴田英巳	鈴田英巳	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村 実	松村 実
専門監										福澤保申	
経理専門員	福澤保申										
統括担当者	鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秋博	鈴木秋博	中津京子	中津京子			中津京子
部長	佐藤道夫	佐藤道夫	佐藤道夫	佐藤道夫	山本昇平	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川兼久		
次長	佐野五十三	及川司			黒野克巳	黒野克巳	黒野克巳	黒野克巳	及川 司	及川 司	及川 司
課長	及川 司				及川 司	中嶋徳夫	中嶋徳夫	中嶋徳夫	及川 司	及川 司	中嶋徳夫
工区主任		西田光男				西田徳夫	西田徳夫	西田徳夫	及川 司	及川 司	中嶋徳夫
係長									富根幸志	富根幸志	富根幸志
事務担当									中津京子	中津京子	中津京子
	西田光男	西田光男	水野功太郎	水野功太郎	水野功太郎	高見健司	武田寅生	鶴井光広	平理智久	武田寅生	
			横田良久	佐野和道	佐野和道	佐野和道	佐々木和也	伊藤嘉孝			
調査担当者				小川和彦		高見健司	中曾哲久	高見健司			
						高井 京	高井 京	佐々木和也			
						白鳥直樹	武田寅生	高井 京			
保存処理									西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
									大森信宏		
個々	第1次確認	第1次調査	第2次調査	第3次調査	第4次調査	第5次調査	第6次調査	資料監理	資料監理	資料監理	資料監理
	第2次確認	第3次調査	第4次調査	第5次調査	第6次調査	資料監理	保存処理	保存処理	保存処理	保存処理	保存処理
			第3次調査	第4次調査	第5次調査	第6次調査					
				第3次調査	第4次調査	第5次調査	第6次調査				

3. 調査の方法

(1) 確認調査

中屋遺跡の確認調査は、実施可能な条件が整い委託者からの要請があった範囲について、平成11年から4次にわたりて実施されている。

実施にあたっては、得られる情報量が多いことなどから、トレーナーを掘削して調査することを基本とした。トレーナーの掘削は、重機の進入が容易なことから、表土や耕作土等は重機で掘削する方法を用いた。ただし、この場合においても、遺物包含層の掘削や遺構を精査する作業については、人力によってその把握に努めた。調査区のトレーナーを掘削する際には、主として土層の確認と遺構の発見に力を注いだ。土層については、各トレーナー四方の壁の土層断面を検討し、その高さや土色、土質などを記録した。遺物や遺構が発見された箇所においては、遺物包含層や遺構面の確定に努めた。

出土遺物は、出土した層位と位置を確認し、記録した上で取り上げることを基本とした。しかし、まとまって出土した場合や、遺構の性格を示している遺物が出土した場合などについては、本調査を実施することを前提に、出土位置に残すこととした。

現地での記録図面は、調査区全体図（トレーナー配置図）が1/200、土層断面図や柱状図は1/10を基本として作成した。その際の測量基準点は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭、第2次調査以降は本調査の基準杭を使用した。記録写真には、作業工程撮影用と併行して35mm判カラーネガを用いた。

(2) 本調査

本調査は、現道や河川等の工事が及ばない範囲を除く、東西約360m、南北約80mを範囲とする。ただし、代替施設の設置が困難な宅地への進入路や水道管など、調査によって住民の生活に影響が及ぶと想定される範囲や、調査における安全確保が困難な狭小な場所については、遺跡の状況について検討を行った上で、静岡県教育委員会の指導の下、一部調査範囲から除外している。調査は、実施可能な条件が整い委託者からの要請があった範囲について、大きく8次に分けて実施している。そのため、条件によって調査次ごとに工程は多少異なるが、基本的な調査の方法については変わらない。

調査に際しては、基準点測量およびグリッド杭の設置を委託して行った。中屋遺跡におけるグリッドは、大グリッドと小グリッドからなっている。大グリッドは一辺10mの正方形で、第2次調査の範囲の北西隅にあたる座標（X= - 128850 Y= - 64670）を起点として、北から南へA・B・C…、西から東へ1・2・3…と、アルファベットと数字の組み合わせによって表記している。ただし、遺跡の範囲が明らかでない段階にグリッドを設定したため、起点の西側になってしまった範囲については、-1と-2の数字を附加することとした。小グリッドは、1つの大グリッドを4分割した5m四方の正方形で、大グリッドと組み合わせてA 1 - NWなどと記している。なお、2002年4月1日からの改正測量法の施行によって、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、中屋遺跡の発掘調査はすべて日本測地系に基づいている。そのため、本書の平面座標は、世界測地系であることを明示したものを見き、すべて日本測地系で表記している。

発掘調査は、まず調査区の設定を行った。そして、作業員棟・簡易トイレなどの設置とともに、重機による表土除去を開始した。ほとんどの部分については重機によって表土除去作業を行ったが、第5次調査では土壌の残存する可能性が想定されたため、一部表土から人力による掘削作業を行っている。

その後、重機による表土除去が完了した範囲から、人力によって遺構検出面までの掘削作業を開始した。調査区のはほとんどの中では、表土・盛土除去後、まもなく遺構検出面（地山）に達した。また、盛土等がなされていて、現地表面から深く掘り下がる部分については、安全確保のための土留め施設を

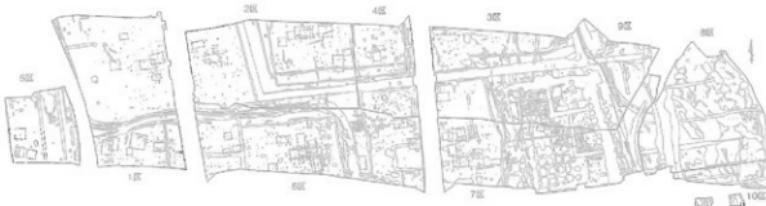


図1 中屋遺跡区割り図

設置した。なお、表土除去以降の作業を円滑に進めるため、重機と人力による作業を一部並行して行っている。遺構検出面に達した場所については、隨時、遺構の検出作業を行った。検出された遺構は、まず遺構の半分を掘削し、土層断面によって埋土の状態を観察・記録した後に、全体の掘削を行った。ただし、柱穴とみられる遺構については、まず上層を数cm掘り下げて柱痕跡の有無を平面的に確認した。柱痕跡が確認されたものは、その部分を一段深く掘り下げ、図や写真の記録を行った後に、遺構の半分を掘り下げた。

発見された遺構には、すべて調査中に遺構番号を付した。ただし、各調査次ごとに1番から番号を付した結果、遺構番号が一部重複することとなったため、本報告に際して全ての遺構について、先頭に調査区（図1）の番号（10区については0）を付した4けたの遺構番号に改めている。また、遺構の種類ごとに1から番号を付しているため、遺構の種別を変更したものについては、新たに番号を付している。

遺構から出土した遺物については、出土状況図の作成または、出土地点の三次元座標を計測した上で取り上げることを基本とした。ただし、土砂とともに流入したとみられる遺物については、基本的に層位ごとに取り上げている。包含層出土の遺物については、遺物が集中するなど特別な場合を除いて、5m四方の小グリッドごとに取り上げた。

現地の記録図面としては、空中写真測量によって、設定したグリッドに沿って、100分の1縮尺の地形測量図と20分の1縮尺の遺構図を作成した。また、特に細部の記録が必要なものについては、10分の1縮尺の記録図面を作成した。遺構の現地記録写真的撮影は、6×7判（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用い、全景写真等については4×5判も一部使用した。作業工程の撮影には35mm（カラーネガ）を使用した。空中写真撮影及び空中写真測量と、遺物出土状況図の一部については、委託にて実施した。

（3）資料整理・報告書作成

中屋遺跡に関する資料整理および報告書作成作業は、平成19年度から開始した。なお、出土遺物の洗浄・注記や台帳作成等の基礎整理作業については、現地調査終了後に随時行われていた。

作業としては、土器の分類・仕分け、接合、拓本、実測作業や、遺構図面の修正・編集、各図の版組・トレース作業、遺物の写真撮影、原稿執筆などを行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。遺物の写真撮影は、4×5判（モノクロネガ・カラーリバーサル）、6×7判（モノクロネガ・カラーリバーサル）を用いて、当研究所写真室において行った。出土した木製品と金属製品の保存処理作業については、当研究所保存処理室が実施した。鉄滓の成分分析については、委託により実施した。

木製品の樹種同定については、東北大学植物園の鈴木三男氏に依頼した。

4. 調査の経過

(1) 現地調査

中屋遺跡の現地調査（確認調査・本調査）は、工事の工程や道路の付け替えが必要であるなどの事情により、複数回に分けて行われている。また、基本的には地点を単位として調査が実施されているため、130 地点に含まれる他の遺跡とともに調査が行われた場合もある。

以下、多少複雑ではあるが、本事業以外の浜北市教育委員会による調査も含め、調査次数ごとに現地調査の経過について記すことにする。

第1次確認調査（期間：平成12年3月2～8日 調査名：No.129 地点確認調査）

中屋遺跡における最初の調査である第1次確認調査は、平成12年3月2日から実施した。踏査の際に遺物は採取されていないが、70×40 cm程の大きさの平らな石が祀られていることや、周辺の地形がやや高くなっていること等から、墳墓が存在する可能性があるとして、石の周囲の108 m²が確認調査の



図2 中屋遺跡の調査範囲

対象となった（No.129 地点）。

調査では、石の周囲に4本のトレーナーを設定し、重機によって表土や耕作土を除去した後に検出面（地山）と蓋面において、遺構の有無について確認作業を行った。調査の発端となった石に関しては、耕作土中に浮いた状態であり、遺構として認識することはできなかったが、石の東側において溝や小穴、錢貨が埋納された墓が発見され、遺跡が周囲に展開していることが明らかとなり、その範囲は129地点の調査対象範囲にも及ぶことが確実となった。

第1次調査（期間：平成12年9月29日～10月31日 調査名：No.129 地点本調査）

第1次確認調査の結果を受け、翌年の平成12年9月29日から、129地点の対象範囲全域（108m²）について本調査を実施した。調査では、第1次確認調査で検出されていた墓（SX2008）や溝（SD2003）などの他、新たに1基の墓（SX2009）や柱穴とみられる小穴が多数発見された。遺構を完掘し、図や写真等による記録を行った後、10月31日に埋め戻し作業を実施した。

第2次確認調査（期間：平成12年9月29日～12月4日 調査名：No.130 地点確認調査その1）

第1次確認調査において、129地点の調査対象範囲外にも遺跡が広がることが明らかになり、手急に遺跡の範囲を特定することが必要となった。そのため、第1次調査と並行して、調査可能な場所の多い129地点の西側について確認調査を実施した。なお、中屋遺跡に関するこれ以降の調査については、調査対象範囲が未確定となっていた130地点の調査として取り扱っている。

確認調査は、129地点から西へ約300mまでの範囲を対象とした。調査の結果、約150～200m西に遺構や遺物が確認されない範囲が存在し、その西と東には遺跡が展開していることが明らかとなった。なお、西側の遺跡については、現在寺海土遺跡となっている。一部未調査の部分も残ったが、この確認調査によって、中屋遺跡の範囲の西側については、ほぼ特定することが可能となった。

第2次調査（期間：平成13年5月17日～10月26日 調査名：No.130 地点Ⅰ期）

第2次確認調査の結果を受け、平成13年5月17日より、第1次調査区の周囲について本調査を実施した。対象となったのは、ほぼ路線の北半分で、用地の取付が完了していた南北約40m・東西約70mの範囲である。なお、第2次調査区の中央に位置する第1次調査区は、すでに調査が完了した範囲であったが、作業の効率性等の観点から、第2次調査区とともに掘削して埋め戻した土を除去することとした。

重機によって表土・耕作土を除去した後、遺構の検出作業を行うと、まもなく第1次調査区の西側と



図3 重機による表土除去（第2次調査）



図4 作業風景（第2次調査）

南側に大規模な溝（SD2001）の存在が確認された。直線的に掘られた溝は、調査区の南西でやや鈍角に屈曲し、北側と東側は調査区外へと続いている。さらに、調査区の北壁において、溝の東側（内側）に土壙の痕跡が発見されたことにより、鎌倉期の方形居館の可能性が想定され、注目されることとなつた。また、本遺跡は、当初「（仮称）千抗遺跡」と呼称されたが、区画の中心が字中屋に位置することが判明したことから、浜北市教育委員会との協議を行い、「（仮称）中屋遺跡」と改められた。

10～11月には、現地において小和田哲男氏（静岡大学）、向坂鋼二氏（当研究所評議員）、中井均氏（米原町教育委員会）、村田修三氏（大阪大学）による調査指導が行われ、10月25日には近隣の浜北市立赤佐小学校の4年生を対象に遺跡見学会が実施されている。

なお、第2次調査区については、10月26日に作業を終了しているが、日本道路公団との協議の上、埋め戻しは実施せず、東側も含めた溝の全体写真を撮影する（第4次調査）までの間、完掘時の状態を保持することにした。

第3次確認調査（期間：平成13年9月13日～平成14年1月30日　調査名：№130 地点範囲確認調査）

第2次調査によって、大規模な溝が第2次調査区の東に延びることが判明するとともに、東へ約600mの地点において古代のものとみられる布目瓦が採取されたため、№130 地点の東側の範囲を確定させることができた。そのため、一部第2次調査と並行して、範囲の確定していた市道岩水寺駅前線から約600m東までの範囲を対象に確認調査を実施した。

調査の結果、一部削平によって遺跡が矢わざっていた部分はあるものの、ほぼ全域に遺跡が展開することが判明した。なお、これらの遺跡は、現在大門西遺跡、上海土遺跡、篠場瓦窯となっている。

中屋遺跡に関しては、第2次調査で発見された溝（SD2001）の延長上に位置するように、複数のトレントが設定された。調査の結果、溝の延長であると推定される遺構が、東西約90mの範囲で検出され、第2次調査区で発見されたものを含めると、東西180m以上の規模におよぶことが明らかとなった。溝はさらに東へと続いているが、東側のトレントで河川跡（SR8001）とみられる遺構が南北方向に検出されたことから、溝は河川跡に注ぎ込んでいるものと推定された。河川跡では、その両岸に多数の木杭が遺存することから、護岸施設が存在する可能性が高いことが明らかとなった。

遺跡の範囲に関しては、浜北市教育委員会との協議により、東へ約300mの県道岩水寺停車場線付近まで遺跡が連續して存在するものの、東側は古代を中心とする遺跡であることから、第2次調査区から約190m東に位置する溜池の堤跡までの範囲を中屋遺跡として扱うこととなった。これにより、本事業における中屋遺跡の調査範囲の東側が確定された。



図5 調査指導（第2次調査）



図6 作業風景（第3次確認調査）

第3次調査（期間：平成13年11月5日～平成14年7月18日 調査名：No.130 地点Ⅰ期）

平成13年11月に重機による表土除去が行われたものの、第3次確認調査を優先して実施したため、人力による調査が開始されたのは、平成14年1月28日からであった。周辺に堆土置き場を確保することができなかつたため、調査区を2分割し、まず北半の調査を実施し、終了後に北側を埋め戻して残る南半の調査を行った。

調査の結果、調査区の西端では南北溝（SR1001）が、中央やや南側では調査区を横断する東西溝（SD1001）が検出された。調査当時は、鎌倉時代の遺物を多数含んでいたことから、第2次調査の大溝（SD2001）と同時期の溝である可能性も想定され、その関連性が注目された。

浜北市教育委員会による確認調査（期間：平成14年6月20日～7月10日、10月14日～24日）

第2次調査と第3次確認調査により、鎌倉時代の大規模な施設の存在が明らかになったことを受けて、施設の規模等を明らかにするため、本事業の調査対象地の北側において、浜北市教育委員会による確認調査が実施された（浜北市教委 2003『中屋遺跡確認調査報告書』）。

調査では、16ヶ所にトレーンチが設定され、西辺の継ぎとみられる溝に加え、約210m北側に北辺とみられる東西溝の存在が確認されている。設定されたトレーンチでは東辺の溝は確認できなかったものの、この調査により、溝によって囲繞された施設が、南北210mにもおよぶ大規模なものであることが明らかとなつた。

また、この調査では、溝の規模の把握に重点が置かれたこともあって、施設の性格に関連するような明確な遺構は確認されなかつたが、瓦が出土していることから、寺院関連施設の存在する可能性も提起されている。

第4次確認調査（期間：平成15年4月14日～10月31日 調査名：No.130 地点確認調査その3）

それまで用地買収等の事情によって調査に着手できなかつた、約36,000m²の範囲を対象に実施された。

中屋遺跡に関しては、第3次調査区の西側の一部が対象となつた。調査の結果、東側の一郭において遺跡の存在が認められた。第2次確認調査で、この北側と西側には遺跡の存在が認められなかつたことから、本事業における中屋遺跡の対象範囲は、この確認調査によりすべて確定した。

第4次調査（期間：平成15年12月18日～平成16年1月26日 調査名：No.130 地点Ⅵ期）

県道岩水寺停車場線の移設に関連して、移設場所に相当する県道の南側の範囲が対象となつた。しかし、調査に着手したところ、2m以上の深度があることに加え、宅地への進入路の確保が必要であり、



図7 作業風景（第3次調査）



図8 作業風景（第5次調査）

県道から引き込まれている配管も使用中であるなど、制約条件が多く、実際に掘削が可能な範囲はごく一部に留まった。

調査の結果、溝状の辺縁（SR8002）が検出されたものの、調査区が狭いこともあり、その年代や性格については判然としなかった。

第5次調査（期間：平成16年1月26日～平成17年3月22日 調査名：No.130 地点Ⅸ期）

第4次調査の終了後、第5次調査に着手した。第5次調査の対象となった範囲は、第2次調査で発見された大溝（SD2001）の継ぎと、溝が注ぎ込むとみられた河川跡（SR8001）を中心とした、東西約190mの範囲である。

調査は、まず河川跡の周辺について、重機による表土除去を行ったが、それに並行して大溝の北側に数本のトレーナーを設定し、土壌の残存状況の把握を行った。その結果、残存する土壌とともに、確認調査では発見できなかった大溝の東辺の一部が検出された。大溝の東辺は、確認調査においてトレーナーが設定できなかった、市道根堅23号線の直下に位置していた。当初市道部分については、道路の付け替え工事が行われた後に調査を実施する予定であったが、日本道路公団と協議を行い、第5次調査において周辺とともに調査を実施することとなった。これによって、区画の四周すべての位置と規模が判明し、区画の南西端から河川に向かって排水溝が設けられる構造であることが明らかになった。

調査が進行した平成16年12月には、河川跡（SR8001）の護岸施設の解体中に、黒漆塗りの鞍が組み上げられた状態のまま発見され、鞍の下に呪符木筒の存在も確認された。なお、季節柄、凍結によって遺物が毀損する懼れがあったため、出土状況の撮影と基準となる点の測量を行った後、翌日には当研究所保存処理室によって、周囲の土ごと切り取り、固化と解体作業については室内で実施した。



図9 小学生発掘体験



図10 小学生現地見学



図11 記者発表（第5次調査）



図12 現地説明会（第5次調査）

年が明けた1月には、現地にて小和田哲男氏（静岡大学）、中井均氏（米原町教育委員会）、村田修三氏（大阪大学）による調査指導が行われている。出土した鞍は、その良好な遺存状態から貴重な遺物として注目されたが、1月23日に小松大秀氏（九州国立博物館設立準備室）に実見いただいた結果、鞍には螺鈿が施されていたことが判明し、国内初の螺鈿鞍の出土例であることが明らかとなつた。

これらの調査成果を受け、2月3日に報道関係者に現地と出土遺物を公開し、2月5日には現地説明会を実施している。現地説明会には、新聞やテレビで大きく取り上げられたこともあり、県内外から700名以上の参加者がいた。

第6次調査（期間：平成17年4月18日～平成17年6月6日 調査名：No.130 地点XⅡ期）

当事業における現地調査の最終年度となつたが、多くの調査対象範囲には堆土や構造物が存在し、調査に着手できない状況であったため、まずは調査条件の整っていた、第4次確認調査において遺跡が確認された範囲についての調査を実施した。

調査は比較的順調に進行し、ほぼ軸を描えて建ち並ぶ3棟の壇上柱建物や井戸跡が検出された。

第7次調査（期間：平成17年6月1日～平成18年3月22日 調査名：No.130 地点XⅢ期）

北側の側道工事を早期に着手したいとの要請から、6月より大門川付近の調査に着手する予定であったが、川の付け替え工事が遅延していたため、周辺の調査を先行して実施した。そして、川の付け替え工事が完了した7月には、大門川付近の調査にも着手し、9月末には調査を終了している。その後、一

表2 発掘調査の公開

内 容	開催年月日	参 加 者	人 数	費 用
遺跡見学	H13年10月25日	浜北市立赤佐小学校4年生	123名	
体験発掘・遺跡見学	H16年8月10日	小学生	19名 浜松市立福原公民館主催	
遺跡見学	H16年12月20日	浜北市立赤佐小学校6年生	110名	
報道公開	H17年2月3日	報道関係者	— 新聞・テレビで報道	
現地説明会	H17年2月5日	一般	700名	
体験発掘・遺跡見学	H17年6月28日	浜松市立初生小学校6年生	98名	
遺跡見学	H17年8月24日	「みて、みてハイウェイ」参加者	90名 日本道路公園主催	
遺跡見学	H17年10月16日	地元住民	60名 赤佐7区町内会主催	
遺跡見学	H17年10月20日	浜松市立浜北北部中学校1年生	4名	
体験発掘・遺跡見学	H17年10月27日	浜松市立精木小学校6年生	10名	
報道提供	H17年3月14日	報道関係者	— 新聞・テレビで報道	
現地説明会	H17年3月18日	一般	220名	



図13 作業風景（第7次調査）



図14 現地説明会（第7次調査）

部埋め戻しを行った上で作業員標の移設を行い、残る西側の部分と付け替えが完了した県道の部分の調査に着手した。

調査では、第2次調査で発見された東西溝（SD1001）の続きが検出され、第3次調査区から約70m東の地点において、南へ向かって屈曲していることが確認された。この溝については、第3次調査では大溝（SD2001）と同時期である可能性も指摘されていたが、比較的豊富に出土した遺物から、大溝（SD2001）とは時期が異なる中世後期の溝であることが明らかとなった。

また、この調査では複数の竪穴建物が検出され、古代の集落も展開していることが確実となった。それまでも古代の遺物が出土することは認識されていたものの、遺構が判然としなかったこともあり、大半の遺構は中世以降のものであろうとみられていた。特に出土遺物の乏しい掘立柱建物の年代については、再検討を迫られることとなった。

調査がほぼ完了した、平成18年3月に報道提供を行い、新聞等によって調査成果が報道された。また、3月18日には現地説明会を開催し、地元住民を中心に約220名が参加した。また、これ以外にも、表2のように遺跡見学や体験発掘を実施している。

そして、平成18年3月22日には第8次調査が終了し、約24,000m²を対象に平成12年3月から6年以上にわたって行われた、当事業における中屋遺跡の現地調査がすべて完了した。

〈2〉資料整理

前述のように、出土遺物の洗浄・注記や台帳作製等の基礎整理作業については、現地調査終了後に随時行われていたが、中屋遺跡の資料整理が本格的に開始されたのは、平成19年11月からである。

当遺跡に関しては、出土品・記録類共に多量であり、複数年度におよぶ作業となることから、担当者



図15 注記作業



図16 接合作業



図17 復元作業



図18 実測作業

表3 出土品・写真の公開

内 容	期 間	名 称	主 催・会 場 な ど	備 考
写真提供	H18年4月	『木簡研究』28号	木簡学会	既刊本翻
展 示	H19年2~3月	『里帰りした新浜市ゆきの文化財』	浜松市博物館	
展 示	H19年6月~H20年2月	『発掘された日本列島2007』	全国7会場	文化庁主催
報道公開	H20年11月	『蝶図絵について』	当研究所	新聞・テレビで報道
展 示	H20年11月	『中庭遺跡出土蝶図絵特別展示』	当研究所本部	
写真提供	H20年12月	『浜松の遺跡2』	浜松市	
展 示	H21年6~7月	『地下に眠る浜松の至宝』	浜松市博物館	

が異動する可能性も考慮して、基本的に年代又は遺構種別に作業を実施することとなった。なお、整理作業中においても、出土遺物や写真等については、表3のように随時公開した。

平成19年度は、主に大規模な溝（SD1001・2001）と河川跡（SR8001）について、整理作業を実施した。いずれも異なる担当者によって、数回に分割して調査されていることもあり、層位の把握に苦慮したが、層位の統一を計り、遺物等を層位毎に検討することが可能となった。

平成20年度については、主に中世～近世の掘立柱建物や土坑、埋葬遺構等を対象に、出土品の分類・仕分け、接合、復元、実測、版組、トレース等の作業を実施した。作業を進めると、比較的多くの瓦が出土していることが、徐々に明らかとなった。瓦については、現地調査の時からその出土は認識されていたが、全体の数量が把握できなかったこともあります、ごく少量であろうとの想定がなされていた。これにより、居館跡とみられてきた遺跡の性格について、再検討する必要性が生じることとなった。

平成21年度は、中世～近世の溝や包含層出土遺物と、古代の遺構に関して整理作業を行った。9月11日には藤澤良祐氏（愛知学院大学）、10月19日には小松大秀氏（東京国立博物館）、12月2日には上原真人氏（京都大学）による調査指導が行われている。分割・仕分け、接合、復元、実測、トレース等については、比較的順調に作業が実施された。

当遺跡は、遺構そのものの数が多い上に、年代の特定が困難なものも多かったことから、整理作業の最終段階である12月に、遺構の年代や遺物の時期などの確認を行った。その結果、再検討の余地があることが明らかになった。そのため急遽、整理作業計画の変更と調査体制の再編成を行い、修正を行うこととなった。また、その修正に伴い、全ての遺構と遺物を対象に、時期判定や切り合い関係などを再検討し、全体での整合を図った。その後、原稿及び図面の修正を行うとともに、必要な図面を追加し、細部においても矛盾のないことを繰り返し確認した。この作業によって、原稿の執筆・編集にも相当な時間を費やしたが、平成22年度に入り、原稿の完成に漕ぎ着けた。



図19 版組作業



図20 トレース作業

第2章 位置と環境

1. 遺跡の位置

浜松市は、静岡県西部に位置し、東は天竜川を挟んで磐田市と、西は浜名湖西岸の湖西市と接している。平成17年に周辺の2市・8町・1村と合併し、平成19年には政令指定都市となって7つの行政区が置かれている。このため、中屋遺跡の所在地は、調査開始時には浜北市であったが、現在は浜松市浜北区となっている（図21）。

中屋遺跡は、静岡県浜松市浜北区根堅の、天竜浜名湖鉄道岩水寺駅の北側に位置する。南北は岩水寺駅前から国道362号線までの約330m、東西は大門川から荒巻川付近までの約300mが、遺跡の範囲となっている（図22）。

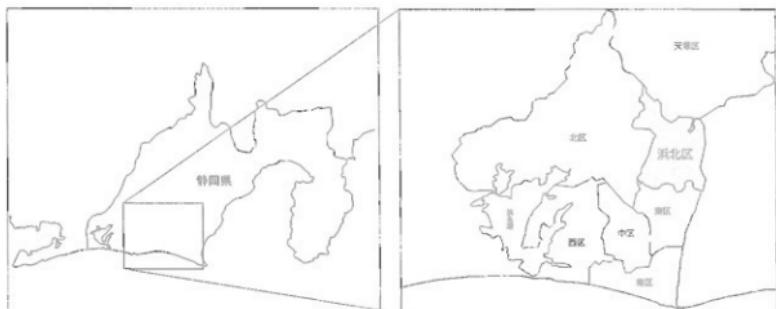


図21 浜北区の位置



図22 中屋遺跡位置図（1：5,000）

2. 地理的環境

村から区へ 中屋遺跡の位置する浜松市浜北区根堅は浜北区北東部にあたり、平成の大合併によって政令都市浜松市ができるまで浜北市根堅と呼ばれた地域である。その浜北市も昭和 31(1956) 年に浜名町、北浜村、中瀬村、赤佐村、施玉村が 5 町村が合併してできた市である。合併当時の北浜村、中瀬村、赤佐村、施玉村は農村であり、浜名町は周辺の農村部を背景とした商工 + 農業の町であった。このことは当時の浜北市が、中核的な都市があって、それ以外の町村が合併し成立した行政区ではなく、同じような規模の村が町制を施していた浜名町と合併した、という実情であった。

その後、企業誘致もすみ、また浜北市が浜松市の衛星都市に位置づけられるような通勤圏となったことから、それに伴って他市域から移り住む人口も飛躍的に増加し、かっての農村の姿は、現在の浜北区の郊外に留めているにすぎない。遺跡のある根堅についても、今では周辺に畑や山林が残る集落景観であるが、浜北市の推移を示すように、急速に住宅区域となっている。

市域東側に流れる天竜川では、古くから人々は舟運を利用していたが、近代にはいると、本格的にいかだや帆船によって、南信濃や北遠江の森林から切り出された木材や久根畠山や峰之沢鉱山から産出した銅石を搬送した。明治末に、浜松と西鹿島まで現在の遠州鉄道が敷設されたことも、この地域の近代化に大きな役割を果たし、現在も通勤・通学の足としてその役割を担っている。

周辺の景観 明治 23・24(1890・1891) 年、大日本帝国陸地測量部の作成した 2 万分の 1 の地形図「施玉村」「二俣町」(以下、「2 万分の 1 地形図」) には、明治前期までの集落景観が描写されている(図 23)。それによると、中屋遺跡周辺の景観は、次のように整理できる。

遺跡の北部には静岡県森林公園や岩水寺にある丘陵が広がる。この丘陵には南北方向にいくつかの開折谷があり、遺跡はこの開折谷の延長部分にある。さらに開折谷からの押し出しによって形成された小規模な扇状地上に位置するため、周辺よりやや高い微高地を形成している(註 1)。つまり中屋遺跡は開折谷からの沢が水源となる水場付近の、やや高燥の場という土地条件である。

遺跡の西部と南部は旧天竜川の河跡にある谷底平野が広がるが、水田地帯となっている。これはさらに南部の天竜川の堆積物から成る「浜北面」と呼ばれる低位段丘によってふさがれている。この低位段丘は、新原や東原と呼ばれる黒ボク地帯であり、「2 万分の 1 地形図」では大半が針葉樹林地帯であり、そのほかは畑地帯となっている。このなかの新原集落は、広い領域に散居集落が点々と分布する景観を呈している。

遺跡の東 1.7km には天竜川が流れているが、西鹿島から広い平野を造り太平洋に注いでいる。「2 万分の 1 地形図」には西鹿島と上島の間に広い河道があり、上島は天竜川の中州であることが明瞭である。この河道は氾濫時には天竜川の乱流によって流路となり、文字通り上島は天竜川に浮かぶ「島」となる。このように削られず残った扇状地の一部は、天竜川の中に微高地として島状に残り、そこに集落が営まれたことが上島以外に、上小島や中野などに認められる。

江戸時代の天竜川 2 万分の 1 よりさらに古い延宝 6(1678) 年前後に制作された「青山御領分絵図」(浜松市 1976) には、天竜川の本流は磐田原台地裾部を現行の二俣東街道に沿って南へ流れている。現在の一雲齊川はその名残りであろう。現在の天竜川の中には「青山御領分絵図」に村の規模を縮小したり、流路の中に消えた細島が描かれている。

柴木村と中瀬村の間には河道があって、中瀬村は文字通り天竜川の広い浅瀬である様相が明瞭に描かれている。この河道は「満水ノ時ハ川」とあり、長島村(現在の永島)と油一色村の間を流れ、本流に

合流していた。同時にこの河道の西側に 200 戸の塊村の柴本村（赤佐から於呂）が南北に続くが、これはこの河川の造った自然堤防上に位置する。この柴本村は江戸時代の本村であって、「遠淡海地志」には本沢村は柴本（元とも書く）村の枝郷であり、御馬ヶ池村は柴本新田である。

赤狹郷と郡 10世紀前半に記された『倭名類聚鈔』には、龜玉郡の郷名に「三宅ミヤケ 碧田アラタ
副多ハク 赤狭アカサ」とあり、4郷から成っていた。中屋遺跡の範囲も『倭名類聚鈔』段階では龜玉郡赤狹郷の範囲とされるが、近世段階の龜玉郡は「堀谷村 大平村 灰木村 宮口村 新原村」ときわめて小規模な範囲を郡としており、近世段階では中屋遺跡の範囲は豊田郡安泰寺村の範囲である。つまり豊田郡に属し、龜玉郡には属していなかった。

さらに赤狹郷とは雲岩寺村 安泰寺村 岩水寺村 尾野村 柴本村の5村からなり、「赤蛇五ヶ村」と呼称されていた。「遠江国風土記伝」によれば、赤蛇とは赤狹が寛文以後誤って記されたものという。この範囲が赤狹郷の範囲と考えられていたこととなろう。

律令制下の郡境は大郡を分割することによって変わることがあるが、郡境を政治的に改変されたと考えるよりも、山・川など目に見える自然的な境界に基づいたものとされる。この赤狹郷の帰属は、天竜川の流路変更によって豊田郡に変わったとみることが自然であろう。



図 23 明治期の地形図（1：40,000）

「明治 23 年二万分の 1 地形図」（大日本帝国陸地測量部）を縮小・加筆

ではいつ頃のことであろうか。今のところこの問題に回答できる資料はない。もともと11世紀になると、律令制下の郡郷制は変化し、郡中の徵稅責任単位が、国衙から郷へ直結するようになり、郷、保、名、村、その他で構成されるようになった。そのため文書にも「遠江國○○郡○○郷」という記載はほとんどなくなり、からうじて神仏に提出する願文や表白文などに正式の「遠江國○○郡○○郷」の記載があるのみである。そのため該当する資料には当たれなかった。ただし遺跡周辺の長上郡と豊田郡には、つぎのような例がある。

遠江州長上郡美濃郷高畠村・・・愛知県養寿寺雲板
遠江國豊田郡高畠郷萩原・・・長野県法全守梵鐘
遠江州豊田郡高畠郷・・・山梨県蓮華守鈔口（註2）

これら中世後期の銘文から美濃郷高畠村が長上郡に属していたこと、高畠が豊田郡に属していたことが判明する。上記2例の郡郷村は、のちの近世段階における郡の帰属と一致することから、中世後期と近世の郡境は、ほぼ同様であったと推定できる。

『倭名類聚鉢』における郷の表記は、養寿寺雲板銘のように、美濃郷の下に高畠村という村名が刻まれている。このように村が分立し中世的再編が認められた。中世的郷制は中世後期には確実に存在するが、それを全国的な傾向からこの地域においても、中世前期までさかのばらせることも許されよう。中世遺跡の属した郡郷は天竜川の乱流の結果、中世のある時期に豊田郡へと変更したと考えられるが、その要因となった天竜川の氾濫は、郡郷の変更以上に生活そのものに大きな打撃を与えたことが想像される。



図24 中屋遺跡の周辺

3. 歷史的環境

ここでは平安中期から戦国期までの文献資料に登場する記述と周辺に分布する遺跡にふれながら、中居遺跡の歴史的環境を概観してみたい。

龜玉郡 中屋遺跡周辺は、「倭名類聚鈔」の龜玉郡赤狭郷に比定できる。赤狭郷は「アカサ」の読みが、後世そのまま郷名として残っているので、その比定地には異論の余地はない。

龜玉郡を構成するそれ以外の郷、「三宅ミヤケ 碧田アツタ 羽多ハタ」をどこに比定するかについて、『遠江国風土記伝』を著した内山真龍は、「三宅ミヤケは今の宮口なり、碧田アツタは今の阿多古十八村なり、羽多ハタは今の半田村なり」とした。読みの類似をその比定地としての根据としたこの内山説は、今も踏襲されている。

しかし、この説については、その郷名の読みと比定地のあざなにいささか乖離があり、「三宅ミヤケ 翡翠アラタ 翡多ハタ」の3郷の所在地は、今のところ明確ではなく、今後の課題とすべきであろうと考えている。



図25 地図の遺跡と寺院 (1:40,000)

「平成19年二万五千分の1地形図」(国土地理院)を縮小・加筆

宮口と浜北古窯跡群 「倭名類聚鈔」の時代、中屋遺跡に隣接する宮口には、浜北古窯跡群が存在する。この古窯跡群は、9世紀末に始まる灰を軸薬とした灰釉陶器を焼造する窯が存在し、当初、宮口吉名から生産が始まると、地点をかえ12世紀末～13世紀初頭の山茶碗生産まで続く。

宮口は鎌倉時代末、宮口郷と呼ばれ、莊園が立券されていた様子ではなく、遠江の国司と守護を掌握していた北条一門の所領であった（奥宮 1980）ことから、国司の権限のおよぶ国衙領の可能性が高い（足立他 1982）。

岩水寺 赤穂にある岩水寺（図26）は、寺伝によれば、行基が薬師堂を建立したことを始まりとする古刹で、宗派も法相宗から天台宗、今の真言宗へと変えていったとされる。岩水寺とはいくつかの子坊や神社も含む一山組織の寺号である。

現在、門前にある山住神社（図27）は神仏分離の以前には、山王大権現であった。この山王大権現とは天台宗および延暦寺の鎮守であり、明治初期まで山王信仰が残っていたことは、ある時期まで岩水寺の一山組織の中に、真言宗とともに天台教義がしばらく残っていたと考えられ、両密体制がとられたと推定される。

赤佐郷 鎌倉時代の赤穴については史料は認められないものの、『遠江國風土記伝』には、この岩水寺についての興味深い伝説が収録されている。その伝説とは執権北条時頼の廻国伝説にちなむもので、岩水寺の僧侶が、権勢をほしいままにしていたため、旅の僧侶に身をやつしていた執権北条時頼が、それをとかめる意味で岩水寺の所領を召し上げたというものである。

時頼の廻国伝説を分析した佐々木肇の見解によれば、この伝説は祈願寺と関係し、真言密教と臨済禪を中心とする「武家的体制仏教」に改宗することであった（佐々木 1997）。時頼の廻国伝説の分布は、北条氏の得宗領と関係するという豊田武の見解（豊田 1976）から、赤穂郷は得宗領であった可能性を指摘する意見がある。しかしながら当該期の遠江は、国司と守護が北条一門で占められ、その後の役官領にも赤佐郷は認められない。佐々木の見解を受け、守護であり壇越でもあった北条氏が岩水寺を「武家の体制仏教」に改宗したため、時頼の廻国伝説が生まれたと考えられる。

また、江戸時代の地誌に赤穂郷は赤狹庄と記されているところから、莊園として赤狭の地が成立していたという見解がある。しかしながら中世中・後期の文書には次のようにあり、「赤佐」か「赤佐郷」とある。



図26 岩水寺



図27 山住神社

播磨三 (1340) 年「瑞穂山年錄残編裏書」の鉄鑄の「大工赤佐郷孫三郎」

貞治三 (1364) 年「靈山寺梵鐘銘」の「大工赤佐住道阿」(静岡県 1992)

永祿三 (1560) 年「大宝寺文書」「赤佐郷大宝寺領」

永祿十一 (1568) 年「瀬戸文書」中「赤佐次郎左衛門名」(静岡県 1994)

のことから赤狭は莊園ではなく、郷の記載から国衙領の可能性が高い。

赤佐氏と奥山氏 建治元(1275)年、京都六条八幡宮再建の割り当てを記した「六条八幡宮造営注文」には、伊豆・駿河・遠江の御家人の一部が判明する。そのなかに「赤佐左衛門跡 五貫」とあり、御家人赤佐左衛門の跡職（家督や達領）から五貫文の負担すること（静岡県 1996）になっていた。この赤佐氏とは、のちの彦根藩井伊氏の一門である奥山のこととされる。

奥山氏については、初代が赤佐三郎俊直と称し承元三（1209）年に亡くなっていること、二代が赤佐左衛尉共俊で寛元四（1246）年になくなっていること、三代は新左衛門公明で弘安二（1279）年になくなっていること、四代左衛門太郎朝清は井伊奥山氏を称し、正和元（1312）年になくなっていることが「奥山家古代記」（引佐町古文書研究生 1973）に記されている。輩行名では赤佐氏初代が赤佐三郎を称し、井伊氏が太郎を称していることから、井伊氏三男を創立した家門といえる。

「六条八幡宮造営注文」中の赤佐氏の仮名が「赤佐左衛門」であり、赤佐二代の仮名とほぼ一致すること、三代とされる人物が「新左衛門」と称していることから、家名を踏襲したとみることができる。よって奥山家系図や「奥山家古代記」ように、南北朝期に苗字の地を離れ、赤佐から奥山（北区奥山）へ移住し、赤佐氏から奥山氏へと変貌を遂げたと考えられる。おそらく中屋遺跡や赤佐郷の消長にとって大きい事件であったと思われる。想像の域を出ないが、本宗家井伊氏が南朝方となって足利氏に敵対して衰退し、14世紀後半には奥山氏がその代わりに足利方井伊氏の代表となって、井伊保に入ったものと推定したい。天文十八（1549）年、宮口興覚寺に寺領を寄進した井伊朝光は（静岡県 1994）、本名の「朝」の通字から奥山氏の一族と考えるならば、この段階にも赤佐氏の所領の一部が宮口に残っていたのであろうか。

鎔物師と「赤佐御寺」 赤佐には梵鐘・鈔口などを铸造する鎔物師がいたことが、「大工赤佐住道阿」などの金石文より判明する。この鎔物師の動向については別に述べているので（足立 2010）割愛するが、14世紀中葉から16世紀前葉までその存在が確認できる。

明徳四（1393）年の深井瑞勝陣状（東寺百合文書巻函）本家役未進の名に、「赤佐御寺御預」とある（静岡県 1992）。これは赤佐の某寺が村櫛荘の名田についての年貢を納める役割を担っていたことである。

同様に康正元（1455）年の蒲御厨の年貢未進の文書（静岡県 1992）にある「赤佐方」とは、赤佐の寺社や人物が蒲御厨に入作していたことで、寺社や人物がこの年貢を未進していたことである。赤佐が村櫛荘の一部や蒲御厨の一部に入っていたことではない。蒲御厨に開連し、永祿三（1560）年蒲御厨代官松井氏今川氏真発給文書にある松井氏被官に、別所源太郎なる人物がいる（静岡県 1994）。これについて、菊池武雄は赤佐の住人としている（菊池 1953）が、後述のように雲岩寺村がもともと別所村と称していたことから、このように推定されたと考えられる。妥当性も含め今後の課題としたい。

中世墳墓 岩水寺の東側丘陵に、勝栗山と呼ばれる丘陵がある。この斜面には、平安末から鎌倉期の藏骨器が多数発見され（池谷 1968）、また戦国時代を中心とする石塔も出土した。勝栗山丘陵の斜面には、古代末から中世の大規模な墓域が存在したこと推定される。古代末から中世前期における火葬された人物は、きわめて限られた階層とされることから、その火葬骨を取める藏骨器の存在は、勝栗山墳墓がこ

の地域の上級階層（御家人や僧侶）の墳墓であったことを物語っている。それとともに、岩水寺の開寺も想像されるが、今のところ推定の域を出ない。

中世の石塔が岩水寺境内や安泰寺、竜泉寺、大宝寺、興寛寺など中屋遺跡の北側丘陵にそった寺院などから発見されている。その中でもっとも古いとされる、14世紀代の大屋敷墳墓の石塔（図28）はもともとの造立場所に完全な形で残されていると考えられる。それ以外の石塔は部材が多く、周辺にあつた石塔が各寺院に寄せ集められ、供養されたものもある。それにしても、各村々に供養塔が建てられていたこととなる。

安泰寺と雲岩寺 近世、赤狭郷は雲岩寺村、安泰寺村、岩水寺村、尾野村、柴本村の5村からなり、「赤蛇五ヶ村」と呼称されていた。雲岩寺村と安泰寺村、岩水寺村は、村名に寺名を付している。

中屋遺跡の範囲は、江戸時代には村高57石、12戸からなる安泰寺村のうちであった。この村はもともと岩水寺村入会であった。

村名となった臨濟宗の安泰寺（図30）は、石高54石、付属する安泰寺地蔵堂の石高3石と、村高は2ヶ寺に納められた。なお安泰寺地蔵堂は「岩水寺境内ニアリ、真言」（『遠江国風土記伝』）と、岩水寺と深く関係していた。安泰寺の建立が応永年中と伝わっているが、この地蔵堂の存在からその前身に岩水寺の子坊があり、安泰寺はそれを改宗した可能性が高い。

中屋遺跡の西北にある村高109石、18戸の雲岩寺村は、安泰寺村と同様に岩水寺村入会であった。村名となった雲岩寺とは、「旧名は別所村、後に寺号を負う」（『遠江国風土記伝』）とあるように、曹洞宗竜泉寺（図31）の前身の寺号である。竜泉寺への改名は、慶長十九（1614）年と伝えられている。



図28 大屋敷墳墓



図29 安泰寺石塔



図30 安泰寺



図31 竜泉寺

雲岩寺は、大隅国生まれの洞巖玄鑑が明徳四（1393）年に開いたとされる（『遠江国風土記伝』）。この玄鑑は豊後泉福寺で修行し、遠江に来ている。応永元（1394）年には短期間で、豊後泉福寺に戻り、応永十六（1409）年に亡くなっている人物である（禅学大辞典編纂所 1978）。したがって雲岩寺は、育成した弟子達によって維持されたと考えられる。江戸時代には末寺20字というから、玄鑑は短期間の滞在で大きな足跡を残したことになろう。

ところで竜泉寺には2口の雲板があった（久保 1967）。一つは天正年中の銘の雲板であり、「当寺二世千巣舜鶴」の頃の雲板とされる、それ以上のことは不明である。2口目の雲板は慶長廿一年六月銘があつたとされるが、慶長は二十年七月に改元されているので、おそらく慶長二十（1615）年六月には、どちらかの錯誤があろう。

「当寺二世千巣舜鶴」とあるが、明徳四（1393）年の開山から200年以上も年を経て二世はあり得ず、大源派の千巣舜鶴によって中興され二世となつたと考えられる。ただし洞巖玄鑑を開山一世とし、本入を二世とした可能性が高い。すると雲岩寺から竜泉寺への寺号の変更は、再興によるものと推定される。慶長二十（1615）年六月の銘をもつ雲板も、このために用意されたであろう。

それにしても遠江の大源派の進出は、庶民層までの取り込む葬式の莊厳化により大いなるものがある。隣接する大宝寺も曹洞宗であり、竜泉寺の末寺も周辺にあった。中世後期から戦国期に、中屋遺跡に隣接する岩水寺から北西側の丘陵裾部は、浜北区においても寺院と石塔が集中する地域である点は、葬式と供養の莊嚴化の影響であろう。このような点は、中屋遺跡の性格を考える上で考慮すべき点であろう。

註

1. 「浜北市史上巻」1989の「浜北市地形分類」によれば、中屋遺跡周辺は沖積堆・崖邊とされる。「奥玉村 二万分の1」では、遺跡周辺は、岩水寺丘陵から南北方向に開拓谷末端と小規模な基壇地が読み取れる。
2. 法全寺梵鐘は大和鉄物師の作である。蓮華寺銘口は赤佐の鉄物師藤原秋長の作。養寿寺雲板は藤原秋長が仲介し始めた。別に秋長は銘口を鋳造している。なおこの銘口と雲板については（足立 2010）で詳細にふれた。

引用・参考文献

- 菊池武雄 1953「戦国時代の權力構造」『歴史学研究』166。
- 久保常晴 1967「仏教考古学研究」
- 池谷和三 1968「静岡県遠江地方に於ける中世墓骨器の研究」
- 引佐町古文書研究生 1973「引佐町史料 第四集」
- 浜松市 1976「浜松市史 二」
- 龜田氏 1976「英雄と伝説」
- 桙学大辞典編纂所 1978『桙学大辞典』
- 奥富敬之 1980「鎌倉北条氏の墓誌的研究」
- 足立順司他 1982「静岡県沼津市東笠子（HK）第27地点発掘調査報告書」
- 静岡県 1992「静岡県史 資料編中世II」
- 静岡県 1994「静岡県史 資料編中世III」
- 静岡県 1996「静岡県史 資料編中世IV」
- 佐々木夢 1997「駿州時額と蘆田伝説」
- 足立順尚 2010「鉄物師の本貫」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要 第16号』

第3章 中世～近世

1. 概要

(1) 中世前期（図32）

大溝・土壘 調査区中央北側では、大溝（SD2001）と土壘（SA2001）が検出されている。大溝は東西端で北に向かってコの字形に屈曲しており、施設の四周を囲繞する大規模な区画溝とみられる。幅は平均約3.5m、深さは平均約2mで、南辺は長さ160mの規模となっている。南東隅からは、東に向かって排水溝が設けられており、26m東に位置する河川（SR8001）に接続している。

土壘は、削平により大部分が失われていたが、南東部では比較的良好に遺存していた。土壘は、溝の上端から幅約5m、高さが築造時の地表面から約30cmの規模で検出された。西面土壘は、平面的には検出できなかったが、調査区の北壁において、その存在が確認された。掘り込み地形や版築は確認できず、地表面に基盤層の土を盛り上げることにより築かれている。

いずれも、出土遺物等から、12世紀後半～末頃の時期に築かれたものと推測される。

河川跡 調査区の東側では、南に向かって流れる河川跡（SR8001）が確認されている。河川としては、古代からその流れが認められるが、中世前期にはその两岸に護岸施設が築造される。護岸施設は、基底部に打ち込んだ木杭を芯材とし、粘土をブロック状に混ぜた土を積み上げて築いている。一部横に寝かせて置かれた枝材なども確認されており、基底部には構造材も敷設されていたものとみられる。

また、護岸施設では、螺鈿鞍と呪符木簡、ヤダケの束が埋納された状態で発見されている。螺鈿鞍は、組紐は失われていたが、組み上げられた状態で出土している。螺鈿自体は消失していたが、大小2種類の瓜文が25ヶ所に施されている。中世の螺鈿鞍の出土としては、国内で初めての事例となる。呪符木簡は重ねられた状態で、合計5枚出土している。符籙+呪句（「急々如律令」）という文字構成を基本とし、4枚には「春」「夏」「秋」「冬」の文字が加えられている。

土層や出土遺物等から、護岸施設が築かれた時期は、13世紀の中頃と推測される。

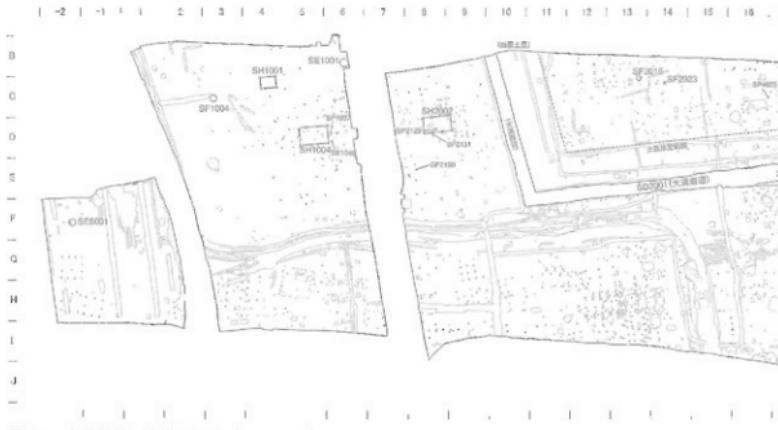


図32 中世前期の遺構配置図（1：1200）

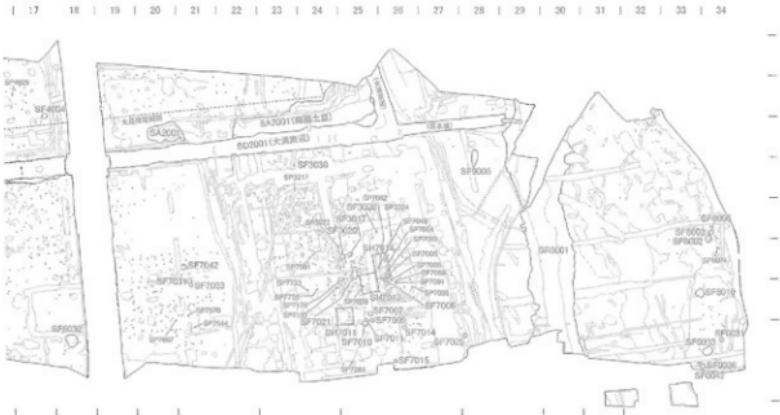
掘立柱建物 掘立柱建物は、北西部と南東部で確認されている。北西部では、3棟（SH1001・1004・2002）発見されており、主軸方位はN-5°-7°-Wとほぼ揃う。南東部では、3棟（SH7011・7013・7014）認められている。すべての建物が同時期ではなく、SH7014はSH7013の廃絶後に建てられている。建物の規模は、SH1004と2001が建床面積25~30m²とやや大きいが、他はほとんどが20m²以下の小型の建物となっている。

また、柱穴とみられる小穴にも、中世前期の遺物が出土するものがいくつか検出されている。小穴は、建物が確認される北西部や南東部の他に、南側中央部にも認められる。建物としては認識できないが、この周囲にも中世前期の掘立柱建物が存在した可能性がある。

井戸 井戸は、調査区東側で2基（SE1001・5001）検出されている。いずれも、井戸枠等の施設は発見されていない。SE1001は直径2.1mの円形で、深さは現存で2.1mとなっている。周囲には掘立柱建物が検出されており、これらの住人によって使用されたものと推測される。SE5001は、やや離れた位置にあり、周囲から同時期の遺構は検出されていない。また、深さも検出面からは1m程度となっている。この周辺については、削平によって遺構が失われている可能性も考えられる。

土坑 土坑は、合計30基検出されており、その多くは掘立柱建物や小穴の分布範囲に認められる。調査区の東端にも集中しているが、これらについては、河川（SR8001）の東側に位置していることから、東に隣接する大門西遺跡に関連する遺構とみた方がよいであろう。また、大溝（SD2001）により区画された内部でも、3基（SF2016・2023・4004）確認されている。

遺物 中世前期の遺物としては、山茶碗を中心に比較的豊富に出土している。この時期の遺物は、後世の遺構にも多く含まれている。山茶碗以外の遺物としては、涅美・常滑産の陶器や伊勢型鍋、土師質土器皿（かわらけ）などがある。また、瓦も比較的広い範囲から出土しており、遺跡の性格を反映する遺物として注目される。



(2) 中世後期（図33）

大溝・土壙 大溝（SD2001）は、中世前期を通じて底面から50cm程の堆積しかみられないが、後期になると壁面が崩落するなど、急速に埋没していく。また、この時期の埋土からは、被熱した瓦が出土している。内部の瓦葺き建物が焼失し、施設が衰退していった様子が伺える。大溝は、16世紀までには、ほぼ埋没している。

土壙（SA2001）の状態については不明な点が多いが、SD2003やSD3014、SD3013などの溝は、土壙の内側に沿って巡らされていたとみてよい。少なくとも中世後期の段階までは、大部分が残存しているものと推測される。

河川跡 調査区東側の河川（SR8001）では、中世前期に築かれた護岸施設が、この段階にその大部分が削られてしまっている。また、河川の東側には、河岸が決壊して河川が氾濫した痕跡（SR8002・8003）も確認される。そのような状態ではあるが、護岸施設が修繕された様子は認められない。

調査区の西端では、現在の「荒巻川」とほぼ同じ位置に河川跡（SR1001）が検出されている。調査区の西端に河岸がわずかに検出されたのみであるが、河川には溝SD1001が取り付くものとみられる。形成された時期については不明瞭であるが、出土遺物やSD1001の年代から、少なくとも15世紀にはこの位置に流れていたものと推測される。現在整理作業中であるが、西側の寺海土遺跡でも、同じ谷を起源とするとみられる中世前期の河川跡が検出されており、河川が遷った時期については、今後あわせて検討する必要があろう。

掘立柱建物 中世後期になると、北西部と南東部に加えて、南側や大溝の区画内にも掘立柱建物が認められるようになり、確認できる数も増える。検出された掘立柱建物は、合計27棟である。SH7008のように建床面積が50m²を超えるものもみられるが、ほとんどの30m²前後の規模の建物となっている。位置が重複する建物が複数あり、ほぼ同じ位置に複数の柱穴がみられるものなど、建て替えが確認できる建物も認められることから、集落が一定期間継続して営まれていた様子がうかがえる。



溝 大溝（SD2001）の南西側に、新たに大規模な溝（SD1001）が開削される。15世紀に水路として開削された溝と推測されるが、16世紀後半には大半が埋没して窪みに近い状態となっており、実際に水路として機能したのは比較的短期間であったとみられる。

溝としては、この他に、先述のようにSD2003とSD3013・3014が、土壙の内側に巡らされる。

井戸 この時期の井戸は、2基（SE4001・SE6001）検出されている。SE4001は、大溝（SD2001）の埋没後、16世紀頃に掘られている。この頃にも、土壙はある程度残存しているとみられることから、井戸を利用する主体は、SH3001などの南側の住人であると推測される。SE6001については、周囲に建物が集中していることから、これらの住人が利用する井戸とみてよいであろう。

土坑 土坑は、ほぼ全域で確認できるが、やはり建物の周囲に多く認められる。比較的小規模なものが多いが、SF1025やSF6035のように、大規模なものもいくつか確認されている。

埋葬遺構 この時期になると、埋葬遺構が築かれるようになる。埋葬遺構は、北西部に2基（SX1006・1007）、南西部に1基（SX1008）、土壙で開まれた区画の南西隅に2基（SX2008・2011）検出されている。いずれも木棺墓・桶棺墓または直葬墓であり、火葬墓はみられない。溝などに近い、いわば区画の隅に埋葬されている。副葬品は、六道鏡のみのもの（SX1006・2008・2011）と、それに土師質土器皿が加わるもの（SX1007・1008）とがみられる。

遺物 山茶碗が生産されなくなることもあり、一部貿易陶磁や瀬戸美濃製品が出土しているが、一旦は土器の出土量が大幅に減少する。瀬戸美濃製品に関しては、古瀬戸前・中期には、ほぼ壺・瓶類や神仏具に限られている。15世紀以降については、内耳鍋や瀬戸美濃製品、初山・志戸呂といった在地窯の製品など、多くの土器・陶器が確認されている。また、河川跡（SR8001）では、一部曲物などの木製品も出土している。



(3) 近世(図34)

溝 この時期には、区画溝とみられる、幅1m以内の細い溝が数多く掘られている。土壌の内側では、前代の溝の位置を少しずつずらしながら、SD2004・3013・3009・3006などの溝が掘られている。いずれも、時代を追うごとに土壌の方へ位置を移しており、徐々に土壌が高さを失っていった様子が見て取れる。南西部では、近世にはほぼ埋没していたSD1001に沿って、溝(SD1011、10110、1008)が掘られている。一部分を再利用しながら、少しずつ位置をずらしており、継続して溝が使用されていたことが分かる。これらの中 SD2004・3006・1008は、いずれも18世紀に掘られており、最終的には19世紀まで機能している。

他の溝は、いずれも18世紀に掘られている。大溝(SD2001)は、この時期すでに埋没しているが、ほぼ沿うようにSD2014・2011・2006が設けられ、同様にSD1001には上面から新たにSD1001bが掘られている。これら、前代の遺構に重複する区画溝の存在は、埋没してもなお地境が踏襲されていたことを物語る。また、これらに接続する、SD4001やSD6002など、新たな区画溝も同時に設定されている。

井戸 東側で1基(SE3001)検出されている。しかし、この井戸は、18世紀までには廃絶してしまっている。多くの区画溝が掘られる18世紀以降のものは検出されていない。

建物跡 近世の明確な建物跡は、検出されていない。しかし、比較的多くの遺物が出土していることから、建物が一切存在しなかったとは考え難い。井戸が1基しかみられないことから、数としては多くはないであろうが、基本的には建物構造が、遺構として残存しにくい礫石建物へ変化しているものとみた方がよいであろう。

土坑 合計6基(SF2011・3004・3005・7026・7036・7039)検出されている。出土遺物が少なく、年代の特定できないものも多いが、明確なものはいずれも18～19世紀の遺構である。



図34 近世の遺構配図(1:1200)

埋葬遺構 中世後期から続いて埋葬遺構が築かれており、合計 15 基検出されている。埋葬方法は、中世後期にみられた木棺墓・桶棺墓または直葬墓に加えて、茶毬墓もみられる。副葬品としては、土師質土器皿や六道鉄のほか、キセルや火打ち金も副葬されるようになる。

埋葬場所は、中世後期にみられた北西部（SX1005）や土壘の南西隅（SX2005・2007・2009）に加えて、SD2006 の南東隅（SX2006・2004）や SD3009 の南西隅（SX3001・3002・3006～3009）、その西側（SX3003・3004）や南側（SX3005）にも広がっている。なお、埋葬遺構が築かれた時期は、18世紀前半までであり、それ以降のものは確認されていない。

河川跡 東側を流れる SR8001 は、河床が高くはなっているが、17世紀前半までは川の流れが確認できる。しかし、17世紀中頃には周囲に堤が築かれて、周辺一帯が溜池となる。この溜池は、「干枕池」と呼ばれ、昭和 14 年まで残っていたとされる。遺構としての調査は行わなかったが、調査区の東端には堤も残存していた。

SR8001 の西側には、SR7002 と SR9002 が検出されている。いずれも、當時水流のある河川ではなく、大溝（SD2001）の埋没後に雨水によって形成された自然流路とみられる。このうち、SR7002 は、17世紀中頃に埋め立てられており、溜池を築く際に造成されている可能性が高い。SR9002 については、溜池に注ぎ込む形になっていたものとみられる。

調査区の西側を流れる SR1001 については、近世の段階には遺構としてはほとんど認識できない。ただし、西側には現在でも「荒巻川」が流れおり、おそらくは今とほぼ同じ位置を流れていたものと推測される。

遺物 溝などから、瀬戸美濃製品や京・信楽製品、肥前産の磁器などが出土している。時期としては、18世紀後半から19世紀にかけてのものが大半となっている。また、SR8001 からは、笠塔婆や漆椀、曲物、指物などの木製品も出土している。



2. 大溝・土塁

SD2001・SA2001（図35～77、図版4～8・17～20・55～60・63・77～80）

調査区の北側で、東西端で北に向かってコの字形に屈曲する、東西160mにも及ぶ大規模な溝（SD2001）が検出されており、その内側には土塁（SA2001）の存在も確認されている。

この溝の延長部分は、平成14年度に実施された浜北市教育委員会による範囲確認調査で検出されており、南北210mの規模のやや台形の区画の存在が推定（浜北市教委2003）されている。また、溝や土塁の推定地には、現地形においても一部土地の起伏が確認できる。

今回調査対象となった範囲は、主にこの区画の南辺部分に相当する。

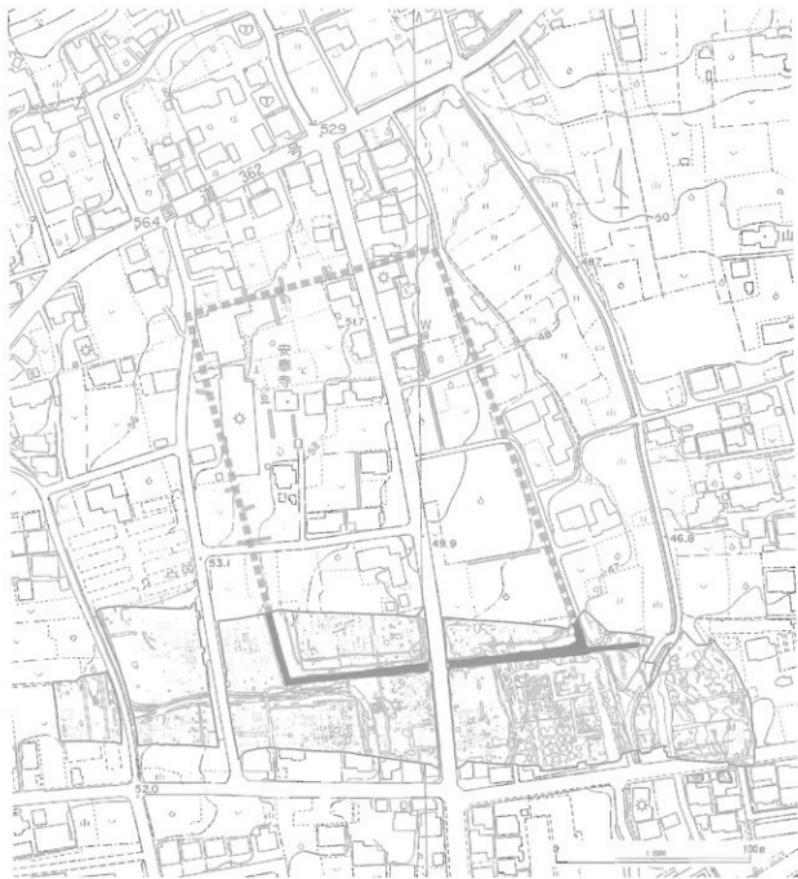


図35 大溝位置図

SD2001 の西辺は、南西隅から北へ 38 m の長さで検出されている。底面は南に向かって傾斜しており、北側に比べて南端では約 50 cm 低い。規模は幅約 3.2 m・深さ約 1.4 m で、主軸は真北より約 15° 西に傾く。南端では東に向かって明確に屈曲しており、直線的な区画を意識していたことがみて取れる。底面は平

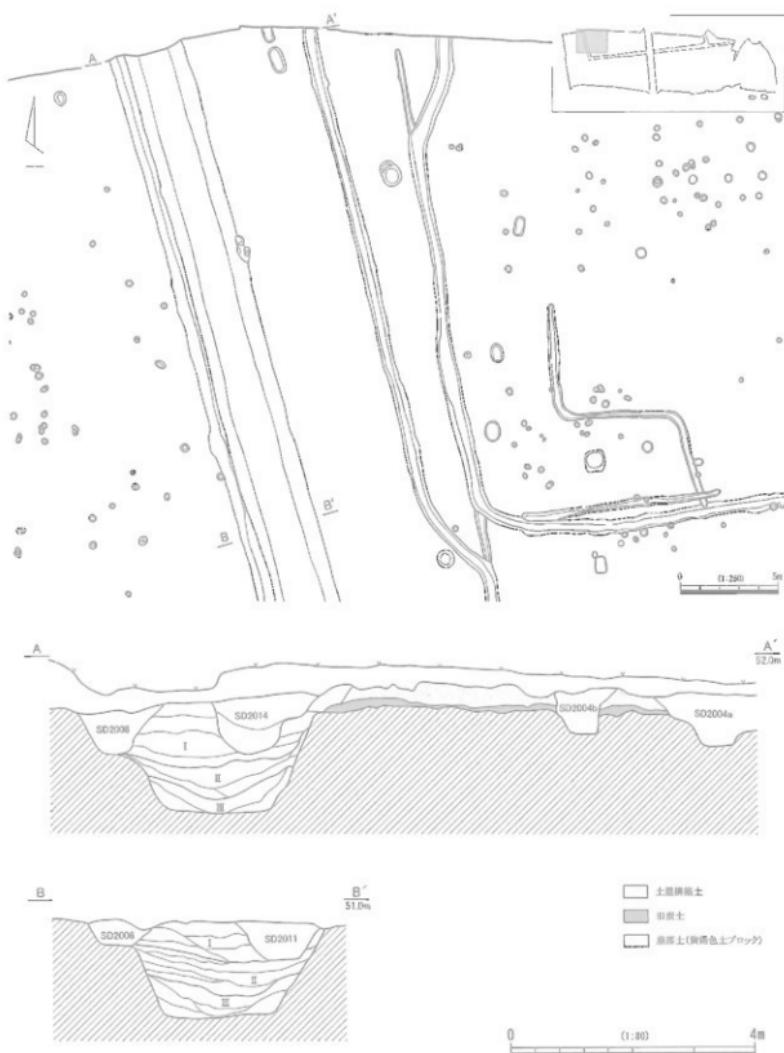


図 36 大溝・土壘実測図 (1)

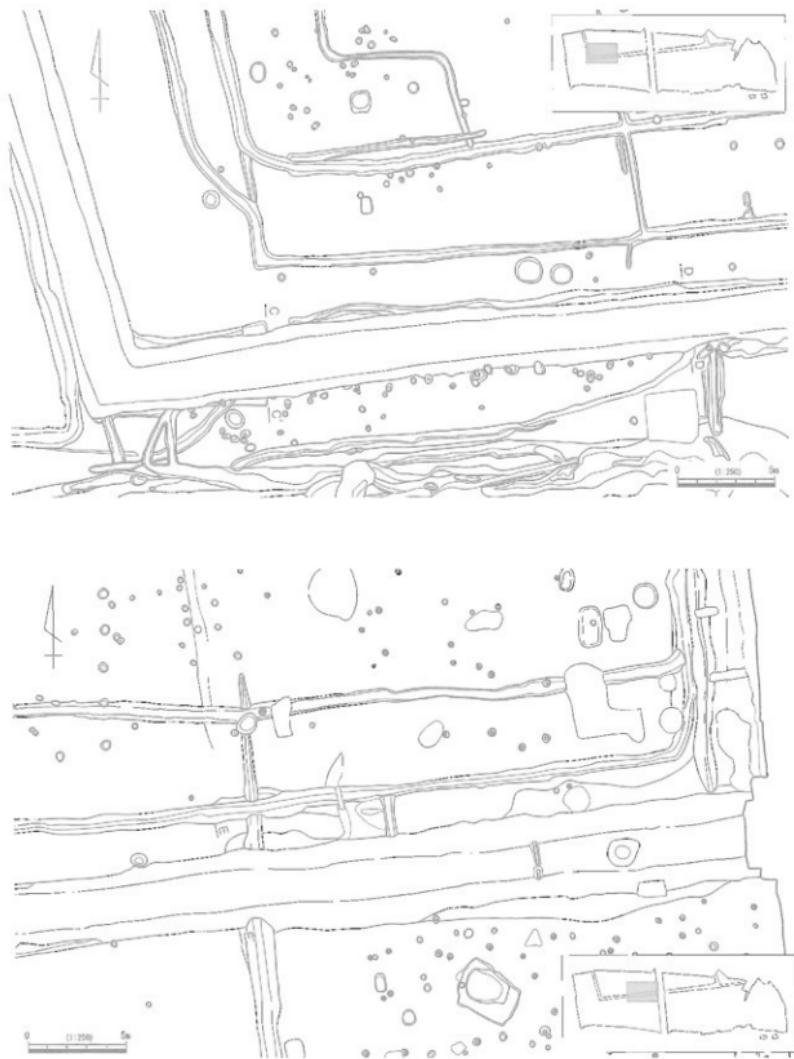


図37 大溝・土壙実測図（2）

垣で、側面は斜め上方へ直線的に立ち上がる。

西面土壙については、平面的に検出することができなかつたが、調査区の北壁においてその存在が確認されている（図36・A-A'）。確認された土壙は、溝の上端から5.7mの幅で残存し、東端はSD2004によつ

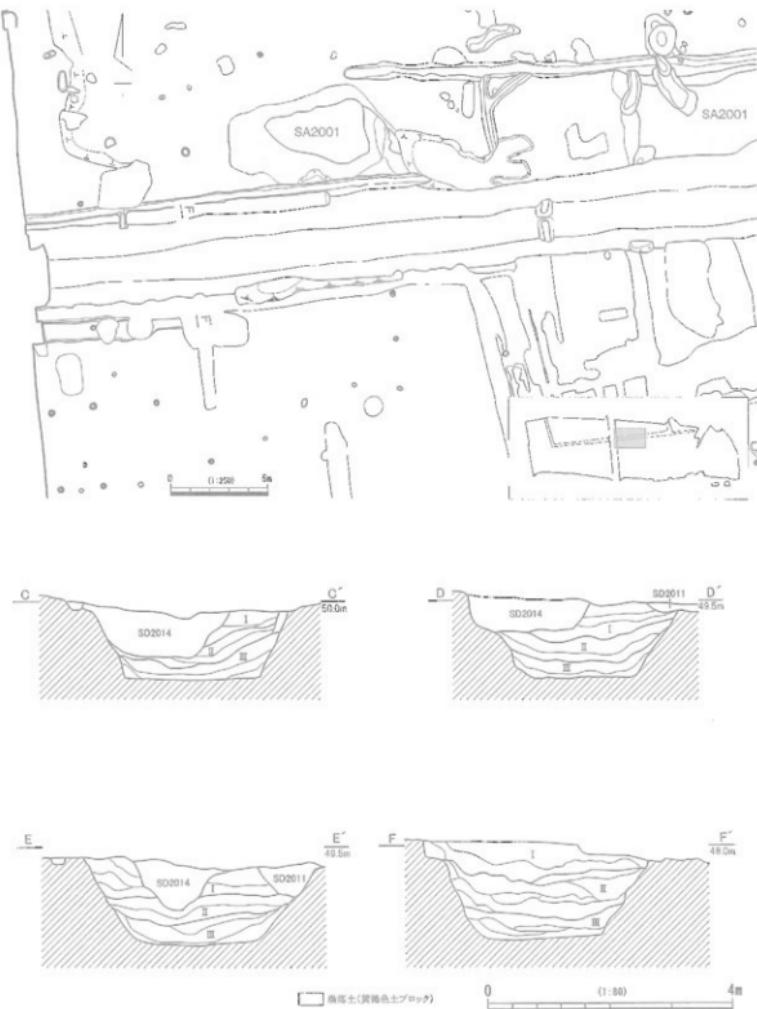


図 38 大溝・土壠実測図（3）

て失われている。高さは約30cm残存し、暗褐色土の旧地表面に基盤層の黄褐色土を積み上げて構築されている。塗土は数層に分けられるものの、さほど強固には叩き締められておらず、溝の開削による堆土を突き固めた程度のやや簡単な構造となっている。

南辺大溝は、中央の現道部分を除き、ほぼ全域が調査されている。溝の長さは総延長にして約160m

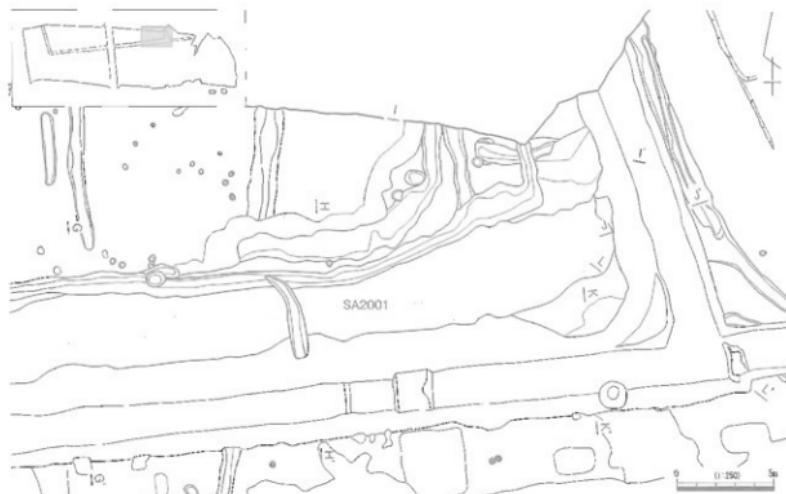


図39 大溝・土堤実測図(4)

にも及び、蛇行せずほぼ一直線に掘られている。残存状況は場所によって異なるものの、幅は平均3.5m前後である。底面は東に向かって傾斜しており、東端は西端より約3.4m低い。東西の軸は正方位に対し、東側で約6°北へ傾く。西辺大溝との角度は99°であり、僅かに鈍角となっている。底面は基本的に平坦であるが、中央付近の2ヶ所では、土堤状の高まりが検出されている(図37・38)。この高まりは、幅45cm・高さ15cmの規模で残存しており、中央部は水口状に空いている。これらの施設は、基盤層を削り出してつくられていることから、溝の開削当時に意図して設けられているとみて間違いない。急激な水流による、底面や壁面の開析を防ぐ機能を有したものと推測される。

南面上墨は、西側については面的に捉えられておらず不明であるが、東側では広範囲で検出されている(図38～40)。残存状況の良好な東端の部分で、溝の上端から幅約5m、高さが旧地表面から約30cm残存する。北側が削平によって失われているため、当初の幅や内側の溝の有無については明らかでない。構築土は、基本的に西面上墨と同様で、版築や掘り込み地形は確認できない。上面からは、溝SD3009・3013・3014や埋葬遺構など、後世の遺構が掘り込まれている。

東辺大溝は、南東隅から北へ18m検出されている(図39)。底面は平らで南に向かって傾斜し、両側は北側に比べて約50cm低い。幅は、側面の崩落によりやや広がっているが、約3.7mである。深さは約2m残存している。主軸は、真北より19°西と、西辺大溝よりも大きく西に傾いている。南辺大溝との角度は77°であり、鋭角となる。また、南東隅に関しては、溝の内側が大きく崩落しているためやや丸くなっているが、崩落を免れた底部付近の形状から、西辺大溝と同様に明瞭に屈曲していたとみて間違いない。

東面上墨は、上面から多くの遺構が掘り込まれており、残存状況はよくない(図39・40)。調査区北端で溝の上端から約8mの幅で検出されているが、構築土については部分的に確認できるのみであり、旧地表面から10cm程度の高さしか残存しない。西側の部分については、削平により失われている。

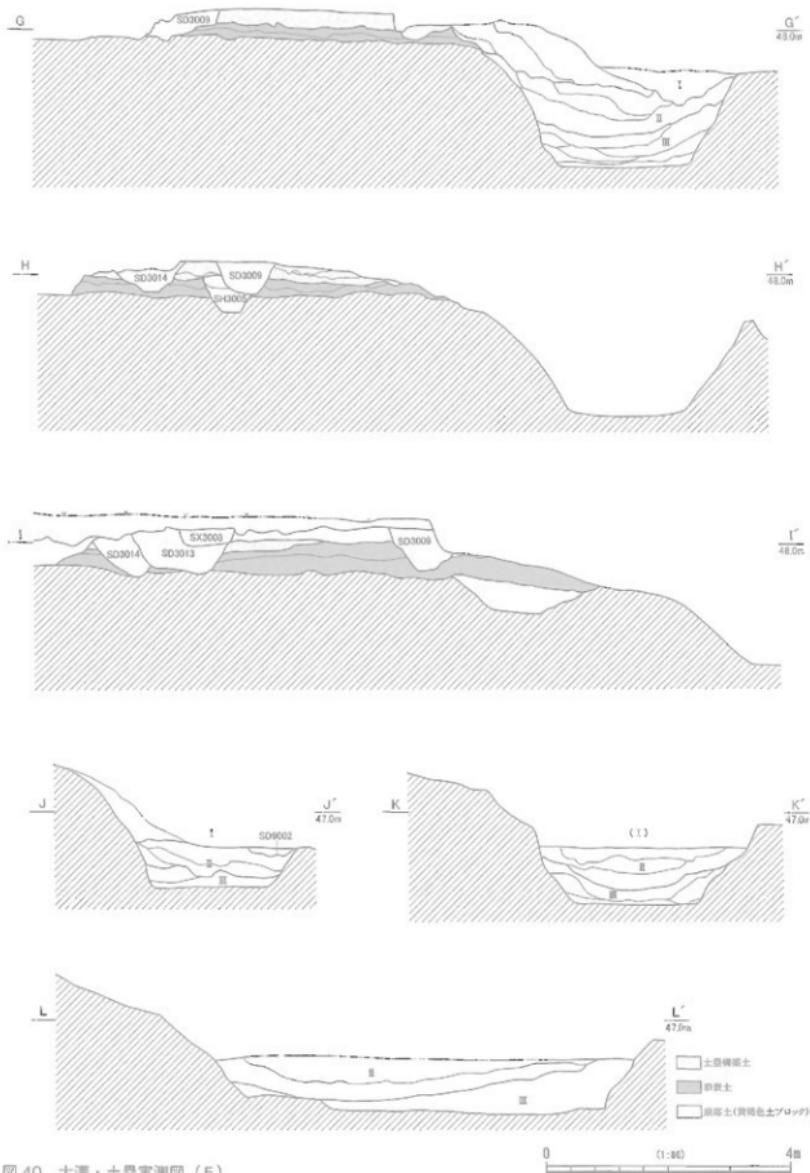


図 40 大溝・土壠実測図 (5)

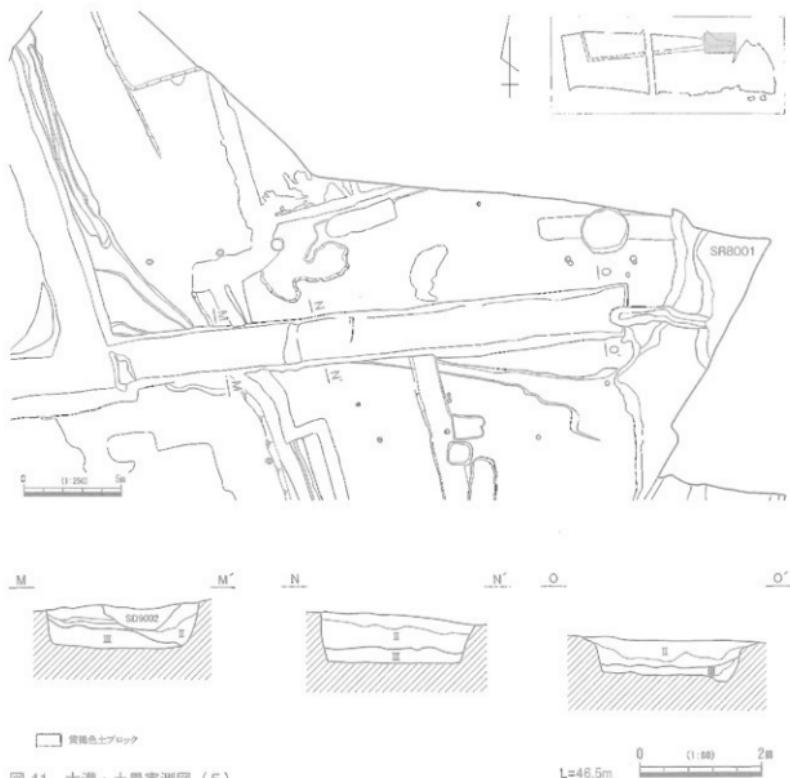


図 41 大溝・土塁実測図（5）

また、区画の南東隅には、雨水を河道 SR8001 に排出するための排水溝が取り付く（図 41）。排水溝は、南側東西溝とほとんど角度を違えず、東へ向かって一直線に延びる。長さは東西 26 m で、上面の幅は 2.5 m である。全体的に削平されている部分が多いが、平均 70 cm 程度の深さが残存する。中央には土堤状の高まりが設けられている。同様の施設は西端でも確認でき、水口は北側に設けられている。この場所は水が最も集中する部分であり、これらが急激な水流による開析を防ぐための施設であることを如実に示している。

排水溝の先端は、幅 25 cm の細い溝となり、河道へと注ぎ込んでいる。先端部は他の溝と大きく異なり、直線的な形態ではなく、底面も水流によって削られ大きく波打っている。後述するように、河道に護岸施設が建設されていることからも、敢えて排水口の幅を狭めているのは、河川への急激な排水を防ぐ目的があったものと推測される。

SD2001 の埋土は、基本的に外部から流入した暗褐色土と壁面などの崩落土によって構成されているが、大きく I ～ III 層に分けることができる。

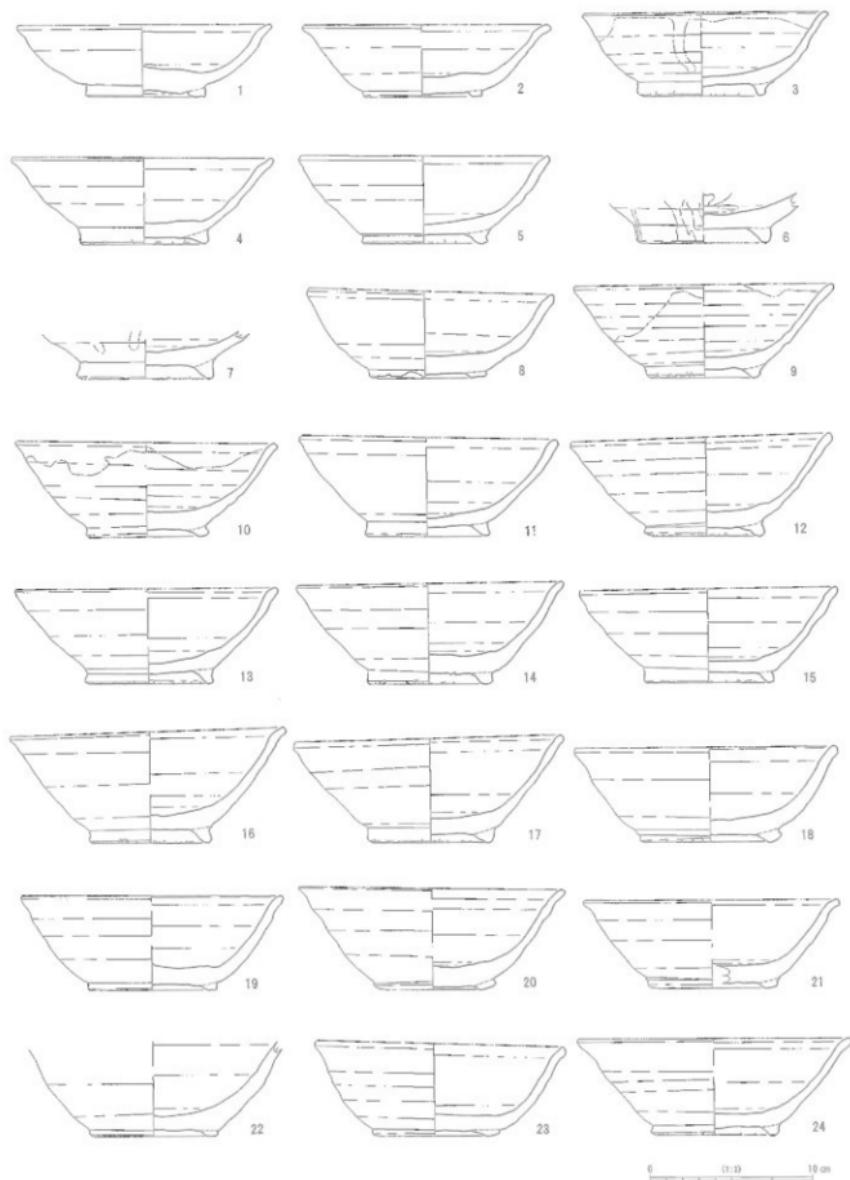


図 42 大溝Ⅲ層出土遺物（1）

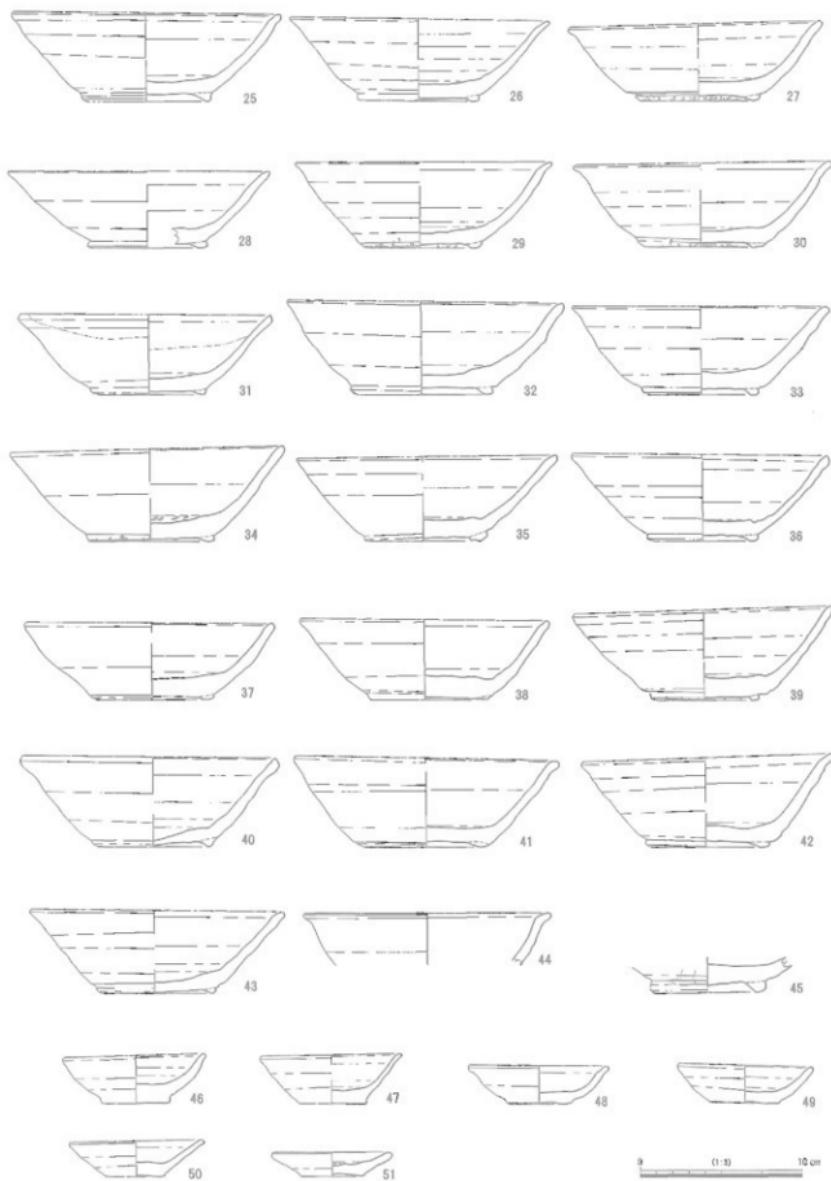


図43 大溝Ⅲ層出土遺物（2）

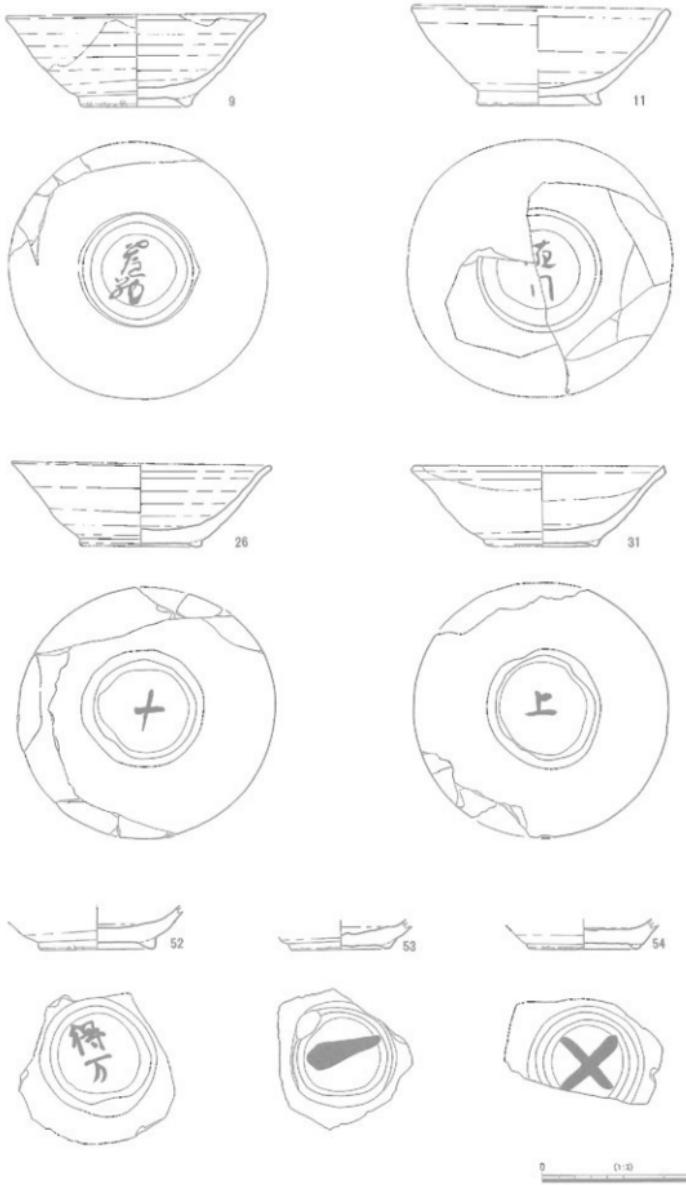


図 44 大溝Ⅲ層出土遺物（3）

Ⅲ層は最下層の埋土で、底面から50cm程堆積している。大半が暗褐色土であるが、部分的に崩落土とみられる黄褐色土も確認される。遺物としては、山茶碗や土師質土器皿、伊勢型鍋などが出土している。

1～54は山茶碗である。1～45・52～54は碗であり、53は知多産とみられるが、他は渥美・湖西産である。46～51は小皿である。いずれも渥美・湖西産である。また山茶碗には、底部外面に墨書きが残存するものも出土している。9は「藏納」、11は「駕門」、26と54は「十」、31は「上」、52は「得万」、53は「-」と判読できる。時期としては、I～2期からⅢ～2期までみられる。55と56は貿易陶磁で

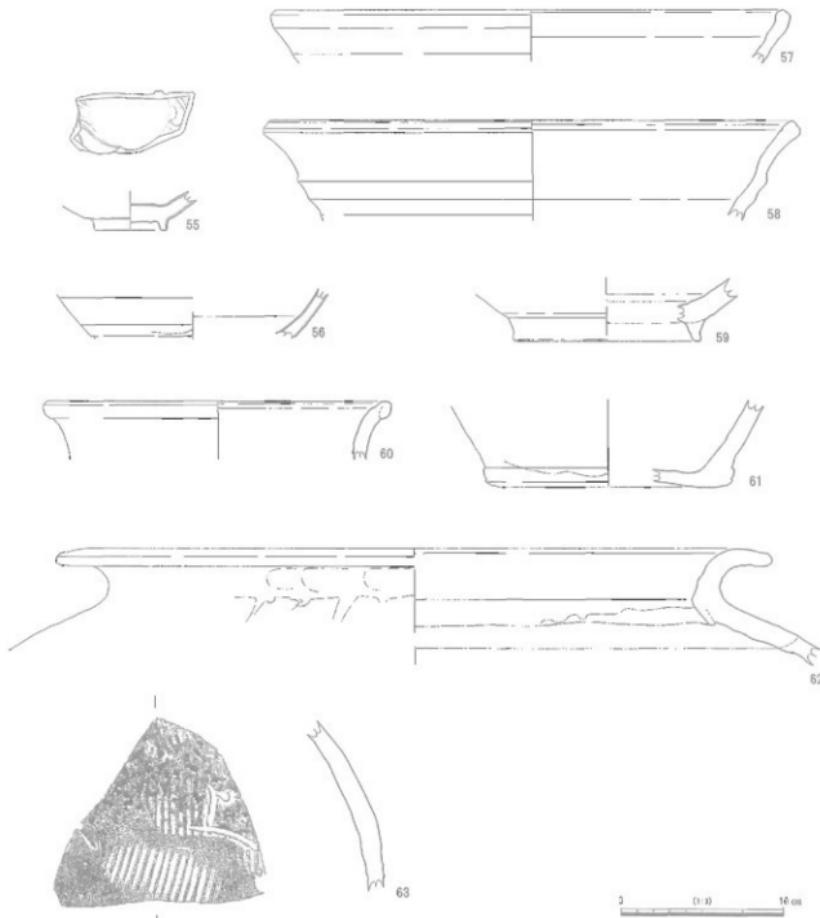


図45 大溝Ⅲ層出土遺物（4）

あり、55が青磁の碗、56が白磁の碗である。57～59は、知多産の片口鉢である。いずれも器壁は厚く、胎土は粗い。60は、渥美産の小型壺である。61～63は、渥美産の臺で、63にはヘラ書きで「上」の字が認められる。いずれも13世紀前半のものである。

64～72は、非口クロ成形の土師質土器皿である。口径12cm前後の中型品が大半であるが、64のような口径8cm前後の小型品や、66のような口径15cm前後の大型品も出土している。いずれも、口縁部には強いヨコナデ調整が施されている。73～81は、ロクロ成形の土師質土器皿である。口径8～9cmの小型品がほとんどであるが、81のような大型品も確認される。底部には糸切り痕が明瞭に残り、非

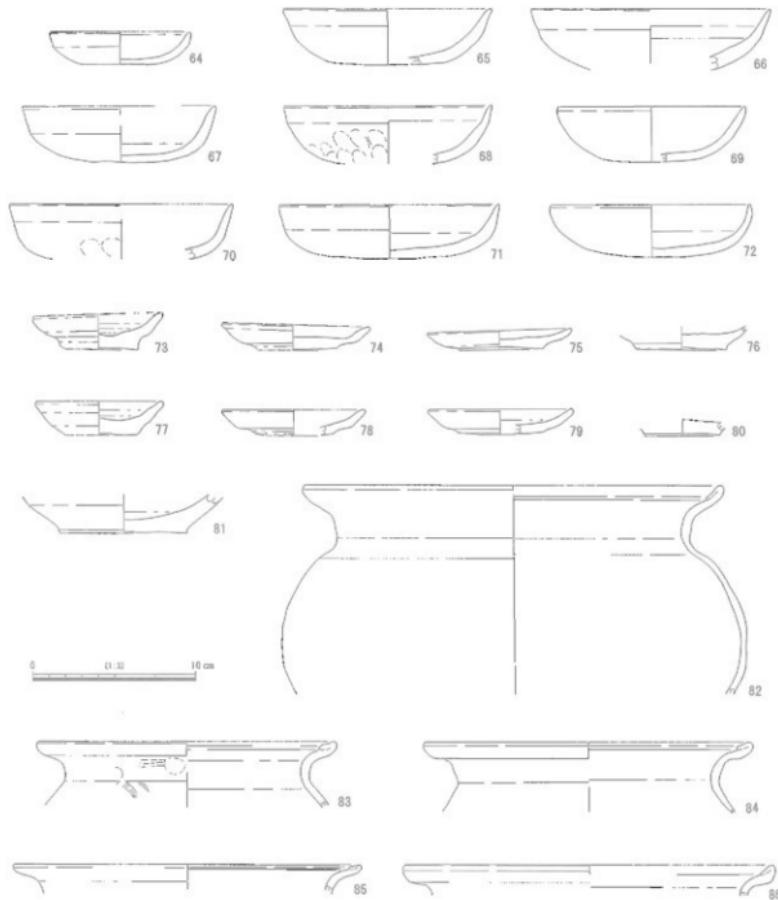


図46 大溝Ⅲ層出土遺物（5）

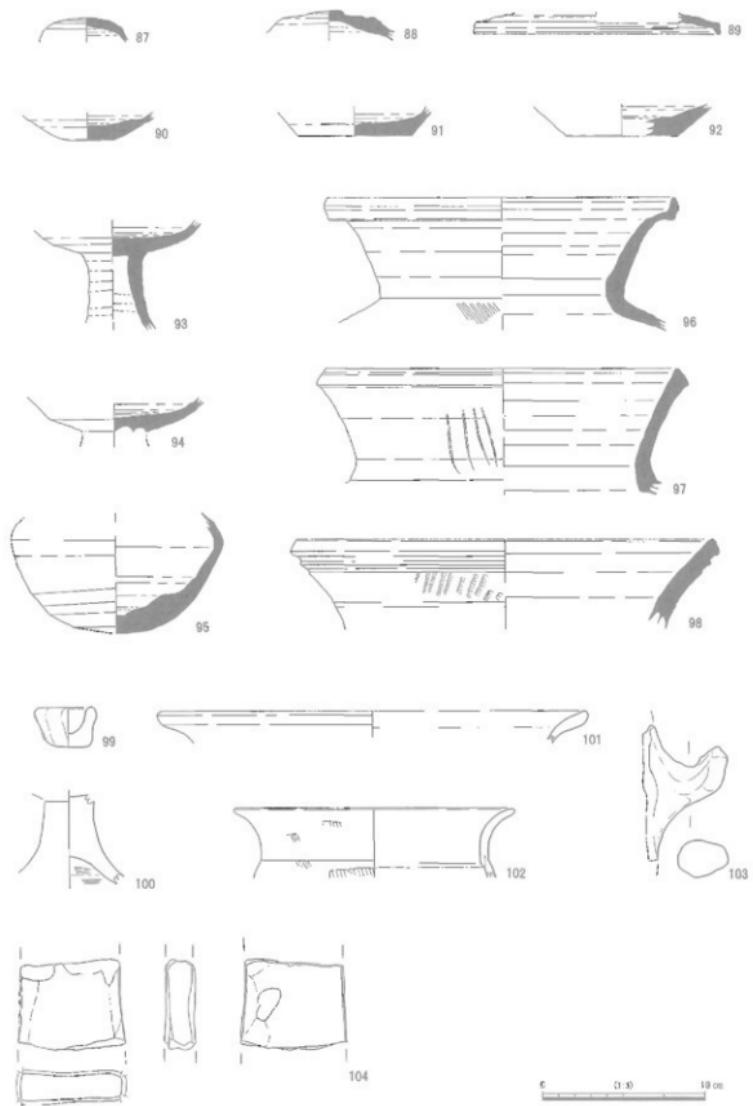


図47 大溝Ⅲ層出土遺物（6）

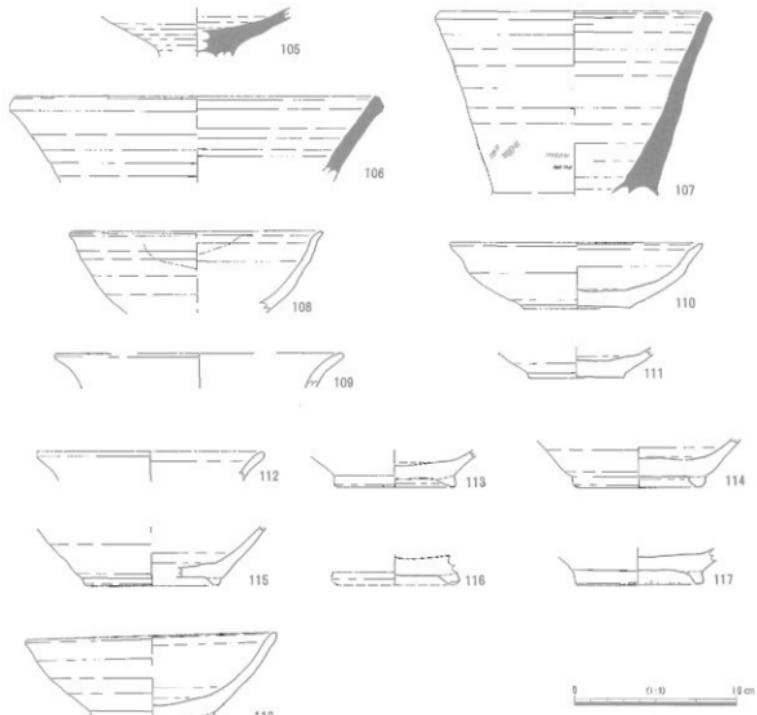


図48 大溝Ⅳ層（南東隅崩落土）出土遺物

ロクロ成形に比べて胎土のやや粗いものが多い。82～86は伊勢型鍋である。口縁部の折り返し部分にのみヨコナデ調整が施されており、頸部と体部の境は明瞭に屈曲するなど、12世紀後半から13世紀前半にかけての形態を呈している。Ⅲ層からは、これらの他に須恵器（87～98）や土師器（100～103）、土製品（99）なども出土しているが、いずれも古代のもので、混入遺物とみてよい。このように、Ⅲ層出土遺物の年代は、13世紀の後半頃までに限られているといえる。

また、前述のように区画の南東隅では、大規模な崩落土の堆積が確認されている。この崩落土は、Ⅲ層を攪拌するような形で堆積しており、掘り直しの痕跡は認められない。排水溝の入り口を塞いだまま放置されていることから、区画内の施設の廢絶または衰退した姿を示すものとして捉えることができる。崩落土中からは、須恵器や灰釉陶器、土師器、山茶碗が出土している。105～107は須恵器、108は灰釉陶器、109は土師器の甕である。これらはいずれも古代のものであり、凹地表面などに含まれていた混入遺物とみてよい。110と111は、ロクロ成形の土師質土器皿である。比較的浅いつくりで、底部には糸切り痕が明瞭に残る。皿というよりは、碗に近い形態を呈している。112～118は山茶碗である。いずれも、Ⅲ期からⅢ-1期にかけてのものである。

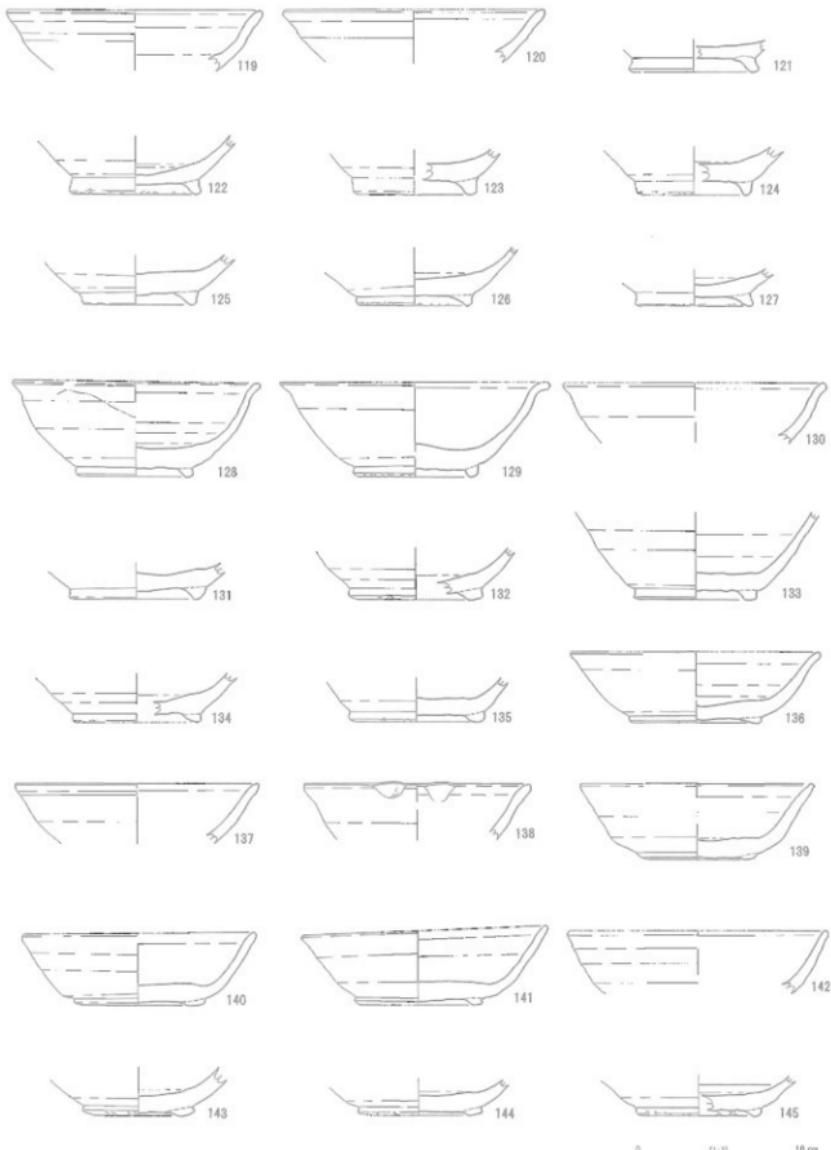


図49 大溝II層出土遺物（1）

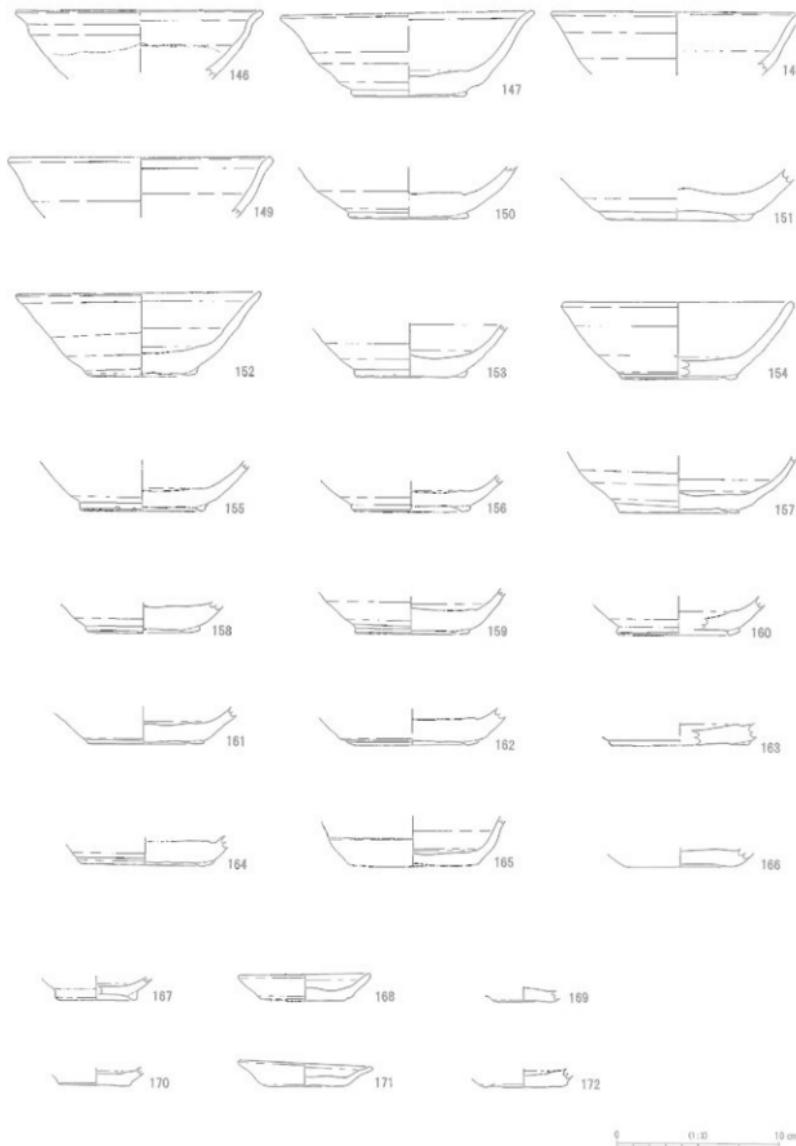


図 50 大溝 II 層出土遺物 (2)

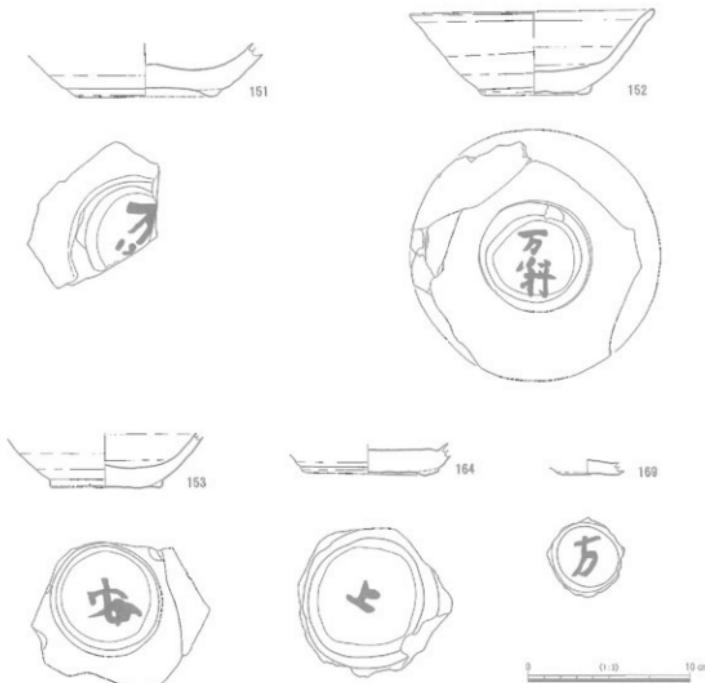


図 51 大溝 II 層出土遺物（3）

II層は、平均40～50cm程度の厚さで、III層の上に堆積している。暗褐色土を主体とするが、一部に壁面の崩落土とみられる黄褐色土の堆積もみられる。また、II層の上半には、後世の溝の底部が達している場所も認められる。遺物は、III層と同様に土器・陶磁器類が中心ではあるが、III層に比べて明らかに破片資料が多い。また、II層からは瓦も出土している。

119～172は山茶碗である。119～166は碗、167は小碗、168～172は小皿である。いずれも、渥美・瀬戸産の製品である。III層と比べると完形資料が少ない傾向にあり、137・150・154などのように、表面や断面に、二次焼成による煤の付着が認められるものも出土している。時期としては、III層と同様に、II期からIII-2期のものまであり、III-3期のものは含まれていない。

また、山茶碗には、墨書の残存するものも認められる。151は「万□（料か）」、152は「万料」、153は「安」、164は「上」、169は「万」と読める。いずれも、III-2期に相当する山茶碗で、墨書は底部外面に記されている。

173～176は片口鉢である。176は知多産で、他は渥美・瀬戸産の製品である。12世紀後半から13世紀前半のものである。177は常滑産の壺で、13世紀後半のものである。178は渥美産の壺である。179と180は古瀬戸製品である。179は中期の平碗、180は前II期の四耳壺である。181の擂鉢は、大窯

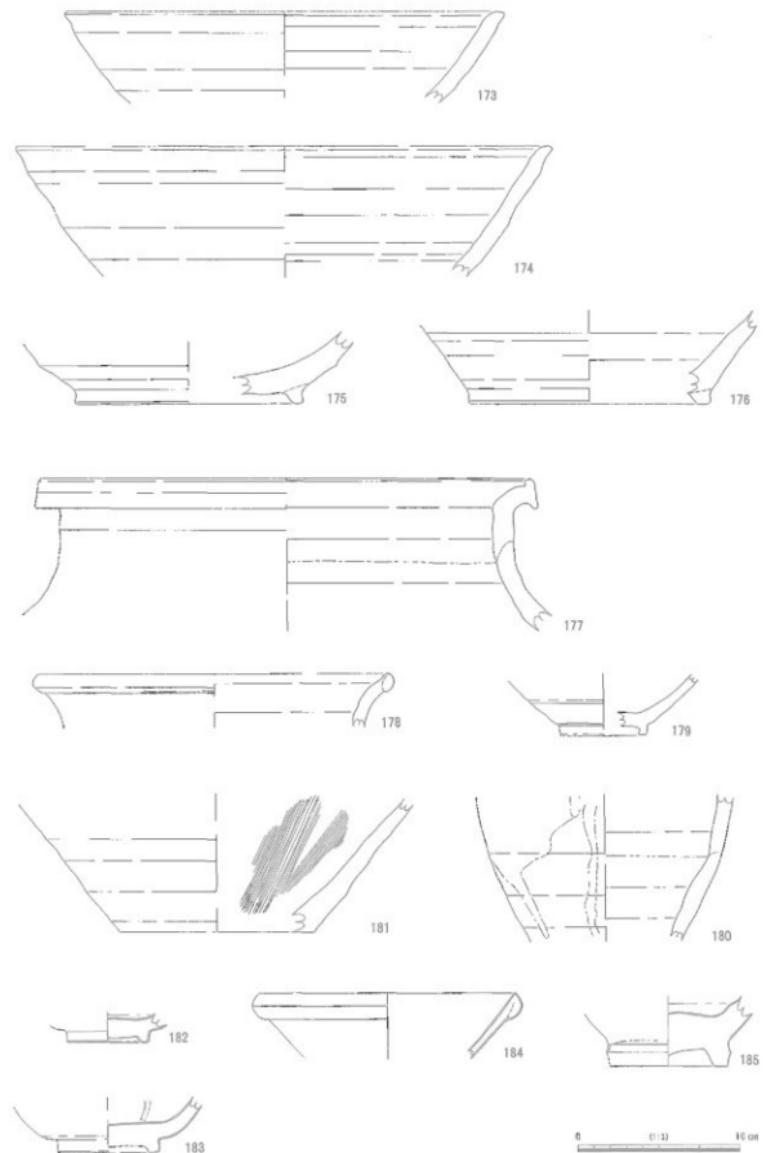


図 52 大溝 II 層出土遺物 (4)

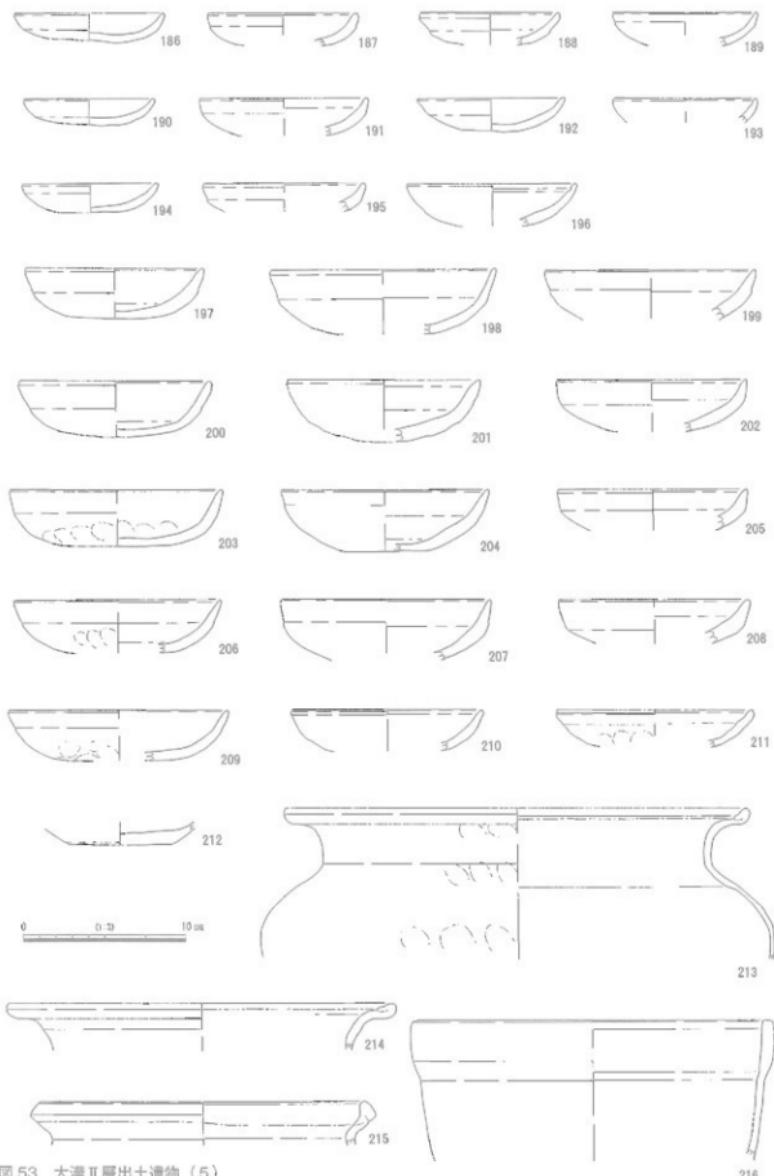


図53 大溝II層出土遺物(5)

期の漁戸・美濃製品である。調査時にはII層の遺物として取り上げられているが、後世の溝に伴う遺物である可能性が高い。182～185は貿易陶磁である。182と183は青磁の碗、184は白磁の碗、185は白磁の四耳壺である。183には、二次焼成の痕跡が認められる。

186～211は、非クロロ成形の土師質土器皿である。口径8～9cmの小型品と、12～13cmの中型品が出土している。中型品は、皿層でみられたような、厚手のつくりで、口縁部に強いヨコナデ調整を施す坏型のものが大半である。ただし、一部には210や211のように浅く皿型で、薄手のつくりのものも認められる。210は、口縁部のヨコナデ調整も不明瞭となっている。212はロクロ成形の土師質土器皿である。底部には、糸切り痕が明瞭に残っている。II層では、非クロロ成形の土師質土器皿が圧倒的に

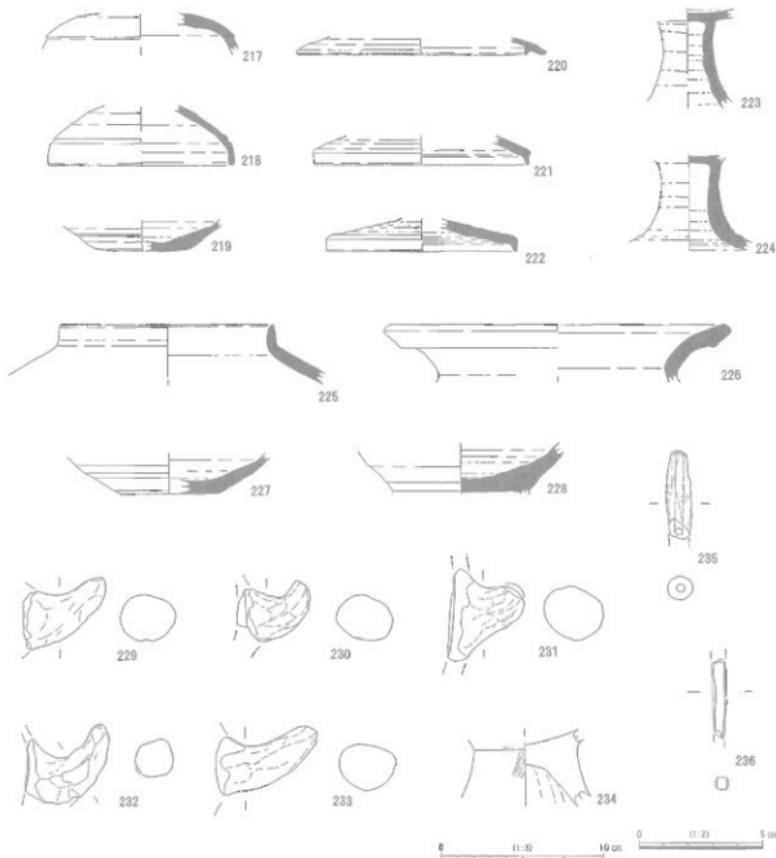


図 54 大溝II層出土遺物（6）

多く、ロクロ成形のものはごく少並みられる程度である。

213と214は、伊勢型鍋である。口縁の折り返し部にはナデ調整が施され、外面には多量の煤が付着している。215はくの字形内耳鍋であり、216は内輪形内耳鍋である。II層では、この他に半球形内耳鍋や羽付釜の破片も出土している。しかし、点数的にはわずか数点程度であることから、これらの内耳鍋は、後世の溝に伴う遺物が混入している可能性が高い。

また、III層と同様に、須恵器（217～228）や土師器（229～234）など、古代に属する遺物も出土している。235は土錘、236は釘と思われる鉄製品であるが、時期については特定できない。

II層では、土器類の他に、瓦も比較的豊富に出土している。237は埠である。形態から敷埠とみてよい。破片であるが、2辺の側面が残存しており、幅が26cmであることがわかる。煤が付着し、胎土も部分的に赤く変色するなど、二次的な被熱の痕跡が明瞭に残る。裏面にはヘラ状工具による調整痕が明瞭に残っているのに対し、表面は風化による摩滅が認められる。238は軒丸瓦の丸瓦部である。瓦当面が消失しているため、瓦当文様については知り得ない。丸瓦先端は無加工で、瓦当への入りは浅い。凹凸両面には、接合粘土が残っている。今回の調査では、これ以外に埠と軒丸瓦は出土していない。

239～261は丸瓦である。いずれも破片資料であり、完形のものは出土していない。

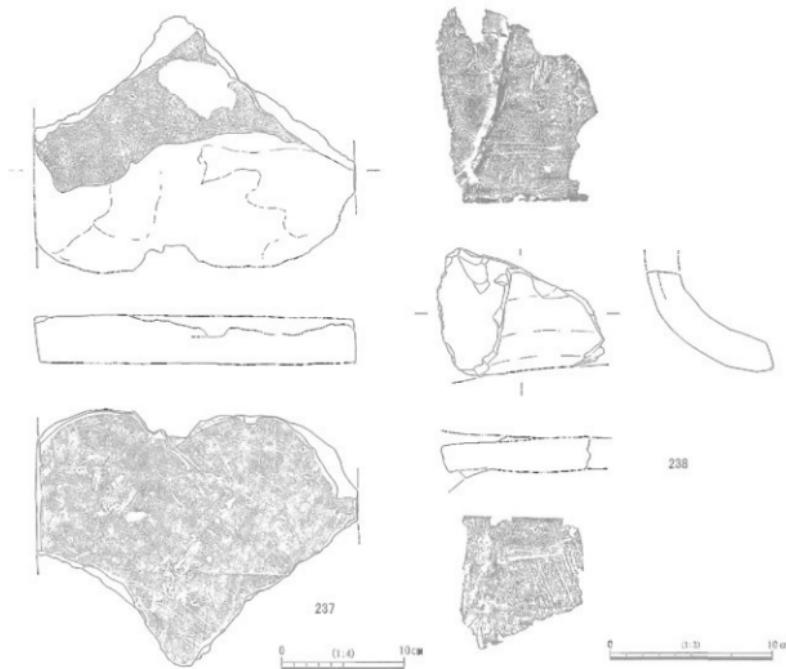


図55 大溝II層出土埠・軒丸瓦

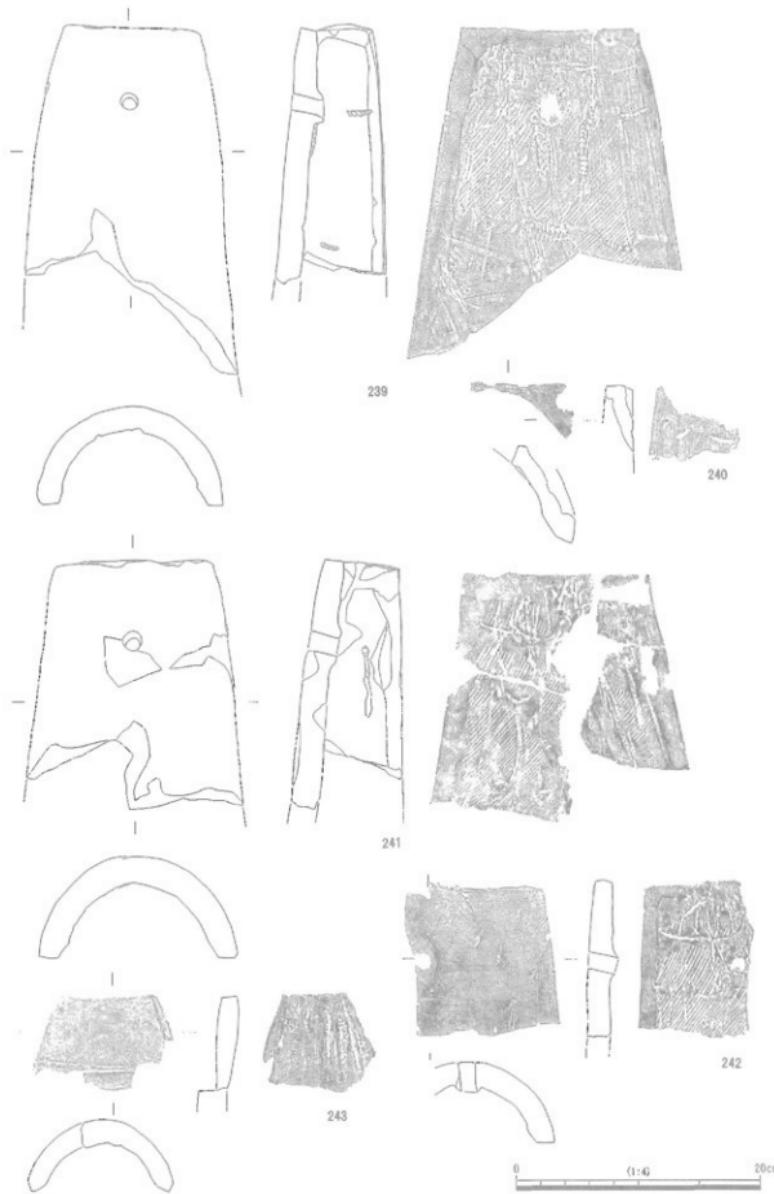


図 56 大溝 II 層出土丸瓦 (1)

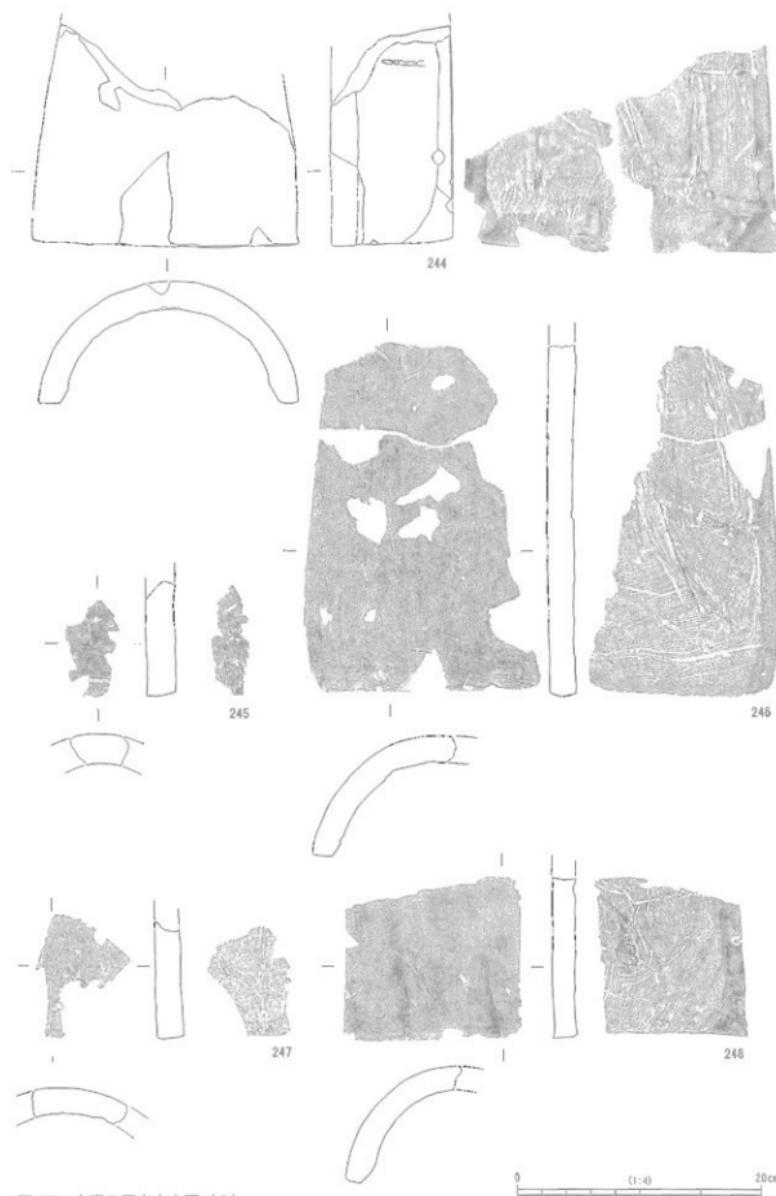


図 57 大溝Ⅱ層出土丸瓦 (2)

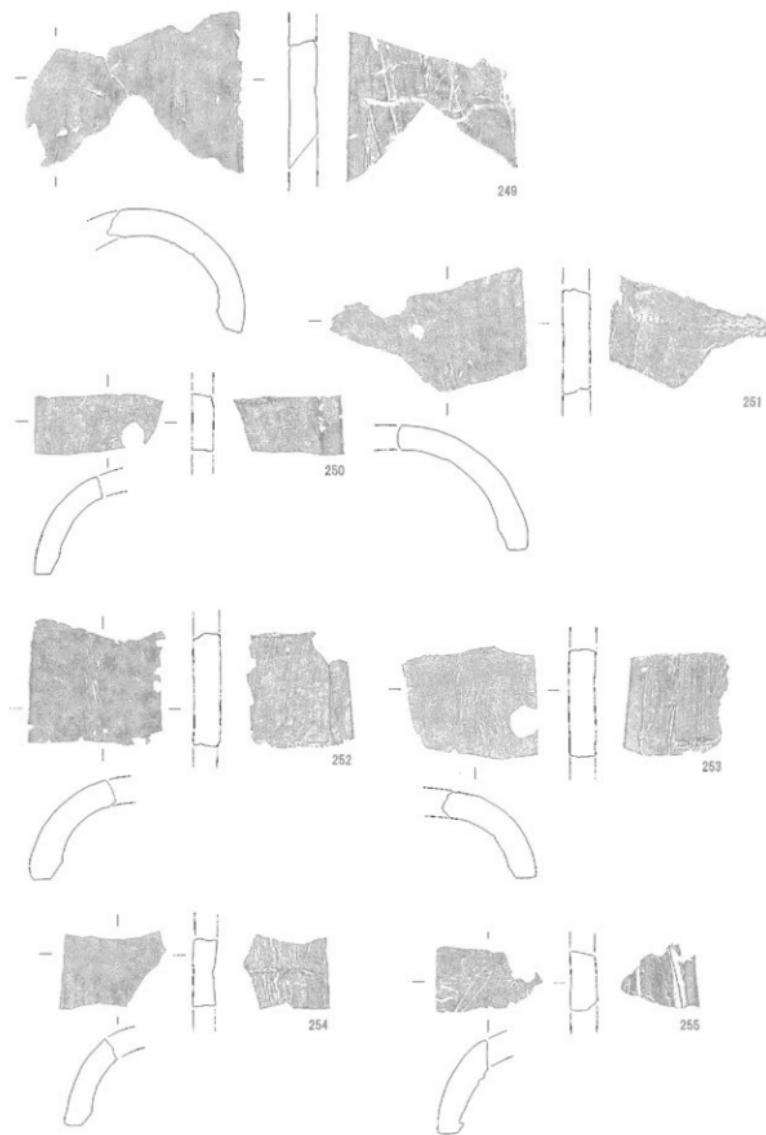


図 58 大溝 II 層出土丸瓦 (3)

0 (1-4) 10cm

239～242は、無段式（行基式）の丸瓦の狭端部である。239と241は両側端が残存しており、側端幅は239が11.5cm、241が13cmとなっている。狭端から6～7cmの場所には、直径1.5cm程度の釘穴が穿たれており、凸面側の穴の周囲はヘラ削りによって平らに仕上げられている。凸面は全体に丁寧なナデ調整が施されているが、部分的に綱叩きの痕跡が認められる。凹面は、布目と吊り紐痕が残る。布に隠れている部分を1とした時の布から出た部分の吊り紐比率は、最も痕跡が明瞭に残る239では0.9となっている。いずれも、凹面の側端と狭端には面取り調整が施されている。243是有段式（玉縁式）の丸瓦である。段部は残存しないが、狭端に向かって急激に幅が狭まっている点や、段部付近で凸面側に反っている点、布を大きく敛っている点などから識別できる。無段式に比べて、布目は粗い。頂点近くまで残っているが、釘穴は認められない。

244～248は、広端部の破片である。両側端の残る244でみると、広端幅は22cmもあり、非常に大型の丸瓦であることがわかる。凹面には、布目と吊り紐痕が残る。246では吊り紐比率は0.6となって

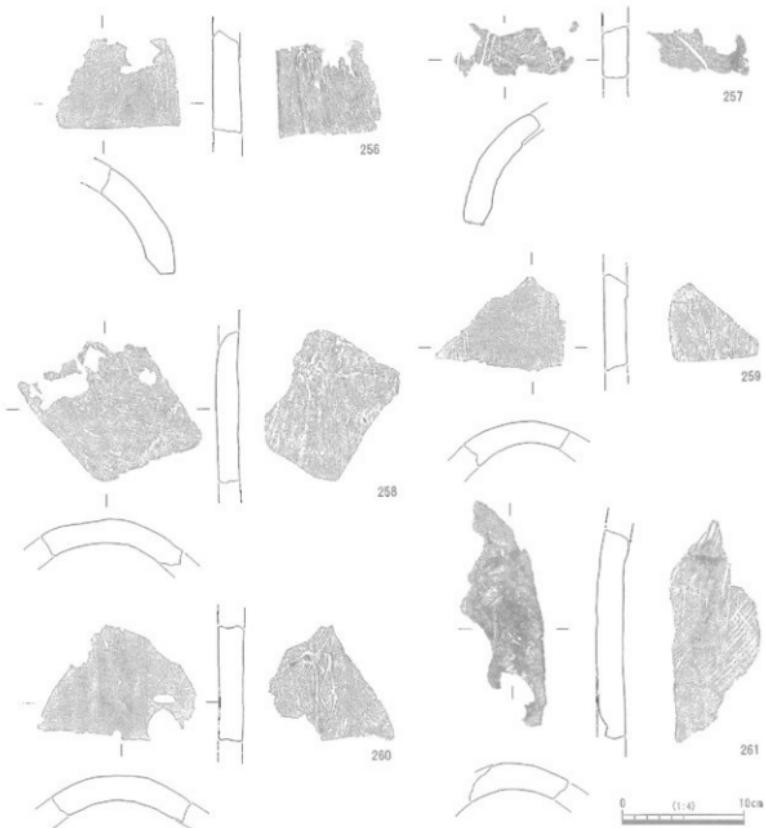


図59 大溝II層出土丸瓦（4）

いる。いずれも、凹面側端には面取り調整が施されている。244・247・248 の広端面には、離れ砂の付着が明確に認められる。

249～257は、側端部の残る破片、258～261は端部の残らない破片である。いずれも凸面は、丁寧にナデ調整され、部分的に縄叩きの痕跡が確認される。凹面には布目と吊り紐痕が残り、254には離れ砂の付着も認められる。249の布に隠れている部分を1とした時の吊り紐比率は、0.8となっている。256と258には、断面に煤が付着し、二次的な被熱の痕跡が顕著である。

262～291は平瓦である。262～268は、凸面に縄叩きが残るものである。いずれも、やや軟質で橙白色の色調を呈している。凹面には布目が明瞭に残る。側板痕が認められず、湾曲の緩いことから、凸型台成形による一枚作りであると推測される。凹面の側端及び広端には、幅の狭い面取りが施されている。263には、表面と断面に煤が付着し、二次的な被熱の痕跡が顕著にみられる。凸面にのみ、離れ砂の使用が認められる。

269～277は、継長斜格子の叩き目が残るものである。硬質のものと軟質のものがある。269～273には、格子の中に「大」に字がみられる。離れ砂は、凸面のみにみられるものと、凹凸両面にみられるものがある。凸面のみに離れ砂がみられるもの（269・274）の凹面には、布目が残る。凹凸両面に離れ砂が付着するもの（270～273・275～277）の凹面には、布目はみられない。270・272には、斜格子の転写が明確に認められる。274には釘穴が穿たれており、凸面の釘穴の周囲は平らに削り調整されている。276の凹面側端には、凹型台の痕跡が明確にみられ、凹面の調整時に凹型台が使用されたことがわかる。凹面の面取り調整は、狭端と側端に施されているが、広端には認められない。

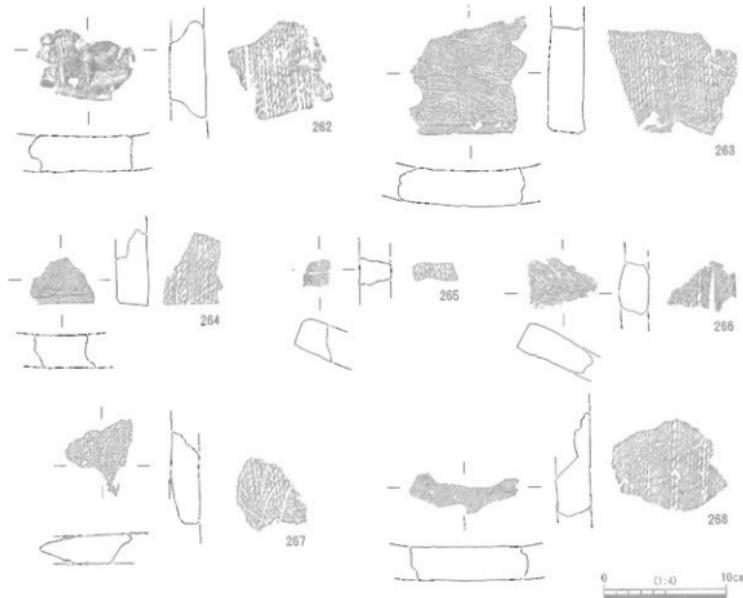


図60 大溝Ⅱ層出土平瓦（1）

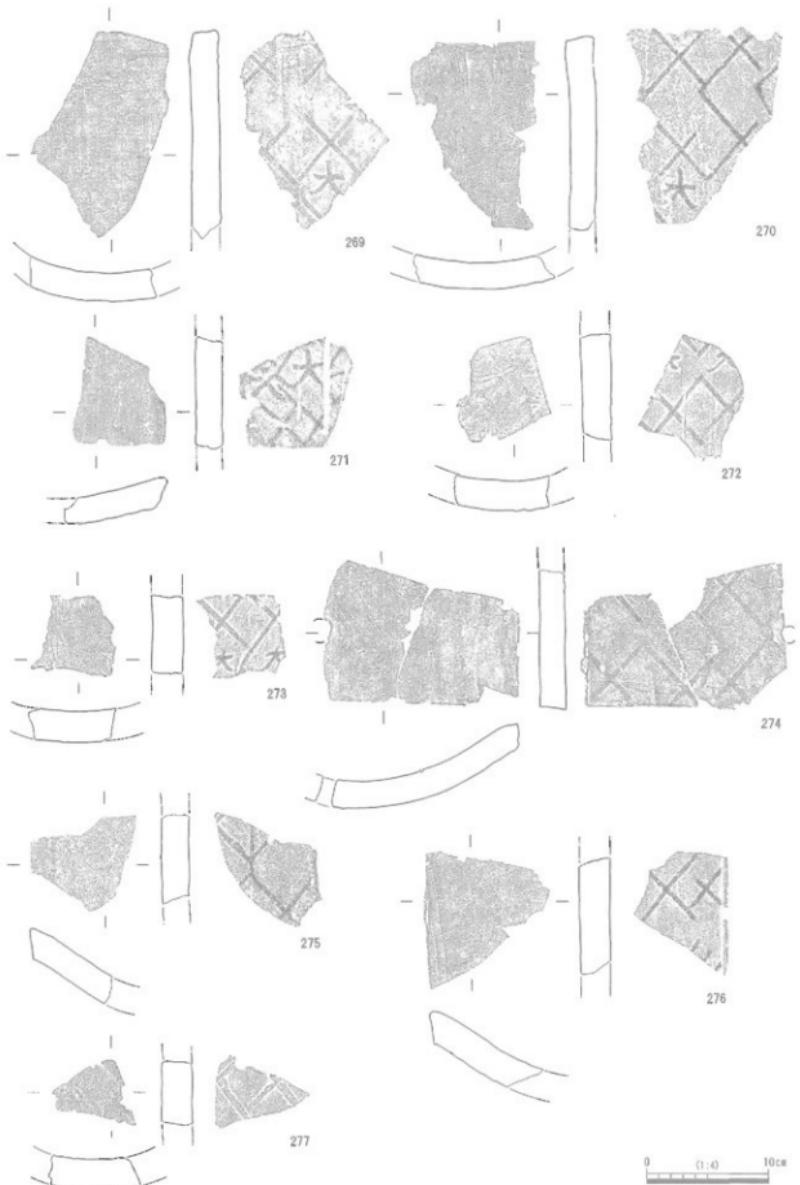
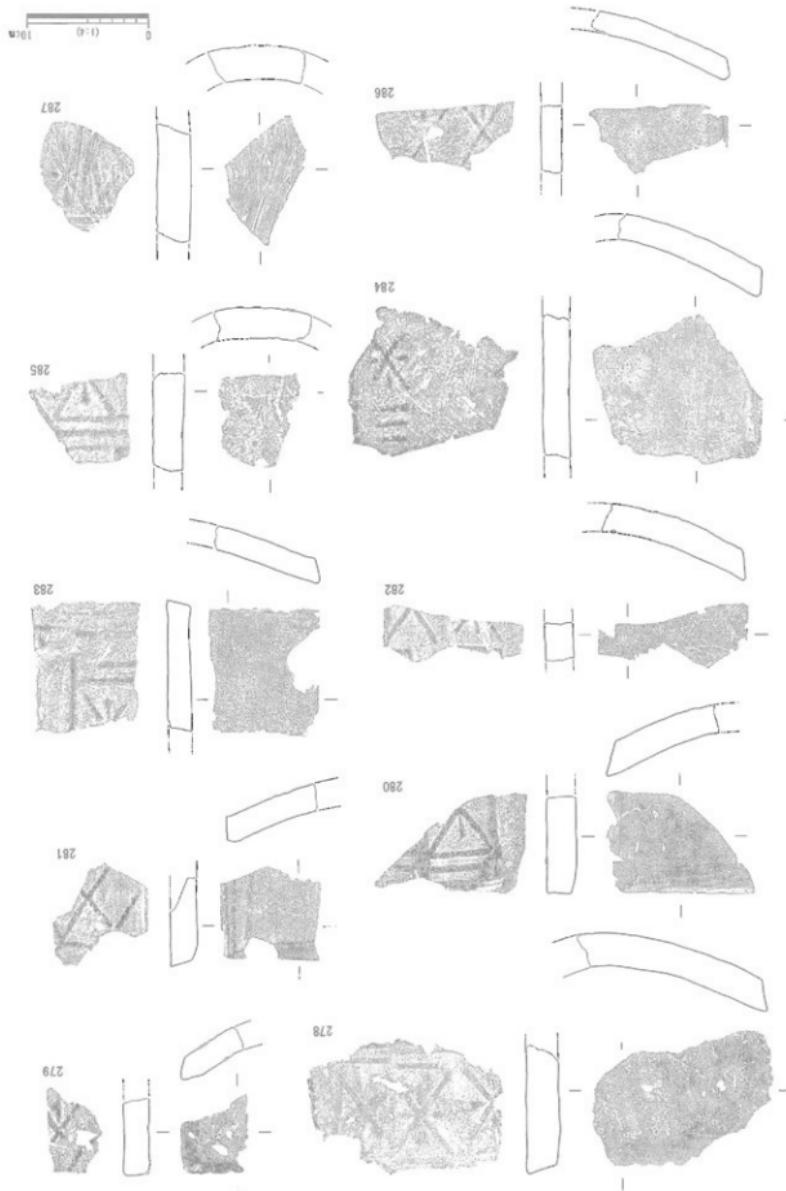


図 61 大溝Ⅱ層出土平瓦 (2)

图 62 大寨 II 层出土平瓦 (3)



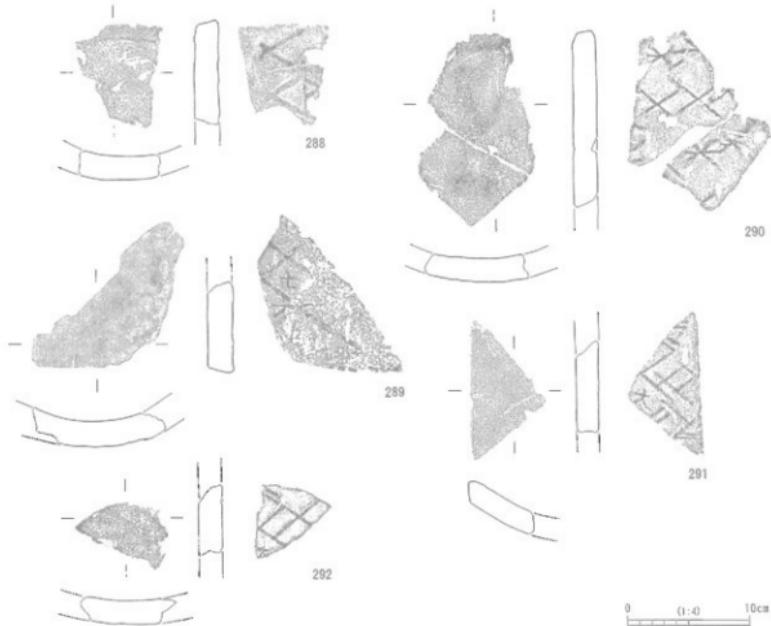


図 63 大溝Ⅱ層出土平瓦 (4)

278～287は、斜格子と横線の叩き目が残るものである。斜線の交差部には、剣菱形の文様が十字に配されている。恐らくは、格子の部分を花弁に見立てた、花菱文の変化形であると推測される。焼成は、硬質のものと軟質のものとがみられる。凹面の面取り調整は、狭端と側端にはみられるが、広端には施されていない。278～286には、凹凸両面に離れ砂が付着している。278の凹面には、やや不明瞭ではあるが、斜格子の転写が確認できる。287は、離れ砂が凸面にのみ付着している。凹面の大部分はナデ調整されているが、布目の痕跡がわずかに確認できる。278と284には、断面に煤が付着しており、二次的な被熱の痕跡が明瞭である。281の凸面側端には、凹型台の痕跡が残る。

288～292は、横長斜格子の叩き目が残るものである。ただし、格子の線を詳細にみると、288と289は太く、290～292は細い。同じ横長斜格子ではあるが、異なる叩き板である可能性が高い。いずれも軟質で、色調は灰白色を呈している。凹面の面取り調整は、狭端と側端にはみられるが、広端には施されていない。289と291には、格子内に「大」の字がみられる。291の「大」は、裏文字になつていて。289の凹面には布目がみられる。部分的に離れ砂も付着しているが、凸面ほどは顕著でない。他のものには、凹凸両面に離れ砂の付着が認められる。

このように、瓦には被熱の痕跡を残すものがあり、これらを所用した瓦葺き建物が火災により焼亡したことがうかがえる。また、瓦はⅡ層全体から出土しているが、詳細にみるとⅡ層の最下層、つまりはⅡ層とⅢ層との境付近からの出土も確認できる。これは、Ⅲ層の堆積後さほど間を置かず瓦が廃棄されたことを物語っており、瓦葺き建物の廃絶時期を示すものとして注目される。

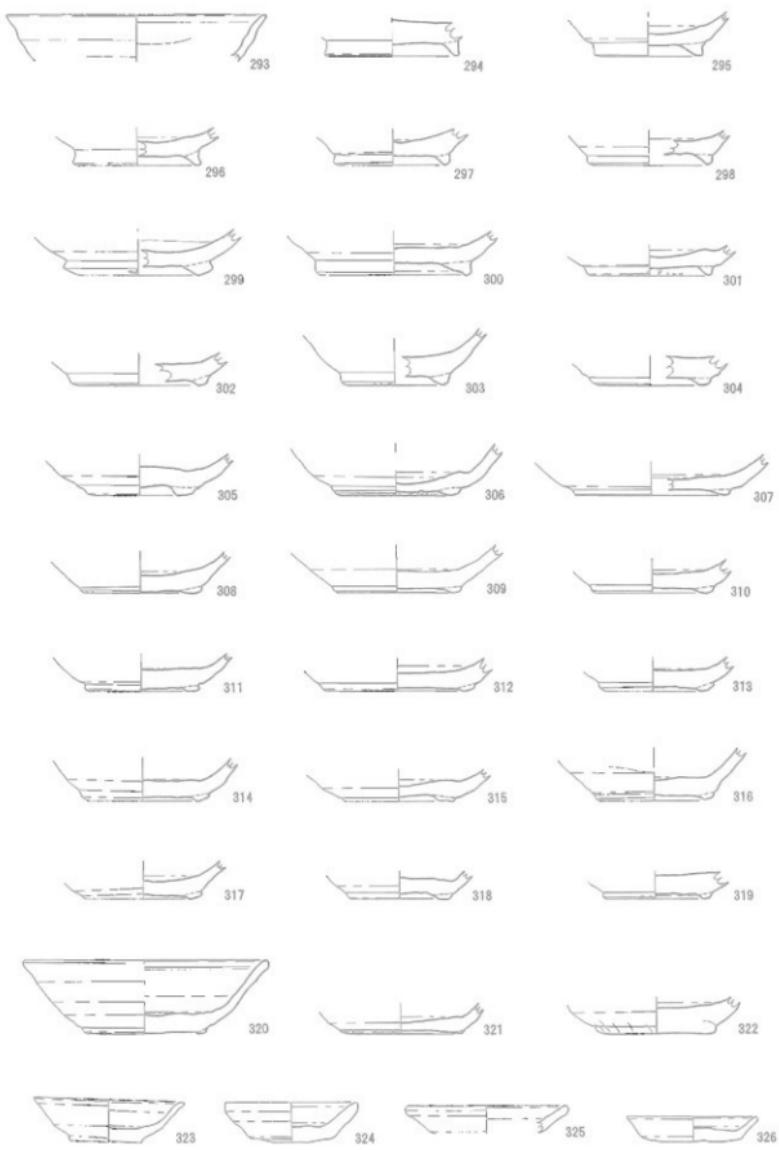


図 64 大溝 I 層出土遺物 (1)

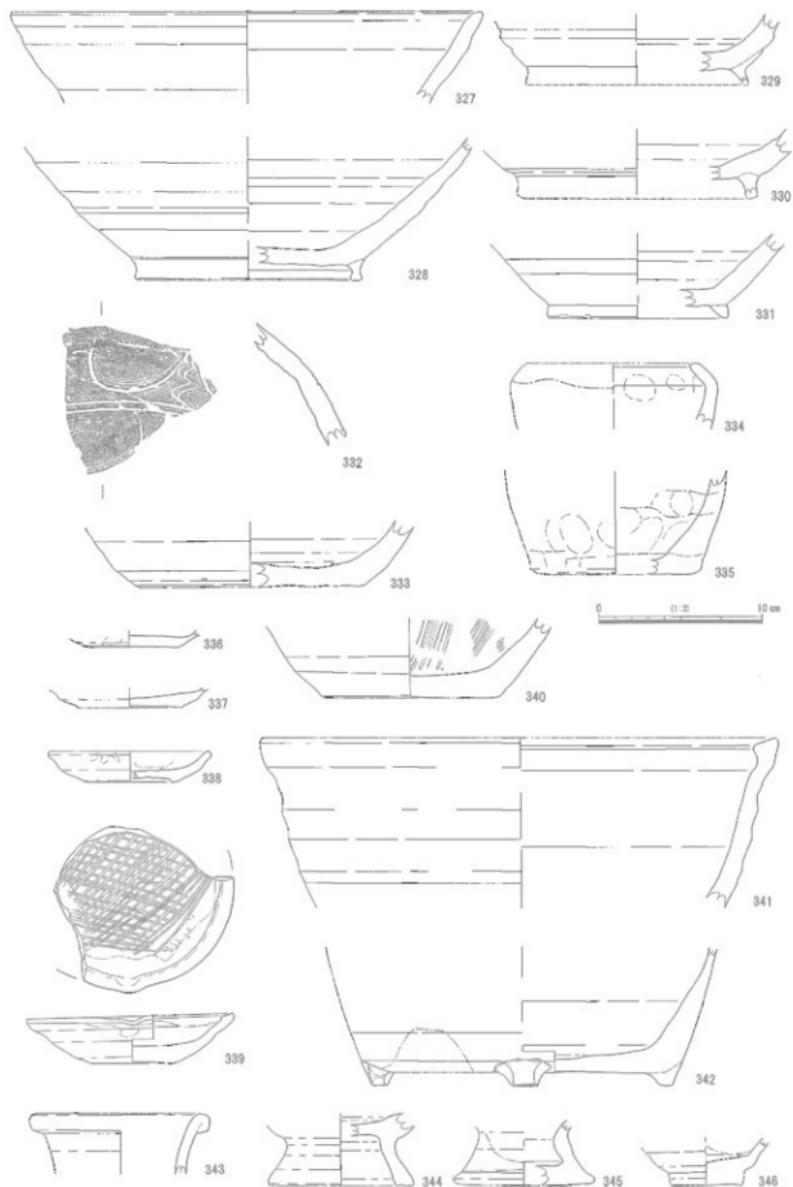


図65 大溝I層出土遺物(2)

I層は暗褐色土を主体とする、最上層の埋土である。後世の溝が掘り込まれており、攪乱によって失われている部分も多い。これらは、いずれも近似した暗褐色土の埋土であり、検出作業は非常に困難な状況であった。I層の遺物として取り上げられているものの中にも、後世の溝の遺物が相当量混入しているものと推測される。

293～326は山茶碗である。310には、表面と断面に被熱の痕跡が認められる。東遠産とみられる297を除き、いずれも渥美・湖西産の製品である。破片のものが大半で、完形品は出土していない。時期としては、I期からIII～II期までみられるが、III～I・II期のものが多い。

327～331は片口鉢である。327は渥美産、その他は知多産の製品とみられる。いずれも13世紀代のもので、内面に使用の痕跡が顕著にみられる。332は渥美産の壺である。体部の破片で、蓮弁文が線刻されている。小穴SP2119から出土した破片と接合している。333は鉢の底部である。334と335は常滑産の製品で、334は片口鉢の口縁部、335は壺の底部である。336と337は、古瀬戸後I～II期の瀬戸美濃産の縁袖小皿である。338は、初山窯産の内充皿である。339・340・342は、古志戸呂窯産の製品である。339は鉢皿で、340は擂鉢、342は大型の筒型容器または桶である。341は内耳鍋で、二次焼成によるものか、胎土は赤褐色を呈している。343は瀬戸美濃産の四耳壺で、古瀬戸前II～III期のものである。344と345は、瀬戸美濃産の花瓶である。344は古瀬戸中IV期、345は古瀬戸後III～IV期のものである。346は古志戸呂窯産の仏供である。

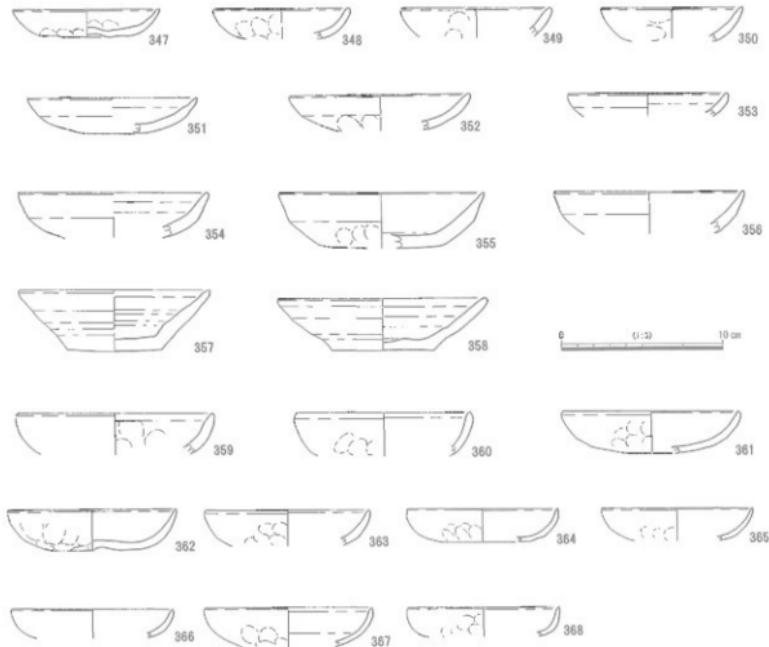


図66 大溝I層出土遺物（3）

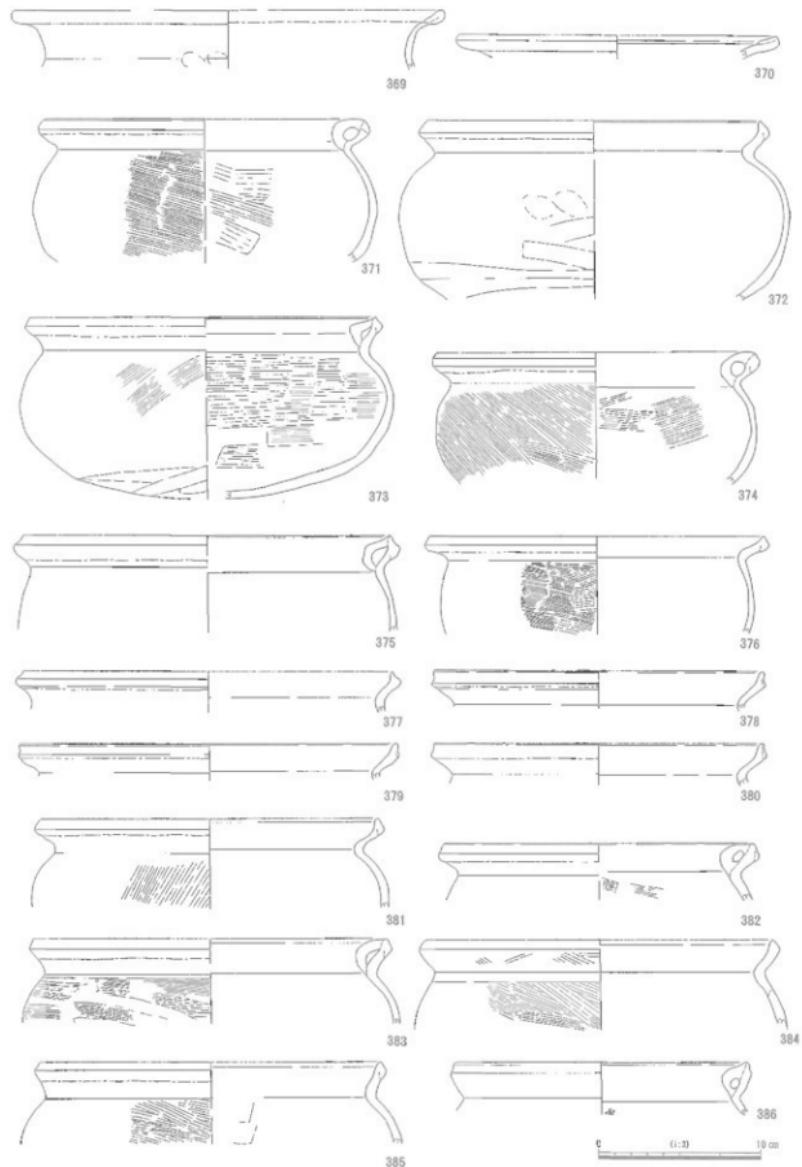


図 67 大渕 I 層出土遺物 (4)

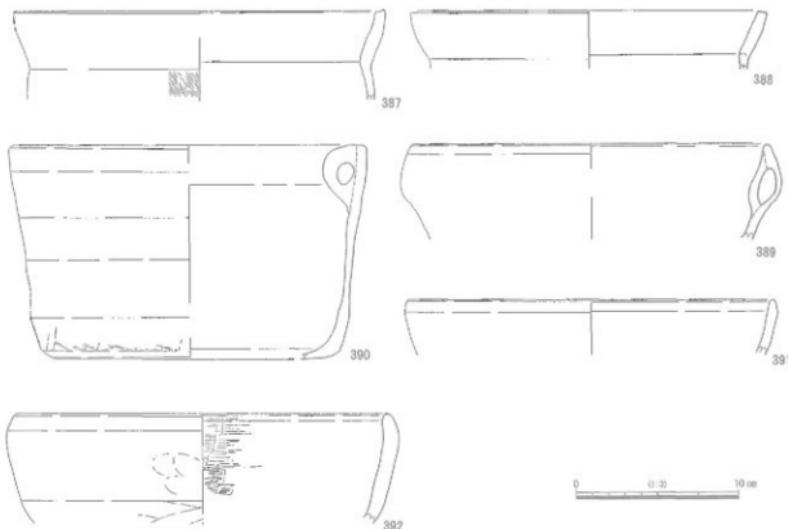


図 68 大溝 I 層出土遺物 (5)

347～368は土師質土器皿である。非ロクロ成形のもの（347～356・359～368）と、ロクロ成形のもの（357・358）とがみられる。347～350は、直徑8～9cm程の小型のものである。焼成は軟質で、いずれも表面の磨滅が著しく調整は不明瞭である。351～353は、口徑10～11cmのやや浅い形態のもので、口縁部にはヨコナデ調整が明瞭に残る。354～356は、口徑13cm前後のもので、坏型の形態を呈している。厚手のつくりで、口縁部にはヨコナデ調整が施されている。357・358は、ロクロ成形のものである。I層においても、非ロクロ成形のものが主体を占めており、ロクロ成形のものはわずかに確認できる程度である。359～368は、焼成が比較的硬質で、口縁部にヨコナデ調整が施されていないものである。これらについては、後世の溝に伴う遺物であると推測される。

I層では、II・III層に比べて煮炊用土器が多く出土している。この中でも、くの字形内耳鍋（371～386）が、他の煮炊用土器に比べて数量の上で圧倒的に多い。外面の調整は、外面上方までハケ目調整されるものが大部分を占めているが、372や375のように指オサエやナデ調整を施すものも少量確認できる。内耳鍋としては、他に内彎形（387～389）や半球形（391・392）のものも出土しているが、数は少ない。また、確実なものは1点だけであるが、平底で桶形を呈する内耳鍋（390）も確認される。このタイプの内耳鍋は、信濃や甲斐での分布が知られているが、この地域での出土は極めて稀である。個別に分離することは困難であるが、これら出土数の少ない内耳鍋については、後世の溝に伴う遺物の可能性が高いとみた方がよいであろう。

393～396は志戸呂窯の製品で、393は小皿、394は香炉、395と396は天目茶碗である。397は瀬戸窯産の天目茶碗で、登窯3～4小期のものである。398は美濃窯産の尾呂茶碗で、登窯5～6小期のものである。399～426は、主に18世紀後半から19世紀にかけての陶磁器である。その大半は、瀬戸美濃製品である。器種としては、腰錦湯呑（399～402）、小中（403）、筒形湯呑（405）、箱形湯呑（406・

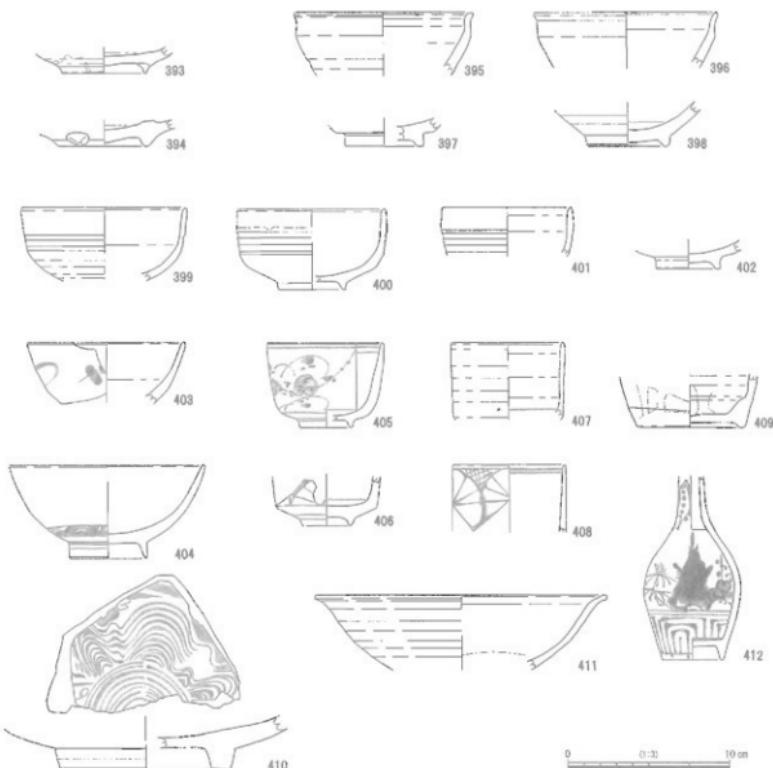


図 69 大溝 I 層出土遺物 (6)

407)、徳利 (409)、折線輪禿鉢 (411)、小瓶 (412)、片口 (413～418)、練鉢 (419)、筒形香炉 (420)、擂鉢 (421・422)、灯明皿 (423)、乗燭 (424)、瓶掛 (425)、土瓶 (426) などがみられる。また、肥前の磁器染付 (404・408) や唐津の刷毛目皿 (410) など、瀬戸・美濃以外の製品も少量ではあるが出土している。

点数は少ないが、金属製品も出土している。427は鉄滓である。いわゆる椀形滓で、直径10cm程度の小型のものである。後世の滓に伴うものの可能性もあり、年代については明確でない。428は簪の耳搔き部分である。金銅製で表面には鍍金が残り、魚子状の細かな彫金が施されている。429は用途不明の銅製品である。幅1cm程度の小型品で、両端は欠損しており、内部は中空となっている。この2つの銅製品については、後世の滓に伴う遺物である可能性が高い。

土器については、Ⅱ・Ⅲ層と同様に、須恵器 (430・432～439) や灰釉陶器 (431)、土師器 (440～442)、土錘 (443) といった、古代の遺物も出土している。

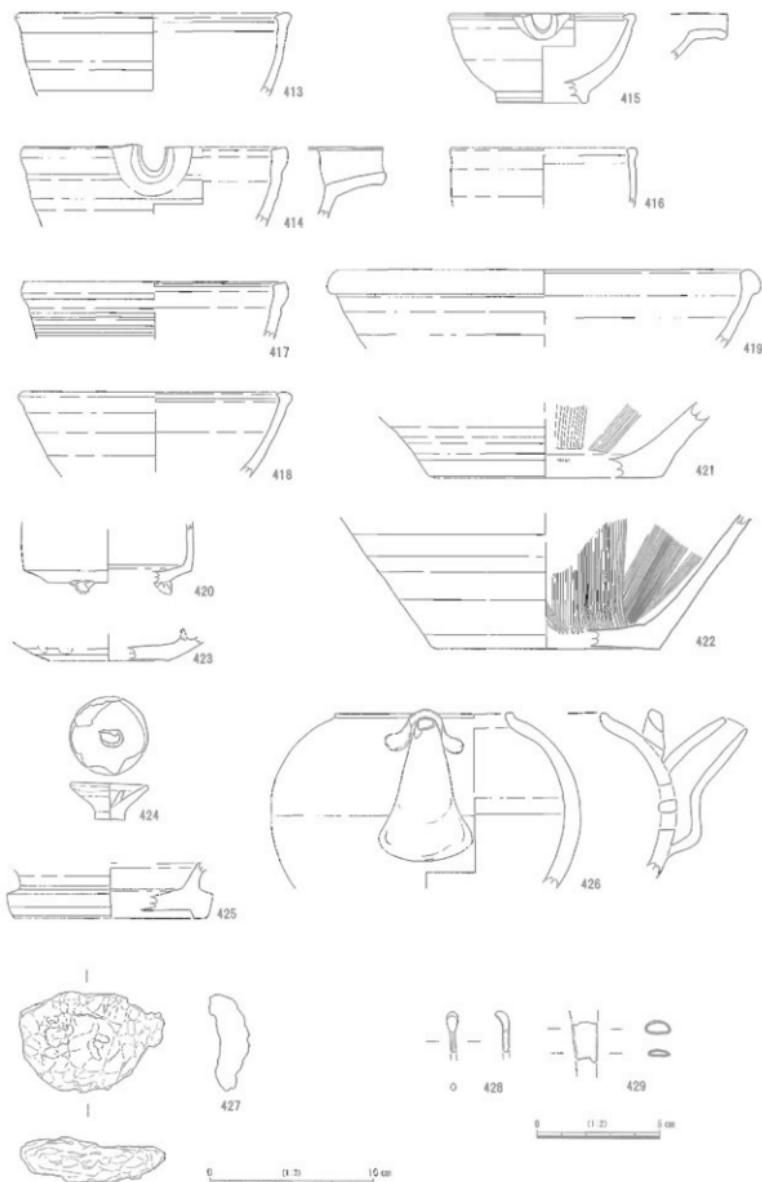


図 70 大溝 I 層出土遺物 (7)

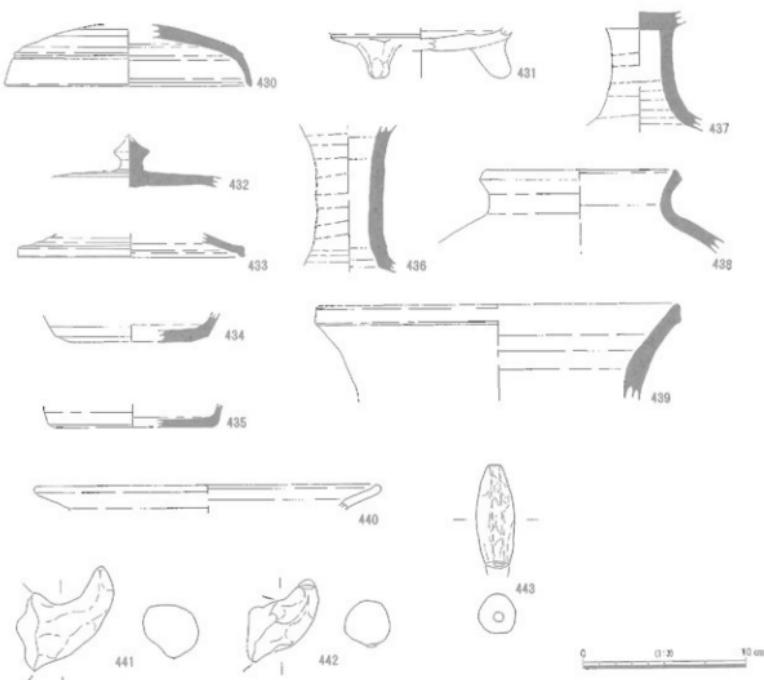


図71 大溝I層出土遺物(8)

II層の半分程度の数量ではあるが、I層でも瓦が出土している。444～470は丸瓦である。いずれも破片資料であり、完形のものは出土していない。444～446は狭端部の破片である。凸面はナデ調整が施され、凹面には布目と吊り縫痕がみられる。444は無段式（行基式）の丸瓦であり、狭端から約6cmの所には釘穴が穿たれている。二次的な被熱が顯著で全体が黒く変色している。445と446は、狭端面は残存していないが、釘穴が穿たれることから狭端側の破片であることがわかる。447～451は、広端部の破片である。凸面はナデ調整が施されており、凹面には布目が残り、部分的に離れ砂の付着も認められる。凹面の側端と広端には、面取り調整が施されている。広端面には離れ砂の付着が認められる。452～457は、側端部が残る破片である。凹凸面の調整は上記のものと同様で、453には縄叩き痕、455には布縫じ痕が認められる。縫じ目はぐし縫いされている。458～461は端部の残らない破片である。459には粘土板の接合痕、460には縄叩き痕が認められる。

462～470は、4区において「大溝内攪乱」として取り上げているものである。しかし、出土品を見る限り現代のものは全く含まれておらず、すべてが攪乱であったとは考えにくい。土層などの記録が一切残されていないため、今となっては検証する術を持たないが、恐らくは、上面にみられた攪乱を十分に検出しないまま、攪乱として大きく掘り下げてしまったのであろう。これらは、ほぼI層に相当する

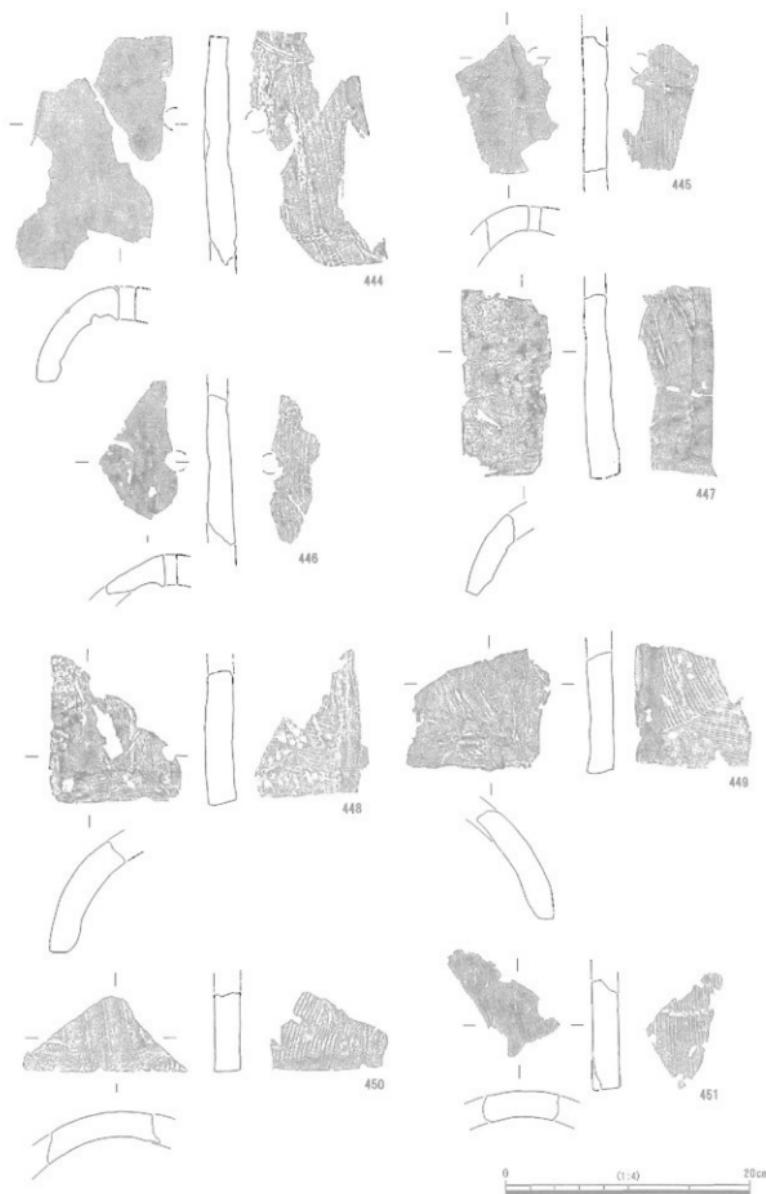


图 72 大溝 I 层出土九瓦 (1)

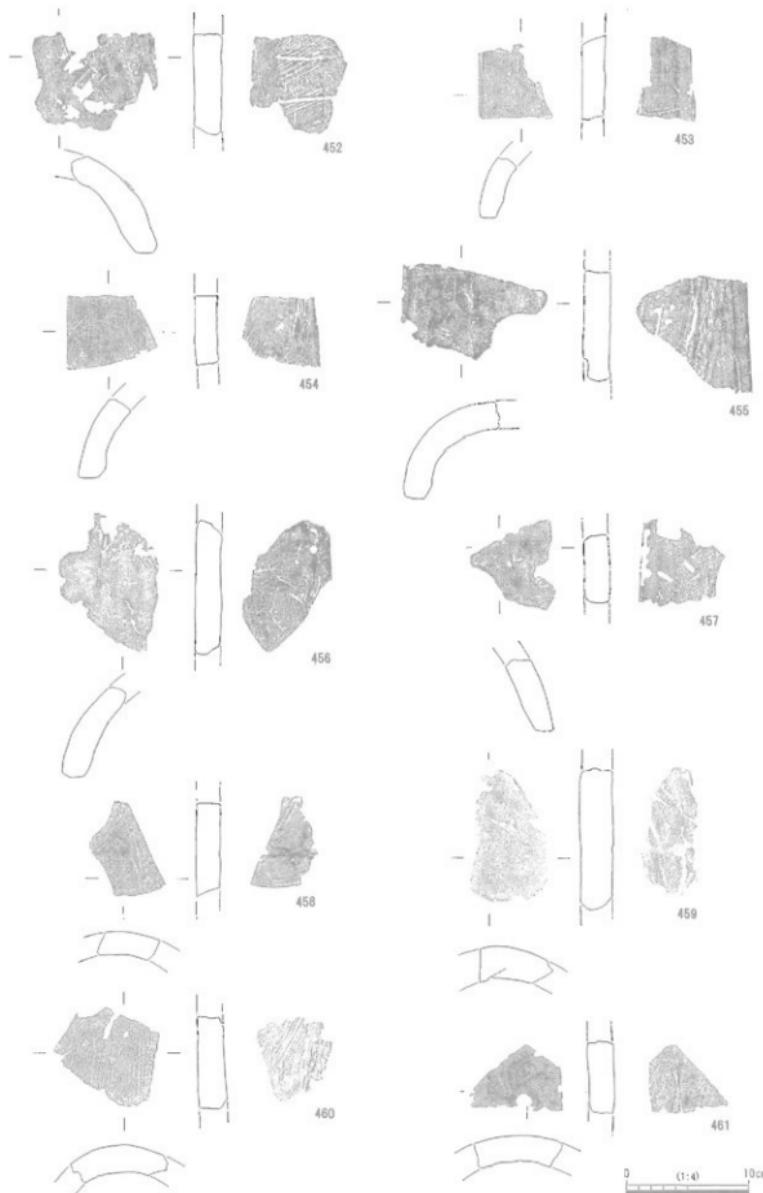


図73 大溝I層出土瓦（2）

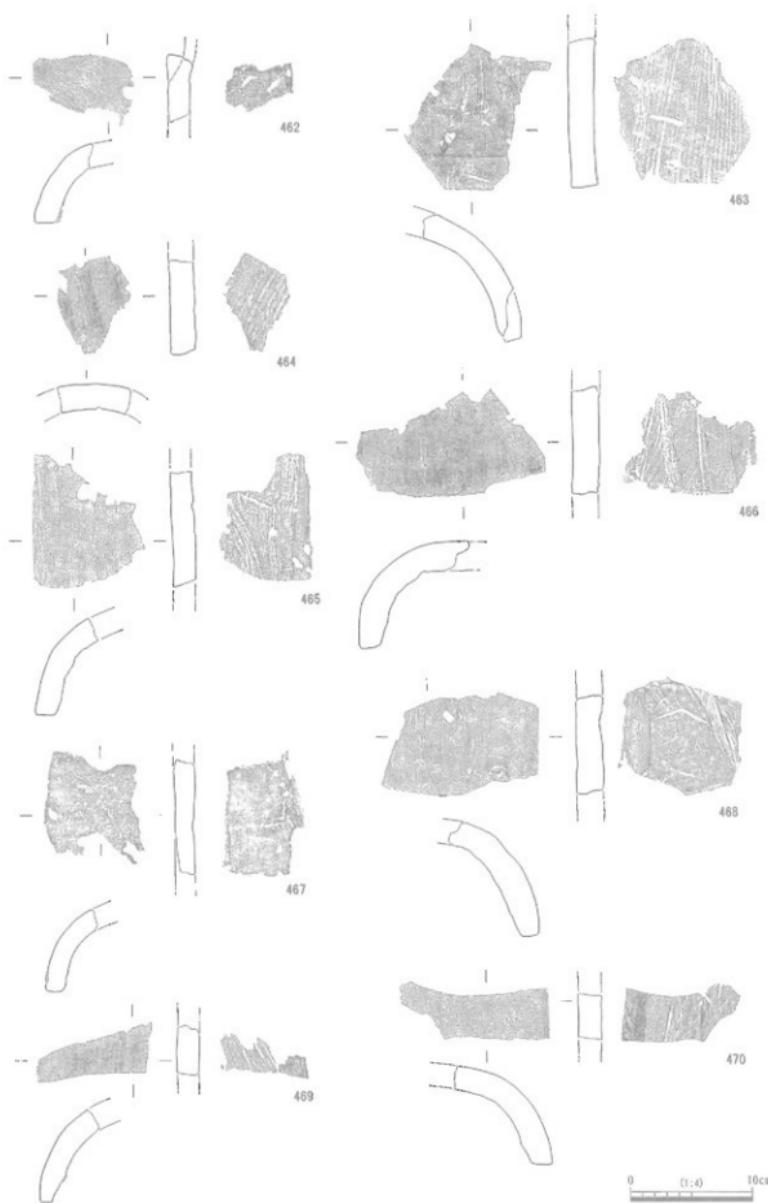


図 74 大溝 I 層出土丸瓦 (3)

高さから出土しており、基本的にはI層出土の遺物として捉えてよいと推測される。

462は有段式（玉縁式）の段部である。焼成は軟質で、灰白色の色調を呈している。凹面には粗い布目が残る。I層出土の丸瓦で、有段式として認識できる資料はこの1点のみである。463と464は、広端部の破片である。凸面にはナデ調整が施され、凹面は布目と粘土板の糸切り痕が残る。広端面には離れ砂の付着が認められる。465～470は、側端部の破片である。凸面にはナデ調整が施され、凹面は布目と吊り紐痕が残る。466の吊り紐痕の比率は、1:1となっている。

471～477は平瓦である。このうち、472と477は、「大溝内擾乱」として取り上げられている4区出土の遺物である。471と472は、縱長斜格子の叩き目が残るものである。凹凸両面に離れ砂が付着する。473～477は、縱長斜格子+横線の叩き目が残るものである。離れ砂が凹凸両面に付着しており、477には二次的な被熱の痕跡が顕著にみられる。476は横長斜格子の叩き目が残るもので、凹凸両面に離れ砂が付着している。

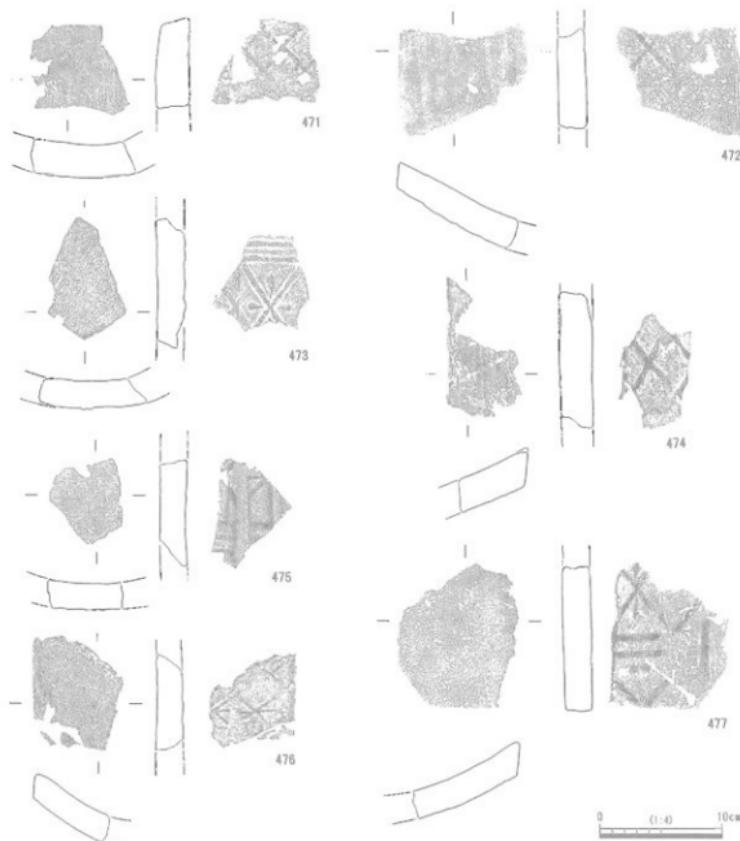


図75 大溝I層出土平瓦

このように、Ⅰ層として取り上げられている遺物には、後世の溝の遺物が混在しているため、大溝の埋没した年代がやや不明瞭な状況になってしまっている。これに関しては、後述するSE4001の年代が参考になる。SE4001は、大溝が埋没した後に構築された井戸であり、その廃絶年代は16世紀後葉と推測される。SE4001の使用期間については明確でないが、少なくともⅠ層の年代がこれを下ることはないとみて間違いない。このような観点で、今一度Ⅰ層出土の遺物を概観すると、内耳鍋においてくの字形のタイプが圧倒的に多く、中でも外面をハケ目調整する比較的古式のものが多数を占めていることが見て取れる。大溝は、16世紀までにはば埋没していたものと推測される。

大溝に比べて、土壙の構築土から出土した遺物は少ない。図化できたのは、わずかに5点(478～482)である。478と479は須恵器、480と481は土師器である。482は山茶碗の小碗で、Ⅰ～Ⅱ期のものである。図化したものに他にも、小破片が十数点出土しているが、いずれも須恵器や土師器といった古代の遺物である。また、土壙構築土の直下の旧表土中からも、いくつか遺物が出土しているが、これも須恵器(484～489)や土師器(490～496)といった、古代の遺物に限られている。土壙の建造時期については、遺物が乏しいため不明瞭ではあるが、482の出土から12世紀後半以降であることは確実といえる。

以上のような調査結果から、大溝(SE2001)と土壙(SA2001)については、次のようにまとめられる。

まず、大溝については、各土層の年代が、最下層にあるⅢ層は13世紀の後半頃までに、Ⅱ層は13世紀末から14世紀代、最上層のⅠ層はほぼ15世紀代に位置付けられる。溝が開削された時期については、多少不明瞭な部分はあるが、遺物の出土が確認される12世紀の後半～末頃と推測される。

溝は東西160mにもおよぶ大規模なものであるにもかかわらず、蛇行したり角度を違えることなく一直線に掘られている。さらに、排水溝の取り付く南東隅に向かって全体をわずかに傾斜させ、底部には水流による開析を防ぐための土堤状の施設も設けられている。これらの点は、設計から施工まで体系的な管理の下、比較的短期間に集中して工事が行われたことを示している。

東南隅では、壁面の大規模な崩落が確認されている。崩落土はⅢ層を擁護するような状態で、上面にはⅡ層が堆積していることから、Ⅱ層が堆積し始める前後に崩落したものと推測される。年代としては、13世紀末頃であろうか。崩落土は排水溝の入り口部分を塞いでいるが、明確な掘り直しなどは行われず放置されているような状況である。内部の施設が、廃絶または著しく衰退していたものと推測される。

土壙は、大部分が削平されており、良好に残存する場所でも、基底部が約30cmの高さ残る程度であった。内側の堀が削平されているため正確な規模については不明であるが、残存する規模から幅は5m以上あったものと推測される。版築状の構造は認められず、縮まりもさほど強固ではないため、溝の掘削土を突き固めた程度のものとみられる。幅広であることを考慮すると、溝の深さと同程度ないしはそれ以下の高さであったと推測される。なお、構築土中からは、12世紀後半の遺物が出土している。

今回調査を実施した範囲は、溝と土壙の部分を除くと、施設内のわずか5%程度に過ぎない。そのため、内部の施設についてはほぼ未解明の状態といえる。ただし、出土遺物などから一部推定することは可能である。大溝のほぼ全域からは、比較的まとまった量の瓦が出土しており、施設内には瓦葺きの建物が存在していたとみてよい。瓦は、大溝のⅢ層では1点も出土していないが、Ⅱ層の最下層からの出土が確認できる。瓦葺き建物の廃絶時期は、Ⅱ層の比較的早い段階の13世紀末頃である可能性が高い。また、被熱の痕跡が明確に残る瓦も出土しており、火災によって焼失していることがわかる。

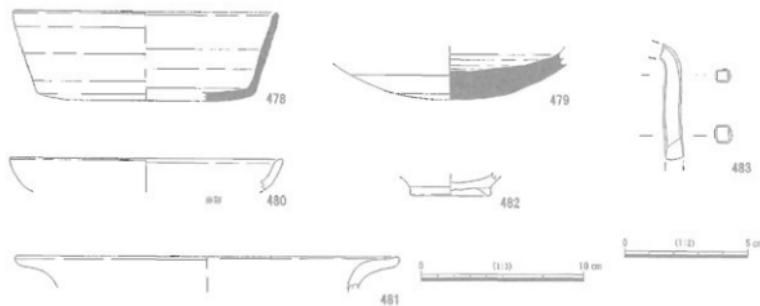


図 76 土器構築土出土遺物

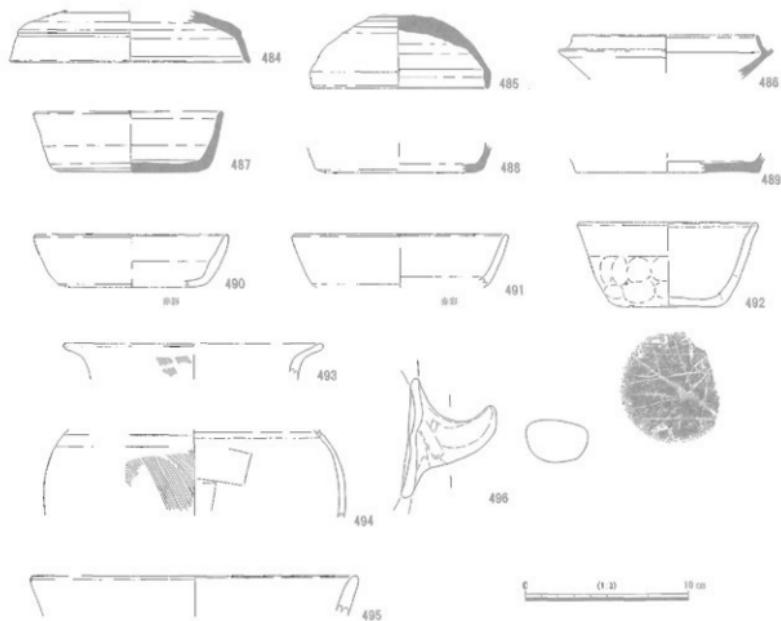


図 77 旧表土（土器構築前）出土遺物

表4 大溝・土壙出土 土器・陶磁器観察表（1）

番号	遺物名	種別	形状	寸法	測量・部数	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	底面形	特徴	寸法	測量・部数	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	底面形	特徴	寸法	
1	SD20001	土壙	直筒	縦長	口幅	15.0	4.4	6.0	口幅～底径 1/4	内腹・直筒	底白								
2	SD20001	土壙	直筒	縦長	口幅	14.9	4.4	6.0	口幅～底径 1/6	内腹・直筒	底白								
3	SD20001	土壙	直筒	縦長	口幅	14.9	5.1	7.1	口幅～底径 1/6	直筒	底白								
4	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.0	3.3	7.3	口幅～底径 2/3	直筒	底白								
5	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.0	5.4	7.2	口幅～底径 1/6	直筒	底白								
6	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.2	5.4	7.5	底部のみ	直筒	底白								
7	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.2	6.0	7.6	底部 1/2	外腹・直筒	底白								
8	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.0	5.3	5.5	口幅～底径 1/3	内腹・直筒	底白								
9	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.6	5.7	6.2	口幅～底径 1/6	直筒	底白								
10	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.7	5.7	6.7	口幅～底径 3/4	直筒	底白								
11	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.4	6.1	7.2	口幅～底径 1/4	直筒	底白								
12	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.9	6.1	6.5	口幅～底径 1/6	直筒	底白								
13	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.9	5.9	7.3	口幅～底径 1/4	内腹・直筒	底白								
14	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.2	6.1	7.0	底部 1/2	外腹・直筒	底白								
15	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.6	5.6	7.5	口幅～底径 1/2	直筒	底白								
16	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.7	6.0	7.0	口幅～底径 1/2	直筒	底白								
17	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.4	6.4	7.0	口幅～底径 1/4	直筒	底白								
18	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.9	5.5	7.7	口幅～底径 1/4	直筒	底白								
19	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.9	5.8	7.2	口幅～底径 1/4	直筒	底白								
20	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.2	6.2	5.7	口幅～底径 1/2	内腹・直筒	底白								
21	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.5	5.4	(6.4)	口幅～底径 1/4	内腹・直筒	底白								
22	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.1		7.2	伴手～底部	直筒	底白								
23	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.1	5.7	6.4	口幅～底径	直筒	底白								
24	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.0	5.0	7.0	口幅～底径	直筒	底白								
25	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.4	5.5	7.2	口幅～底径	直筒	底白								
26	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.0	5.1	7.0	口幅～底径 2/3	自然端	底白								
27	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.3	4.7	6.9	口幅～底径	自然端	底白								
28	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.0	4.7	6.5	口幅～底径 1/4	底白									
29	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.5	5.3	6.4	口幅～底径 1/2	底白									
30	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.2	5.2	6.2	口幅～底径 4/5	底白									
31	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.4	4.8	6.2	口幅～底径 3/4	底白									
32	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	16.0	5.7	7.9	口幅～底部	底白									
33	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.5	5.4	6.3	口幅～底径 1/2	底白									
34	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.5	5.7	7.4	口幅～底径 1/2	底白									
35	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.7	5.2	6.6	口幅～底径 1/2	底白									
36	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.7	5.3	5.9	耳穿孔形	内腹・直筒	底白								
37	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	14.2	4.8	5.3	耳穿孔形	内腹・直筒	底白								
38	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.1	4.9	7.0	耳穿孔形	直筒	底白								
39	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.4	5.6	5.8	口幅～底径 1/2	底白									
40	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.0	5.5	6.6	口幅～底径 1/4	底白									
41	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.9	5.5	7.2	口幅～底径	底白									
42	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.3	5.5	6.7	耳穿	底白									
43	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.3	5.1	6.7	耳穿	底白									
44	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	14.0		6.3	口幅～底径 1/20	底部のみ	底白								
45	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.1		5.5	底部のみ	直筒	底白								
46	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.5	3.0	5.0	口幅～底径	直筒	底白								
47	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.5	4.0	3.0	口幅～底径	直筒	底白								
48	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.1	3.5	2.5	口幅～底径	直筒	底白								
49	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.1	3.1	2.3	口幅～底径	自然端	底白								
50	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.0	2.9	2.2	口幅～底径	自然端	底白								
51	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.2	7.0	1.5	口幅～底径 1/3	底白									
52	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.1		6.6	底部のみ	直筒	底白								
53	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.0		5.5	底部のみ	直筒	底白								
54	SD20001	土壙	山吹形	短	口幅	15.0		3.0	口幅～底部	直筒	底白								
55	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
56	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
57	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
58	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
59	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
60	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
61	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
62	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
63	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
64	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
65	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
66	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
67	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
68	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
69	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
70	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
71	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
72	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
73	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
74	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
75	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
76	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
77	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
78	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
79	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
80	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
81	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
82	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
83	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
84	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
85	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
86	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
87	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
88	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
89	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底部	直筒	底白								
90	SD20001	土壙	直筒	小鉢	口幅	15.0	3.5	2.0	口幅～底										

表5 大溝・土壘出土 土器・陶磁器觀察表 (2)

No.	通稱名	種類	形態	分類・様式	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	重さ (kg)	保存状況	剖面	色調	参考文献
06	S02001	土器	土器質土器	伊勢鍋	(22.4)				口部鋸1/2 天井鋸3/4	口部鋸1/2	灰	内面に錫付銀
07	S02001	土器	土器質				3.0		天井鋸3/4	天井鋸3/4	灰白	
08	S02001	土器	土器質				5.6		天井鋸のみ	天井鋸のみ	灰白	
09	S02001	土器	土器質				118.0		口部～底盤1/10	口部～底盤1/10	灰白	
10	S02001	土器	土器質	舟身			5.2		底盤鋸のみ	底盤鋸のみ	灰	
91	S02001	土器	土器質	底			(7.0)		底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰	へき写真
92	S02001	土器	土器質	底			(8.9)		底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰	
93	S02001	土器	土器質	高弓					基部4.1 口部鋸～一部 魚眼輪	基部4.1 口部鋸～一部 魚眼輪	灰白	
94	S02001	土器	土器質	高弓					基部4.0 口部鋸～(底部)	基部4.0 口部鋸～(底部)	灰	
95	S02001	土器	土器質	底			3.0		底盤鋸～底盤	底盤鋸～底盤	灰白	
96	S02001	土器	土器質	底	(21.2)				口部～底盤1/4	口部～底盤1/4	灰白	
97	S02001	土器	土器質	底	(21.2)				口部～底盤1/4	口部～底盤1/4	灰白	頭部にヘア記号
98	S02001	土器	土器質	底	(22.6)				口部鋸1/10 外面・色斑端	口部鋸1/10 外面・色斑端	灰白	神戸大
09	S02001	土器	土器質	底	(3.2)		1.9	2.4	口部～底盤1/2	口部～底盤1/2	灰白	
100	S02001	土器	土器質	底	(26.9)				基部3.0 底盤のみ	基部3.0 底盤のみ	灰白	
101	S02001	土器	土器質	底	(26.9)				口部鋸1/20	口部鋸1/20	灰白	にいわ貴賀
102	S02001	土器	土器質	小盤	(17.0)				口部～底盤1/3	口部～底盤1/3	灰白	
103	S02001	土器	土器質	底					把手の小	把手の小	明治開港	
104	S02001	土器	石財晶	砾石								
105	S02001	土器	土器質	底	混合5.6	底5.6	厚さ1.9					
106	S02001	土器	土器質	底	(22.2)				基部4.0 底盤1/2	底		
107	S02001	土器	土器質	底	(16.9)				口部鋸1/10 内面・自然端	口部鋸1/10 内面・自然端	灰白	
108	S02001	土器	土器質	底	(15.3)				口部～底盤1/8 道け目	口部～底盤1/8 道け目	灰白	
109	S02001	土器	土器質	底	(17.0)				口部鋸1/14	口部鋸1/14	灰白	
110	S02001	土器	土器質土器	丸	ロクロ	(15.5)	6.6	4.0	口部～底盤1/2	口部～底盤1/2	灰白	
111	S02001	土器	土器質土器	丸	ロクロ		6.9		底盤5.6	底盤5.6	灰白	
112	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				口部鋸1/26	口部鋸1/26	灰白	
113	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/10 内面・自然端	底盤鋸1/10 内面・自然端	灰白	
114	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				口部～底盤1/2 内面・自然端	口部～底盤1/2 内面・自然端	灰白	
115	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				口部～底盤1/8 道け目	口部～底盤1/8 道け目	灰白	
116	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸のみ	底盤鋸のみ	灰白	
117	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
118	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤5.6	底盤5.6	灰白	
119	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				口部鋸1/10	口部鋸1/10	灰白	
120	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				口部鋸1/4	口部鋸1/4	灰白	
121	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤1/2	底盤1/2	灰白	
122	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸5.6	底盤鋸5.6	灰白	
123	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				口部鋸1/26	口部鋸1/26	灰白	
124	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
125	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/5	底盤鋸1/5	灰白	
126	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸のみ	底盤鋸のみ	灰白	
127	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
128	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
129	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
130	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/10	底盤鋸1/10	灰白	
131	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸のみ	底盤鋸のみ	灰白	
132	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/5	底盤鋸1/5	灰白	
133	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
134	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
135	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
136	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
137	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
138	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
139	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
140	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
141	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
142	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/12	底盤鋸1/12	灰白	
143	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
144	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
145	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/4	底盤鋸1/4	灰白	
146	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/3	底盤鋸1/3	灰白	
147	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/3	底盤鋸1/3	灰白	
148	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/12	底盤鋸1/12	灰白	
149	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
150	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
151	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	内面にスカ付銀
152	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	底盤(「口」)
153	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	底盤(「万」)
154	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	底盤(「月」)
155	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	内面にスカ付銀
156	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
157	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
158	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
159	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
160	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
161	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
162	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/6	底盤鋸1/6	灰白	
163	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	
164	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	
165	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	底盤(「上」)
166	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	底盤(「高」)
167	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸2/3	底盤鋸2/3	灰白	底盤(「高」)
168	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	底盤(「月」)
169	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸1/2	底盤鋸1/2	灰白	底盤(「刀」)
170	S02001	土器	土器質	底	混合4.0				底盤鋸のみ	底盤鋸のみ	灰白	内面にスカ付銀

表6 大溝・土器出土 土器・陶磁器觀察表（3）

表7 大溝・土壙出土 土器・陶磁器觀察表 (4)

表8 大溝・土壙出土 土器・陶磁器觀察表（5）

3. 溝

SD1001（図78～91、図版27・52・62・63・79・80）

1区から6区にかけて位置する大規模な溝である。SD1001は、開削当初の溝（SD1001a）の埋没後に、新たな溝（SD1001b）が掘り直されており、時期の異なる2条の溝が重複して存在している。

溝はL字形の形態を呈しており、1区の西端から東へ約120mの地点において、南に向かって直角に



図78 SD1001 実測図（1）

近いかたちで屈曲している。全体的には南または東に向かって傾斜しており、溝の底面は凹凸が激しく、細い溝状に深く抉れた部分が多数確認されている。また、埋土には全体的に砂が多く含まれており、砂層の堆積も認められる。これらの点は、恒常的に水流があったことを示しており、SD1001は水路として開削された溝である可能性が高い。なお、西側については、調査区外のため明らかになっていないが、位置関係から河川 SR1001 と接続しているものとみてよい。溝の西端がやや北側へ向かって屈曲し、SR1001 と鋭角に接合していることからも、河川から水を引き込むことを意図して開削されたことを示していよう。

埋土は、大きく上・中・下の3層に分けられる。

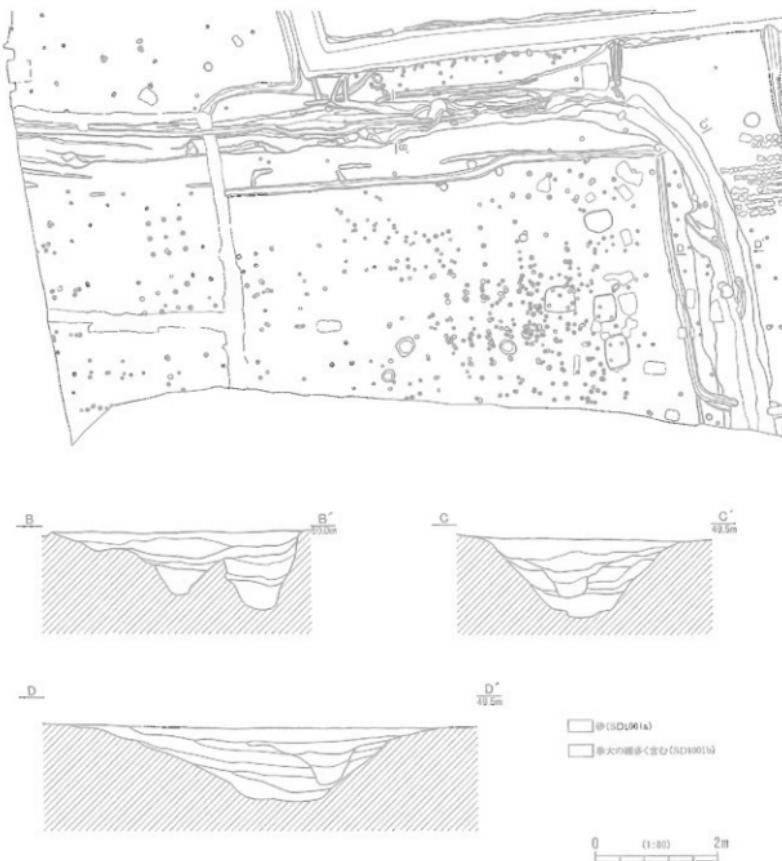


図 79 SD1001 実測図 (2)

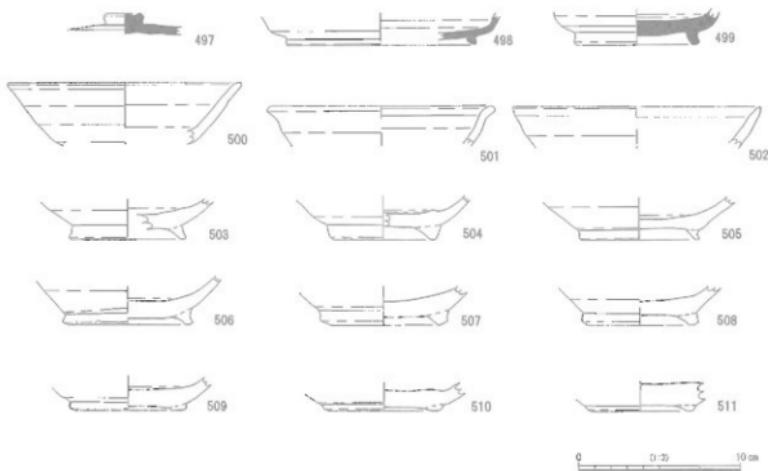


図80 SD1001下層出土遺物（1）

下層は、最下層の主に砂が堆積する層であり、場所によって差はあるが、概ね底面から30cm程度の厚さで堆積している。遺物としては、須恵器や山茶碗、陶器、磁器、内耳鍋などが出土している。

497～499は須恵器である。図化したものは3点であるが、壺などを中心に一定量の出土が認められる。500～511は山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品で、Ⅰ期からⅢ期までみられるが、他の遺構と同様に、Ⅲ期のものがその大半を占めている。すべて破片資料であり、完形または全形の分かれるような資料は出土していない。この須恵器と山茶碗は、明らかに周辺から混入した遺物である。

512は瀬戸美濃窯の天目茶碗で、古瀬戸後期のものである。513は貿易陶磁である。白磁の小皿で、陶器質の胎土にやや黄みがかった釉薬が施されており、高台はアーチ状に抉られている。明代のものである。514と515は渥美産の壺である。514には弧状の刻線、515には蓮弁文が施されている。516・517は常滑窯の製品である。516は壺または甕、517は15世紀代の片口鉢である。518と519は古瀬戸の擂鉢で、口縁部付近は部分的に欠損してはいるものの、大半の破片が残っている。いずれも後IV期新段階のものである。520は古志戸呂窯産の擂鉢である。軟質で土師質にちかい焼き上がりとなっており、518や519と同様に欠損部が少ない。521は土師質土器皿である。軟質で、比較的光景の大きい中型品である。下層において土師質土器皿は、小破片を含めてごくわずかしか出土していない。

522は伊勢型鍋である。523～531は、くの字形内耳鍋であり、外面にハケ目調整を施すものと、ナデ調整のものとのが確認できる。図化したもの以外にも、多量に出土している。532と533は、内彎形内耳鍋である。下層の出土遺物全体でも、内彎形内耳鍋であることが分かる破片は、この2点のみであり、くの字形内耳鍋との数量の差は歴然としている。534～539は羽付釜である。体部は屈曲部から斜め下方へ広がっており、なで肩の形状を呈しているものとみてよい。口縁部の形状は、丸く仕上げるものと、上方を強くなるものがみられる。羽付釜については、図示したもの以外にも一定量の出土が認められ

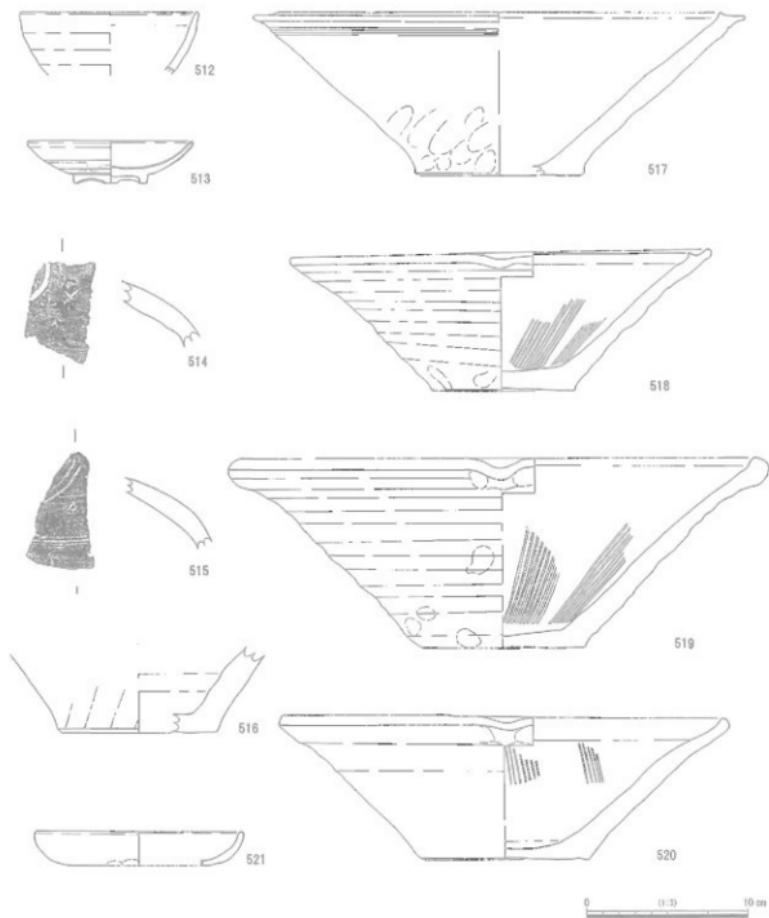


図 81 SD1001 下層出土遺物（2）

る。540は鉄滓であり、いわゆる椀形滓の形状を呈している。化学分析の結果、鍛錬鍛冶滓で、始発原料は砂鉄の可能性が高いと推定されている。

SD1001の下層は、周辺から流入した遺物が多く、水流による搅拌も受けているため、長期間の遺物が混在している状況にある。ただし、須恵器や山茶碗などの遺物を除くと、15世紀から16世紀にかけての遺物にほぼ限られている。中でも残存状況のよい捕鉢など、15世紀後半の遺物が比較的まとまって出土していることから、SD1001は15世紀に開削された溝であると推測される。

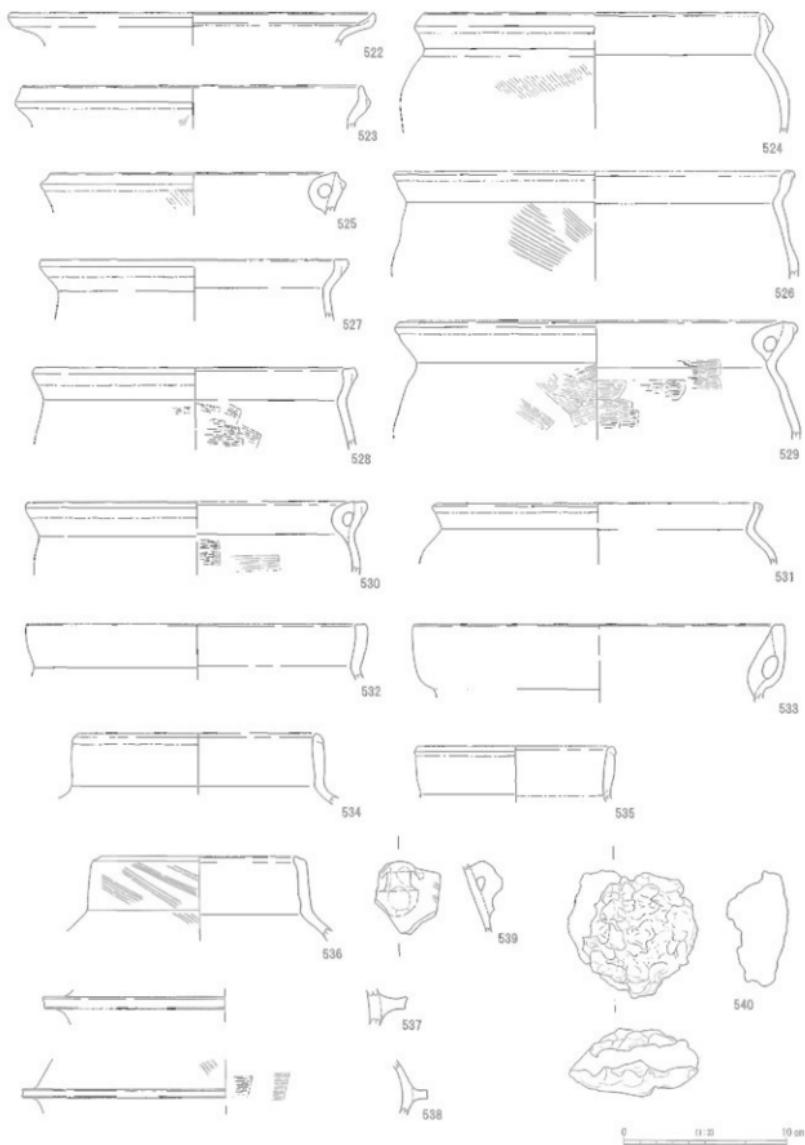


図82 SD1001下層出土遺物（3）

中層は、下層の上に40～50cm程の厚さで堆積している。主に暗褐色土が堆積する土層であり、この時期に水流が大きく減少していたことを示している。なお、中層には、埋没後に新しく掘削された溝(SD1001b)が一部到達しているが、調査時には中層出土遺物として取り上げられており、SD1001bに伴う遺物が一部混在してしまっている状況にある。

541～552は須恵器である。須恵器に関しては、下層と同様に、図示した以外にも甕類を中心に多数出土している。553と554は灰釉陶器、555は土師器の甕である。

556～570は山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品で、558はⅡ期のものであるが、他はすべてⅢ期のものである。圓化したもの以外にも多量に出土しているが、すべて破片資料であり、完形品の出土は確認できない。古代の遺物や山茶碗については、周辺からの混入した遺物とみてよい。571は瀬戸美濃産の擂鉢である。下層で出土している擂鉢と同じ、古瀬戸の後Ⅳ期新段階のものである。572は瀬戸窯産の秉燭である。他の遺物とは年代が大きく異なる19世紀のものであることから、中層に掘り込まれた新しい溝(SD1001b)に伴う遺物とみて間違いない。573と574はロクロ成形の土師質土器皿である。橙褐色の色調を呈する軟質のものである。575～577は非ロクロ成形の土師質土器皿である。

578～587はくの字形内耳鍋で、下層と同様に圓化したもの以外にも多量出土している。体部外間にハケ目調整を施すものと、ナデ調整を施すものの両者がみられる。内耳鍋としては内彎形のものも出土しているが、明確に判別できるものとしては、588と589の2点のみである。この点も、下層における状況と共通したあり方を示しているといえる。

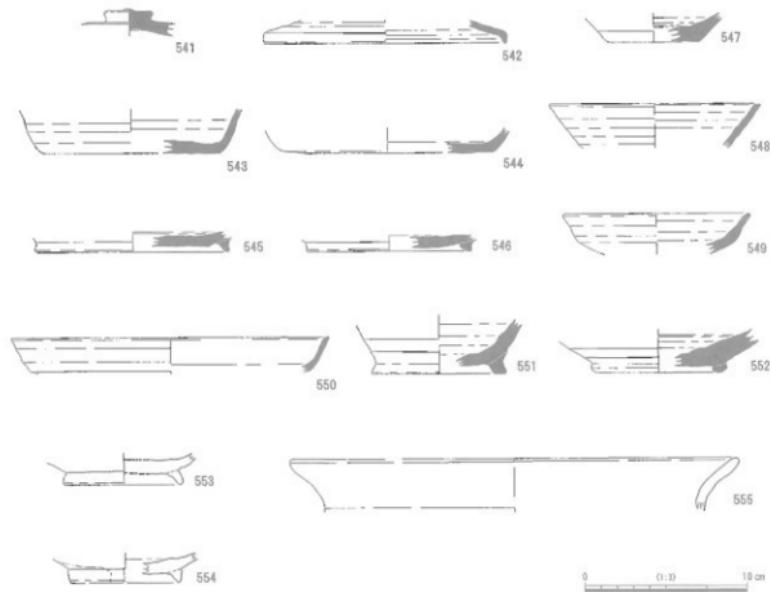


図83 SD1001 中層出土遺物（1）

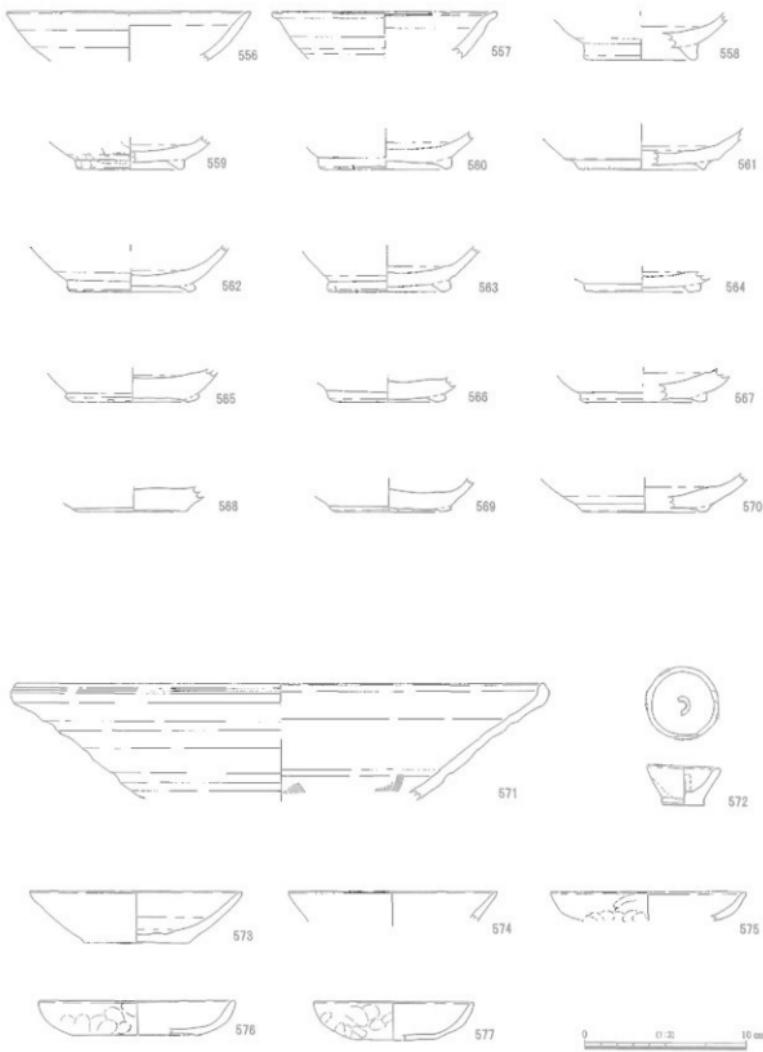


図 84 SD1001 中層出土遺物 (2)

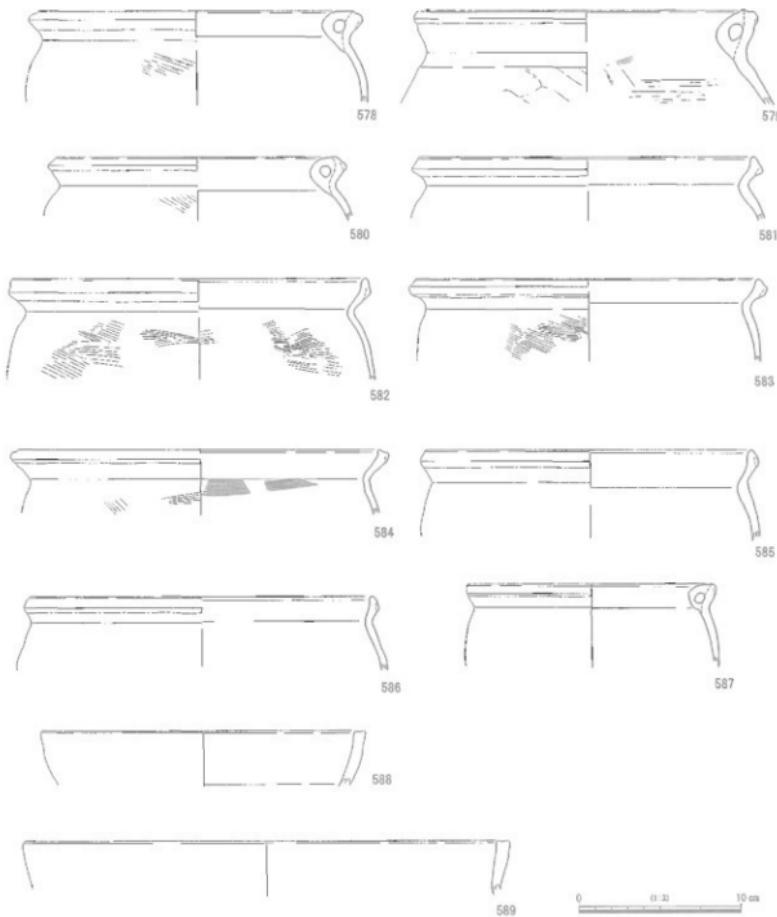


図 85 SD1001 中層出土遺物（3）

590～601は羽付釜であり、いずれも体部はなで肩で、球形に近い形態を呈するものである。口縁部の形状は、丸く仕上げるものと、上方に強いナデ調整が施されるものとがみられる。体部外面の上半には、ハケ目調整が明瞭に残る。羽付釜に関しても、下層と同様に多数の出土が確認される。いずれも、16世紀前半までの時期のものである。

このように、中層における遺物の構成や年代は、下層とほとんど差がない状況にあり、水流が減少し、

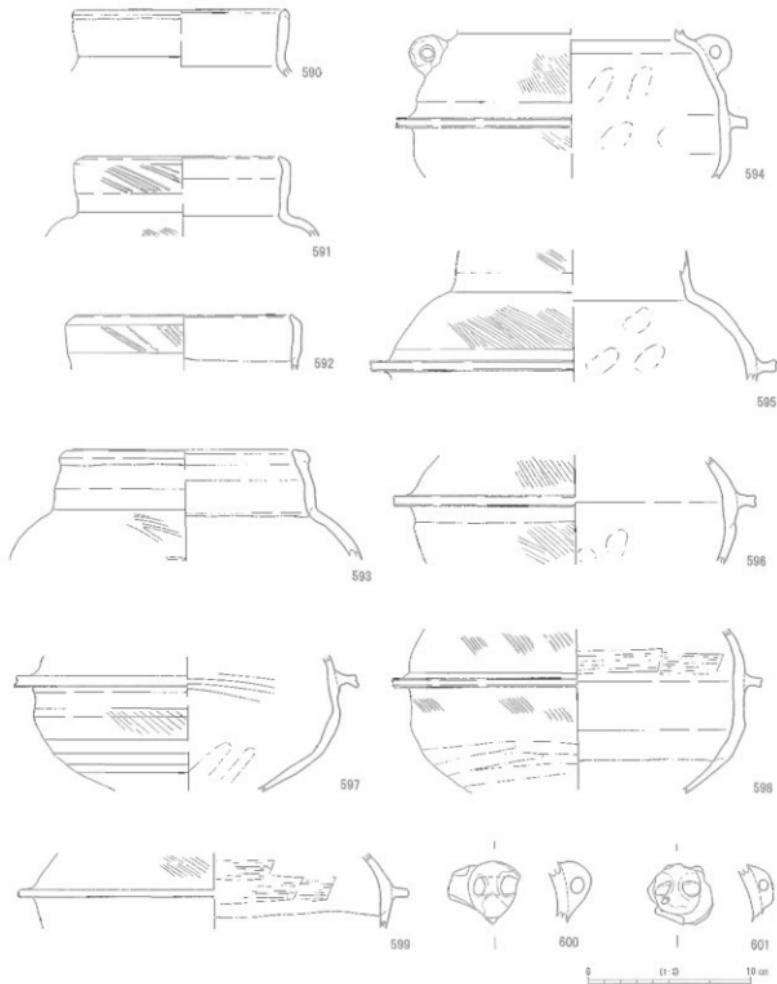


図 86 SD1001 中層出土遺物 (4)

水路としての機能が失われた後に、比較的短期間で埋没したことが伺える。内彎形内耳鍋の出土が少ないことなどからみて、SD1001aについて、16世紀中頃にはその大半が埋没し、浅い窪み状になっていたものと推測される。

上層は、暗褐色土を主体とする、検出面（地山面）から40～50cm程の深さまでの堆積土である。南北溝ではSD1001aの最上層も一部含んではいるが、大半は重複する位置に新たに掘られた溝SD1001bの埋土である。SD1001bの断面形状は、SD1001aの端から緩やかに下がった後、逆台形にさらに一段深くなる形状を呈している。一段深くなっている部分に限ると、SD1001bは幅約80cm・深さ40～50cm程の規模にとなっている。最下層には、小砾を多く含んだ土の堆積が確認されている。

602～612は須恵器である。土器以外の遺物としては、円面鏡（610）が出土している。被熱の痕跡が明瞭で、部分的に赤褐色に変色している。今回の調査によって中屋遺跡から出土した円面鏡は、この1点のみである。613と614は灰釉陶器である。613の体部外面には、漆とみられる茶褐色の塗料の付着が認められる。

615～635は山茶碗である。知多産とみられる635を除き、他はすべて渥美湖西産の製品である。Ⅱ期のものもみられるが、やはりⅢ期のものが大多数を占めている。636～640は、山茶碗の小碗および小皿である。いずれも渥美湖西産の製品である。641は知多産の片口鉢である。642は貿易陶磁の青磁碗である。見込みには、片切り彫りによる文様が認められる。

643は古瀬戸の平碗で、後Ⅳ期古段階のものである。644～646・649・651は、瀬戸美濃産の製品である。644は小中、645と656は広東茶碗、649は秉燭、651は半胴である。これらは、いずれも18世紀後半から19世紀のものである。647は肥前産の磁器である。磁器染付の小碗で、口縁部には雨降文が施されている。18世紀前半のものである。648は初山窯産の内禿皿である。653は壺形の瓦質製品で

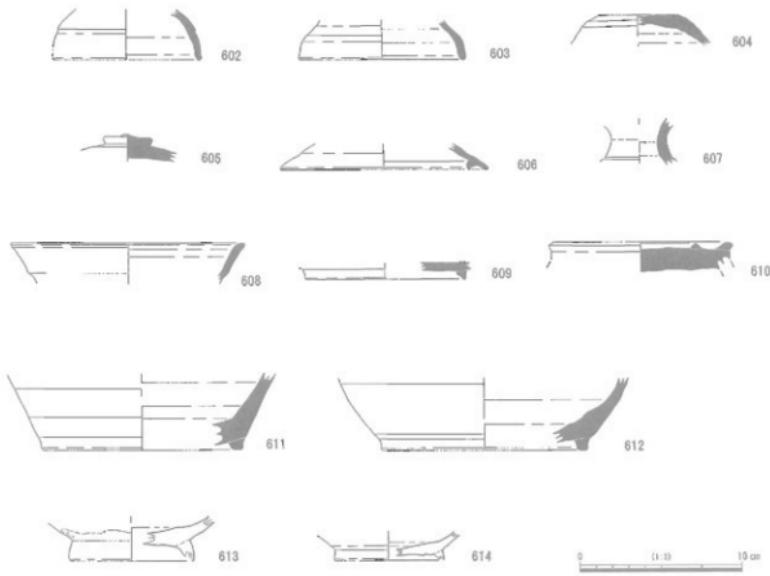


図87 SD1001 上層出土遺物（1）

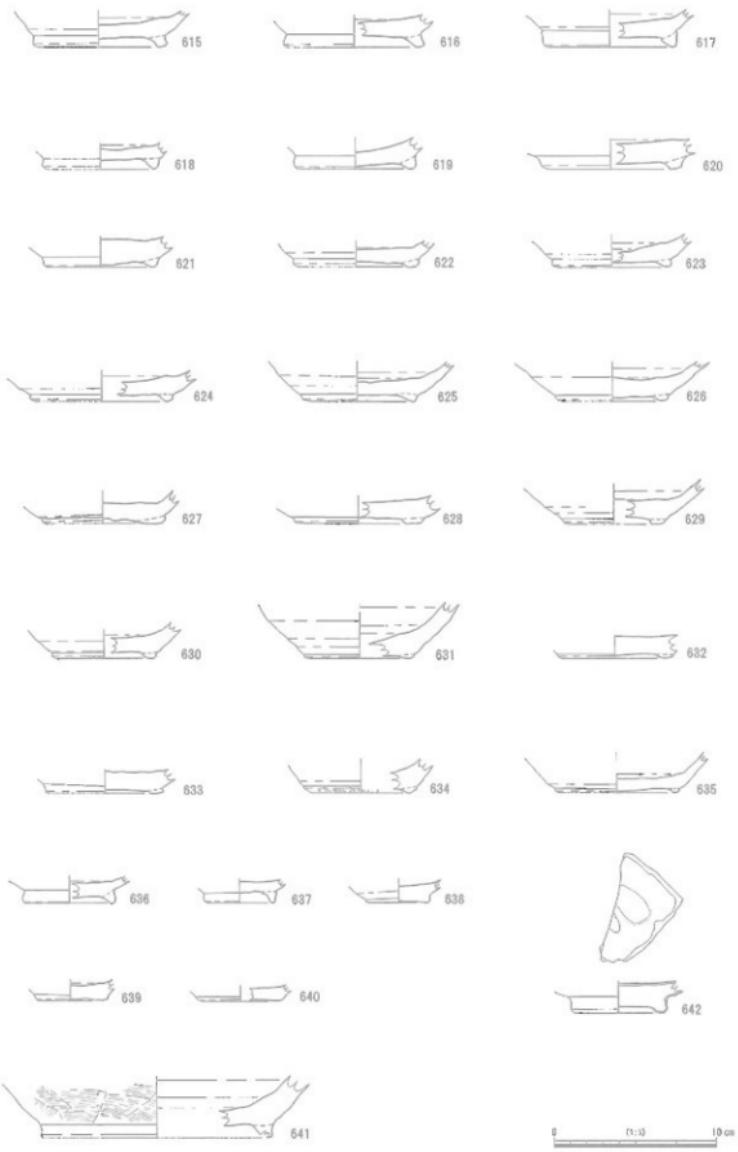


図88 SD1001 上層出土遺物（2）

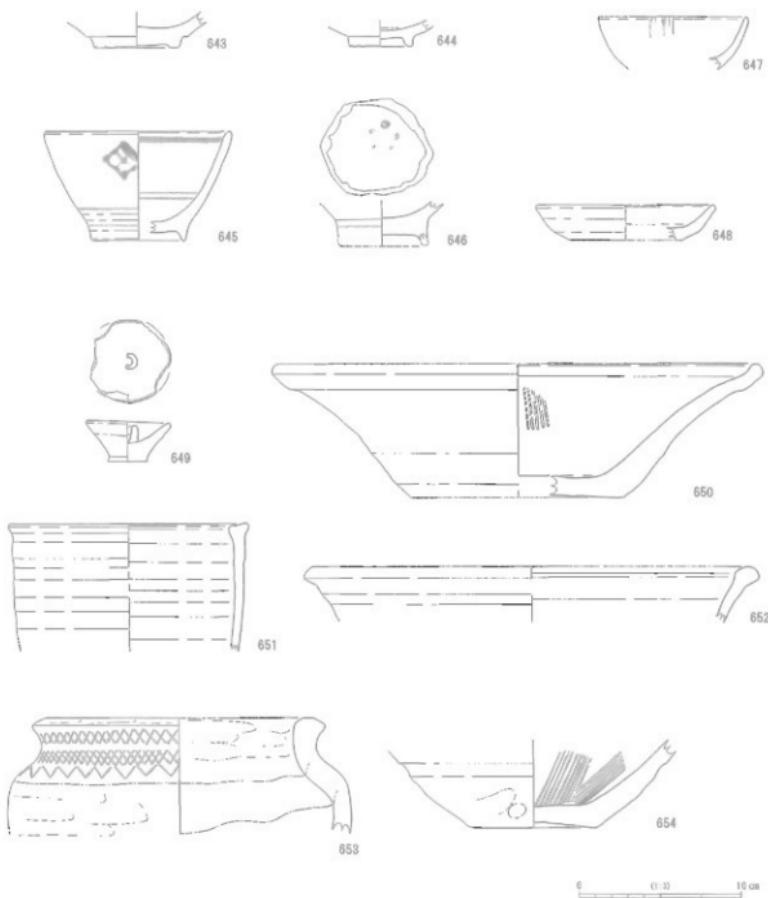


図 89 SD1001 上層出土遺物（3）

ある。口縁部には格子文と鋸歯文が線刻されており、赤彩も確認できる。650は古志戸呂窯産の擂鉢である。非常に軟質のものとなっている。652は瀬戸窯産の擂鉢で、19世紀後半のものである。654は、古瀬戸後IV期新段階の擂鉢である。

655～660は、非ロクロ成形の土師質土器皿である。下・中層に比べて、出土数が多い。655と660は比較的硬質であるが、他はいずれも軟質のものである。661はロクロ成形の土師質土器皿である。662～668は内耳鍋である。下・中層と比べると、上層では内輪形内耳鍋が多く出土している。669～672は羽付釜である。

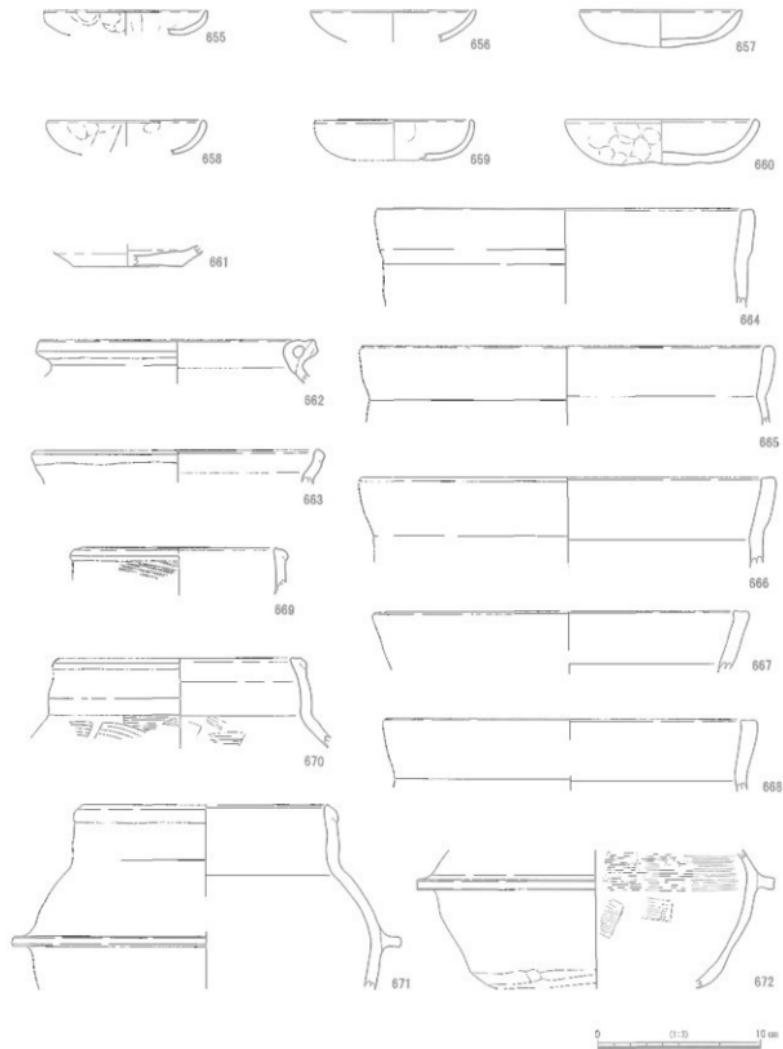


図 90 SD1001 上層出土遺物 (4)

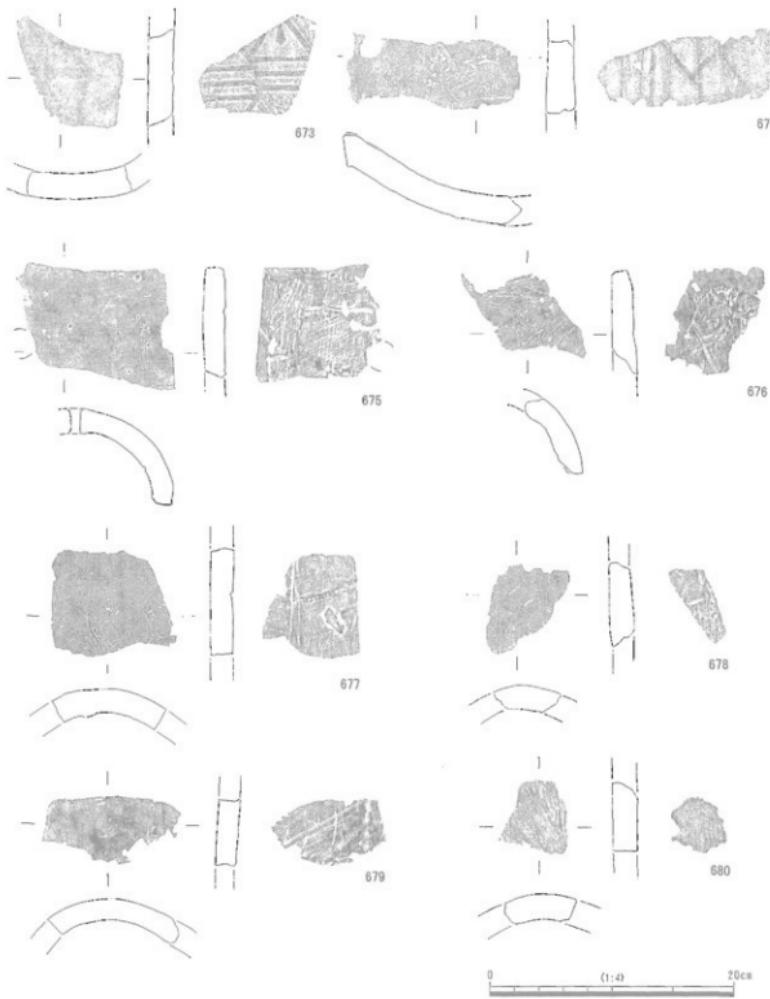


図91 SD1001出土瓦

このように、上層出土遺物の下限年代は19世紀後半であり、当然これは、新たに掘られた溝SD1001bの下限年代を示している。近世のものに限ってみれば、18世紀後半以降の遺物が大半となっていることから、SD1001bは接続するSD6002やSD4001と同時期の、18世紀後半から19世紀にかけて機能していた溝であると推測される。

また、SD1001からは、土器や陶磁器以外に、瓦も出土している。これらの瓦は、大溝SD2001などで出土しているものと同じ特徴を有しており、中世の瓦とみて間違いない。

673と674は平瓦である。673は、凸面に縱長斜格子+横線の叩き目がみられ、凹凸面両面に離れ砂が付着している。凹面には叩き目の転写が明瞭に認められる。674の凸面の叩き目は、ナデ調整が施されているため不明瞭であるが、縱長斜格子がわずかに確認できる。凹凸両面に離れ砂が付着している。2点ともに上層から出土している。675～680は丸瓦である。675と676は狹端部の破片である。675は中層から、676は下層から出土しているが、676については出土位置からSD1001bに伴う可能性が高いと推定される。いずれも、凸面にはナデ調整が施され、凹面には布目と吊り紐痕がみられる。63には、狹端から7cmの場所に釘穴が穿たれている。677～680は端部の残らない破片であり、679は上層から、677・678・680は下層から出土している。678と680には、表面に煤の付着が認められる。

なお、団化したもの以外の遺物としては、最上層から棟瓦も出土している。この地域の村落における棟瓦の普及時期については、棟瓦自体が遺物として扱われることが稀なこともあり、いまだ不明な点が多い。中屋遺跡においては、遺構としては認識できないが、少なくとも19世紀後半頃までは、棟瓦葺きの建物が存在していたことがわかる。

以上のように、SD1001は、時期の異なる二つの溝（SD1001a・SD1001b）が重複している。SD1001aは、西側の河川SR1001から水を取り込んだ、水路とみられる大規模な溝であり、主に15～16世紀に機能している。SD1001bは、SD1001aの埋没後、おそらくは浅い窪みとなっていた場所に、新たに掘られた区画溝である。周囲の他の区画溝と同様に、18世紀後半から19世紀にかけて機能していたものとみられる。

SD1008（図78・92・93、図版29）

1区に位置する溝で、東西溝と南北溝がT字形に連結している。場所によってやや異なるが、幅は平均80cm・深さは約50cmの規模である。土層断面（図78）から、SD1001の埋没後に掘られていることが分かる。東・西・南側は調査区外へと続いているが、5・6区では検出されていない。ただし東側の6区では宅地の擁壁による攪乱が延長線上に位置しており、ほぼ同じ位置に溝が続いていた可能性が高いと推測される。

遺物は比較的豊富に出土している。681～683・686は瀬戸美濃製品である。681と682は17世紀後半の丸碗、683は18世紀後半の尾呂茶碗、686は19世紀前半の筒形湯呑である。684と685は、肥前窯産の磁器染付の皿である。684には、見込みにコンニャク判の五弁花、外裏に崩れた渦福文がみられる。ともに18世紀後半のものである。687は19世紀の瀬戸窯産の火鉢である。688は瓦質の火鉢である。浅い筒形のもので、体部にある2本の沈線の間に菊花文がスタンプされている。689は19世紀の瀬戸窯産の擂鉢である。690も擂鉢で、17世紀の志戸呂窯産の製品である。

出土した遺物の年代は、周辺から流入した遺物も含まれているためやや幅がみられるが、SD1001の埋没後に堆積した土層を掘り込んでいることや、18世紀後半から19世紀の遺物が大半を占めていることから、SD1008は主に18世紀後半から19世紀に機能していた溝であると推測される。

SD1010・1011 (図 78・92・93)

SD1008 に隣接する溝である。SD1010 と 1011 は SD1008 に、そして SD1011 は SD1010 に切られていることが確認されている。SD1010 は 1 区を東西に横断して、西側で SD1008 に接している。SD1008 の東端とはほぼ一直線上になることから、SD1010 を一部やや北側にずらして掘り直した溝が、SD1008 であると推測される。SD1011 は、深い部分でも 10 cm 程度と浅いため、部分的に確認されている程度である。1 区では東西約 9 m の長さで確認されており、未調査部分を挟んだ 6 区でも 1 m 程ではあるが、続きとみられる部分が検出されている。

遺物については、SD1010 からわずかに出土している程度である。691 は土師質土器皿で、比較的硬質のものである。圓化できたのはこの 1 点のみであるが、他に古瀬戸後期とみられる盤類や内耳鍋の破片が出土している。

SD1010 は、SD1001 の埋没後に設けられていることから、16 世紀の後半以降のものであることは確実である。ただし、西側の溝の位置を踏襲する形で SD1008 が掘られていることを考慮すると、さほど年代が離れているとは考えにくい。遺物が乏しいため、厳密な年代については明確にし得ないが、SD1008 が掘られる直前の 18 世紀前半頃までは機能していた可能性が高い。掘られた年代も、これに近い時期であると推測される。SD1011 は、土層断面(図 78)をみると SD1010 とは掘り込み面が 1 層異なっており、年代がやや離れていることがわかる。遺物が出土していないため正確な年代については不明であるが、16 世紀から 17 世紀頃のものであろうか。

SD1013 (図 92・93)

SD1010 と重複する形で検出されている溝状遺構である。深さは 10 cm 程度と浅く、SD1010 に切られている。L 字形に近い形で屈曲しており、東西と南北方向に約 2 m の長さで検出されている。

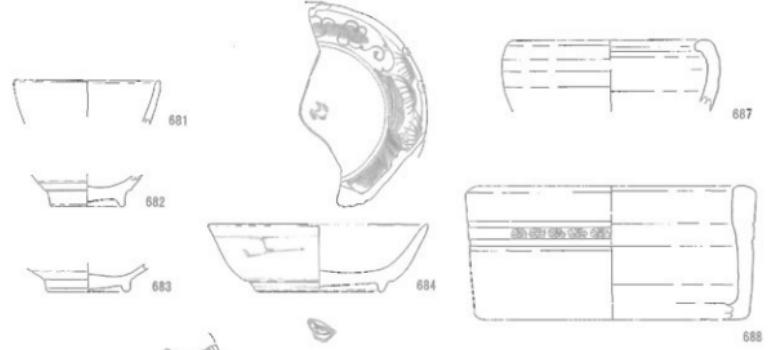
遺物としては、内耳鍋が出土している。692 と 693 はくの字形内耳鍋である。692 は、体部外面はナデ調整、内面はハケ目調整が施されており、非常に薄手のつくりとなっている。693 は表面の摩滅が著



図 92 SD1008・1010・1011・1013 対測図

しいが、体部外面にハケ目調整がみられる。図化したもの以外にも破片が出土しているが、口縁部の形状が判別できるものは、いずれもくの字形内耳鉢である。年代的にやや不明瞭な部分はあるが、概ね16世紀代の遺構とみてよいであろう。

SD1008



SD1013



SD1010



図93 SD1008・1010・1013出土遺物

SD1003 (図 94)

1 区の北西隅に位置する溝である。SD1003 は、幅 40 cm・深さ 10 cm の小規模な溝で、南北に約 3 m の長さで検出されており、北側は調査区外へと続いている。SD1003 から出土した遺物は、土師質土器皿 (694) の小片 1 点のみである。694 は復元径が 8.4 cm と小型で、薄手のつくりとなっている。

遺構の年代を特定することは困難であるが、土師質土器皿がいずれも比較的硬質のものであることなどから、中世後期から近世の溝であると推測される。

SD1004 (図 94)

SD1004 は、SD1003 の約 25 m 東側に位置する溝である。遺構の残存状況はよくなく一部切れてはいるが、L 字形に掘られた溝とみられる。長さは東西約 4.5 m・南北約 5 m で、深さ約 5 cm と底部がわずかに残存する程度である。

埋土からは、土師質土器皿や内耳鍋などが出土している。695 は土師質土器皿であり、中型でやや厚手のつくりのものである。この他に内耳鍋や土師質土器皿が数点出土しているが、いずれも固化できないう小片である。

出土遺物が乏しいため、遺構の年代を特定することは困難であるが、土師質土器皿がいずれも比較的硬質のものであることなどから、SD1003 と同様に SD1004 は中世後期から近世の溝であると推測される。

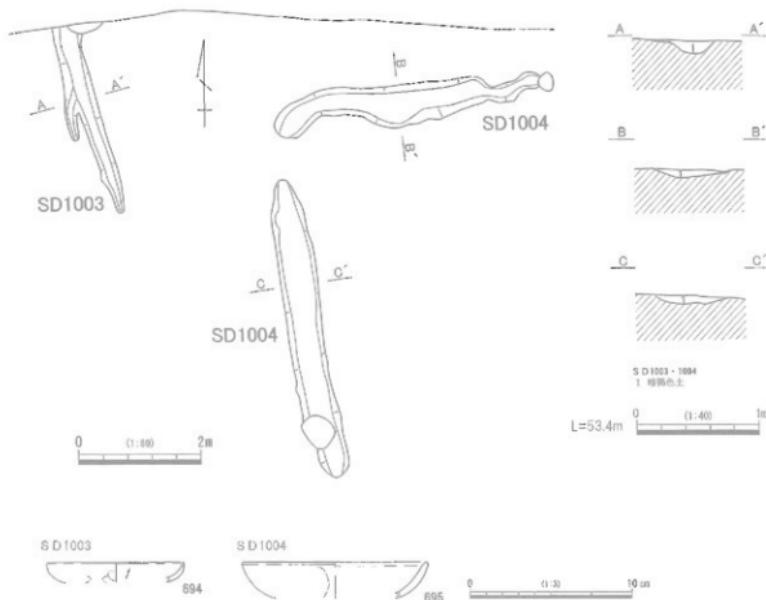


図 94 SD1003・1004 実測図、出土遺物

SD2003（図95・96、図版4・29）

SD2003は、大溝SD2001の7.2～8m内側に設けられている溝である。残存状態が場所によって異なるが、幅平均1.2m・深さ40cmの規模で、総延長にして86m検出されている。大溝SD2001に平行するかたちで掘られているが、北側では一部北東に向かって屈曲する部分が認められる。東側はSD2004によって失われているが、東端において北に屈曲する様子が確認されていることから、SD2004と重複する場所に溝が巡っていたものと推測される。

遺物としては、土師質土器皿や内耳鍋などが出土している。697～701は、非クロコ成形の土師質土器皿で、比較的硬質のものである。口縁部にヨコナデ調整はみられない。702～705は、内彎形内耳鍋である。他に、混入遺物ではあるが、古瀬戸の平碗（696）も1点出土している。これらの遺物から、SD2003は17世紀頃にはほぼ埋没していたものと推測される。

SD2003は、大溝SD2001に平行する点や溝が掘られた位置などから、当時残存していた土塁の裾に巡らされていた可能性が高く、この頃までは土塁がある程度の幅を持って残存していたものと推測される。

SD2004（図95・96、図版4・29）

大溝SD2001とSD2003の間に位置し、東西溝の両端が北へ向かって曲がるコの字形の溝である。西側南北溝については、南西隅から北へ直進するSD2004aの埋没後、西へ3m程の位置にSD2004bが新たに掘られている。東西溝および東側南北溝は、SD2004bに伴う溝であり深さも共通する。土層断面



図95 2・4区 SD 実測図・断面図

にも切り合い関係が認められないことからみて、SD2004a段階の東西溝と東側南北溝は、ほぼ同じ位置を掘り下げて新たな溝が設けられたため、失われたものと推測される。

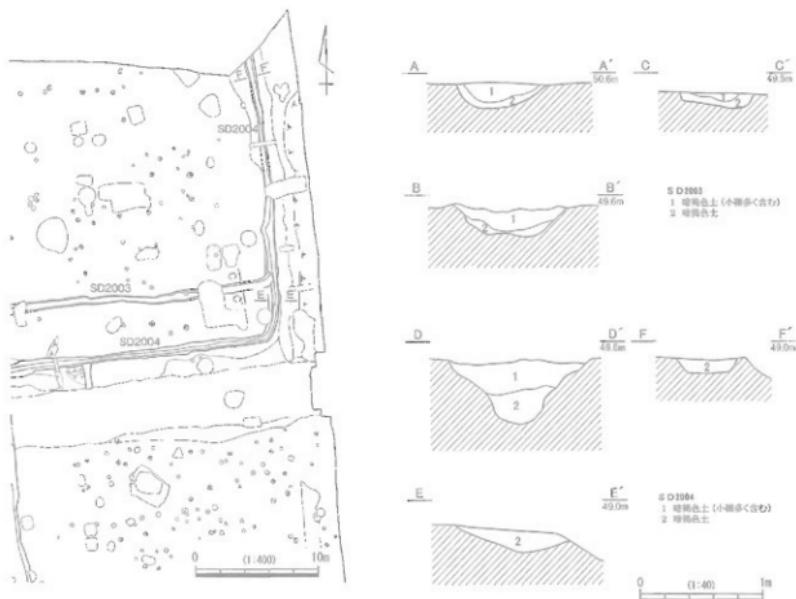
遺物としては、陶磁器類や土師質土器皿などが出土しているが、いずれもSD2004b段階の溝に伴うものである。706～712は土師質土器皿である。非ロクロ成型のもので、いずれも口径8～9cmの小型品である。713は肥前の磁器集付の碗である。714～717は瀬戸窯産の製品で、714は小中、715は乗燭、716と717は擂鉢である。これらの遺物から、SD2004bは18世紀から19世紀頃まで機能していたことがわかる。SD2004aについては、遺物が出土していないため明確でないが、SD2003の付け替えとみられる事から、概ね17世紀から18世紀にかけての溝と推測される。南面土塁については、この頃ほどんど高さを失っていたとみてよいであろう。

SD2005（図95、図版4）

SD2004の東側南北溝から、約20m東に位置する南北溝である。幅は約40cm、深さは平均20cm程度であるが、北に向かって徐々に浅くなる。南北に約12m検出されており、南端はSD2004に取り付く。SD2003との切り合い関係については、記録がなく不明である。遺物は出土していないが、SD2004に取り付くことから、これと同時期の溝である可能性が高い。

SD2006（図95）

大溝SD2001の埋没後、西辺大溝の西端に沿って掘られている溝である。大溝SD2001の南西隅付近



で西に曲がり、10 m程でさらに南に向きを変える。その先是擾乱によって失われているが、後述のように同時期の溝であるSD6002もこの擾乱に取り付いていることから、現状では宅地の擁壁の基礎によって破壊されているが、ほぼ同じ位置に南北溝が続いていた可能性が高い。幅は約1 mで、深さは平均50 cm程残存し、南へ向かって傾斜している。

大溝内において面的に把握されていないこともあり、SD2006に伴うことが明確な遺物は、19世紀の縁軸土瓶とみられる破片1点のみである。明確な遺物は乏しいが、後述のSD2014と同様に、18世紀から19世紀にかけての溝であると推測される。

SD2011（図95・97、図版4）

大溝 SD2001から南へ約3 mに位置する、幅約90 cm・深さ約50 cmの東西溝である。溝は中央でやや北へ曲がり、東半部は大溝 SD2001の南端に沿って掘られている。大溝内については、面的に検出されていないため不明な点も多いが、SD4001より東の土層では確認できないことから、SD2014と同様にSD4001に取り付くものと推測される。

明確な遺物としては、山茶碗（723）や土師質土器皿（724）、くの字形内耳鍋（725）、古志戸呂窯産の擂鉢（726）などが出土している。また、図化したもの以外では、型紙刷りの染付など近代の陶磁器も出土しており、一部近代まで残っていたことがわかる。明確な遺物は乏しいが、さほど長期間使用されていたとは考えにくく、主に18世紀から19世紀頃に機能した溝であると推測される。

SD2013（図95・96、図版4・29）

大溝 SD2001とSD1001の間に検出されている南北溝である。幅約1 m・深さ約50 cmの規模で、南北に約4.4 m検出されている。北側ではSD2011、南側では前述のSD1001bに接合する。

遺物は少ないが、瀬戸美濃産の陶磁器が出土している。718は磁器染付の端反り碗、719は尾呂茶碗、720は片口の高台部、721と722は擂鉢である。これらは、いずれも18世紀から19世紀にかけてのものである。SD2013の年代についても、同様の時期とみてよい。

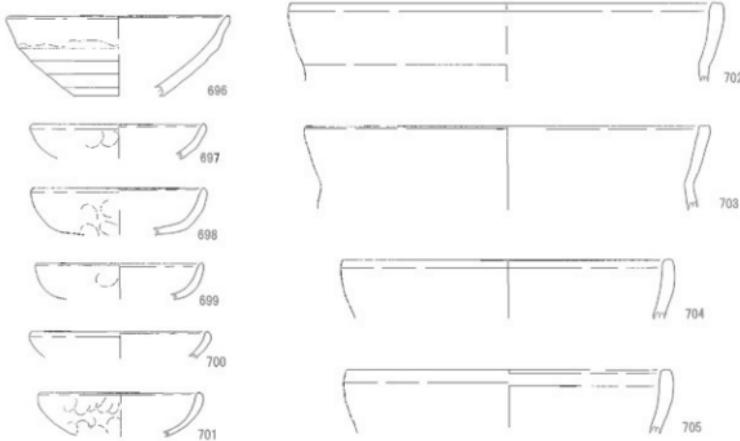
SD2014（図36・38・95・97、図版29）

大溝 SD2001の埋土に掘り込まれている溝である。SD2001の西辺と南辺の内側に、ほぼ沿うような形で掘られており、4区との境界付近までその存在が確認されている。面的には確認できていないが、恐らくは4区との境界に通る溝SD4001に取り付くものと推測される。幅約15 cm・深さ約10 cmの規模で、断面は逆台形（図36・38）となっている。

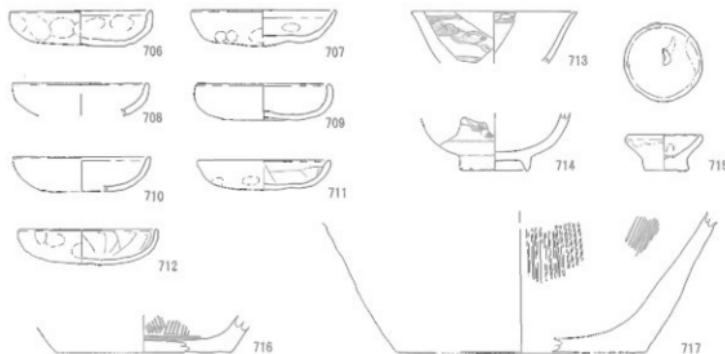
遺物は中世・近世のものに加えて、一部近代のものまで出土している。727～729は山茶碗、734は常滑産の壺、735は古志戸呂窯産の擂鉢、741と742は丸瓦である。これらは、明らかにI層から混入した近世の遺物である。730・731は非クロコ形の土師質土器皿である。比較的硬質で、薄手のつくりとなっている。中世末から近世にかけてのものであろう。736～739は瀬戸美濃窯産の製品である。739は擂鉢、737と738は丸碗で、いずれも18世紀のものである。739は灯明皿で、19世紀後半のものである。740は18世紀の肥前の香炉である。743は鉄鎌である。基部が欠損しているが、恐らくは有茎式の曲刀鎌であろう。この他に、図化できない小片ではあるが、近代の磁器が出土している。

先述のように、大溝 SD2001のI層として取り上げられている近世の遺物の多くは、このSD2014とSD2006に伴う遺物であると推測される。これらを含めて考えると、SD2014の遺物は、18世紀から19世紀にかけてのものが大半を占めている。SD2014は、主に18世紀から19世紀に機能し、一部近代まで名残として残っていたものと推測される。

SD2003



SD2004



SD2013

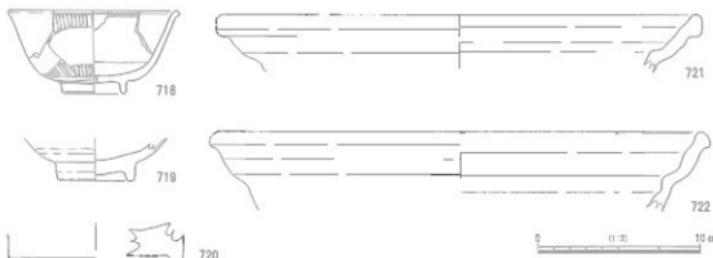


図 96 SD2003・2004・2013 出土遺物

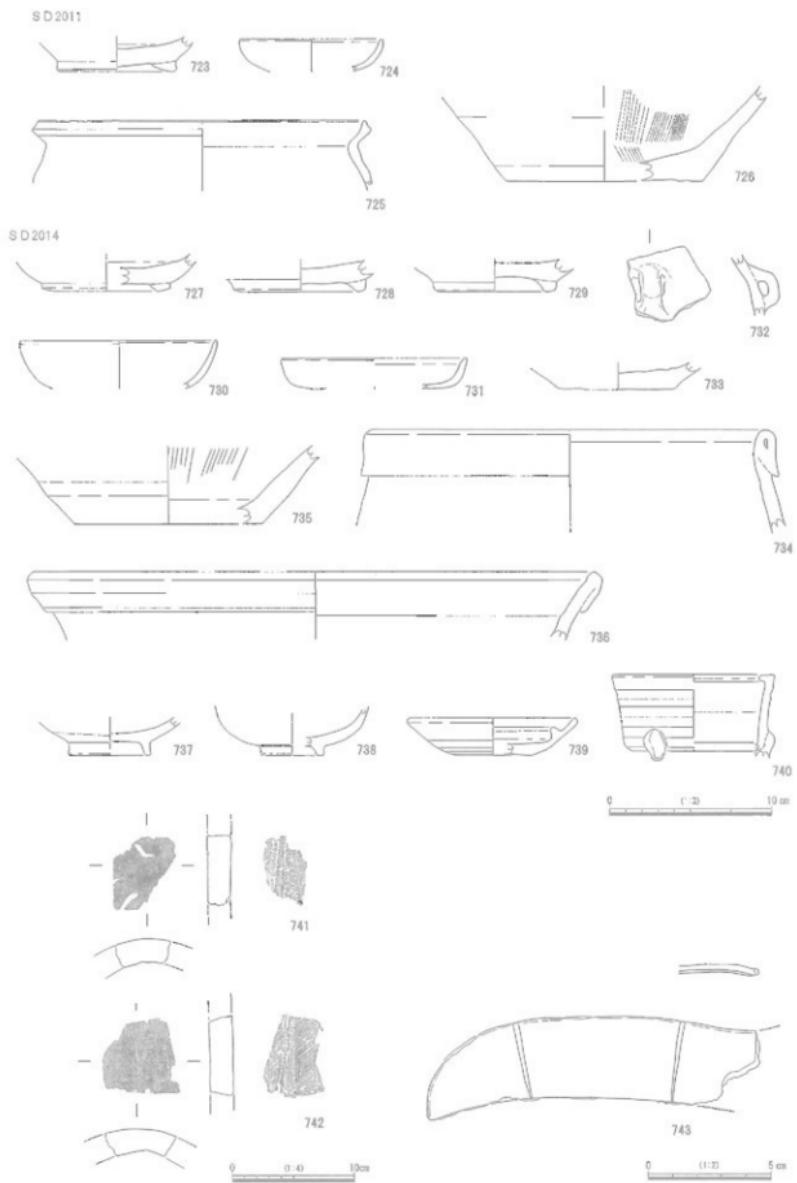


図 97 SD2011・2014 出土遺物

SD3009・3013・3014 (図 40・98・99、国版 5・28・79)

いずれも、3 区の土塁 SA3001 の周辺に所在する溝である。

SD3014 は、逆 L 字形に掘られた溝で、西側は削平によって失われているが、屈曲部を中心に総延長にして約 15m 検出されている。底面は比較的平坦で、遺存状況によって異なるが、良好に残る部分での上端の幅は 1.3m 程となっている。調査区北壁の土層断面 (図 40)において、SD3013 に切られていっていることが確認されている。遺物は非常に乏しく、小破片を含めても十数点程度しか出土していない。744 は土師器壺の底部である。745 はクロコ成形の土師質土器皿とみられる。口縁部の小破片で、比較的硬質な焼きとなっている。図化できたのはこの 2 点のみであるが、この他に非ロクロ成形の土師質土器皿や、内彫形とみられる内耳鍋の破片などが出土している。

SD3013 は、SD3014 の東側に検出されている南北溝である。幅約 60 cm・深さ約 40 cm で、側面は比較的直立気味に立ち上がる。遺構検出時に SD3009 に切られることが確認されているが、SD3013 に向かって SD3009 が屈曲していることから、SD3009 とほぼ同じ場所に東西溝を有した逆 L 字形の溝であった可能性が高い。また、埋没後には埋葬遺構 SX3008 が設けられている。746 は山茶碗、747・748 はくの字形内耳鍋である。749～751 は土師質土器皿で、749 と 750 は軟質のものであるが、751 は比較的硬質のものである。これらの他に、17 世紀前半のものとみられる美濃窯産の徳利も出土している。

SD3009 は、SD3013 の東側に設けられている逆 L 字形の溝である。先述のように、SD3013 を改修してつくられた溝とみられる。幅 80 cm・深さ約 50 cm の規模で、総延長にして約 50 m 検出されている。残存する規模に比べて遺物は乏しく、破片を含めても十数点程度しか出土していない。752 は山茶碗、753 は瀬戸美濃窯の擂鉢である。754 は半球形の内耳鍋で、口縁部は丸く仕上げられ、比較的浅いくつりのものとなっている。755 は丸瓦で、二次的な被熱の痕跡が顯著にみられる。756 は平瓦である。凸面には繩叩き、凹面には布目が認められる。凸面にのみ、離れ砂が少量付着している。

年代については、全体的に遺物が乏しく不明瞭な部分はあるが、各遺構の切り合い関係から SD3014、SD3013、SD3009 の順であることは明らかである。また、SD3013 については、17 世紀後半頃とみられ

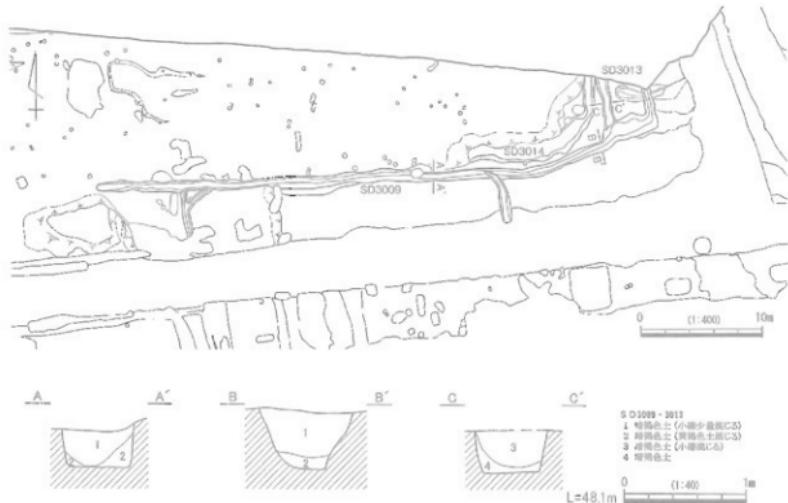


図 98 SD3009・3013・3014 実測図

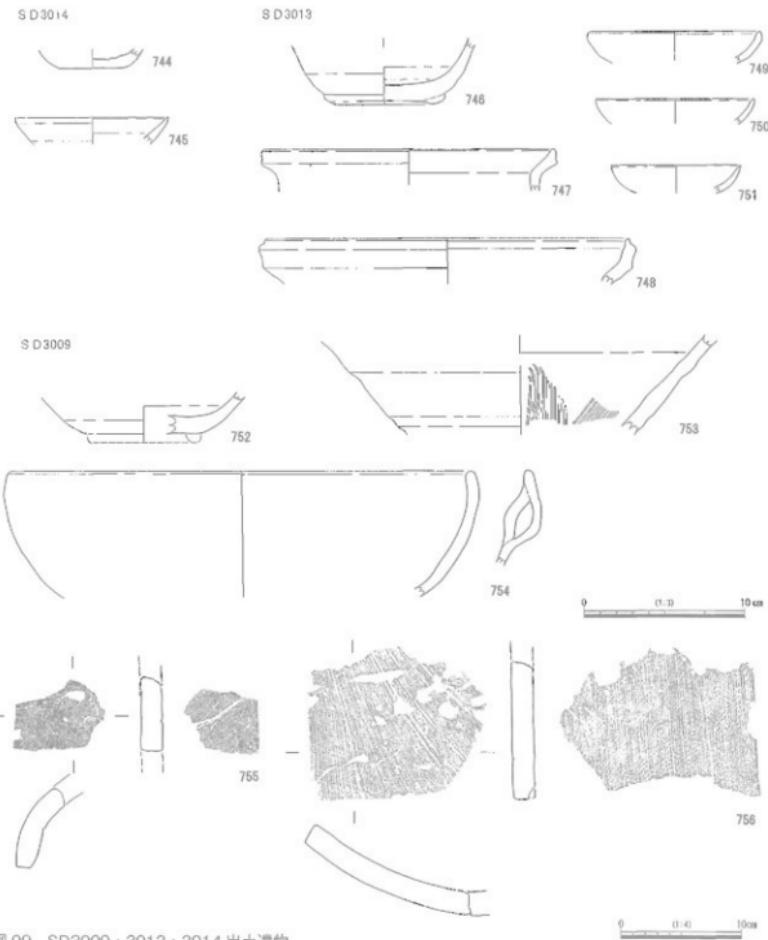


図99 SD3009・3013・3014 出土遺物

るSX3008が埋没後に設けられていることから、それまでには埋没していたと考えてよい。これらの点と出土遺物の年代から、SD3014は16世紀後半、SD3013は17世紀前半、SD3009は17世紀後半を中心とする時期の溝であると推測される。

SD3006・3008(図100、図版5)

3区の南西部に、大溝SD2001に平行して設けられている東西溝である。

SD3006は大溝SD2001の北側に位置し、東西に約20mの長さで検出されている。深さは10cm程と

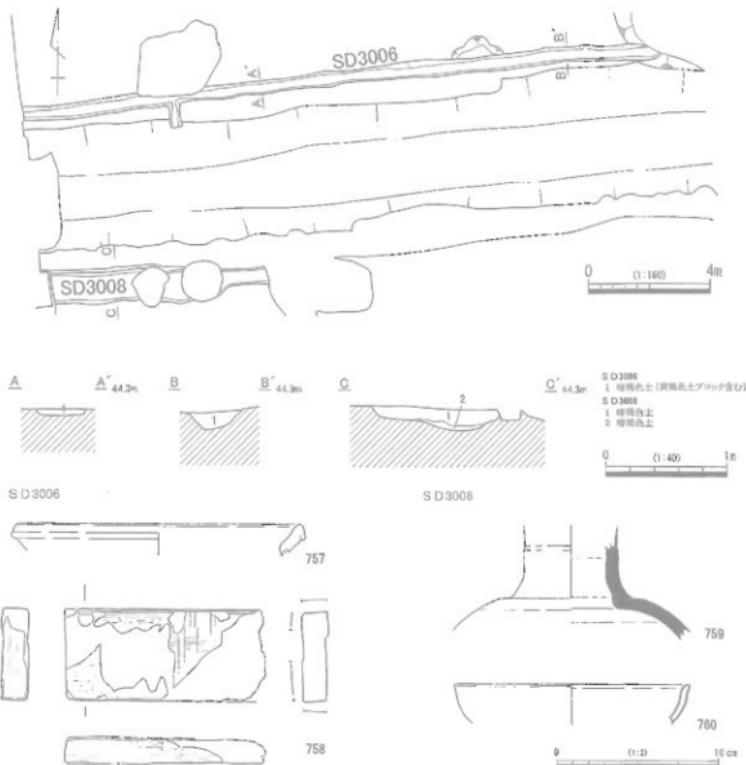


図 100 SD3006・3008 実測図、出土遺物

浅く、東へ向かって傾斜している。西側は調査区外へと続き、東側は擾乱によって失われているが、土壘 SA3001 までは至っていない。遺物は破片も含めて、7点しか出土していない。757は内耳鍋の口縁部、758は砥石である。他には須恵器壊が1点、土師器甕が1点、土師質土器皿とみられる破片が3点出土している。

SD3008は大溝 SD2001 の南側に位置する溝で、調査区西端から約7mの長さが確認されている。深さは15cm程と浅い。東側は擾乱で失われており、続きを判然としない。遺物は2点出土しているのみである。759は須恵器のフラスコ瓶である。760は肥前產とみられる近世の青磁である。

遺物が乏しい上に細片がほとんどであるため、遺構の年代については決め手に欠く状況ではあるが、ともに東側の様相が判然としない点が注目される。SD3006とSD3008の間は、調査前は道路（市道根堅24号線）となっており、道路はちょうどSD3006の東端付近で南へ向かって折れている。現代のものが出土しなかったために、遺構として捉えられてはいるものの、現代の道路に伴う溝の可能性も否定しきれない。いずれにせよ、近世後期以降の溝である可能性が高いとみてよいであろう。

SD4001 (図 101 ~ 104、図版 4・28)

3区と4区の境に位置する南北溝である。溝は、北側の調査区端から南へ約 72 m 延び、西へ向かってほぼ直角に屈曲した後 SD1001 に接合する。北半は底部付近が残る程度となっており、一部検出されなかった部分もある。断面は逆台形で、南半では幅約 90 cm・深さ約 60 cm の規模となっている。底面は平坦で、南及び西に向かって緩やかに傾斜する。土層には掘り直しの痕跡が認められる部分もあるが、溝の全域には及んでいない。全面的な改修ではなく、崩落した部分を復旧した程度のものとみてよいであろう。



図 101 SD4001 実測図

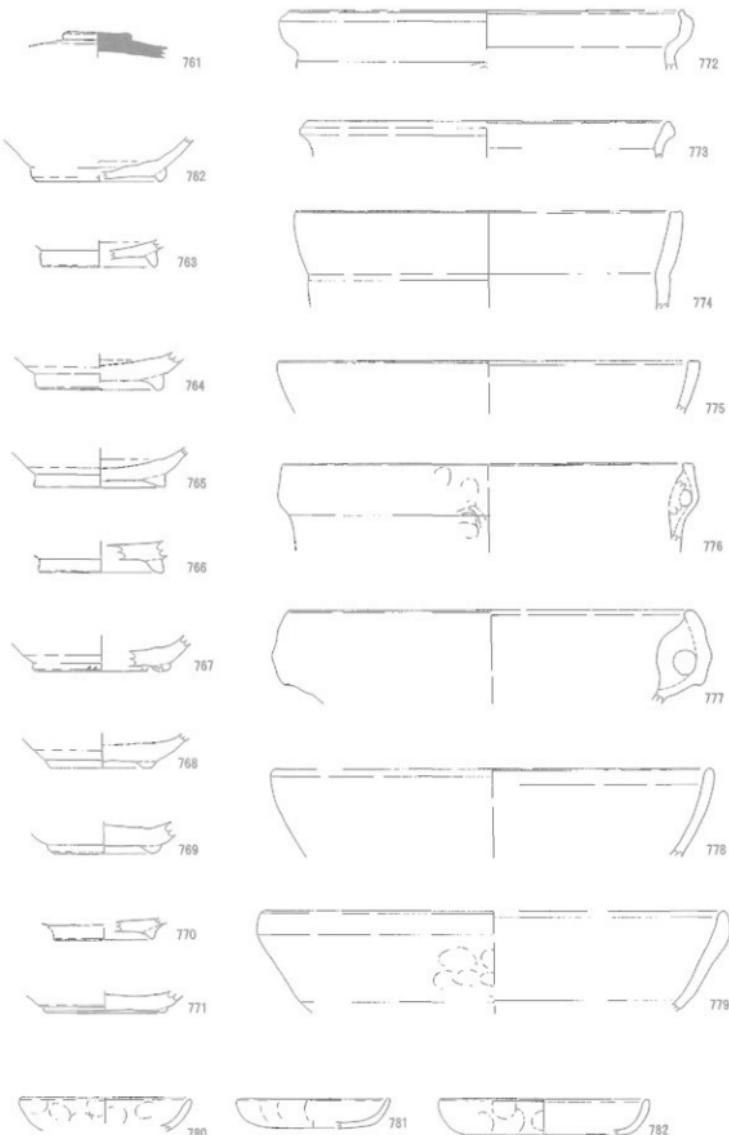


図 102 SD4001 出土遺物 (1)



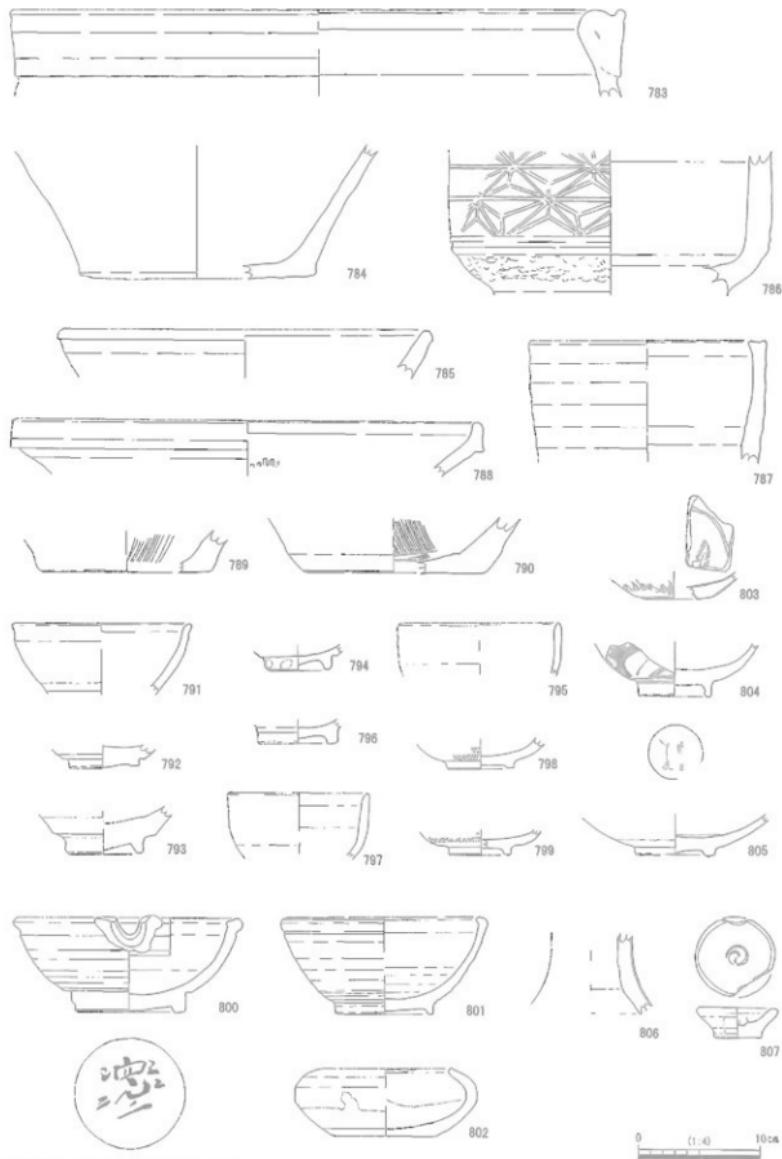


図 103 SD4001 出土遺物 (2)

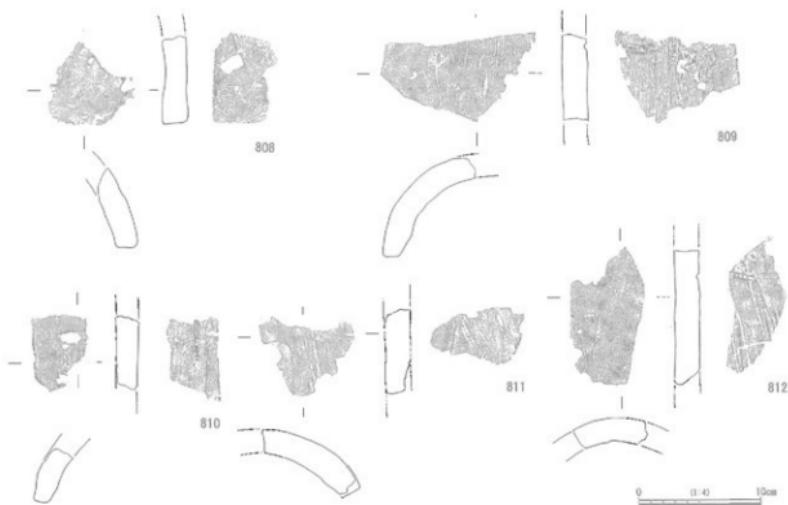


図104 SD4001出土遺物(3)

遺物は、須恵器や土師器といった古代の土器から、近世の陶磁器まで比較的の豊富に出土している。761は須恵器の蓋、762と763は灰釉陶器、764～771は山茶碗、772～779は内耳鍋である。780～782は土師質土器皿である。いずれも浅く、比較的硬質な焼きのものである。

783～785は常滑産の製品である。783と784は甕で、785は片口の口縁部であろう。788・791・792は初山窯の製品で、788は擂鉢、791と792は天目茶碗である。789と790は擂鉢で、789は古志戸呂窯産、790は瀬戸美濃産の製品である。786は瓦質の火鉢であり、体部に線刻で花文とみられる幾何学的な文様が施されている。787は匣体である。796と802は志戸呂窯産の製品で、796は丸碗、802は小鉢である。793～795・797～801・807は、瀬戸美濃産の製品である。793は天目茶碗、794と795は尾呂茶碗、797は灰釉丸碗、798と799は燈茶碗、800と801は片口である。800の底部外面には墨書きが残されている。文字としては判読できないが、「二」または「ム」のような記号が配されている。807は秉燭である。803は貿易陶磁の皿で、破片ではあるが、外面には染付がみられる。804～806は肥前産の製品である。804は磁器染付の碗で、見込みには蛇の目釉剥ぎ、底裏には大明年作銘がみられる。805は青緑釉の皿で、見込みには蛇の目釉剥ぎが施されている。806は青磁の瓶である。

また、点数は少ないが瓦も出土している。808～812はいずれも丸瓦であり、凸面には全面にナデ調整が施され、凹面の側端と広端側は幅広に面取りされている。808は広端部の破片で、広端面には離れ砂が付着している。809～811は側端部の破片で、809には一部繩叩きの痕跡が確認できる。また、809と812には吊り紐痕がみられる。これらの特徴は、大溝SD2001などから出土しているものと共通する。

周辺から混入した遺物も多いが、出土遺物の下限の年代は19世紀後半である。18世紀代の遺物についても一定量出土していることから、SD4001は18世紀から19世紀にかけての時期を中心に機能した溝であると推測される。

SD8002 (図 105)

8区の東端に位置する南北溝である。溜め池の堤の下層で検出されている。幅は約90cmで、長さは約11m検出されている。北側は擾乱で失われており、南側は徐々に浅くなり確認できなくなっている。深さは15cm程度と浅い。

周辺から様々な遺物が流入しており、須恵器から山茶碗、古瀬戸製品、土師質土器皿、内耳鍋など幅広い年代のものが出土している。813は土師質土器皿である。口縁の復元径が11cmの中型品で、やや硬質の焼きとなっている。814～816は古瀬戸製品である。814は天目茶碗、815と816は鉢皿で、いずれも古瀬戸後期のものである。817は内彎形の羽蓋である。818は内彎形内耳鍋であり、口縁部の長さが短いタイプのものである。819は祥符元宝、820は嘉祐通宝、821は元祐通宝である。出土遺物から、SD8002は主に15世紀から16世紀にかけて機能した溝であると推測される。

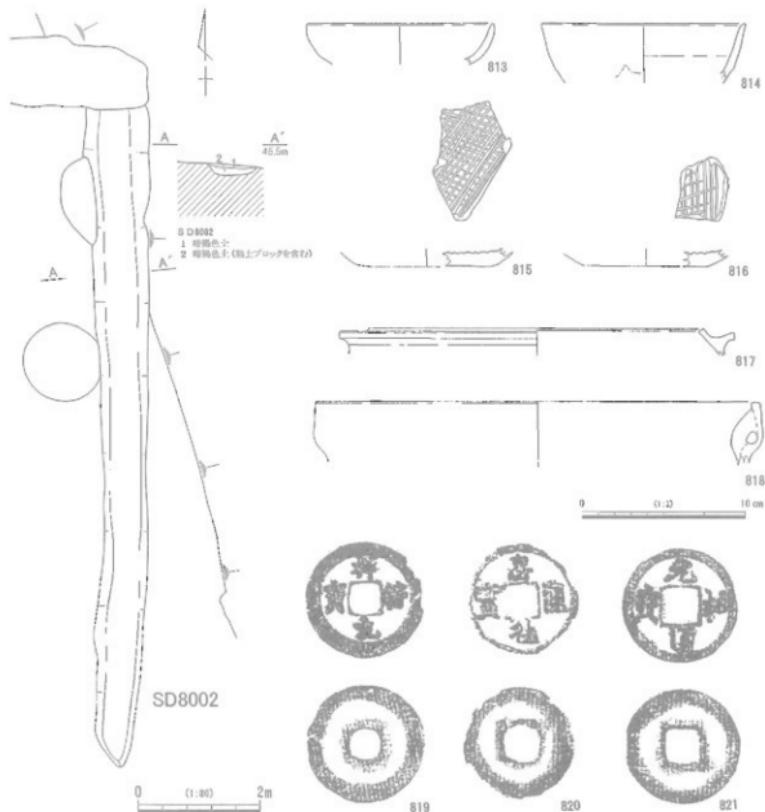


図 105 SD8002 実測図・出土遺物

SD6002 (図 106 ~ 111、図版 28・52)

6 区の中央北側を鍵の手状に設けられている溝である。溝は、宅地の擁壁による攪乱から東へ向かい、東に約 45 m の場所ではほぼ直角に屈曲して南へ方向を変える。さらに、南へ 25 m の場所において再び屈曲して東に向かう。平面的に確認することはできなかったが、東端は同時期の溝である SD1001b に連結していたとみてよいであろう。また、西側は、擁壁の攪乱によって失われているが、これに取り付くような形で溝が消えている。

幅は 0.8 ~ 1 m で、深さは 40 ~ 60 cm 残存する。断面は底面が平らの逆台形を呈し、全体が東または南に向かって傾斜している。土層において掘り直しの痕跡がみられる部分もあるが、全体には及んでいないことから、SD4001 と同様に大規模な改修ではなく、埋没した部分の補修や底ざらい程度のものであったと推測される。



図 106 SD6002 実測図・断面図

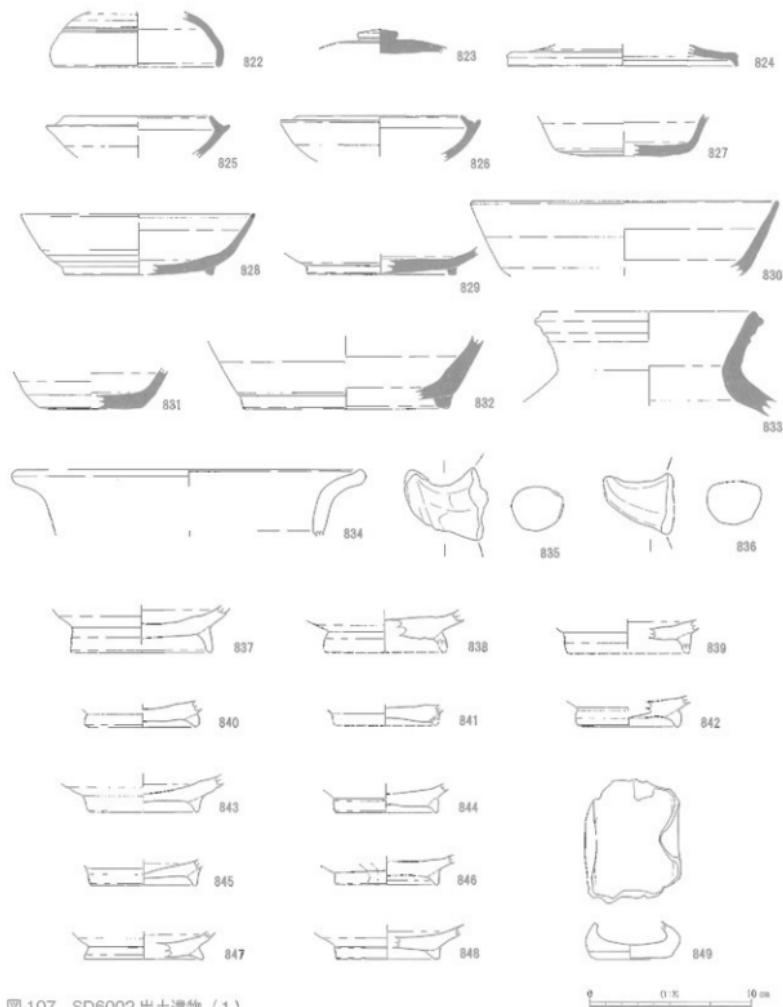


図 107 SD6002 出土遺物（1）

遺物は多量に出土しており、分量はポリコンテナ 6 箱以上にもなる。822～833 は須恵器、834～836 は土師器である。図示したものは SD6002 から出土した遺物のごく一部であり、実際は甕類などを中心に、須恵器と土師器が全体の約 3 分の 1 を占めている。837～849 は灰釉陶器で、ほとんどが浜北窯の製品とみられる。第 4 章でも述べているように、中屋遺跡において灰釉陶器の出土は少ないが、SD6002 では比較的まとまって出土している。

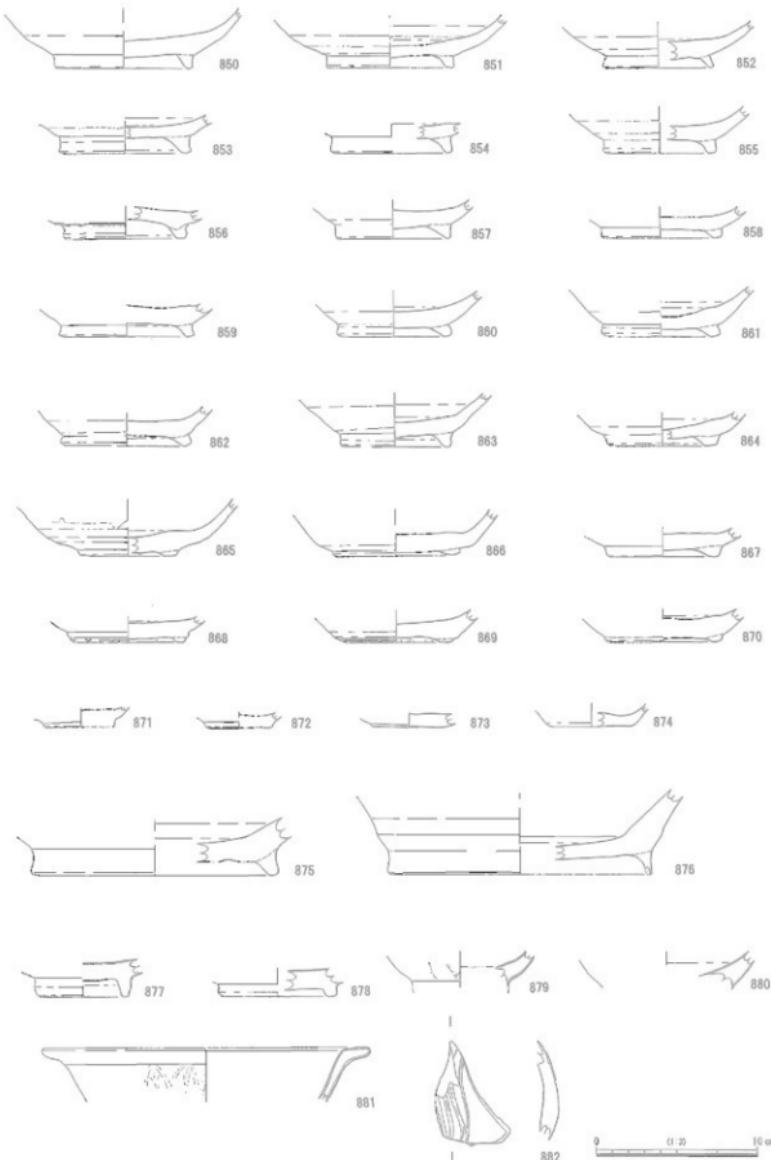


図108 SD6002 出土遺物 (2)

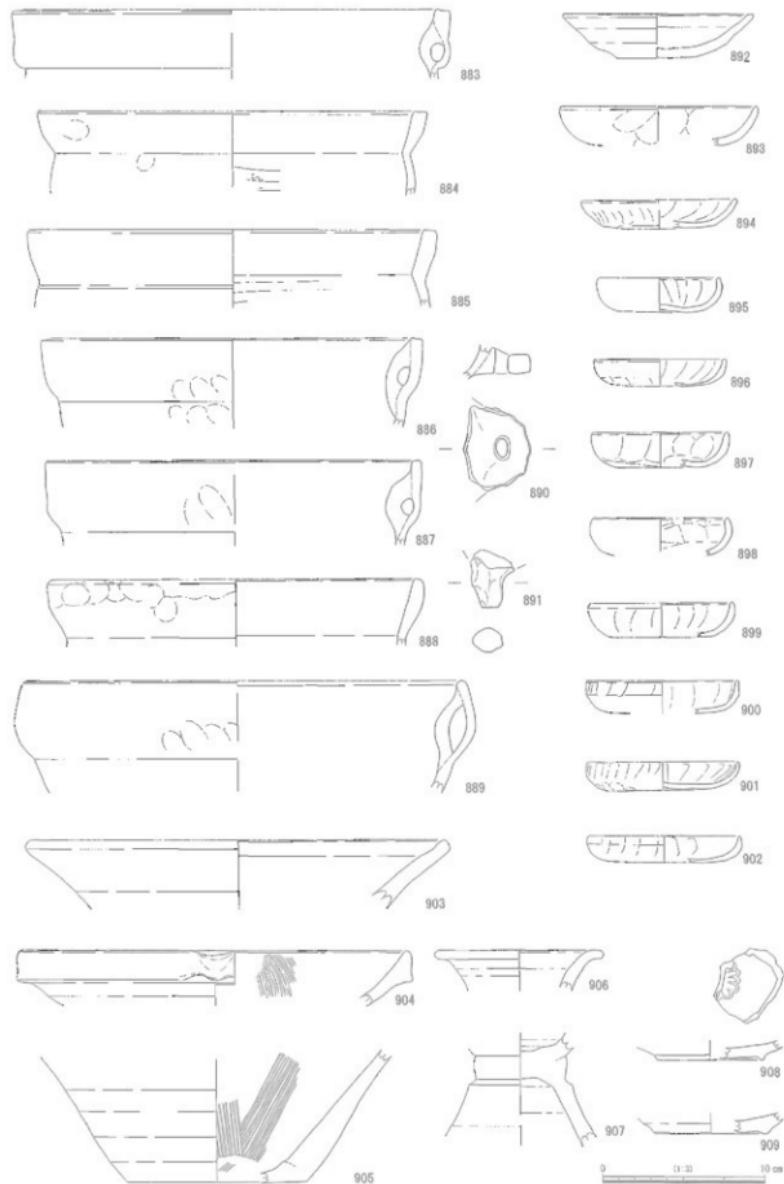


図 109 SD6002 出土遺物 (3)

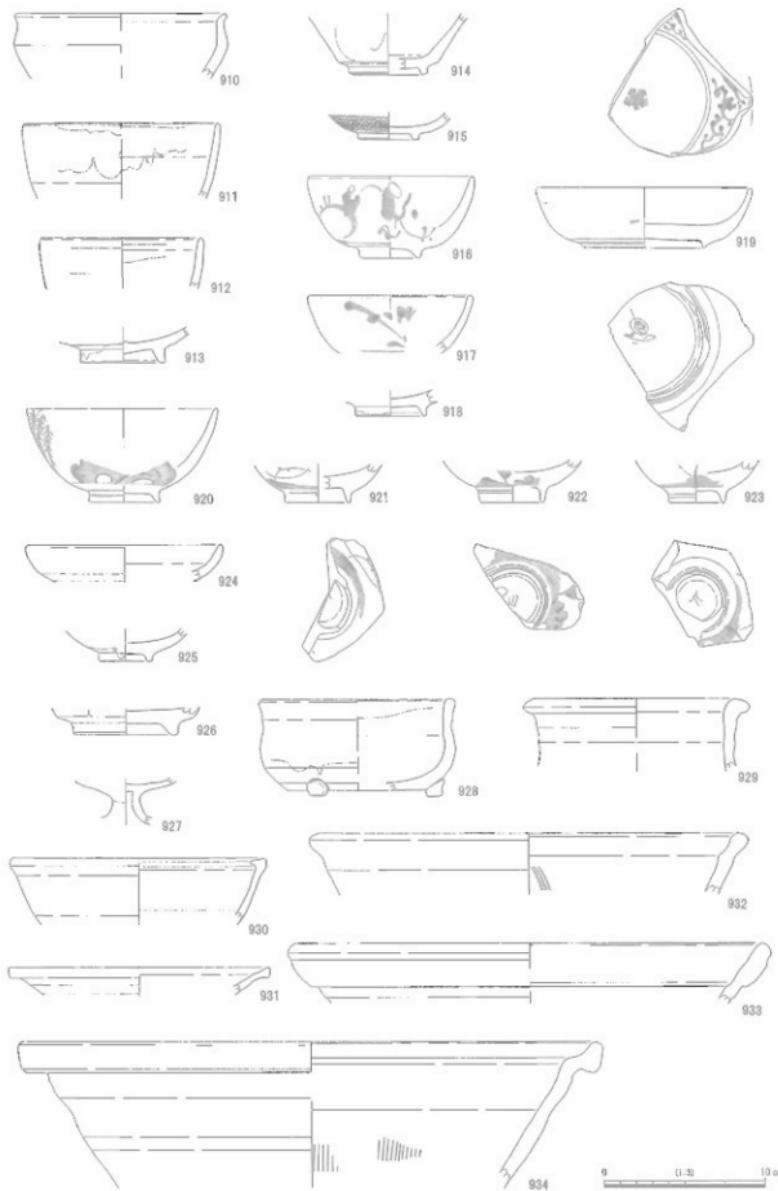


図 110 SD6002 出土遺物 (4)

850～870は山茶碗である。東遠産の856を除き、他はすべて渥美湖西産である。時期としては、Ⅲ期のものが大半を占めている。871～874は山茶碗の小皿で、いずれも渥美湖西産のものである。875と876は、渥美湖西産の片口鉢である。877～881は青磁の碗である。881は青磁の盤で、攪乱から出土している2019と同一個体であると推測される。882は古瀬戸中期の瓶子の破片で、外面には草葉文とみられる文様が認められる。

883～889は内耳鍋で、図化したものはいずれも内瓣形であるが、くの字形や半球形のものも出土している。890は羽釜もしくは羽無釜の外耳で、下面にはススの付着が認められる。891は羽無釜の足で

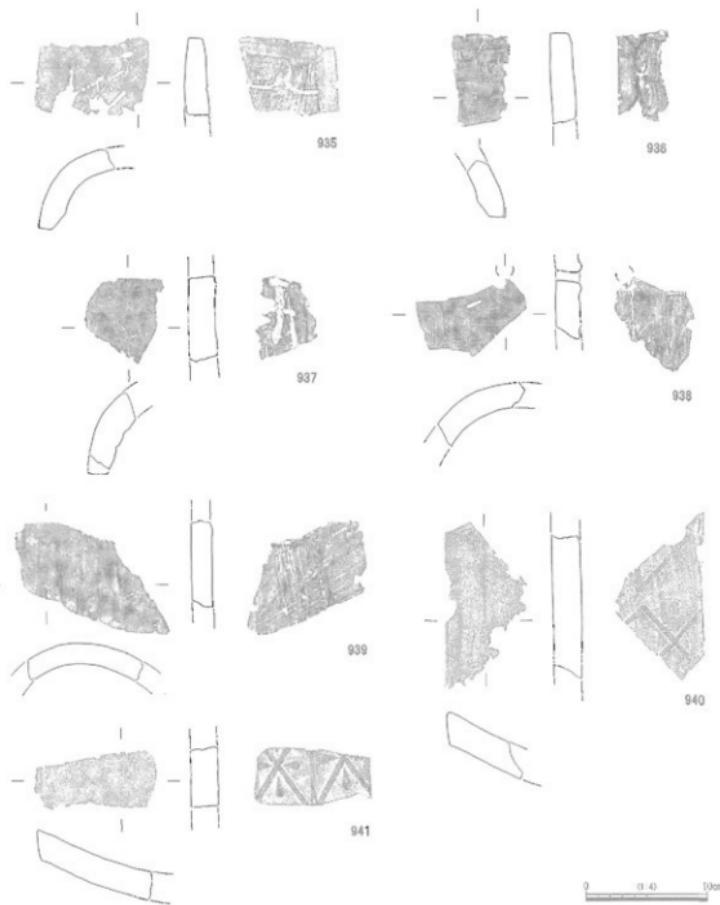


図 111 SD6002 出土遺物 (5)

あろう。892は、ロクロ成形の土師質土器皿である。893～902は非ロクロ成形の土師質土器皿で、いずれも比較的硬質の焼きとなっている。893はやや厚手で口径も大きいが、他は口径7～9cmの小型品である。904と905は、古瀬戸後期から大窯期にかけての瀬戸美濃産の擂鉢である。906と907は、古志戸呂窯産の花瓶である。908と909は、瀬戸美濃産の丸皿である。大窯1～2期のもので、908の見込には菊花文が施されている。

910～918は、瀬戸美濃産の碗類である。910は天目茶碗、911～913は尾呂茶碗、914は柳茶碗、915は鎌湯呑、916～918は小中である。919～923は肥前の磁器染付である。919は皿であり、内面には娟唐草文が描かれている。見込にはコンニャク刺の五弁花、底裏には満福字銘がみられる。920～923は碗である。921～923の底裏には、大明年製の崩れとみられる銘が認められる。924～927は、瀬戸美濃産の製品である。924は摺絵皿、925は梅文皿、926は向付、927は仏供具である。928と929は志戸呂窯産の製品で、928は香炉、929は茶壺である。930～934は、瀬戸美濃産の鉢類である。930は片口、931は折縁輪禿鉢、932～934は擂鉢である。

また、土器や陶磁器に比べて数は少ないものの、瓦も出土している。935～939は丸瓦である。いずれも凸面はナデ調整されており、叩き目は残らない。935と936は狭端部の破片であり、凹面には細い吊り紐痕が認められる。935の布に隠れている部分を1とした時の吊り紐比率は、ほぼ1:1となっている。938も狭端に近い部分の破片であり、釘穴の存在が確認できる。940と941は平瓦で、凹凸両面に離れ砂の付着が認められる。940には縦長斜格子、941には縦長斜格子+横線の叩き目が残る。これらの瓦の特徴は、大溝SD2001から出土している瓦と共通している。なお、この他に瓦としては、棟瓦も数点出土している。

SD6002では、周辺から混入した遺物が多量に含まれているため、古代以降の様々な遺物が出土しているが、18世紀以降のものが大半を占めており、出土遺物の年代の下限は19世紀である。よって、SD6002は、主に18世紀後半から19世紀にかけて機能した区画溝であるとみてよい。

SD6002は、東側は同時期の溝であるSD1001bと接合しており、西側は搅乱にあたって消える。この搅乱は、宅地の擁壁の基礎が埋設されていた部分である。コンクリートの基礎が深くまで至っており、遺構としては認識できなかった。しかし、SD6002と同様に、SD2006においてもこの搅乱に接続するような形となっていることから、ほぼ同じ位置に近世の溝が存在していた可能性が高いと推測される。

表9 漢出土 土器・陶器類観察表 (1)

	遺跡番	遺物	種類	量	分類・形式	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	測定値	参考
497	SD1001	下	圓筒器	灰陶						つまみ部分	灰
498	SD1001	下	圓筒器	灰陶						底部1/6	灰陶
499	SD1001	下	圓筒器	灰陶						底部1/4	灰陶
500	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	31~1	(14.2)			口部1/4~1/7	外側・自然端
501	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒		(15.8)			口部1/10	自然端
502	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒		(15.2)			口部1/10	自然端
503	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	2				底部1/6	灰陶
504	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	5				底部1/4	内側・自然端
505	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	3~1				底部1/2	灰陶
506	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	3~1				7.0	内側・自然端
507	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	6~2				7.2	底部1/6
508	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	6~1				底部1/2	内側・自然端
509	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	6~1				底部1/2	灰陶
510	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	6~1				底部1/2	内側・自然端
511	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	3~2				底部1/6	灰陶
512	SD1001	下	山形器	灰	圓筒・圓筒	6~1				底部1/6	灰陶
513	SD1001	下	圓筒形器	灰青色	圓筒・圓筒			(10.0)		口部1/5	灰・灰陶
514	SD1001	下	圓筒形器	白灰陶	圓筒・圓筒	8	(10.0)	2.6		(4.4)	口部・底部1/4
515	SD1001	下	中空筒形器	灰	圓筒・圓筒					外側・自然端	灰陶
516	SD1001	下	中空筒形器	灰	圓筒・圓筒					内側・自然端	圓筒片
517	SD1001	下	中空筒形器	灰	圓筒・圓筒					底部1/6	灰陶
518	SD1001	下	圓筒形器	灰	圓筒・圓筒	27.2	(27.2)	10.0		口部・底部1/5	灰陶
519	SD1001	下	圓筒形器	灰	圓筒・圓筒	25.6	8.8	6.5		口部・底部3/4	灰陶
520	SD1001	下	圓筒形器	灰	圓筒・圓筒	(29.0)	13.0	8.2		口部・底部1/3	灰陶
521	SD1001	下	土陶質土器	灰	脛	27.0	10.4	8.8		口部・底部3/4	灰陶
522	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	12.5	(3.4)			口部1/10	灰陶
523	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	22.5				口部1/20	灰陶
524	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/6	灰陶
525	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/8	灰陶
526	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/16	灰陶
527	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/8	灰陶
528	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/10	灰陶
529	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/7	灰陶
530	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/9	灰陶
531	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/8	灰陶
532	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	23.2				口部1/10	灰陶
533	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣	22.2				口部1/24	灰陶
534	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣					口部1/6	灰陶
535	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣					口部1/3	灰陶
536	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣					口部1/5	灰陶
537	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣					口部1/6	灰陶
538	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣					口部1/8	灰陶
539	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣					口部1/10	灰陶
540	SD1001	下	土陶質土器	灰	脣					口部1/24	灰陶
541	SD1001	中	圓筒器	灰						外側・自然端	外側・輪付箋
542	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/6	灰陶
543	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/4	灰陶
544	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/5	灰陶
545	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/6	灰陶
546	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/7	灰陶
547	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/4	灰陶
548	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/10	灰陶
549	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/6	灰陶
550	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/8	灰陶
551	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/12	灰陶
552	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/4	灰陶
553	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/5	灰陶
554	SD1001	中	圓筒器	灰						底部1/6	灰陶
555	SD1001	中	土陶質土器	灰						口部1/4	灰陶
556	SD1001	中	土陶質土器	灰						口部1/4	灰陶
557	SD1001	中	土陶質土器	灰						口部1/10	外側・自然端
558	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
559	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
560	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
561	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
562	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
563	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
564	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
565	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
566	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
567	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
568	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
569	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
570	SD1001	中	土陶質土器	灰						底部1/3	灰陶
571	SD1001	中	圓筒形器	底青色	圓筒・圓筒	32.3				口部・底部1/7	底青色 / 浅黃色
572	SD1001	中	圓筒形器	底青色	圓筒・圓筒	4.4	2.5	2.4		口部・底部1/5	底青色
573	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	27.5	9.4	3.2		口部・底部1/12	底青色
574	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	12.7				口部1/5	底青色
575	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/6	底青色
576	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/7	底青色
577	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/8	底青色
578	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/9	底青色
579	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/10	底青色
580	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/11	底青色
581	SD1001	中	土陶質土器	灰	脣	10.0				口部1/12	底青色

表 10 满出土 土器・陶磁器觀察表 (2)

表11 溝出土 土器・陶器観察表(3)

No.	遺物名	年代	種類	断面	分類	模式	口径 (cm)	高さ (cm)	幅さ (cm)	底径 (cm)	底形	側面	内面	外側	内側	色調	備考
667	S01001	上	土師質土器	内高脚	内高脚	(21.5)						口縁部 1/12	深葉	底付葉			
668	S01001	上	土師質土器	内高脚	内高脚	(21.5)						口縁部 1/6	深葉	底付葉			
669	S01001	上	土師質土器	高脚	高脚	(11.8)						口縁部 1/4	底付				
670	S01001	上	土師質土器	高脚	高脚	(14.8)						口縁部 1/4	底付				
671	S01001	上	土師質土器	高脚	高脚	(15.0)						口縁部 1/4	底付				
672	S01001	上	土師質土器	高脚	高脚	(15.0)						口縁部 1/4	底付				
681	S01008		瓦陶器	丸頭	圓芦形	茎 3 ~ 4	(0.8)					口縁部 1/14	熱鮎				
682	S01009		瓦陶器	丸頭	圓芦形	茎 4						(4.4) 茎部 1/2	熱鮎				
683	S01009		瓦陶器	丸頭	圓芦形	茎 7						(5.0) 茎部 7/8	熱鮎				
684	S01000		瓦陶器	丸頭	圓芦形	胫足	(13.4)					(4.15) (7.7) 1/3	明治度 / 底付	瓦井田・溝屋字路			
685	S01000		瓦陶器	丸頭	圓芦形	胫足	(13.4)					(3.6) (7.9) 口縁～底部 1/4	底付 / 底付				
686	S01001		瓦陶器	丸頭	圓芦形	胫足	(13.4)					(3.0) 口縁～底部 1/2	明治度 / 底付				
687	S01008		瓦陶器	丸頭	圓芦形	茎 10						口縁部 1/3	底付				
688	S01008		瓦陶器	丸頭	圓芦形	茎 10 ~ 9	(11.7)					口縁部 1/3	底付				
689	S01008		瓦陶器	丸頭	圓芦形	茎 10 ~ 9	(11.0)	(15.0)				口縁部 1/2	底付				
690	S01000		瓦陶器	丸頭	圓芦形	茎	(28.5)					口縁部 1/10	底付				
691	S01010		土師質土器	直	直	(11.8)						口縁部 1/10	底付				
692	S01000		土師質土器	直	直	茎口フロ	(0.0)					口縁部 1/18	底付				
693	S01013		土師質土器	内高脚	内高脚	くの字形	(20.0)					口縁部 1/3	底付				
694	S01013		土師質土器	内高脚	内高脚	くの字形	(21.2)					口縁部 1/10	底付				
695	S01000		土師質土器	直	直	茎口フロ	(0.0)					口縁部 1/10	底付				
696	S01000		土師質土器	直	直	茎口フロ	(0.0)					口縁部 1/10	底付				
697	S02000		土師質土器	直	直	茎口フロ	(11.2)					口縁部 1/18	底付				
698	S02000		土師質土器	直	直	茎口フロ	(10.0)					口縁部 1/4	底付				
699	S02000		土師質土器	直	直	茎口フロ	(10.5)					口縁部 1/6	底付				
700	S02000		土師質土器	直	直	茎口フロ	(10.8)					口縁部 1/8	底付				
701	S02000		土師質土器	直	直	茎口フロ	(11.2)					口縁部 1/6	底付				
702	S02000		土師質土器	内高脚	内高脚	(20.5)						口縁部 1/6	底付				
703	S02000		土師質土器	内高脚	内高脚	(20.5)						口縁部 1/6	底付				
704	S02003		土師質土器	内高脚	内高脚	(20.5)						口縁部 1/24	底付				
705	S02003		土師質土器	内高脚	内高脚	(19.9)						口縁部 1/20	底付				
706	S02004		土師質土器	直	直	茎口フロ	5.5	6.4	1.9			口縁部 1/6	底付				
707	S02004		土師質土器	直	直	茎口フロ	9.0	5.4	2.2			口縁部 1/6	底付				
708	S02004		土師質土器	直	直	茎口フロ	9.1					口縁部 1/4	底付				
709	S02004		土師質土器	直	直	茎口フロ	9.0	(7.0)	(2.25)			1/4	底付				
710	S02004		土師質土器	直	直	茎口フロ	9.0					口縁部 1/4	底付				
711	S02004		土師質土器	直	直	茎口フロ	(0.1)	(0.1)	(1.0)			1/2	にいわく度				
712	S02004		土師質土器	直	直	茎口フロ	(0.3)	0.15	2.1			1/2	底付				
713	S02004		瓦世器	片付	肥底	(10.0)						口縁部 1/16	底付 / 底白				
714	S02004		瓦世器	片付	肥底	(10.0)						伴脚～底部 1/3	底付 / 底白				
715	S02004		瓦世器	小口	肥底	茎 9	4.0					は甘利形	底付				
716	S02004		瓦世器	小口	肥底	茎 10 ~ 11	4.4	2.6	2.2			底部 1/5	底付				
717	S02004		瓦世器	連脚	連脚	茎 10	(10.0)					伴脚～底部 1/12	底付				
718	S02013		近世陶器	底延	圓芦形	茎 10.0	(5.15)					(3.0) 1/3	底付				
719	S02013		近世陶器	底延	圓芦形	茎 6 ~ 7	(4.1)					底部 1/3	底付				
720	S02013		近世陶器	口片	圓芦形	茎 9	(29.0)					口縁部 1/12	にいわく度				
721	S02013		近世陶器	口片	圓芦形	茎 9	(29.0)					口縁部 1/12	底付				
722	S02013		近世陶器	口片	圓芦形	茎 9	(29.0)					口縁部 1/12	底付				
723	S02011		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					底部 1/4	底付				
724	S02011		山房器	直	連脚	圓芦形	(5.6)					口縁部 1/10	底付				
725	S02011		山房器	直	連脚	圓芦形	(25.0)					口縁部 1/10	底付				
726	S02011		山房器	直	連脚	圓芦形	(12.0)					口縁部 1/10	底付				
727	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					底付 1/2	内面・白部物				
728	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					7.0	底付				
729	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					底付 1/2	底付				
730	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
731	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
732	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
733	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
734	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
735	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
736	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
737	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
738	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
739	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
740	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
741	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
742	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
743	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
744	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
745	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
746	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
747	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
748	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
749	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
750	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
751	S02014		山房器	直	連脚	圓芦形	口 1					口縁部 1/6	底付				
752	S02009		山房器	直	連脚	圓芦形	口 2					底部 1/2	底付				
753	S02009		山房器	直	連脚	圓芦形	口 2					伴脚 1/4	底付				
754	S02009		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
755	S02009		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
756	S02009		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
757	S02006		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
758	S02006		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
759	S02005		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
760	S02009		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
761	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
762	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
763	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
764	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
765	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
766	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
767	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
768	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
769	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
770	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
771	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
772	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
773	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
774	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚					口縁部 1/2	底付				
775	S02001		山房器	直	連脚	圓芦形	伴脚				</						

表 12 漢出土土器・陶磁器觀察表 (4)

表13 溝出土 土器・陶磁器観察表(5)

No.	遺物名	算定	種類	測量	分類・模式	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	高底径 (mm)	操作者	相場	色相	備考
558	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	(7.4)	底面 1/4	内面・外周部	灰青					
560	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	6.3	底面～一部	外周						
561	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	6.3	底面～一部	外周						
562	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	7.45	底面							
563	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	6.4	底面～一部	内面・外周部	灰青					
564	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	(5.4)	底面 1/4	外周						
565	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	(4.4)	底面～一部	外周						
566	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	7.0	底面							
567	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	10.2	底面 1/2	外周						
568	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	10.4	底面 1/2	外周						
569	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	10.2	底面 1/2	外周						
570	山茶碗	板	湯呑	口1.1 底1.1	(5.4)	底面 1/2	内面・外周部	灰青					
571	山茶碗	小皿	湯呑	口1.1 底1.1	4.0		底面						
572	山茶碗	小皿	湯呑	口1.1 底1.1	4.1		底面						
573	山茶碗	小皿	湯呑	口1.1 底1.1	4.5		底面						
574	山茶碗	小皿	湯呑	口1.1 底1.1	(4.7)		底面 1/3	外周					
575	山茶碗	片口	湯呑	口1.1 底1.1		(14.1)	底面 1/5	底面					
576	中世茶器	片口	湯呑	口1.1 底1.1		(15.9)	底面 1/4	外周・食器部	灰青				
577	中世茶器	片口	湯呑	口1.1 底1.1	5.2	底面 2/3	外周	明褐色・灰白	施釉				
578	中世茶器	片口	湯呑	口1.1 底1.1	(6.5)	底面 1/4	外周	明褐色	施釉				
579	中世茶器	片口	湯呑	口1.1 底1.1			外周	オリーブ・灰白	施釉				
580	中世茶器	片口	湯呑	口1.1 底1.1			外周	オリーブ・灰白	施釉				
581	中世茶器	片口	湯呑	口1.1 底1.1			外周	明褐色・灰白	施釉				
582	土器上部	内筒形			(25.4)		口縁部 1/7						
584	土器上部	内筒形			(23.9)		口縁部 1/4						
585	土器上部	内筒形			(23.7)		口縁部 1/7						
586	土器上部	内筒形			(22.1)		口縁部 1/12						
587	土器上部	内筒形			(22.0)		口縁部 1/10						
588	土器上部	内筒形			(22.2)		口縁部 1/5						
589	土器上部	内筒形			(27.8)		口縁部 1/16						
590	土器上部	内筒形					底面のみ						
591	土器上部	内筒形					縫隙部						
592	土器上部	内筒形					縫隙部 3/6						
593	土器上部	内筒形					縫隙部 1/7						
594	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
595	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
596	土器上部	内筒形					縫隙部 1/4						
597	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
598	土器上部	内筒形					縫隙部 1/2						
599	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
600	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
601	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
602	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
603	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
604	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
605	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
606	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
607	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
608	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
609	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
610	土器上部	内筒形					縫隙部 1/5						
611	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	(17.0)								
912	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	(11.7)								
913	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	(9.7)								
914	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	7.0								
915	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	6.0								
916	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	5.0								
917	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	4.0								
918	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	3.0								
919	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	2.0								
920	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	1.0								
921	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
922	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
923	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
924	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
925	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
926	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
927	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
928	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
929	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
930	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
931	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
932	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
933	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
934	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
935	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
936	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
937	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
938	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
939	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
940	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
941	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
942	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
943	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
944	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
945	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
946	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
947	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
948	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
949	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
950	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
951	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
952	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
953	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
954	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
955	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
956	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
957	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
958	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
959	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
960	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
961	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
962	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
963	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
964	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
965	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
966	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
967	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
968	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
969	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
970	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
971	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
972	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
973	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
974	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
975	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
976	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
977	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
978	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
979	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
980	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
981	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
982	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
983	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
984	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
985	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
986	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
987	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
988	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1.1	0.5								
989	近世茶器	圓筒形	湯呑	口1.1 底1									

4. 河川

SR8001 (図 112～150、図版 8～16・20～22・51・58・61・62・77・80～82・84～86)

主に 8 区に位置する河川跡である。やや蛇行しながら、調査区内を南北に縦断している。経路はやや異なるが、この位置には現在大門川が流れしており、SR8001 はその前身の流路とみられる。地形的にも周辺に比べて低くなっている。上流には河川の痕跡が明瞭に残されている。調査時には周囲は水田として利用されていたが、昭和 14 年までは「干抗池」と呼ばれる溜池となっており、8 区の東端には高さ 2 m 程の堤が残存していた。層位は、大きく I～IV の 4 層に分けることができ、III 層の堆積後には両岸に護岸施設が構築されている。



図 112 SR8001 実測図

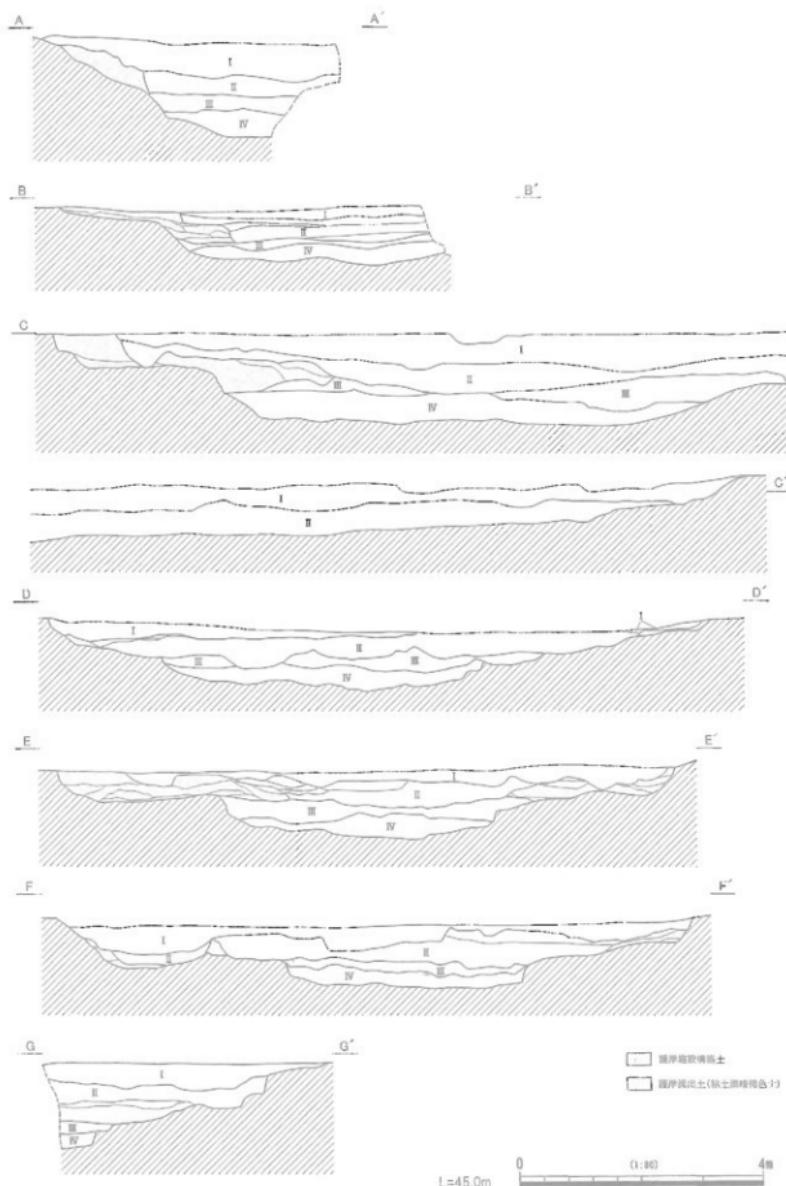


図 113 SR8001 土層断面図

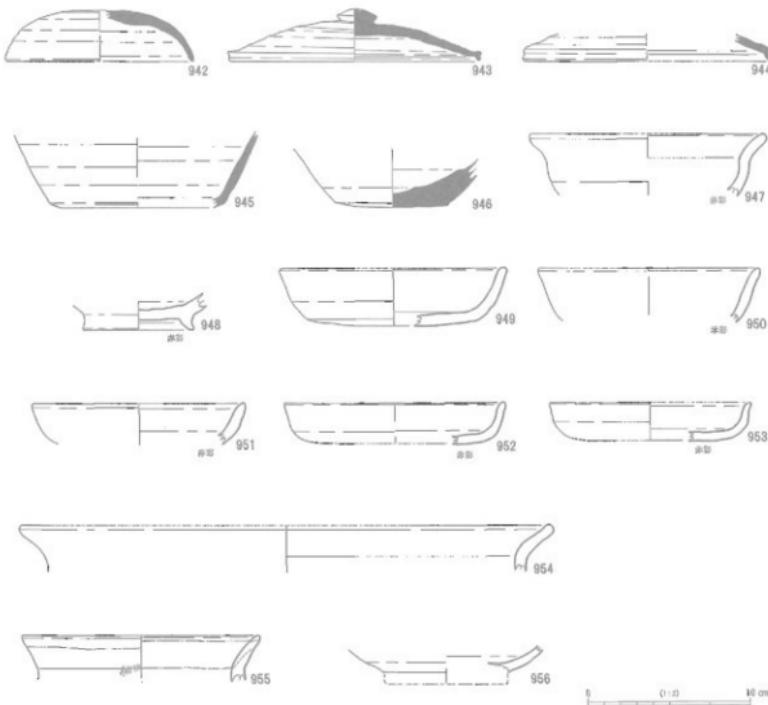


図 114 SR8001 IV層出土遺物

(1) IV層

最下層にあたるIV層は、挙大程度の礫を多量に含む砂礫層である。細かくはさらに数層に分けることができ、部分的に腐植土も含まれてはいるが、ほとんどは砂と礫によって構成されている。場所によつて多少異なるが、底面から平均30cm程の厚さで堆積している。

遺物は少ないが、須恵器や土師器、灰釉陶器が出土している。942～944は須恵器の壺蓋である。942はローリングによるためか、表面全体が摩滅している。943は一部欠損するが、完形に近いものである。IV層出土遺物はほとんどが小破片となっており、完形に近いものはこの1点のみである。945は須恵器の壺、946は須恵器の壺である。947は土師器の鉢である。全般的に表面が摩滅しているが、赤彩の痕跡が認められる。948～950は土師器の壺である。948と950は軟質で、内外面に赤彩が施されているが、949は比較的硬質の焼きとなっており、赤彩は認められない。951～953は土師器の皿である。いずれも内外面に赤彩が認められる。954と955は土師器の壺である。956は灰釉陶器の碗である。口縁部を欠くが、残存する体部下半の内外面に灰釉は認められない。10世紀頃のものであろう。

これらの遺物から、IV層は10世紀頃までの堆積層であると推測される。

(2) III層

III層は、砂を多く含む暗褐色土が堆積しており、数cm単位で砂が層状に堆積する部分も認められる。この時期、河川が比較的安定した穏やかな流れであったことが伺える。部分的にしか認められない場所もあるが、平均30cm程度の厚さで堆積している。III層の堆積により、河川の一段深くなっている部分については、中央付近が少し窪む程度で、ほぼ埋没してしまっている。

遺物は、IV層でみられた須恵器、土師器、灰釉陶器の他、山茶碗など中世の遺物が出土している。957～959は須恵器であり、957と958は蓋、959は高坏である。960は土師器の坏で、外面には赤彩が確認される。961は土師器の鉢である。962～965は灰釉陶器である。966～983は山茶碗で、いずれも渥美湖西産の製品である。966～979は碗、980は小碗、981～983は小皿である。時期としてはI期からIII～II期まで確認されるが、III～II期のものは少數である。984と985は片口鉢である。986は土師質土器皿である。坏形の形態のもので、厚手のつくりとなっており、口縁部には強いナデ調整が施されている。

III層では、13世紀後半までの遺物が確認できるが、全体の構成としては、13世紀前半までの遺物が大半を占め、13世紀後半の遺物も一部含まれている程度に過ぎない。後述する護岸施設やII層出土遺物などからみて、III層は13世紀の中頃（後半でも比較的早い段階）までに堆積したものとみてよいであろう。

(3) 護岸施設

III層の堆積後には、河川の両岸に護岸施設が築造されている。護岸施設は、基底部に打ち込まれた直立杭を芯材とし、主に粘土をブロック状に混ぜた土を積み上げることで構築されている。また、部分的にはあるが、杭列の間に敷設された木の枝などの構造材や矢板の使用も確認されている。深く打ち込まれたものをを中心に、芯材は比較的良好に残存するが、構築土については多くが後世の水流によって失われている。法面の残存する部分は確認されておらず、その構造については明らかでない。氾濫によって決壊している部分もみられるが、護岸施設の修築や改築の痕跡は発見されていない。

検出された芯材の杭列は、大きくA～Fに分けられる。

杭列Aは、東岸の北端で検出された杭列である（図116）。この部分は、II層の時期の氾濫（SR8002）によって大きく削られており、施設の本体は完全に失われ、深く打ち込まれた木杭がかろうじて残存する程度であった。細かくみると、河岸に平行する杭列が3列程認識できる。芯材には、いずれも丸杭が用いられている。直径4～7cmの比較的太い杭が多いが、太い杭だけが水流に流されずに残存した可能性もある。33本検出されており、樹種としてはマツが26本、エノキ属が2本、コナラ、キハダ、カヤノキ、ナナカマド、コジイが各1本と、マツが圧倒的に多い。

杭列B（図117）は、杭列Aの南側で検出されている。北側では岸から約2mの位置に打たれており、徐々に岸から離れるが、17m程下流の場所で屈曲し、再び岸に近づく。杭列Bの芯材には、丸杭と角杭が併用されている。木杭は合計102本発見されているが、角杭が44本と4割近くを占めている。太さは様々で、一辻7cm程の角材から、杭と言うよりは枝の先を尖らせたような、直径2cm程しかないものまでみられる。また、樹種に關しても、非常にバラエティーに富んでいる。樹種として最も多いのは、コジイで34本確認されている。次いで、マツが25本、スグリが19本、モミ属が9本と続く。さらにこれら以外にも、ユズリハが3本、スノキとエゴノキが2本、アセビ・ツツジ・エノキ・クマノミズキ・ウツギ属・コナラ・サカキ・アカガシ属・クリが各1本と、合計16種も確認されている。ただし、角材

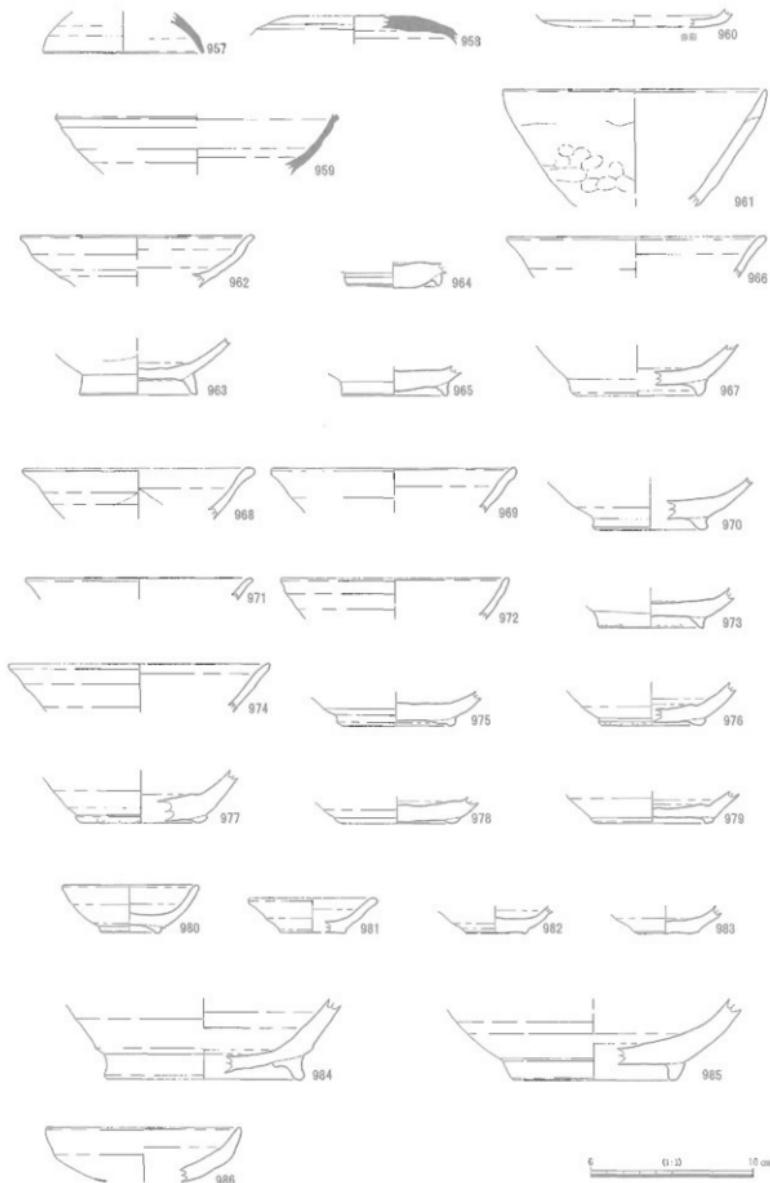


圖 115 SR8001 III層出土遺物

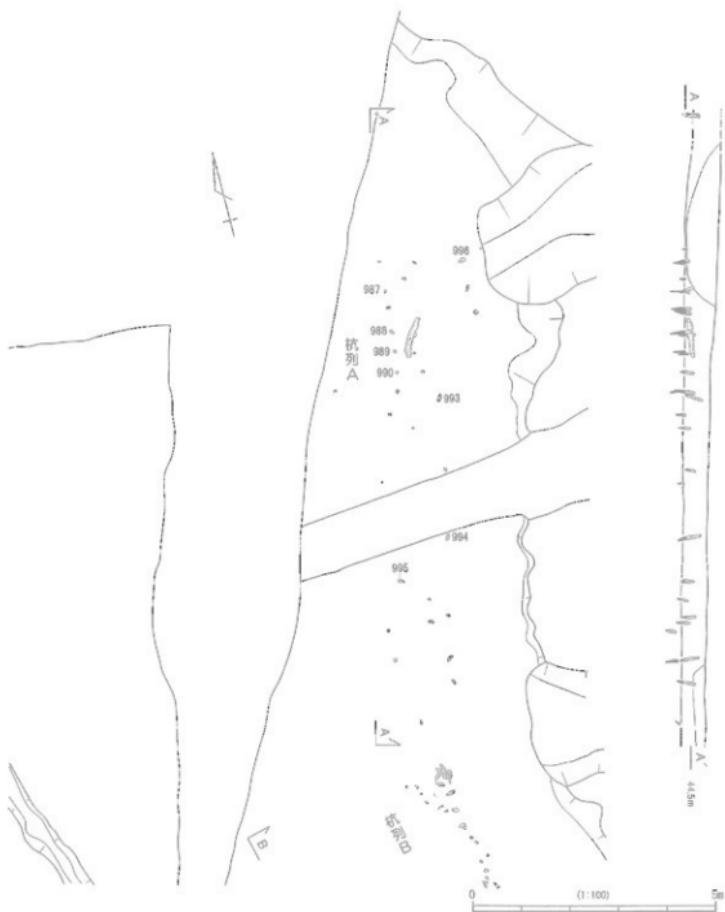


図116 SR8001 護岸施設構築材検出状況図（1）

の樹種はコジイとスダジイ、モミ属の3種に限られており、おそらくは転用材であろうが、ある一定の場所から調達された可能性が伺える。

杭列C（図117）は、杭列Bの対岸に位置している。約3m程の長さしか残らないが、杭列Bと平行するように両側が東に向かって屈曲しており、護岸施設によって、河川の流路を意識的にやや東向きに変えていた可能性が想定される。芯材はいざれも丸杭で、直径2cm程の細いものから、6cm程度の大きいものまでみられる。樹種は、ズグジイ・コジイ・シキミ・ウツギ・クスノキといった、マツ以外のものが使用されている。

杭列Bの中央付近と杭列Cでは、杭間に沿わせて置かれた枝が検出されている。いずれも長さ1m

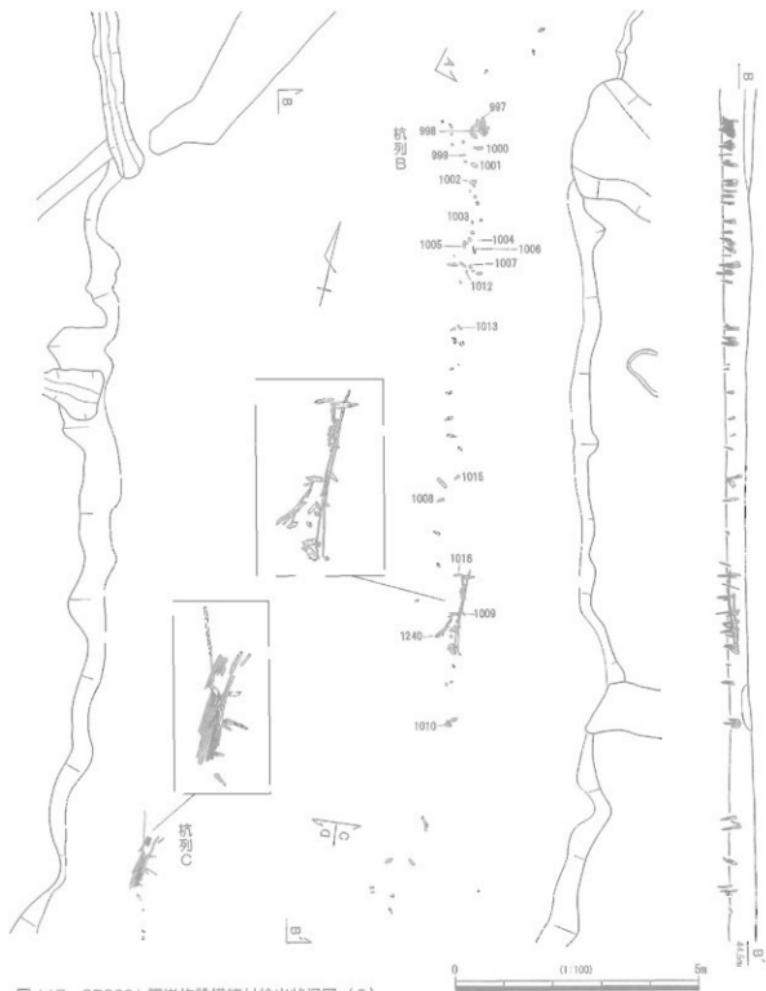


図 117 SR8001 護岸施設構築材検出状況図（2）

程度の枝で、杭列 C では数十本敷き詰められた状態で発見されている。これらの枝は、護岸施設の基底部に人为的に配置された構造材とみてよい。護岸施設の基底部や構築土内における有機物の有無については、この実測図以外に記録がなく不明とせざるを得ないが、この部分のみに特殊な工法が採用されたとは考えにくく、枝のほか草や樹皮などの構造材がもっと広い範囲で敷設されていた可能性が高いと推測される。

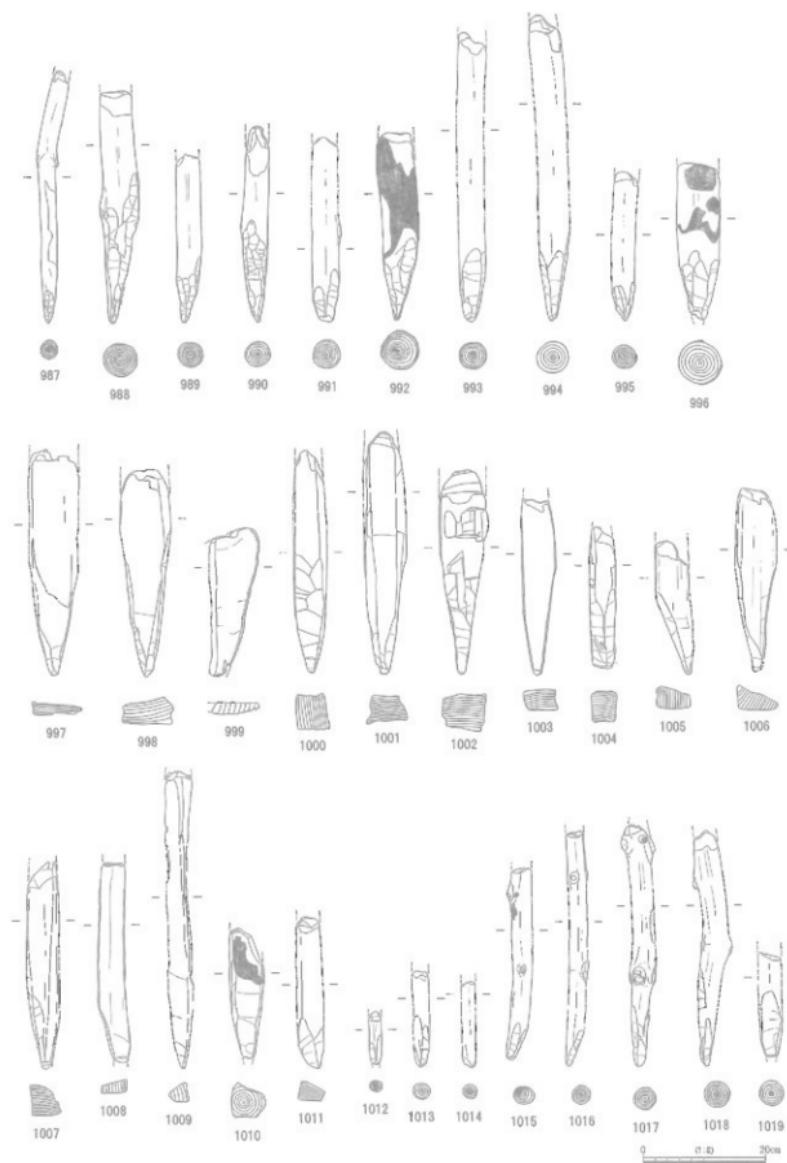


図 118 SR8001 跡地施設内出土木杭 (杭列 A・B)

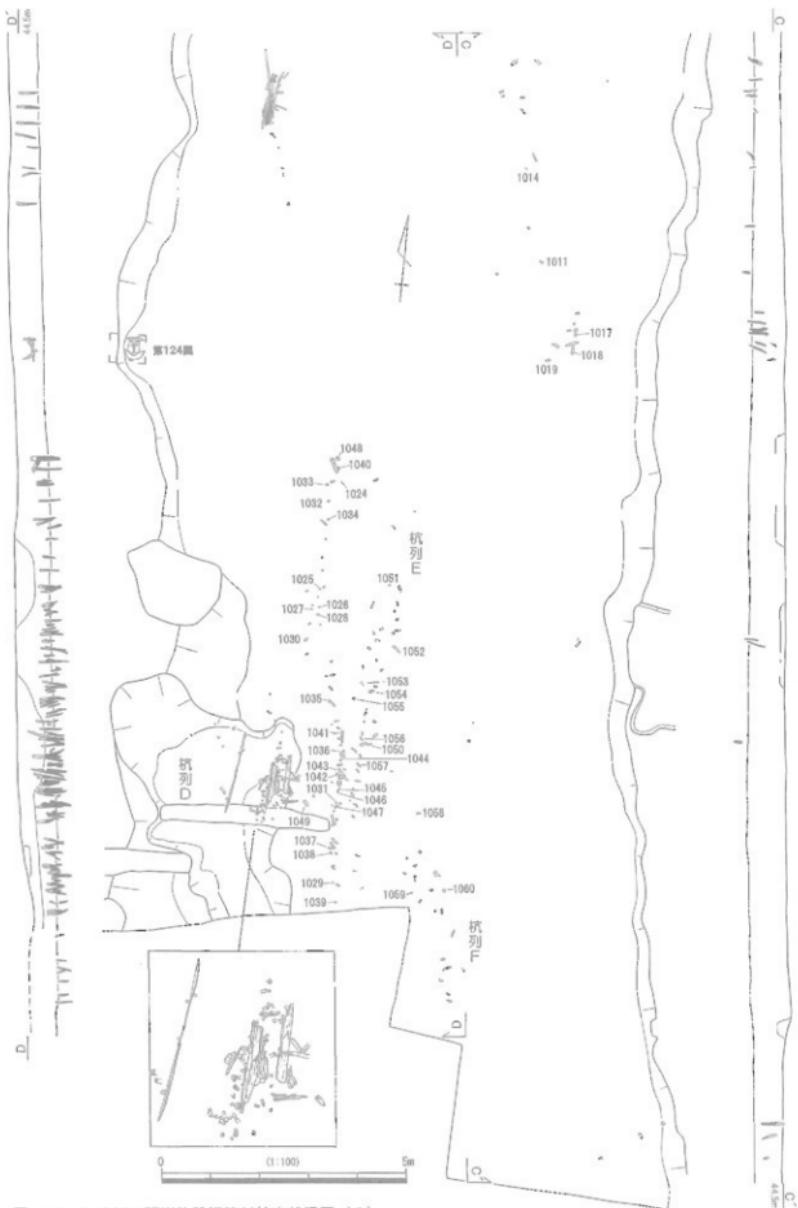


図 119 SR8001 護岸施設構築材検出状況図 (3)

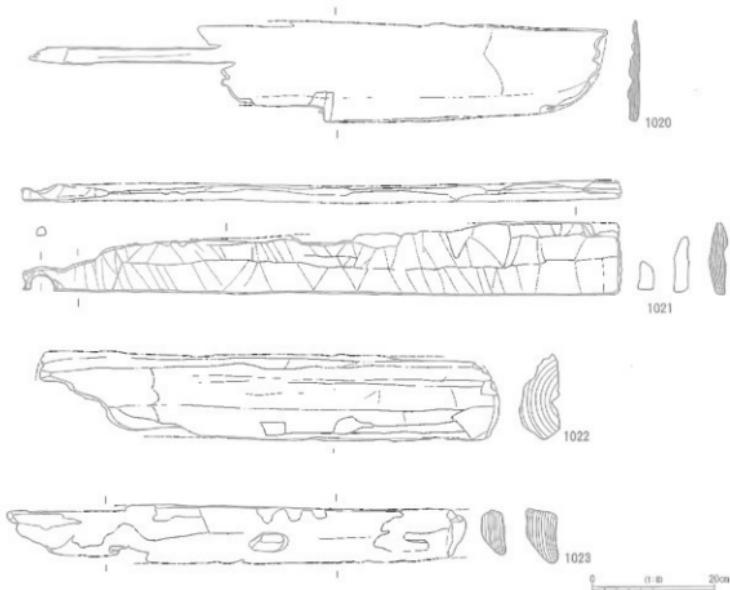


図 120 SR8001 護岸施設内出土矢板（杭列 D）

杭列 D（図 119）は西岸の南端に位置しており、矢板も検出されている。上部が後世の水流によって失われており、最下段が残存するのみである。矢板は杭によって挟み込むような形で固定されている。一見階段のようにも見えるが、矢板は護岸の構築土で埋め殺しされており、護岸施設の内部構造であるとみて間違いない。矢板を用いた構造が検出されたのは杭列 D のみであり、全体からみるとやや特殊な構造であるといえる。この場所は、護岸の築造以前には、河岸が崩落して大きく抉れた状態となっており、より強固な構造とするために、このような工法が用いられたものと推測される。矢板に用いられている板材は、長さ 70cm～1m、幅 9～16cm の大きさのもので、厚さは 2cm 程度のものから 6cm 程の厚いものまで様々である。ほぞ穴がみられるものもあり、多くは転用材が利用されているものと推測される。樹種については 1020 と 1021 がヒノキ、1022 はスグアイ、1023 はコジイとなっており、いずれも建築材として利用される樹木である。

杭列 E（図 119）は杭列 D の東側に位置しており、非常に多くの芯材が検出されている。平行する 3～4 行列の杭の並びが認識できる。杭は合計 111 本発見されており、角杭が 4 本認められるが、他は全て丸杭である。太さは 2cm 以下の細いものから、8cm 程もある太いものまで様々である。樹種も多様であるが、最も多いのがマツで 61 本、次いでシキミが 17 本となっており、この 2 種で全体の約 7 割を占めている。

マツを多用する傾向は杭列 A・B などにもみられるが、シキミが多く用いられているのは杭列 E の特徴と言えよう。他には、マンサクが 4 本、コジイ・カキノキ・クリが各 3 本、コナラ・サクラ・ヤマザクラ・クスノキ・スグアイが各 2 本、カマツカ・アカメガシワ・ユズリハ・ツツジ・ヤマモガシ・ミ

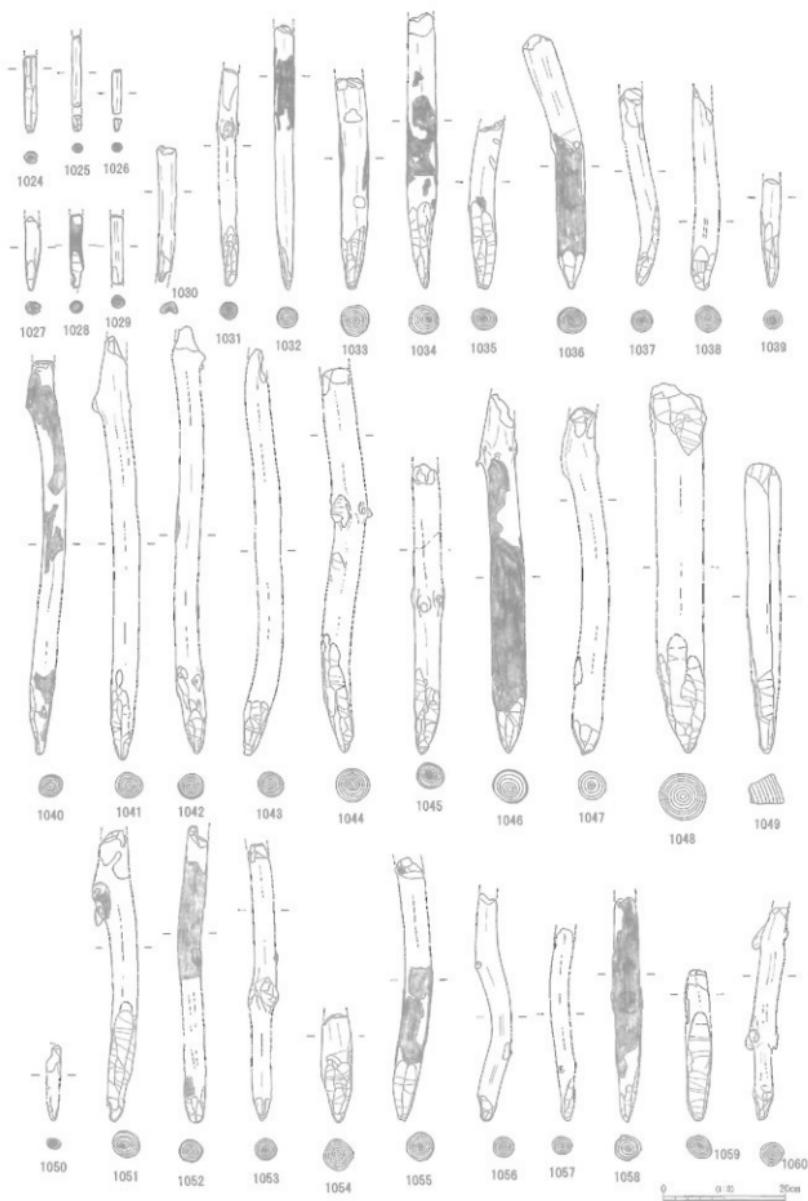


図 121 SR8001 築岸施設内出土木杭 (杭列 E・F)



図 122 SR8001 護岸施設構築材出土位置図（杭列 G）

ズキ・イヌシデ・エゴノキ・サカキ・イボタノキが各 1 本と、全部で 21 種もの樹種が確認されている。

杭列 F（図 119）は、杭列 E のさらに東側に位置する。周辺に護岸構築土は検出されていないが、杭列 E とはほぼ平行しているなどの位置関係から、護岸施設の芯材であると判断される。杭がⅢ層の上面から少し出る程度にしか残存していないことからも、護岸構築土は流失してしまったものと推測される。杭は合計 22 本検出されており、すべて丸杭である。ほとんどが、直径 4～5 cm 前後の太さのものである。樹種は同定を行った 14 本中、マツが 10 本と大半を占めている。マツ以外の樹種としては、クリが 3 本とナシ亜科が 1 本確認されている。

大津 SD2001 の排水溝が注ぎ込む 2 区にも、護岸施設の芯材が検出されている（杭列 G・図 122）。部分的な調査のため明確でないが、複数列存在していることが確認される。後世の水流によって、構築土や芯材の多くは流失しているが、河岸から 5 m 以上の幅で強固な護岸施設が構築されていたことがわかる。芯材は合計 25 本検出されており、角杭は 1 本のみで基本的には丸杭が用いられており、丸太を半裁した割材も一部確認できる。太さは様々であるが、多くが直径 5～6 cm 程の杭で構成されている。樹種は細枝状の 1064 がシキミ、同じく細枝状の 1061 と割材の 1070～1072 がの 4 本がヒノキ、角杭の

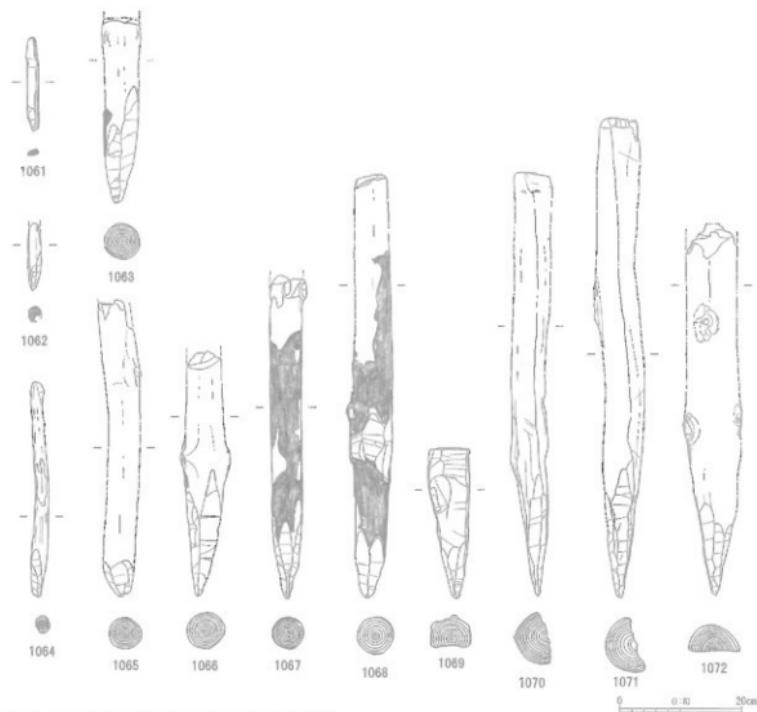


図 123 SR8001 護岸施設内出土木杭（杭列 G）

1069 がクリである他、丸材は全てマツが用いられている。

西岸の護岸施設内からは、螺旋軸と呪符木簡とヤダケが発見されている。軸は組み上げられた状態で、前輪を北に向けて置かれている。軸の主軸方向は、ほぼ真北を示している。前輪・後輪ともに爪先は、ほぼ河岸に接している。各部材を固定していた革紐は、腐敗によって失われておらず、残存していない。軸はほぼ組み上げられた状態を保持しているが、後輪はやや後方へ倒れ込む状態になっている。居木は、後方がやや下へ落ち込んでおり、前輪に接して力の掛かる前方の居木先部分が折れてしまっている。呪符木簡とヤダケは、軸の下から出土している。呪符木簡は、すべて先端を北、表を上にして、5枚重ねた状態でヤダケの上に置かれていた。ヤダケは8本発見されており、左居木の下に揃えて置かれている。形状は保っているが、遺存状態が悪く、全体が平らにつぶれた状態となっていた。長さは50cm程度で、両端部は欠損している。いずれも、河岸には接しておらず、4cm程浮いた状態で出土している。下の土層は暗褐色土を多く含んでいることから、下に草などの有機物が敷かれており、それが土壤化したために浮いた状態になった可能性が高い。

これらは、上層からの掘り込みが検出されておらず、護岸施設の構築土で覆われている。護岸施設の築造前に河岸に納置され、工事の際に構築土で被覆されたものとみて間違いない。もちろん、通常の工事と同様に、無造作に土を盛って突き固めた場合、このような状態で軸の原形が保たれる事はないで

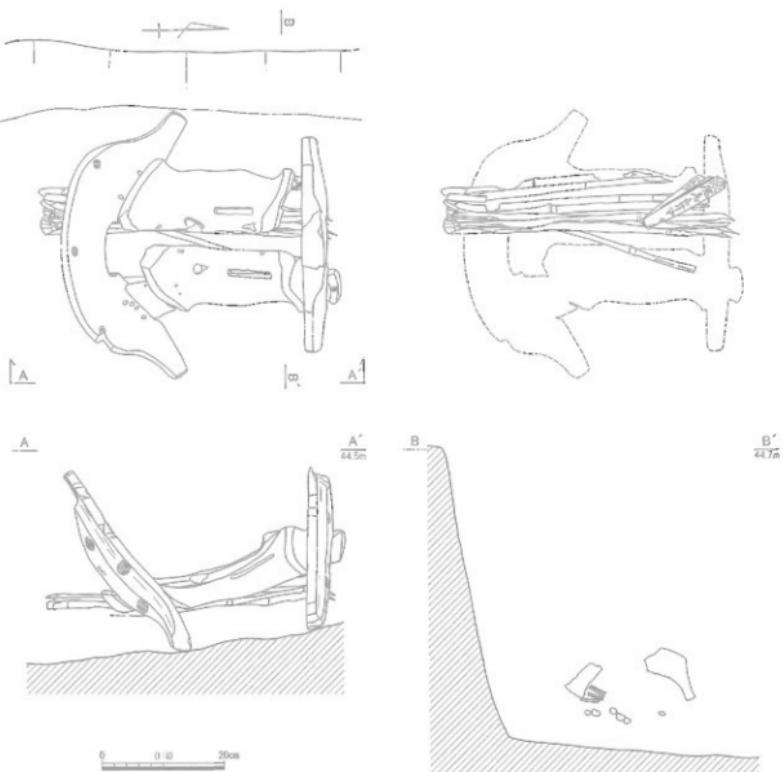


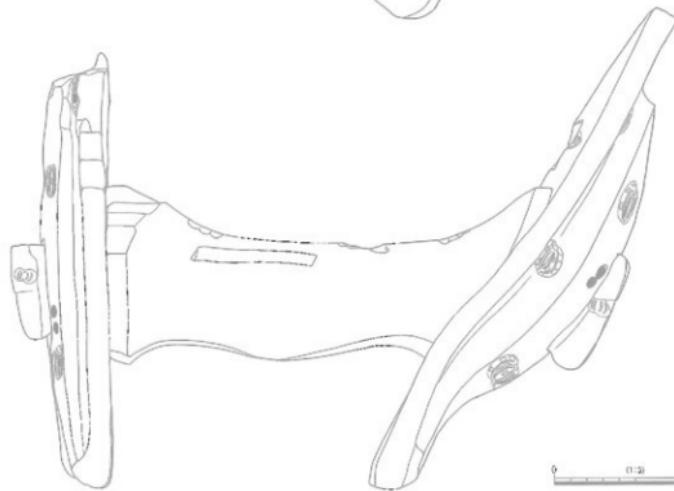
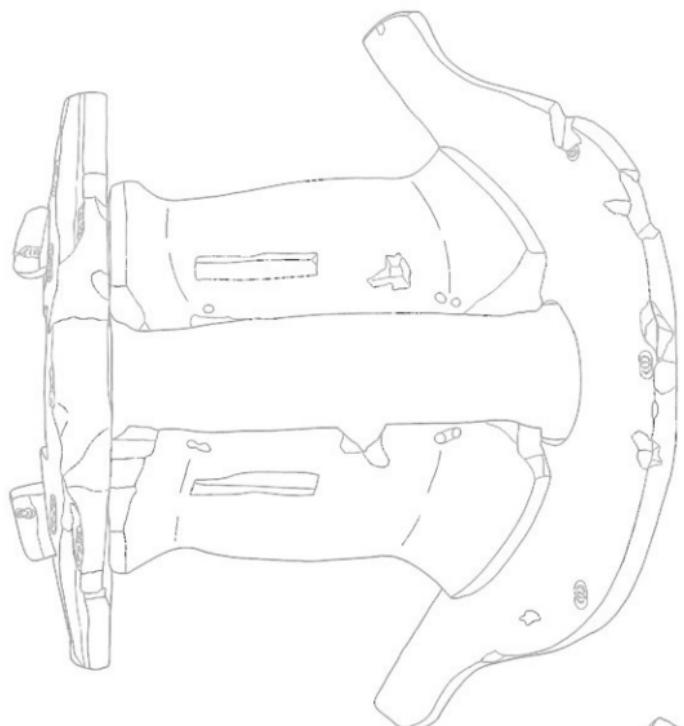
図 124 SR8001 蝶継鞍出土状況図

あろう。土層では明確に認識できていないが、例えば綫の周囲を塚状に被覆するなど、他とはやや異なった工法が採られたものと推測される。また、綫の周囲には、護岸の構成土は良好に残存しているものの、芯材は全く検出されていない。このことも、この周辺の工法が、やや異なっていたことを示していよう。

蝶継鞍は、前輪と後輪、居木2枚が完存している。組み上がった状態（図125）での大きさは、前輪の復元高30.6cm、後輪の高さ29.4cm、乗間（両輪の山形先端間の長さ）は33.6cmである。

前輪（1073）は、調査時に山形を欠いているが、他は完存している。海と磯の境に明瞭な段差を有し、肩の比較的高い位置に2段に削った手形が設けられている。爪先間33.2cm、復元高30.6cm（現存高26.5cm）、磯の洲浜形の部分の厚さは4.0cmである。左右の爪先付近には鞍穴が設けられており、馬膚の居木を受けるための左右の切り込みには、居木結束用の紐通し穴が2つ穿たれている。漆は、馬膚を除くほぼ全面に施されているが、外周と内面の居木が当たる部分は明らかに漆が摩滅しており、一部木地が露出する部分もみられる。

後輪（1074）は、爪先間40.4cm・高さ34.7cmの大きさで、洲浜形の部分の厚さは4.0cmである。海



0 1:2 10cm

図 125 SR8001 出土錫銅鉢（組み上げ時）

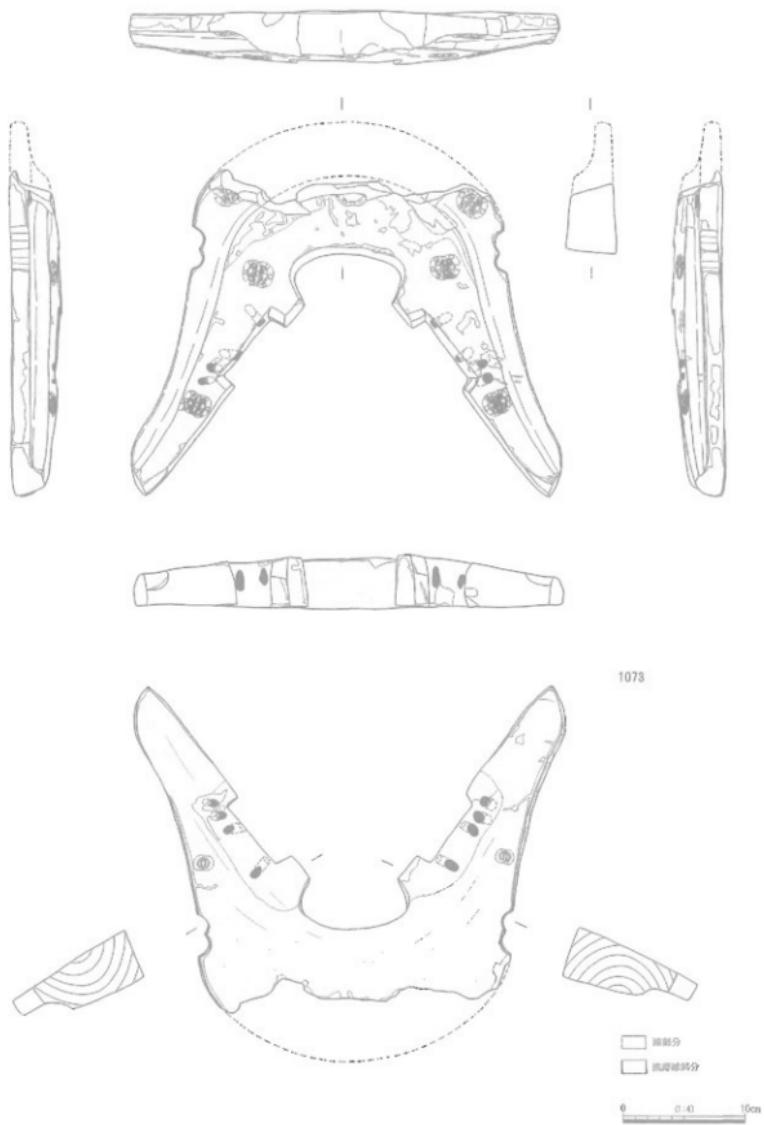
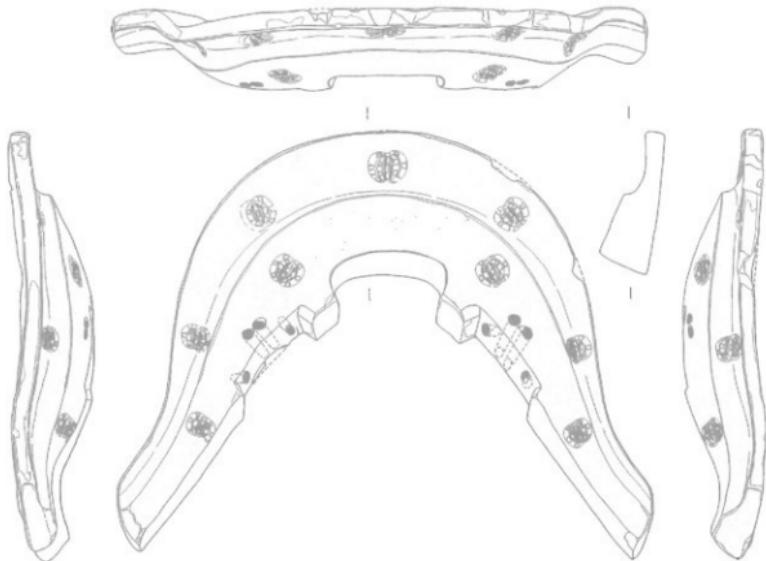
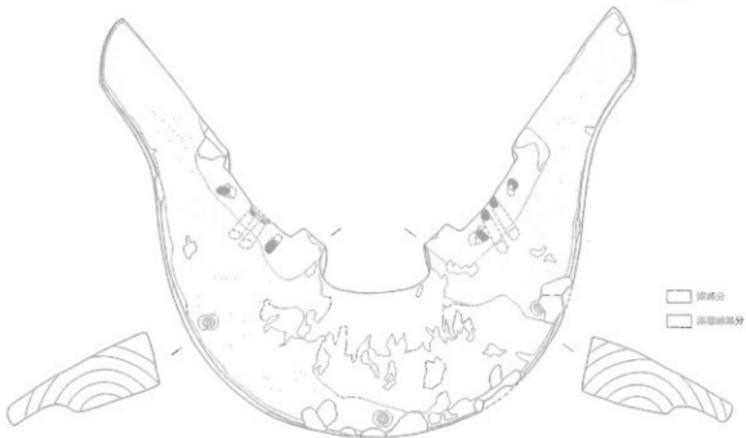


図 126 SR8001 出土螺鈿鞍（前輪）



1074



0 1cm 10cm

图 127 SR8001 出土青铜鞍（後輪）

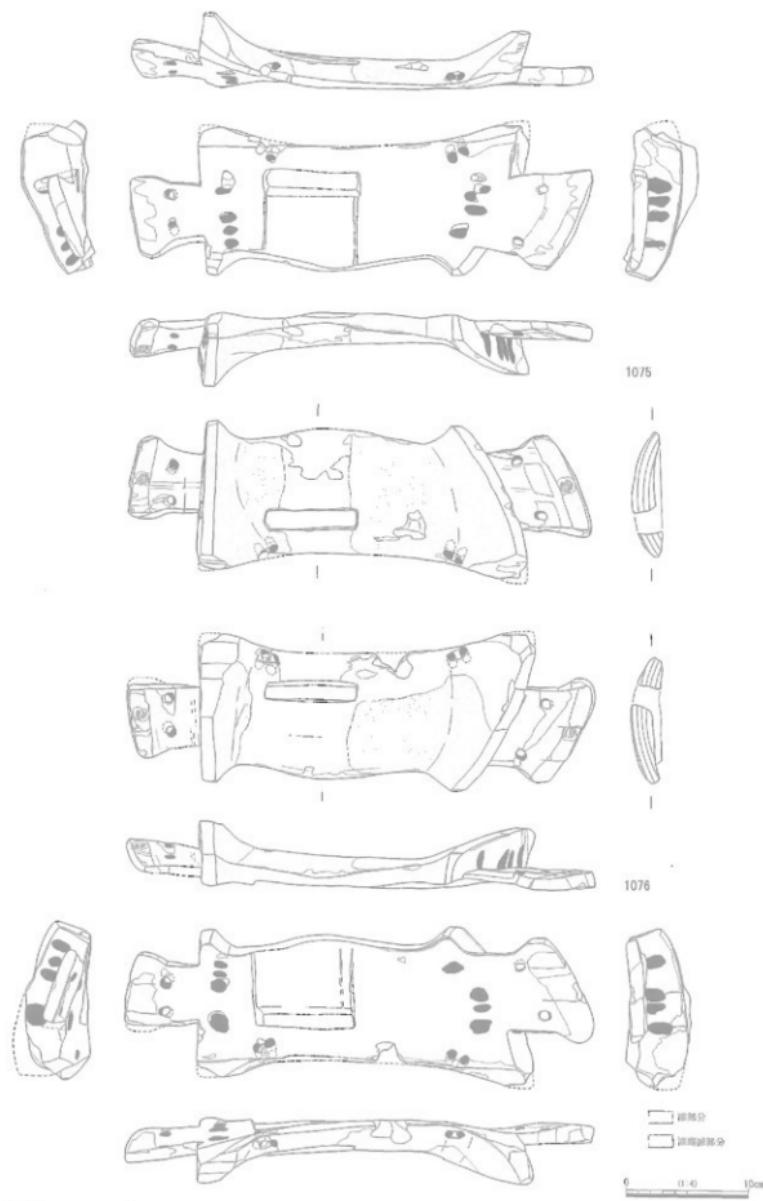


図128 SR8001 出土鐵鞍（唐木）

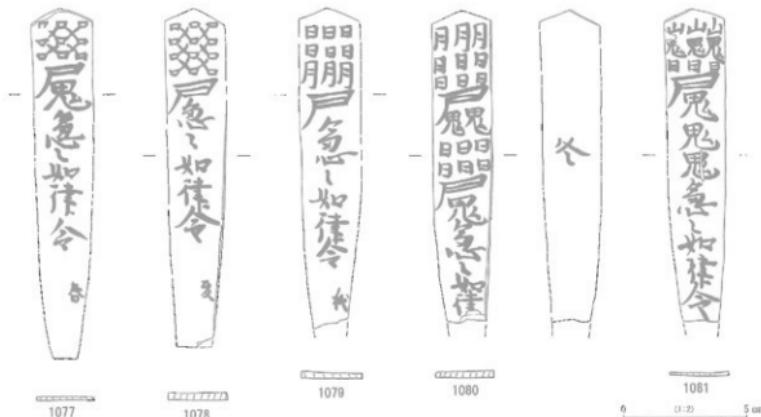


図 129 SR8001 出土呪符木簡

と穢の境に明瞭な段差を有しており、立体的に重厚なつくりとなっている。居木を受けるための切り込みの斜め上方には、軸穴が設けられている。切り込み面から内面に向かっては、居木結束用の紐通し穴が2つ穿たれている。前輪と同様に、馬膚を除く全面に漆が施されているが、後輪では外周と居木が接する部分の他、内面の洲浜形の周辺にも漆の摩耗が確認される。

居木(1075・1076)は二枚居木で、左側が幅10.3cm・長さ38.5cm、右側が幅10.2cm・長さ38.0cmと、比較的狭いつくりとなっている。居木裏には、力革通穴から外側に切れ目が彫り込まれている。居木表のやや後輪寄りの位置には、左右ともに穴が穿たれている。穴に土が詰まった状態で出土しており、埋納時には既に穴が存在していたとみて間違いない。この穴に実用的な意味は見出せないことから、埋納祭に伴うものである可能性が高いと推測される。前後の側面には、軸穴と居木結束用紐通し穴が2つずつ、居木裏に向かって斜めに穿たれており、居木結束用紐通し穴は居木先にも設けられている。前輪や後輪の穴の位置に合わなかつたためか、いくつかの穴には掘り直しの痕跡が認められる。漆は基本的に、前輪と後輪が取り付く部分を除く、居木表と居木先の先端に施されている。居木裏にも確認されるが、ごく一部に薄く塗布されている程度である。居木表の漆は全体的に摩滅している部分が多いが、特に力革通し穴の周辺は摩滅が著しく、木地が露出する部分もみられる。

螺鈿文様はいずれも瓜文で、大小2種類が確認できる。大きな文様は、縦20~25cm・横24~32cmの大きさで、すべて両輪の外側に配されている。小さな文様は、縦1.0~1.2cm・横1.4~1.6cmと小さく、斑点が描かれないとやや簡略化された文様である。両輪の内側と居木先に配されている。螺鈿自体は完全に消失しているが、文様の凹部の深さから、薄手の厚貝が装着されていたものとみられる。凹部には漆が確認でき、螺鈿の装着法が漆地螺鈿であったことがわかる。

呪符木簡は、上から1077から1081の順で5枚重ねられた状態で出土している。いずれも上部は圭頭形で、下部で徐々に幅が狭くなる形態を呈している。1079~1081は下部を欠損しているが、長さは1077が14.3cm、1078が13.8cmで、上部の幅はいずれも約25cmである。ヒノキの薄板が用いられており、厚さは1.5~3mmと薄い。文字の基本的な構成は、符籙+呪句(「急々如律令」)となっている。さらに、1077~1079の右下にはそれぞれ「春」「夏」「秋」、1080の裏面には「冬」という季節を示す文字が記

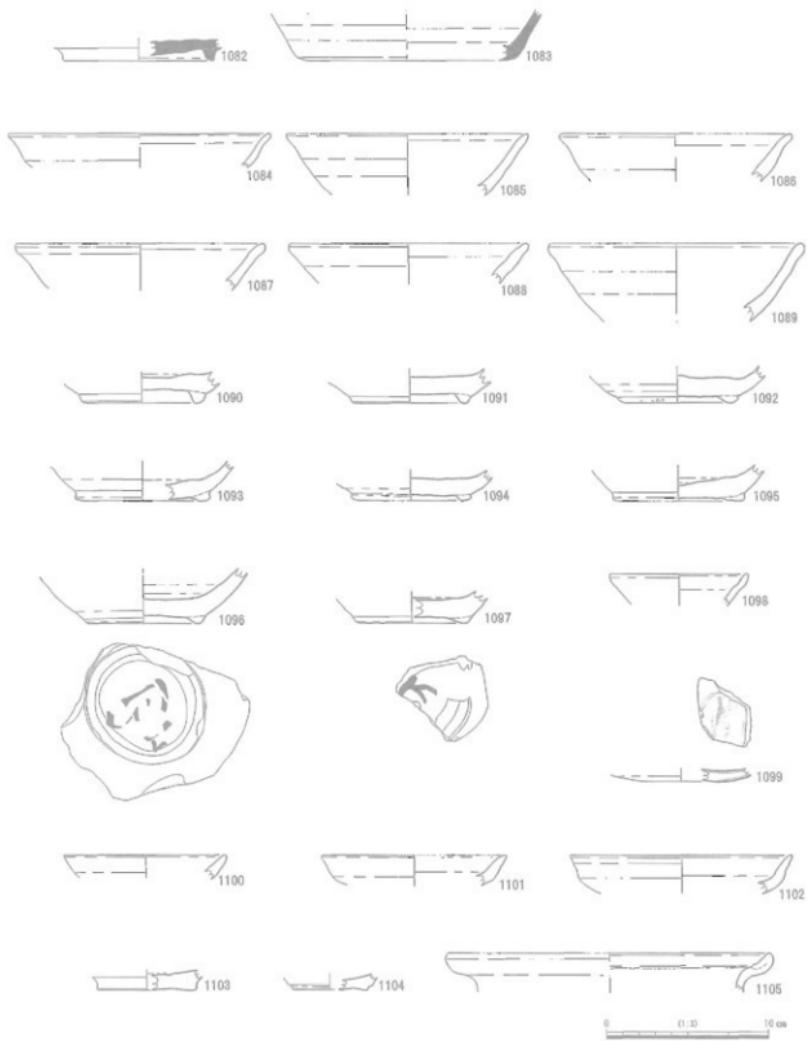


図130 SR8001 築岸施設構築土出土遺物

されている。個別の呪符の内容は明らかでないが、藤原宮西方官衙地区井戸 SE8431 出土の呪符木簡に描かれた「羅櫃」と推定されている符籙と、1077 に書かれている符籙が近似している点は興味深い。

螺鈿軒と呪符木簡とヤダケは、護岸施設の構築時に埋納されており、護岸工事の際に行われた地鎮祭祀等に伴う遺物とみて間違いない。

また、護岸施設の構築土中からも、点数は少ないが遺物が出土している。1082 と 1083 は、須恵器の坏である。1084～1098 は山茶碗で、Ⅲ-1 期までのものが多いが、Ⅲ-2 期のものも一部確認できる。1096 と 1097 は底部外面に墨書きが認められる。いずれも断片的にしか残らないため、文字の判読は困難である。1099 は青磁の皿である。底部は無高台で釉が削り取られており、内面には備目文がみられる。いわゆる同安窯系の青磁である。1100～1102 は、非ロクロ成形の土師質土器皿である。1101 は比較的硬質の焼きとなっているが、1100 と 1102 は軟質で表面の座誠も著しい。いずれも、口縁部には強いナデ調整が施されている。1103 と 1104 はロクロ成形の土師質土器皿である。1105 は伊勢型鍋で、口縁部は折り返し部分にのみナデ調整が施されている。遺物はいずれも破片であり、埋納品として認識できるものはない。構築土中に混ざり込んだ遺物とみてよい。遺物の構成としては、前述のⅢ層と大きく違いは見受けられない。護岸施設が築造された時期は、13世紀後半でも早い段階、13世紀の中頃とみてよいであろう。

(4) Ⅱ層

Ⅱ層は、主に砂礫を多く含む暗褐色土である。複数回にわたって、多量の土砂が堆積しており、東岸では決壊して河川が氾濫した痕跡 (SR8002) が認められる。砂礫層の間には、流出した護岸構築土の堆積が確認できる。Ⅲ層の段階で比較的安定していた河川の水量は、この時期大幅に増しており、護岸施設の大部分はⅡ層の水流によって失われている。

遺物は、Ⅲ・Ⅳ層に比べて豊富に出土している。1106～1109 は須恵器である。1106 は盤、1107 は壺の底部である。1108 と 1109 は坏の底部で、外面に墨書きが確認される。1108 は断片のため読みきれないが、2 文字以上の存在が認められる。1109 は「牧主」と読める。恐らくは人名であろう。1110 と

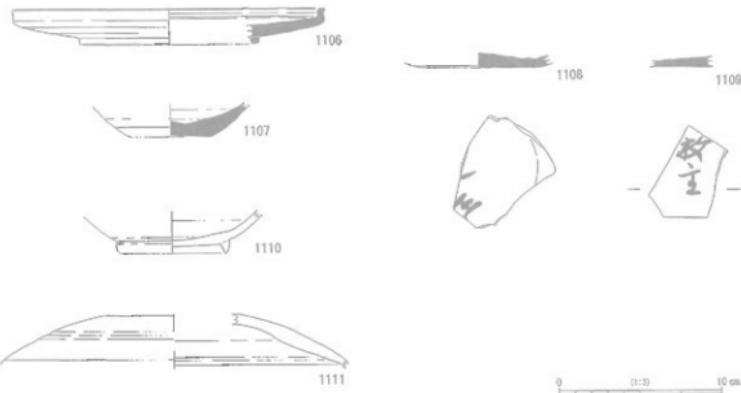


図 131 SR8001 Ⅱ層出土遺物 (1)

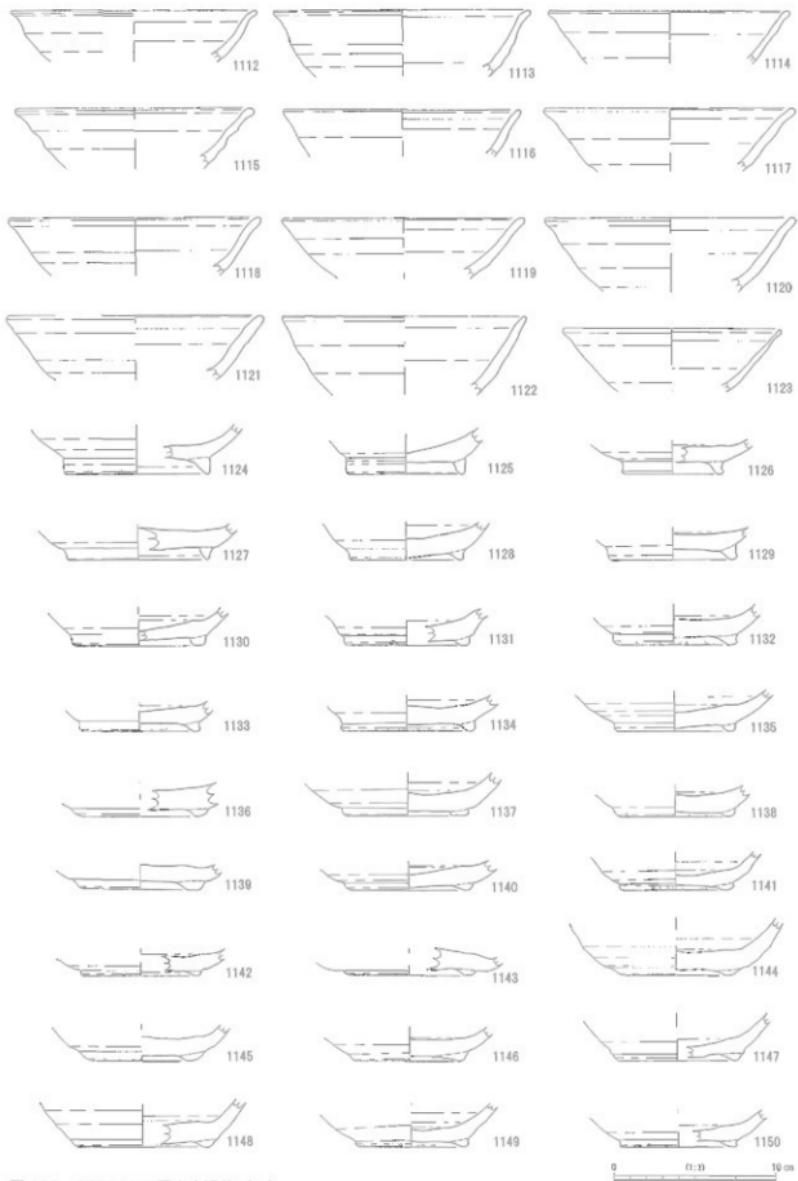


図 132 SR8001 II層出土遺物 (2)

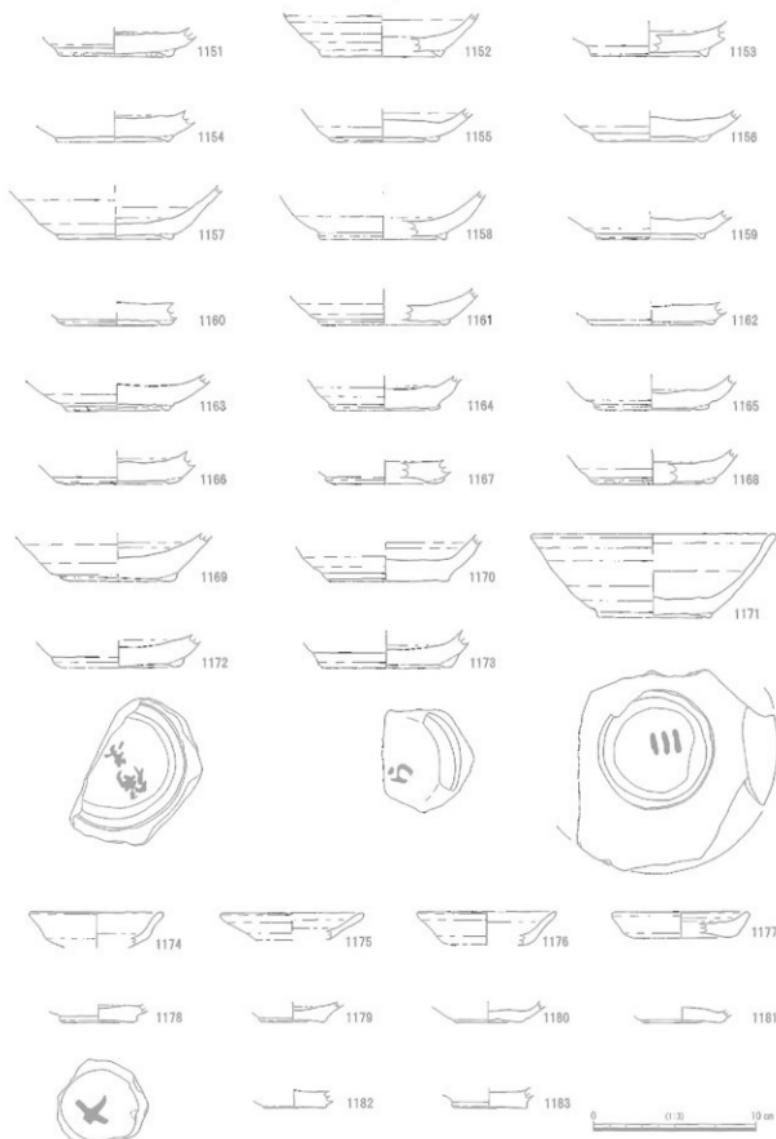


图 133 SR8001 II 层出土遗物 (3)

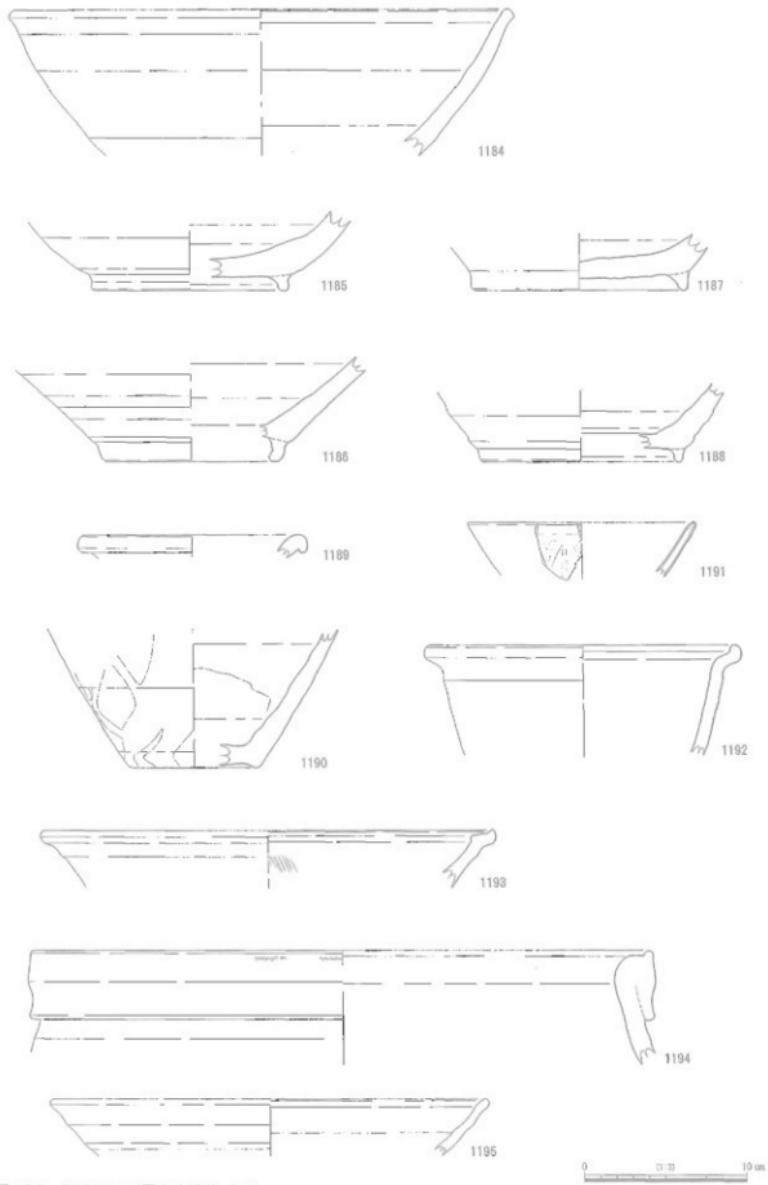


図134 SR8001 II層出土遺物（4）

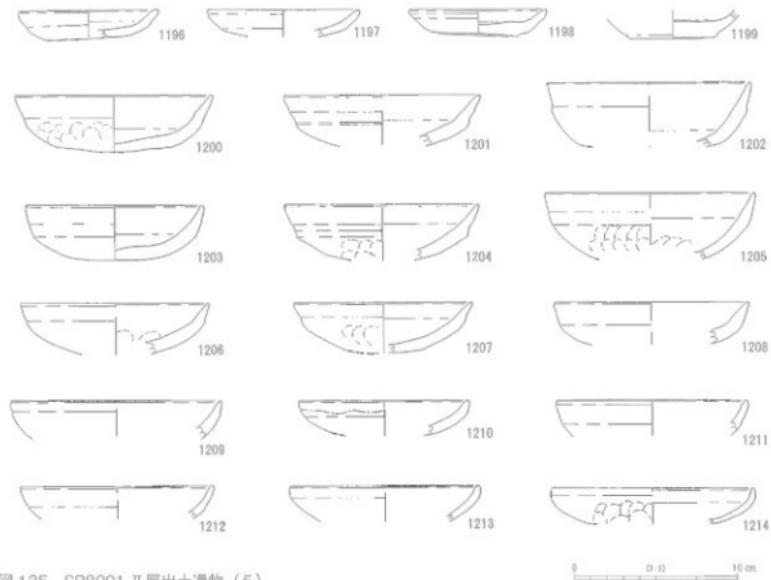


図 135 SR8001 II 層出土遺物 (5)

1111 は灰軸陶器で、1110 は碗、1111 は壺の肩部である。

1112 ～ 1183 は山茶碗である。1112 ～ 1173 は碗、1174 ～ 1183 は小碗および小皿であり、東達江窯とみられる 1152 を除き、すべて渥美湖西産の製品である。時期としては、I ～ II 期のものも少量みられるが、大半が III 期のもので、中でも III ～ 2 期のものが多く出土している。1113 には、内面と外面の一部に炭化物の付着が認められる。1126・1155・1162 には、表面に煤が付着し、断面の色調が赤色や黒色に変化するなど、被熱の痕跡が明瞭に確認できる。1167 と 1170 には、薄い塗膜状の黒色物質が付着している。成分分析は実施していないが、漆または鉄分が吸着したものと推測される。1171 ～ 1173 の底部外面には、墨書が認められる。1171 は「三」、1172 は「得米」と判読できる。1173 は断片のため明確でないが、「分」であろうか。

1184 ～ 1188 は片口鉢である。1184 ～ 1186 は渥美湖西産、1187 と 1188 は知多産の製品とみられる。1189 と 1190 は、渥美産の壺である。1191 は青磁の碗である。外面には鏽遷弁文が施されている。1192 は古瀬戸の片口で、後 I ～ II 期のものである。1193 と 1195 は古志戸呂窯産の製品で、1193 は擂鉢、1195 は直線大皿である。1194 は常滑産の壺で、15 世紀後半のものである。

1196 ～ 1214 は土師質土器皿である。ロクロ成形と非ロクロ成形がみられるが、ロクロ成形のものは 1096 と 1106 の 2 点のみである。1196 と 1197 は、口径 8 cm 前後の小型のものである。口縁部には明瞭なナデ調整が施されている。1200 ～ 1209 は、口径 12 cm 前後で、坏形の形態を呈するものである。厚手のつくりで、口縁部には強いナデ調整が施されている。1210 ～ 1214 は、口径 12 cm 前後の中型のもので、浅い皿状の形態を呈するものである。薄手のつくりであり、比較的硬質の焼きのものがみられる。坏形のもの程強くはないが、口縁部には明瞭なナデ調整が施されている。

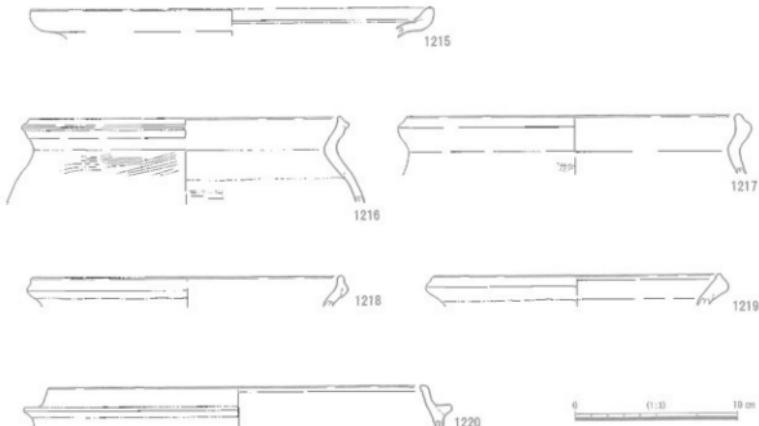


図 136 SR8001 II層出土遺物（6）

1215 は伊勢型鍋で、口縁の折り返し部にのみナデ調整が施されている。1216～1219 は、くの字形内耳鍋である。1216 と 1217 には、体部にハケ目調整が施されている。1220 は内彎形の羽釜である。内耳鍋の破片は一定量存在するが、明確に内彎形内耳鍋や半球形内耳鍋と認識できるものは認められない。

II 層では、瓦も出土している。大溝 SD2001 などで出土している瓦と、同じ特徴を有するものである。1221～1230 は丸瓦である。明確に有段式(玉縁式)と認識できるものではなく、いずれも無段式(行基式)の丸瓦であると推測される。凸面はナデ調整で、凹面には布目と吊り紐痕が認められる。1221 と 1222 は狹端部の破片で、狹端から 7 cm 程の位置に釘穴が設けられている。狹端面には少量の離れ砂の付着が認められる。紐の痕跡が同一であり、同じ布袋が用いて製作されていることが分かる。1223・1224・1226～1228 は側端部の破片である。いずれも、凹面の側端側には面取り調整が施されている。1223 と 1225 には、同一の吊り紐痕が確認できる。布に隠れている長さを 1 とした時の、布から出た部分の吊り紐の比率は 0.7 となっている。1225 と 1223 の凸面には、繩目叩きの痕跡が残存する。

1231～1238 は平瓦である。いずれも凹凸両面には、離れ砂の付着が認められる。1231～1235 は、縱長斜格子の叩き目が残るものである。1231 と 1232 には、格子内に「大」の字が認められる。1231 と 1233 は側端の残る破片で、凹面の側面側に幅広の面取り調整が施されている。1237 は、横長斜格子の叩き目が残るものである。格子内には、断片のため明確でないが、記号または文字の存在が認められる。1237 と 1238 は、縱長斜格子 + 横線の叩き目が残るものである。1234・1236・1238 には、断面に煤が付着するなど、被熱の痕跡が明瞭に認められる。

1239～1249 は木製品である。1239 は薄板状の木製品で、表面の腐食が著しく墨書きは確認できないが、籠塔婆である可能性が高いと推測される。欠損部は多いが上端は主頭形で、下端は先端に向けて細く尖る。ヒノキの柾目材が用いられている。1240～1242 は、曲物の側板である。いずれも、ヒノキが用いられており、木釘穴が空けられている。1242 には縦じ皮用の穴も確認できる。1243 は曲物の底板である。

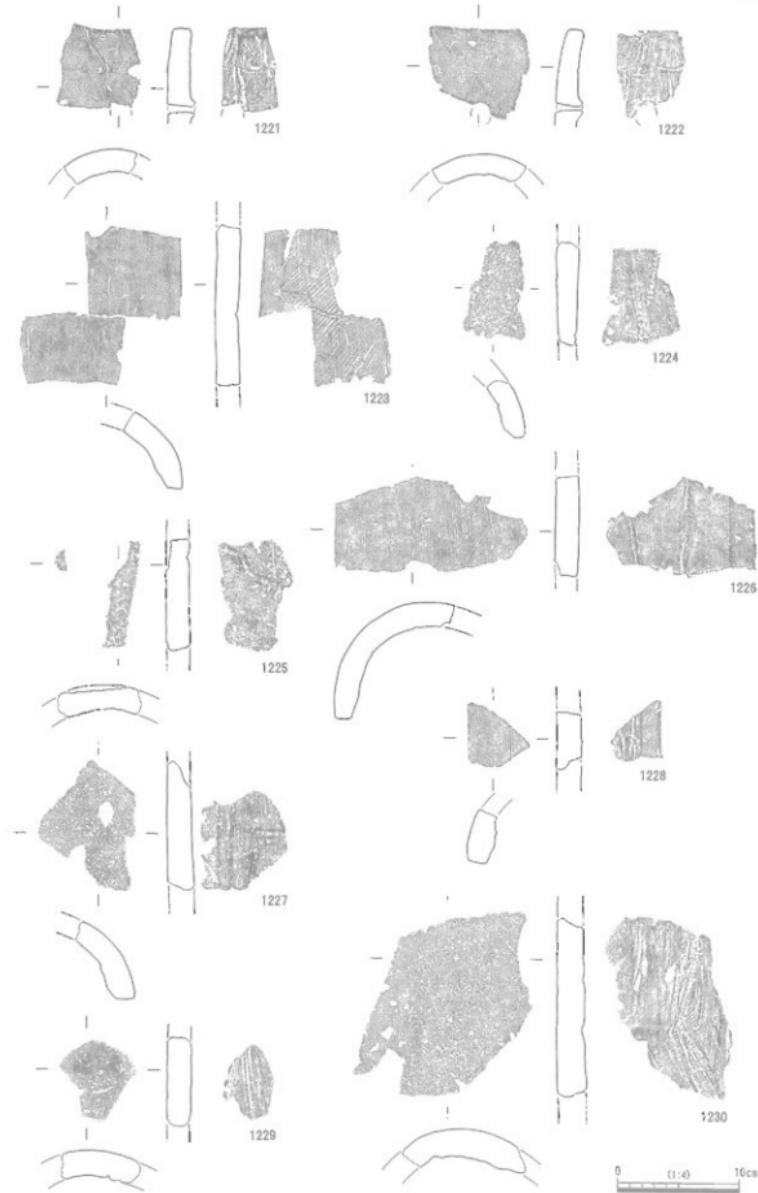


図 137 SR8001 II 層出土瓦 (1)

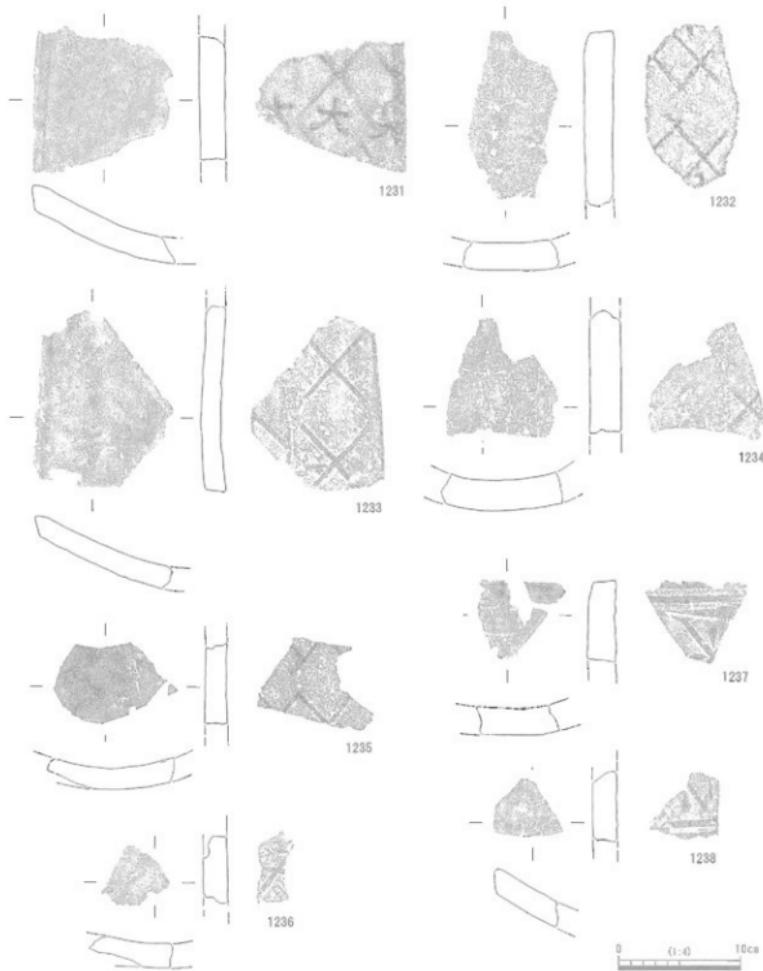


図 138 SR8001 II層出土瓦 (2)

ヒノキの柾目材で、直径約13cmの小型のものである。1244は草履芯である。ヒノキ材が用いられており、周縁は曲線状に仕上げられている。1245は箸状木製品で、約15cm残存するが、先端側は欠失している。1246と1247は用途不明の薄板である。1246にはサワラ、1247には二葉松類が用いられている。1248は、いわゆる有頭棒状木製品である。一辺約2.5cmのヒノキの角棒で、端部は丸く削られている。1249は剣物である。断片ではあるが、残存部の形状から、方形または長方形の大型の容器であると推測され

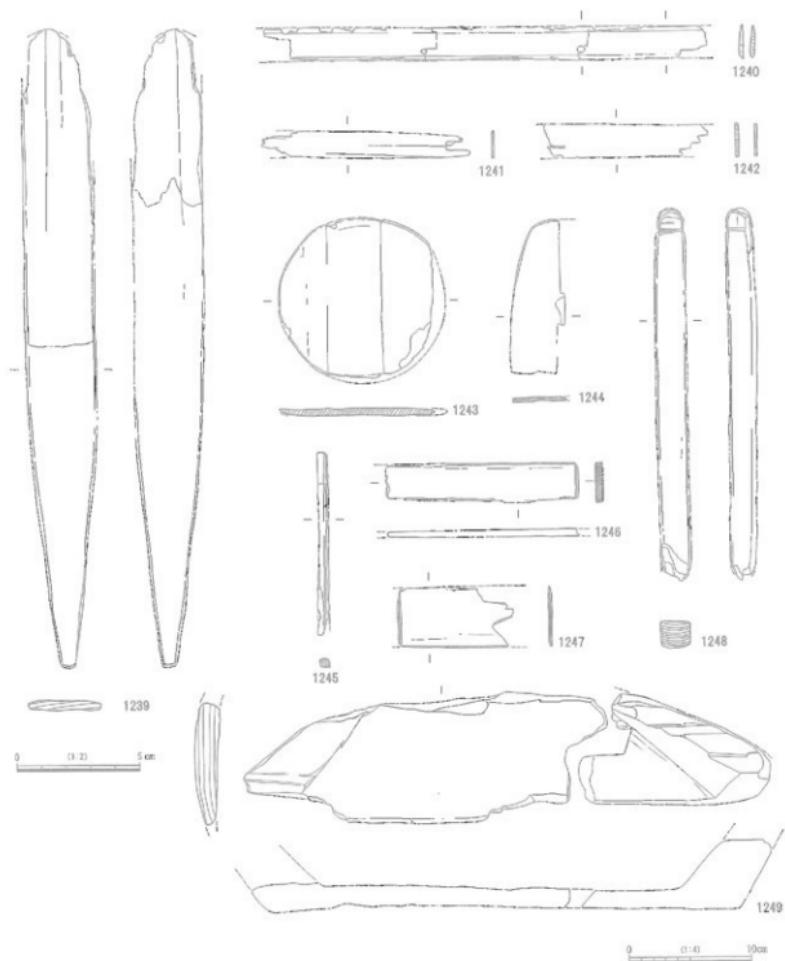


図 139 SR8001 II 層出土木製品

る。材にはアカマツが用いられている。

このように、II層では、数量的には13世紀代の遺物が多いが、確実にそれ以降の遺物も含まれており、その下限の年代は15世紀後半となっている。水流によって多少の遺物の攪拌は想定されるものの、II層については、15世紀後半頃までの堆積とみてよいであろう。

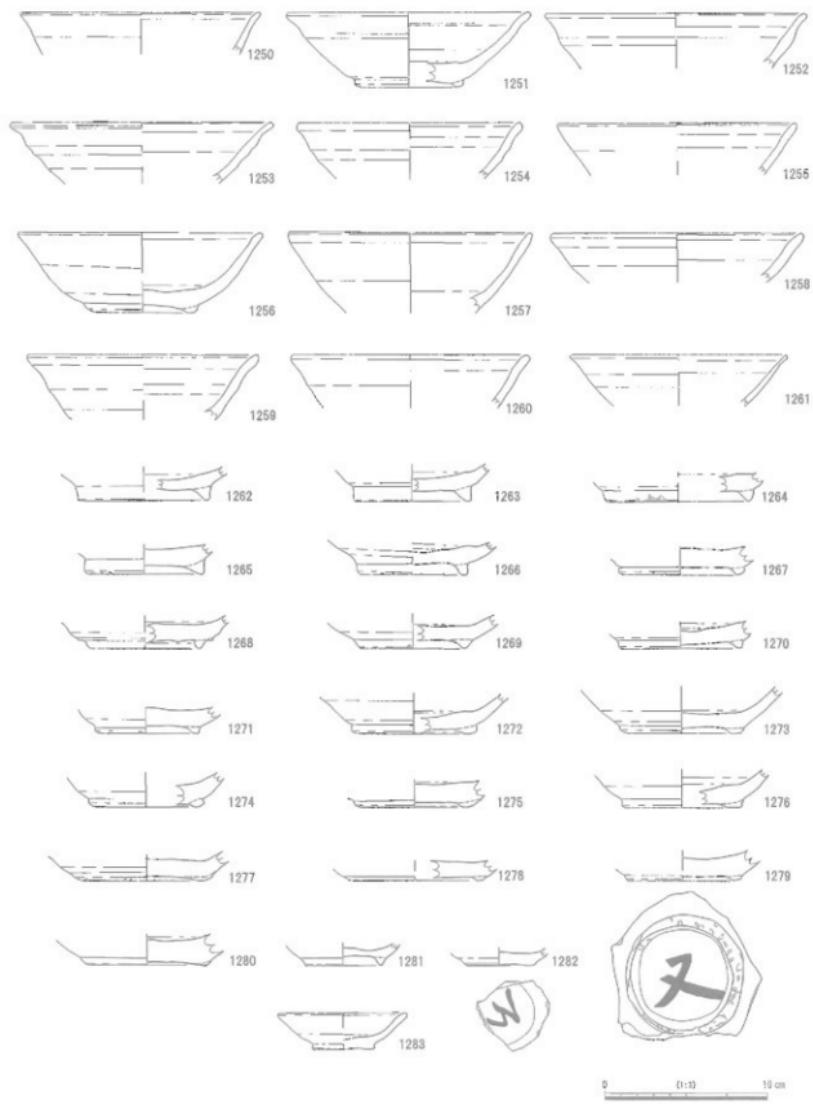


図 140 SR8001 I 層出土遺物 (1)

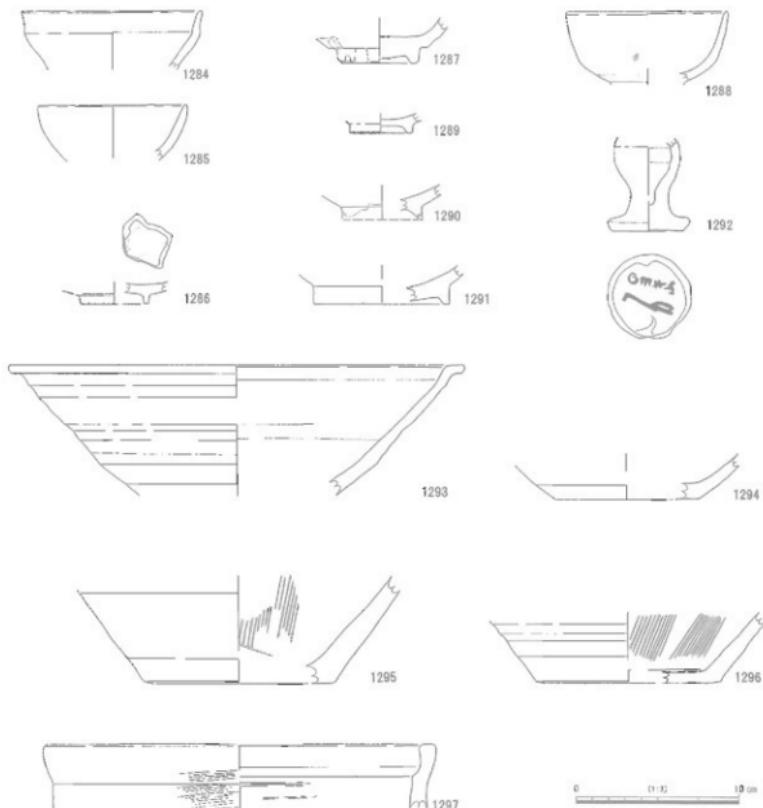


図 141 SR8001 I 層出土遺物 (2)

(5) I 層

I 層は、SR8001 の最終の堆積土である。暗褐色土と砂層の互層となっており、木片などの有機物も豊富に含まれていた。礫を多く含んでいる II 層に比べて、この時期水流が緩やかで、安定していた様子が伺える。また、最上層では、シジミやカワニナなどの貝殻が遺存しており、少なくともこの段階には河川は堰き止められて溜池になっていたものと推測される。

遺物は、土器や陶器などのほか、木製品も比較的の豊富に出土している。1250 ~ 1280 は山茶碗である。1261 が東濃産、1266 が東遠江産であるほかは、すべて渥美湖西岸の製品である。時期としては、II ~ III 期のものであるが、やはり III 期のものが大半を占めている。1265 は被焼により全体が赤褐色に変色しており、底部外面にはタール状の物質が付着している。1279 の底部外面には、「又」と記された墨書きが確認できる。1281 は山茶碗の小碗で、東遠江産の製品である。1282 と 1283 は山茶碗の小皿である。

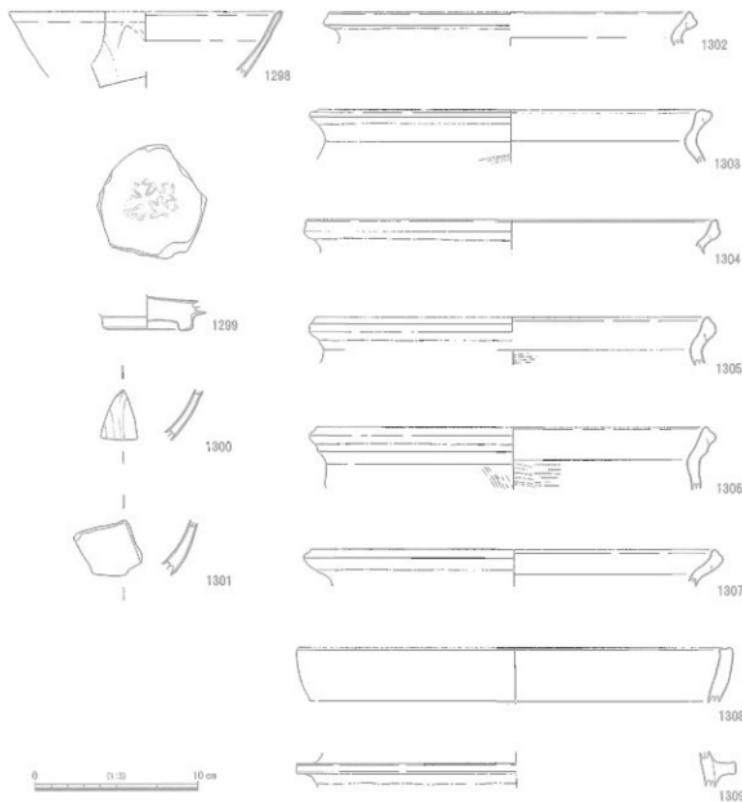


図142 SR8001 I層出土遺物(3)

1282の底部外面には、墨書が認められる。文字がやや不鮮明であるが、恐らく「万」であろう。

1284は古瀬戸後二期の天目茶碗である。1287～1289・1291・1292は、瀬戸美濃産の製品であり、I層でも最上層から出土している。1287は天目茶碗で、17世紀後半のものである。1288は小中、1289は腰錦茶碗、1291は片口、1292は花瓶で、いずれも18世紀後半から19世紀にかけてのものである。1292の底裏には墨書が認められる。右側に「○ヨキ山」、左側に「万」と書かれている。1285と1286は京・信楽産の碗であり、I層の検出面から出土している。1290は肥前産の白磁の皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎが施されている。18世紀のもので、I層の最上層から出土している。1293は古瀬戸後IV期の折縁深皿である。1294は古志戸呂窯産の盤類である。1295と1296は擂鉢で、1296は古瀬戸後IV期のものである。1297は筒形の瓦質製品である。器壁は厚く、口縁部は受け口状の形態を呈している。提灯等の類であろうか。

1298～1301は貿易陶磁である。いずれも青磁の碗であり、1298と1300の外面には蓮弁文が、1299

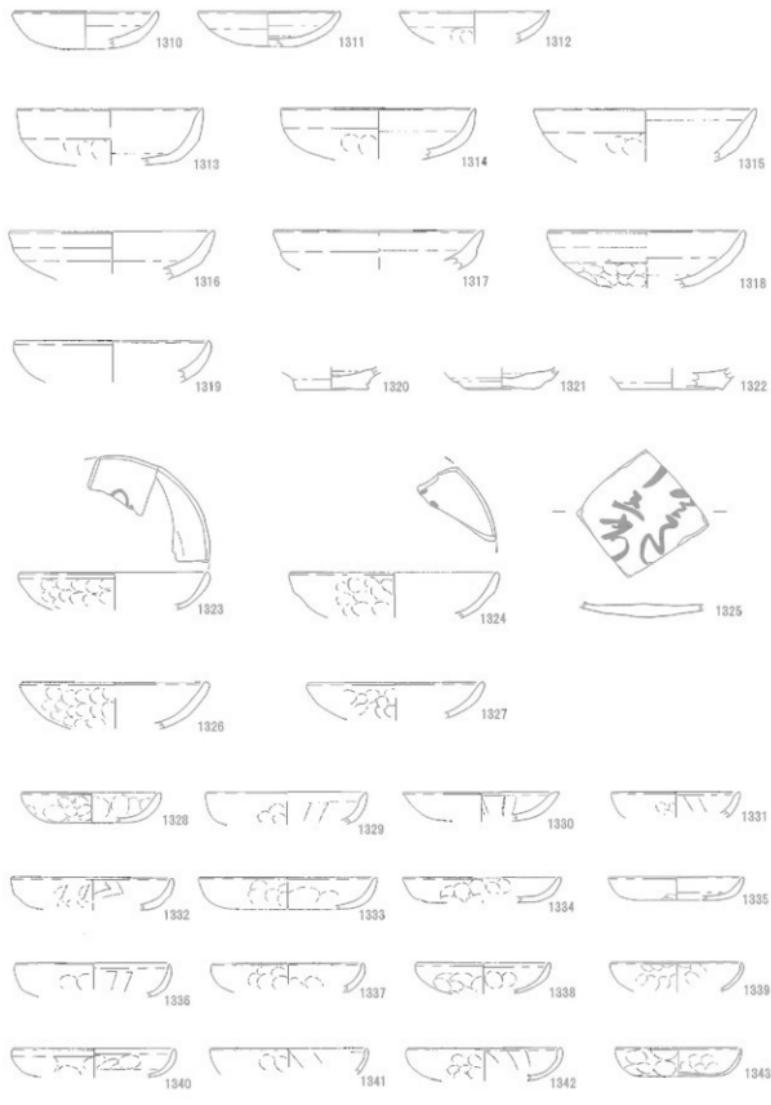


圖 143 SR8001 I 層出土遺物 (4)

の見込みには花文が施されている。1302～1308は内耳鍋である。くの字形内耳鍋(1302～1307)に加え、Ⅱ層でみられなかった内輪形内耳鍋(1308)も出土している。図化したものはいずれも口縁部の破片であるが、体部の破片も一定量出土している。1309は羽蓋である。

1310～1343は土師質土器の皿である。軟質のもの(1310～1322)と、比較的硬質のもの(1323～1343)とに大別できる。1310～1312は、口径9cm先後的小型のものである。浅い皿状の形態で、大きさの割にはやや厚手のつくりとなっており、口縁部にはナデ調整が施されている。1313～1319は、口径12cm前後のものである。坯形の形態を呈しており、全体的に厚手のつくりとなっており、口縁部には強いナデ調整が施されている。1320～1322はロクロ成形のものである。1320と1321は小型のもの、1322は中型のものである。1323～1327は、比較的硬質で口径12cm前後の中型のものである。浅い皿状の形態で、全体的に薄いつくりとなっている。軟質のものにみられるような、口縁部の強いナデ調整は認められない。1323～1325の内面には墨書が確認できる。いずれも断片であり、1323と1324は全く判読できないが、1325は「今うた / □三尚」と読める。1328～1343は、比較的硬質で口径9cm前後の小型のものである。形態や厚さ、内面の調整方法などにいくつかのタイプがみられるが、口縁部に明確なナデ調整が施されていない点は共通している。

1344～1349は丸瓦である。凸面はナデ調整が施され、凹面には布目や吊り紐痕が残されている。1344は玉縁部の破片である。凹面は全体にナデ調整が施され、狭端と側端側には面取り調整が施され

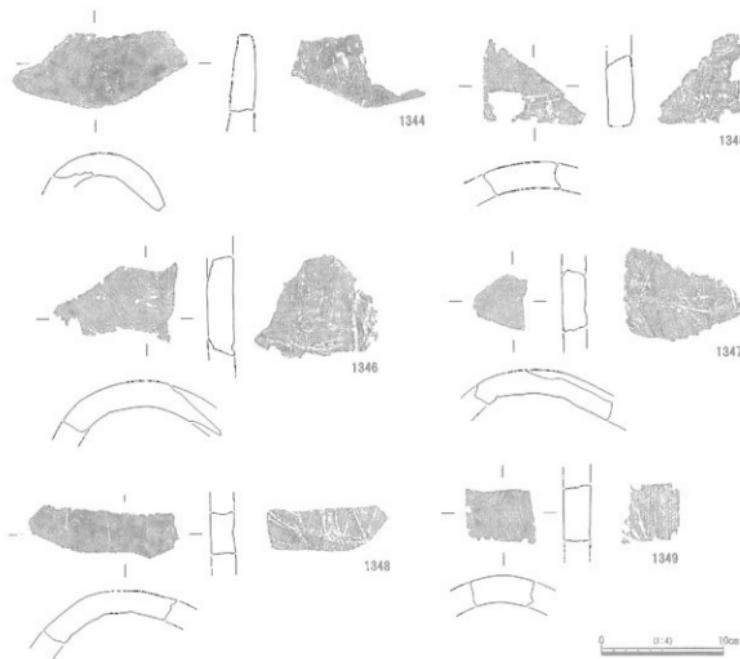


図144 SR8001 I層出土瓦(1)

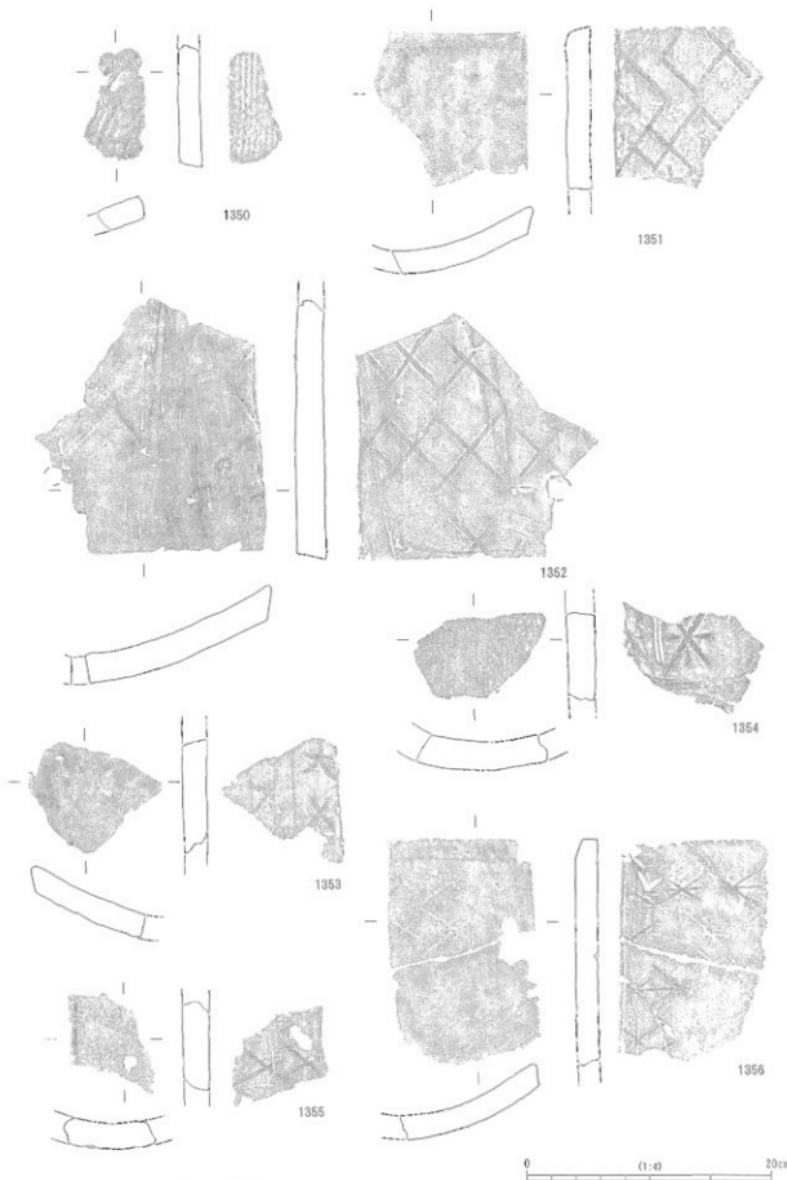


圖 145 SR8001 I 層出土瓦 (2)

ている。1345は広端部が残る破片である。広端面には、少量の離れ砂の付着が認められる。1346～1349は、端部の残らない破片である。1346と1347には同一の吊り紐痕が残る。布に隠れている長さを1とした時の、布から出た部分の吊り紐比率は、0.8以下である。1349の凹面には、少量の離れ砂が付着している。

1350～1356は平瓦である。1350は凸面に叩き目叩きが残るものである。全体が著しく磨滅しているが、叩き目の窪みには離れ砂の付着が認められる。1351～1353は、縦長斜格子の叩き目が残るものである。1351と1353の格子内には「大」の字がみられる。1352は広端部の破片で、広端から約5cmの場所には、釘穴が空けられている。1354は縦長斜格子+横線の叩き目が残るものである。斜線の交差部には、劍菱形の文様が十字に配されている。凹凸面ともに離れ砂が付着している。1355と1356は、横長斜格子の叩き目が残るものである。凹凸面ともに離れ砂が付着する。1352と1356の凹面には、叩き目の転写が明瞭に認められる。

1357～1362は笠塔婆である。いずれも上部は圭頭形で、左右に2段の切り込みが入っている。1359

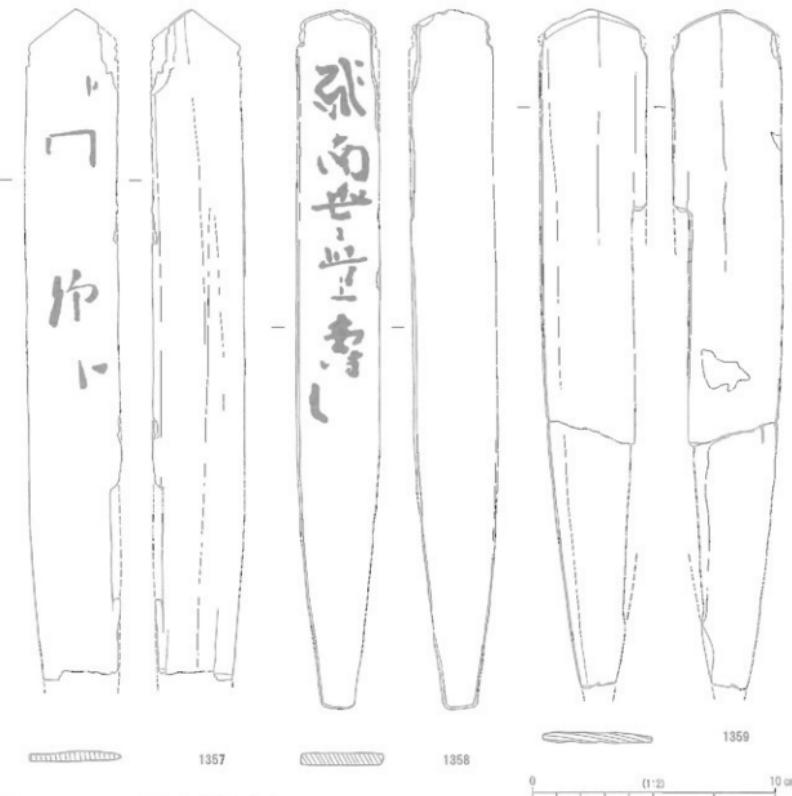


図146 SR8001 I層出土木製品（1）

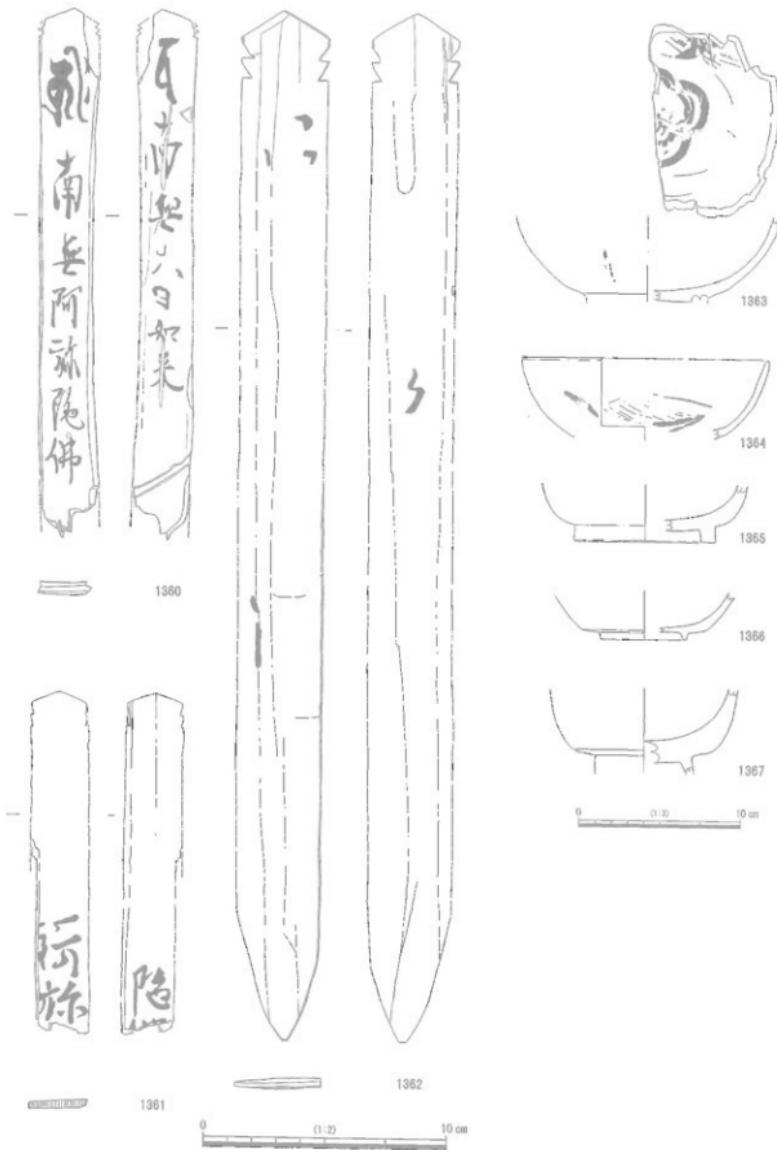


図 147 SR8001 I層出土木製品（2）

のみコウヤマキであるが、他はすべてヒノキが用いられている。1357は、墨書がほとんど残っておらず、釈読不能ではあるが、出土した他の笠塔婆やわずかに残存する墨跡から、「キリーク（梵字）南無阿弥陀仏」と書かれていた可能性が高いと推測される。1358は、「キリーク（梵字）南無々量壽□」と読める。裏面には墨書は認められなかった。1359は墨書が全く残存しなかったが、形態から笠塔婆と判断した。1360は墨書が比較的明瞭に残る。片面に「キリーク（梵字）南無阿弥陀仏」、裏面には「パン（梵字）南無大日如來」と書かれている。1361は上部の墨書は消失しているが、両面に「無阿弥」と「陀仏」の字が認められる。1362は上部から下部までほぼ完存しているが、墨書の残りは悪い。釈読はできないうが、両面に墨痕の存在が確認される。

1363～1367は漆椀である。1363と1364は腰が丸い形態のものであり、内外面とも黒漆地で、赤漆による塗絵が施されている。1363の木地にはハンノキ属が用いられている。1365は外面を赤漆、内面を黒漆に塗り分けている。木地にはトチノキが用いられている。1366と1367は、内外面ともに赤漆が

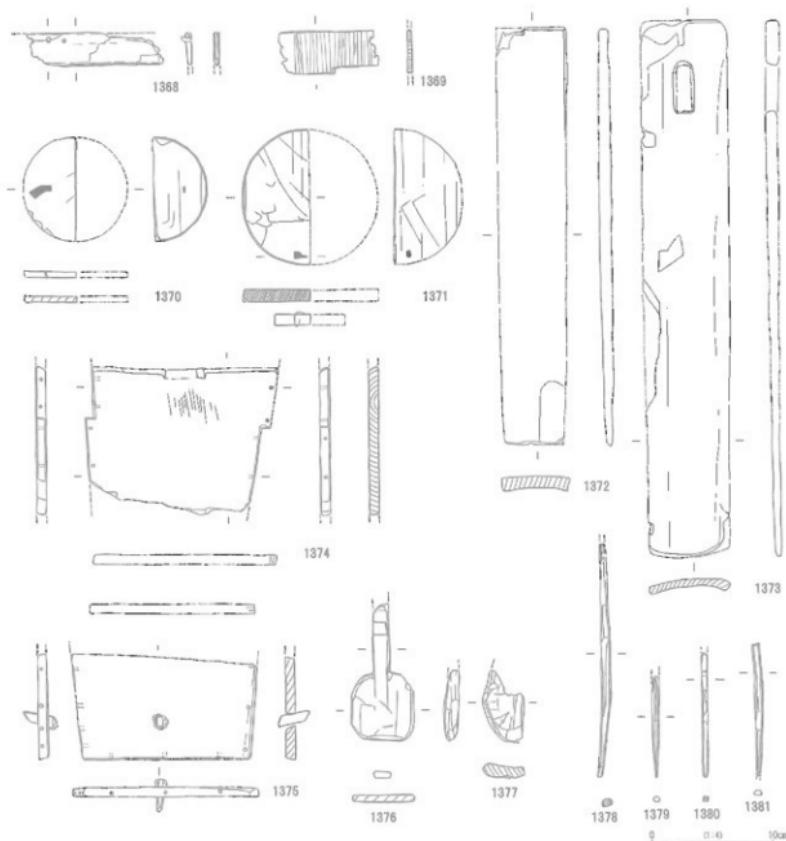


図148 SR8001 I層出土木製品（3）

施されており、木地の厚さは異なるが、両者とも腰が明瞭に折れる形態のものである。1366にはヤマザクラ、1367にはブナ属が用いられている。

1368と1369は曲物の側板であり、いずれもヒノキ材が用いられている。1368には、底板固定用の木釘が残存する。1369には、ケビキ跡と木釘穴が認められる。1370と1371は曲物の底板または蓋である。とともにヒノキ材が用いられており、周縁部には継ぎ皮が残存する。1372と1373は桶の側板である。横断面は弧状に湾曲しており、1373には端部に長方形の穴が空けられている。1372はヒノキ、1373はスギ材が用いられている。1374と1375は指物の部材である。1374は段違い、1375は台形の形状となっている。いずれもヒノキ材で、側端と側面には木釘用のほぞ穴が空けられており、一部木釘も残存する。1375の中央には、直径8mm程の穴が空けられており、長さ約2cmの断面長方形の木片が嵌め込まれていた。1376は杓文字状の形態の木製品である。身に刺り込みは認められず、柄は5mm程度の厚さしかない。スギ材が用いられている。1377は、シキミ材を用いた匙である。1378～1381は箸である。いずれも端部付近の断片で、全長が判明するものは出土していない。1378はスギ、他はヒノキが用いられている。

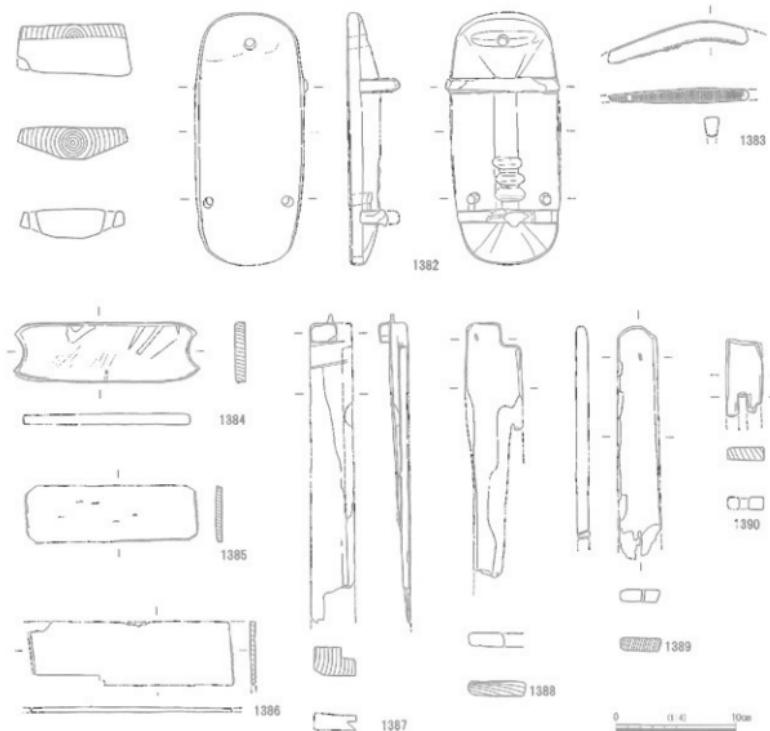


図149 SR8001 I 層出土木製品 (4)

1382は陰卯下駄である。平面は楕円形で、歯は裏面に空けた溝に差し込まれている。横縫孔は後歯の前に位置しており、裏面のやや後方には横方向に3条の溝が刺り込まれている。台と歯で材が異なっており、台にはサワラ、歯にはシイ属が用いられている。1383は櫛である。楕円形の形態のもので、歯は細かい。腐食が著しく、歯のほとんどは欠失している。材にはヤマザクラが用いられている。1384～1386は、用途不明の薄板状の木製品であり、いずれもヒノキ材が用いられている。1384の左右両側端には、半円形の刺り込みが認められる。周囲には、丁寧な面取りが施されている。1385は四隅が斜めに切り落とされており、2～3mmの小さな木釘が6ヶ所に打ち込まれている。1387～1390は、用途は特定できないが、加工痕のある棒状木製品である。いずれも大きさからみて、指物の部材であると推測される。1387は断面長方形の角材で、上部には鉄釘が打ち込まれている。側面には断面三角形の溝が彫られており、板状のものが差し込まれていたものと推測される。1388も断片であるが、端部を継ぎ手状に切り欠いており、釘孔も確認できる。1389は、端部が円頭状に仕上げられており、2ヶ所に釘孔が認められる。釘孔の1つには、鉄釘が残存している。1390には、中央にはぞ孔が設けられている。1389はスギ材が、他はヒノキ材が用いられている。

1391～1393は大型の板状木製品である。1392にはほぞ孔が穿たれており、1393には鎌が打ち込まれている。いずれも長さ80cm以上の大型の材で、厚さは3cm以上もある。1391はサワラ、1392はコナラ属、1393はヒノキである。

以上のように、I層から出土した遺物は、年代としては19世紀代のものまで確認できる。ただし、すべての遺物について層位の違いが候別できるわけではないが、明確なものに限定すると、17世紀後半以降の遺物に関しては、I層でも最上層からの出土に限られている。前述のように、I層の最上層は、カワニナやシジミなどの貝殻が多数遺存する土層である。同様の状況は、検出面より上層にあたる溜池の堆積土でも確認されていることから、I層の最上層に関しては溜池築造後の堆積土であると判断される。一説によると、「千枕池」が築かれた時期は、1630年頃に築かれた「谷ノ奥池」と同じ頃であるという。もちろん、これはあくまで伝承ではあるが、I層の最上層から出土している遺物から、溜池が17世紀後半以前に築かれていることは明らかである。詳細な年代を特定することは困難であるが、ほぼ伝承の通り、「千枕池」は17世紀中頃前後に築造された可能性が高いと推測される。

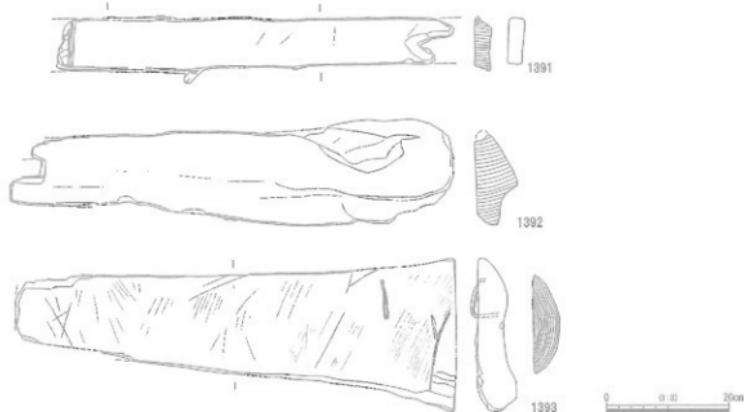


図150 SR8001 I層出土木製品（5）

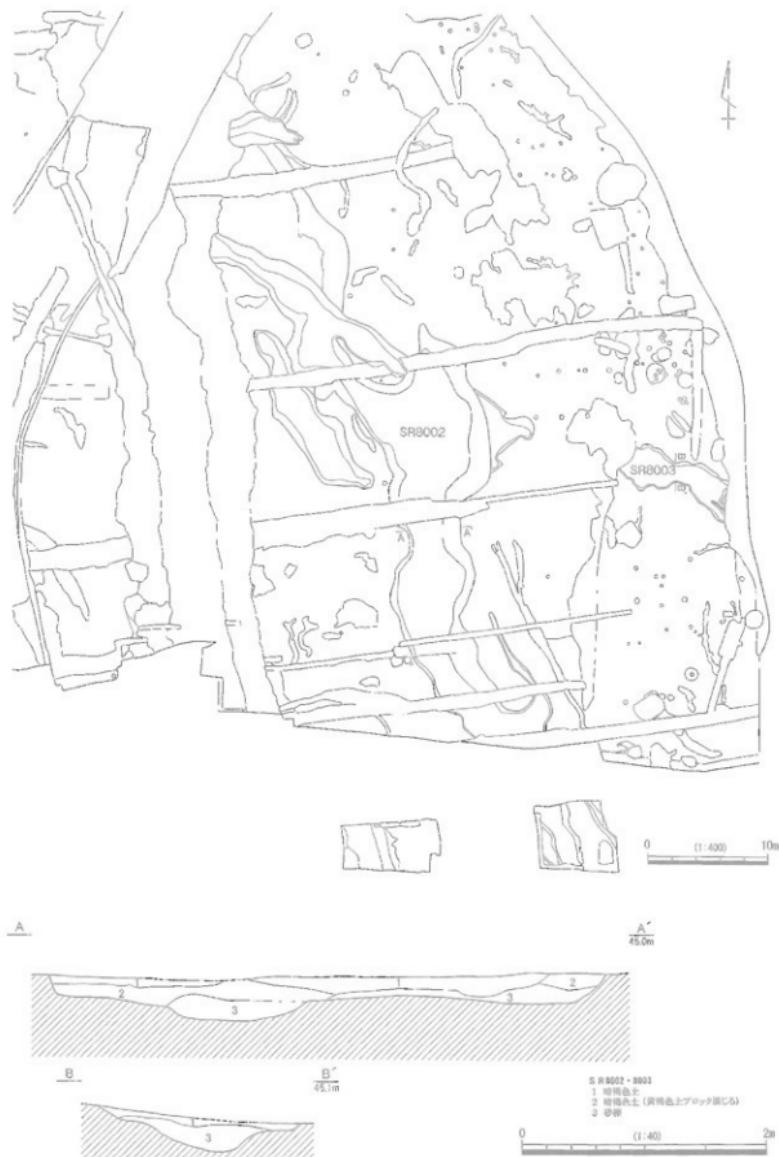


図 151 SR8002・8003 実測図・断面図

SR8002・8003 (図 151・152、図版 29)

SR8001 の東側に位置する自然流路である。SR8002 と SR8003 は、直接接続する状況が検出されなかつたために遺構番号を分けてはいるが、SR8003 の延長線上で SR8002 が東へ大きく張り出しており、二又に分かれる單一の流れであるとみてよい。いずれも形状は不定形で、深さも安定しておらず、底部は大きく波打っている。一部深い部分もみられるが、大部分は 20 ~ 30 cm 程度の深さとなっている。土層は大きく上下 2 層に分けられる。上層は暗褐色土、下層は砂砾が堆積している。下層には、流出した護岸構築土とみられる粘土ブロックも多量に含まれている。

規模の割に、出土遺物はごく少量である。1394 ~ 1398 は、SR8002 から出土した遺物である。1394 は須恵器の壺身である。1395 は土師器の壺で、圓化したもの以外にも破片が数点出土している。1396 は貿易陶磁で、青磁碗の体部の破片である。1397 は片口鉢である。13 世紀前半のもので、知多産とみられる。1398 は古志戸呂窯産の擂鉢である。1399 ~ 1404 は、SR8003 から出土した遺物である。1399 ~ 1401 は山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品である。1401 の底部外面には、「大」と書かれた墨書きが認められる。1402 ~ 1404 は土師質土器皿である。いずれも口径 9 cm 程度の小型のものである。摩滅が著しく調整に間違つて不明瞭であるが、軟質の焼きで、比較的厚手のつくりとなつていて。

前述のように、SR8002 と SR8003 は、SR8001 の土層断面からみて II 層の段階での河川の氾濫の跡とみて間違いない。また、SR8003 は溜め池の堤の下層で検出されており、明らかに溜池築造以前の遺構といえる。SR8001 の II 層の年代は 13 世紀後半 ~ 15 世紀であり、両遺構から出土した遺物の年代も、これとほぼ同様の年代を示している。詳細な年代を特定することは困難であるが、SR8002 と SR8003 は、概ね 15 世紀代の遺構とみてよいであろう。

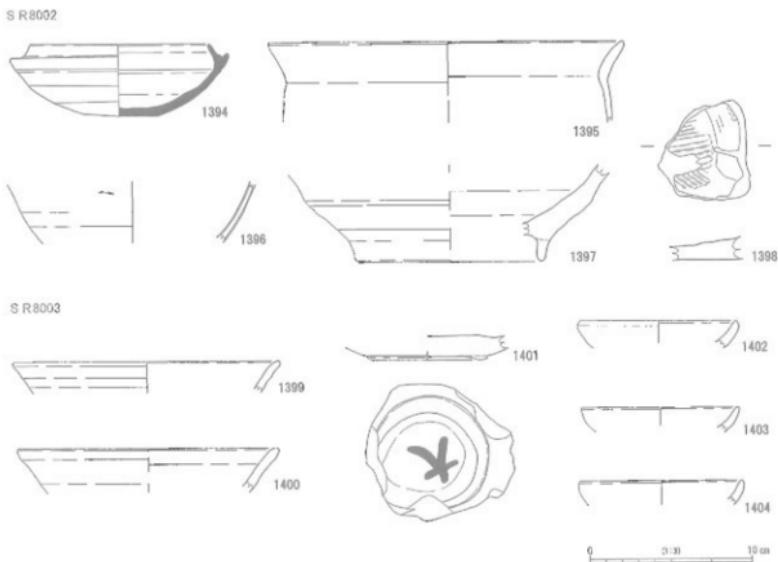


図 152 SR8002・8003 出土遺物



図 153 SR7002・9002 実測図・断面図

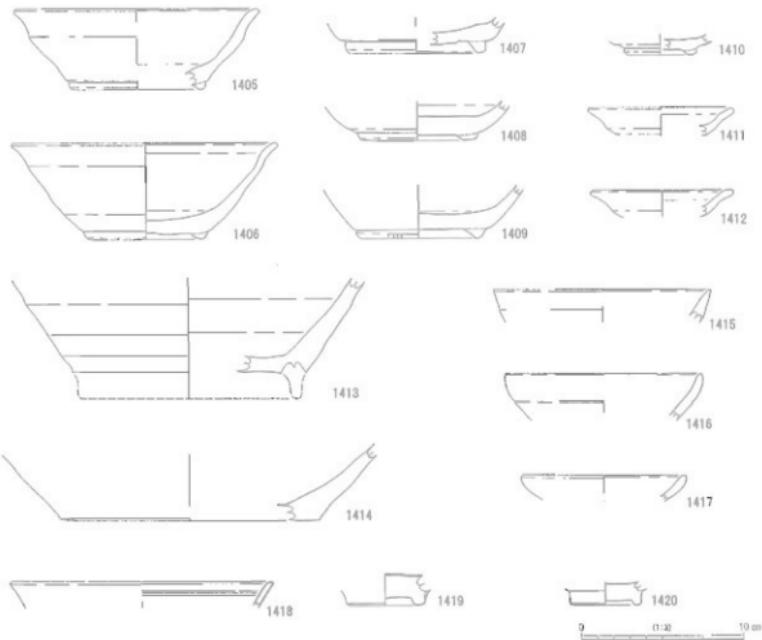


図 154 SR7002 出土遺物

SR7002 (図 153・154、図版 28・50)

SR7002は7区の東端に流れる自然流路である。北に向かって徐々に浅くなり、北端では、底部の痕跡がわずかに確認できる程度となっている。底部は凹凸が激しく一定しない。深さは大部分が10～20cm程度であるが、調査区南端より約10mの地点から急激に深くなり、南端では深さ80cm以上にもなる。底面から10cm程の高さまで、主に砂や小砾が堆積している。また、その上層の埋土には、黄褐色土（地山）ブロックが多量に含まれており、この遺構が比較的早い段階で人為的に埋められていることが認識できる。

遺物は、すべて人為的に埋め戻された上層から出土しており、下層からの出土は確認されていない。古代と中世前期のものが大半であるが、近世の遺物も出土している。1405～1412は、瀬美湖西産の山茶碗である。1405～1409は碗であり、II期とIII期のものがみられる。1410～1412は小碗と小皿である。1413は瀬美湖西産の片口鉢である。1414は瀬美窯産の壺の底部である。1415～1417は土師質土器皿である。1415と1416は壺形を呈する中型のもので、比較的厚手のつくりとなっており、口縁部には強いナデ調整が施されている。1418と1419は貿易陶磁で、いずれも青磁の碗である。1420は瀬戸美濃産の天目茶碗で、17世紀中頃のものである。

出土遺物から、SD7002は17世紀中頃に埋められたとみてよい。これは東側に溜池が築かれる時期と一致しており、おそらくは溜池の造成に伴って埋め立てられたのであろう。

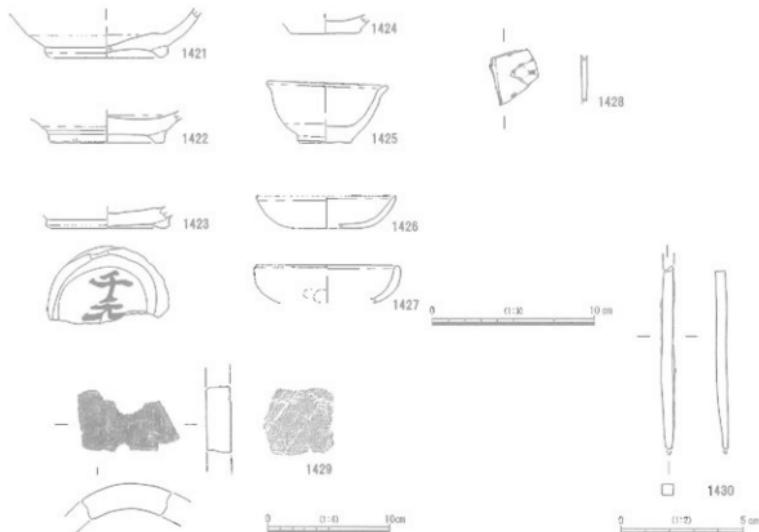


図 155 SR9002 出土遺物

SR9002 (図 153・155、図版 28)

SR9002は、3区の東端から9・8区にかけて流れる自然流路である。大溝SD2001の東辺付近から南東へ向かって蛇行して流れ、最終的には河川SR8001に注ぎ込んでいる。全体的に浅く、底部がわずかに残存する程度であり、ほとんどの部分では深さは5cmにも満たない。底面は一定せず、凹凸が激しい。埋土には、砂や小礫を多く含む暗褐色土が堆積している。

遺物は、古代のもの他、中世から近世の遺物が出土している。1421～1423は山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品である。1423の底部外面には、「千匁」(手か?)の墨書がみられる。1424は山茶碗の小皿である。1425は、山茶碗の小杯とでも称すべき、特殊な器形のものである。中屋遺跡では、この1点しか確認されていない。底部には糸切り痕が明瞭に残っている。胎土からみて、恐らくは渥美湖西産の製品であろう。1426と1427は土師質土器皿であり、1426は軟質で表面の摩滅が著しく、1427は比較的硬質である。1428は肥前窯産の磁器染付である。19世紀初頭の筒形碗で、外面には四菱文が描かれている。1429は丸瓦である。軟質のもので、表面には被熱の痕跡が認められる。大溝SD2001などで出土している中世の瓦である。端部は遺存しないが、布目が粗いため有段式であると推測される。1430は鉄釘である。一辺4mmの角釘で、頭部を欠くが長さは7.2cm残存している。これらの他に、図化できない小片であるが、内耳鍋も出土している。

出土遺物からは、SD9002が少なくとも19世紀の初め頃までは機能していたことがわかる。これは、河川SR8001が堰き止められ溜池となって以降も流れていたことを示している。大溝SD2001が埋没し、逃げ場のなくなった周囲の雨水が、高まりとなっていた土壠の周囲に沿って、溜池へと流入していた痕跡とみてよいであろう。

SR1001（図156・157、図版52）

1区の西端に位置する河川である。調査区北端から33mの長さで主に東岸部分が確認されており、南へ向かって流れる。西側には、現在の道路と「荒巻川」と呼ばれる河川が位置しており、大部分が調査区外となっている。

深さは検出面から平均1m程で、底部は一定せず凹凸が激しい。内部には、砂や砂を多く含む暗褐色土が堆積している。15世紀には調査区北端から約50mの場所に、溝SD1001が取り付けられている。全体の規模や経路については不明な点が多いが、道路と川を挟んだ5区では検出されていないことから、幅に関しては6m以内であるとみてよい。

検出された範囲が狭いこともあり、出土遺物は多くない。1431～1438は、下層から出土した山茶碗である。周辺の溝などと同様に、いずれも渥美湖西産の製品で、大半がⅢ期のものとなっている。1442は常滑産の片口鉢である。15世紀のもので、下層から出土している。1439～1441は、中層から出土した山茶碗である。中層からは、圓化したものその他に16世紀の瀬戸美濃産の擂鉢も出土している。1443と1444は丸瓦である。いずれも広端部の破片であり、広端面と凹面には離れ砂が付着する。1443は下層、



図156 SR1001 実測図・断面図

1444 は上層から出土している。

これらの遺物から、SR1001 は 15 世紀代にはこの位置を流れていたことがわかる。これは、SR1001 から水を引き込むために掘られたとみられる溝 SD1001 の年代とも矛盾はない。また、「荒巻川」の存在から、その後現在に至るまで、SR1001 はほぼ同じ経路を流れていたものと推測される。

ただし、今回の調査では河川の中央部分については未調査であり、実際にはもっと深い可能性も想定できる。そのため、検出された範囲における「下層」が、SR1001 の最下層の堆積とは言い切れない側面があり、河川のはじまりの年代については明確にし得ない。

「荒巻川」の上流は、現在「谷ノ奥池」となっている谷部にあたる。同じ谷部に源流があるとみられる河川跡は、約 150 m 西側の寺海土遺跡でも検出されている。寺海土遺跡については、今後整理作業を行い報告書を刊行する予定であるが、調査時の所見等からみると、寺海土遺跡の河川の方が先行するようである。この河川の変遷については、今後寺海土遺跡における検討を踏まえ、あわせて検討する必要があろう。

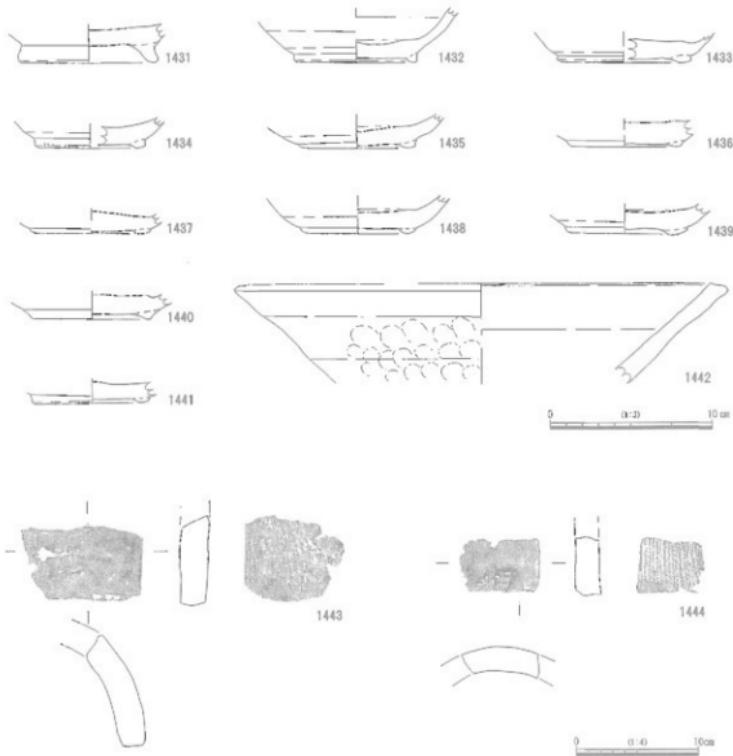


図 157 SR1001 出土遺物

表 14 河川出土土器・陶磁器觀察表 (1)

表 15 河川出土土器・陶磁器観察表（2）

表 16 河川出土 土器・陶磁器観察表（3）

表 17 河川出土 土器・陶磁器觀察表 (4)

No.	器物名	層位	埋植	地層	分類・様式	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	基台径 (cm)	諸特徴	物語	色調	寸法	備考
1321 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(4.8)					直筒部 1/2	透明白			
1322 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(5.4)					直筒部 1/2	透明白			
1323 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(1.4)					直筒部 1/4	透明白	直筒	「」	
1324 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(5.3-4)					直筒部 1/2	透明白	直筒	「今うた」/直筒	内面スリット
1325 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(10.7)					直筒部 1/4	透明白	直筒		
1327 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(10.8)					直筒部 1/4	透明白	直筒		
1328 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(5.4)	(4.8)				直筒部 1/4	透明白	直筒		
1329 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(7.5)					直筒部 1/5	透明白	直筒		
1330 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(5.2)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1331 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(7.9)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1332 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(10.9)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1333 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(2.1)	(5.0)				直筒部 1/6	透明白	直筒		
1334 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(7.0)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1335 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(9.9)	(7.0)				直筒部 1/14	透明白	直筒		
1336 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(7.0)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1337 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(9.1)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1338 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(5.2)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1339 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(11.2)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1340 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(7.6)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1341 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(11.5)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1342 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(9.4)					直筒部 1/6	透明白	直筒		
1343 SRH0001	土器	土器裏土層	目	口クロ	(7.7)	(3.8)	1.5			直筒部 1/4	透明白	直筒		
1364 SRH0002	陶器	陶器	目	口クロ	10.9	4.45	4.45			直筒部 1/2	透明白	直筒		
1365 SRH0002	土器	土器	目	口クロ	(21.0)					直筒部 1/2	透明白	直筒		
1366 SRH0002	質・骨器	質・骨器	圓筒形	圓筒形						直筒部 1/2	透明白	直筒		
1367 SRH0002	中世骨器	片口鉢	圓筒形	圓筒形						直筒部 1/6	内面・直筒部	直筒		
1368 SRH0002	馬頭骨器	骨飾	古北戸昌							直筒部 1/6	内面・直筒部	直筒		
1369 SRH0002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/24	直筒部	直筒		
1400 SRH0002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/20	直筒部	直筒		
1401 SRH0003	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/2	直筒部	直筒		器皿「大」
1402 SRH0003	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/2	直筒部	直筒		
1403 SRH0003	土器裏土層	土器裏土層	目	口クロ	(9.6)					直筒部 1/12	直筒部	直筒		
1404 SRH0003	土器裏土層	土器裏土層	目	口クロ	(9.5)					直筒部 1/12	直筒部	直筒		
1405 SRH0002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1406 SRH0002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1407 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1408 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1409 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1410 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1411 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1412 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四							直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1413 SRH002	中世骨器	片口鉢	圓筒	圓筒						直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1414 SRH002	中世骨器	圓筒	圓筒	圓筒						直筒部 1/6	直筒部	直筒		
1415 SRH002	土器裏土層	土器裏土層	目	手口クロ	(13.0)					直筒部 1/8	直筒部	直筒		
1416 SRH002	土器裏土層	土器裏土層	目	手口クロ	(12.0)					直筒部 1/8	直筒部	直筒		
1417 SRH002	太師頭土器	土器裏土層	目	手口クロ	(10.0)					直筒部 1/10	直筒部	直筒		
1418 SRH002	質・骨器	質・骨器	質・骨器	質・骨器						直筒部 1/22	質・骨器	質・骨器		
1419 SRH002	質・骨器	質・骨器	質・骨器	質・骨器						直筒部 3/4	質・骨器	質・骨器		17世紀中頃
1420 SRH002	近世骨器	質・骨器	質・骨器	質・骨器						直筒部 3/4	質・骨器	質・骨器		
1421 SRH002	質・骨器	質・骨器	質・骨器	質・骨器						直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1422 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四	目	-1					直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1423 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四	目	-1					直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1424 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四	目	-2					直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1425 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四	目	-2					直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1426 SRH002	山形埴	輪	輪舟形四	目	-2					直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1427 SRH002	土器裏土層	土器裏土層	目	手口クロ	(10.0)	3.0	3.55			直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1428 SRH002	土器裏土層	土器裏土層	目	手口クロ	(10.0)	4.0				直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1429 SRH002	土器裏土層	土器裏土層	目	手口クロ	(10.0)	4.0				直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1430 SRH002	石器	石器	圓筒形	圓筒形						直筒部 1/4	質・骨器	質・骨器		
1431 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					8.0	直筒のみ	直筒		
1432 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	1-1					7.1	直筒のみ	直筒		
1433 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	0-2					7.4	直筒 1/2	直筒		
1434 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	0-1					5.7	直筒 1/2	直筒		
1435 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	0-2					5.1	直筒のみ	直筒		
1436 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	0-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1437 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	0-2					6.4	直筒 1/2	直筒		
1438 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	0-2					5.7	直筒 1/2	直筒		
1439 SRH001	下	山形埴	輪	輪舟形四	0-1					6.3	直筒のみ	直筒		
1440 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-1					7.0	直筒のみ	直筒		
1441 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1442 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1443 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1444 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1445 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1446 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1447 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1448 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1449 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1450 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1451 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1452 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1453 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1454 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1455 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1456 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1457 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1458 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1459 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1460 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1461 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1462 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1463 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1464 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1465 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1466 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1467 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1468 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1469 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1470 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1471 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1472 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1473 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1474 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1475 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1476 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1477 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1478 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1479 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1480 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1481 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1482 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					7.0	直筒のみ	直筒		
1483 SRH001	中	山形埴	輪	輪舟形四	1-2					6.4	直筒のみ	直筒		
1484 SRH001	中	山形埴												

5. 挖立柱建物

中世を中心とした時期の掘立柱建物跡は調査区のほぼ全域で発見されているが、いくつかの群を構成している傾向がある。図 158 に示したように、その建物群を I～V 群としてまとめ、記述を進めたい。

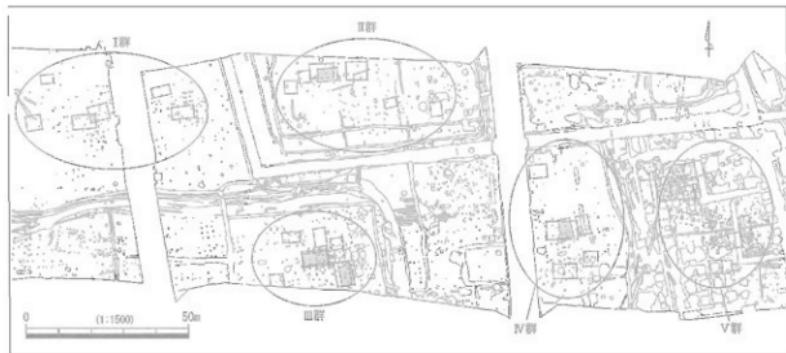


図 158 挖立柱建物群（中世～近世）

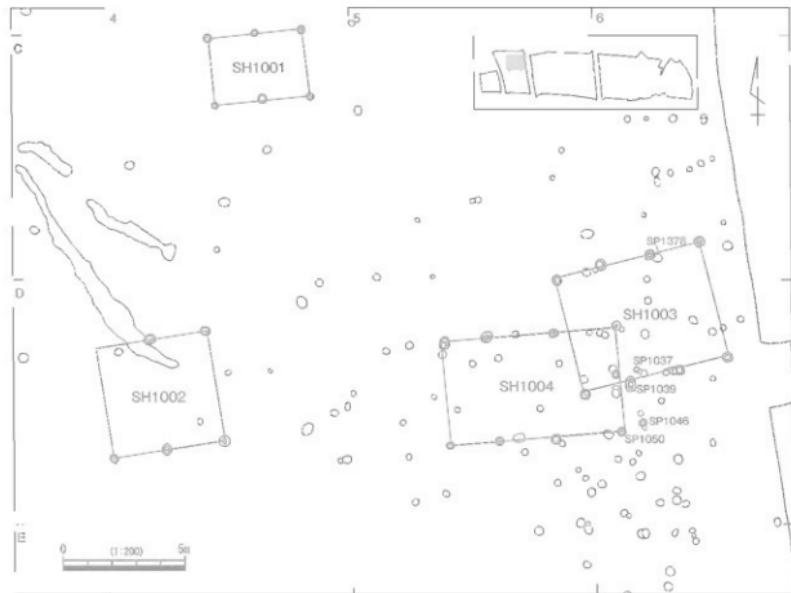


図 159 挖立柱建物配置図（1 区）

(1) I 群の掘立柱建物

1 区～2 区にかけての掘立柱建物群で、SH1001・SH1002・SH1003・SH1004・SH2001・SH2004 が該当する。出土遺物や建物の方向性から、SH1001・1004・2002 は 12～13 世紀代、SH1002・1003・2002 は 15 世紀後半～16 世紀代の建物とみられる。SH1001・1004・2002 は、大溝及び土壘による方形区画の西側に配された建物群と考えられる。SH1002・1003・2002 は、クランク状に屈曲する SD1001 によって南側と西側、またこの時期まで浅く残存していたとみられる大溝によって東側が区画された屋敷地であったと考えられる。

SH1001 (図 159・160)

1 区北部の C 4 区に位置する。南北 1 間、東西 2 間の側柱建物で、建物規模は梁行 2.75 m、桁行 3.9 m である。南北方向の軸が N-7°-W の南北揃である。柱間は桁行が 1.95 m の等間となっている。柱痕跡は確認されておらず、柱穴掘方の平面形状はほぼ円形であった。その規模は直径が 0.25～0.35 m、

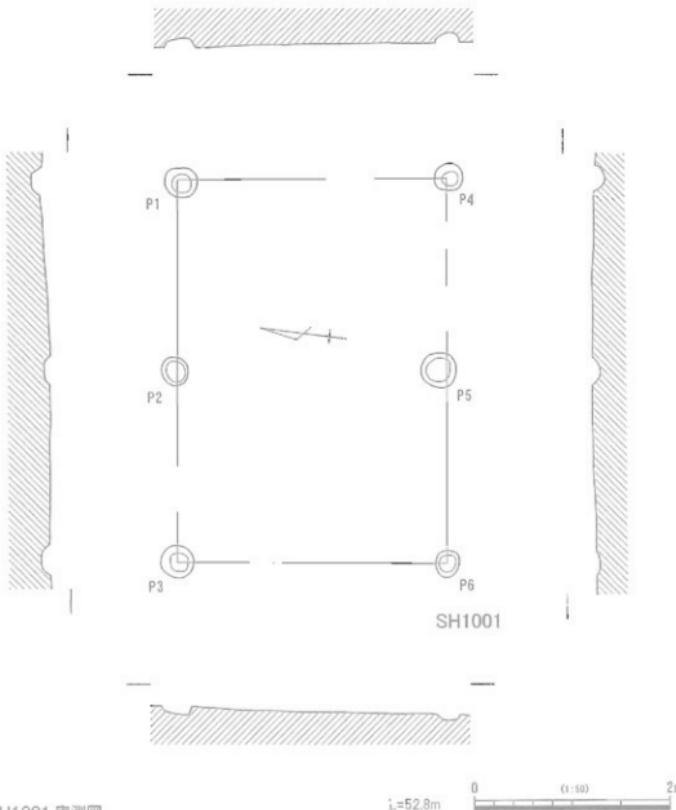


図 160 SH1001 実測図

深さが0.05～0.10 mである。出土遺物は皆無であるが、南側及び東側に展開するSH1004、SH2002とはほぼ同様の建物方向であることから、一連の建物群と考えられ、同時期の遺構と推定される。

SH1002（図159・161）

1区中央部のD4区に位置する。南北1間、東西2間の側柱建物で、1辺4.6 mの正方形の平面形を持ち、北辺、南辺ともに柱間は2.3 mの等間である。南北方向の軸はN-9°-Wである。北西隅の柱穴は検出されず、また柱穴内の柱痕も確認されていない。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径0.25～0.44 m、検出面からの深さは0.05～0.18 mと、かなり浅い。北側中央の柱穴SP1165とSD1006に切合いがあるが、新旧関係は不明である。

北東隅の柱穴SP1146の埋土内底面付近から土師質土器の破片が1点出土している。小片ではあるが、16世紀代の非黒クロ成形の皿とみられることから、遺構の帰属年代はその時期と推定される。

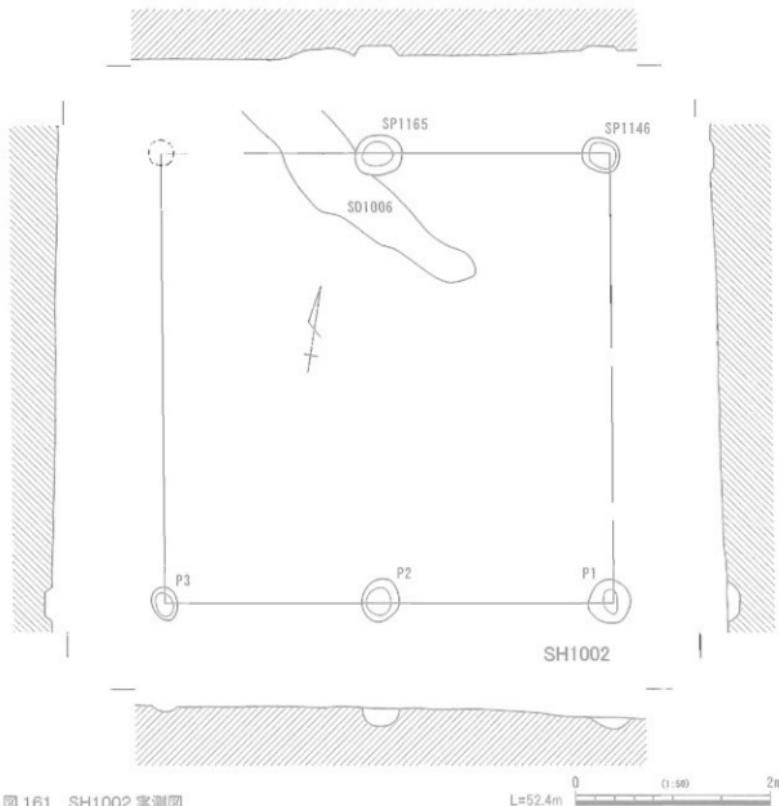


図161 SH1002 実測図

SH1003 (図 159・162・163、図版 45・69)

1 区東端の D 6 区付近に位置し、SH1004 と南西隅が重なるが柱穴の切合は不明である。梁行 1 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁間が 4.8 m、桁行が 6.2 m である。南北方向の軸が N - 11° - W となる東西棟である。桁行の柱間は南北とともに、西から 20 m, 21 m, 21 m である。6 つの柱穴で柱痕

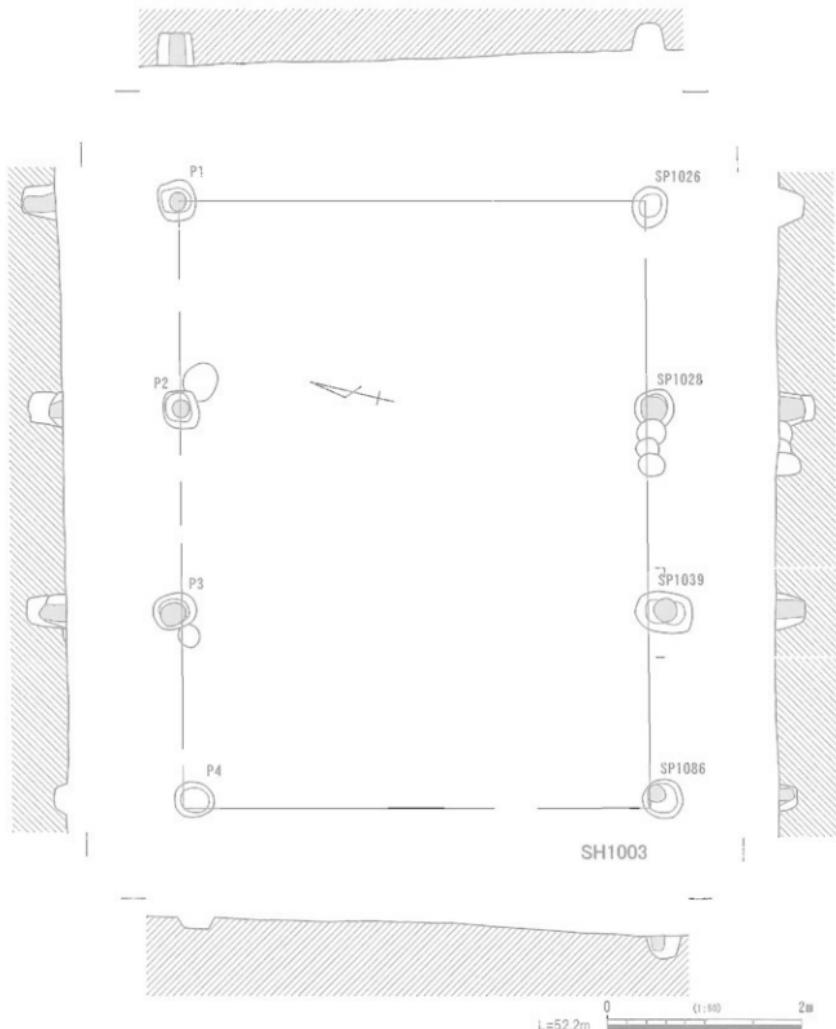


図 162 SH1003 実測図

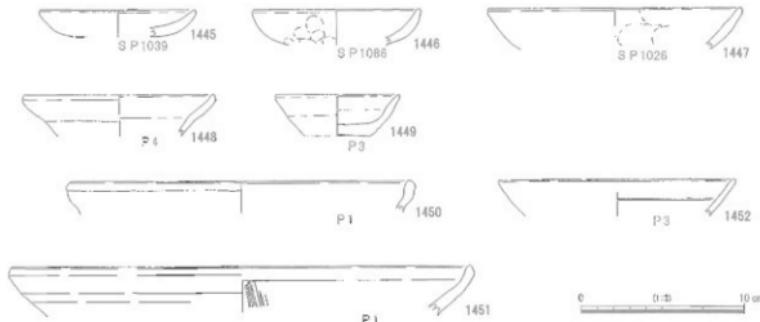


図 163 SH1003 出土遺物

跡が検出されており、柱の直径は 0.18 ~ 0.28 m である。柱穴の平面形状は SP1039 のみ楕円形で、他は円形である。規模は直徑が 0.38 ~ 0.60 m、検出面からの深さは 0.28 ~ 0.38 m である。

出土遺物は図 163 に図示した。1445 から 1449 は土師質土器の皿である。1445 から 1448 は非クロ成形品で、1449 は SP1039 の掘方埋土底面付近からの出土である。やや厚手で、浅いづくりである。表面が摩滅しており、調整は確認できない。1446 は SP1086 の掘方埋土からの出土である。内面はナデ調整、外面には指頭痕が確認できる。1447 は SP1026 の埋土底面付近からの出土で、口径が 15.5cm と大型品であるが、摩滅が著しく調整は不明である。1448 は P 4 の検出面付近からの出土で、口縁部の強いナデ調整により、体部との境が屈曲する特徴がある。1449 は P 3 から出土したロクロ成形品で、ほぼ完形である。口径 7.5cm と小型であり、底部外面には糸切痕が顕著に残り、口縁部には煤が付着している。灯明皿として使用されたものであろう。1450 は P 4 検出面付近から出土した、くの字形内耳鍋の口縁部である。口縁端部を小さく折り返して仕上げられる。1451 は P 1 埋土内から出土した古瀬戸後Ⅳ期並行となる古志戸呂の擂鉢口縁部の破片である。1452 は P 3 の柱痕跡埋土内から出土した白磁碗の口縁部破片で、白磁碗 V 類に分類されよう。体部から口縁端部まで直線的なつくりで、内側には沈線が入り、釉は薄い。1452 の白磁碗は 12 世紀代の遺物であり、前代の遺構からの混入品と考えられる。その他の遺物の年代観は 15 世紀中葉～16 世紀後葉で押さえられることから、遺構もその時期に営まれたと考えられる。

SH1004 (図 159・164、図版 45)

1 区東部の D 5 区に位置し、SH1003 と北東隅が重なる。梁行 1 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁行が 4.2 m、桁行が 7.2 m である。東西棟で、南北方向の軸は N - 5° - W である。柱間はややばらつきがあり、桁行北側が西から 1.8 m、2.7 m、2.7 m、桁行南側が西から 2.1 m、2.1 m、2.0 m である。柱痕跡が確認されたのは SP1117 のみで、柱痕は円形で直徑 0.25 m である。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直徑 0.25 ~ 0.50 m、検出面からの深さ 0.15 ~ 0.30 m を測る。

遺物は SP1091 の埋土から出土した土師質土器の皿 (1453) である。口径 8.2cm に復元される小型の非クロ成形品で、器壁は厚く、浅いづくりである。12 ~ 13 世紀代の製品とみられ、遺構の年代を表すものであろう。

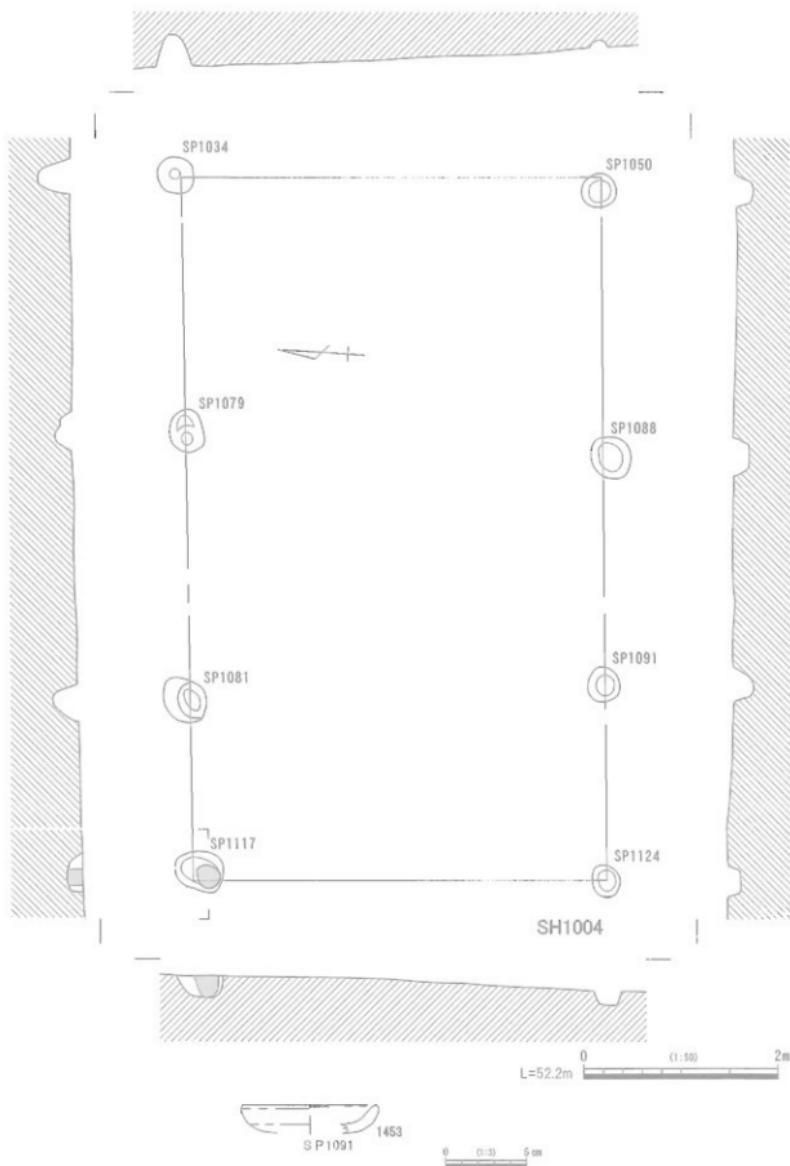


図 164 SH1004 実測図・出土遺物

SH2001（図165・166、図版46）

2区北西隅のC7～8区に位置する。SH2002の北西に近接する。梁行2間、桁行2間の側柱建物で、建物規模は梁行が2.9m、桁行が5.6mである。南北方向の軸がN-13°-Wとなる東西棟である。柱間は梁間の東側が北から1.4m、1.5m、桁行は南北ともに西から2.7m、2.9mである。西側の妻柱は検出されていないため、柱穴は7つで、西側の柱筋に0.4m程のずれがある。柱痕跡は確認されていないが、北西隅のSP2046では柱穴底面に直径0.20mほどの柱の痕跡とみられる凹みが認められる。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径0.25～0.42m、検出面からの深さは西側が0.1m程度と浅いが、東側は0.40～0.50mと比較的深くなっている。

遺物は3ヶ所の柱穴の埋土内から出土している。1454はSP2045から出土した常滑産の片口鉢で、常滑5型式にあたる製品であろう。同じ埋土からは古瀬戸後期頃の壺か瓶子とみられる小破片も出土している。1455はSP2049から出土した伊勢鍋で、使用による二次焼成が顕著である。図示した遺物は13世紀代のものであるが、古瀬戸後期製品の存在から、遺構は14世紀後葉以降の遺構であることは確実である。やや距離はあるが、SH1003と建物方向が近似するため、同時期となる15世紀中葉～16世紀後葉の遺構である可能性が高い。

SH2002（図165・167、図版46）

2区北西隅のD4区に位置する。大溝西辺の西側にあたり、SH2001の南東に近接する。梁行2間、桁行3間の側柱建物である。東西棟で、南北方向の軸はN-6°-Wである。建物規模は梁行が3.8m、

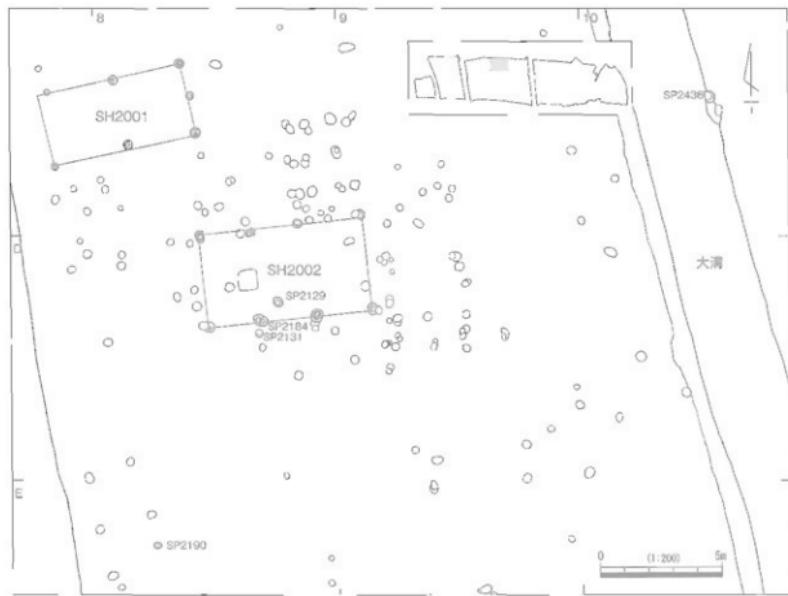


図165 掘立柱建物配置図（2区）

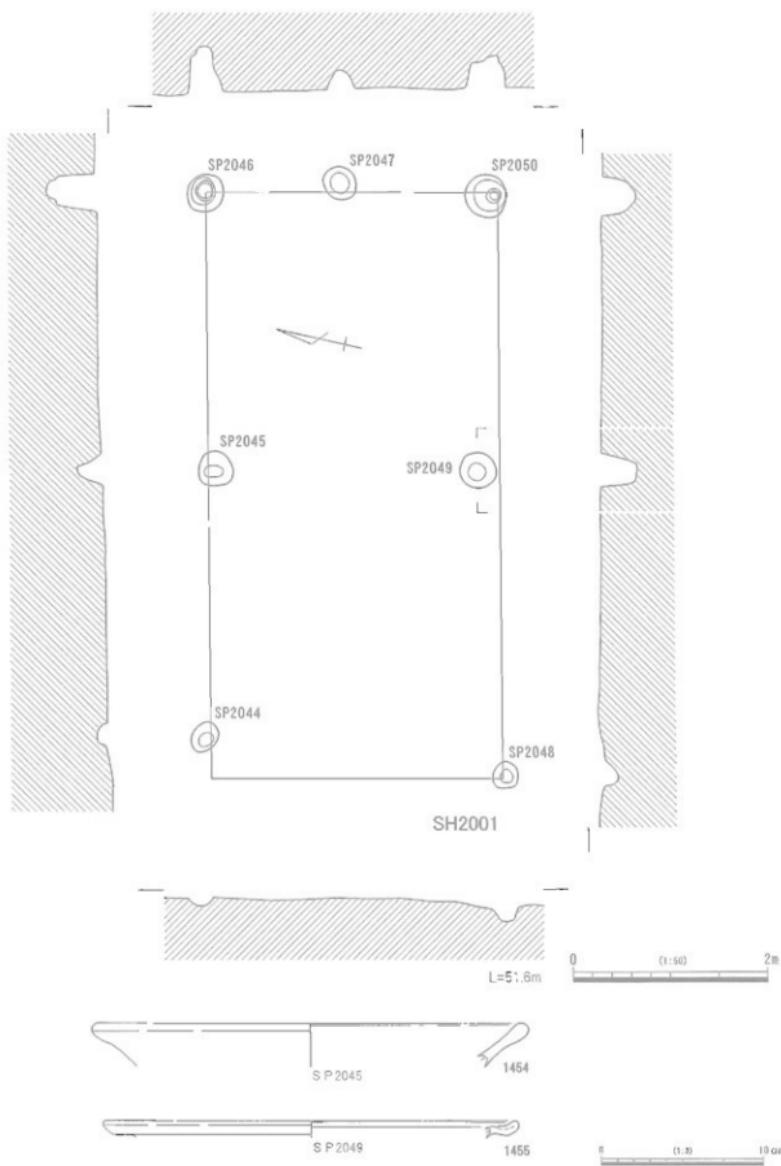


図 166 SH2001 実測図・出土遺物

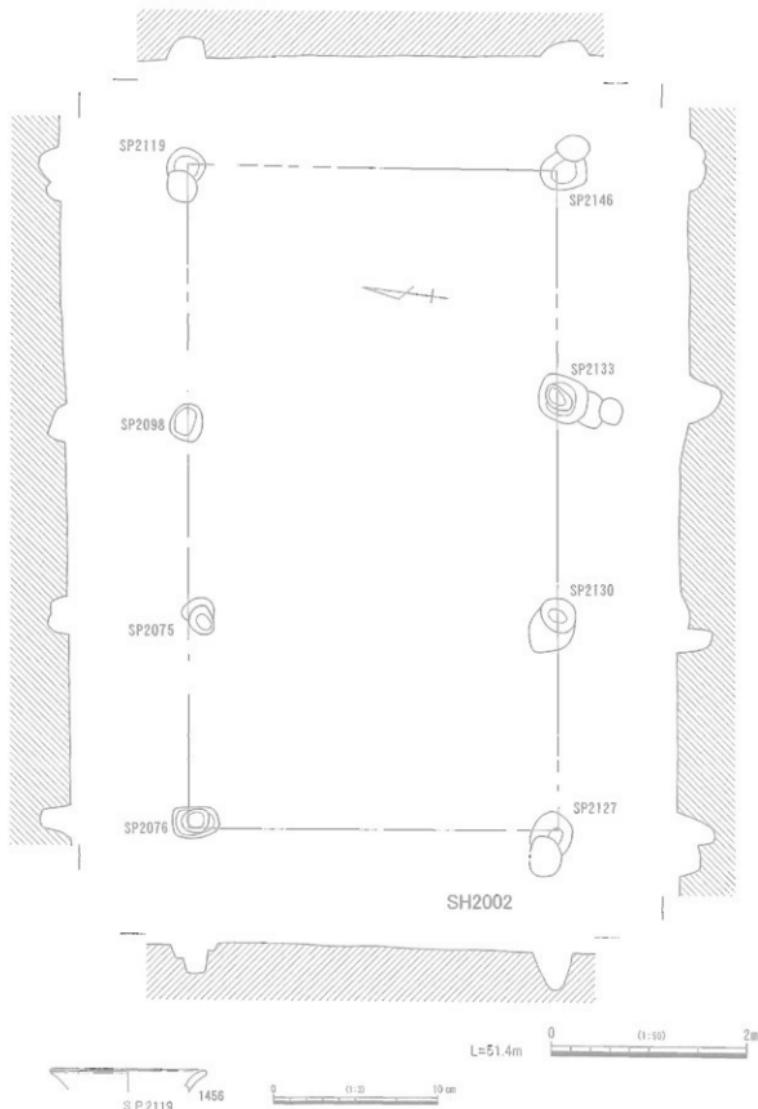


図 167 SH2002 寅測図・出土遺物

桁行が6.8 m、柱間は東側の梁行が北から1.8 m、2.0 m、西側が2.1 m、1.7 mである。桁行は北側が西から2.1 m、2.1 m、2.6 m、南側が西から2.2 m、2.2 m、2.4 mである。柱痕跡は検出されていない。柱穴の平面形は円形または梢円形で、直径は0.15～0.50 m、検出面からの深さは0.15～0.35 mである。

1456はSP2119の埋土内から出土した渥美湖西窯の小碗で、口縁部が小さく外反するⅡ期の製品とみられる。またSP2119の埋土から出土した壺の破片は、大溝Ⅰ層から出土した332(図65)の渥美窯産線刻文壺と接合した。この他、SP2075・SP2076の検出面付近で土師質土器の破片が出土した。遺物の年代からは、少なくとも12世紀末葉以降に廃絶したものと考えられる。やや離れた西側に展開するSH1001、SH1004と建物方向が近似し、特にSH1004とは北側桁行の軸がほぼ一致するため、これらと同時期となる可能性が高い。

(2) Ⅱ群の据立柱建物

大半が2区に展開し、やや離れた4区にSH4001がある建物群である。SH2004・SH2005・SH2006・SH2007・SH2008・SH2009・SH4001が該当し、出土遺物から15～16世紀代の建物で構成される。13世紀代の大溝とそれに伴う土壘も一部この時期まで残存したと考えられ、また残存土壘の内側にあたるSD2003が15～16世紀代の溝であるため、Ⅱ群建物のある空間はこれらによって区画された屋敷地と捉えられる。建物の南北軸は2～3°西に傾き、ほぼ真北近くを向くSH2004・SH2006・SH2008、西に5～8°傾くSH2005・SH2007・SH4001に分けられ、新旧関係は不明ながらそれぞれ同時期の建物群と捉えられる。なお、SH2009のみ西に14°と大きく傾き、他の建物群の軸方向と異なっている。

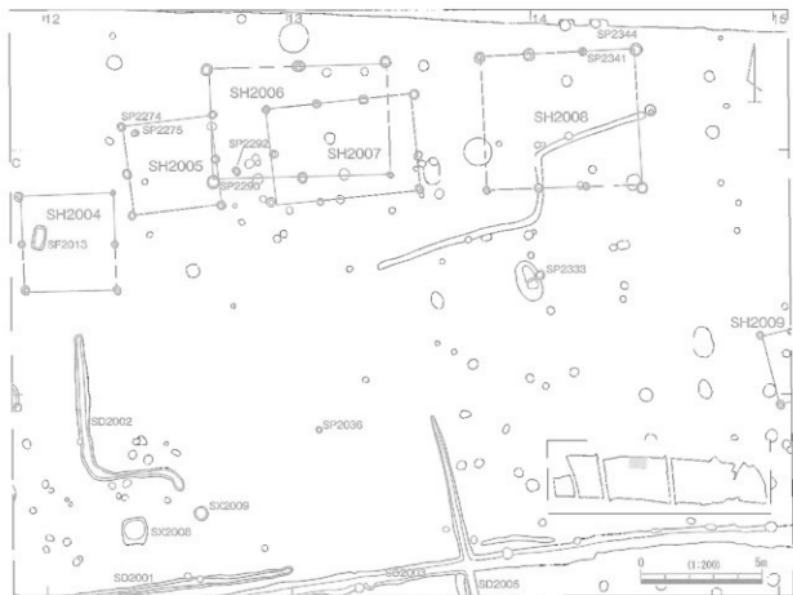


図168 据立柱建物配置図(Ⅱ群)

SH2004 (図 168・169)

2区中央部のC 11～12区に位置する。南北2間、東西1間の側柱建物で、建物規模は南北4.0m、東西3.75mである。南北方向の軸はN-2°-Wである。柱間は西辺が北から2.0mの等間、東辺が北から2.1m、1.9mである。柱痕跡は検出されておらず、柱穴の平面形状は円形、あるいは橢円形で、

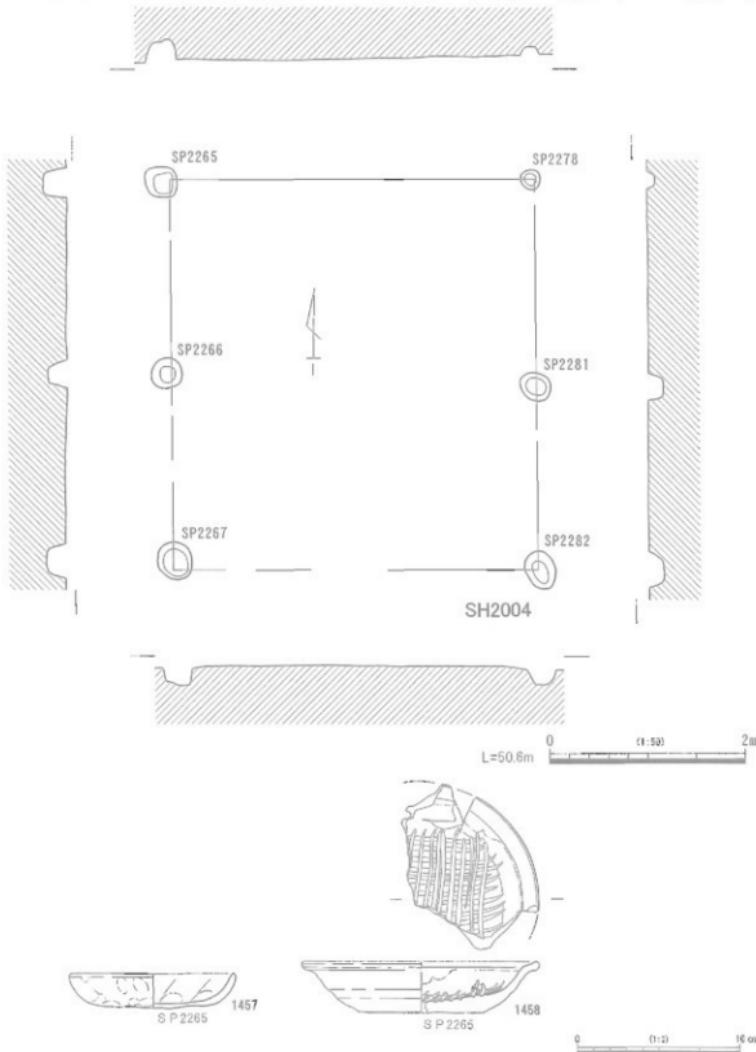


図 169 SH2004 実測図・出土遺物

北東の柱穴が直径 0.19 m、検出面からの深さ 0.07 m と小さいが、その他は直径 0.30 m～0.38 m、深さは 0.18 m～0.24 m である。

遺物は SP2265 埋土内の比較的上層から 2 点出土した。1457 は土師質土器の皿で、1/3 が残存する。非ロクロ成形品で外側に指頭痕が顕著に残り、内面には板ナデの痕跡も確認できる。1458 は古瀬戸後 IV 期新段階の鉢皿である。二次焼成が顕著であり、破損後に被熱したものと考えられる。これら遺物は 15 世紀中葉～16 世紀後葉の範疇で捉えられるため、遭墳も同時期と考えられる。

SH2005 (図 168・170)

2 区中央部の C 12 区に位置する。SH2004 とはほぼ同規模である。南北 2 間、東西 1 間の側柱建物で、一辺が 3.7 m のほぼ正方形の平面形状を呈する建物である。南北方向の軸は N-6°-W である。柱間は西辺が北から 1.9 m、1.8 m、東辺が北から 1.8 m、1.9 m である。柱痕跡は検出されておらず、柱穴の平面形状は円形、あるいは橢円形であった。規模はほぼ同様で、直径 0.30 m～0.45 m、検出面からの

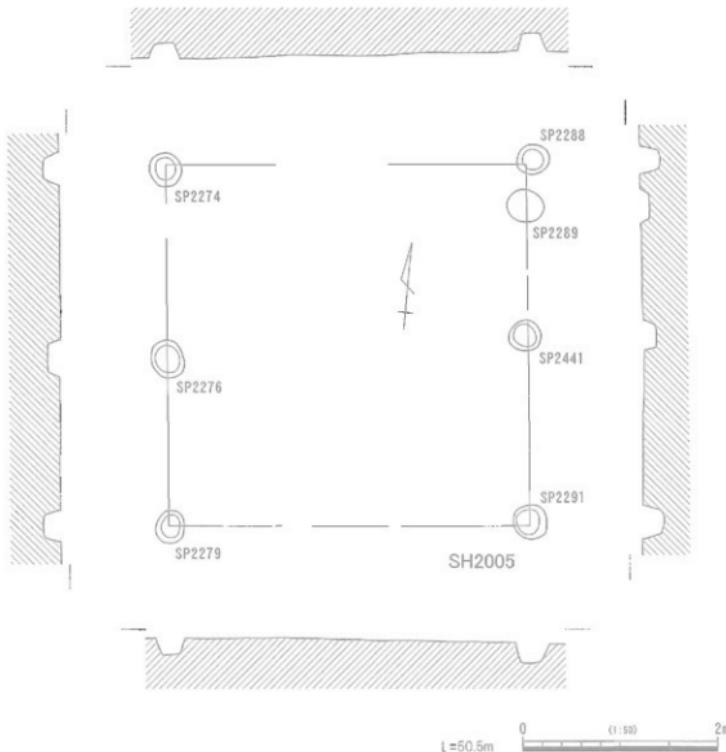


図 170 SH2005 實測図

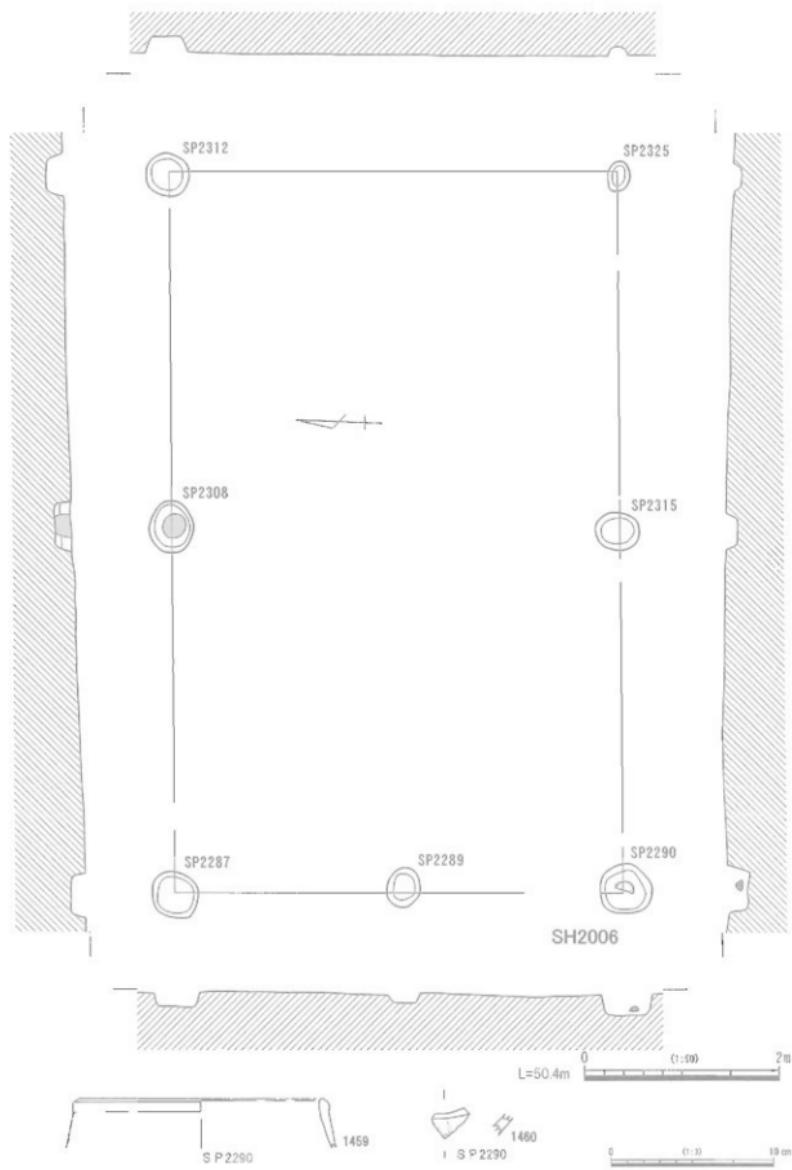


図 171 SH2006 実測図

深さは0.15m～0.28mである。出土遺物は皆無であるが、隣接するSH2007とほぼ同じ建物軸で並ぶことから、一連の建物であったと推定される。

SH2006 (図168・171、図版46)

2区北東部のC12区に位置し、SH2007と大きく重なる。梁間2間、桁行3間の側柱建物で、建物規模は梁行4.6m、桁行7.4mである。南北方向の軸がN-2°-Wの東西棟である。柱間は梁行の西側

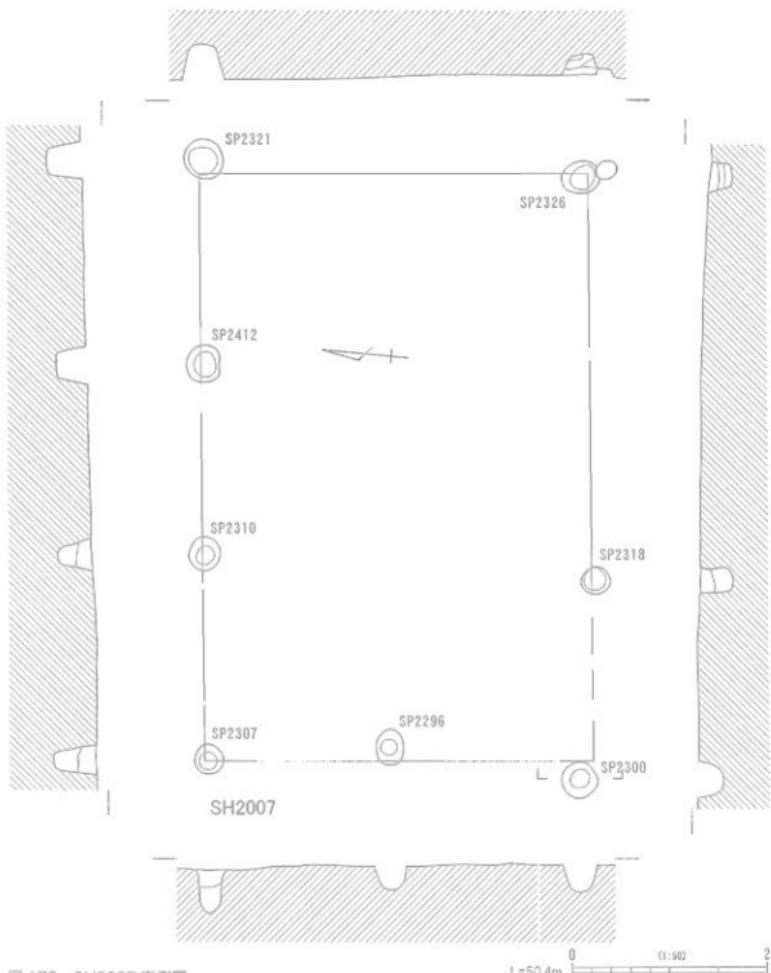


図172 SH2007 実測図

が北から 23 m、23 m の等間で、東側は妻柱が検出されていない。桁行の南側は西から 3.7 m の等間で、北側は西から 3.8 m、3.6 m である。柱痕跡は SP2308 で検出されており、その平面形は円形で直径は 0.24 m であった。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径 0.23 ~ 0.52 m、検出面からの深さは 0.15 ~ 0.20 m である。

遺物は南西隅の SP2290 の埋土から 2 点出土した。1459 は土師質土器の口縁部破片で釜頬と考えられるが、摩滅が顕著で詳細は不明である。1460 は二重網手文が描かれた磁器丸碗とみられ、18 世紀前～中葉頃の肥前産の磁器と推定される。土師質土器の釜類 1459 の年代観と周囲の建物との関連から、SH2006 は 16 世紀代の遺構と考えられる。1460 は近世の遺物であるが、混入品と理解したい。

SH2007 (図 168・172、図版 46)

2 区北東部の C 13 区に位置し、SH2006 と大きく重なる。梁行 2 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁間 4.0 m、桁行 6.0 m である。南北方向の軸が N - 5° - W となる東西棟である。柱間は桁行の北側が東から 2.1 m、1.95 m、1.95 m、南側は南東隅から 2 本目の柱穴が検出されていないが、柱間にあるとすると東から 1.8 m、2.1 m、2.1 m となる。梁行は西側が 2.0 m の等間となり、東側は妻柱が検出されていない。柱痕跡は確認されておらず、柱穴の平面形は概ね円形で、直径は 0.26 m ~ 0.39 m、深さは 0.24 m ~ 0.43 m である。

遺物は SP2321 埋土から土師質土器の破片が 1 点出土している。極めて小片であり、図化することはできなかったが、胎土などから中世後期の鍋釜類と推定される。また SH2007 と建物の軸方向が近い周囲の掘立柱建物 SH2004・2006・2008 が概ね 15 ~ 16 世紀代の遺構と捉えられることから、SH2007 も若干の時期差はあるものの、近い時期に営まれた建物であったと考えられる。

SH2008 (図 168・173、図版 46)

2 区北東部の B 13 ~ 14 区に位置し、SH2006 及び SH2007 に近接する。梁行 2 間、桁行 3 間の側柱建物、建物規模は梁行 5.6 m、桁行 6.4 m である。南北方向の軸が N - 3° - W となる東西棟である。柱間は桁行の北側が西から 2.0 m、2.25 m、2.15 m、南側は西から 2.1 m、2.0 m、2.3 m である。梁行の東側は北から 2.6 m、3.0 m、西側の妻柱は検出されていない。また東側の妻柱は 0.50 m ほど東に外れている。3 カ所の柱穴で柱痕跡が検出されており、その直径は 0.16 m ~ 0.18 m である。柱穴の平面形状は円形で直径 0.34 m ~ 0.48 m、深さは 0.18 m ~ 0.36 m である。

1461 は SP2335 埋土内からの出土した土師質土器の皿で、非クロ成形によるものである。口縁部がやや外反し、外面には煤の付着が確認できる。1462 と 1463 は SP2339 から出土した。1462 は埋土内下層から出土した土師質土器の皿で、非クロ成形によるものである。外面に指頭痕が残り、内面はナデによる調整が施される。1463 は埋土内上層から出土した土師質土器の鍋で、頸部のみの破片であるが、くの字形の内耳鍋と推定される。この他 SP2345 と SP2350 から古志戸呂の擂鉢、土師質土器鍋の小破片が出土している。遺物は 15 世紀中葉～16 世紀後葉頃の年代観が与えられることから、遺構もその時期に営まれたと推定される。

SH2009 (図 168・174)

2 区北東部の C 15 区に位置し、SH2008 に近接する。梁間 1 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁間 2.4 m、桁行 3.6 m である。東西棟で、南北方向の軸は N - 14° - W である。柱間は桁行の北側で西から 1.2 m、1.3 m、1.1 m、南側では西から 1.1 m、1.4 m、1.1 m である。柱穴の平面形は円形で、直径は 0.23 m ~ 0.37 m、深さは 0.12 m ~ 0.29 m である。南西隅の SP2364 は柱穴下部が抉れており、柱抜き取りの痕跡と考えられる。柱穴内の柱痕は確認されていない。

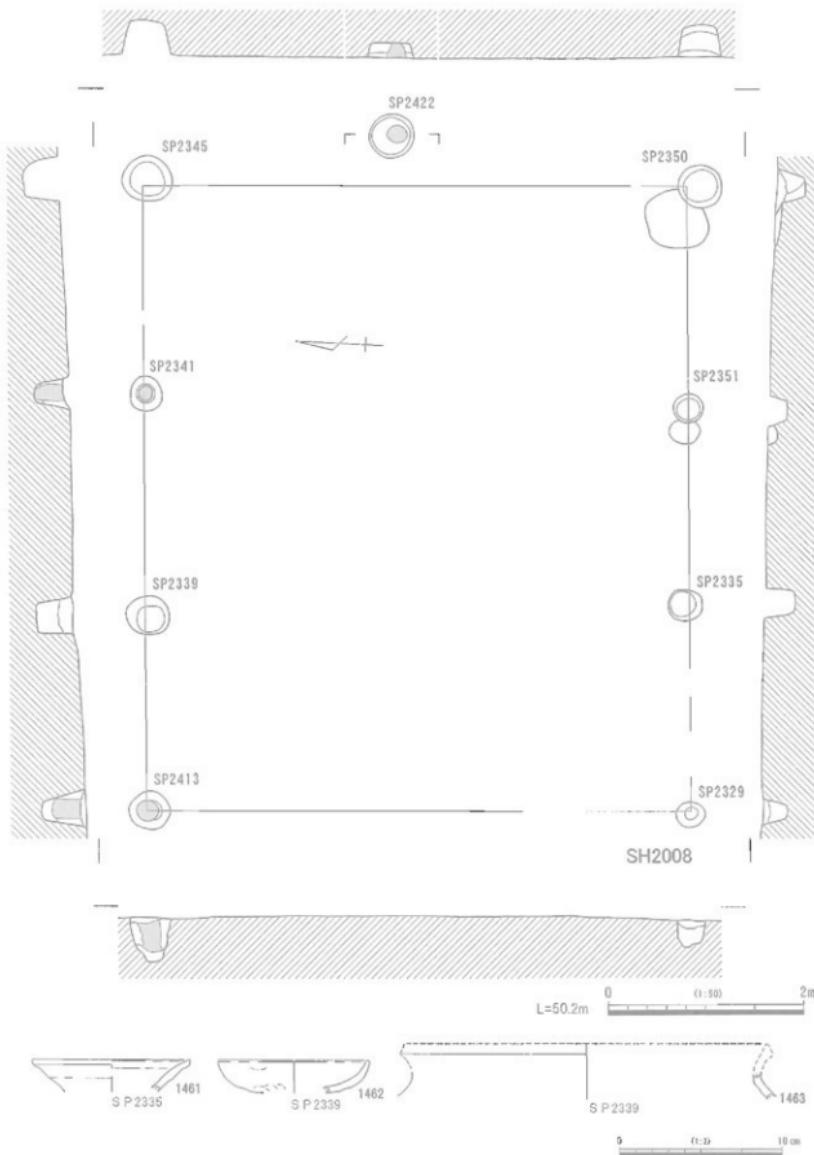


図 173 SH2008 寅測図

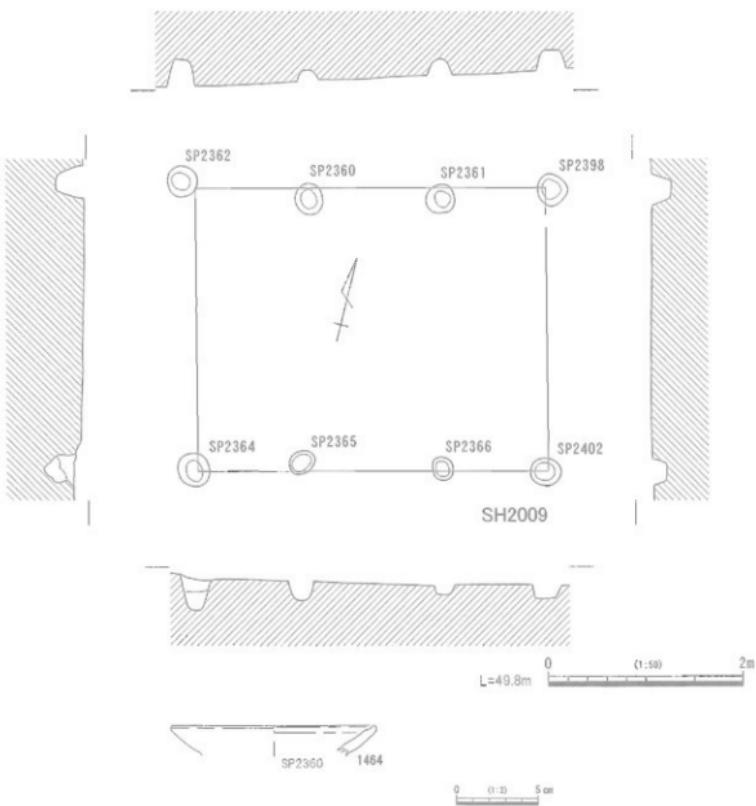


図 174 SH2009 実測図

1464 は SP2360 の埋土底面付近から出土した土師質土器の皿である。ロクロ成形品で、体部が直線的に立ち上がる特徴を持つ。このほか SP2361 と SP2365 から土師質土器の破片が出土しているが、固化することはできなかった。遺物の年代観から造構は 15 世紀後半～16 世紀前葉のものである可能性が高い。

SH4001（図 175）

4 区中央の C～D 16 区に位置する。梁行 1 間、桁行 2 間の傾柱建物で、建物規模は梁行 3.4 m、桁行 4.3 m であった。南北方向の綫が N-8°-W となる東西棟である。柱間は桁行が東西側とともに北側から 2.2 m、2.1 m であった。SP4055 を除いて柱痕が確認されており、平面形は円形で、直径 0.12 ～ 0.16 m であった。柱穴もほぼ円形で、直径 0.28 ～ 0.32 m、検出面からの深さは 0.16 ～ 0.2 m とほぼ類似した規模であった。遺物が出土していないことから、造構の時期認定は難しいが、やや離れた西に所在する SH2008 な

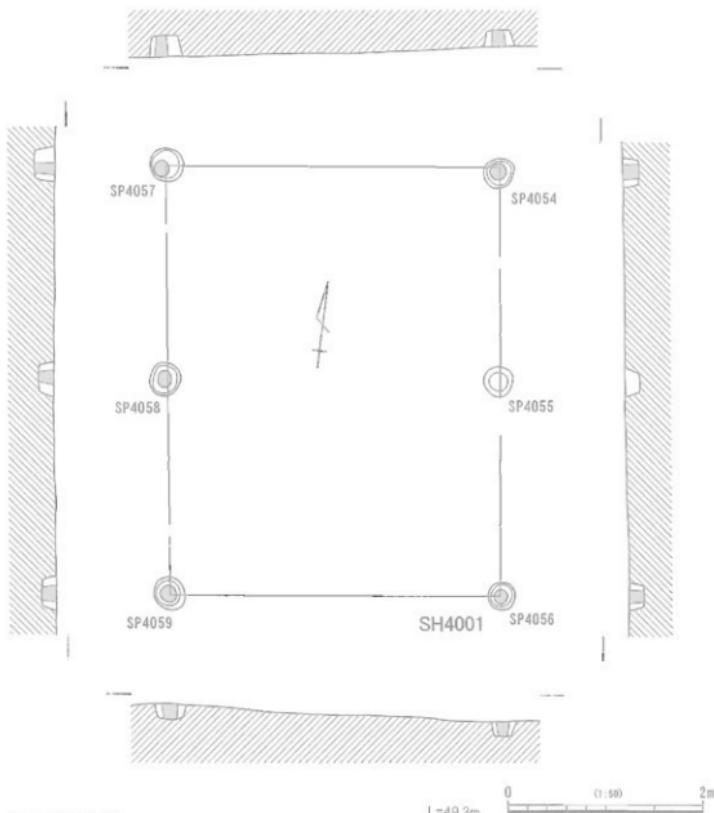


図 175 SH4001 実測図

どと建物方向が近似することから、同時期のものと推定される。

(3) Ⅲ群の掘立柱建物

6区に展開する建物群である。SH6004・SH6005・SH6006・SH6007・SH6008・SH6010・SH6011・SH6015が該当する。15～16世紀代に機能した大規模な溝SD1001の南側に位置し、またF 14区付近で南に向かって屈曲するSD1001に西側を区画された屋敷地であった可能性がある。

出土遺物から造営の年代観はいずれも15世紀後半～17世紀代の範疇で捉えられ、また建物の南北軸がほぼ5～10°西に振れる点でも共通することから、上記縦属年代の中での同一主体による建替えが想定できる状況である。建物の配置や重複関係から、SH6004・SH6007・SH6011・SH6015の建物群とSH6005・SH6006・SH6008・SH6010の建物群が抽出され、それぞれ同時期の建物であったと推定したい。

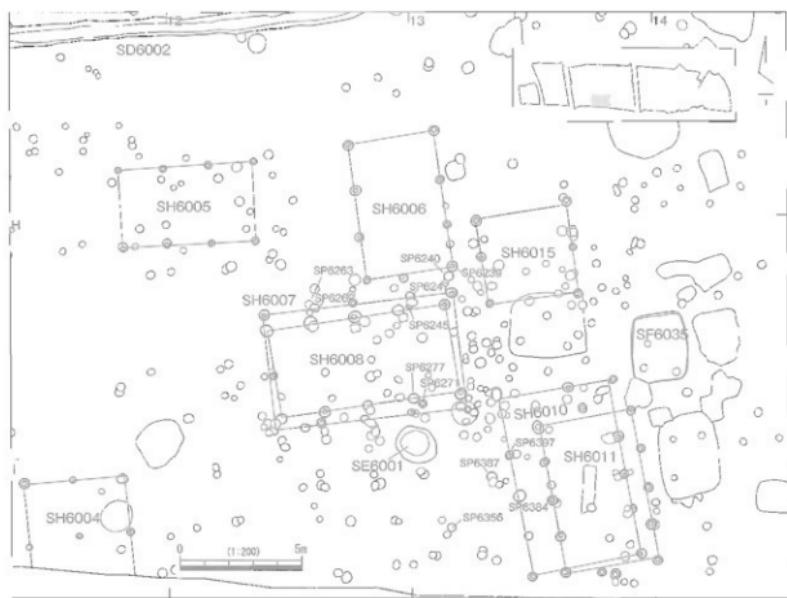


図 176 摂立柱建物配置図（Ⅲ群）

SH6004（図 176・177）

6 区南端の I 11 区に位置する。東西 2 間、南北 1 間が確認されたが、さらに調査区外となる南方方向へと広がっている可能性がある。建物規模は確認できるところで東西 4.2 m、南北 2.5 m で、南北方向の軸は N - 6° - W である。柱間は北側が 2.1 m の等間で、西側が 2.5 m、東側は 2.15 m である。柱痕跡は 3 つの柱穴で確認されており、柱痕跡の平面形は円形で、直径 0.18 m ~ 0.24 m である。柱穴も円形で、直径 0.33 m ~ 0.44 m、深さは 0.13 m ~ 0.26 m である。

SP6155 の埋土内から土師質土器などが出土しているが、いずれも小片で図示は不可能であった。土師質土器の破片は外面に煤が濃く付着しており、くの字形内耳鍋の可能性が高いため、遺構は 15 世紀後半～16 世紀代に営まれたと考えられる。

SH6005（図 176・178、図版 47）

6 区中央の G 11 ~ 12 区に位置し、Ⅲ群建物群のやや離れた北東側にある。梁行 1 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁行 3.2 m、桁行 5.5 m である。南北方向の軸が N - 2° - W となる東西棟である。桁行北側の柱間は西から 1.8 m、1.9 m、1.8 m、南側は西から 1.8 m、1.9 m、1.8 m とほぼ同様の数値を示す。柱痕跡は全ての柱穴で確認され、いずれも平面形は円形で、直径は 0.16 ~ 0.18 m である。柱穴も平面形は円形で、直径 0.26 ~ 0.40 m、検出面からの深さは 0.1 ~ 0.2 m を測る。遺物は出土していないが、南側の SH6006 や SH6008 などの建物群に近接し、建物方向もほぼ一致することから、これら建物群と同時期の遺構と判断される。

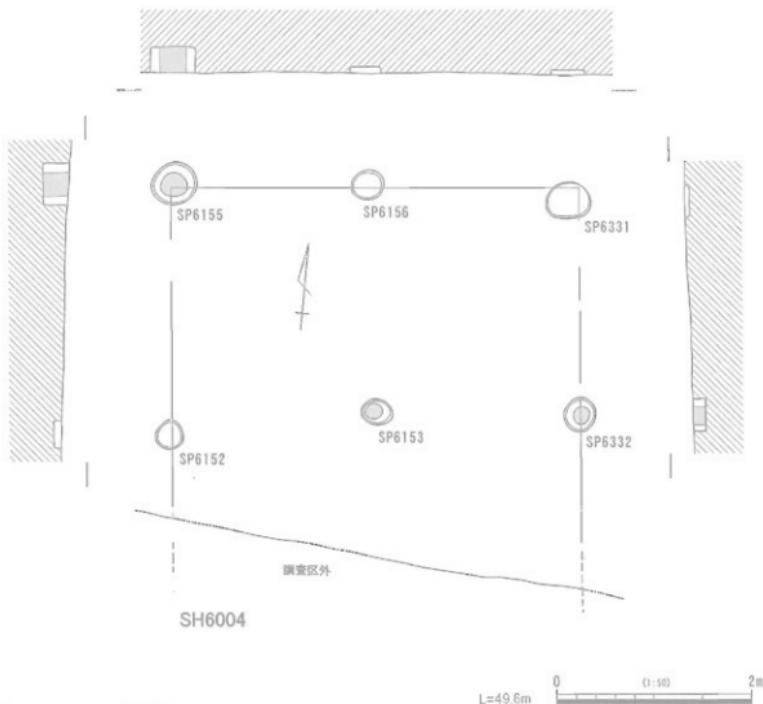


図 177 SH6004 実測図

SH6006（図 176・179、図版 47・69）

6 区中央の G 12 区にあり、Ⅲ群建物群の最も北側に位置する。梁行 2 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁行 3.6 m、桁行 5.6 m である。南北方向の軸が N-8°-W となる南北棟である。柱間は梁行南側で西から 1.5 m、2.1 m である。梁行北側では妻柱が検出されなかった。桁行西側と桁行東側は北から 2.0 m、1.8 m、1.8 m である。柱痕跡はすべての柱穴で確認された。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.16 m-0.22 m である。柱穴の平面形も円形で、直径は 0.32 m-0.51 m、深さは南側の妻柱が 0.43 m とやや深く、その他は 0.25 m-0.38 m で、0.35 m 前後のものが最も多い。

1465 は SP6259 から出土した土師質土器の皿である。柱痕跡の埋土から出土しており、隣接する SP6260 から出土した皿との接合が確認された。ロクロ成形品で、体部は直線的に立ち上がり、底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。1465 が 16 世紀中葉～後葉の所産と推定されることから、遺構の帰属年代もその時期と考えられる。

SH6007（図 176・180、図版 47）

6 区中央の H 12 区に位置し、SH6008 とは全体が重なる。梁行 2 間、桁行 4 間の側柱建物で、建物規模は梁行 4.8 m、桁行 8.0 m である。南北方向の軸が N-7°-W となる東西棟である。柱間は桁行北

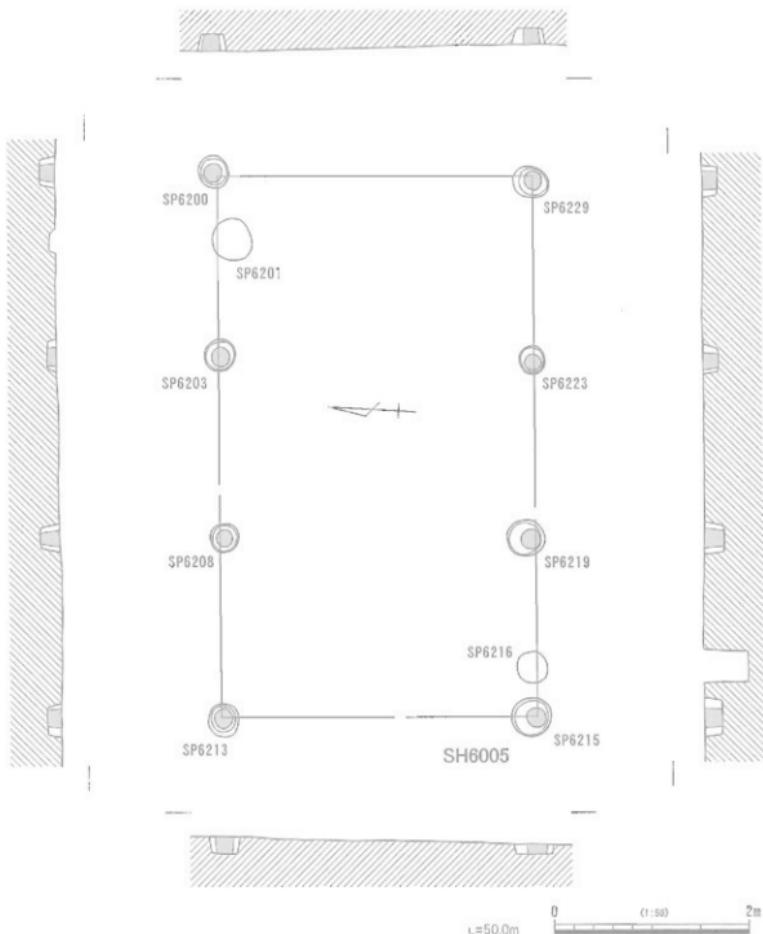


図 178 SH6005 実測図

側が西から 2.2 m、1.6 m、2.4 m、1.8 m、桁行南側が西から 1.9 m、1.8 m、2.0 m、2.3 mである。梁間西側が北から 2.5 m、2.3 m、梁間東側が北から 2.7 m、2.1 mである。柱痕跡は 7ヶ所の柱穴で確認された。柱痕跡の平面形は全て円形で、直径は 0.18 m～0.26 mである。柱穴は全てほぼ円形で、直径 0.28 m～0.40 m、深さは 0.12 m～0.53 m とばらつきが大きい。

1466 は SP6242 の掘方埋土から出土した土師質土器の皿である。非クロロ成形品で、体部から口縁部にかけて強く内湾する。1467 は SP6262 の埋土から出土した土師質土器の皿である。ロクロロ成形品で底部外面に糸切痕がみられる。これら出土遺物は 16 世紀後半～17 世紀前葉の所産と推定されることから、

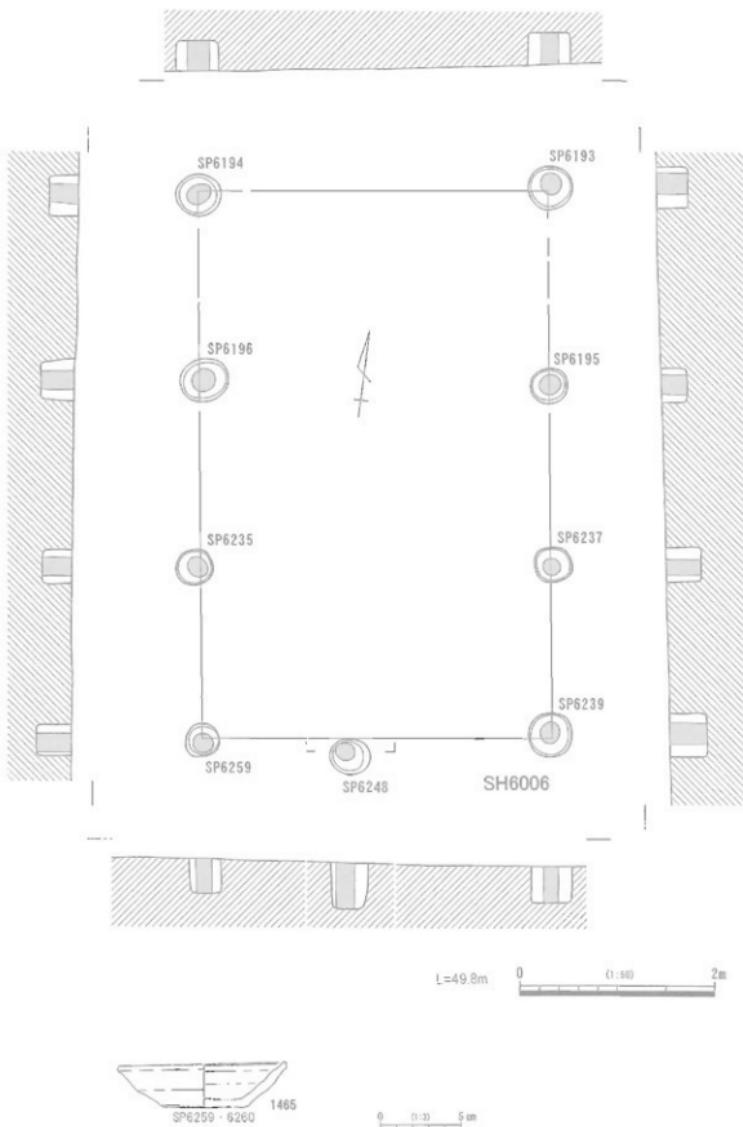


図 179 SH6006 実測図・出土遺物

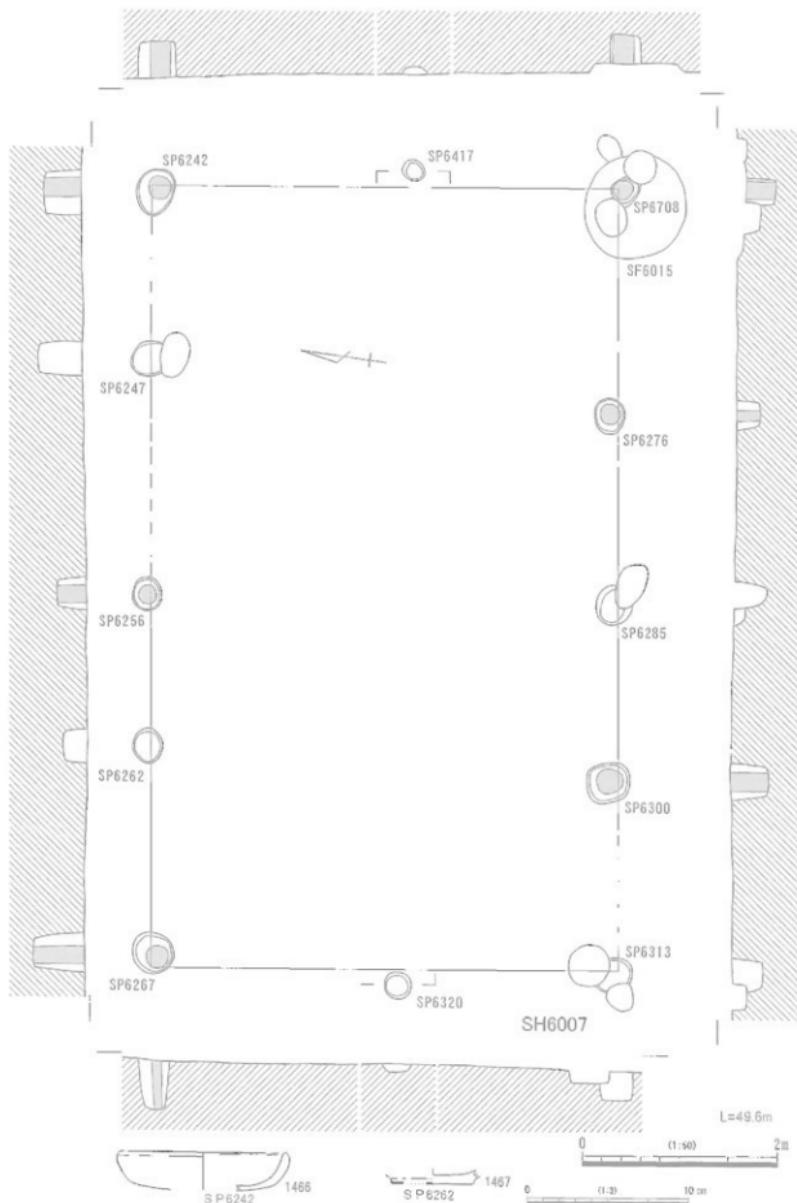


図180 SH6007 室測図

建物の帰属年代もその時期とみられる。また、ほぼ重なった位置で検出されたSH6008は、SH6007とは建物の方向、規模及び構造において共通することから、建て替え関係にあったと考えられる。ただし、柱穴の切合がないため、前後関係は不明である。

SH6008 (図 176・181、図版 47)

6区中央のH 12区に位置する。SH6007と全体が重なる。梁行2間、桁行4間の側柱建物で、建物規模は梁行3.6m、桁行7.4mである。南北方向の軸がN-8°-Wとなる東西棟である。柱間は桁行北側が西から1.9m、1.7m、2.0m、1.8m、桁行南側が西から1.8m、1.8m、2.0m、1.8mである。梁間東側は北から1.8m、1.8mの等間となり、梁間西側では妻柱が検出されていない。柱痕跡は5ヶ所の柱穴で確認され、柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.18m～0.24mである。柱穴もほぼ円形で、直径は0.40m～0.52m、深さは0.17m～0.46mで、0.20m前後のものが多い。南東隅の柱穴SP6421の底部には扁平な石を根石として敷いていたことが確認されている。

SP6265・6266・6268・6319で土師器、土師質土器の皿が出土しているが、小片であるため図化は不可能であった。土師質土器皿は15世紀～16世紀にかけての遺物とみられ、また前述のようにSH6007とは建替え関係にある可能性が高いため、遺構の帰属年代も16世紀後半～17世紀前葉の範疇で捉えられる。

SH6010 (図 176・182、図版 48)

6区中央のH～I 13区にあり、SH6011と大きく重なる位置にある。建物は梁行2間、桁行4間の側柱建物で、規模は梁行4.6m、桁行7.3mである。南北方向の軸がN-6°-Wとなる南北棟である。柱間は梁行の北側と南側が西から2.9m、1.7mで、いずれも妻柱が東に偏る。桁行西側は北から2.3m、1.7m、1.7m、1.6m、桁行東側は北から2.4m、1.5m、1.4m、2.0mである。柱痕跡は9ヶ所の柱穴で確認された。柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.15m～0.20mである。柱穴の平面形もほぼ円形で、直径0.34m～0.50m、深さは0.10m～0.23mだが、南北の妻柱と北東隅の柱のみ0.40m～0.45mとなる。

出土遺物は小片のみで図化できたものはないが、SP6367・6727の柱穴より出土した小破片に内耳鍋があることから、遺構は15世紀後半～16世紀代のものと考えられる。

SH6011 (図 176・183、図版 48)

6区中央のH～I 13区に位置し、SH6010とは大きく重なる。建物は梁行2間、桁行4間の側柱建物で、規模は梁行3.9m、桁行6.2mである。南北方向の軸がN-10°-Wとなる南北棟である。柱間は梁行北側が西から1.9m、2.0m、梁行南側が西から2.0m、1.9mである。桁行西側は北から1.5m、1.6m、1.5m、1.6m、東側は北から1.7m、1.6m、1.5m、1.4mである。妻柱は南北ともにやや外側にずれる。柱痕跡は全ての柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.16m～0.24mで、0.20m前後のものが大半を占める。柱穴の平面形もほぼ円形で、直径は0.33m～0.57m、深さは0.10m～0.25mである。

遺物は土師質土器の破片などが4点出土したが、いずれも小破片で図化することはできなかった。土師質土器片は、皿あるいは鍋類とみられ、15世紀後半～16世紀代の所産と考えられる。また、上記SH6010とSH6011は建物の構造、規模、方向において共通していることから、建て替え関係にあったとみられる。ただし、直接的な切合い関係がないため、前後関係は不明である。

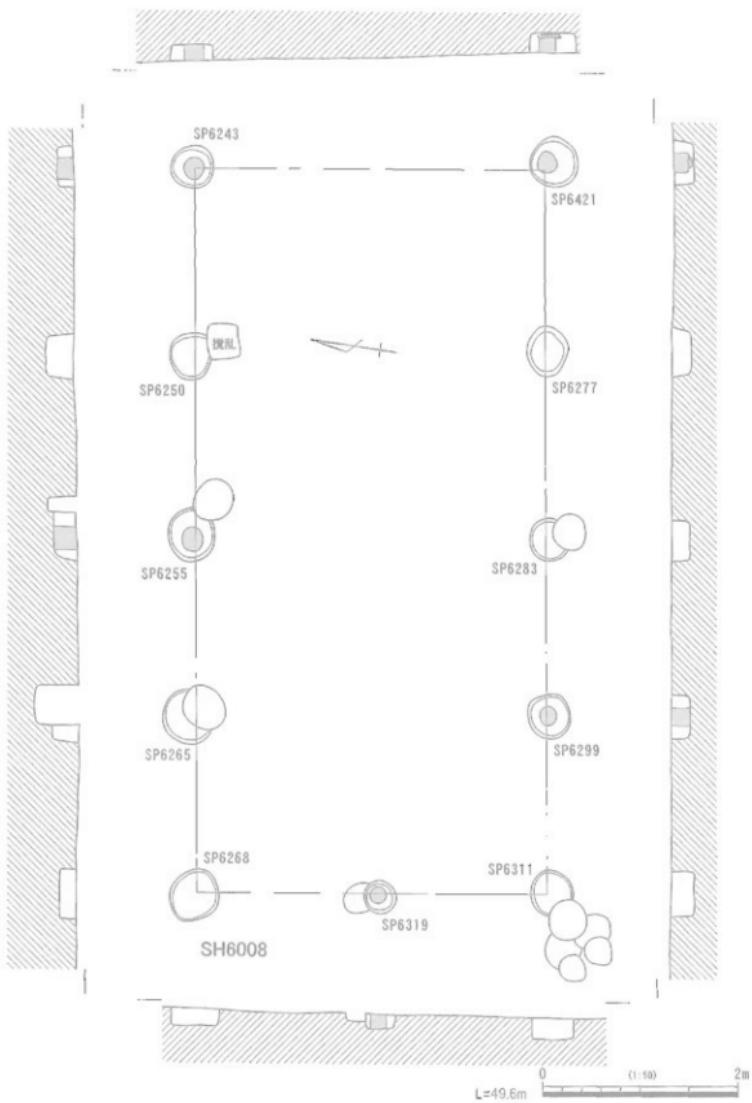


図 181 SH6008 実測図

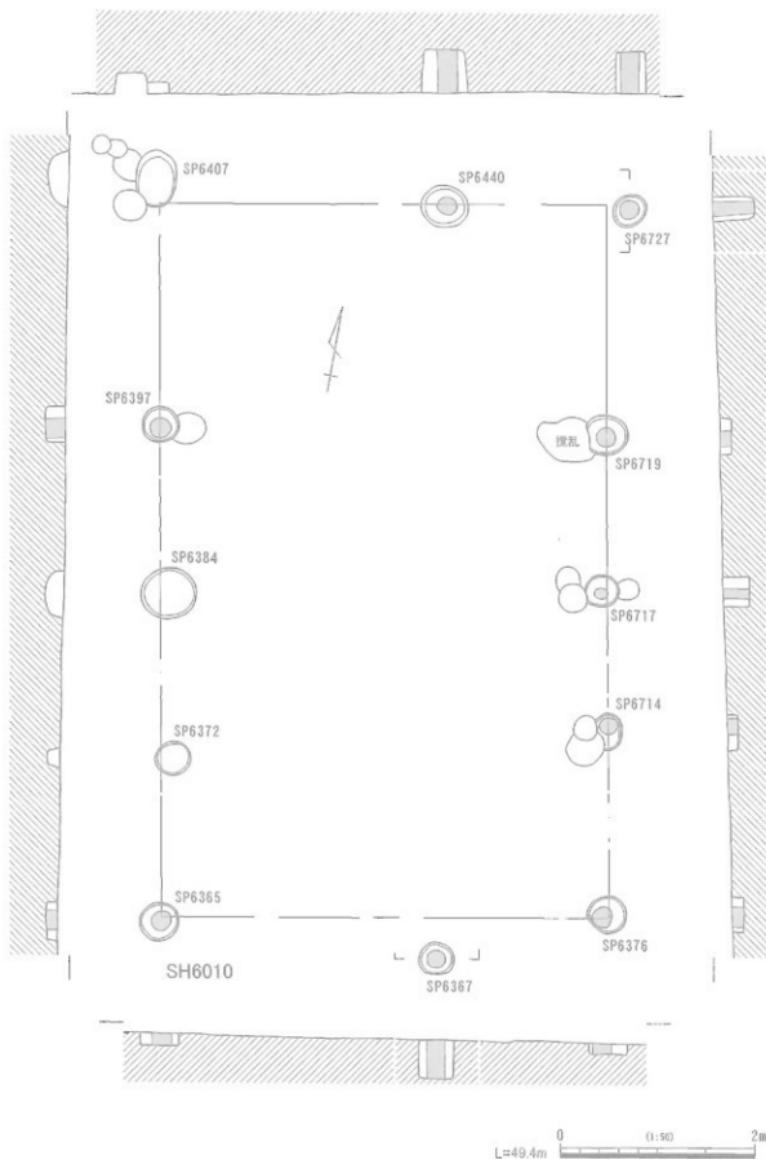


図 182 SH6010 実測図

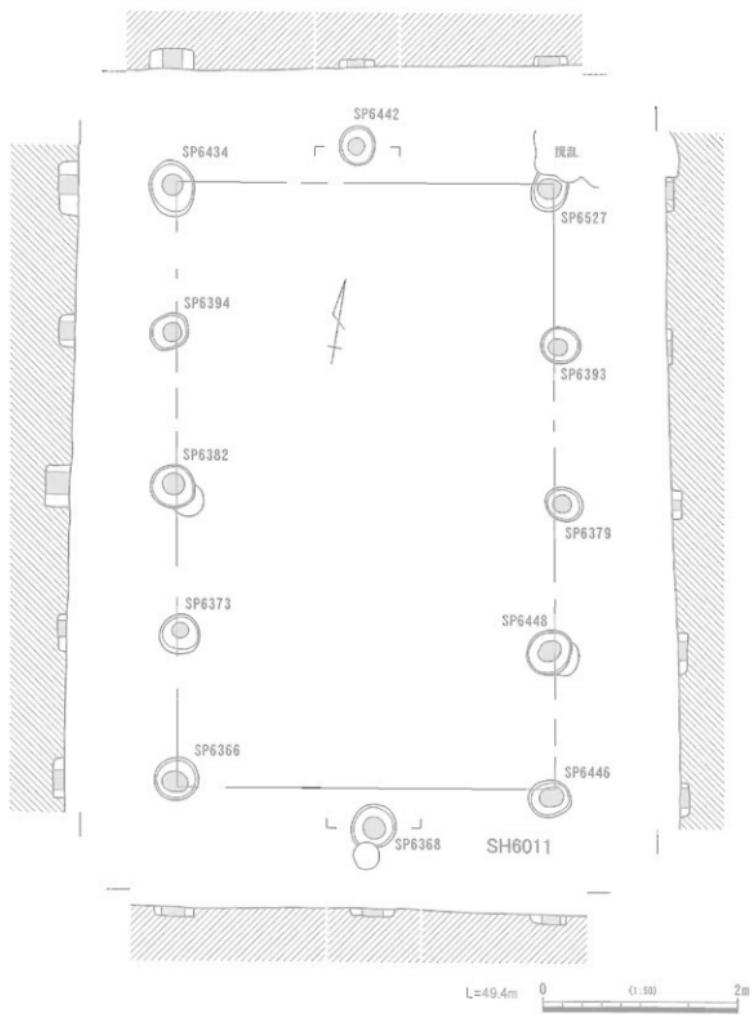


図 183 SH6011 実測図

SH6015 (図 176・184)

6区中央のG～H 13区にあり、Ⅲ群建物群の北東部に位置する。南北2間、東西1間の側柱建物である。平面形は正方形に近いが、南北3.6m、東西3.8mと若干東西の軸が長く、南北方向の軸はN-7°-Wである。柱間は西辺と東辺が北から17m、19mとなっている。柱痕跡は全ての柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.18m～0.27mである。掘方の平面形もほぼ円形で、直径は0.33m～0.47m、深さは0.28m～0.49mである。

1468はSP6497から出土した山茶碗口縁部の破片である。1469はSP6480から出土した、くの字形内耳鍋の内耳鍋部破片である。この内耳鍋を手がかりとすれば、造構の営まれた時期は15世紀中葉～16世紀代と考えられる。

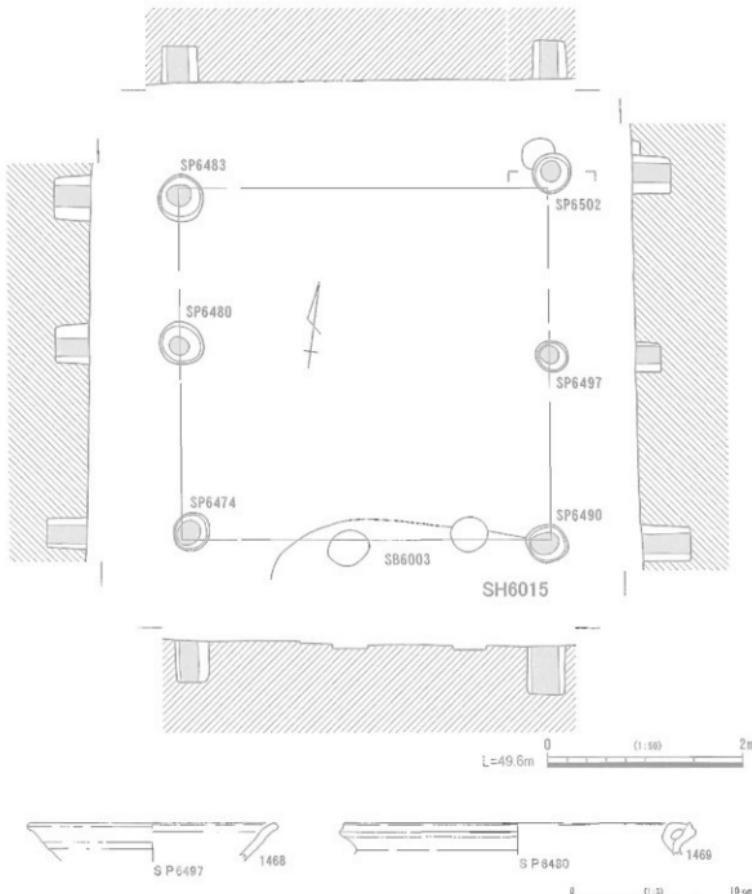


図 184 SH6015 実測図・出土遺物

(4) IV群の掘立柱建物

3区から7区にかけての東側に所在する建物群である。SH3001がやや北に離れた場所にある以外は、SH7002・SH7003・SH7006・SH7008・SH7009が集中している。SH7002とSH7003は16世紀～近世までの年代観で捉えられ、その他は15世紀後半～17世紀代の建物と推定される。東側を15世紀後半～16世紀代のSD1001に区画され、北側は残存する大溝が区画しているとみられるが、建物群北側や東側に遺構があり確認されないため、広い空隙地を持っていることが指摘できよう。建物の南北軸は西に1~2°と、ほぼ真北を向くSH7006・SH7008・SH7009とやや傾きが大きいSH3001の建物群と、西に12°傾くSH7002・SH7003の建物群に分けられる。遺物相から後者は時期的に降る建物群と想定される。なお、出土遺物の様相から古代の建物としたSH6013・SH6014・SH7001・SH7004は規模、位置、建物の方向から、この時期のIV群建物群と関連する可能性もある。

SH3001(図186)

3区西部のE～F 19区に位置し、IV群建物群のうち、やや北側に離れて所在する。周囲には小穴が散在するが、本遺構以外に目立った遺構はみあたらない。梁間1間、桁行3間の側柱建物で、建物規模は梁行4.0m、桁行5.4mを測る。南北方向の軸がN-5°-Wとなる東西棟である。桁行北側では西端柱間が2.1mであったが、SP3053とSP3059間の柱穴が検出されず、この間が3.3mの間隔となっている。桁行南側の柱穴は西から2.2m、1.9m、1.3mであった。柱痕跡はSP3058を除いた柱穴で確認されている。柱痕跡の平面形は円形あるいは梢円形で、直径0.14m～0.20mである。柱穴の規模は直径0.22m～0.34m、深さは0.06m～0.16mで、平面形状は円形であった。

出土遺物は皆無であったため、遺構の時期を把握するのは困難である。ただし、やや離れた場所ではあるが、南側にあるSH7006・SH7008・SH7009と建物方向が類似することから、同時期の遺構と推定される。

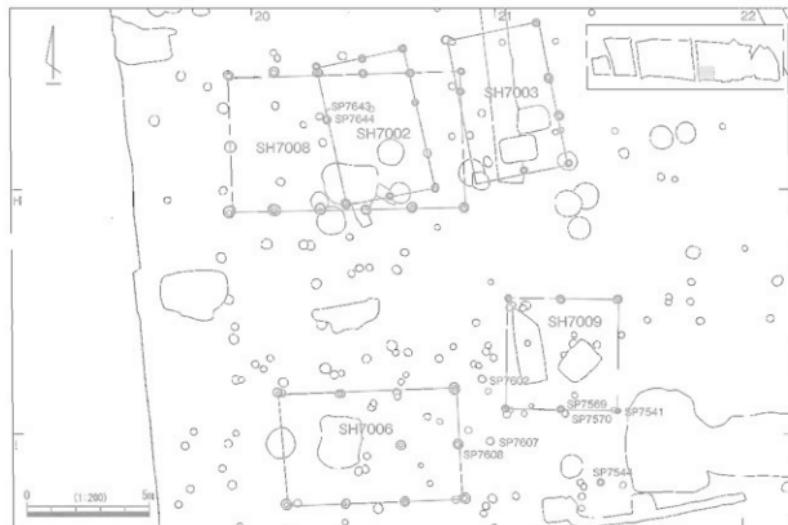


図185 掘立柱建物配置図(IV群)

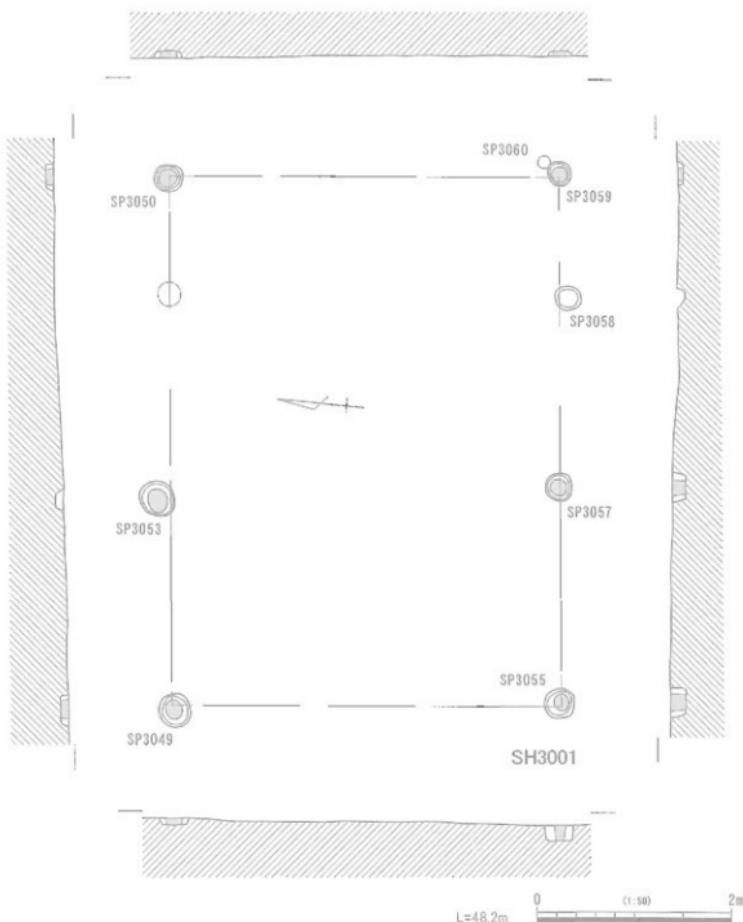


図 186 SH3001 実測図

SH7002 (図 185・187、図版 47)

7区東端のG 20 区に位置にあり、IV群建物群の北部に位置する。梁行2間、桁行3間の側柱建物で、規模は梁行3.9 m、桁行6.2 mである。南北棟で、南北方向の軸はN - 12° - Wである。柱間は梁行が南北とともに等間185 m間隔である。桁行は西側の柱穴が1ヶ所検出されなかつたが、東側と同様と考えると、北から22 m、21 m、1.5 mと推測できる。柱痕跡は8ヶ所の柱穴で確認した。柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.14 m～0.23 mである。柱穴の平面形もほぼ円形であり、直径は0.27 m～0.38 m、深さは棟柱と四隅の柱穴が深く0.20 m～0.40 mで、その他は0.05 m～0.17 mであった。なお、南西隅

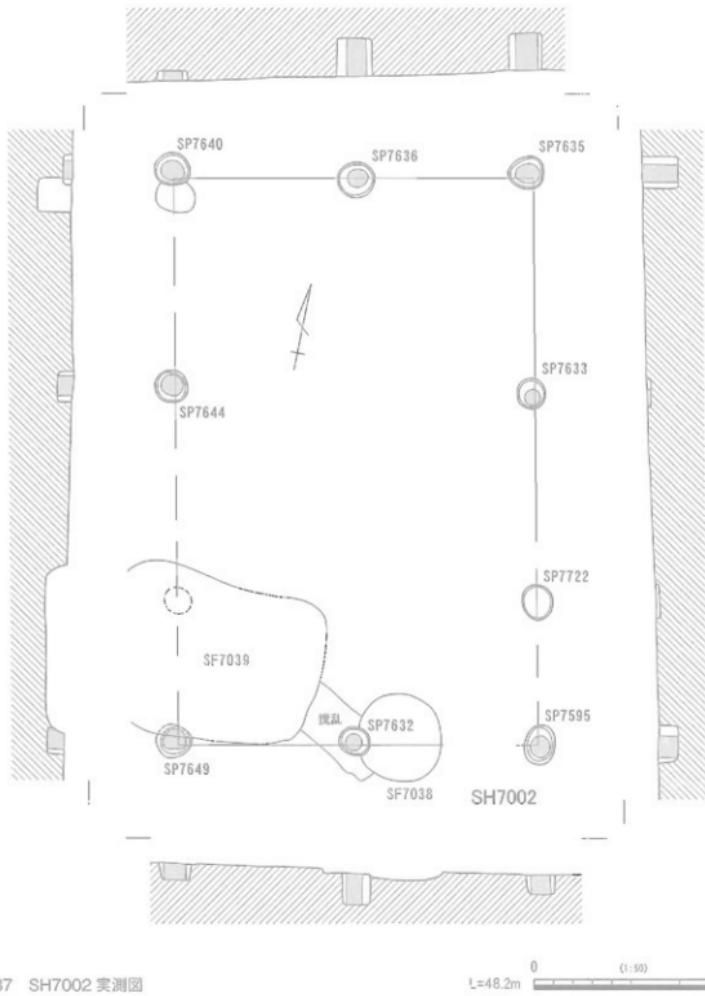


図 187 SH7002 実測図

0
1=48.2m (1:50)
2m

の柱穴 SP7649 は SF7039 によって一部切られている。

遺物は SP7632・7636・7640 から 5 点出土しているが、いずれも小破片であり図示は不可能であった。このうち SP7640 柱痕跡からは近世志戸呂製品の小片が出土しているが、器種は不明である。これを根拠とすれば、SH7002 は近世の建物跡である可能性はあるが、後述のように SH7003 との関連から 16 世紀代～近世という時間幅で建物の年代を捉えておきたい。

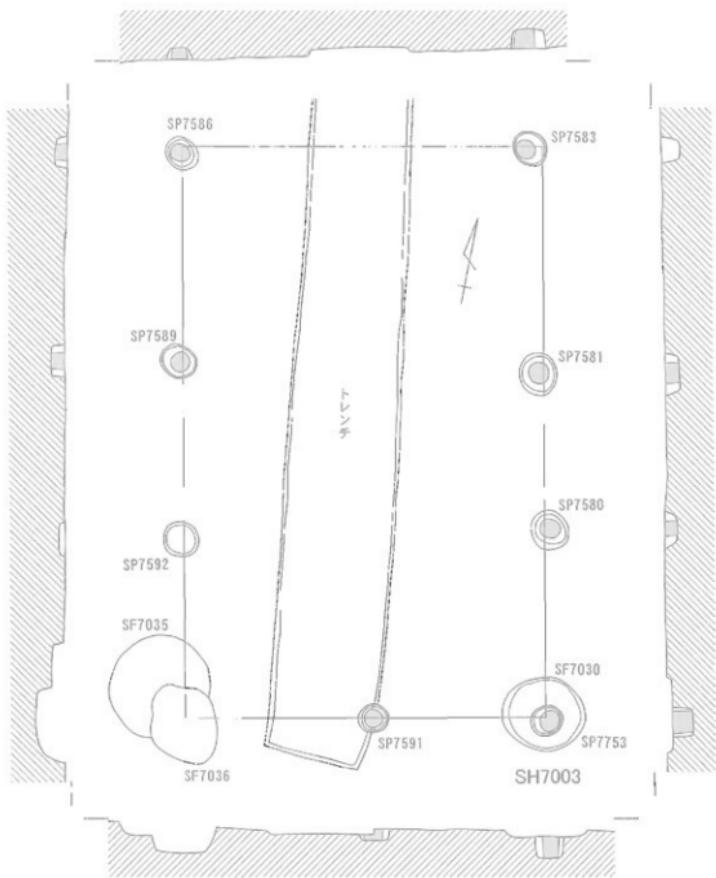


図 188 SH7003 実測図

$L=47.8m$ 0 (1:50) 2m

SH7003 (図 185・188、図版 48)

7 区東端の G 20 ~ 21 区にあり、IV 群建物群の北部に位置する。梁行 2 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁行 3.9 m、桁行 6.2 m である。南北方向の軸が N - 12° - W となる南北棟である。柱間は梁行が 1.85 m の等間となる。桁行の柱間は南西隅の柱穴が SF7036 に破壊されているため検出できなかつたが、東側に対応する位置にあるとすれば、北から 2.2 m、2.1 m、1.5 m と推測できる。柱痕跡は 8 カ所の柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.14 m ~ 0.23 m である。柱穴の平面形もほぼ円形であり、直径に 0.27 ~ 0.38 m、深さは妻柱と四隅の柱穴が深く 0.20 m ~ 0.40 m で、その他は 0.05 m ~ 0.17 m であった。

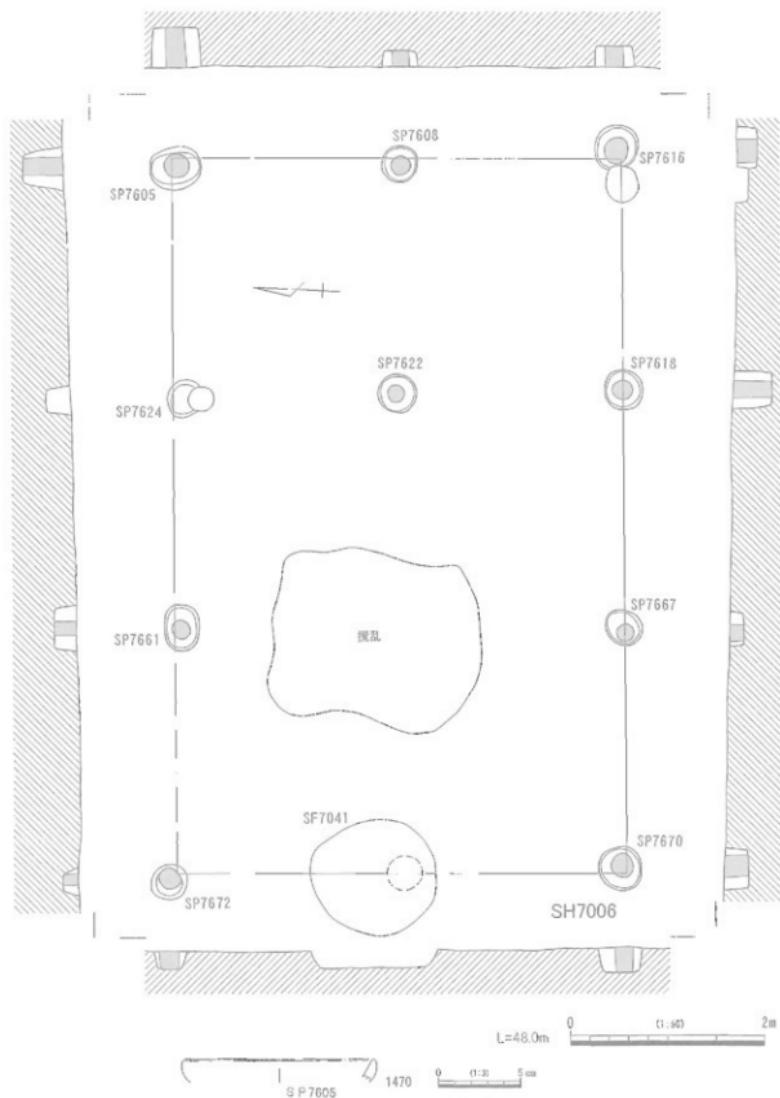


図 189 SH7006 実測図・出土遺物

出土遺物は小片で図示することはできなかつたが、SP7589の掘方埋土より非ロクロ成形の土師質土器皿とみられる破片が出土しており、16世紀～17世紀代の製品と考えられる。なお、前述したSH7002とSH7003は平行して並ぶ位置関係にあり、建物の規模や構造、方向性の点で共通しているこ

とから一連の建物である可能性が高い。出土遺物に乏しいが、SH7003 と SH7002 は 16 世紀代～近世にかけて営まれた建物と推定される。

SH7006（図 185・189）

7 区南西端の H～120 区にあり、IV 群建物群の最も南に位置する。梁行 2 間、桁行 3 間の総柱建物の可能性があるが、西半の柱の一部が他遺構や擾乱によって失われているため、明確ではない。建物規模は梁行 4.6 m、桁行 7.2 m である。南北方向の軸が N - 2° - W となる東西棟である。柱間は西側の妻柱が SF7041 に切られて確認できないが、東側と同様とすれば梁行が 2.3 m の等間となり、桁行も 2.4 m の等間である。柱痕跡は 9ヶ所の柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.15 m～0.22 m である。掘方の平面形もほぼ円形であり、直径は 0.34 m～0.46 m、深さは 0.09 m～0.42 m とばらつきがある。

1470 は SP7605 柱痕跡から出土した。非ロクロ成形の土師質土器の皿で、口縁端部の内外面には強い横ナデが認められる。15 世紀後葉～16 世紀前葉の遺物と考えられることから、遺構の帰属年代もその時期になるだろう。後述のように SH7008 と SH7009 とは一連の建物と推定される。

SH7008（図 185・190・191）

7 区西端の G 20 区にあり、IV 群建物群の北よりに位置する。梁行 2 間、桁行 5 間の側柱建物で、建物規模は梁行 5.6 m、桁行 9.4 m である。南北方向の軸が N - 2° - W となる東西棟である。柱間は東側の妻柱が検出されていないが、西側と同様であるとすると梁行が 2.8 m の等間となる。桁行の柱間は南北とともに西から 1.9 m、1.8 m、1.9 m、1.9 m、1.9 m である。柱痕跡は 11ヶ所の柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.18 m～0.29 m である。掘方の平面形もほぼ円形であり、直径は 0.40 m～0.50 m、深さは 0.22 m～0.43 m である。

1471 は SP7637 の柱痕跡より出土した須恵器で、壺類の口縁部であろう。1472 と 1473 はいずれも瀬美瀬西産の山茶碗類である。1472 は SP7634 掘方埋土から出土した山茶碗、1473 は SP7637 の柱痕跡から出土した小皿である。1474～1479 は土師質土器の皿である。1474 と 1475 は非ロクロ成形品で、1474 は SP7634 の柱痕跡埋土、1475 は SP7642 の埋土から出土した。1476～1479 はロクロ成形品である。1476 は SP7715 柱痕跡から出土し、口径 7.0cm を測る小型品である。1477 は SP7698 の柱痕跡埋土、1478 は SP7634 掘方埋土から出土しており、いずれも体部から口縁かけてやや外反しながら立ち上がる形態である。1479 は SP7698 掘方埋土から出土しており、底部外面に糸切り痕が明瞭に残る。この他内耳鍋や土師器皿とみられる小破片も出土している。これらの遺物は 15 世紀後半～16 世紀後葉の範疇で捉えられ、前述したように SH7006 と関連する建物である可能性が高い。

SH7009（図 185・192）

7 区西端の H 21 区にあり、IV 群建物群の南西部に位置する。南北 1 間、東西 2 間の側柱建物で、規模は一辻 4.6 m のほぼ正方形に近い平面形となり、南北軸は N - 1° - E である。北辺、南辺とともに柱間は 2.3 m の等間となる。柱痕跡は 6 つの柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.14 m～0.18 m である。柱穴も円形で、直径 0.23 m～0.38 m、深さは 0.08 m～0.16 m である。

出土遺物は全くないが、近接する SH7007・SH7008 とはその位置関係から強い関連が認められ、また建物軸の方向性に類似が認められることから、3 棟が同時期に建てられた一連の建物群である可能性が高いと考えられる。

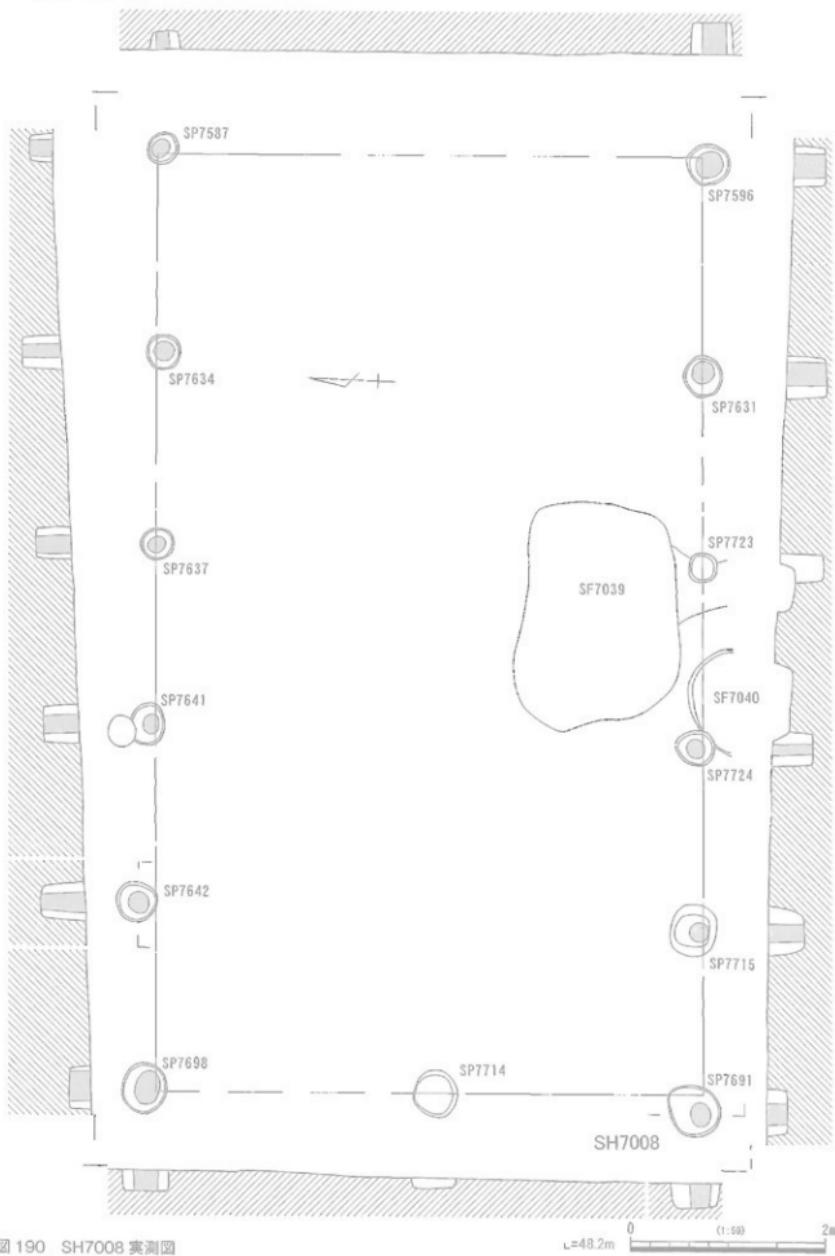


図 190 SH7008 實測図

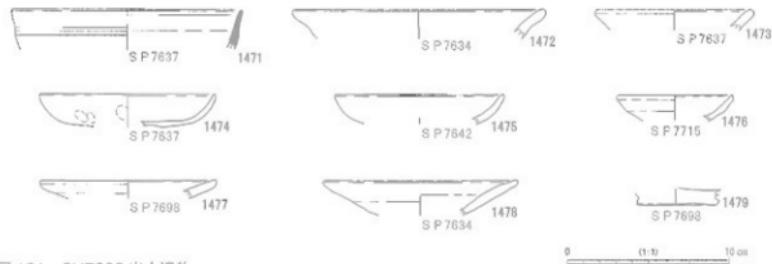


図 191 SH7008 出土遺物

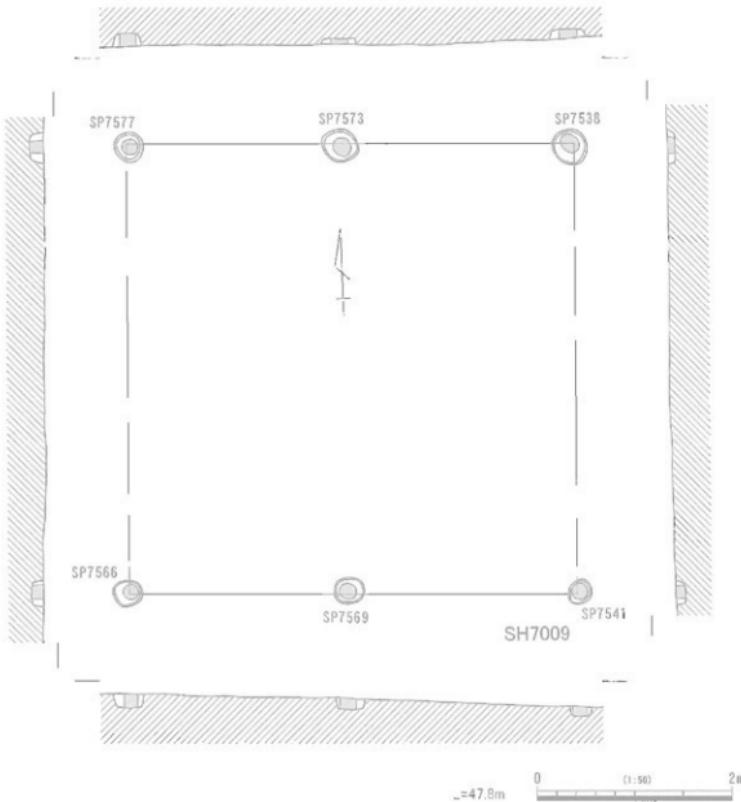


図 192 SH7009 実測図

(5) V群の掘立柱建物

3区～7区にかけての西側に位置する建物群である。北部（図193）のSH3002・SH3003・SH3004、南部（図197）のSH7011・SH7013・SH7014・SH7016が該当する。出土遺物から北部のSH3002・SH3003・SH3004と南部のSH7016は15世紀後半～16世紀にかけての建物であり、南部のSH7011・SH7013・SH7014は出土遺物から12～13世紀代の建物であることが判明している。建物群のある敷地は、西側では明瞭な区画溝などは確認されていないが、古代～近世まで流れていた河道となっており、北側は残存する大溝及び土壠に区切られていたと考えられる。建物の軸方向は西に1°傾くSH7011以外は14～20°と他群と比べて大きく傾くものが多く、西側を流れた旧河道SR8001の影響を受けた建物配置であったとも考えられる。

SH3002（図193・194）

3区南端のF23区に位置し、SH3004と南東隅が重なる。梁行1間、桁行2間の個柱建物で、建物規模は梁行4.0m、桁行4.4mである。南北方向の軸がN-20°-Wの東西棟である。柱間は桁行北側、南側とともに等間で2.2mを測る。柱痕跡が確認されたSP3146は、柱痕跡の直径が0.16m、柱穴の規模は直径0.39m、深さ0.13mである。四隅の柱穴は直径0.35m～0.40mと比較的大きく、その他の柱穴は直径0.25m～0.30mである。平面形状はSP3168が隅丸方形となる以外はほぼ円形で、検出面からの深さは0.07m～0.42mである。

1480はSP3149の埋土内から出土した非ロクロ成形の土師質土器皿である。底部内外面に煤が付着する。1481はSP3163の埋土内から出土した土師器坏である。口縁部を体部中ほどで大きく屈曲させる平安期のものであろう。口縁端部には油煙らしき痕跡がみられる。1482はSP3166の埋土内から出土した土錘で、長さ3.1cm、幅2.2cm、重さ3gの小型品である。この他SP3138とSP3146の埋土内から土師



図193 掘立柱建物配置図（V群北部）

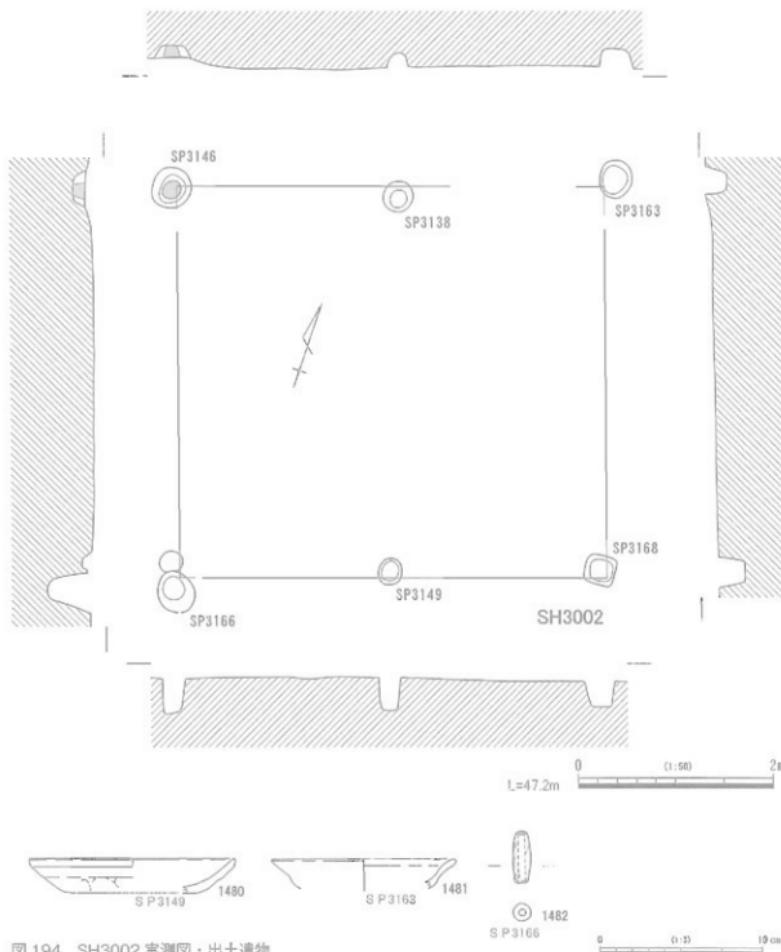


図 194 SH3002 実測図・出土遺物

質土器の破片が3点出土したが、図示は不可能であった。出土遺物から、遺構の帰属年代は16世紀中葉～後葉と考えられる。

SH3003 (図 193・195)

3区南部のE～F 24区に位置し、SH3002・SH3004と近接する。梁行2間、桁行2間の単柱建物で、建物規模は梁行4.7m、桁行6.2mであった。南北方向の軸がN-14°-Wとなる東西棟である。北東隅と梁行東側の柱穴が検出されなかったが、桁行南側で西から3.1m、3.1m、梁行西側で北から2.4m、2.3

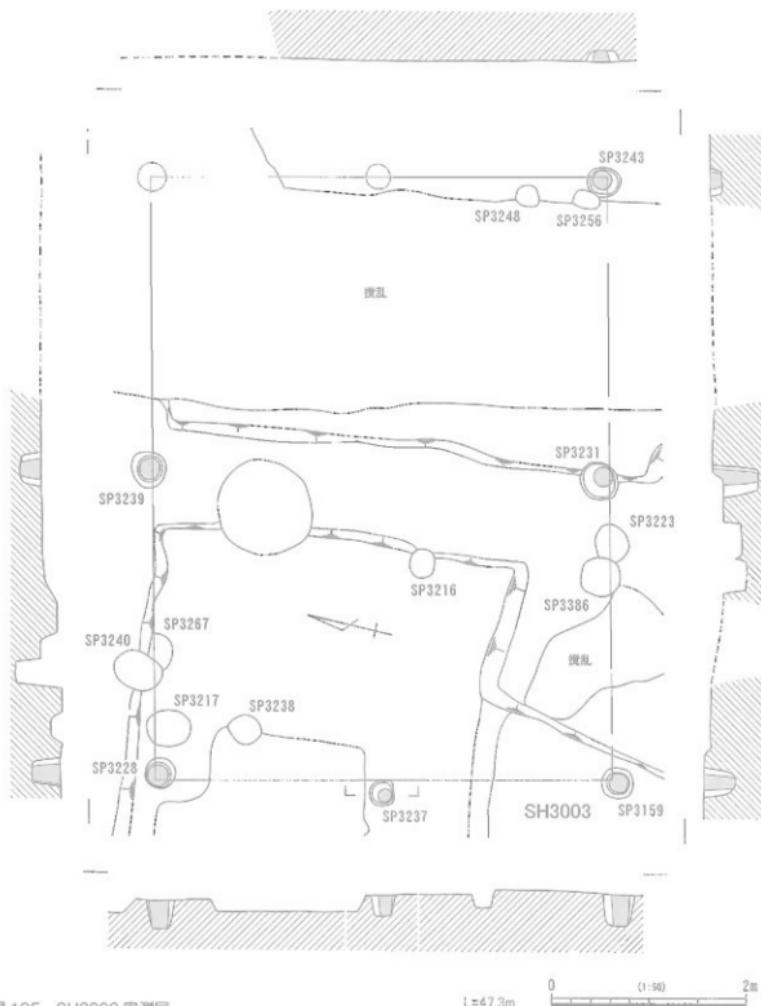


図195 SH3003 実測図

mの柱間規模が確認されているため、近似した場所に柱穴があったと考えられる。柱痕跡は検出されたすべての柱穴で確認されており、その平面形は円形で、直径0.12 m～0.2 mであることが判明している。柱穴の直径は0.24 m～0.36 m、検出面からの深さはSP3243が0.12 mと浅い以外は0.2 m～0.48 mと比較的深くなっている。出土遺物は皆無であったが、隣接するSH3004と建物方向がほぼ一致することから、同時期の遺構と推定される。

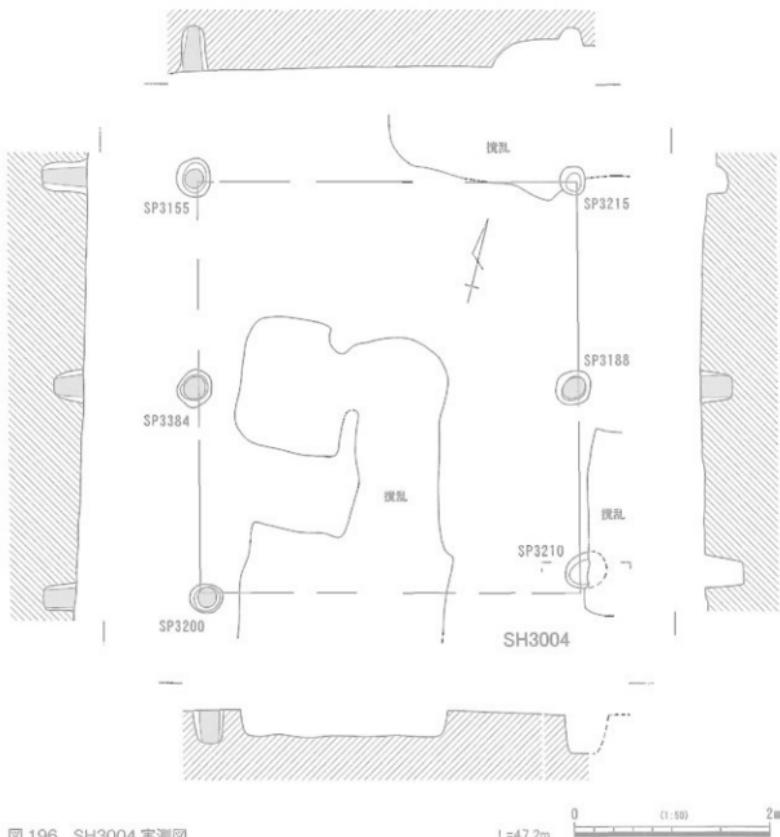


図 196 SH3004 実測図

SH3004 (図 193・196)

3 区南端の F 24 区に位置し、SH3002 と北西隅が重なる。東西 1 間、南北 2 間の正方形に近い平面を持つが、中央部に搅乱が入るため、総柱建物か側柱往物かは不明である。また東側も搅乱を受けており、東方向にさらに広がっていた可能性もある。建物規模は確認できるところで東西に 3.9 m、南北に 4.2 m、柱間は南北方向で 2.1 m、東西方向で 1.95 m とそれぞれ等間となっている。南北方向の軸は N - 14° - W である。柱痕跡は 4 つの柱穴で確認できており、柱痕跡の平面形は円形で、直径 0.19 m ~ 0.24 m である。柱穴の平面形は円形で、直径 0.34 m ~ 0.38 m、深さ 0.31 m ~ 0.48 m であった。

出土遺物は SP3155 埋土内から土師質土器の破片が 1 点出土したが、小破片につき図示はできなかつた。胎土やわずかにみえる体部外面の指頭痕などから、15 世紀後葉～16 世紀代のくの字形内耳鍋と考えられる。この遺物から、遺構の年代は 15 世紀後葉～16 世紀代と推定される。

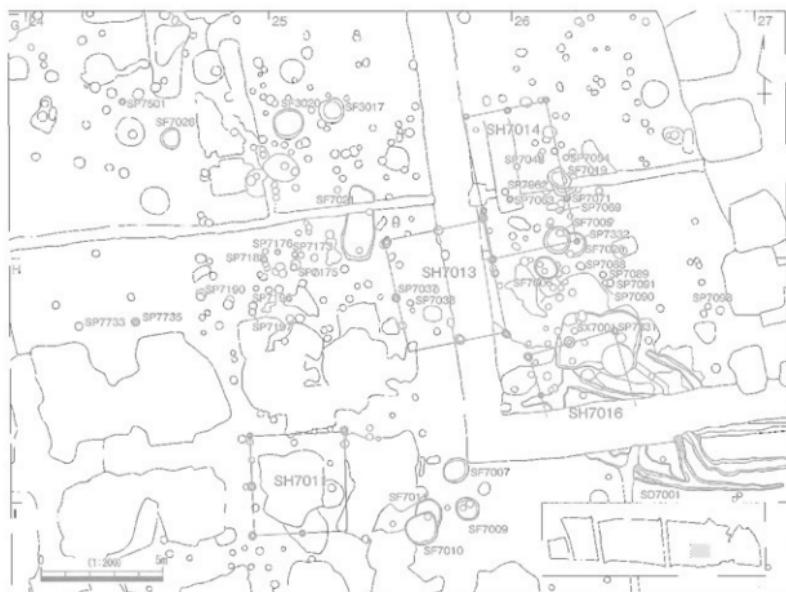


図 197 据立柱建物配置図（V群南部）

SH7011 (図 197・198)

7 区南部の H 25 ~ I 25 区に位置し、IV 群建物群の南側にある。梁行 2 間、桁行 2 間の南北棟で、南北方向の軸は N - 1° - W である。建物中心や東側、北側が大きく攢乱されており、建物構造の判断はできず、また一部柱穴も確認できなかった箇所があった。建物規模は梁行が 4.1 m、桁行が 4.6 m で、柱間は梁行が西から 2.2 m、1.9 m、桁行は 2.3 m の等間であった。柱痕跡は 4 ヶ所の柱穴で確認できた。柱痕跡の平面形は円形で、直径 0.32 m ~ 0.42 m である。柱穴の平面形は円形で、直径 0.14 m ~ 0.22 m、深さ 0.40 m ~ 0.50 m であった。

SP7220 の埋土から山茶碗の小破片が出土していることから、根柢には乏しいが、少なくとも遣構は12世紀以降に築造されたと考えられる。

SH7013 (图 197·199)

7区中央付近のG～H 25区に位置する。東西2間、南北2間の正方形に近い平面を持ち、南北方向の軸はN-11°Wである。建物の東側に南北方向の大きな擾乱が入るため、建物構造の詳細は不明である。建物規模は東西3.9m、南北4.1mで、柱間は南側が西から2.0m、1.9m、西側が2.1m、2.0m、北側と東側の柱間は不明である。柱痕跡は4つの柱穴で確認できた。柱痕跡の平面形は円形で、直径0.14m～0.20mである。柱穴の平面形は円形で、直径0.22m～0.40m、深さ0.23m～0.40mであった。

遺物は5つの柱穴から出土している。1483は山茶碗の小皿である。SP7133の埋土から出土した底部の破片で、渥美湖西廬Ⅱ期の製品であろう。1484と1485は土師質土器の皿である。1484はSP7060から出土し、塵滅により調整は確認できない。1485はSP7024の埋土から出土し、底部は丸く、口縁

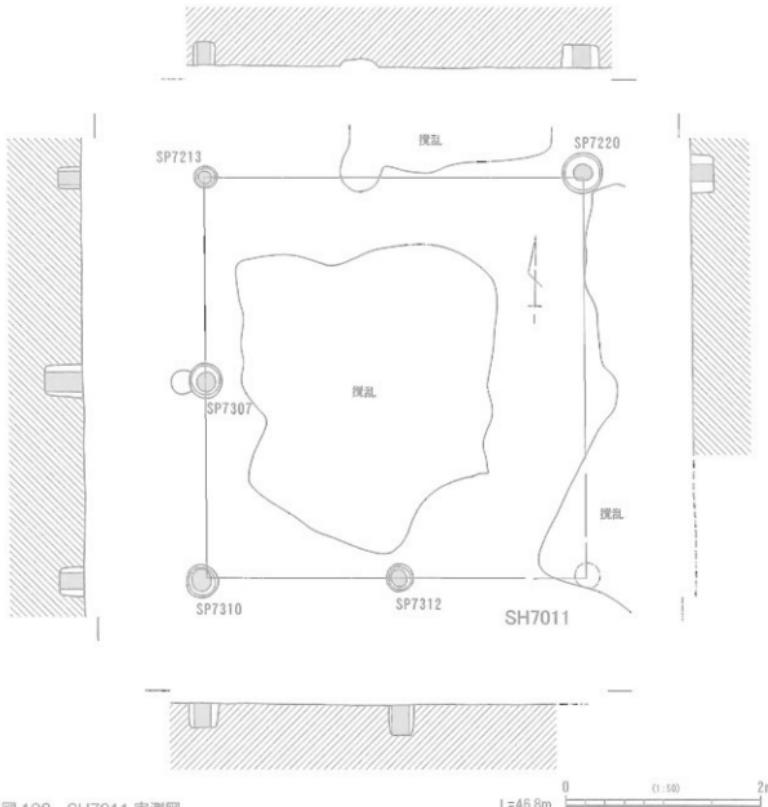


図 198 SH7011 実測図

部の強い横ナデにより体部中央が屈曲する。1486 と 1487 は伊勢鍋で、それぞれ SP7037 柱痕跡埋土と SP7060 埋土から出土した口縁部の破片である。1486 は二次焼成が顯著であり、1487 は外面に煤が付着することから、ともに使用痕が確認できる。1488 は SP7037 の埋土から出土した青磁碗である。内面に陰刻文がみられ、明緑灰色の釉が内外面に施されるが、小片であることから型式は不明である。この他山茶碗、土師質土器などの小片が出土しているが、上記遺物と同様に 12 世紀後葉～13 世紀代の様相を示すことから、遺構はこの時期に営まれたものと考えられる。

SH7014 (図 197・200)

7 区中央付近の G 25～26 区にあり、V 群建物群南側の西端に位置する。梁行 2 間、桁行 3 間の掘立柱建物で、建物規模は梁行 35 m、桁行 5.9 m である。南北方面の軸が N - 12° - W の南北軸である。柱間は北側の梁行が 1.9 m、1.6 m、南側では妻柱が確認されていない。桁行は東側が北から 21 m、19 m、

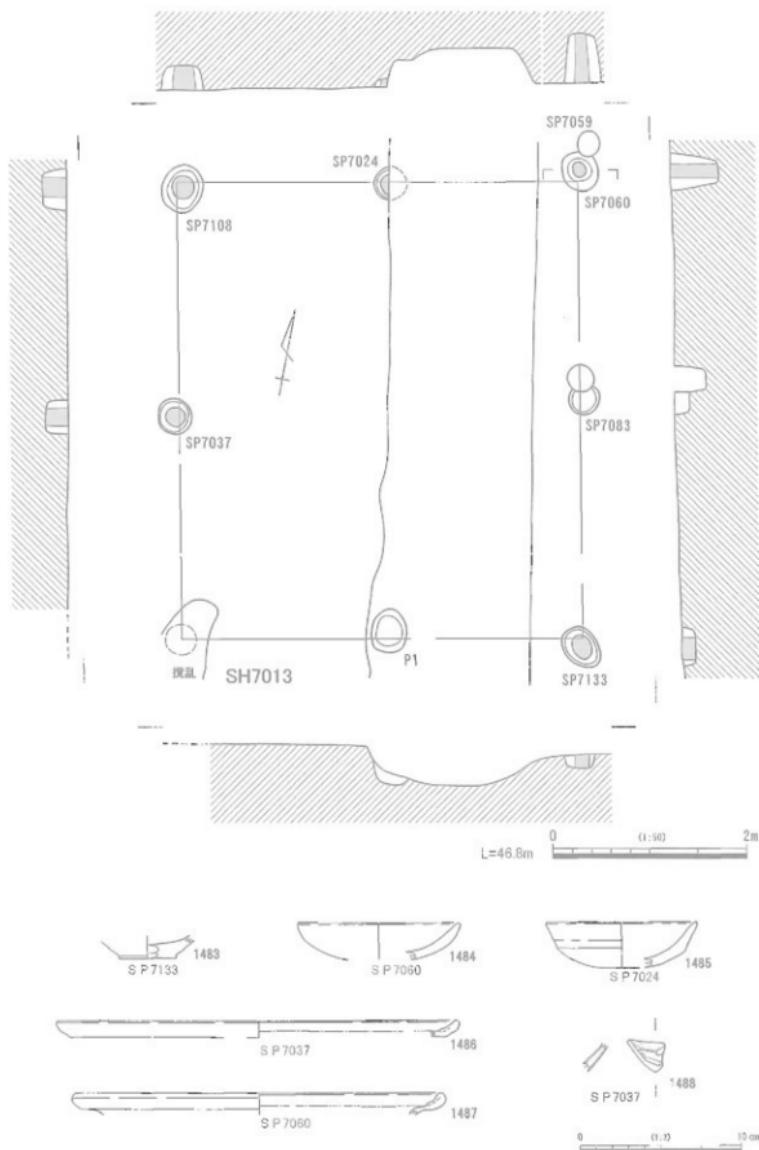


図199 SH7013 実測図・出土遺物

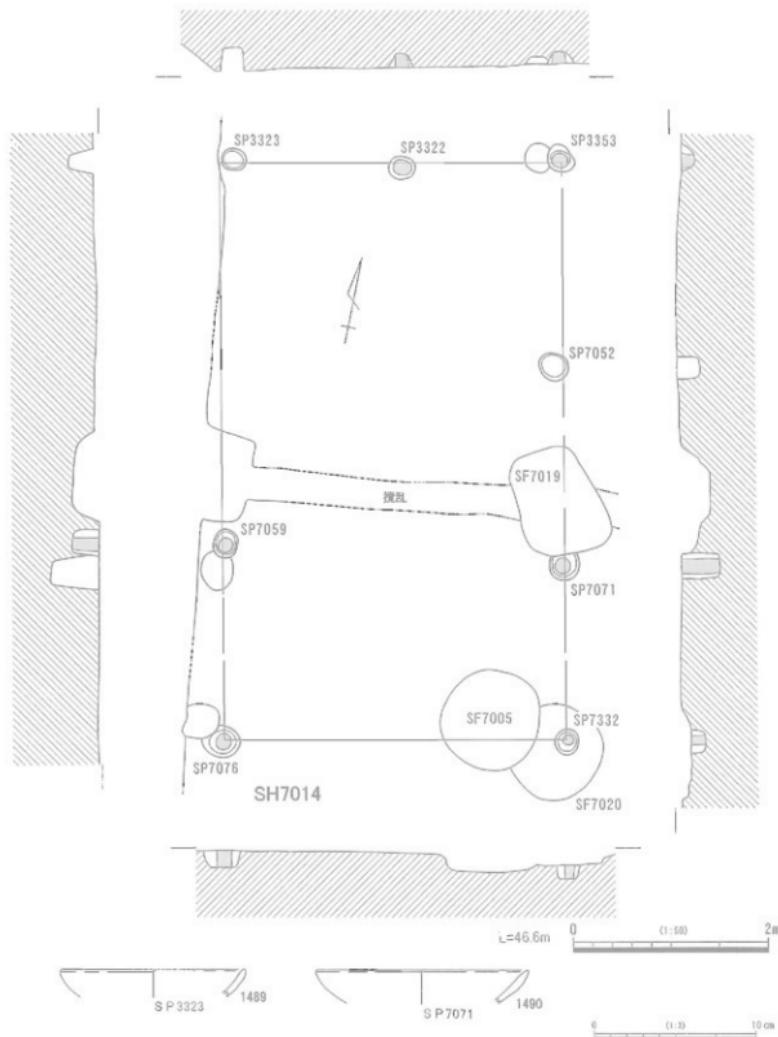


図200 SH7014 実測図

1.9 m、西側では擾乱のため一部不明だが、南端のみ 2.0 m と確認できる。柱痕跡は 6 つの柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.09 m ~ 0.16 m である。柱穴の平面形も円形であり、直径は 0.22 m ~ 0.36 m、深さは 0.14 m ~ 0.40 m とばらつきが大きい。なお南東部の柱穴である SP7071 は SF7019 に、SP7332 は SF7020 にそれぞれ切られている。

図化した遺物はいずれも土師質土器の皿で、1489 は SP3323 の埋土、1490 は SP7071 柱痕跡埋土からそれぞれ出土した。表面が磨滅しており、調整は不明である。この他、柱穴の掘方埋土から土師質土器の皿や鍋類の小片が出土しているが、図示した遺物同様、いずれも 12 ~ 13 世紀代の遺物とみられる。よって、建物の年代もその時期と推定される。

SH7016 (図 197・201)

7 区中央の H 26 区にあり、V 群建物群南西端に位置する。その南東隅に位置する。南北 1 間、東西 2 間分か確認されるが、南側が擾乱で削られているため正確な規模は不明である。建物規模は確認できる範囲で南北 1.8 m、東西 3.6 m である。南北方向の軸は N - 16° - W である。柱間は北辺が西から 1.7 m、1.9 m、西辺の残存部分で 1.6 m を測る。柱痕跡は 4 カ所の柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径 0.13 m ~ 0.22 m である。掘方の平面形も円形であり、直径は 0.23 m ~ 0.45 m、深さは 0.15 m ~ 0.50 m とばらつきがあるが、底面の標高は 46.1 m 前後である。

遺物は小破片のため図示できないが、SP7276 の柱痕跡埋土から土師質土器の破片が 1 点出土している。形状は明確でないが、内彎形内耳鍋の体部破片とみられる。根拠には乏しいが、この遺物を手がかりとすれば、遺構は 16 世紀代の建物と推定される。

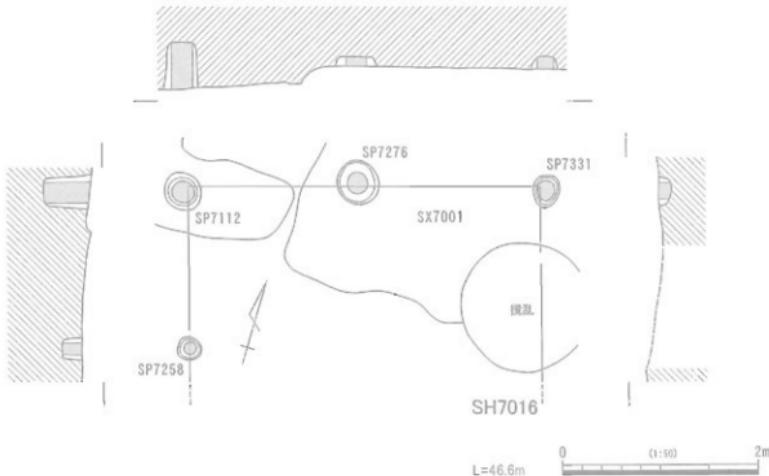


図 201 SH7016 実測図

表 18 捕立柱建物一覧表(中世・近世)

通番名	開口	横幅	方向	高さ	規則	脚柱	梁柱仕様	柱脚仕様	柱穴	柱頭
	(m)	(m)	(m)	(m)						
SHT001 1×2 備後 宮島 H-7~W 2.7×3.9 10.7 275 195/195 (aa) (aa) (aa)										
SHT002 1×2 備後 宮島 N-5~W 4.6×4.8 21.2 250 230/230 (aa)										
SHT003 1×3 備後 宮島 H-11~W 4.8×6.2 26.6 480 200/210/210 (aa)										
SHT004 2×2 備後 宮島 M-13~W 2.00×5.56 18.2 140/150 150/270/270 210/210/200 (aa)										
SHT005 2×2 備後 宮島 H-6~W 3.00×5.56 25.6 160/200 210/170 210/20/280 220/230/240 (aa)										
SHT006 1×2 備後 宮島 H-2~W 4.00×3.73 15 375 200/200 210/190 (aa)										
SHT007 1×2 備後 宮島 N-6~W 3.70×3.70 13.7 370 190/190 190/190 (aa)										
SHT008 2×2 備後 宮島 N-7~W 4.60×7.40 34 230/230 370/370 (aa)										
SHT009 2×3 備後 宮島 H-5~W 4.00×6.00 24 200/200 (aa)										
SHT010 2×3 備後 宮島 H-5~W 5.60×6.40 35.6 260/300 200/225/215 210/200/230 (aa)										
SHT011 1×2 備後 宮島 H-14~W 2.40×3.60 8.6 240 120/130/110 110/140/110 (aa)										
SHT012 1×2 備後 宮島 H-5~W 4.00×5.40 21.6 400 210/220/190/130 (aa)										
SHT013 1×2 備後 宮島 H-20~W 4.00×4.40 17.6 400 220/230 (aa)										
SHT014 2×2 備後 宮島 H-14~W 4.70×6.20 29.1 240/230 310/310 (aa)										
SHT015 1×2 備後 宮島 H-14~W 3.90×4.70 18.4 390 210/210 (aa)										
SHT016 1×2 備後 宮島 H-5~W 3.40×4.30 14.6 340 220/210 (aa)										
SHT017 2×— 備後 宮島 H-5~W 4.20×— — 210/210 (aa)										
SHT018 1×3 備後 宮島 H-3~W 3.20×5.50 17.6 330 180/190/160 (aa)										
SHT019 2×2 備後 宮島 H-5~W 3.60×5.60 20.2 150/210 200/190/160 (aa)										
SHT020 2×3 備後 宮島 H-3~W 4.00×8.00 38.4 250/230 220/160/240/160 190/180/200/230 (aa)										
SHT021 2×4 備後 宮島 H-5~W 3.90×7.40 25.6 180/180 180/180/200/160 (aa)										
SHT022 1×2 備後 宮島 H-14~W 4.80×7.3 33.6 250/210 230/170/170/160 (aa)										
SHT023 1×2 備後 宮島 H-10~W 3.90×6.20 24.2 190/200 200/190 150/160/150/160 170/160/150/140 (aa)										
SHT024 1×2 備後 宮島 H-10~W 3.00×3.80 13.7 360 170/190 (aa)										
SHT025 2×3 備後 宮島 H-12~W 3.90×6.20 24.2 150/185 230/215/160 (aa)										
SHT026 2×3 備後 宮島 H-12~W 3.90×6.20 24.2 150/185 220/210/160 (aa)										
SHT027 2×3 備後 宮島 H-2~W 4.00×7.30 33.1 220/230 240/240/240 (aa)										
SHT028 2×3 備後 宮島 H-2~W 5.60×9.40 52.6 280/280 190/190/190/190/199 (aa)										
SHT029 1×2 備後 宮島 H-1~E 4.00×4.80 21.2 460 230/230 (aa)										
SHT030 2×2 備後 宮島 H-1~W 4.10×4.60 18.9 220/190 230/230 (aa)										
SHT031 2×— 備後 宮島 H-11~W 3.90 × — 200/160 210/200/160 (aa)										
SHT032 2×3 備後 宮島 H-12~W 3.50×5.30 23.6 190/160 210/190/180 (aa)										
SHT033 2×2 備後 宮島 H-16~W 3.90 × — 170/190 180/ (aa)										

表 19 捕立柱建物出土遺物観察表

通番名	柱穴	横幅	脚柱	底地	分類	形式	口徑	底径	柱頭	柱基	柱頭
1445 SH1001 SP1039 土塗瓦片 直	直口φ (0.9)				口徑直	1/12					腹白
1446 SH1001 SP1096 土塗瓦片 直	直口φ (1.0)				口徑直	1/5					腹白
1447 SH1001 SP1029 土塗瓦片 直	直口φ (1.5)				口徑直	1/10					腹白
1448 SH1002 P4 土塗瓦片 直	直口φ (1.1)				口徑直	1/10					腹白
1449 SH1003 P3 土塗瓦片 直	口φ (7.5)	3.9	2.5		2/3						柱頭鋸
1450 SH1001 P4 土塗瓦片 内瓦頭	くの字形				口徑直	1/30					腹白
1451 SH1001 P3 土塗瓦片 錐形	直口φ (20.0)				口徑直	1/48					腹・底黄
1452 SH1001 P3 貝殻瓦片 自然瓦	V型	14.9			口徑直	1/16					明透黃・反白
1453 SH1001 SP1091 SP0548 木造瓦片 直	直口φ (0.5)				口徑直	1/9					腹黄
1454 SH1001 SP1091 SP0548 木造瓦片 片口形 雪渕	5型式 (0.6)				口徑直	1/16					腹白
1455 SH2001 SP2049 上瓦片 直	直口φ (25.2)				口徑直	1/20					に少い縫
1456 SH2001 SP2011 山瓦片 小瓦	直口φ (9.0)				口徑直	1/10					に少い背縫
1457 SH2000 SP2026 双瓦片 直	直口φ (10.0)	(5.0)	2.1		口徑直	1/20					腹白
1458 SH2000 SP2026 双瓦片 直	直口φ (14.0)	(7.0)	(3.15)		口徑直	1/3					腹黄・底白
1459 SH2000 SP2026 上瓦片 直	直口φ (14.0)				口徑直	1/10					腹背縫
1460 SH2000 SP2029 砂瓦片 直	直口φ (9.0)				口徑直	1/6					腹白
1461 SH2000 SP2030 双瓦片 直	直口φ (9.0)				口徑直	1/6					縫
1462 SH2000 SP2039 上瓦片 直	直口φ (9.2)				口徑直	1/6					腹白
1463 SH2001 SP2330 上瓦片 直	くの字形				口徑直	1/20					腹黄
1464 SH2001 SP2350 上瓦片 直	直口φ (12.4)				口徑直	1/12					腹白
1465 SH2001 SP2529 上瓦片 直	直口φ (10.0)	5.4	2.05		口徑直	1/3					に少い縫
1466 SH2007 SP2424 土塗瓦片 直	直口φ (10.0)	6.0			口徑直	1/9					腹白
1467 SH2007 SP2425 土塗瓦片 直	直口φ (10.0)				口徑直	1/12					腹背縫
1468 SH2001 SP4047 亂瓦片 直	直口φ (15.0)				口徑直	1/10					腹白
1469 SH2001 SP4048 土塗瓦片 内瓦頭	くの字形				口徑直	1/20					内面に付着
1470 SH2005 SP7005 土塗瓦片 直	直口φ (11.0)				口徑直	1/5					腹白
1471 SH7008 SP7037 滑落瓦 瓦身	直口φ (14.0)				口徑直	1/20					腹白
1472 SH7008 SP7034 滑落瓦 瓦身	直口φ (15.0)				口徑直	1/24					腹白
1473 SH7008 SP7037 滑落瓦 小瓦	直口φ (9.0)				口徑直	1/18					腹白
1474 SH7008 SP7032 土塗瓦片 瓦	直口φ (10.0)				口徑直	1/4					腹白
1475 SH7008 SP7042 土塗瓦片 瓦	直口φ (10.3)				口徑直	1/8					腹白
1476 SH7008 SP7045 土塗瓦片 瓦	直口φ (7.0)				口徑直	1/3					腹背縫
1477 SH7005 SP7060 土塗瓦片 瓦	直口φ (10.7)				口徑直	1/3					に少い縫
1478 SH7005 SP7062 土塗瓦片 瓦	直口φ (11.0)				口徑直	1/4					腹背縫
1479 SH7005 SP7050 土塗瓦片 瓦	直口φ (5.0)				直口						腹白
1480 SH2002 SP1562 土塗瓦片 瓦	直口φ (12.0)	(2.0)	(2.1)		口徑直	1/10					腹白
1481 SH2002 SP1563 土塗瓦片 瓦	直口φ (10.0)				口徑直	1/12					腹背縫
1482 SH7013 SP7132 土塗瓦片 瓦	直口φ (9.0)				直口	1/5					腹白
1483 SH7013 SP7050 土塗瓦片 瓦	直口φ (9.2)				直口	1/20					腹白
1484 SH7013 SP7024 土塗瓦片 瓦	直口φ (9.0)				直口	1/20					腹白
1485 SH7013 SP7027 土塗瓦片 瓦	直口φ (24.0)				直口	1/20					腹白
1486 SH7013 SP7060 土塗瓦片 瓦	直口φ (22.0)				直口	1/18					外間に付着
1488 SH7013 SP7037 貝殻瓦片 平明	直口φ Q (11.0)				直口	1/10					貝殻瓦・平白
1489 SH7014 SP0323 土塗瓦片 瓦	直口φ Q (11.0)				直口	1/10					腹白
1490 SH7014 SP7071 土塗瓦片 瓦	直口φ Q (15.0)				直口	1/20					腹白

6. 小穴

明確な建物の柱穴として認識することはできなかったが、調査区内では多くの小穴が検出されている。以下、出土遺物のあった小穴を中心に調査区ごとに記述する。

1区の小穴（図159・202、図版76）

SP1037はD 6区に位置し、SH1003の北に隣接する。埋土内から渥美湖西産山茶碗（1491）が出土した。高台下部には砂目痕が残る。底部外面には糸切り痕と墨書きが見られるが、文字の判読は困難である。III-2期の製品であろう。

SP1046はD 6区に位置し、SH1004の北東に隣接する。埋土内から伊勢鍋の口縁部破片（1493）が出土した。口縁は水平方向に開き、壠部は約1cmを折り返す。二次焼成が顯著である。13世紀代のものであろう。

SP1236はI 6区に位置し、SH1010の南に隣接する。埋土から染付の底部破片（1492）が出土した。体部外面と高台内が施釉され、内面は無釉である。肥前産磁器の御神酒德利であろう。

SP1340は1区東端部となるG 6区に位置し、SD1008の北に隣接する。埋土内検出面付近から擂鉢の口縁部破片（1496）が出土した。口縁は折り返され、内面の突帯が巡る。古瀬戸後IV期並行の古志戸呂製品で、15世紀中～後葉の製品である。

SP1345は1区東端部となるG 6区に位置し、SD1001の南に隣接する。SD1011と重複するが、切合の関係は不明である。埋土内から内耳鍋の口縁部（1495）が出土した。口縁端部を外側に折り返す、くの字形内耳鍋である。15世紀中葉～16世紀代に位置づけられよう。

SP1378はC 6区に位置し、SH1003の柱穴P 2に切られている。埋土内下層から伊勢鍋の口縁部破片（1494）が出土した。形態は1493とほぼ同様で、同じく13世紀代のものと見られる。

2区の小穴（図165・168・203、図版69）

SP2036はD 13区に位置し、SH2007の南に隣接する。埋土内から擂鉢の体部破片（1506）が出土した。内面には櫛目が最大10本の直線的な櫛目が刻まれ、やや軟質に焼成されている。古瀬戸後IV期並行の古志戸呂製品である。

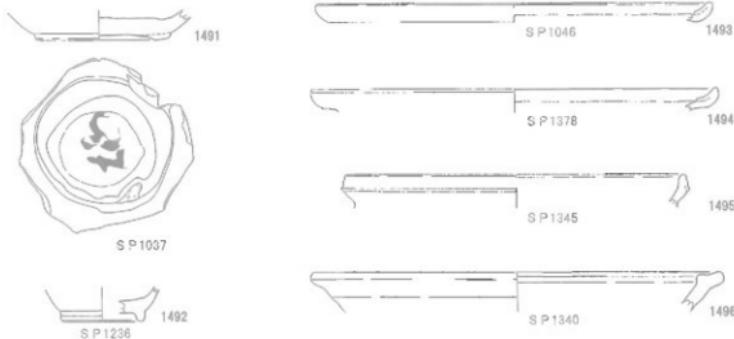


図202 小穴出土遺物（1区）

SP2131はD 8区に位置し、SH2002の南に隣接する。埋土内から山茶碗底部の破片（1502）が出土した。底部内面はかなり摩滅し、煤が付着する。渥美湖西産II期の製品であろう。

SP2190はE 8区に位置し、SH2002の南西に隣接する。検出面で出土した1501は渥美湖西産の山茶碗で、III-1期の製品とみられる。

SP2436はC 10区に位置する。埋土内から山茶碗の底部破片（1503）が出土した。内面の摩滅が顕著である。形状は1502に近く、同じく渥美湖西産II期の製品であろう。

SP2129はD 8区に位置し、SH2002の東に隣接する。埋土内から青磁碗の体部破片（1500）が出土した。体部外面に鶴蓮卉文が施され、龍泉窯系B 1類に分類される。

SP2275はB 12区に位置し、SH2005の南東に隣接する。埋土内の検出面付近から土師質土器皿（1499）が出土した。内面はナデにより滑らかに仕上げられ、板ナデの痕跡も残っている。外面は未調整で指頭痕が残る非クロコ成形品である。16世紀代のものと考えられる。

SP2292はC 12区、SH2006と重なる位置にある。埋土内からは内耳鍋（1504）が出土した。体部下部から口縁部にかけて残存しており、外面には全体的に煤が厚く付着しているが、内面には認められない。体部外面には指頭痕が残る。内輪形に分類される内耳鍋で、16世紀頃に位置づけられる。

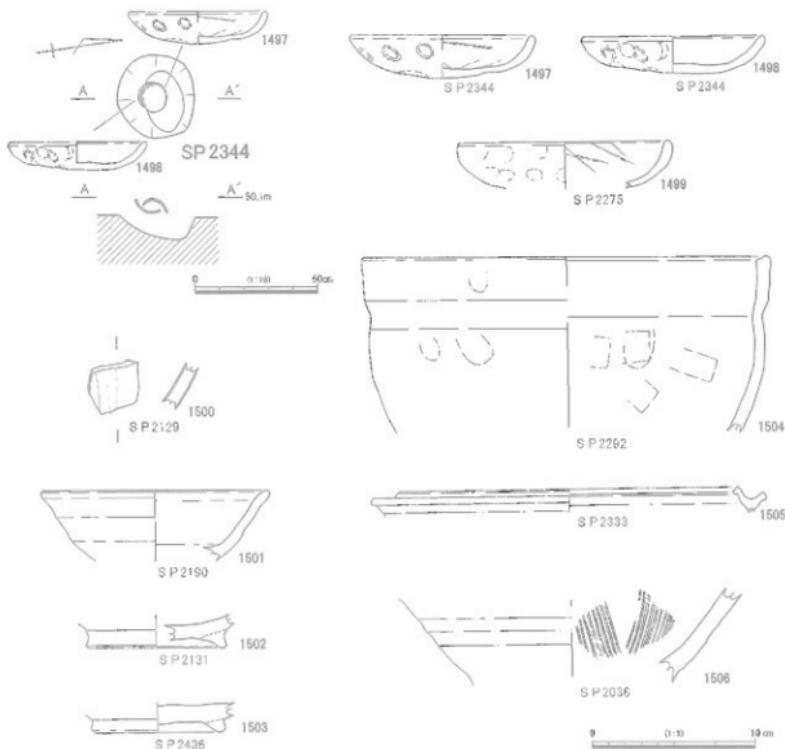


図203 小穴実測図・出土遺物（2区）

SP2333はC 14区に位置する。SH2008の南に隣接し、SF2018を切っている。埋土内検出面付近から羽釜の口縁部破片（1505）が出土した。口縁部上部を強くナデされることで端部は内側に突出し、外側には煤が付着する。15世紀前葉～中葉の製品と考えられる。

SP2344（図203）はB 14区に位置し、SH2008の北に隣接する。1497と1498土師質土器の皿が2点出土している。出土状況は1497が上で逆位、1498が下で正位となる合わせ口で重ねられており、底面からは12～13cm程度浮いたほぼ検出面での出土であった。2点ともほぼ完形で、何らかの埋納行為によることは明らかであり、地鎮に伴う可能性が高いように思われる。皿はいずれも非ロクロ成形品で、内面はナデ調整、外側は未調整で指頭痕が残る、やや扁平な形状を示すものである。体部外側を巡るように、精円形の施文具を押しつけた文様が8～10ヵ所ほど認められるが、摩滅によりやや不鮮明である。遺物の年代は16世紀後葉～17世紀前葉の所産とみられる。

3区の小穴（図193・204）

SP3034は3区北西隅となるC 20区に位置し、SF3008の東に隣接する。山茶碗底部から口縁部にかけての破片（1507）が出土した。底部内面と口縁端部には煤が付着しており、高台はほとんどが欠損している。渥美湖西窯Ⅲ－2期の製品であろう。

SP3035は3区北西隅のC 20区に位置し、SF3008の東に近接する。埋土内より土師質土器の内耳鍋（1520）が出土した。内彌形内耳鍋の内耳部分で、被熱痕が観察される。16世紀代の製品であろう。

SP3115はF 23区に位置し、SH3002の西に隣接する。埋土内から土師質土器の皿（1511・1512）と、瀬戸美濃庵施釉陶器皿の底部破片（1510）が出土した。1511と1512は非ロクロ成形品で内面はナデ調整が施され、外側は未調整で指頭痕が残る。いずれも底面付近から出土している。1510は灰釉の内彌皿である。底部内面は露胎となっている。大窯4段階前半の製品で、16世紀末葉頃に比定される。前述の土師質土器皿（1511・1512）も同時期のものであろう。

SP3218はE 23区に位置し、SH3002の北に隣接する。柱痕跡埋土から山茶碗の口縁部（1508）が出土した。渥美湖西窯Ⅲ－1期頃の製品であろう。

SP3123はF 23区に位置する。埋土内から土師質土器内耳鍋（1522）が出土した。くの字形内耳鍋で、口縁端部を外側に折り返して仕上げられる。15世紀後半～16世紀前半頃の製品であろう。

SP3125は3区南端のG 23区に位置する。柱痕跡埋土より土師質土器の皿（1513）が出土した。底部から口縁部にかけての破片で、非ロクロ成形品である。16世紀後葉～17世紀代の製品であろう。

SP3137と3197はF 23区に位置し、いずれもSH3002の南に隣接する。埋土から土師質土器の皿（1514）の破片がそれぞれ出土し、接合した。器壁は薄く、浅いつくりの非ロクロ成形品である。内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。16世紀後葉～17世紀代のものであろう。

SP3157はF 24区に位置し、SH3002の東に隣接する。埋土下層から土師質土器の皿（1515）が出土した。非ロクロ成形品で、全体的に摩滅している。内面には煤が付着しているため、灯明皿として使用されたとみられる。16世紀後葉～17世紀代の製品であろう。

SP3174はF 24区に位置し、SH3004と重複している。埋土下層から土師質土器の皿（1516）が出土した。胎土は密で、灰白色を呈する。16世紀後葉～17世紀代の非ロクロ成形品であろう。

SP3182はF 24区に位置し、SH3002の北に隣接する。柱痕跡埋土から土師質土器の皿（1517）が出土した。胎土は灰白色である。16世紀後葉～17世紀代の非ロクロ成形品であろう。

SP3199はG 24区に位置し、SH3004の南に隣接する。掘方埋土内から土師質土器の皿（1519）が出土した。器壁はやや厚く、浅いつくりである。16世紀後葉～17世紀代の非ロクロ成形品であろう。

SP3190はG 24区に位置する。掘方埋土から土師質土器内耳鍋（1521）が出土した。内彌形に分類さ

れる製品で、口縁部断面は方形となり外面には煤が付着する。16世紀代に比定される。

SP3273はG 24区に位置し、SF3020の北に隣接する。柱痕跡埋土から土師質土器皿の底部破片(1518)が出土した。ロクロ成形品で、底部外面には糸切り痕及びスノコ状圧痕が残る。13世紀代の製品とみられる。

SP3318は3区東部のF 25区に位置し、SF3019に隣接する。埋土内から、志戸呂窯産の捕鉢(1523)が出土した。底部から口縁部にかけての残存しており、口縁内面はナデによる窪みが巡っている。全面に薄く鉄釉が施され、内面の櫛目の単位は10本となる。古瀬戸後IV期並行に位置づけられる古志戸呂製品で、15世紀中葉～後葉に比定される。

SP3324はG 26区に位置し、SH7014の北に隣接する。埋土から山茶碗の体部から口縁部にかけての破片(1509)が出土した。渥美湖西産のⅢ-1期の製品であろう。

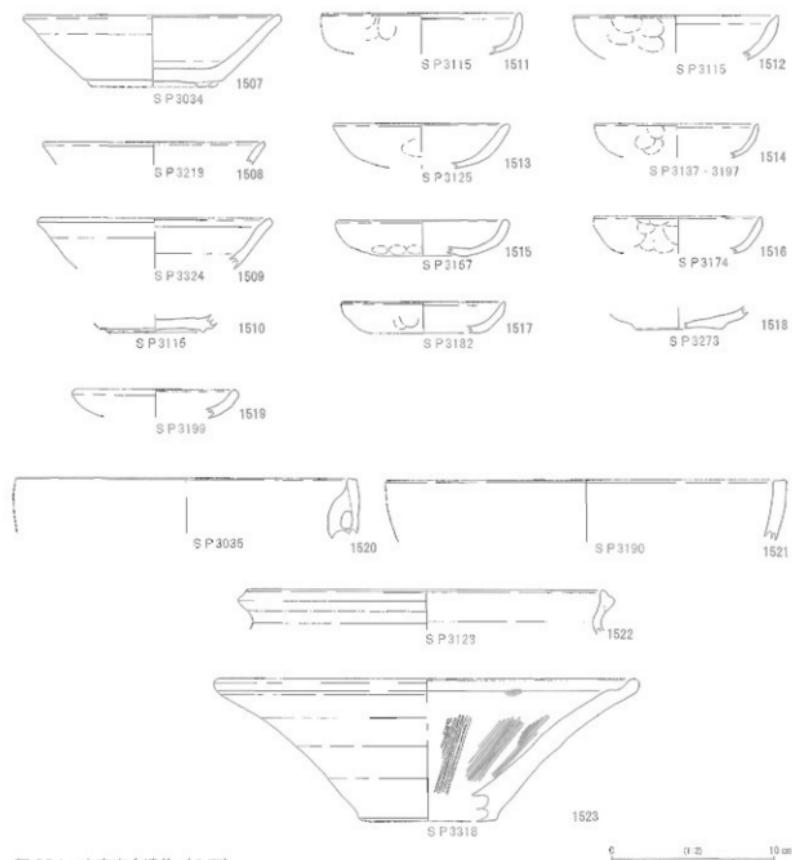


図204 小穴出土遺物（3区）

4区の小穴（図205）

SP4013は4区北東隅のB 17区に位置する。埋土内から土師質土器内耳鍋が複数出土した。いずれも多くの字形内耳鍋に分類されるものである。1524は口縁端部を外側に折り返したうえ、上端部外側をナデによって凹ませる。体部外面下部には煤が付着し、体部外面に指頭痕が残るが、上部はナデとハケ調整がみられ、下部にはヘラケズリの痕が明瞭に残る。1525と1526は口縁端部を折り返さず、上端部外側をナデで凹ませる。いずれも煤は付着していない。1524・1526は検出面付近から、1525は比較的下層から出土している。遺物の年代は15世紀後半16世紀前半にかけてのものであろう。

SP4025はC 16区に位置する。埋土底面付近から土師質土器の皿（1527）が出土した。非ロクロ成形品で、口縁部の横ナデによって体部の中程で小さく段を持つ。13世紀代の製品であろう。

SP4175は4区南部のE 16区に位置し、古代の遺構SB4001・SF4015の東側を切る位置にある。埋土内の比較的上層から土師質土器の内耳鍋（1528）が出土した。内彎形内耳鍋で、外面には厚く煤が付着し、内面も黒く変色している。16世紀代の製品であろう。

5区の小穴（図205）

SP5018はH 2区に位置し、SH5004の西に隣接する。埋土から土師質土器の皿（1529）が出土した。厚手のロクロ成形品で、復元口径15.2cmを測る比較的大型なものである。15世紀後半～16世紀前半頃に比定されよう。

6区の小穴（図176・206）

SP6240はH 13区に位置し、SH6006の南に近接する。掘方埋土内から土師質土器の皿（1530）が出土した。ロクロ成形によるもので、底部には糸切痕が明瞭に残る。口径は7.9cmと小型品である。15世紀後半～16世紀前半のものであろう。

SP6245はH 12区に位置し、SH6007の北側に隣接する。SP6246に切られている。柱痕跡埋土内から

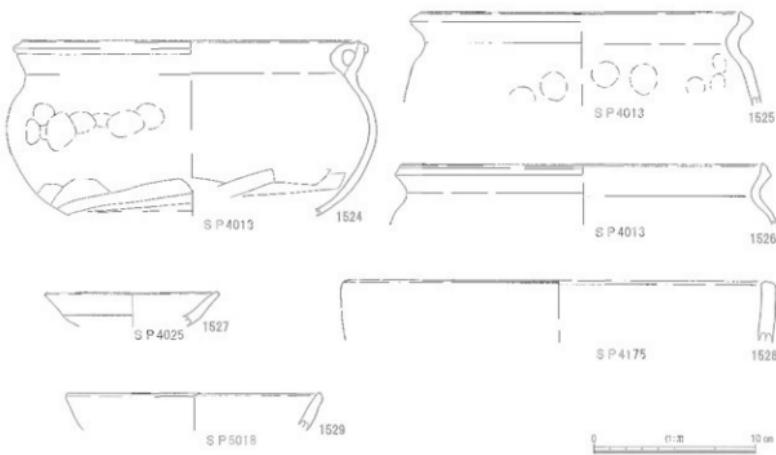


図205 小穴出土遺物（4・5区）

土師質土器の皿（1531）が出土した。非ロクロ成形によるもので、内面には板ナデ調整が施され、指頭痕が残る外は未調整である。16世紀後葉～17世紀代の製品であろう。

SP6263はH 12区に位置し、SH6007の柱穴SP6262に切られている。埋土内から土師質土器の皿（1534）が出土した。非ロクロ成形によるもので、口縁部を外反させながら横ナデを施す。15世紀後半～16世紀前半のものであろう。

SP6271はH 13区に位置し、SH6008の南側に隣接する。柱痕跡埋土下層から1532・1533が出土した。いずれも非ロクロ成形の土師質土器皿で、内面はナデ調整が施され、外面未調整である。1533は薄手でやや浅いつくりとなる。16世紀後葉～17世紀代のものであろう。

SP6387はH 13区に位置し、SH6010の西に隣接する。SP6386に切られている。掘方埋土から土師質土器の内耳鍋（1535）が出土した。口縁部上部外側を強いナデによって凹ませる特徴があり、内外面にはわずかに煤が付着する。内彎形か半球形に分類される小型品である。16世紀代の製品であろう。

7区の小穴（図185・197・207）

SP7038はH 25区に位置し、SH7013と重なる場所にある。掘方埋土から青磁の体部破片（1536）が出土した。蘿泉窯系B 1類の碗と見られ、外面に鎬連弁文が見られる。13世紀中葉～14世紀前葉に比定される。

SP7048はG 26区に位置し、SH7014と重なる。掘方埋土より片口鉢の口縁部（1537）が出土した。口縁端部は肥厚して丸く仕上げられ、薄く自然釉がかかること。尾張産の製品で、常滑5型式に位置づけられるものであろう。

SP7054はG 26区に位置し、SH7014の東に隣接する。掘方埋土から山茶碗口縁部の破片（1538）が出土した。渥美湖西産Ⅲ期の製品であろう。

SP7062はG 25区に位置し、SH7014と重複する。掘方埋土より山茶碗の口縁部破片（1539）が出土した。渥美湖西産Ⅲ期の製品であろう。

SP7063はG 25区に位置し、SH7014の中央付近にある。柱痕跡埋土から土師質土器の皿（1540）が出土した。薄く浅いつくりの非ロクロ成形品である。16世紀後葉～17世紀代のものであろう。

SP7069はG 26区に位置し、SH7014と重なる。埋土から小碗の底部破片（1541）と土師質土器皿の体部破片（1542）が出土した。1541は渥美湖西産Ⅰ～Ⅱ期の製品で、12世紀中葉のものであろう。1542は底部がやや厚い碗状を呈し、口縁部を横ナデすることで、体部中程が段を持つ。13世紀代のものであろう。

SP7088はH 25区に位置し、SH7014南東隅の柱穴SP7332の南にある。埋土から片口鉢（1544）が出土した。尾張産（知多）のもので、体部内面は使用による摩滅が顕著である。口縁部は肥厚して丸く仕上げられ、上面には沈線が巡る。常滑6a型式に位置づけられよう。

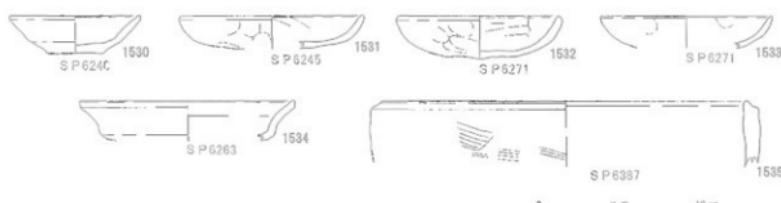


図206 小穴出土遺物（6区）

SP7089はH 26区に位置し、SH7014南東に近接する。掘方埴土から土師質土器の伊勢鍋（1545）が出土した。口縁外面には煤が厚く付着する。13世紀代の製品である。

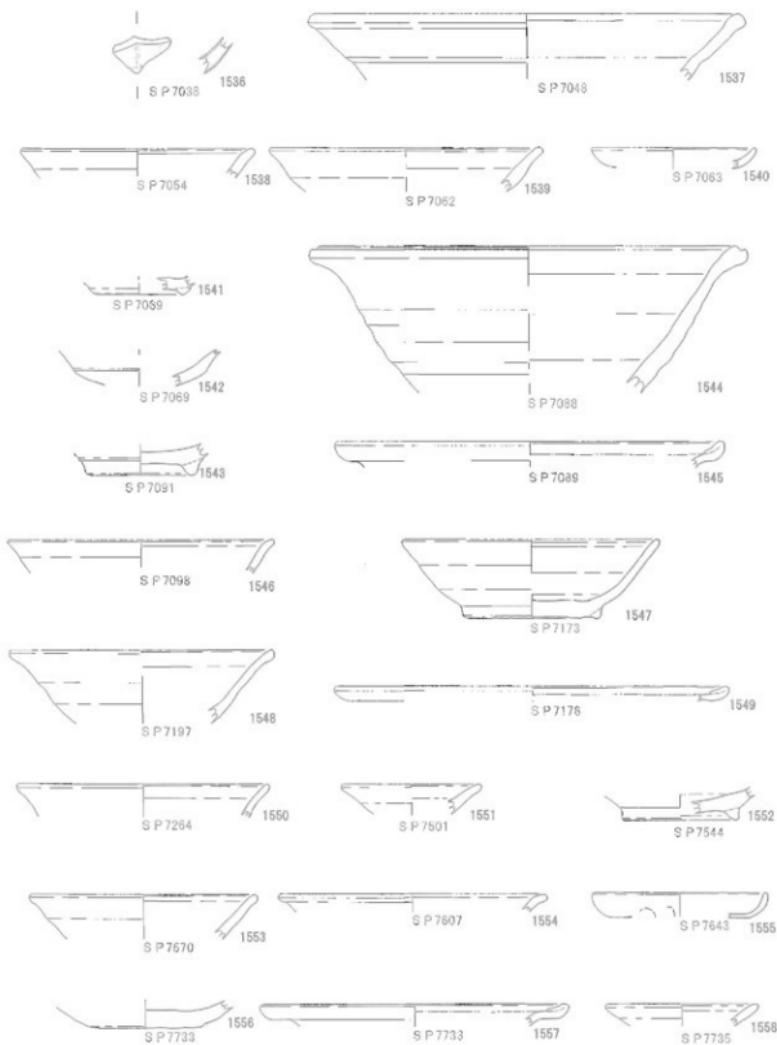


図207 小穴出土遺物（7区）



SP7091はH 24区に位置し、SH7016の北に近接する。SP7090に切られている。掘方埋土から山茶碗底部の破片（1543）が出土した。高台下部には粗粒痕が残る。渥美湖西産Ⅱ期の製品と見られる。

SP7098はH 26区に位置し、SH7016の東に近接する。掘方埋土から山茶碗の口縁部破片（1546）が出土した。やや焼成が悪いようで、軟質である。渥美湖西産の製品である。

SP7173はG 25区に位置し、SH7010の東に隣接する。埋土から山茶碗（1547）が出土した。底部外周を巡るような低い高台の下部には粗粒痕が残る。渥美湖西産Ⅲ－2期に位置づけられる13世紀中葉の製品である。

SP7176はH 25区に位置し、SH7015の北に隣接する。埋土内から土師質土器の伊勢鍋（1549）が出土した。口縁部の破片で、外面に煤の付着が認められるが、全体的に摩滅が顕著である。13世紀代の製品であろう。

SP7197はH 24区に位置し、SP7196を切っている。掘方埋土から山茶碗（1548）が出土した。口縁部は緩やかに外反する。渥美湖西産Ⅱ期の製品とみられる。

SP7264は7区南端のI 25区に位置する。掘方埋土から山茶碗の口縁部破片1550が出土した。渥美湖西産の製品である。

SP7501はG 24区に位置する。柱痕跡埋土から渥美湖西産の小皿の口縁部破片（1551）が出土した。

SP7544はI 21区に位置し、SH7009南東隅の柱穴SP7541の南に隣接する。柱痕跡埋土から山茶碗の底部破片（1552）が出土した。高台下部の欠損が多く、粗粒痕等は確認できない。渥美湖西産Ⅱ期の製品と見られ、12世紀後葉に位置づけられよう。

SP7570はH 21区に位置し、SH7009の柱穴SP7569に切られる。掘方埋土からは山茶碗の口縁部破片（1553）が出土した。口縁端部には薄くオリーブ黄色の自然釉がかかる。渥美湖西産Ⅲ期頃の製品であろう。

SP7607はI 20区に位置し、SH7006東辺の柱穴SP7608の東に位置する。掘方埋土から山茶碗口縁部の破片（1554）が出土した。口縁端部には漆と見られる付着物がある。渥美湖西産の製品である。

SP7643はG 20区に位置し、SH7002西に隣接する。埋土内から土師質土器の皿（1555）が出土した。非クロコ成形品で、体部から口縁を屈曲させ、ほぼ垂直に立ち上がらせる。16世紀後葉～17世紀代にかけてのものであろう。

SP7733はH 24区に位置する。掘方埋土から土師質土器の口縁部破片（1557）が、柱痕跡埋土から山茶碗底部破片（1556）がそれぞれ出土した。1557は伊勢鍋で、外面には煤が厚く付着する。13世紀代の製品であろう。1556は湖西渥美産Ⅲ－2期の製品と見られるが、高台は欠損している。焼成がやや不良で摩滅が激しい。

SP7735はH 24区に位置し、SH7010南西に近接する。柱痕跡埋土から小皿の口縁部破片（1558）が出土した。渥美湖西産の製品である。

8区の小穴（図208）

SP8050は8区東端F 33区に位置する。掘方埋土から土師質土器内耳鍋（1559）が出土した。口縁端部は外側に折り返し、上部外側をナデによって窪ませている。内外面には煤が全く付着していない。くの字形に分類される15世紀後半～16世紀前半の製品であろう。

SP8074は8区東端のG 34区に位置する。埋土内下層から土師質土器の皿（1560）が出土した。非クロコ成形品で、摩滅しているが、口縁部にわずかに横ナデの痕跡が認められる。13世紀代の製品であろう。

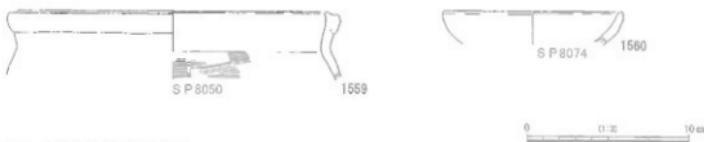


図208 小穴出土遺物（8区）

表20 小穴出土遺物観察表

No.	遺物名	種類	形態	寸法・様式	口径 (mm)	厚さ (mm)	底面 (mm)	周長 (mm)	穿孔率	特徴	色調	備考
1491	SP1037	山廻頭	板	圓筒形	φ - 2	7.0	底面のみ 斜面有り	15.59	底面のみ 斜面有り	底面	墨色	
1492	SP1230	迷路頭器	板	圓筒形	(4.4)	伴部一端部 1/2	斜面	15.59	伴部	底面		
1493	SP1046	土廻頭土器	伊勢鍋		(24.0)		口部 1/28	15.59	にかい骨			
1494	SP1376	土廻頭土器	伊勢鍋		(24.0)		口部 1/24	15.59	にかい骨質			
1495	SP1345	土廻頭土器	内耳鍋	くの字型	(25.7)		口部 1/20	15.59	底面	底面		
1496	SP1540	細身頭器	深井	吉志芦井	後方左行	(25.0)	口部 1/20	15.59	底面	底面		
1497	SP2344	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 11.05	7.5	2.5	15.59	はばね跡	底面		
1498	SP2344	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 11.0	6.5	2.25	15.59	はばね跡	底面		
1499	SP2275	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 12.9			15.59	口部 1/6	底面	底面	
1500	SP2276	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 8.1			15.59	伴部	オーリーブ緑	灰緑色	横溝有り
1501	SP9190	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(13.0)	口部 1/4	15.59	底面	底面		
1502	SP9131	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(3.1)	底面 7/8	15.59	底面	底面		
1503	SP9436	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(7.5)	底面 7/4	15.59	底面	底面		
1504	SP2292	土廻頭土器	中耳鍋	内耳鍋	内耳形	(24.0)	口部 1/6	15.59	底面	底面		
1505	SP2302	土廻頭土器	中耳鍋	中耳鍋	中耳形	(20.0)	口部 1/6	15.59	底面	底面		
1506	SP2299	細身頭器	深井	吉志芦井	後方左行	(21.2)	口部 1/6	15.59	底面	底面		
1507	SP3204	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 2	(15.0)	3.4	15.59	底面 1/4	底面	底面	
1508	SP2518	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(13.0)	3.4	15.59	底面 1/2	底面	底面	
1509	SP5324	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(14.0)	3.4	15.59	底面 1/2	底面	底面	
1510	SP3115	細身頭器	内耳鍋	伴部無	大耳 3 耳	(5.0)	1/4	15.59	底面 1/3	底面	底面	
1511	SP9115	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 12.2			15.59	底面 1/8	底面	底面	
1512	SP9115	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 12.0			15.59	底面 1/8	底面	底面	
1513	SP9125	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0			15.59	底面 1/8	底面	底面	
1514	SP9137	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0			15.59	底面 1/6	SP9197 と合	SP9197 と合	
1515	SP9157	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0			15.59	底面 1/6	底面	底面	
1516	SP9174	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0			15.59	底面 1/6	底面	底面	
1517	SP9192	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(8.0)	(1.05)	15.59	底面 1/6	底面	底面	
1518	SP9270	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(5.4)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1519	SP9199	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 9.0			15.59	底面 1/6	底面	底面	
1520	SP9305	土廻頭土器	内耳鍋	内耳鍋	くの字型	(20.0)	口部 1/4	15.59	底面 1/6	底面	底面	
1521	SP9190	土廻頭土器	内耳鍋	内耳鍋	くの字型	(24.0)	口部 1/2	15.59	底面 1/6	底面	底面	
1522	SP9193	土廻頭土器	内耳鍋	内耳鍋	くの字型	(21.7)	口部 1/2	15.59	底面 1/6	底面	底面	
1523	SP9318	薄輪頭器	深井	吉志芦井	後方左行	(24.0)	口部 1/4	(0.58)	(0.75)	底面	底面	外周に擦付層
1524	SP4013	土廻頭土器	内耳鍋	くの字型	(20.0)	3.4	15.59	底面 1/2	底 / 滑質層	底面	底面	
1525	SP4013	土廻頭土器	内耳鍋	くの字型	(19.0)	3.4	15.59	底面 1/2	底 / 滑質層	底面	底面	
1526	SP4013	土廻頭土器	内耳鍋	くの字型	(22.0)	3.4	15.59	底面 1/2	底 / 滑質層	底面	底面	
1527	SP4013	土廻頭土器	内耳鍋	くの字型	(19.0)	3.4	15.59	底面 1/2	底 / 滑質層	底面	底面	
1528	SP9075	土廻頭	鐵	圓筒形	φ - 2	(7.0)	(3.0)	2.3	1/4	底面	底面	
1529	SP9245	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 11.0	(9.0)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1530	SP9271	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(8.0)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1531	SP9271	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(4.0)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1532	SP9271	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(4.0)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1533	SP9271	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(1.0)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1534	SP9203	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(1.0)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1535	SP9367	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(1.0)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1536	SP9203	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(1.0)		15.59	底面 1/6	底面	底面	
1537	SP9248	中耳頭	片口針	穿孔器	穿孔器	(26.0)	口部 1/9			伴部	底面	底面 / にかい層
1538	SP7054	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(14.0)	口部 1/20			底面	底面	
1539	SP7062	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(15.4)	口部 1/14			底面	底面	
1540	SP7063	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(10.0)	口部 1/5			底面	底面	
1541	SP7069	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(10.0)	5.2			底面	底面	
1542	SP7069	山廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(15.2)				伴部 1/5	底面	
1543	SP7091	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(15.0)	5.2			底面 1/3	底面	
1544	SP7093	中耳頭	片口針	穿孔器	穿孔器	(25.4)	口部 1/10			底面	底面	外周に擦付層
1545	SP7095	土廻頭土器	伊勢鍋		5型式	(23.0)	口部 1/28			底面	底面	
1546	SP7098	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(15.2)	口部 1/28			底面	底面	
1547	SP7173	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 2	(15.0)	4.8	9.0	1/3	底面	底面	
1548	SP7197	山廻頭	鐵	圓筒形	φ - 1	(16.0)	口部 1/25			底面	底面	
1549	SP7176	土廻頭土器	伊勢鍋		(23.0)					口部 1/25	底面	にかい骨質
1550	SP7264	山廻頭	鐵	圓筒形	(15.4)					口部 1/16	底面	外海に擦付層
1551	SP7501	山廻頭	小鉢	圓筒形	(5.2)					口部 1/8	底面	
1552	SP7570	山廻頭	鐵	圓筒形	φ	(13.0)	5.0			底面 1/4	底面	
1553	SP7645	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(16.0)				底面	底面	
1554	SP7723	土廻頭土器	轆	轆	轆口径 10.0	(10.5)				底面	底面	
1555	SP7723	土廻頭土器	伊勢鍋		(10.4)					底面	底面	
1556	SP7723	土廻頭土器	小鉢	圓筒形	(5.0)					底面	底面	
1557	SP98050	土廻頭土器	内耳鍋	くの字型	(18.0)					口部 1/20	底面	
1558	SP98074	土廻頭土器	内耳鍋	轆口径	(10.0)					口部 1/12	底面	

7. 井戸

SE1001 (図 209 ~ 211、図版 30・54)

1 区北東隅の B 6 区に位置する。平面形状は円形で、直径は上面で 2.1 m、深さは検出面から 2.1 m である。かなりの急傾斜で掘り込まれており、井戸側などの下部施設はなく、素掘り井戸である可能性が高い。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、29 層に分層される。最上層の 1 層、下層の 27~29 層には 1~3 cm 程度の礫が認められ、中層の 4・7・11・12・18・19 層などでは褐色土のブロックを含んでいる。比較的水平に堆積する下層から、褐色ブロックの混じる中層までは人為的に埋められ、レンズ状堆積となる上層は自然埋没していったと考えられる。

遺構内からは山茶碗類と土師質土器の皿が出土している。1561・1562 は山茶碗、1563・1564 は小皿で、いずれも渥美湖西岸の製品である。1561 は底部から体部が直線的なつくりである。1562 の高台には初穀痕が多く見られる。1563 と 1564 は小皿である。1563 の方がやや口径が大きい。これら山茶碗類は 1562 がⅡ期に遡る可能性があるが、おおむねⅢ-1~2 期の製品とみられる。1565~1587 は非クロコ成形による土師質土器の皿である。すべて復元径であるが、1565~1572 は口径 8~9 cm の小型品、

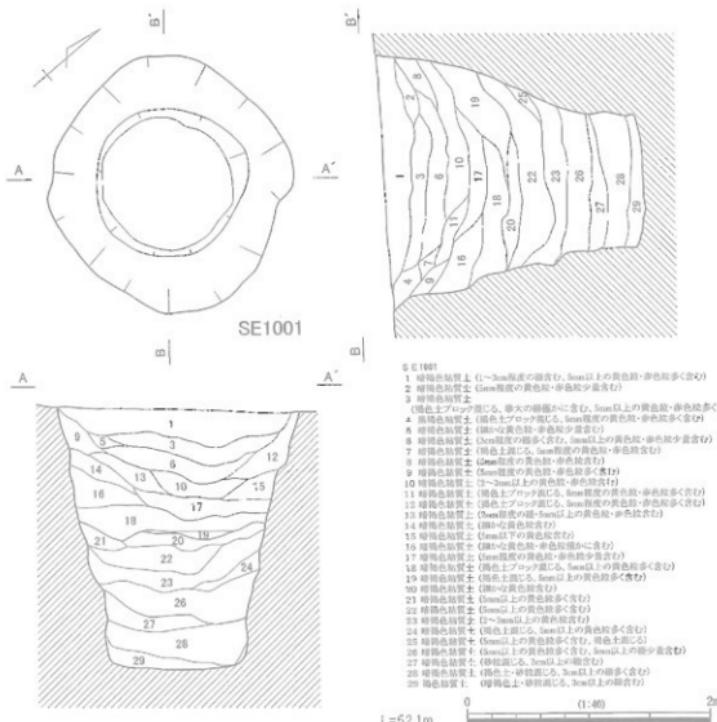


図 209 SE1001 実測図

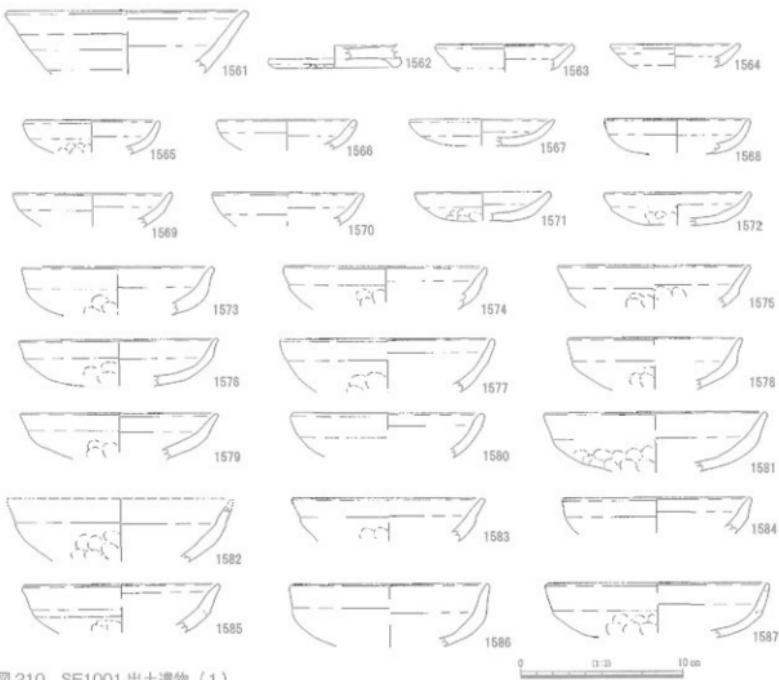


図210 SE1001 出土遺物（1）

1573～1587は口径11～12cmの中型品に分けられる。1565～1572の小型品は摩滅しているものも多いが、体部は内面ナデ調整、外面は指頭痕が残る粗い調整で、口縁部は横ナデ調整が行われる。体部から口縁にかけて丸く仕上げられるものが大半であるが、1572は口縁部の強い横ナデによって体部に段がつくり出される。1568は底部内面、1566は底部外面に煤が付着している。1573～1587の中型品も小型品同様、体部は内面ナデ調整、外面は指頭痕が残る粗い調整で、口縁部は横ナデ調整が行われるつくりである。多くの製品は、口縁部の強い横ナデによって体部中程に段がつくり出されており、口縁部はほぼそのまま引き出されている。1580と1577は口縁部を横ナデで調整しているが、体部に段をつくり出さず、丸く仕上げられている。1582は内外面に煤が付着している。

1588～1594は瓦である。1588～1590は平瓦で、1588は縦長斜格子+横線、1589と1590は横長斜格子+横線の叩き目が認められる。凸面には離れ砂の痕跡があり、1588は凹面に布目が残る。1591～1594は丸瓦である。1592・1593の四面には吊り紐の痕跡が確認され、1594の凹面には離れ砂が付着する。1591・1593は二次焼成を受けており、変色が著しい。

山茶碗は埋土上層から出土しており、土師質土器皿は1565・1566・1573～1577が埋土上層、1567・1568・1578～1582が埋土中層、1569～1572・1583～1587が埋土下層というように、埋土上～下層全てにわたって出土している。遺物の年代は13世紀前～後葉におさまることから、井戸の廃絶年代はそれ以降の時期と考えられる。

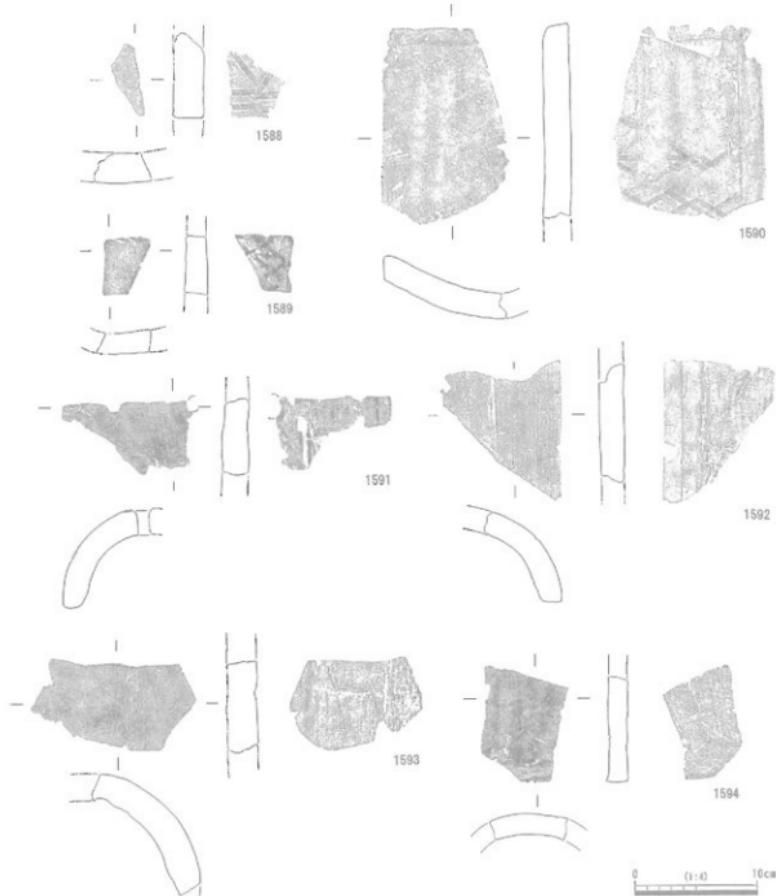


図211 SE1001 出土遺物(2)

SE3001 (図212、図版30・83)

3区中央の大溝南側、E 23区に位置する。平面形状はほぼ円形で、直径は1.1m、検出面からの深さは19mで、ほぼ円筒形に掘り込まれている。埋土は16層以上に黄土ブロックが多く含まれ、暗褐色粘質土との互層となる。17層以下はやや還元した灰褐色粘質土を主体とし、黄土ブロックをほとんど含まない。よって、17層以下は井戸使用中～廃絶までに自然に堆積し、16層以上は最上層以外ほぼ水平に堆積する状況などもあり、人為的に埋められたと考えられる。井戸側などの下部施設はなく、土層堆積状況からもそうした知見は得られなかったため、素掘りであった可能性が高い。

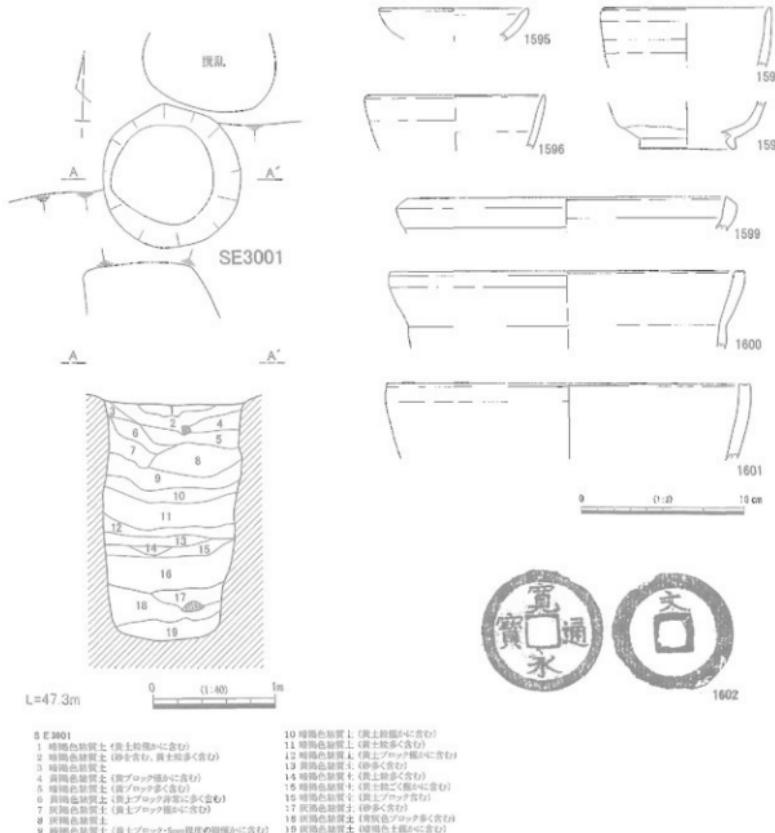


図 212 SE3001 実測図・出土遺物

遺物のはほとんどは16層からの出土である。1595は土師質土器の皿で、非クロコロ成形の内外面にナデ調整が施される。1599～1601は土師質土器の内耳鍋である。1599はくの字形の口縁部の破片で、外側に煤が付着している。1600と1601は内彎形内耳鍋で、1600は口縁端部が断面方形で、上面が強いナデによりわずかにくぼむ。1601は体部と口縁の境が明確でないが、半球形ほど湾曲していないため、内彎形に範疇のものであろう。いずれも外側に煤が付着するが、内面は若干黒く変色するのみである。1596～1598はいずれも近世美濃産の碗である。口縁部破片の1597、底部破片1598は直接接合を確認できないが、同一個体の鉄軸丸碗である。底部外面から高台部分を除き、褐色の鉄軸が掛けられる。登窯3～4小期に位置づけられよう。1596は尾呂茶碗の口縁部の破片である。登窯5～6小期に位置づけられる。1602は寛永通宝で、検出面付近から出土した。裏面に「文」の文字があり、寛文年間に鑄

造されたことを示す。全体的に被熱の痕跡が残っていた。このほか山茶碗、土師質土器の破片が11点出土したが小片であり、図化することはできなかった。

人為的な埋土と考えられる16層から17世紀中葉～後葉に位置づけられる1597・1598が出土していることから、廃絶はその時期と考えられる。最上層で17世紀末～18世紀初頭の1596が出土していることから、その頃までには完全に埋没していたのであろう。

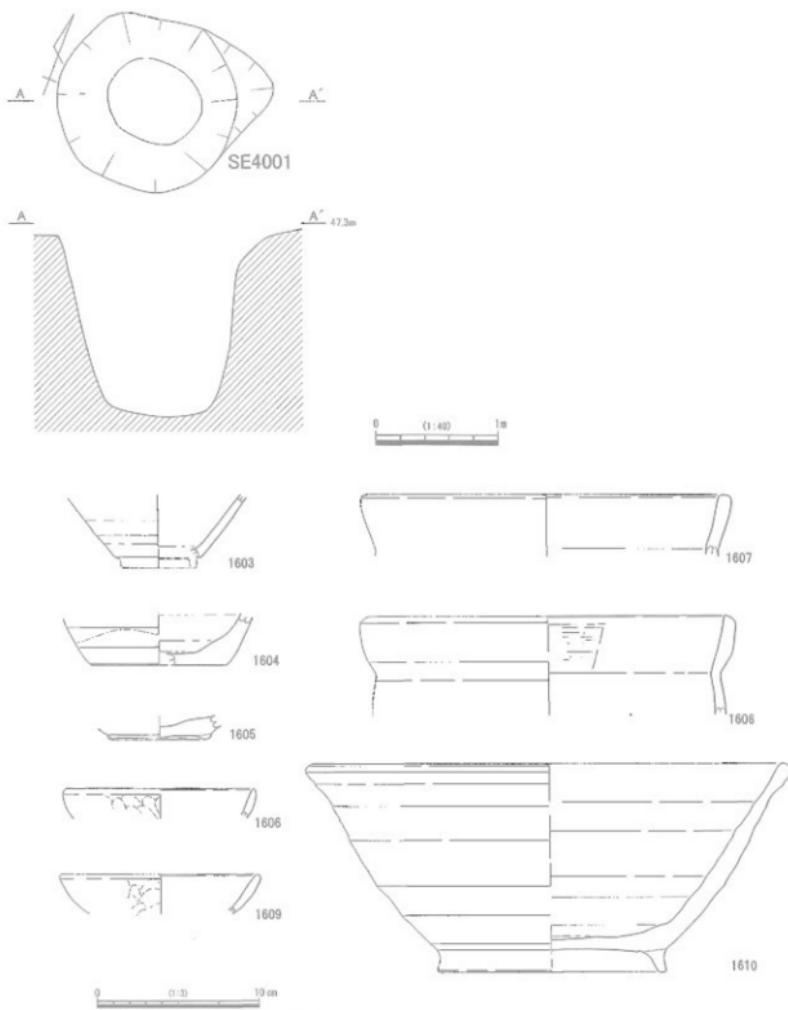


図213 SE4001 実測図・出土遺物（1）

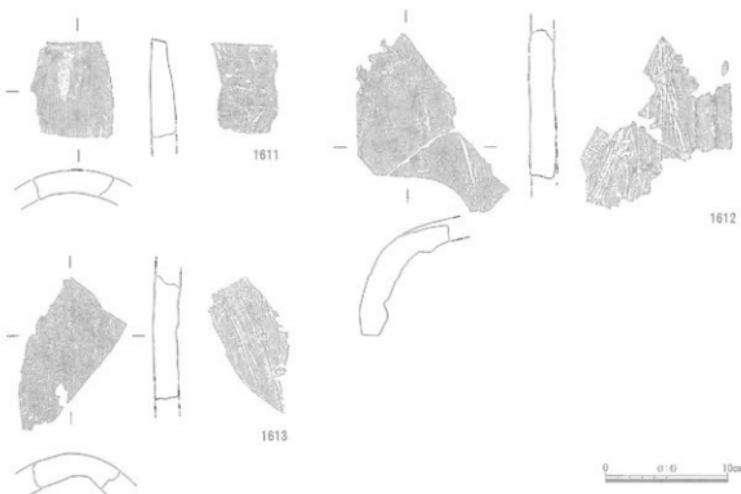


図214 SE4001 出土遺物（2）

SE4001（図213～215、図版30・82）

4区中央のE17区に位置し、大溝SD2001の底面において検出した。本遺構は大溝よりも新しいため、本来は大溝埋土上層から掘り下げられていたようであるが、大溝と本遺構の埋土が極めて似通っていたために、大溝を下層まで掘り下げた段階での検出となってしまった。平面形状はやや不定型な円形で、直径は1.45m、検出面からの深さは1.5mである。大溝の検出面からの深さは3.0mほどになる。井戸側などの下部施設は確認されていないため、素掘りの井戸であった可能性が高い。堆積状況がはっきりしないため、明確ではないが、1610の片口鉢が上～下層にわたって接合するため、この破片を含んだ埋土で短期間に埋められた可能性が高い。

図示した出土遺物は結果的に検出面となった大溝底面以下の遺物の他、大溝内として取り上げた遺物のうち出土地点を元にSE4001出土遺物として報告するものを含んでいる。前者を中心～下層、後者を上層出土遺物として報告すると、上層で1603、中層で1609、下層で1604～1608が出土し、1610は上～下層出土遺物が接合している。

1603は瀬戸美濃産の天目茶碗で、大窯第2段階に比定される製品である。1604は初山窯産の壺類の底部で、内外面に鉄釉が施されるが、底部付近は無釉となる。初山窯の製品は他にも下層から壺類の小片が出土している。1605は山茶碗底部で、渥美湖西産の製品である。1606・1609は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。内面ナデ調整、外面は指頭が残る粗い調整を施す。1607・1608は土師質土器の内耳鍋である。いずれも内彌形で、外面には煤が厚く付着するが、内面は使用痕がほとんど立たない。1610は尾張（知多）産の片口鉢で、常滑5型式頃に位置づけられるものであろう。体部外面下半にはケズリ調整が顯著で、底部内面付近は使用により表面が滑らかになっている。複数の破片が接合し、全体の1/2程度に復元できた。

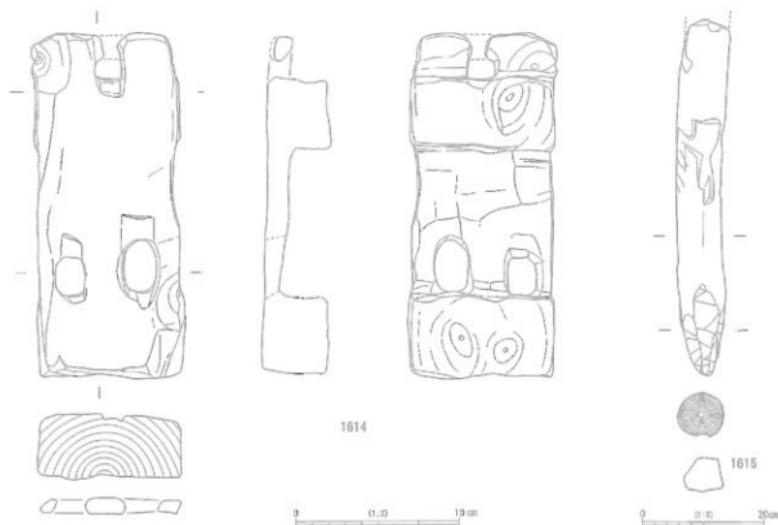


図215 SE4001出土遺物（3）

1611～1613は丸瓦である。いずれも凸面は全面ナデ調整されており、凹面には布目が認められる。1611は狭端部の破片である。被熱により変色し、表面の摩滅も著しいが、凹面の狭端側は幅広に面取りされている。1612は側端面の残る破片である。凹面の側端側には、面取り調整が施されている。布目には皺が目立ち、大きく絞っている様子が確認できる。1613は端部の残らない破片で、全体の湾曲がややいびつなっている。凹面には、吊り紐痕が認められる。

1614と1615は底面から0.3mほど浮いた層位で出土した木製品である。1614は角型の連歯下駄であるが、腐食が激しく、細かい調整や使用痕は明確でない。カヤ材を使用した一木造りで、長さ21.2cm、幅9.3cm、最大厚4.0cmを測る。前蓋及び後蓋は腐食が激しく、本来の形状・大きさは不明である。1615は直径7.5cmの丸杭である。先端を粗く尖らせ、体部にも削痕がみられる。

やや古い段階の遺物も含むが、初山窯製品や土師質土器の様相から、本遺構は16世紀後葉には廃絶したと考えられる。

SE5001（図216、図版30・54）

5区北西部のF2区に位置する。平面形状は円形で、直径は上面で1.65m、深さは検出面から約1.0mである。底面の西側に直径0.5m、深さ0.4mの小穴があるが、湧水を得るために掘削されたのかもしれない。井戸側などの下部施設はなく、素掘り井戸の可能性が高い。暗褐色土と黄褐色土が互層となっており、17層に分層される。1・2層の上層と16・17層の下層に1cm程度の縞が混じっている。埋土堆積状況から埋没過程を推定するのは困難であるが、土層状況を見ると、東側に埋土の盛り上がりが観察され、その上に地山由来の黄褐色土と暗褐色土が互層となっており、それは中層～上層にも認めら

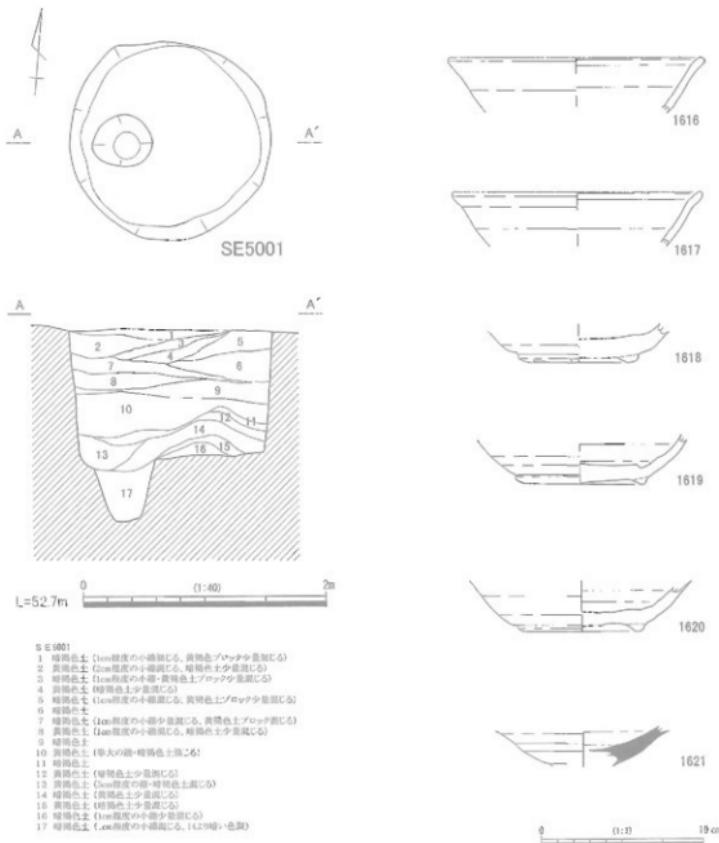


図216 SE5001 実測図・出土遺物

れる。こうした堆積状況から、東側から人為的に投げ込まれた埋土の上に、壇面が崩落するというサイクルが数度にわたりて続きたながら埋まつた状況が想定できる。周辺に同時期とみられる遺構はほとんどなく、遺構の用途は不明である。

遺物は 1616～1619 が埋土上層、1620 が埋土中層、1621 が下層から出土している。1616～1620 はいずれも瀬美湖西窓の山茶碗である。1616・1617 は体部～口縁部破片である。1618～1620 は底部の破片で、1618 は高台下部に初期痕、1619・1620 は砂目痕が認められる。いずれも底部内面は使用痕が顕著である。高台がかなり低く粗雑になることから、Ⅲ-2 期に位置づけられる。1621 は下層から出土した須恵器の高杯である。混入品であろう。これら出土遺物は 13 世紀中頃に比定されることから、井戸の廃絶年代もその時期と考えられる。

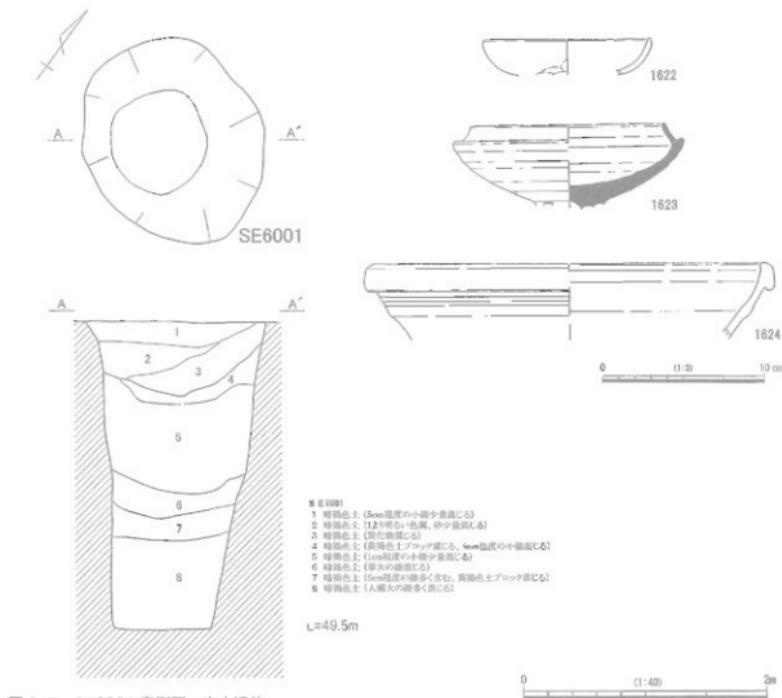


図 217 SE6001 実測図・出土遺物

SE6001 (図 217、図版 54)

6 区中央の H 12 ~ 13 区に位置し、SH6007・6008・6010・6011 に隣接している。平面形状は不整形な橢円形で、直径は上面で 1.65 m、検出面からの深さは 25 m である。下部に向かってやや狭くなるが、ほぼ円筒形に掘り込まれている。井戸側などに下部施設は確認されておらず、素掘りであった可能性が高い。埋土は暗褐色土で、8 層に分層される。6 ~ 8 層からは直径 5 cm ~ 人頭大の礫が多く出土しているが、井戸側に使用されたという状況ではなかった。堆積状況は各層が水平に厚く堆積する様子が見受けられるため、人為的に埋め戻されたと判断される。

1622 は 3 層から出土した土師質土器の皿で、非クロコ成型品である。内面はナデ調整、外面は指頭の残る粗雑な調整が施され、比敷的硬質に焼成される。1623 は須恵器の蓋付高壺である。混入品であろう。1624 は志戸呂窯産の擂鉢である。体部から口縁部は湾曲し、口縁端部には縁帯が巡る。擗目は確認できないが、体部はかなり薄く仕上げられている。大窯第 4 階末期～登窯期初頭並行の製品であろう。

出土遺物は志戸呂窯産擂鉢が 17 世紀前葉の製品であり、これが埋土下層から出土していることから、その頃までに本遺構は廃絶されたのだろう。周囲の SH6007・6008・6010・6011 の帰属年代が 15 世紀後葉～16 世紀代であることから、井戸の主な使用年代はその範疇におさまるものと考えられる。

表21 井戸出土土器・陶磁器観察表

順位	遺物名	種類	特徴	地質	分類	測定 (cm)	底径 (cm)	最高 (cm)	高さ (cm)	底径	測定 (cm)	分類	地質	分類	地質
1581	SE1001	上	山茶碗	鏡	瀬戸窯系		(14.0)			口縁～底部 1/7		鏡白			
1582	SE1001	上	山茶碗	鏡	瀬戸窯系	■～1	2			[7.4]	底部 1/3	鏡白			
1583	SE1001	上	山茶碗	鏡	瀬戸窯系			(8.3)			口縁～底部 1/5	鏡白			
1584	SE1001	上	山茶碗	鏡	瀬戸窯系	■～2		(7.0)			口縁～底部 1/6	鏡白			
1585	SE1001	上	土師質土器	盤				(8.0)			口縁～底部 1/5	鏡白			
1586	SE1001	上	土師質土器	盤				(8.3)			口縁～底部 1/5	鏡白			
1587	SE1001	中	土師質土器	盤				(8.0)			口縁～底部 1/5	鏡白			
1588	SE1001	中	土師質土器	皿				(8.0)			口縁～底部 1/6	鏡白			
1589	SE1001	下	土師質土器	皿				(9.7)			口縁～底部 1/6	鏡白			
1590	SE1001	下	土師質土器	皿				(9.2)			口縫部 1/10	鏡白			
1591	SE1001	下	土師質土器	皿				(8.2)			口縫部～底部 1/2	鏡白			
1592	SE1001	下	土師質土器	皿				(5.9)			口縫部 1/4	鏡白			
1573	SE1001	上	土師質土器	皿				(11.0)			口縫部 1/4	鏡白			
1574	SE1001	上	土師質土器	皿				(12.4)			口縫部 1/10	鏡白			
1575	SE1001	上	土師質土器	皿				(11.7)			口縫部 1/8	鏡白			
1576	SE1001	上	土師質土器	皿				(12.1)			口縫部 1/8	鏡白			
1577	SE1001	上	土師質土器	皿				(13.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1578	SE1001	中	土師質土器	皿				(10.0)			口縫部 1/4	鏡白			
1579	SE1001	中	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/8	鏡白			
1580	SE1001	中	土師質土器	皿				(11.0)			口縫部 1/2	鏡白			
1581	SE1001	中	土師質土器	皿				(13.0)			口縫部 1/2	鏡白			
1582	SE1001	中	土師質土器	皿				(10.0)			底部 1/8	鏡白			
1583	SE1001	下	土師質土器	皿				(11.7)			口縫部 1/8	鏡白			
1584	SE1001	下	土師質土器	皿				(11.0)			口縫部 1/10	鏡白			
1585	SE1001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/10	鏡白			
1586	SE1001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1587	SE1001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1588	SE3001	下	土師質土器	皿				(8.1)			口縫部 1/10	鏡白			
1589	SE3001	下	土師質土器	皿				(11.7)			口縫部 1/8	鏡白			
1590	SE3001	下	土師質土器	皿				(11.0)			口縫部 1/10	鏡白			
1591	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/10	鏡白			
1592	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1593	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1594	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1595	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1596	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1597	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1598	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1599	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1600	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1601	SE3001	下	土師質土器	皿				(12.0)			口縫部 1/14	鏡白			
1602	SE4001	上	施釉陶器	天目茶碗	瀬戸窯系	瀬戸窯系	大根 2								
1604	SE4001	下	施釉陶器	建窯	建窯	相山		(6.0)							
1605	SE4001	下	施釉陶器	鏡	瀬戸窯系	■～1				(5.7)					
1606	SE4001	下	施釉陶器	鏡	瀬戸窯系										
1607	SE4001	下	施釉陶器	内耳皿	瀬戸窯系	内耳皿		(11.5)			口縫部 1/10	鏡白			
1608	SE4001	下	施釉陶器	内耳皿	瀬戸窯系	内耳皿		(21.0)			口縫部 1/10	鏡白			
1609	SE4001	中	施釉陶器	皿	瀬戸窯系	内耳皿		(22.0)			口縫部 1/17	鏡白			
1610	SE4001	上～下	中古陶器	口付鉢	青瓷	5型式	(29.0)			12.0	(12.0)	内側～底部 1/2	鏡白		
1611	SE5001	上	山茶碗	鏡	瀬戸窯系			(15.4)			口縫部 1/10	鏡白			
1617	SE5001	上	山茶碗	鏡	瀬戸窯系			(15.3)			口縫部 1/10	鏡白			
1518	SE5001	上	山茶碗	鏡	瀬戸窯系	■～2				(6.0)	底部 1/2	内面・鏡面	鏡白		
1619	SE5001	上	山茶碗	鏡	瀬戸窯系	■～2				(7.0)	底部	鏡白			
1620	SE5001	中	山茶碗	鏡	瀬戸窯系	■～2				(7.0)	高部	鏡白			
1621	SE5001	下	山茶碗	鏡	瀬戸窯系	■～2					底部 1/2	鏡白			
1622	SE6001	3 箔	土師質土器	皿		等口	口付	(10.1)			口縫部 1/6	鏡白			
1623	SE6001	下	土師質土器	皿				(11.7)			等部 1/4	鏡白			
1624	SE6001	下	土師質土器	皿				(24.0)			口縫部 1/6	鏡白 / にじい赤色			

8. 土坑

SF1025 (図218・219、図版31・54)

1区東部のE3区に位置する。平面形はやや不整形な円形で、南北2.8m、東西3.0m、深さは検出面から1.2mを測る。南側には浅い落ち込みがあり、これに切られている。周囲に同時期の遺構は見当らず、遺構の性格は不明である。埋土は下層に褐色粘質土、上層に黒褐色粘質土が堆積しており、最下層の6層には黄色土ブロックが多く含まれ、また中～上層には1～10cm程度の礫が混入していた。

遺物のほとんどは1層からの出土で、1627のみ中層からの出土である。1625は土師質土器の皿である。非ロクロ成形によるもので、底部外面付近に指頭痕、面には板ナデ痕が残る。1626～1629は土師質土器の内耳鍋である。1626はくの字形内耳鍋で、口縁端部を強く引き出す特徴がある。1627～1629は内彎形内耳鍋である。いずれも端部断面は方形に成形される。1627は口縁端部が被熱し、変色している。1630・1631は施釉陶器で、古志戸呂の盤類である。体部破片であるが、上半に鉄釉が掛けられ、下半は無釉となり、ケズリ調整が明瞭に観察できる。1632は丸瓦の広端部破片である。このほか陶器、土

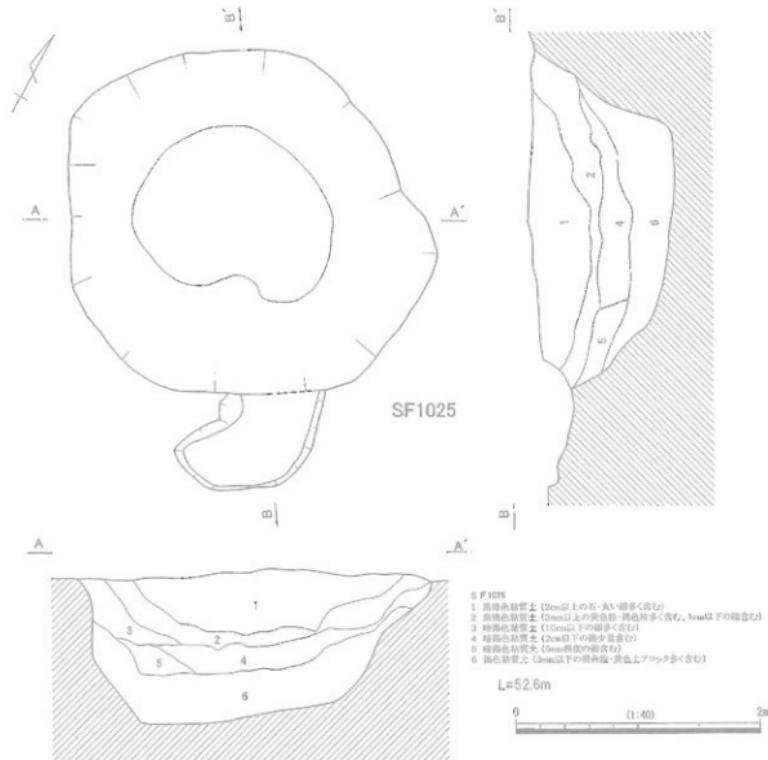


図218 SF1025 実測図・出土遺物

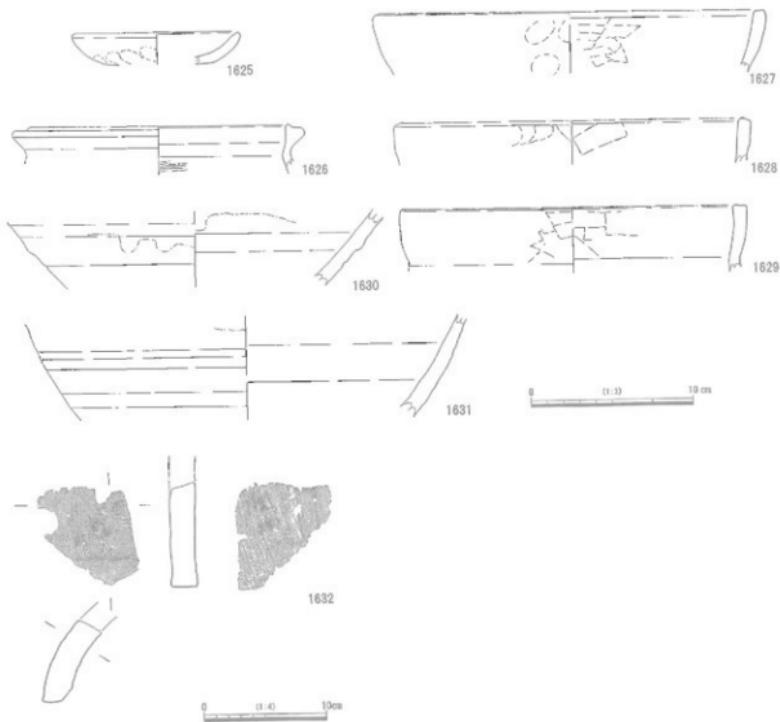


図219 SF1025 実測図・出土遺物

師質土器が出土したが、小片であり図化することはできなかった。古志戸呂製品なども含むが、上師質土器の皿及び内耳鍋の年代観から、遭構は16世紀代に廃絶したものと考えられる。

SF6033 (図220・221、図版31・54・64)

6区東端のI-18区に位置する。平面形は不整形な円形で、南北3.2m、東西2.8m、検出面からの深さは1.9mを測る。概ね碗状だが、中程から段をもって狭くなっている。埋土は暗褐色土が主体で、5層に分層される。堆積状況は最下層の5層が最も厚く、レンズ状の堆積を示す1～4層のうち3・4層には拳大の縛が含まれる。

1633～1643は山茶碗類である。1634・1642が1層、1635・1636が3層、1633・1637が4層、1638～1641・1643は5層から出土しており、全て渥美湖西産の製品である。1633は高台がかなり低くなるが、口径は16.6cmに復元でき、口縁端部を外反させる。III-1期に位置づけられよう。1634～1636は口縁部破片で、いずれも厚手で端部に自然釉が付着する。1636～1641は底部破片で、高台が高い。1637がII期となる以外はIII-2期の製品であろう。高台下部には1637・1640が粗粒痕、1638・1639・1641は砂目痕が残る。1642・1643は小皿である。1642は内外面に自然釉が付着する。1644は尾張(知

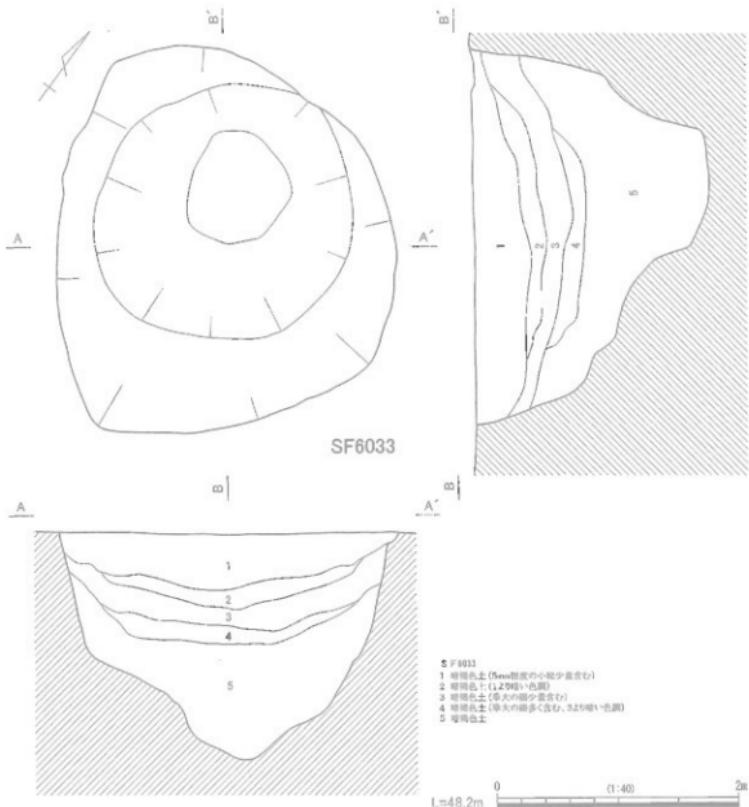


図 220 SF6033 実測図

多）産の片口鉢である。体部下半は粗いケズリ調整が残り、低い高台がつけられる。常滑 6 a 型式のものであろう。1645・1646 は常滑産の製品である。1645 は片口鉢の底部で、内面に使用痕が明瞭に残る。1646 は壺の口縁部破片で、外面には自然釉が厚く付着する。口縁端部上部に突帯が巡る常滑 5 型式の製品であろう。1647～1650 は土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形品で、摩滅が激しい。1650 は口縁端部のナデにより、体部との境に段がついている。1651・1652 は貿易陶磁の青磁碗である。1651 は鏡連弁文碗で B 1 類、1652 は無文碗で A 1 類に比定されよう。これら遺物の様相から、本遺構は 13 世紀中葉頃までには廃絶し、埋没したものと考えられる。

SF6035 (図 222)

6 区中央の H 13 区に位置する。SH6010・6011・6015 に隣接する。平面形は隅丸長方形で、長軸 2.8m、短軸は 2.45 m である。遺構上部は削平されており、検出面からの深さは 0.05 m と非常に浅い。埋

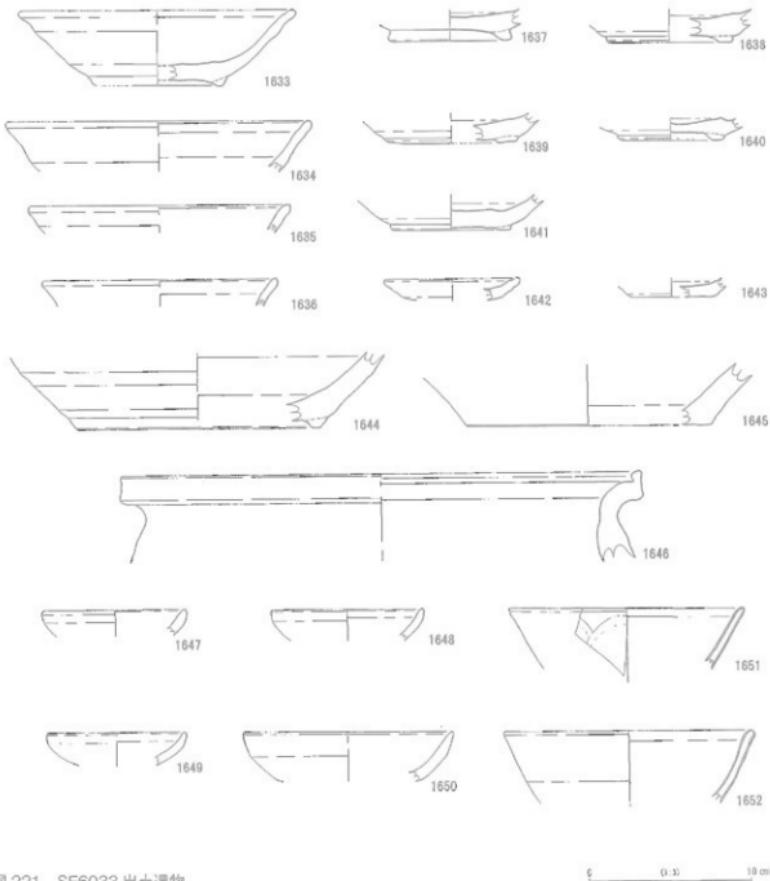


図221 SF6033出土遺物

€ 0-3 19 cm

土は暗褐色土の単層である。遺物は多く出土しているが、小破片が大半で遭構の性格を推定させる状況はない。

1653・1655は須恵器である。1653は壺蓋の口縁部、1655は甕の口縁部破片である。1654は土師器の皿である。摩滅しているが、内外面に赤彩の痕跡がある。1656は渥美湖西産山茶碗の口縁部である。1658・1659は土師質土器の内耳鍋である。1658は頸部、1659は体部であるが、いずれもくの字形内耳鍋と考えられる。1657は土師質土器の皿である。非クロロ成形品であるが、摩滅が激しく調整は明らかではない。この他須恵器、土師器、土師質土器などが出土しているが、いずれも小片のため図化することはできなかった。出土遺物の年代観が15世紀中葉～16世紀代であり、またSH6010・6011・6015の年代観とも重なるため、同時期に営まれた遭構群と捉えることができる。

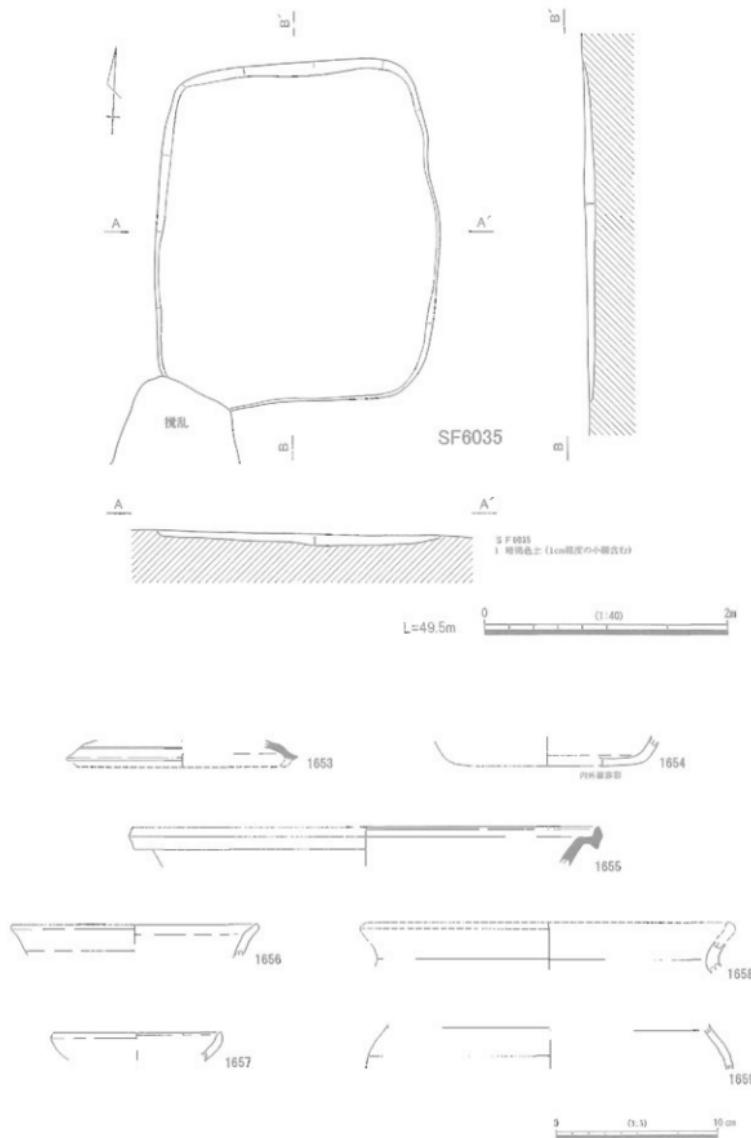


図 222 SF6035 実測図・出土遺物

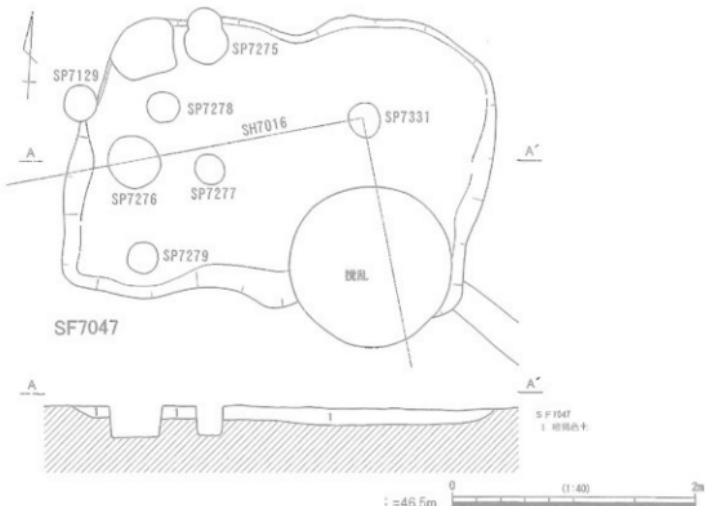


図 223 SF7047 実測図

SF7047 (図 223・224、図版 30・64)

7 区東の H 26 区に位置する。SH7016 と重なっており、その柱穴 SP7276 と SP7331 及び SD7001 に切られることから、これらよりも古い段階の遺構である。平面形は不整形な隅丸長方形で、長軸 1.65 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.1 m である。底面はやや凹凸があり、周縁部は皿状となる浅い落ち込みで、埋土は暗褐色土の単層であった。

1660-1661 は須恵器で、1660 は箱坏の底部、1661 は壺の口縁部であろう。1662-1664 は土師器である。1662 は坏、1663・1664 は長胴壺の口縁部破片である。1660-1681 は古代の遺物で、混入品である。

1665-1671 は山茶碗類である。1665-1668 は山茶碗である。1666 が尾張産である以外はいずれも渥美湖西岸の製品で、1667・1668 は高台底部に初殻痕が残る。Ⅲ-1 期の製品であろう。1669 は薄手であることから、小碗の口縁部であろう。1670・1671 は小碗の底部である。1670 は底部内面の全面に自然釉が付着し、1671 は底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。いずれも 1-2 期の製品であろう。1672・1673 は片口鉢で、いずれも尾張（知多）産であろう。1672 は端部が肥厚する口縁部破片で、1673 は低い高台のつく底部破片である。常滑 5-6 a 型式の製品であろう。1674-1683 は土師質土器である。1674-1681 は皿で、いずれも非クロコ形品である。軋實に焼成されるものが多く、摩滅が顕著であるが、内面はナデ調整、外表面は指頭による調整が施される。器壁はやや厚手で、体部から口縁にかけてなだらかに立ち上げるが、1674 は口縁部を垂直近くまで屈曲させる。概ね 10-12cm に口径が復元されるが、1681 は 7cm 程度とかなり小型品である。1682・1683 は伊勢鍋の口縁部破片である。外表面には使用による煤が付着する。

1684-1687 は瀬戸美濃系の施釉陶器である。1684 は天目茶碗である。底部外表面が露胎となる以外は鉄釉が掛けられ、高台は輪高台がケズリ調整によってつくり出される。口縁部はほぼ直立し、薄く引き出されて尖る。古瀬戸後 1 期の製品である。1685・1686 は灰釉平碗である。1685 は内面に灰釉が掛かるが、

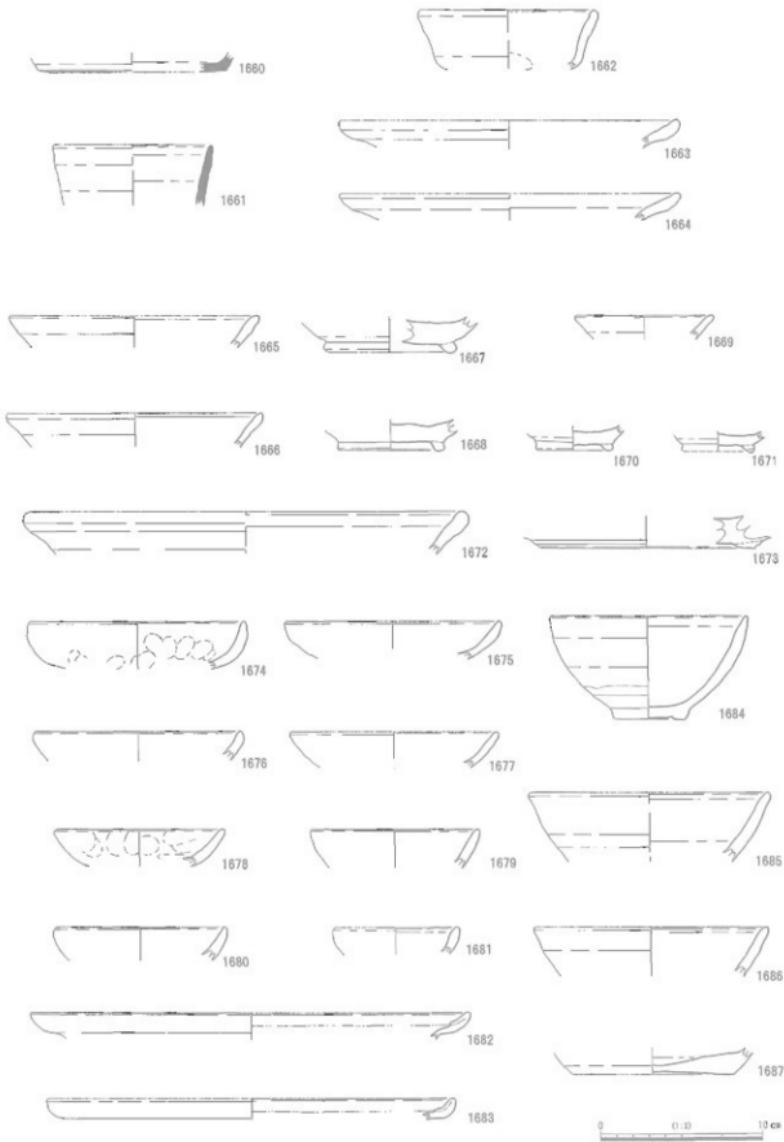


図 224 SF7047 出土遺物

外面は露胎となるが、1686は全面に施釉される。1685が古瀬戸後Ⅰ期、1686が古瀬戸後Ⅳ期古段階に位置づけられる。1687は柄付片口の底部である。内面には灰釉が掛かり、底部付近の外面は露胎で糸切り痕が明瞭に残る。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期の製品である。この他、図化が不可能な須恵器・土師器・土師質土器の小片が出土している。

これら出土遺物の下限は15世紀後葉であり、切合い関係から本遺構よりも新しいSH7016が16世紀代の建物であることから、15世紀後葉～16世紀代に帰属する遺構と推定される。

SF8009 (図225)

8区東端のE33区に位置する。SD8002、SD8045と重なるが、新旧関係は不明である。平面形は不定形で、長軸は3.4m、短軸は2.5m、検出面からの最深部は0.15mである。底面は凹凸があり、明瞭な立ち上がりは認められない。埋土は黄色土ブロックを含む灰褐色粘質土が主体で、2層に分層される。浅い落ち込み状の遺構である。

1688～1692は山茶碗で、すべて瀬美湖西産の製品である。1689～1692の高台底部には砂目が残り、体部内面は使用による摩滅が顕著である。Ⅲ-2期段階の製品であろう。これら山茶碗は13世紀中葉の年代観を示すものの、小片のため図化できない破片の中に内耳鍋の破片があり、それが埋土中層付近から出土していることから、遺構は15世紀～16世紀代に降る可能性がある。

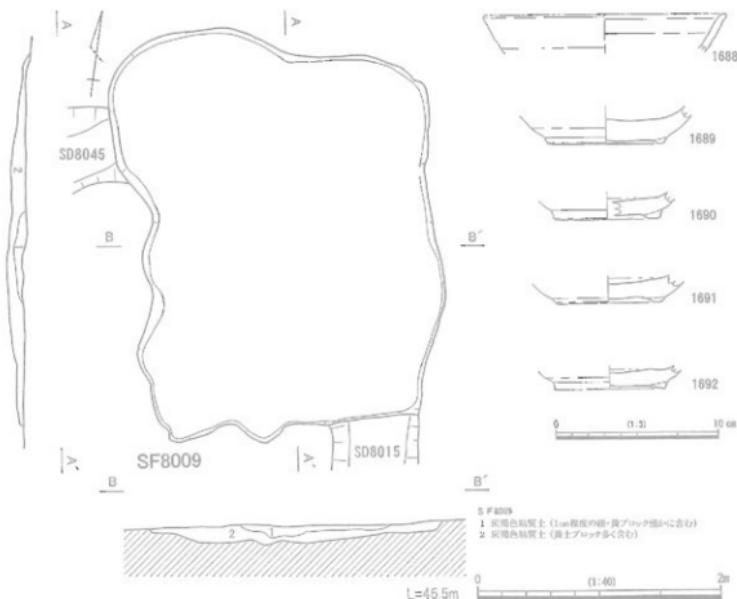


図225 SF8009 実測図・出土遺物

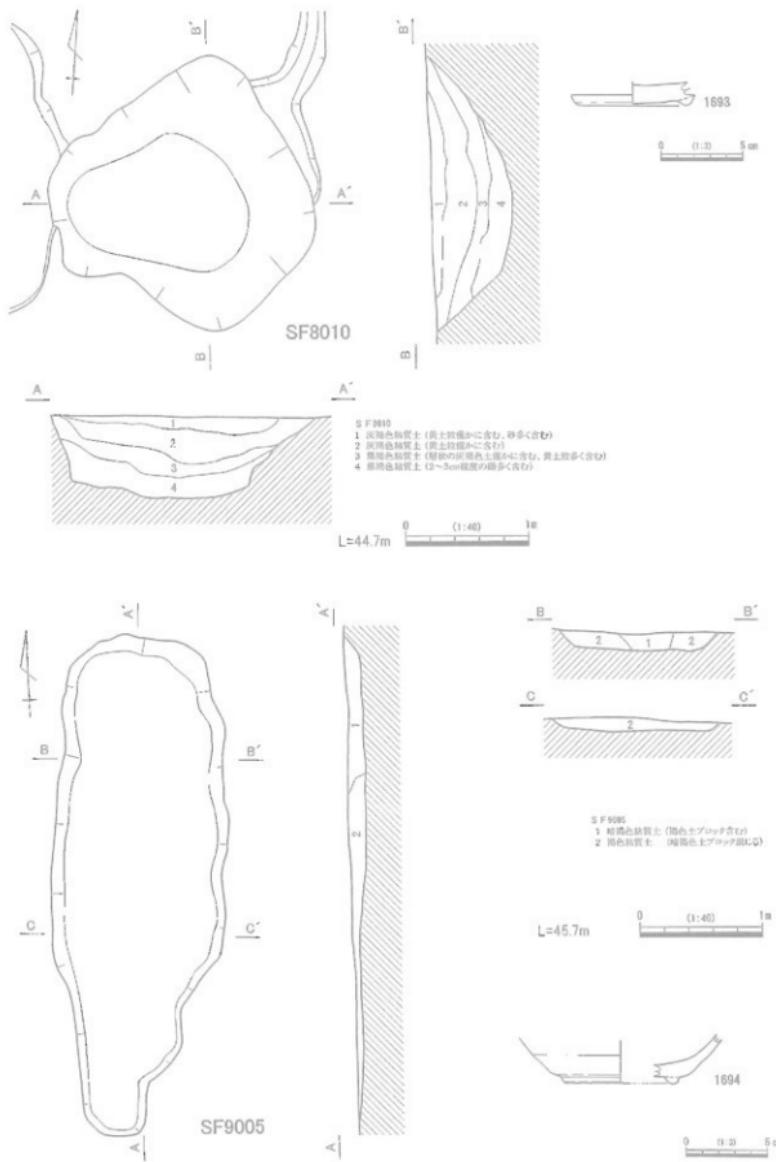


図 226 SF8010、SF9005 宮跡園・出土遺物

SF8010 (図 226)

8区東部のH 33区に位置する。平面形は不整形で、東西の長軸は1.9m、南北の短軸は1.8mである。検出面からの最大深さは0.6mである。埋土は4層に分層されるが、いずれも黄色土の粒子を少量含み、上層が灰褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土に大きく分かれる。

1693は3層から出土した山茶碗である。底部内面は使用による摩滅が顕著である。渥美湖西産のIII-2期の製品であろう。

この他、小片のため固化できなかった遺物があるが、大半は土師質土器の皿であった。出土遺物の大半が小片であるため、造構の時期認定は困難であるが、少なくとも13世紀中葉には埋没していたと考えられる。

SF9005 (図 226)

9区中央のD-E 28区に位置する。平面形は不定形で、南北の長軸は4.1m、東西の短軸は1.4mである。深さは0.15mと浅く、底面はほぼ平坦で、周縁に向かって徐々に浅くなり、立ち上がりは明確でない。埋土は暗褐色と褐色の粘質土に分層される。造構の性格は不明である。

1694は山茶碗の底部の破片である。底部内面は使用痕が顕著で、煤が薄く付着する。渥美湖西産のIII-1期の製品であろう。

他に土師器の小片が見つかっているが、固化不能である。出土遺物が極めて少なく明確でないが、13世紀前葉頃の年代観が与えられよう。

SF1004 (図 227、図版 31・64)

1区北西部のC 3区に位置し、SD1002の東に隣接する。平面形はややいびつな円形であり、直径は1.6mである。底面は平坦で、南西側の掘り込みに比べて北東側は緩やかとなる。検出面からの深さは0.3mで、埋土は暗褐色土を主体に4層に分層される。

図227に示したように、1・2層を中心とした埋土から比較的多くの遺物が出土している。1695～1697は山茶碗で、いずれも渥美湖西産の製品である。1695は底部から口縁部にかけて全体の1/2が残存していた。高台は粗雑な亞んだ形状で、底部には砂目痕が観察できる。体部から口縁にかけては厚手で、口縁部には自然釉が付着する。III-1期のものであろう。1696・1697は口縁部の破片である。いずれも口縁端部に自然釉がみられる。1695と形状が類似するため、同時期の遺物とみられる。1698は片口鉢である。底部の全面と体下部の一部が残存する。高台は比較的高く、断面は方形となり、下面に何らかの植物の痕跡が残る。外面下半はケズリ調整、内面は粗いナデ調整が施されている。尾張(知多)産の製品で、常滑6a型式に比定されよう。

1699～1709は土師質土器の皿である。全て非口クロ成形で全体の1/2が残る1699以外はいずれも口縁部の破片であった。1699～1705のような口径10～12cmの製品が多く、他に1707～1709のような口径8～9cmの小型品や、1706のような口径14cm程度の大型品がある。体部から口縁にかけてはやや外反させながら、外側に引き出す形状のものが多いが、1708のように湾曲させるものもある。基本的に体部内面をナデ調整、外側は粗い指オサエあるいはナデ調整、口縁部には横ナデを施すが、1699・1702・1703のように、強い横ナデによって体部外側に段が生じているものもある。1704・1705・1709は摩滅が激しく、調整などは不明である。

他に山茶碗、土師質土器の小片が出土している。これら出土遺物は13世紀前葉～後葉にかけてのものである。よって、造構の帰属年代もその時期に比定されよう。

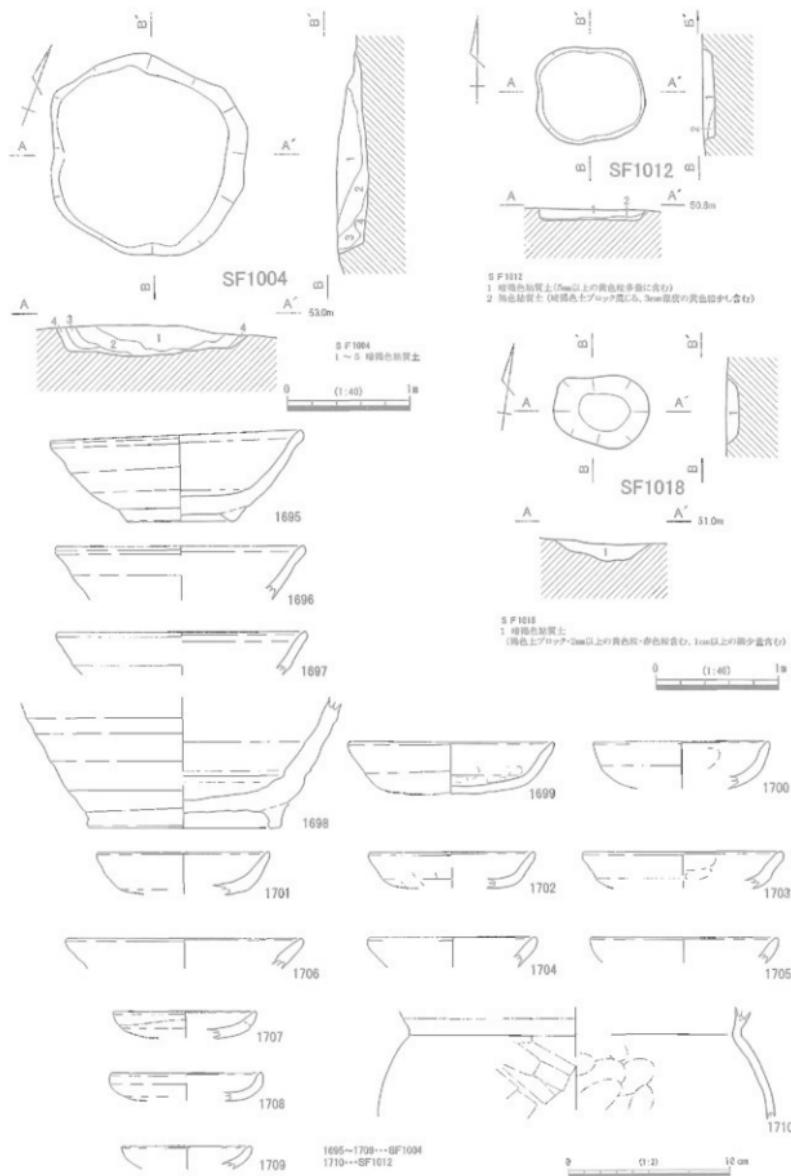


図227 1区の土坑実測図・出土遺物

SF1012（図227）

1区南端のH 5区に位置する。平面形は梢円形で、長軸が0.9m、短軸が0.8mを測り、検出面からの深さは0.1mと浅い。底面は平坦で、周縁部はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分層され、1層は暗褐色粘質土、2層は褐色粘質土である。

遺物は1層から出土している。1710は土師質土器の内耳鍋である。口縁部が欠損しているが、くの字形内耳鍋の頸部破片である。外面はナデ、内面は指頭痕の調整がわずかにみられるが、摩滅が激しく明瞭ではない。使用時の焼は見られない。

他に土師質土器片が1点出土しているが、小片で図化は不可能であった。出土遺物に乏しいが、内耳鍋の年代観から15世紀中葉～16世紀代の遺構と推定される。

SF1018（図227）

1区南西のG 6区に位置し、SD1001の南に隣接する。平面形は不整形な梢円形で、長軸は0.8m、短軸は0.6mを測る。底面は碗状となり、検出面からの深さは0.1mである。埋土は褐色土のブロックなどを含む暗褐色粘質土の単層である。

遺物は埋土から土師質土器の破片が出土した。小片につき図示はできなかったが、胎土や焼成状況からくの字形内耳鍋と考えられるため、遺構は15世紀中葉～16世紀代に帰属するとみられる。

SF2011（図228）

2区北部のC 11区に位置し、SD2003とSD2004に挟まれた場所にある。平面形は梢円形で、長軸1.3m、短軸0.9m、検出面からの深さは0.2mである。底面はほぼ平坦で、北側はテラス状となる。埋土は暗褐色粘質土が主体となる2層に分層され、1層には礫を多く含んでいる。

1711は土師質土器の皿である。非ロクロ成形品で、器壁は薄く、比較的硬質に焼成される。1712は擂鉢の口縁部で、内外面に鉄軸が施される。登竜11小間に位置づけられよう。

この他陶器の小片が3点出土しているが、図化不可能であった。遺物の年代観から、本遺構は19世紀中葉に位置づけられる。

SF2013（図228、図版64）

2区北部のC 12区に位置し、SD2003の西側に近接する。平面形は隅丸長方形で、長軸は1.0m、短軸は0.5m、検出面からの深さは0.15mである。底面は平坦となる。埋土は暗褐色粘質土が主体であり、1層には礫や黄色粒子を多く含む。

出土遺物は検出面付近より出土した、1713の土師質土器の皿である。胎土は橙色で、薄手ではあるが硬質に焼成される。歪みが大きく、外面は指頭痕が残る指オサエによる調整で、内面はナデ調整である。16世紀後葉～17世紀前葉の製品と見られ、遺構の帰属年代もその頃と推定される。

SF2016（図228）

2区東部のB 13区に位置し、SH2008と重なる位置にある。平面形はほぼ円形で直径は1.1m、深さは検出面から0.13mである。底面は緩やかな皿状を呈する。

出土遺物は小破片であり図化不可能であるが、山茶碗・土師質土器皿・須恵器が埋土内から出土した。こうした遺物から、遺構の帰属年代は12～13世紀代と推定される。

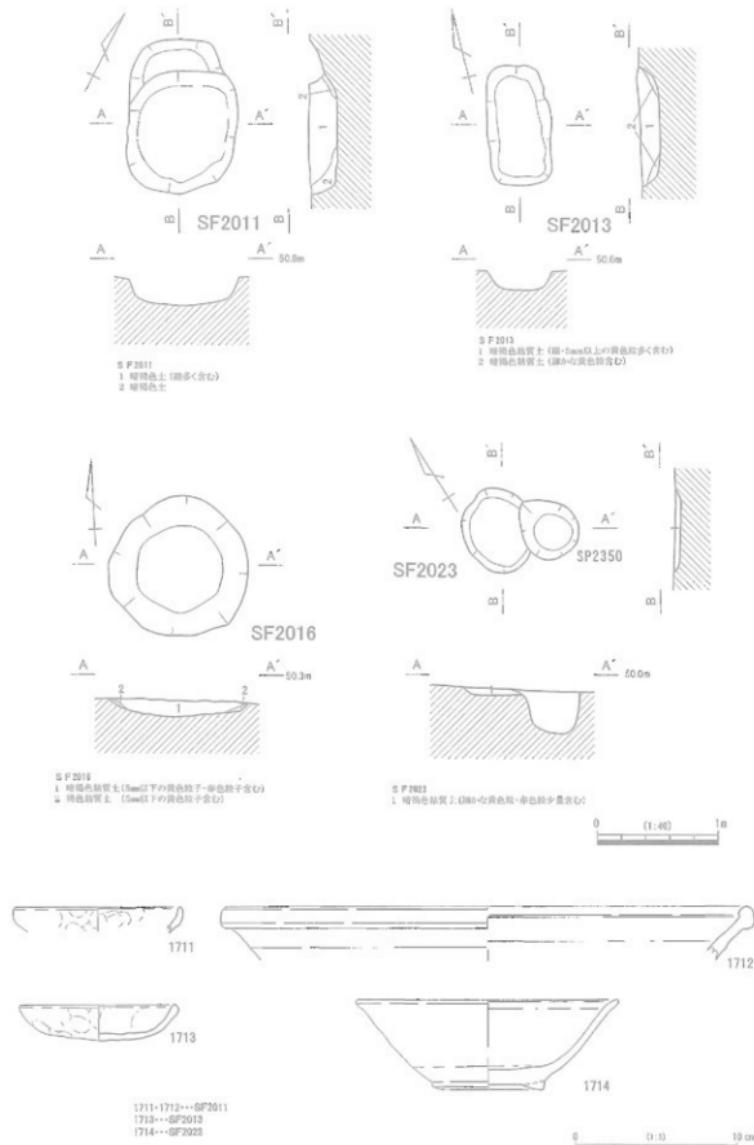


図 228 2区の土坑実測図・出土遺物

SF2023 (図 228、図版 64)

2 区北東の C 14 区に位置し、SH2008 の柱穴 SP2350 と切合い関係にあり、これよりも古い。残存部の平面形はほぼ円形で、直径は 0.7 m である。深さは 0.05 m と極めて浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質土の單層である。

検出面付近から 1714 の山茶碗の破片がまとまって出土しており、1/2 程度にまで復元できた。器壁はやや厚く、口縁部の外反は弱い特徴があり、高台は粗雑で、下部には砂目が残る。渥美湖西産のⅢ-1 期の製品であろう。

他にも山茶碗の小片が出土していることから、遺構は 13 世紀前葉の年代観が与えられ、SH2008 との切合い関係にも矛盾はない。

SF3004 (図 229)

3 区北西端の B 19 に位置し、SD3005 と一部切合い関係にあり、これよりも新しい。遺構の北側は調査区外となるが、平面形は隅丸方形になると見られ、検出した東西の最大長は 1.2 m である。検出面からの深さは 0.15 m であった。埋土は暗褐色粘質土の單層で、黄土ブロックを含んでいる。

1715 は用途不明の金属製品である。棒状鉄製品の周囲に木質が残存していることから、何らかの木製品の一部を留めていた釘である可能性が高い。土器類は固化が不可能な程の小片であったが、土師質土器の鍋あるいは皿とみられる破片が 6 点出土している。これらから、中世後期以降の遺構と考えられるが、隣接する SF3005 と同様、近世の遺構である可能性が高い。

SF3005 (図 229)

3 区北西隅の B 19 区に位置する。北側は調査区外となり、南側は SD3003 に切られる。平面形は検出された部分から推測すると隅丸長方形、あるいは楕円形であったと考えられる。最大長は東西長 1.9 m で、底面は平坦となる皿状を呈し、検出面からの深さは 0.12 m と浅い。埋土は暗褐色粘質土が主体で、1 層には炭化物や黄色粒子が含まれる。

出土遺物は 1716 ~ 1720 に示した。1716 は近世美濃窯の灯明皿で、登窯第 8 ~ 10 小期に位置づけられる製品である。底部内面には重ね焼きの痕跡が残る。1717 は瀬戸美濃産施釉陶器の天目茶碗である。口縁部のみの破片であるが、大窯段階の製品と考えられる。1718 は土師質土器皿の口縁部破片である。非クロ成形品で、器壁は厚手となり、胎土は灰白色を呈する。外面には指頭の調整痕が残る。1719-1720 は土師質土器内耳鍋の口縁部破片である。内輪形内耳鍋と見られ、外面には使用時の煤が付着する。

この他、施釉陶器、土師質土器などの小片が出土している。出土遺物の下限は 18 世紀後葉 ~ 19 世紀中葉であることから、本遺構の年代もその時期に求められよう。

SF3008 (図 229)

3 区北東隅の B 19 区に位置する。平面形はほぼ円形で、直径は 0.8 m である。底面は平坦で、検出面からの深さは 0.1 m の浅い皿状となる。埋土は暗褐色粘質土を主体として、炭化物や焼土粒、黄土ブロックを含んでいる。

遺物は山茶碗や土師質土器が出土しているが、いずれも小破片であり、固化は不可能であった。土師質土器には内耳鍋の部体破片とみられる遺物があることから、本遺構は少なくとも中世後期以降に位置づけられよう。

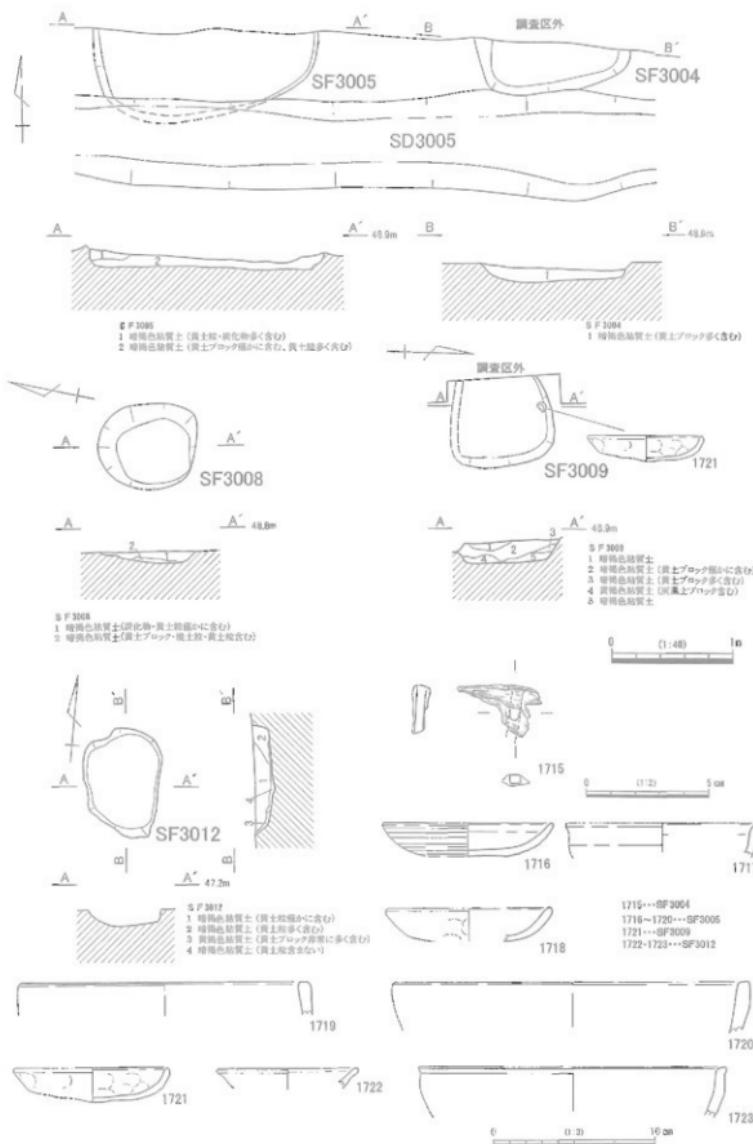


図229 3区の土坑実測図・出土遺物（1）

SF3009（図 229、図版 64）

3 区北西端の C 19 区に位置する。西側は調査区外となっており、南側は不明瞭であり、上端を検出することができなかった。平面形はややいびつな隅丸方形であると推測できる。底面は平坦で皿状となり、検出面からの深さは 0.2 m 程度であった。埋土は暗褐色粘質土を主体として、5 層に分層され、2～3 層には黄色土がブロック状に入っている。

遺物は底面付近より出土している。1721 は土師質土器の皿である。ほぼ完形品で、胎土は灰白色を呈する。内外面に指頭による調整が残り、内面は不鮮明ながらナデ調整がなされたとみられる。完形品の 1721 が 1 点のみ出土していることから、何らかの埋納行為によるものと考えられる。

遺物は 16 世紀後半～17 世紀前葉の製品とみられるため、遺構の帰属年代もその頃と考えられる。

SF3012（図 229）

3 区南部の F 23 区に位置する。平面形は不定形で、南北最大長は 0.9 m、東西最大長は 0.6 m で、検出面からの深さは 0.2 m で、やや凹凸はあるが底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、黄色土のブロックや粒子を含んでいる。

出土遺物は 1722・1723 に図示した。1722 は山茶碗の小碗である。比較的薄手で口縁部はわずかに外反する。1723 は土師質土器内耳鍋で、内輪形に分類される口縁部の破片である。外面には煤が付着する。

この他に土師質土器の小破片が出土している。出土遺物が少なく、遺構の年代比定は困難であるが、内耳鍋の年代観から 16 世紀中葉～後葉とみられる。

SF3014（図 230）

3 区南部の E 23 区に位置し、SH3002 の北側、SH3004 の西側に隣接する。平面影は隅丸長方形で、南北の長軸は 1.2 m、東西の短軸は 0.9 m である。底面は比較的平坦で、深さは 0.1 m である。埋土は暗褐色粘質土を主体として、黄色土粒子やブロックを含む。

底面付近から土師質土器、陶器の破片が出土しているが、いずれも微細な破片であり、図化は不可能であった。このうち、陶器片は瀬戸美濃産の大窯段階の皿とみられる。

出土遺物がごくわずかであり、遺構の年代比定は困難であるが、16 世紀代と捉えておきたい。

SF3017（図 230）

3 区南東部の G 25 区に位置し、SF3020 に隣接する。平面形はほぼ円形で、直径は 1.0 m である。底面がほぼ平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは 0.2 m である。埋土は暗褐色粘質土を主体とするが、南西部には黄色土のブロックを多く含む層が入り込んでいる。

出土した 1724・1725 は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。1725 は小型品で、浅いつくりの製品である。1724 は摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、口縁部は横ナデ調整が施されていたとみられる。

他にも図化不可能な土師器及び土師質土器の小片が出土している。わずかな遺物による遺構の年代比定は困難であるが、中世前期の遺構と考えられる。

SF3018（図 230、図版 31）

3 区南部の F 23 区に位置し、SH3002 及び SF3012 に接する。東側の一部は擾乱により破壊されているが、平面形はほぼ円形であったと見られ、直径は 0.8 m である。底面はほぼ平坦で皿状を呈し、検出面からの深さは 0.15 m である。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、下層には黄色土のブロックを多量

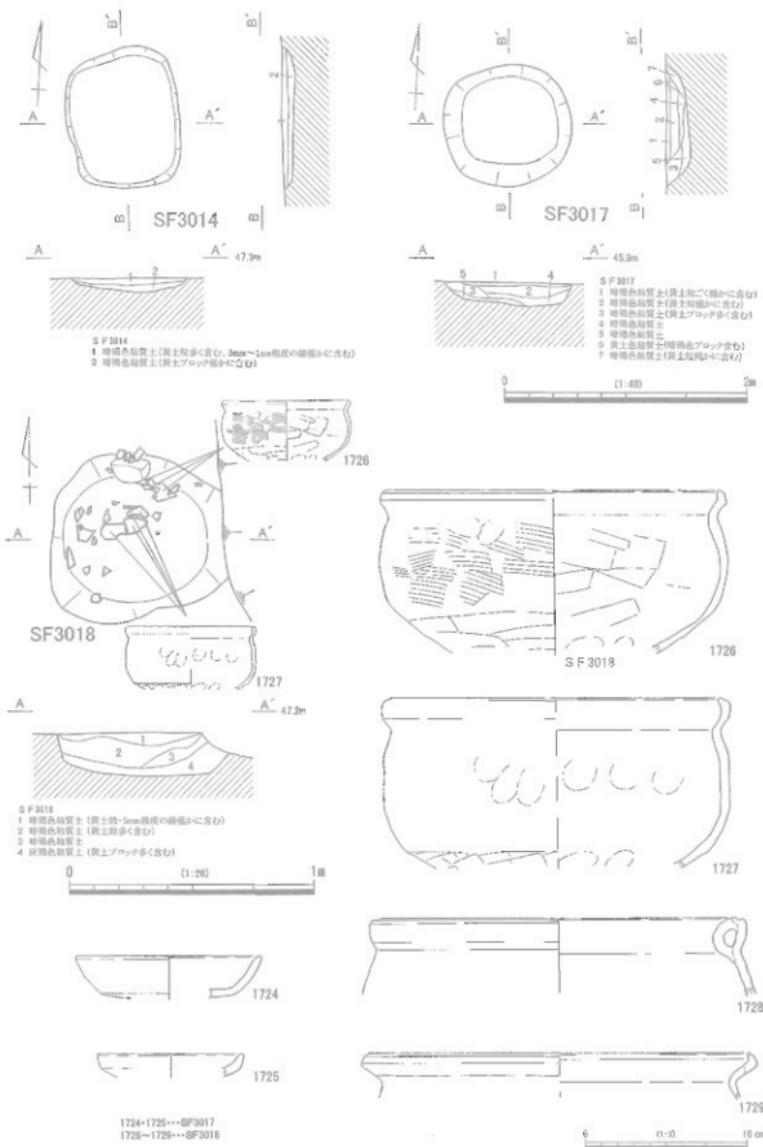


図 230 3区の土坑実測図・出土遺物 (2)

に含み、上層にも黄色土の粒子を含んでいる。遺物は遺構底部付近から内耳鍋がまとめて出土した。少なくとも4個体の破片が出土しており、土坑内に廻棄された可能性がある。

出土した内耳鍋のうち、図化が可能であったのは1726～1729の4点である。すべての字形内耳鍋に分類されるもので、他にも接合を確認することはできなかったが、多数の体部破片が出土している。1726は体部下半にヘラケズリを施し、体部上半はハケ及びナデ調整を施す。体部外面には煤が多量に付着している。1727と1728の内耳部分は同一個体である。1727は体部下半にヘラケズリが認められるものの、体部上半から口縁部にかけてナデ調整のみで仕上げられる。体部外面の下半には被熱がみられるとともに、全体的に薄く煤が付着し、底部内面は薄黒い変色がみられる。1726と比べて口縁端部が若干長くなる特徴がある。1729は口縁部破片であるが、頸部から口縁部の屈曲が他と比べてかなり強い。

これら遺物の特徴から、本遺構は15世紀中葉～16世紀中葉頃の年代観が与えられよう。

SF3019（図231）

3区南東部のE25区に位置し、SH3003の東側に隣接する。平面形は楕円形で、南北北長は0.7m、東西最大長は0.55mである。底面はほぼ平坦で、深さは0.25mである。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、下層には黄色土のブロックが多量に含まれる。底面に接して長さ20cmの礫が出土しているが、意図的に入れられたものかどうかは判然としない。

1730・1731は土師質土器の皿である。1730は非クロ成形品の口縁部の破片である。口径は8.6cmに復元される小型品である。1731はロクロ成形品であるが、摩滅がかなり激しい。胎土は橙色を呈し、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、薄手に仕上げられる。

この他、土師質土器の小破片が出土したが、図化は不可能であった。土師質土器皿の年代観から、本遺構は16世紀後葉～17世紀前葉頃の年代観が与えられよう。

SF3020（図231）

3区南東部のG25区に位置し、SF3017に隣接する。平面形はほぼ円形で、直径1.2mを測る。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは0.1mである。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、黄色土のブロックや粒子が含まれる部分もある。

遺物は多くはないが、1732を図示した。1732は渥美湖西岸の山茶碗で、口縁端部は外反せずに厚手である。

この他、土師器あるいは土師質土器の破片が出土しているが、微細な破片であり器種の判別をすることができなかった。出土遺物が僅少であり、遺構の年代を押さえるのは困難であるが、少なくとも1732が示す13世紀中～後葉以降に埋没した可能性が高い。

SF3024（図231）

3区東部のF25区に位置し、SH3004の東に位置する。平面形はほぼ円形で、直径は0.6m、検出面からの深さは0.2mである。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、黄色土のブロックや粒子を含む。

遺物は土師質土器の破片が出土したのみである。微細な破片のため器種等は明確でないが、内耳鍋の体部破片と推定されることから、本遺構は少なくとも15世紀中葉以降に埋没したと考えられる。

SF3028（図231）

3区東部のF25区に位置する。西側がトレーナーにかかっているが、平面形は円形か梢円形であったと推測できる。南北の最大径は0.6mで、皿状となる底面の検出面からの深さは0.1mである。埋土は

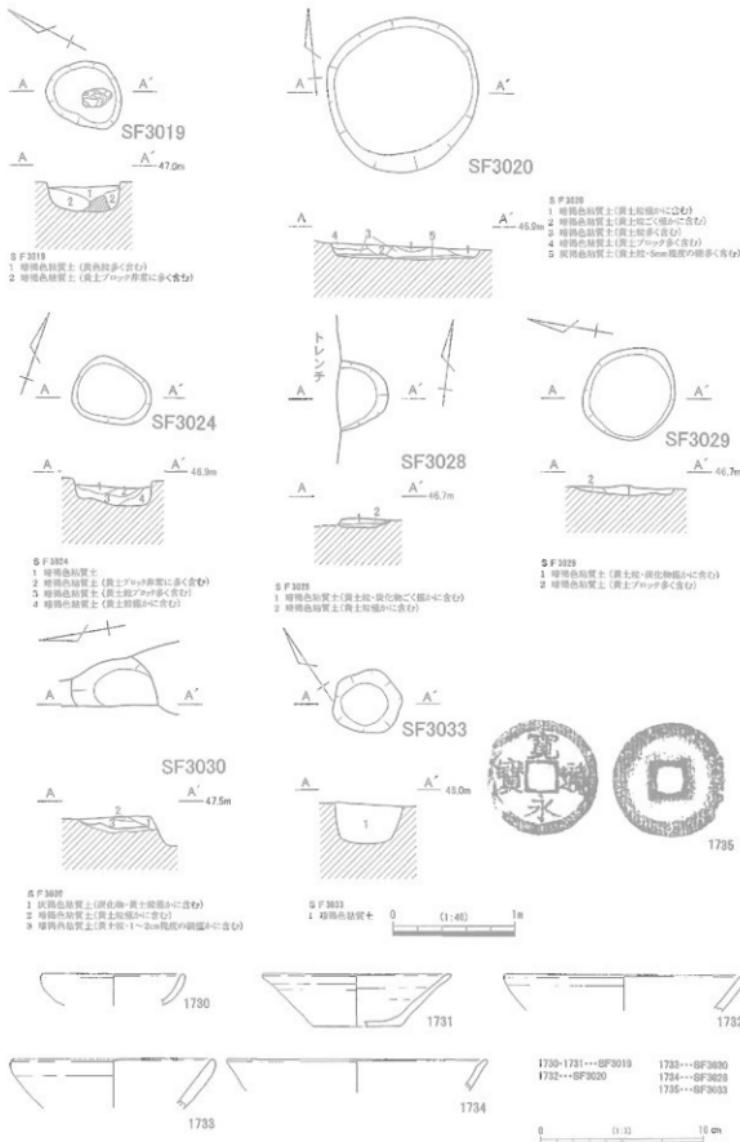


図 231 3区の土坑実測図・出土遺物（3）

暗褐色粘質土を主体とし、上層には炭化物を少量含んでいる。

出土遺物は1734の山茶碗である。渥美湖西産の口縁部破片とみられ、かなり薄手である。この他土師質土器とみられる小片が出土しているが、器種不明である。出土遺物に乏しいことから、遺構の年代比定は困難であるが、少なくとも山茶碗が示す12世紀中～後葉以降に埋没したと考えられる。

SF3029 (図231)

3区東部のF 25区に位置する。平面形は円形で、直径は0.8mである。底面は浅い皿状となり、検出面からの深さは0.05mである。埋土は暗褐色粘質土が主体で、わずかに炭化物を含み、北側には黄色土ブロックを多量に含む埋土が認められた。

出土遺物は図化が不可能な小片であり、器種を特定することはできないが、土師質土器内耳鍋とみられる破片が含まれる。このことから、本遺構は少なくとも15世紀中葉以降に埋没したものと推定される。

SF3030 (図231)

3区北部のE 23区に位置する。西側でSD3001と重複し、これを切っており、東側は擾乱によって失われている。残存している部分から平面形は円形と推測可能で、残存部の南北最大長は0.6mで、検出面からの深さは0.15mを測る。埋土は暗褐色粘質土を主体とするが、炭化物を若干量含んでいる。底面に焼土面が認められている。

1733は山茶碗の口縁部破片である。口径は12.4cmに復元され、小型化が進んだⅢ-3期に降る渥美湖西産の製品とみられる。

他に土師質土器の体部破片とみられる極めて小さな破片が出土したが、器種等の判別は不可能であった。出土遺物が少ないため、遺構の年代は判然としないが、少なくとも14世紀初頭以降に埋没したものと考えられる。3区北側には焼土面を持つ近世墓が存在することから、あるいはそれに関連する可能性もある。

SF3033 (図231、図版83)

3区東北のC 25区に位置し、大溝に伴う残存土壙に近接する。平面形はほぼ円形で、直径0.6m、検出面からの深さは0.3mである。埋土は暗褐色粘質土の単層である。

土器類は出土しなかったが、1735の寛永通宝が出土している。土坑上層から出土しており、いわゆる古寛永の特徴を有する。全体に被燃の痕跡が残ることから、火葬墓に伴う遺物と考えられる。本遺構周辺には近世墓が集中することから、17世紀中葉以降の近世墓である可能性もある。

SF4004 (図232)

4区東部のC 17区に位置する。平面形は円形で、直径は1.3mを測る。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは0.1mである。埋土は暗褐色粘質土を主体として2層に分層され、1層には炭化物や褐色ブロックを多く含んでいる。

小片であることから図示はできなかったが、1層から山茶碗類の小皿の底部が出土しており、渥美湖西産のⅢ期頃の製品とみられる。遺物が極めて少ないが、遺構の上限年代は13世紀代以降であることは間違いない。

SF4012 (図232)

4区南西のF 16区に位置するSF4013の南西に近接する。平面形はほぼ円形で、直径は0.8mを測る。

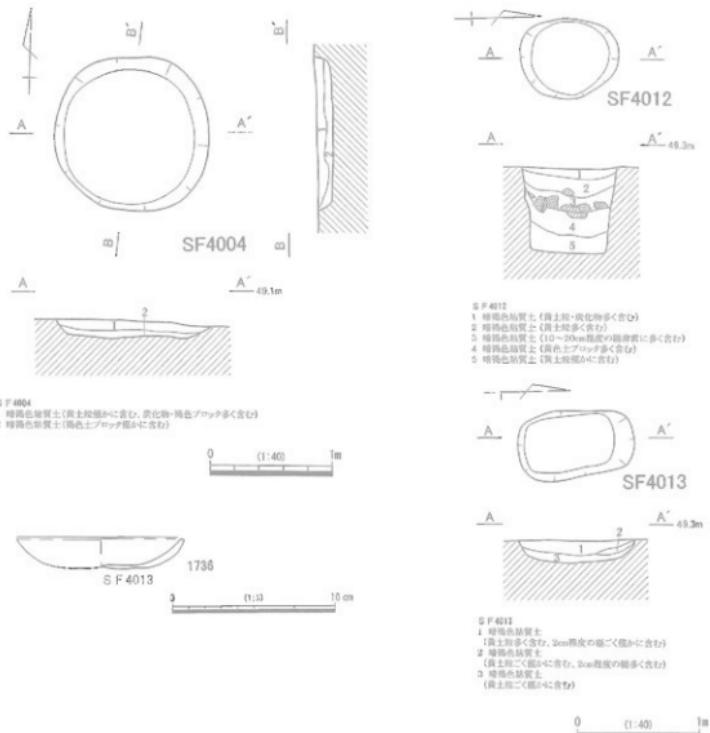


図 232 4区の土坑実測図・出土遺物

底面は平坦で、検出面から深さ 0.7 m まではほぼ円筒形に掘り込まれている。埋土は暗褐色粘質土を主体として 5 層に分層される。2・4 層は黄色土のブロックを多量に含み、また 3 層には長さ 10 ~ 20 cm ほどの礫が多量に入っていたことから、人為的に埋められている可能性が高い。

遺物は 3 層に入っていた礫とともに、常滑産の壺とみられる陶器破片、土師質土器の内耳鍋とみられる体部片が出土しているが、いずれも体部の小片であり、図示は不可能であった。これらは中世後期の所産とみられるため、遺構の年代もその時期にあたると考えられる。

SF4013 (図 232、図版 64)

4 区西南の E 16 区に位置し、SF4012 の北西に近接する。平面形は隅九長方形で、長軸は 1.0 m、短軸は 0.6 m、検出面からの深さは 0.15 m である。埋土は暗褐色粘質土を主体として、3 層に分層され、黄色土の粒子をわずかに含む。

1736は1層から出土した土師質土器の皿である。口縁部の一部が欠損している以外はほぼ完形に復元されることから、埋納品である可能性が高い。非ロクロ成型品で、胎土は肌色に近い灰白色を呈し、かなり薄手に仕上げられている。16世紀後葉～17世紀前葉頃の製品とみられ、遭難の年代を反映するものといえる。

SF6007 (図 233)

6区中央北部のG12区に位置し、SD6002によって北側を破壊されている。平面形は北側が不明であるが、不定形であったとみられ、南北の最大残存長は0.9m、東西長は0.8mを測る。検出面からの

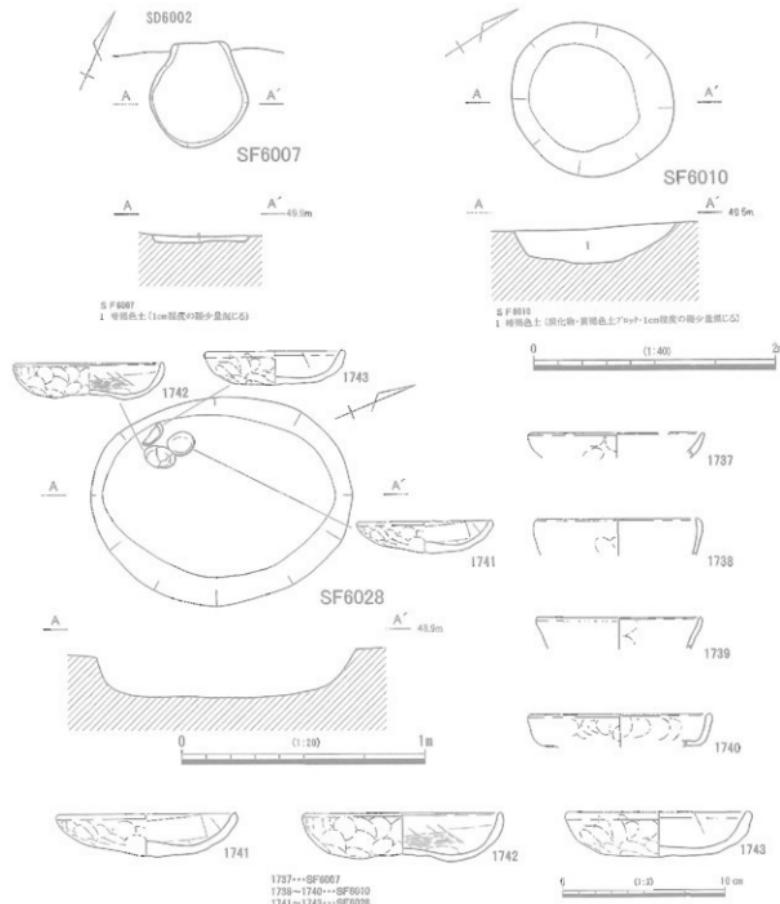


図 233 6区の土坑墓測図・出土遺物

深さは 0.05 m と極めて浅い皿状の土坑である。埋土は単層の小礫混じり暗褐色土である。

1737 は土師質土器の皿で、非ロクロ成形品の口縁部である。胎土は肌色に近い灰白色で、かなり薄手のつくりである。16世紀後葉～17世紀前葉頃の製品とみられるため、遭構の上限年代が押さえられる。本遭構と切合い関係にあり、これよりも新しい SD6002 は 18 世紀後葉～19 世紀前葉に埋没したと推定されるため、それ以前には廃絶していたと考えられる。

SF6010 (図 233)

6 区南端の I 11 区に位置し、SH6004 と重複するが、柱穴との切合がないため、前後関係の把握は難しい。平面形は円形で、直径は 1.4 m を測る。底面は浅い碗状を呈し、検出面からの深さは 0.3 m である。埋土は暗褐色土の単層で炭化物や黄色土のブロックを少量含んでいる。

1738・1739 は古代の製塙土器の坏部である。直接接合はしないが、同一個体とみられる。内外面に濃く煤が付着する。1740 は埋土上層から出土した土師質土器の皿である。非ロクロ成形品であるが、底部から体部がかなりゆがんでいる。

この他土師器が出土しているが、いずれも小破片のため図化は不可能であった。1421 の年代観から、遭構は 16 世紀後葉～17 世紀前葉に位置づけられよう。

SF6028 (図 233、図版 31・54・64)

6 区東部の H 16 区に位置する。SH6012 の北東に位置する。平面形は橢円形で南北長軸が 1.0 m、東西短軸が 0.8 m を測る。底面は皿状となり、検出面からの深さは 0.2 m である。ほぼ完形の土師質土器皿 1741 ～ 1743 が南西隅付近から出土している。これらは底面に接する形で置かれたと考えられるところから、他に出土遺物はないものの、墓坑であった可能性がある。

1741 ～ 1743 は土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形品で、内面はナデ調整、外面はかなり指頭痕が残るかなり粗雑な調整が施される。1741 の内面にはナデ調整とともに、部分的なヘラ状工具による調整が認められる。また 1742 の底部外面の中央部はほとんど未調整となっている。16 世紀後葉～17 世紀前葉までの年代観で捉えられることから、本遭構もその時期の所産と考えられる。

SF7005・SF7020 (図 234)

7 区東部の G 26 区に位置する。SF7005 と SF7020 は重複しており、SF7020 の方が新しい。また、SH7014 の南東隅の柱穴 SP7332 とも重なるが、これよりも SF7020 の方が新しい。

SF7005 の平面形は円形で、直径 1.0 m である。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは 0.2 m を測る SF7020 の平面形も円形で、直径は 0.8 m を測る。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは 0.1 m である。いずれの埋土も暗褐色粘土質の単層であった。

1744 ～ 1746 は SF7005 から出土した土師質土器の皿である。いずれも胎土が灰白色か浅黄橙色の非ロクロ成形品である。1744 と 1745 は口径 7 ～ 9 cm 程度の小型品で、1746 は口径 11.3 cm に復元される中型品である。調整は口縁部に横ナデを施す点で共通するが、1744 と 1746 は体部外面に弱い段がつくのに対し、1745 は口縁部に向かってなだらかに立ち上がる違いがある。

この他、SF7005 からは土師器・山茶碗・土師質土器、SF7020 からは土師質土器の皿とみられる破片などがそれぞれ出土しているが、小片のため詳細は不明である。

SF7005 は土師質土器皿や山茶碗の出土から、13 世紀代の年代観が与えられ、これよりも新しい SF7020 はそれ以降に位置づけられよう。

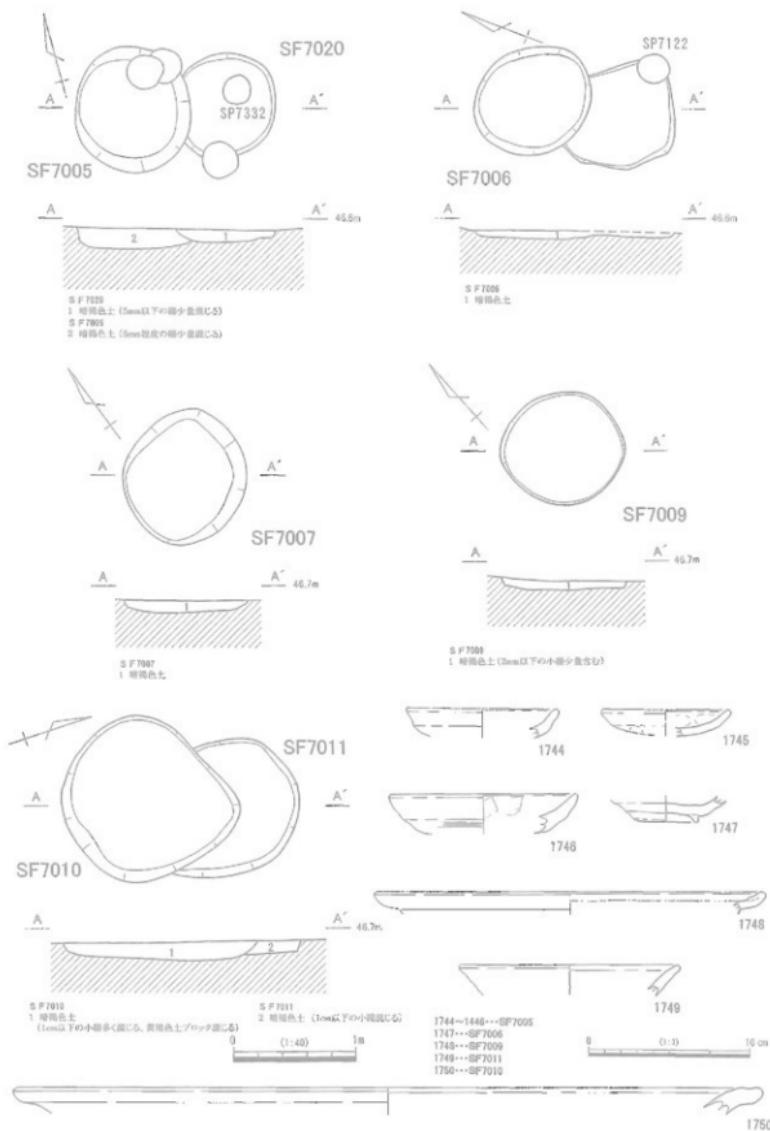


図234 7区の土坑実測図・出土遺物 (1)

SF7006 (図 234)

7 区東部の H 26 区に位置し、SF7005 の南に隣接する。平面形は円形で、直径 1.0 m を測る。底面は平坦で、検出面からの深さが 0.05 m の極めて浅い皿状となる。南側に浅い落ち込みを伴っているが、本遺構との新旧関係は明らかでない。

出土遺物は 1747 の山茶碗類の小碗の底部である。底部内面は重ね焼き痕とともに、顕著な使用痕が確認される。渥美湖西産の製品で、I - 2 期に位置づけられよう。他に土師質土器の小片が出土している。出土遺物から、本遺構には 12 世紀後葉の年代観が与えられよう。

SF7007 (図 234)

7 区南東の H 25 区に位置し、SF7009 の北に近接する。平面形はほぼ円形で、直径は 1.0 m を測る。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは 0.1 m である。

遺物は体部小片であるため図示できなかつたが、土師質土器と渥美湖西産陶器の壺が出土している。出土遺物に乏しいため、年代比定は困難で阿あるが、12 ~ 13 世紀頃の遺構と推定される。

SF7009 (図 234)

7 区南東の I 25 区に位置し、SF7007 の南に近接する。平面形はほぼ円形で、直径は 1.0 m である。底面は平坦で、検出面からの深さ 0.1 m の浅い皿状を呈する。

遺物は土師質土器の伊勢鍋 (1748) が出土している。口縁端部を図示し、口径を 23.7 cm と復元したが、摩滅も激しいため、詳細な形状、調整は不明である。13 世紀代に位置づけられるとみられる。他に出土遺物もないことから、根拠は乏しいものの、本遺構の帰属年代は 13 世紀代と推定される。

SF7010・SF7011 (図 234)

7 区の南東の I 25 区に位置し、SF7009 の西側に近接する。SF7010 と SF7011 は重複しており、SF7010 の方が新しい。SF7010 はややいびつな隅丸方形で、一辺が 1.2 m である。検出面からの深さは 0.15 m で、底面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土で、黄色土のブロックを含む。SF7011 は SF7010 に切られているため平面形は不明瞭だが、短軸が 1.2 m の梢円形と推測できる。検出面からの深さは 0.1 m である。

SF7010 からは中世陶器の壺の口縁部 (1750) が出土した。渥美窯の製品とみられ、口径 45.5 cm に復元される大型品である。SF7011 からは山茶碗の口縁部 (1749) が出土した。渥美湖西窯の製品で、口径 13.4 cm に復元される小型化が進んだ段階の III - 2 ~ 3 期に位置づけられよう。

この他土師質土器の微細な破片が出土している。これら遺物から、SF7011 は 13 世紀中~後葉、SF7010 は 12 世紀代を上限として、それよりも古くなる年代観が与えられよう。

SF7014 (図 235)

7 区南東の I 25 区に位置する。平面形は円形で、直径は 0.7 m を測る。検出面からの深さは 0.15 m で、底面がほぼ平坦な皿状となる。埋土は暗褐色土で、黄褐色ブロック及び小砾を含む。

遺物は山茶碗の口縁部破片 (1751) が出土したのみである。渥美湖西窯の III 期頃の製品と推定される。出土遺物に乏しいため、遺構年代の比定は困難であるが、13 世紀代と推定される。

SF7015 (図 235)

7 区南東の I 26 区に位置し、SF7014 の南東に近接する。平面形は円形で、直径は 0.9 m を測る。検

出面からの深さは 0.2 m で、底面がほぼ平坦な皿状となり、形態的には SF7014 と類似する。

1752 は土師質土器の皿である。摩滅が顕著で、細かい調整は不明であるが、口縁部の強い横ナデにより、体部と口縁部の境に段がつくり出されている。胎土は灰白色である。

この他土師器、須恵器、土師質土器の小破片が出土している。本遺構も出土遺物に乏しいため、遺構年代の比定は難しいが、13 世紀代と推定される。

SF7019 (図 235、図版 64)

7 区東部の G 26 区に位置し、SH7014 の柱穴 SP7071 と重複し、これよりも新しい。中央部が擾乱によつて一部破壊されている。平面形は隅丸長方形で、長軸は 1.1 m、短軸は 0.7 m を測る。底面はほぼ平坦となり、検出面からの深さは 0.3 m である。埋土は黄褐色土のブロックが混じる暗褐色粘土質である。

1753 ~ 1755 は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。1754 は口径 12.5cm に復元され、内面はナデ調整、外面は指頭痕の残るオサエ調整を施す。胎土は灰白色で、表面がかなり摩滅している。1450 は薄手に作られており、口縁部が直線的に開く形状である。1755 は器壁が厚手で、浅いつくりとなつている。口縁部に横ナデ調整が施される。

この他、土師器、土師質土器の小破片が出土している。1753・1755 は 13 世紀代の製品とみられるが、1754 は 16 世紀代に降る製品とみられるため、本遺構の年代もその時期に求められよう。

SF7021 (図 235)

7 区東部の G 25 区に位置し、SH7013・7015 に近接する。平面形はやや不整形な隅丸長方形で、南北の長軸は 3.0 m、東西の短軸は 1.3 m である。底面は緩やかな起伏があり、検出面からの深さ 0.2 m である。

1756 は土師質土器の皿である。非ロクロ成形品の口縁部破片であるが、摩滅が顕著で、調整や形状は不明瞭である。この他土師器、須恵器、土師質土器の小破片が出土している。

出土遺物に乏しいことから、遺構の年代を把握するのは困難であるが、1756 の土師質土器皿が 13 世紀代のものと考えられるため、その時期の遺構と推定される。隣接する SH7013 ~ 7015 が同時期の遺構と考えられることから、関連した遺構である可能性が高い。

SF7025 (図 235)

7 区南東部の I 28 区に位置する。平面形は円形で直径 1.0 m を測る。検出面からの深さは 0.1 m で、底面がほぼ平坦な皿状となる。埋土は炭化物及び黄褐色土ブロックを少量含む。

1757 は山茶碗での口縁部破片である。小片のため不明確であるが、口径は 13.5cm に復元される。渥美湖西産のⅢ - 2 ~ 3 期の製品であろう。

他に出土遺物がないため、遺構の時期を押さえるのは難しいが、少なくとも 13 世紀中～後葉に上限があるとみてよいだろう。

SF7026 (図 236、図版 64)

7 区東部の G 24 区に位置し、SF7027・7028 に近接する。平面形はほぼ円形で、直径は 1.0 m である。検出面からの深さは 0.2 m で、底面がほぼ平坦となる。埋土上層には黄褐色土のブロックを多く含む。

出土遺物は 1758 ~ 1761 に図示した。1758 ~ 1760 は土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形

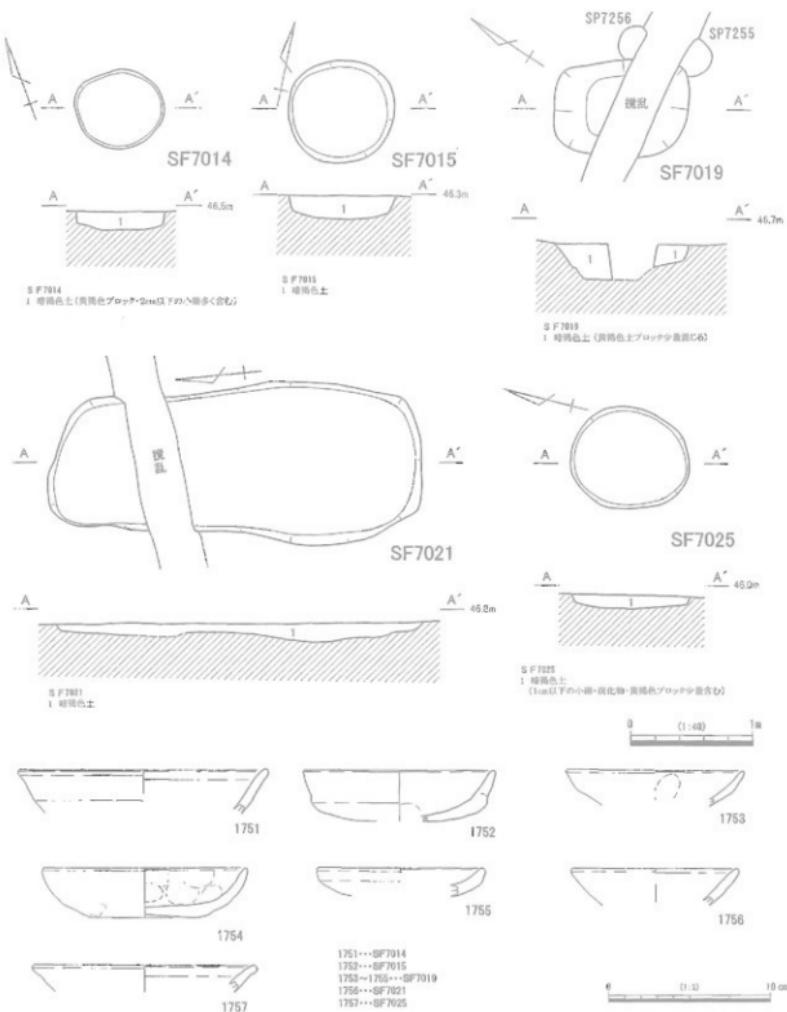


図 235 7区の土坑実測図・出土遺物 (2)

品で、口径8～9cm前後に復元される小型品である。内面ナデ調整、外面は指頭によるオサエ調整を基本としており、胎土は灰白色で、薄手のつくりである。1761は美濃窯の陶器で、灰釉筒形香炉である。登窯7小期に位置づけられる製品である。これら出土遺物の様相から、遺構は18世紀中葉の年代観が与えられよう。

SF7029（図236）

7区西部のG21区に位置する。平面形は円形で、直径は1.0mを測る。検出面からの深さは0.1mと極めて浅く、底面は概ね平坦な皿状となる。

1762・1763はいずれも渥美瀬西窓の山茶碗で、1762は口縁部破片、1763は底部破片で高台が欠損している。双方、Ⅲ期頃の製品と推定される。

この他、小片のため図示不可能な遺物が数点出土しているが、その中に古志戸呂製品とみられる甕類の破片や同じ時期の製品とみられる天目茶碗の小片がある。出土遺物が乏しいため、遺構の時期を把握するのは困難であるが、少なくとも15世紀中～後葉以降に埋没したと考えられる。

SF7031・SF7032（図236、図版64）

7区西部のH21区も位置し、SF7033の北側に隣接する。SF7031とSF7032は重複し、SF7032の方が新しい。SF7031の平面形は円形で、直径は1.1mを測る。検出面からの深さは0.15mで、底面はほぼ平坦な皿状となる。埋土は暗褐色土を主体とし、下層には炭化物が少量混じる。SF7032はSF7031とほぼ同様の規模形状であり、直径1.1m、検出面からの深さは0.1mである。埋土は暗褐色土の單層であるが、黄褐色土のブロックを少量含む点で、SF7031と若干の相違がある。

1765・1766はSF7031から出土した土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形品で、胎土は灰白色を呈する。1765は口径12.9cmに復元される中型品で、口縁部の強い横ナデにより、体部との境に明瞭な段がつくり出される。1766は口径10.5cmに復元される小型品で、口縁部は横ナデされるものの、体部から口縁部は緩やかに湾曲する。1764はSF7032から出土した土師質土器の皿で、やはり非ロクロ成形品である。胎土は密で、浅黄橙色を呈する。口縁部は横ナデが観察されるが、やや厚いつくりとなっている。

この他SF7031からは土師器、須恵器、土師質土器の小片、SF7032からは土師質土器の小片が出土している。SF7031出土遺物は13世紀代、SF7032出土遺物は16世紀代に位置づけられる製品とみられることから、遺構もその時期のものと推定される。

SF7033（図236）

7区西部のH21区に位置し、SF7031・7032の南に隣接する。平面形は円形で、直径は1.0mである。検出面からの深さは0.1mで、底面が平坦な皿状を呈する。埋土は暗褐色土で、炭化物を少量含んでいる。

埋土上層から1767の龍泉窯系の青磁蓮弁文折縁皿が出土している。薄い胎土に厚く緑灰色の釉がかかり、体部外面に蓮弁文が施文されている。13世紀後葉～14世紀前半に位置づけられる製品であることから、本遺構の時期もその頃と考えられる。

SF7035・SF7036（図237）

7区西部のG20区に位置している。SF7035とSF7036は重複し、SF7036の方が新しい。またSH7003とも重複しており、SF7036がSH7003南西隅の柱穴を破壊している。SF7035の平面形は円形で直径1.1m、検出面からの深さは0.15mである。埋土は暗褐色土で、黄褐色土のブロックを少量含

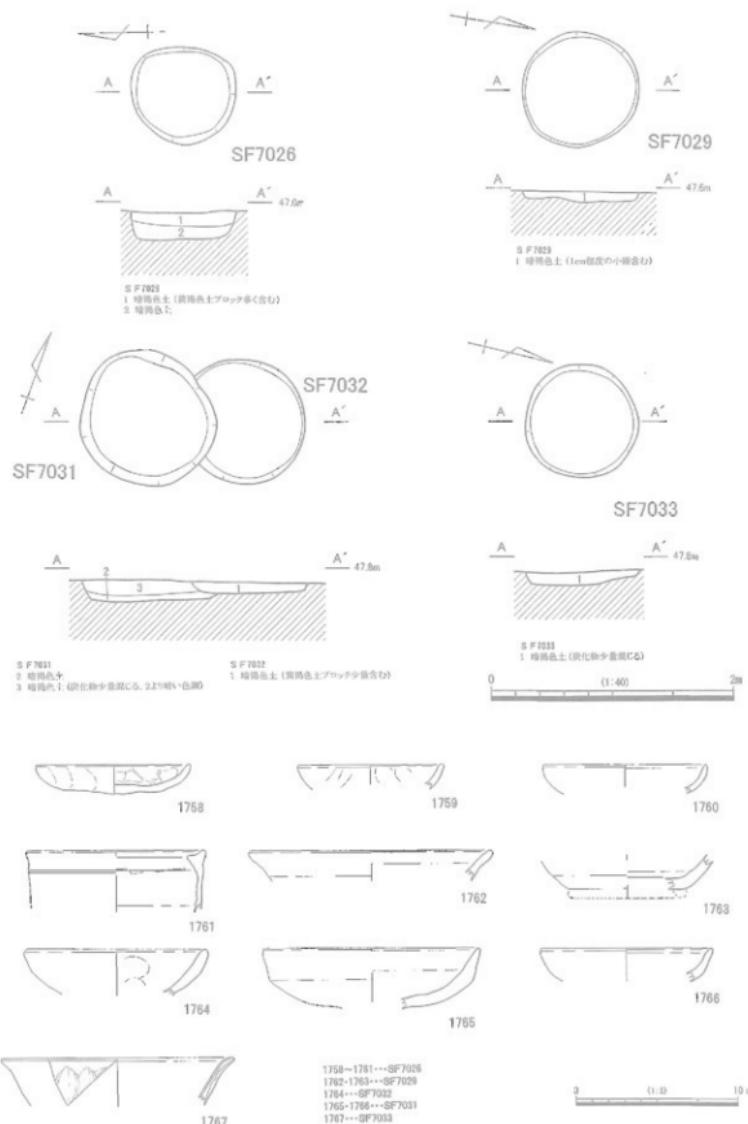


図 236 7区の土坑実測図・出土遺物 (3)

む。SF7036 の平面形は不整形な円形で、直径は 0.7 m である。底面は椀状を呈し、検出面からの深さは 0.3 m である。埋土には黄褐色土のブロックを多く含むとともに、炭化物も認められる。前述のように SH7003 南西隅の柱穴を破壊しているが、位置的にはほぼ重なる位置にあるため、SF7036 は柱の抜き取り穴である可能性もある。

遺物は SF7036 の埋土から出土した土師質土器の皿とみられる破片があるが、図示は不可能な程の小片である。これ以外に出土遺物がないことから、遺構の時期を把握するのは困難であるが、16 世紀代～近世にかけての遺構である SH7003 の柱穴を SF7036 が破壊していることから、これよりも新しい時期の遺構であることは間違いない。SF7035 はそれよりも古い段階の遺構であるが、埋土や遺構の形状などから、中世の遺構と推定される。

SF7039（図 237）

7 区西部の G～H 20 区に位置する。SH7002 と重複し、南西隅の柱穴 SP7649 を切っていることから、本遺構の方が新しいと理解される。平面形はやや不整形な隅丸長方形で、東西の長軸は 2.2 m、南北の短軸は 1.6 m である。検出面からの深さは 0.2 m で、底面はほぼ平坦となっている。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、上層には黄褐色土のブロック及び小礫を含んでいる。

1768～1770 は山茶碗類で、いずれも渥美湖西窯の製品である。1768・1769 は山茶碗の口縁部破片、1770 は小皿の口縁部破片である。Ⅲ期頃に位置づけられよう。1771・1772 は土師質土器の皿で、いずれも非クロコ成形品である。1772 は小型品で口縁部に横ナデが認められる。

この他、山茶碗・土師質土器の破片が出土しているが、図示した遺物を含めて 13 世紀代頃のものが大半とみられる。しかし、前述のように本遺構は 16 世紀代～近世の遺構である SH7002 よりも新しい遺構であることが明らかであり、近世の遺構と判断される。

SF7040（図 237）

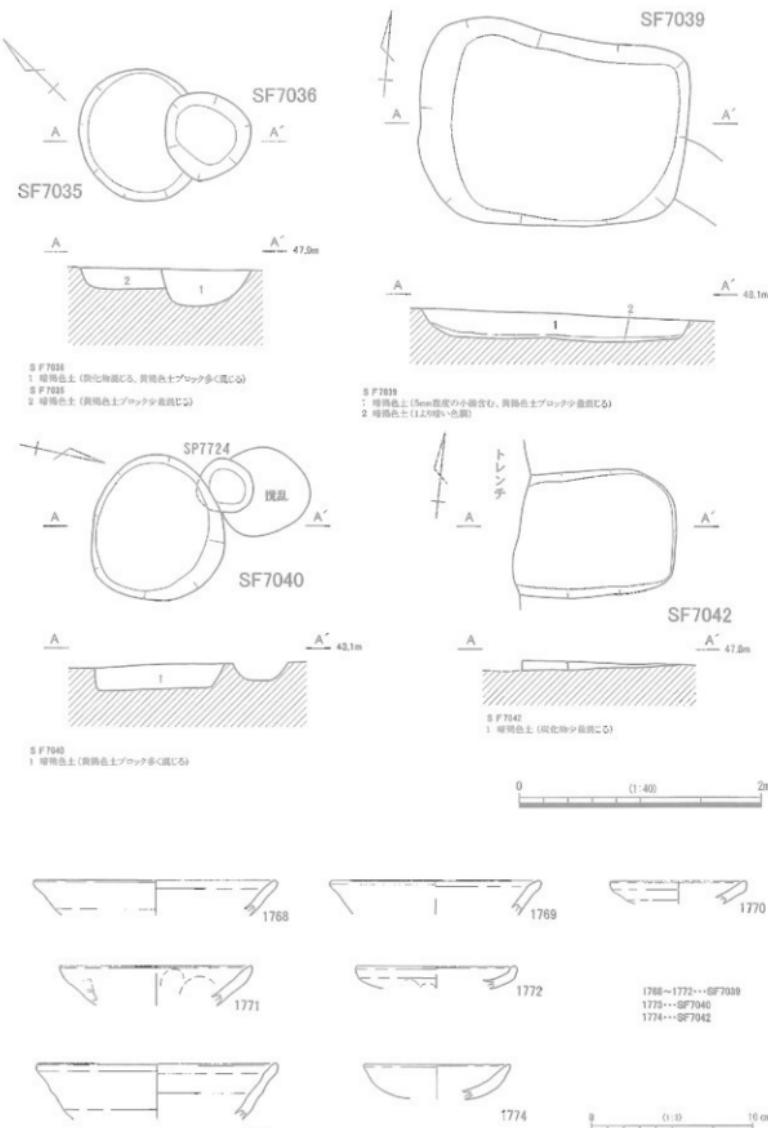
7 区西部の H 20 区に位置する。SF7039 の南に隣接し、SH7008 の柱穴 SP7724 を切ることから、これよりも新しいと考えられる。平面形はほぼ円形で、直径は 1.1 m である。検出面からの深さは 0.2 m を測り、底面は平坦となる。

1773 は山茶碗で、渥美湖西窯の口縁部の破片である。Ⅲ期頃に位置づけられよう。この他、土師器・山茶碗の小破片が出土している。出土遺物は 13 世紀代の様相を示すが、16 世紀代の建物跡と推定される SH7008 の柱穴 SP7724 を切っていることから、本遺構の時期は 16 世紀代以降と判断される。

SF7042（図 237）

7 区西部の G 21 区に位置する。隣接する SF7043 と並ぶような位置関係にあり、規模や形状も類似するため、関連性が高いように思われる。トレンチによって西側が破壊されているが、平面形は隅丸長方形と推測できる。残存している東西の長軸は 1.3 m、南北の短軸は 1.0 m である。検出面からの深さは 0.05 m と極めて浅く、底面は平らであるが、東側は上端が明らかでなくなるほど浅くなっている。埋土の暗褐色土には炭化物が少量混じっている。

1774 は土師質土器の皿である。全体的に摩滅が激しく調整などは不明瞭だが、口縁部にわずかな横ナデが認められる。底部内面には煤が付着する。他に土師質土器とみられる小片が出土している。遺物の年代観から、本遺構は 13 世紀代の遺構と推定される。



SF8002(図238、図版64)

8区東部のF～G 34区に位置する。SF8003・SF8006の南に隣接する。平面形は円形で、直径は1.7mを測り、検出面からの深さは0.05mと極めて浅い皿状となる。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、一部に黄色土のブロックを含む黒褐色粘質土が入り込んでいる。

1775は口縁部破片であるが、山茶碗類の小碗であろう。渥美湖西産のI～2期の製品とみられる。1776・1777は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。1776は口径10.4cmに復元される小型品である。1777は胎土が灰白色を呈し、表面はかなり摩滅しているが、外面は指痕痕が残る粗い調整、内面はナデ調整が施される。口縁部の強い横ナデによって、体部外面に段がつくり出される。1778は土師質土器の伊勢鍋の口縁部破片である。外面には煤が厚く付着している。

この他、土師器・土師質土器の小片が出土地としている。出土遺物は12世紀代に遡る遺物も含むが、ほぼ13世紀代に位置づけられることから、造営の年代もその時期にあたると推定される。

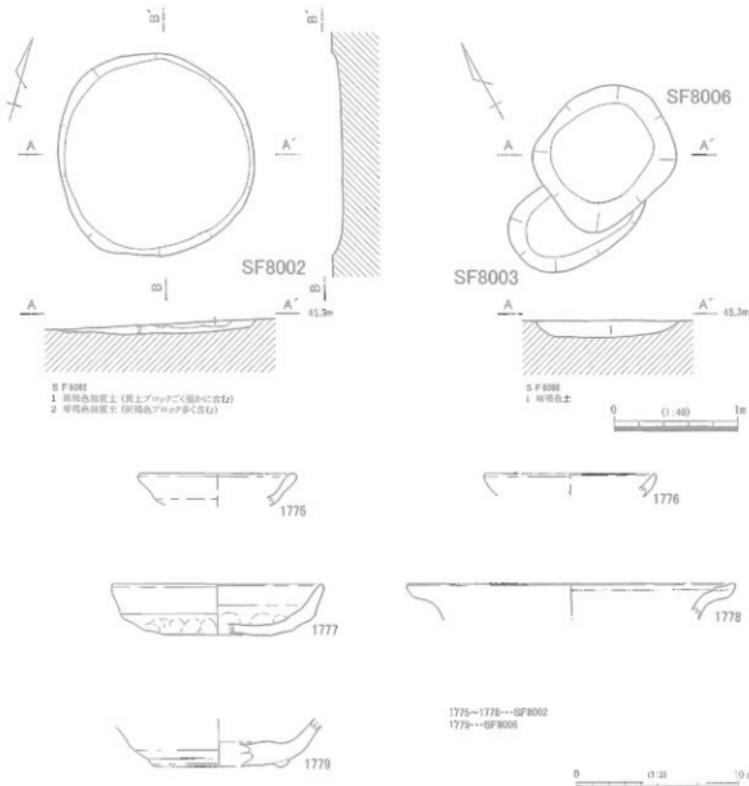


図238 8区の土坑実測図・出土遺物

SF8003・SF8006 (図 238)

8区東部のF 34 区に位置し、SF8002 の南に隣接する。SF8003 と SF8006 は重複し、SF8006 の方が新しい。SF8003 は一部が SF8006 に切られるため、形状は明確でないが、平面形は長軸が 1.2 m、短軸が 0.7 m 程度の楕円形になると推定される。検出面からの深さは 0.15 m である。SF8006 の平面形はややいびつな隅丸方形で、一辺が 1.1 m の規模である。底面は緩やかな碗状となり、検出面からの深さは 0.1 m である。

1779 は渥美湖西産の山茶碗の底部破片である。高台がかなり低く、底部内面は使用による摩滅が顕著である。Ⅲ-2期の製品であろう。他に出土遺物はなく、遺構の年代を把握するのは難しいが、13世紀中葉頃に位置づけられると考えられる。SF8003 は SF8006 に若干先行する時期になると推定される。隣接する SF8002 も同時期の遺構とみられることから、関連する遺構である可能性が高い。

SF9002 (図 239)

9区中央のD 28 区に位置し、SF9001・SF9005 に隣接する。平面形は隅丸長方形で、東西の長軸は 1.3 m、南北の短軸は 1.1 m である。底面は平坦で、整面をほぼ垂直に掘り込んでいる形状で、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は暗褐色粘質土を主体とするが、上～下層にわたって黄色土のブロックや粒子が多量に含まれることから、人為的に埋められている可能性が高い。土坑中央部の底面からやや浮いた部分で 1780 の内耳鍋が出土している。破損した状態ではあったが、底部の一部を除き、ほぼ完形近くに復元されることから、まとめて遺構内に残されたものと考えられる。

1780 は土師質土器の内耳鍋で、くの字形に分類されるものである。口縁部内面には 2カ所の内耳が取り付けられている。口縁端部の内外面は横方向のナデ調整が行われ、体部外面上半はハケ調整、体部外面下半から底部にかけてはヘラケズリ調整、底部外面の中央部周辺はナデ調整が施される。体部内面

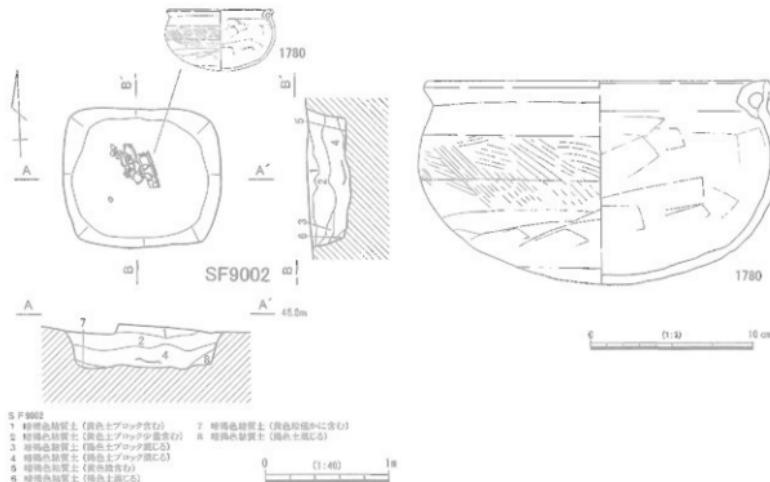


図 239 SF9002 實測図・出土遺物

は全体的にナデ調整が施されるが、一部ヘラ状工具による調整も観察される。体部外面には煤が多く付着し、内面底部周辺には煮炊きした内容物が焦げ付いた痕跡が観察される。

この他に常滑産とみられる壺の体部破片が出土している。遺物の年代観から、本遺構は15世紀中葉～16世紀中葉頃に位置づけられる可能性が高い。

SF0031（図240）

10区東部のI 34区に位置する。平面形は円形で直径は1.0mを測る。検出面からの深さは0.1mで、底面はほぼ平坦な浅い皿状を呈する。

1781は埋土上層から出土した片口鉢の底部である。高台が高くつくり出され、底部内面は使用による摩滅が顕著である。尾張（知多）産の製品とみられ、常滑5型式頃に位置づけられるものであろう。

この他、山茶碗・土師質土器皿の小片が出土している。1781を手かがりとすれば、本遺構は13世紀中葉を中心とした時期の範疇で捉えられるものであろう。

SF0032・SF0033・SF0035（図240）

10区東部のI 34区に位置する。SF0032・SF0033・SF0035が重複して検出され、新旧関係はSF0035が最も新しく、次いでSF0032・SF0033が最も古い。

SF0035の平面形は梢円形で、長軸が0.7m、短軸が0.6mである。検出面からの深さは0.3mで、底面は碗状となる。SF0032の平面形は不定形な形状で、長軸は1.2m、短軸は0.7mを測る、検出面からの深さは0.05mと極めて浅く、底面はほぼ平坦となる。SF0033は平面形がやや不整形な隅丸長方形で、長軸は2.4m、短軸は1.8mを測る。検出面からの深さ1.1mである。埋土は4層に分層され、1層が黄色土粒子及び褐色土のブロックを含む暗褐色土、2～4層は黒褐色土が堆積していた。

1782～1784はSF0033から出土した山茶碗類で、いずれも渥美湖西産の製品である。1782は山茶碗の口縁部の破片、1783は山茶碗底部の破片である。いずれもⅡ期頃に位置づけられるものであろう。1784は小皿である。小型、扁平化が著しいⅢ～Ⅳ期頃に位置づけられよう。

この他、SF0033からは須恵器・土師器・土師質土器などが出土しているが、SF0032の出土遺物は皆無であり、SF0035からは土師質土器の小片が1点出土したのみである。

SF0033は出土遺物から、13世紀中葉頃の遺構と判断される。SF0032・SF0035は新旧関係からSF0033が埋没した後の遺構であるが、出土遺物が乏しいため、時期は不明確である。

SF0036・SF0042（図240）

10区東部南端のJ 33区に位置する。SF0036・SF0042は重複して検出され、SF0036の方が新しい。SF0036の平面形は不定形で、長軸は0.6m、短軸は0.5mを測る。検出面からの深さは0.2mである。底面は緩やかな碗状となる。埋土は黒褐色土を主体とし、2層に分層される。1層には小砾や木片、3層には10～15cm程度の礫を多く含む。SF0042の平面形は不定形で、長軸は1.0m、短軸は0.5mである。底面は不規則な凹凸があり、検出面からの深さは0.15mである。埋土は黒褐色土を主体として、2層に分層される。

遺物はSF0036の検出面から土師質土器の破片が1点出土している。図示は不可能であったが、13世紀代頃の土師質土器の皿と推定されることから、SF0036は少なくとも13世紀以降に位置づけられ、SF0042はそれに先行するものと考えられる。

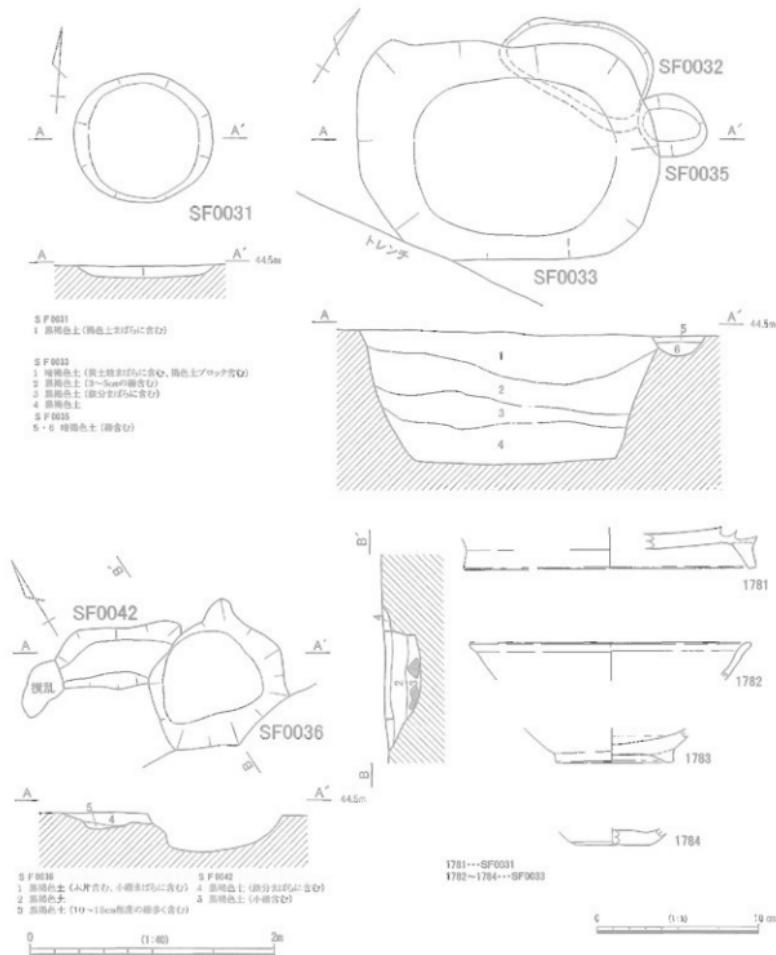


図 240 10 区の土坑実測図・出土遺物

表 22 土坑出土 土器・陶磁器觀察表 (1)

表 23 土坑出土 土器・陶器類觀察表 (2)

地番	場所名	種類	基盤	蓋地	外形・施式	口径 (cm)	底径 (cm)	高台径 (cm)	高台径 (cm)	頂部高	輪廓	色調	備考
1711	SF2011	土器買土器	盤	青白	直口	(10.2)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1712	SF2011	近世鐵器	盤	深灰	直口	(12.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐 / 黄褐	
1713	SF2013	土器買土器	盒	青白	直口	9.5	9.5	2.15	3.4		圓錐形	淡黃褐	
1714	SF2020	山茶瓶	瓶	深黃褐色	直 - 1	(15.0)				1.2	圓錐形	淡黃褐	
1716	SF2005	近世鐵器	刀柄	青白	直口	(10.4)	4.8	2.05	1.9	圓錐形	淡黃褐	淡黃褐 / 淡黃	
1717	SF2005	鉢形器	青白	直口	直口	(11.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1718	SF2005	土器買土器	皿	青白	直口	(9.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1719	SF2005	土器買土器	內耳鍋	青白	內耳形	(16.5)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1720	SF2005	土器買土器	內耳鍋	青白	內耳形	(21.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	外側鐵付器
1721	SF2005	土器買土器	皿	青白	直口	9.3	7.1	2.1	0.15	圓錐形	淡黃褐	淡黃褐	
1722	SF2012	山茶瓶	小瓶	青白	直口	(5.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1723	SF2012	土器買土器	內耳鍋	青白	內耳形	(16.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	スヌ付器
1724	SF2005	土器買土器	皿	青白	直口	(11.3)	0.8			0.15	圓錐形	淡黃褐	
1725	SF2011	土器買土器	皿	青白	直口	(8.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1726	SF2011	土器買土器	內耳鍋	青白	内字形	(20.5)				0.15	圓錐形	淡黃褐	外側鐵付器
1727	SF2011	土器買土器	內耳鍋	青白	内字形	(20.3)				0.15	圓錐形	淡黃褐	外側鐵付器
1728	SF2011	土器買土器	內耳鍋	青白	内字形	(21.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	外側鐵付器
1729	SF2011	土器買土器	內耳鍋	青白	内字形	(23.4)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1730	SF2011	土器買土器	皿	青白	直口	(8.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1731	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(11.5)	(5.2)	3.2	0.15	圓錐形	淡黃褐		
1732	SF2020	山茶瓶	瓶	青白	直口	(14.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1733	SF2013	土器買土器	皿	青白	直口	(12.4)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1734	SF2020	山茶瓶	瓶	青白	直口	(15.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1735	SF2013	土器買土器	皿	青白	直口	(10.1)	0.0	1.0	0.15	圓錐形	淡黃褐		
1736	SF2007	土器買土器	皿	青白	直口	(10.6)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1737	SF2007	土器買土器	皿	青白	直口	(11.5)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1738	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(10.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1739	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(10.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1740	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(11.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1741	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(10.8)	6.7	2.4	0.15	圓錐形	淡黃褐		
1742	SF2020	土器買土器	皿	青白	直口	(11.0)	5.05	2.3	0.15	圓錐形	淡黃褐		
1743	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(11.1)	6.05	2.75	0.15	圓錐形	淡黃褐		
1744	SF2005	土器買土器	皿	青白	直口	(9.2)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1745	SF2005	土器買土器	皿	青白	直口	(7.6)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1746	SF2005	土器買土器	皿	青白	直口	(11.3)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1747	SF2006	山茶瓶	小瓶	青白	直口	(10.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1748	SF2006	山茶瓶	伊勢口	青白	直口	(23.7)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1749	SF2011	山茶瓶	瓶	青白	直口	(13.4)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1750	SF2010	中腹鐵器	皿	青白	直口	(14.5)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1751	SF2014	山茶瓶	瓶	青白	直口	(15.2)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1752	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(11.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1753	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(10.9)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1754	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(12.0)	6.05	3.05	0.15	圓錐形	淡黃褐		
1755	SF2010	土器買土器	皿	青白	直口	(10.2)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1756	SF2021	土器買土器	皿	青白	直口	(10.2)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1757	SF2025	山茶瓶	瓶	青白	直口	(13.6)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1758	SF2025	土器買土器	皿	青白	直口	(9.0)	6.15	1.75	1.5	0.15	圓錐形	淡黃褐	
1759	SF2026	土器買土器	皿	青白	直口	(9.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1760	SF2026	土器買土器	皿	青白	直口	(9.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1761	SF2026	土器買土器	皿	青白	直口	(10.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1762	SF2025	山茶瓶	瓶	青白	直口	(10.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1763	SF2025	山茶瓶	瓶	青白	直口	(14.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1764	SF2025	土器買土器	皿	青白	直口	(10.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	馬台次頭
1765	SF2025	山茶瓶	瓶	青白	直口	(12.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1766	SF2021	土器買土器	皿	青白	直口	(10.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1767	SF2025	質造鐵器	鍔	青白	直口	(14.1)				0.15	圓錐形	淡黃褐 / 灰褐色	馬牙付鉗頭
1768	SF2025	山茶瓶	瓶	青白	直口	(14.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1769	SF2025	山茶瓶	瓶	青白	直口	(12.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1770	SF2025	山茶瓶	小瓶	青白	直口	(5.2)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1771	SF2020	土器買土器	皿	青白	直口	(11.7)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1772	SF2020	土器買土器	皿	青白	直口	(9.7)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1773	SF2040	山茶瓶	瓶	青白	直口	(14.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1774	SF2042	土器買土器	皿	青白	直口	(5.9)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1775	SF2002	山茶瓶	小瓶	青白	直口	(1-1)				0.15	圓錐形	淡黃褐 / 灰褐色	馬牙付鉗頭
1776	SF2002	土器買土器	皿	青白	直口	(10.4)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1777	SF2002	土器買土器	皿	青白	直口	(12.0)	(5.4)	(3.1)	0.15	圓錐形	淡黃褐		
1778	SF2002	土器買土器	伊勢口	青白	直口	(19.0)				0.15	圓錐形	淡黃褐	外側スヌ付器
1779	SF2006	山茶瓶	瓶	青白	直口	(1-2)				0.15	圓錐形	淡黃褐	
1780	SF2006	土器買土器	內耳鍋	青白	内字形	20.8				(7.5)	圓錐形	淡黃褐	
1781	SF2031	中腹鐵器	片狀	青白	直式					(12.0)	圓錐形	淡黃褐	
1782	SF2033	山茶瓶	瓶	青白	直口	(17.2)				(17.0)	圓錐形	淡黃褐	
1783	SF2033	山茶瓶	瓶	青白	直口	(16.0)				(16.0)	圓錐形	淡黃褐	
1784	SF2033	山茶瓶	小瓶	青白	直口	(12-2)				(4.6)	圓錐形	淡黃褐	

9. 埋葬遺構

(1) 埋葬方法と年代

中屋遺跡の土坑のうち、人骨が遺存していることから埋葬遺構（墓）であると判断される場合がある。人骨の遺存していない場合においても、副葬品の六道鏡や土師質土器皿、火打金（火打鎌ともいう）、キセルなどが副葬品として納められた状況が認められれば、やはり埋葬遺構と判断できる。以下の遺構については、上記の根拠に基づき、中世後期から近世中期（15世紀中葉から18世紀前半から中頃）の埋葬遺構と判断した。

遺構の年代については、六道鏡の錢種構成や陶磁器・土師質土器皿の編年などを根拠としたが、もともとこの時期の墓には副葬品は少いこともあり、比較的多くに共通してみられる次のような六道鏡の錢種構成の変化に重きをおいた。

- 1 渡来鏡で構成
- 2 渡来鏡と模彷鏡で構成
- 3 渡来鏡もしくはその模彷鏡と古寛永通宝（以下、古寛永に略）で構成
- 4 渡来鏡もしくはその模彷鏡と古寛永、文鏡（背に文を入れる）で構成
- 5 渡来鏡もしくはその模彷鏡、古寛永、文鏡と新寛永通宝（以下、新寛永に略）で構成
- 6 古寛永のみで構成
- 7 古寛永と文鏡で構成
- 8 古寛永、文鏡と新寛永で構成
- 9 文鏡と新寛永で構成
- 10 新寛永のみで構成
- 11 新寛永と鉄製寛永通宝（以下、鉄鏡に略）で構成

錢種構成の変化による年代の基準は、古寛永の铸造は寛永13（1636）年から明暦2（1656）年までであり、古寛永出現以前と以後の基準となりえる。つまり、上記1類と2類は、寛永13年以前である。文鏡の铸造は寛文8（1668）年から、鉄鏡一文鏡の铸造は元文4（1739）年である。これらのことによつて、使用年代の幅を考慮し、遺構の年代決定の指針となる。

埋葬方法については、火葬と土葬の違いが大きい。火葬には、掘削した穴に燃料となる木材を組んで遺体を荼毘にふし、骨となった遺体にそのまま土をかけて埋める荼毘墓と称すべき墓がある。荼毘にふされた骨は木炭や焼けて脆くなり、落下した焼土とともに土坑から検出される。土坑の周囲の壁は火熱を受けていることもある。火熱を受けた部分が当時の表面や底面である。棺のまま荼毘に付した場合には、納棺の際打ち付けたと考えられる釘や鎚が出土することもある。このような例が、本遺跡にも認められた。別の火葬墓には、荼毘を別の火葬施設（火葬場）で行い、収骨し土坑に納める埋め墓がある。この場合、木炭や焼土は認められない¹、土坑の周囲の壁は火熱を受けていない。

本遺跡の土葬の場合、土坑の大きさから考え、屈葬と考えられる。おおむね遺体は北枕西向きの原則に則っていたと考えられる。

墓標があったか、無かったかという点では、SX2009の礫が自然石による墓標と考えられる。同じ頃一石五輪塔など庶民の供養塔婆が普及していたが、これは移動しやすく、改葬の際、移動している可能性がある。本遺跡の埋葬遺構が石塔を伴ったかどうかの判断は、保留しておきたい。

(2) 遺構と遺物

SX1005 (図 241・242、図版 23・25・65～67)

1 区の北西部に位置する茶見墓である。墓坑の形状は、南北方向を長軸とする長さ 110 cm・幅 84 cm の隅丸長方形で、深さは 8 cm 程しか残存しない。底部中央を中心に被熱による赤化面が認められ、その上面には多量の炭化物と人骨が検出された。人骨は細片となって、墓坑全体に散乱した状態で検出されしており、南西部では齒が出土している。

副葬品としては、土師質土器皿（1785）は、約 2 分の 1 個体づつに分かれ、墓坑南側の中央と東端の 2ヶ所から出土している。明確な被熱の痕跡は認められないことから、破碎した皿を火葬後に分けて納めたものと推測される。キセル（1786）は、雁首と吸口の破片で、墓坑中央から出土している。火皿の下に補強体が設けられておらず、吸口にも肩がないなど、やや新しい様相を呈している。火打金（1787）は、いわゆる山形のタイプで、キセルの東側から出土している。中央やや南東寄りの場所からは、古寛永（1788～1791）が 4 枚出土している。重なって銹着した状態で発見されており、外側になる 1788 の表と 1791 の裏には布目の痕跡が確認できる。布に包んだり、袋に入れた状態で納められた可能性が高い。

錢種は古寛永のみで構成されているものの、キセルには 18 世紀以降主流となる特徴が認められることがから、埋葬年代は 17 世紀後半から 18 世紀にかけての時期と推測される。



図 241 埋葬遺構配図 (1 区)

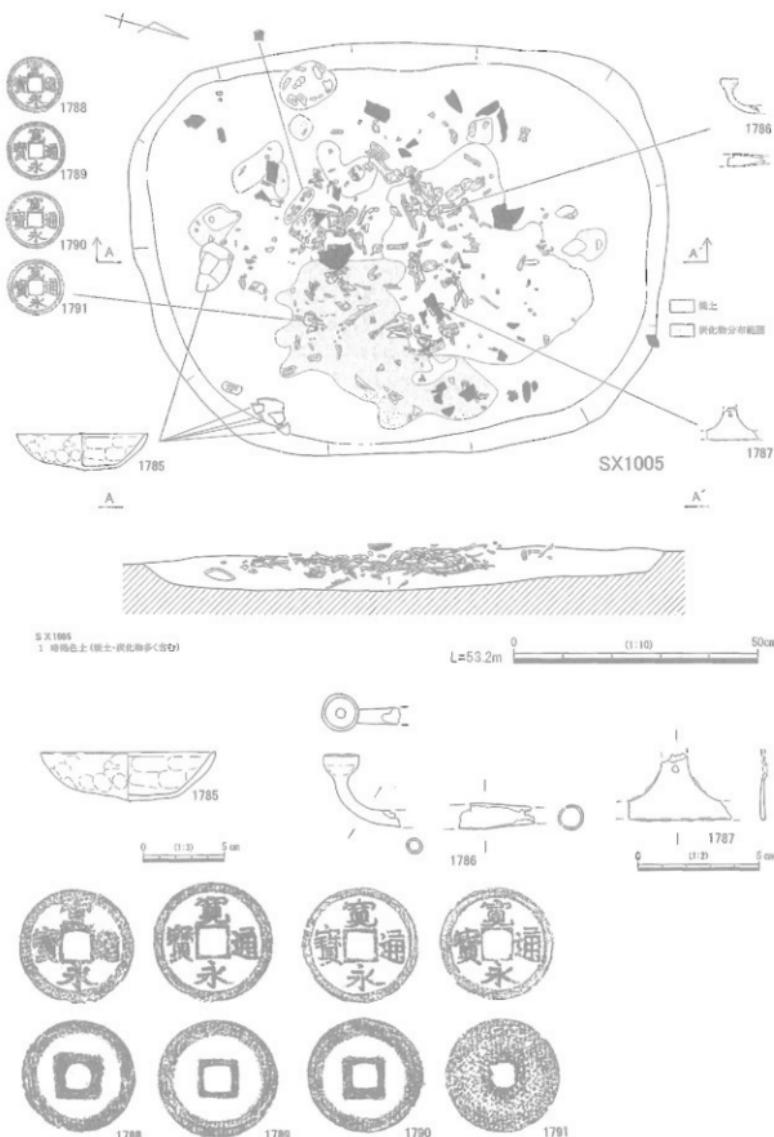


図 242 SX1005 実測図・出土遺物

SX1006 (図 241・243、図版 67)

SX1005 の西側約 1.6 m に隣接する、木棺墓または直葬墓である。長径 82 cm・短径 60 cm の楕円形で、上面が大きく削平され、深さは 7 cm 程しか残存しない。SX1005 と同様に、南北方向を長軸とする。底面および埋土中から、焼土や炭化物は確認されていない。人骨も、墓坑の東側で小片が発見されたのみである。

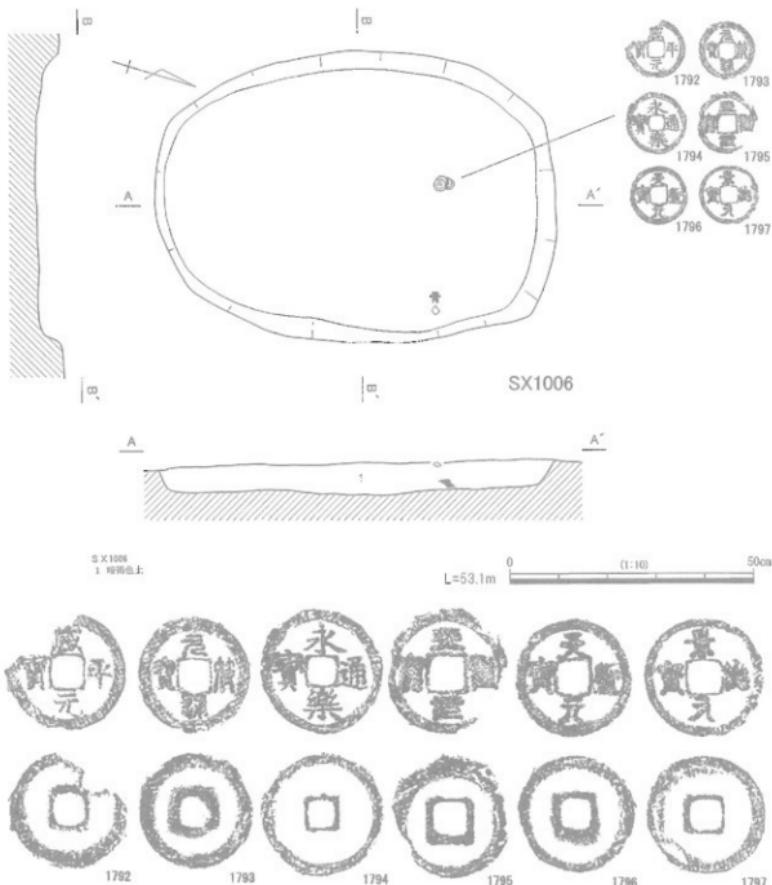


図 243 SX1006 実測図・出土遺物

副葬品としては、墓坑の中央やや北よりの位置から、銭貨（1792～1797）が出土している。銭貨は、6枚が重なった状態で錆着して出土している。1792は咸平元宝、1793は元符通宝、1794は永楽通宝、1795と1796は天聖元宝、1797は景德元宝である。纖維などは確認されていないが、孔が通った状態で錆着している点から見て、縉錢の状態で埋納された可能性が高いと推測される。

遭構の年代としては、六道銭が渡来銭または模鋳銭のみで構成されていることから、15世紀後半から17世紀前半にかけての時期であるが、その時期でも16世紀代までと推定される。

SX1007 (図241・244、図版24・25・65・67)

SX1006の南側約80cmに隣接する、木棺墓または直葬墓である。南北方向に長い隅丸長方形で、長軸が北側でやや西に振る点は、隣接する埋葬遭構SX1005・1006と共に共通する。規模は長さ86cm・幅50cmで、深さは現存で約14cmとなっている。底面や側面に被熱の痕跡は確認されておらず、炭化物も検出されていない。人骨については、ほとんど残存しておらず、墓坑の中央やや北寄りの位置に、小片がわずかに出土しているのみである。

副葬品としては、土師質土器皿（1798）と銭貨（1799～1804）が出土している。土師質土器皿は、墓坑の西隅から口縁を上に向けた状態で発見されている。本遺跡では出土数の少ないロクロ成形のもので、底部には糸切り痕が明瞭に残る。銭貨は、土坑のほぼ中央に6枚錆着した状態で発見されている。1799の表には、蓋紐とみられる有機物が付着しており、縉錢の状態で埋納されていたとみて間違いない。1799は元豊通宝、1800は永楽通宝、1801と1803は天聖元宝、1802は元祐通宝、1804は元符通宝である。

土師質土器皿の年代が16世紀後半から17世紀にかけてのものであり、錢種構成も渡来銭または模鋳銭のみであることから、埋葬年代は16世紀後半から17世紀前半に位置付けられる。

SX1008 (図241・245、図版24・25・65・67)

SX1007から約50m南の位置で単独で検出されている、木棺墓または直葬墓である。南北方向に長軸をもつ隅丸長方形で、規模は長さ75cm・幅50cm、深さは約10cm残存する。底面や側面に被熱の痕跡は認められておらず、炭化物や人骨も出土していない。

副葬品は、土師質土器皿（1805～1807）と銭貨（1810～1815）が出土している。土師質土器皿（1805～1807）は、墓坑の北側の隅に、口縁を上に向けた状態で出土している。銭貨は、土坑のほぼ中央に6枚錆着した状態で発見されている。蓋紐は残存しないが、孔が通った状態で重なっており、縉錢であつた可能性が高い。1810は永楽通宝、1811と1815は皇宋通宝、1812は聖宋元宝、1814は元豊通宝である。1812についても遺存状態が悪いが、X線写真からみて元祐通宝であると推定される。

この他に、埋土中からは、瓦質土器と土師質土器の破片が出土している。1808は瓦質土器で、小型であることなどから、香炉の破片と推測される。外面には突帯が巡り、亀甲文のスタンプが押捺されている。中世後期のものとみてよい。1809は土師器の壺で、古代のものである。いずれも小破片のため、副葬品とは考えられず、埋土に混入した遺物とみてよい。

SX1008では、墓坑の中央に六道銭、北側の隅に土師質土器皿が配置されており、この副葬品の配置はSX1007と共に共通する要素として捉えられる。また、六道銭の錢種構成も、渡来銭もしくは模鋳銭のみで構成されている。以上の点から、埋葬年代は、15世紀後半から17世紀前半にかけての、SX1007と比較的近接した時期と考えてよいであろう。

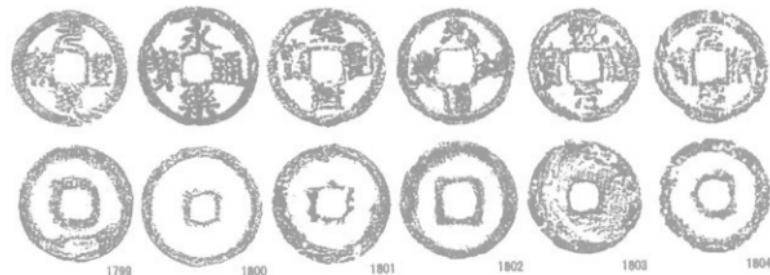
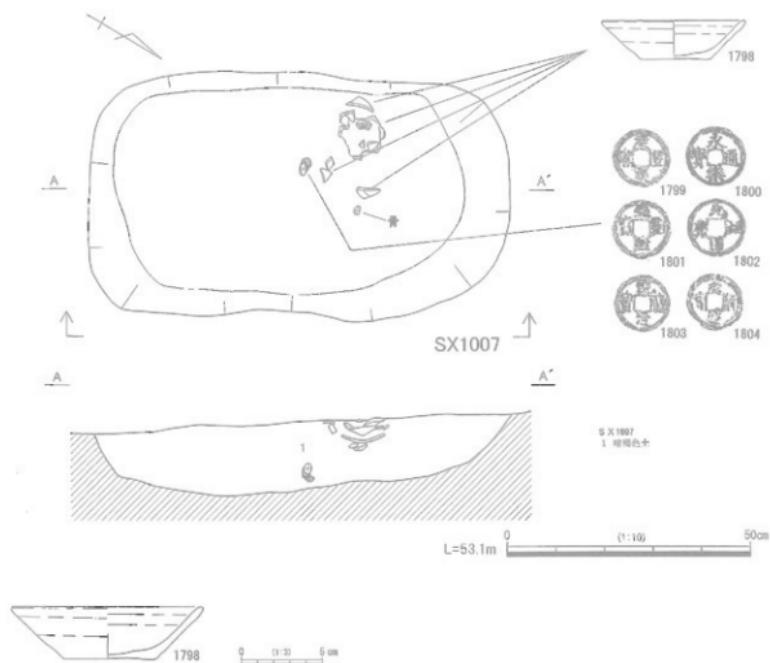


図244 SX1007 実測図・出土遺物

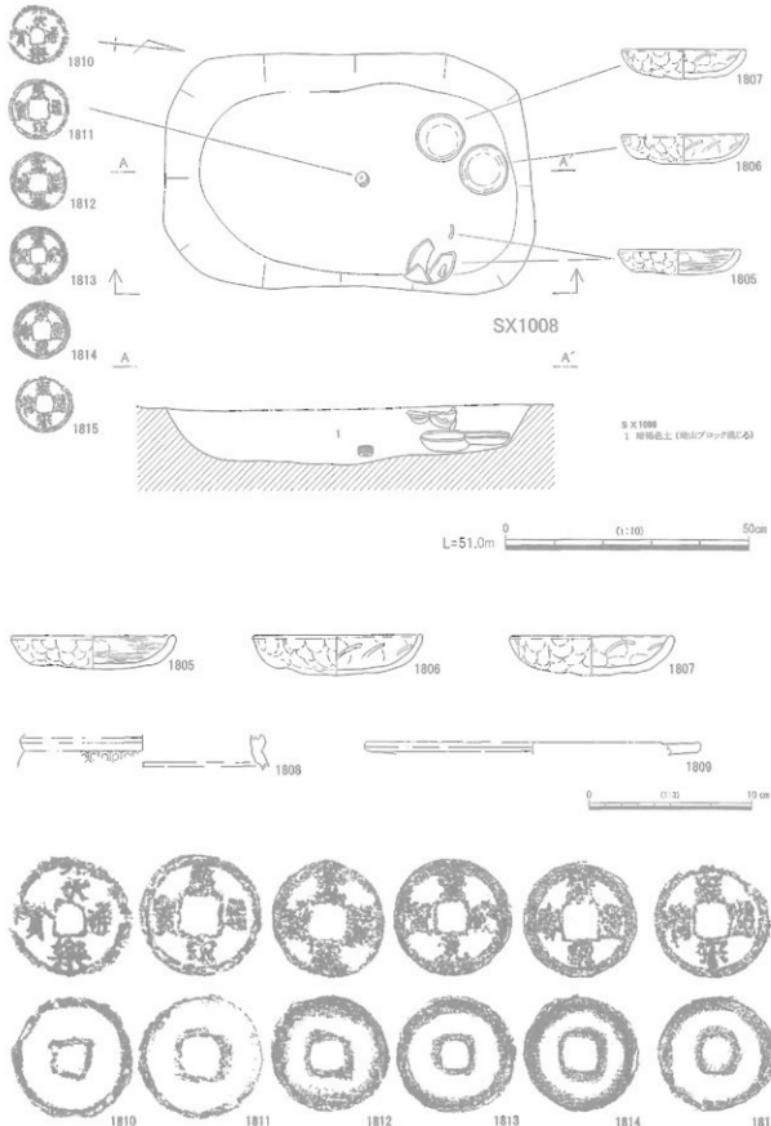


図 245 SX1008 実測図・出土遺物

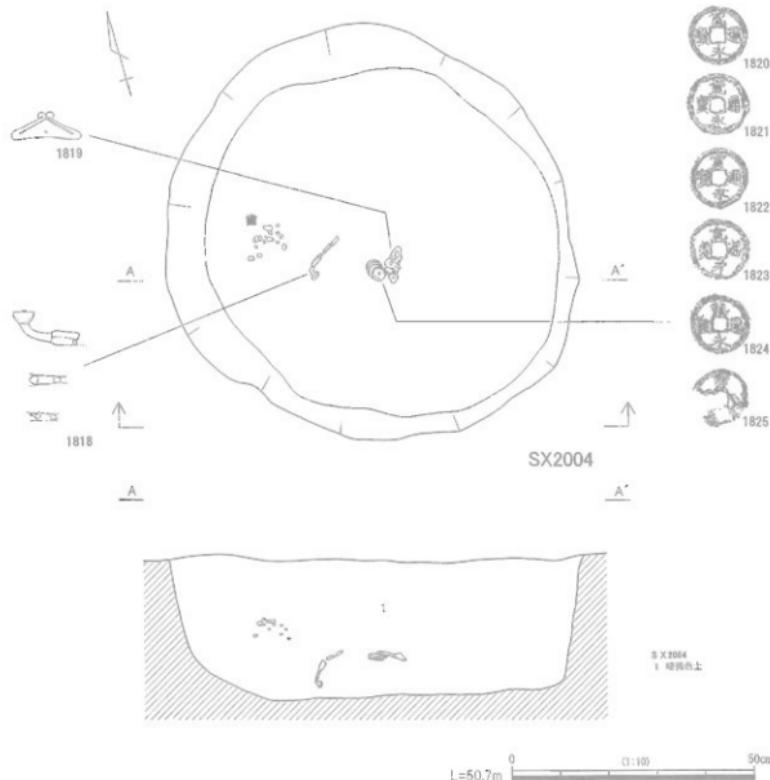


図 246 SX2004 実測図

SX2004 (図 246 ~ 248、図版 24・25・66・67)

2 区の西側に位置する、桶棺墓である。墓坑は平面が直径 85 cm の円形で、深さは 28 cm 残存する。底面や側面に被熱した痕跡は認められず、埋土中に炭化物や焼土も確認されていない。人骨は確認されていないが、墓坑西側の底面から 15 cm 程浮いた状態で歯が出土している。歯の出土位置から、頭位は北または西であったとみてよいであろう。

副葬品としては、墓坑の中央から銭貨と火打金、これらと歯のほぼ中間の位置からキセルが出土している。銭貨 (1820 ~ 1825) は、底面より 8 cm 程度浮いた状態で出土している。薫紐などは確認されていないものの、6 枚重なった状態で出土していることから、錯銭の可能性が高い。6 枚とも全て古寛永である。火打金 (1819) は、銭貨に接して出土している。いわゆる鎌形火打金で、両側端を上方に折り上げてつくられている。キセル (1818) は、雁首と吸口が出土しており、断片的に羅字も発見されている。火皿の下端には補強体が設けられ、肩の段も明瞭である。

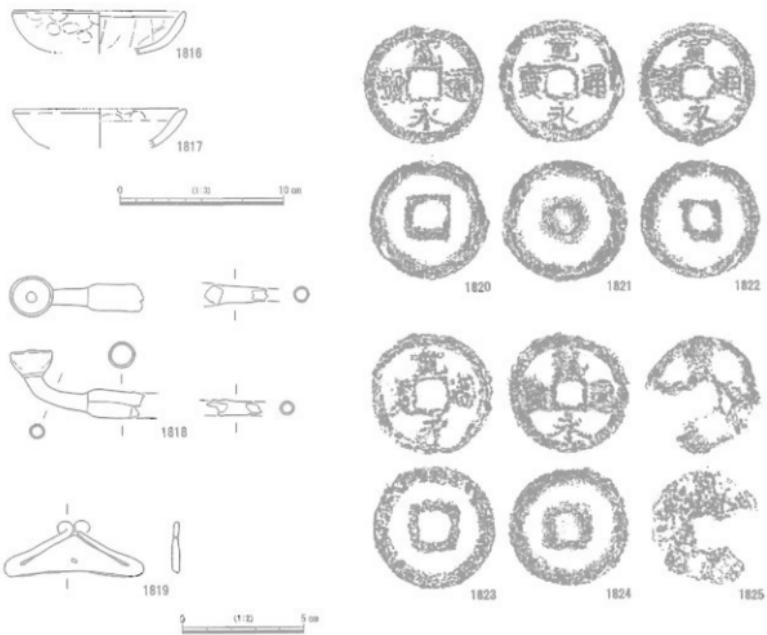


図 247 SX2004 出土遺物

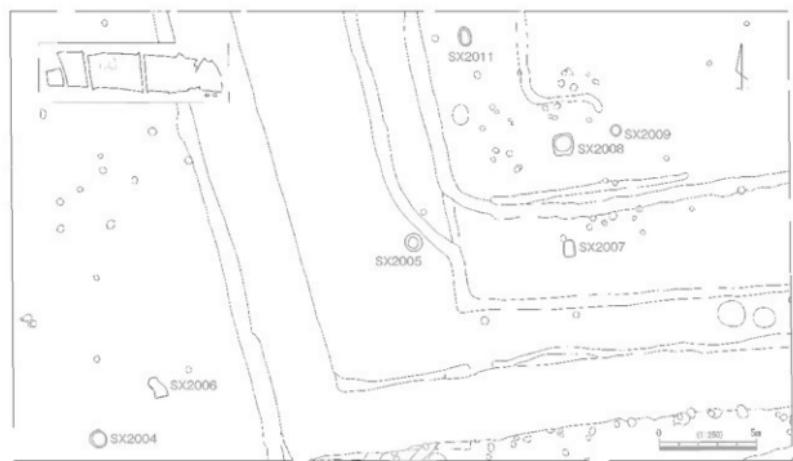


図 248 墓葬遺構配置図（2区）

この他に、埋土中から土師質土器皿（1816・1817）や、内耳鍋の破片が数点出土している。いずれも破片資料であり、墓坑を埋めた際の混入遺物であろう。

キセルが17世紀後半の特徴を呈しており、銭貨が古寛永のみで構成されていることから、埋葬年代は17世紀後半に位置付けられる。

SX2005（図248～250、図版24・25・66・67）

SX2004から、北東へ約20m離れた場所に位置する、桶棺墓である。墓坑は直径80cmの円形で、深さは約60cm残存する。人骨は、ごく小さな骨片が1点北端で確認されているのみである。底部や側面に被熱の痕跡は認められず、埋土中に焼土や炭化物も確認されていない。

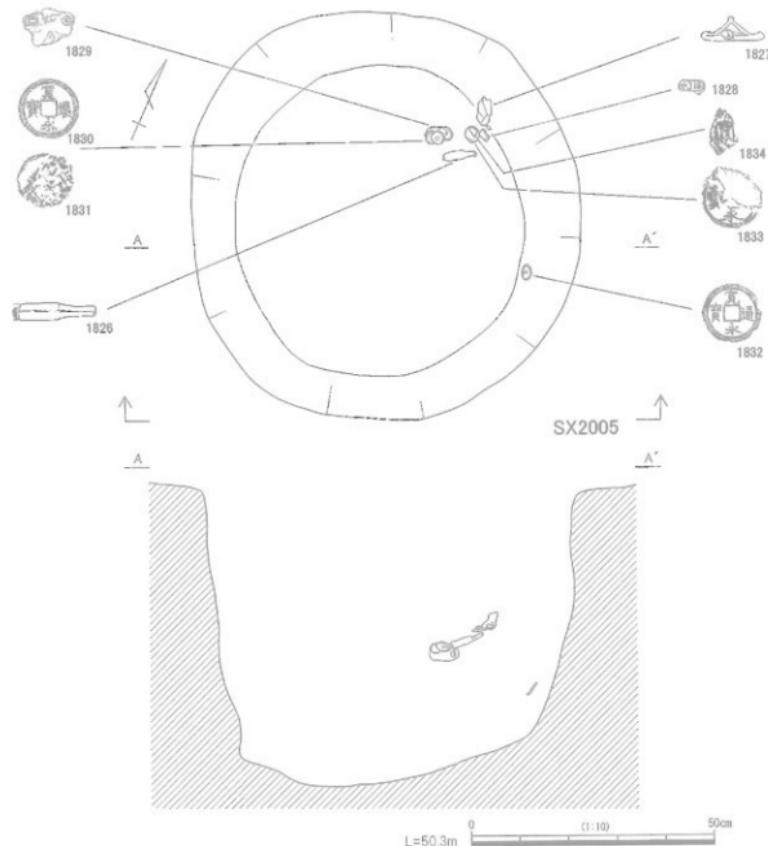


図249 SX2005 審測図

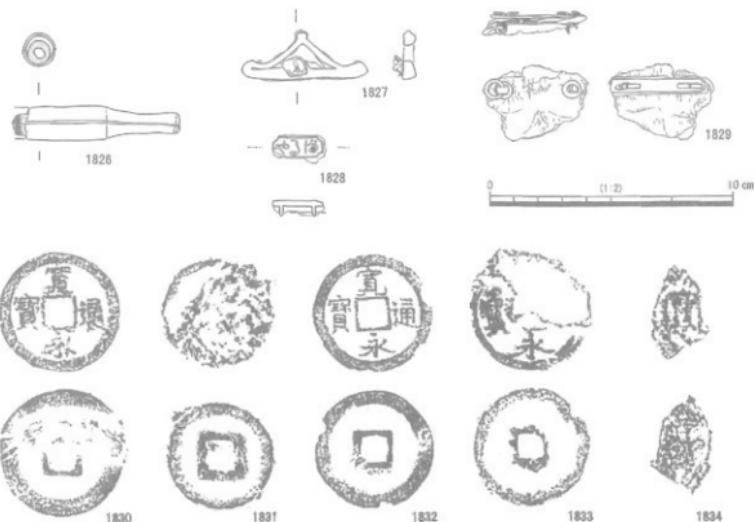


図250 SX2005出土遺物

副葬品としては、キセルと火打金、布製品、銭貨が出土している。銭貨1点(1832)を除き、墓坑の北側に副葬されている。副葬品が北側に集中することから、被葬者の頭位は北とみてよいであろう。1826はキセルの吸口で、肩の段はやや不明瞭になっている。1827は火打金であり、表面には布と銅製の鉄が接着している。1828と1829は、布製品に付隨する銅製の金具である。1828の表側には、「滴るや」の文字が確認できる。1829には、円環状の金具が取り付けられており、布を挟んで鉄で鋼板に固定されている。紐等を通して吊り揚げるための金具であろう。金具の構成から、出土した布製品については、火打入れや煙草入れなどの袋物である可能性が高いと推測される。

銭貨(1830～1834)は、破片のものを含め5枚出土しているが、古寛永・文銭・新寛永・鉄銭と多様な構成となっている。1830は文銭である。背に紐状の繊維が付着しており、半分程度重なる状態で1831と接着する。1831は寛永鉄銭であり、表には有機質が付着している。直径が2.1cmと、他の銭貨に比べて極端に小さい。1832は新寛永であり、他の副葬品とは少し離れた墓坑の東端で出土している。出土した高さも他の副葬品と異なり、底部に近い位置である。1833は古寛永で、1834と接着した状態で出土している。表には、布が付着している。1834は鉄銭で、全体の4分の1程度の破片である。1832を除き、墓坑の北側で出土している銭貨には、いずれも布の付着が確認できることから、袋物に入れて埋納されたものとみてよいであろう。

キセルが18世紀代に主流となる特徴を有しており、銭貨に鉄銭がみられることから、埋葬年代は18世紀の中頃を中心とした時期と推測される。

SX2006 (図 248・251、図版 23・67)

SX2004 から北東へ約 4 m の場所に隣接する茶尾墓である。底部の一部のみ、幅約 70 cm・長さ 1 m の規模で検出されている。周辺が大幅に削平されているため、正確な規模や形状については不明である。底面は、被熱により赤化している。底面付近では、多量の炭化物とともに人骨も発見されている。副葬品は、貨銭が 4 点 (1835～1838) 出土している。南東側からまとまって出土しているが、それぞれ鋸着した状況はみられず、繊維等の付着も確認されない。1835・1836・1838 は、いずれも新寛永である。1837 は文銭で、全体が裏側に反る形に大きく変形する。茶尾に付す以前に副葬され、遺体とともに茶尾に付された際、火熱によって変形したものとみられる。

埋葬年代は、文銭と新寛永という銭種構成から、18世紀代を中心とする時期と推測される。

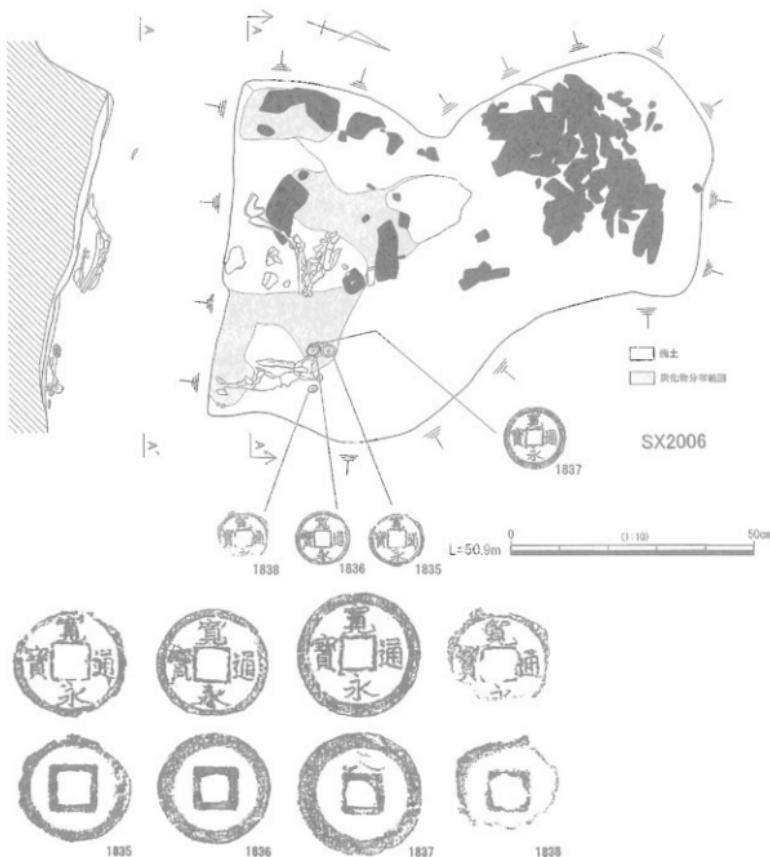


図 251 SX2006 實測図・出土遺物

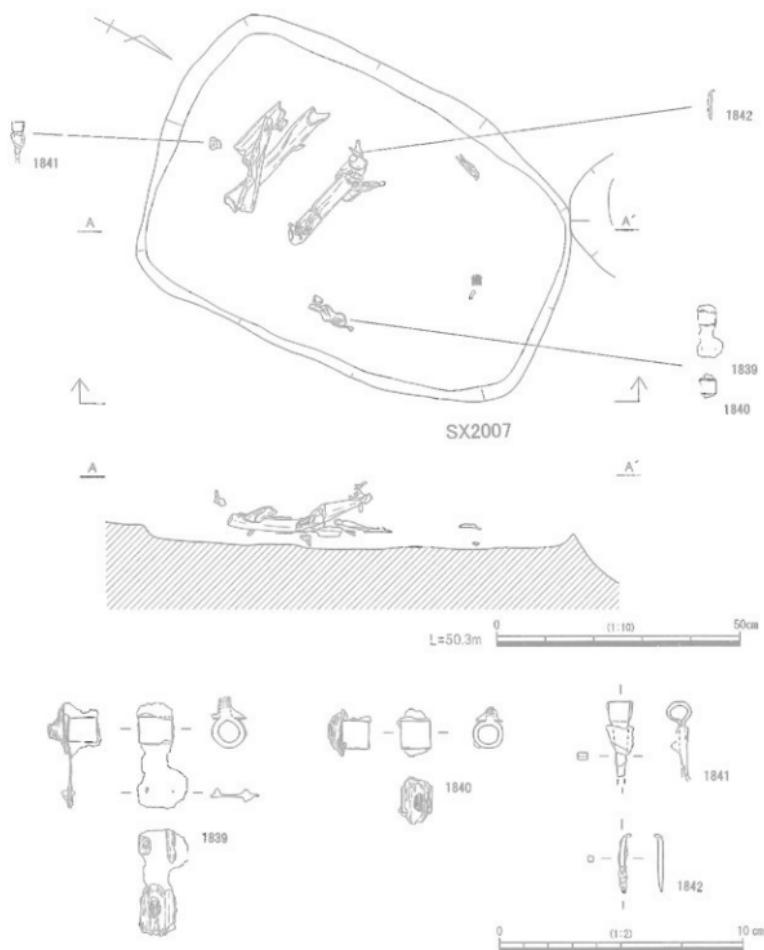


図 252 SX2007 実測図・出土遺物

SX2007 (図 248・252、図版 24・66)

SX2007 から東へ約 8 m に位置する木棺墓である。南北に長軸をもつ、長さ 90 cm・幅 60 cm の隅丸長方形の墓坑である。上面が大幅に削平を受けているため、深さは 5 cm 程度しか残存しない。底面や側面に被焼した痕跡はなく、炭化物も確認されていない。墓坑の北側では齒が出土しており、南側では比較的形状を保った状態で人骨が検出されている。人骨は長骨で、墓坑の長軸に直交する形で出土している。

歯との位置関係からみて、下肢骨の一部であると推定される。人骨と歯の出土状況から、被葬者は、頭位を北とする伏臥屈葬で土葬されていた可能性が高い。

他の遺物としては、釘（1839～1842）が4点出土している。1839～1841は環頭釘である。いずれも幅の狭い板状の素材を、二つに折り合わせてつくられている。環状部の下端から脚部には、木質が残存する。1842は、太さ約2mm・残存部の長さ約2cm程度の小型の釘で、頭部は欠損している。いずれも、墓坑の端で出土していることから、棺に用いられた釘であると推測される。

SX2007については、周辺に中世末から近世の埋葬遺構が集中することから、これらと同様の時期である可能性が高いと推測される。しかし、出土遺物が釘のみで、年代を明確に示す副葬品等が出土していないため、詳細な時期の特定は困難である。

SX2008（図248・253、図版24・67）

SX2007の北5mに位置する桶棺墓または直葬墓である。調査時には正方形に近い平面形態と認識されているが、南側については立ち上がりの傾斜が明らかに異なっており、誤って別の遺構を一体のものと捉えてしまった可能性が高い。本来は、底部から比較的急に立ち上がる、直径90cm程度の円形の墓坑であったと推測される。底面や側面に被熱の痕跡はなく、炭化物も発見されていない。

副葬品としては、銭貨が7点（1843～1849）出土している。遺存状態が悪く、断片になっているものが多い。1843と1844は重なった状態で銹着していたものの、他については単体で出土している。いずれの銭貨にも、纖維等の付着は確認されていない。1843と1846は永楽通宝、1844は開元通宝、1845は熙寧元宝、1847は宣德通宝、1848と1849は洪武通宝である。1849には、側面に車輦の刻みが認められる。1843と1844は裏面で銹着しているが、孔は通っていない。1843～1846の4枚は墓坑の南側、1847～1849の3枚は北側から出土しており、遺体を挟んで対する位置に埋納されているようにみえる。本遺跡では、六道銭は1ヶ所にまとめられている例がほとんどであり、やや特殊な印象を受ける。

年代としては、貨銭が渡来銭もしくは模鏡銭のみで構成されており、さらに永楽銭が優位の銭種構成であることから、15世紀から16世紀前半と推測される。

SX2009（図248・254・255、図版24・68）

SX2008の東側約2mの場所に隣接する、桶棺墓または直葬墓である。平面は直径約60cmの円形で、深さは約60cm残存する。床面や側面に被熱の痕跡は確認されておらず、埋土中に炭化物も検出されていない。また、人骨や歯についても発見されなかった。埋土の上層には、長さ約30cmの縄が検出されている。中央にやや大型の角縄とその脇に円縄が2つ、埋土の上層に埋め込まれる形で立てられている。どの程度削平を受けているか不明ではあるが、現存では墓坑上面から10～15cm程度露頭しており、墓標であった可能性が高い。

副葬品としては、底面から25～30cm程の高さから、銭貨が合計13枚出土している。1851～1855は、墓坑中央やや南東よりの位置から出土している。1851は熙寧元宝、1852は嘉祐通宝、1853は嘉祐元宝、1854は元豐通宝、1855は紹聖元宝である。5枚が重なった状態で銹着して発見されており、孔も通っていることから、縁銭であった可能性が高い。1856～1863は、墓坑の東寄りの位置から、重なった状態で銹着して出土している。孔に纏紐が残存することから、縁鏡の状態で副葬されていたことが分かる。1856・1858・1860・1861の4枚は元豐通宝、1857と1863は熙寧元宝、1859は古寛永、1862は至和元宝である。

また、銭貨の他に、埋土中からは土師質土器皿（1850）が1点出土している。出土状況について記録が残されていないため不明確な部分も多いものの、全体の3分の1程度の破片しか出土していないこと

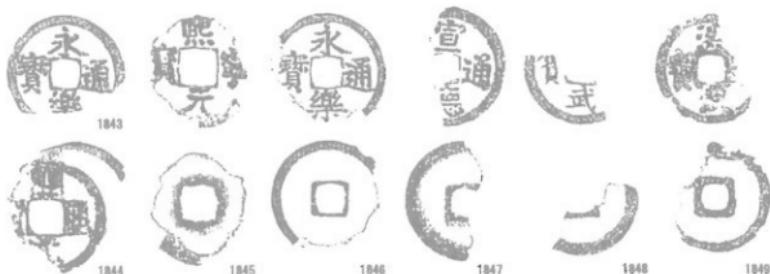
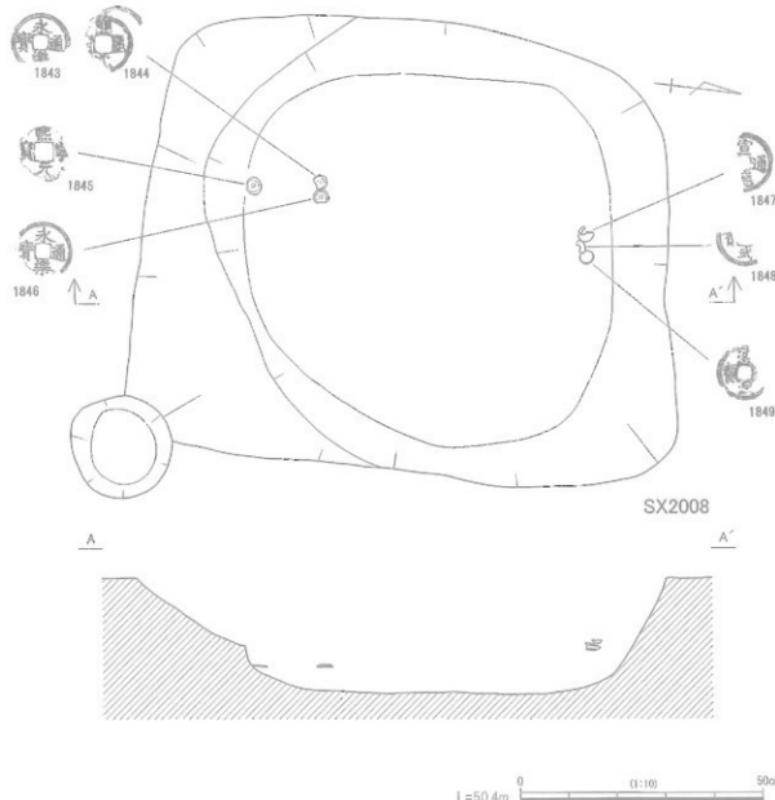


図 253 SX2008 実測図・出土遺物

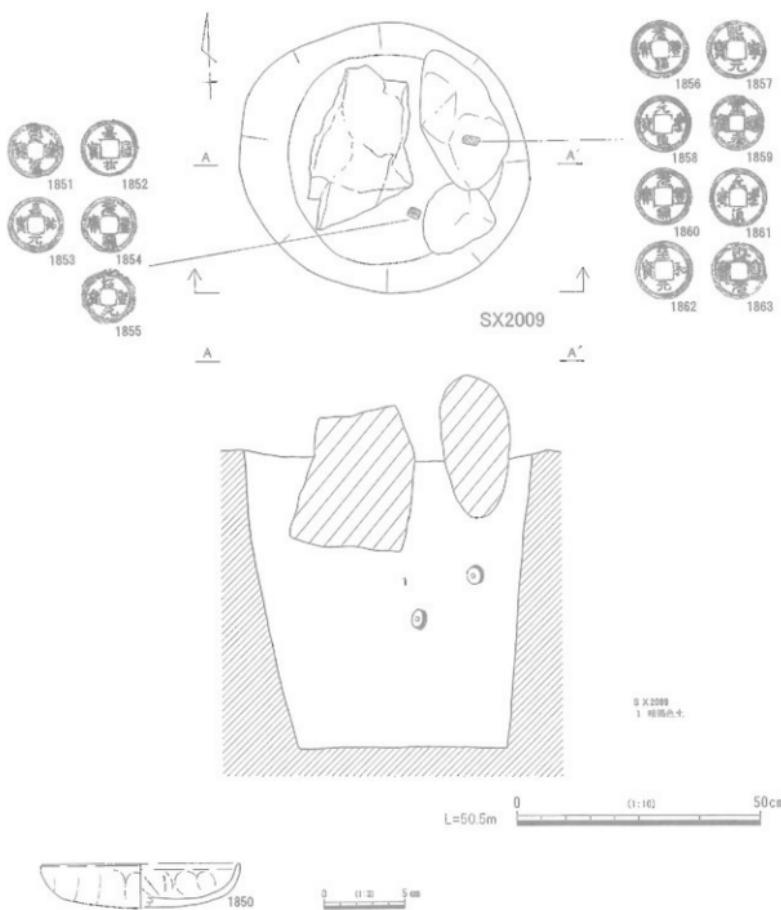


図 254 SX2009 実測図・出土遺物 (1)

から、埴土に混入した遺物の可能性が高い。

SX2009は、同様の平面形態のSX2004・2005・2008と比べると、その規模は明らかに小型である。また、深さも底面から墓標の下端までは40cm程しかない。体軸を折り曲げれば成人の埋葬も不可能ではない

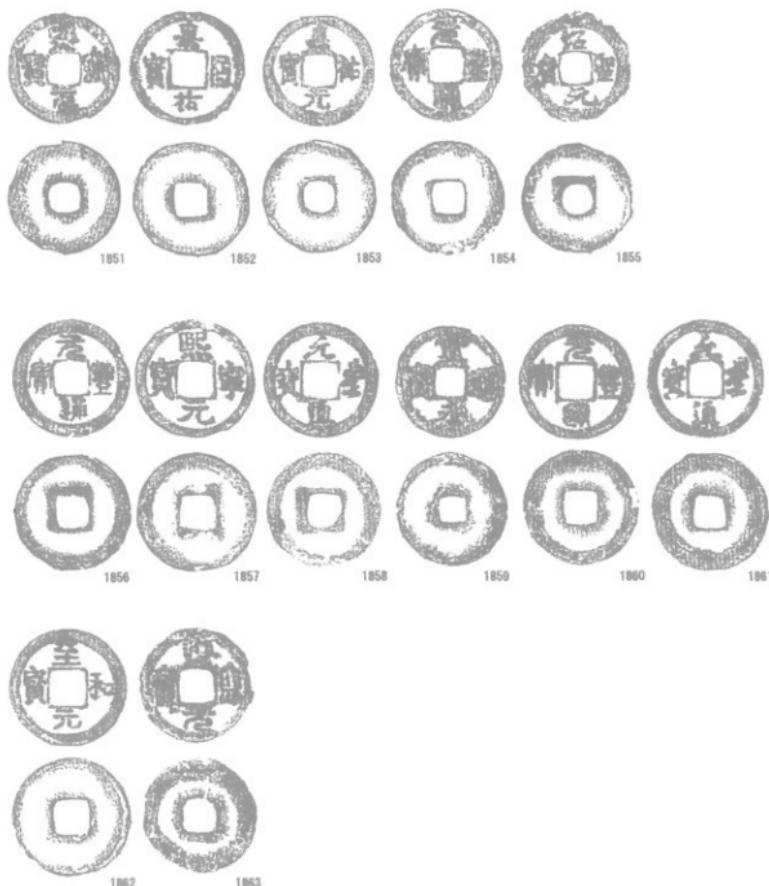


図255 SX2009出土遺物（2）

が、被葬者が子供である可能性も想定しておく必要があろう。

銭種構成としては、渡来鏡または模鏡鏡に加えて、1枚だけではあるが古寛永が含まれている。このことから、埋葬年代は17世紀中頃を中心とした時期と推測される。

SX2011 (図 248・256、図版 68)

SX2009の北西約8mに位置する木棺墓または直葬墓である。南北に長軸をもつ、長さ90cm・幅55cmのややいびつな隅丸長方形で、深さは現存で10cm程度である。底面や側面に被焼した痕跡はなく、炭化物も検出されていない。人骨は墓坑西端で破片が数点検出されているが、遺存状態が悪く、小破片もしくは粉末となった状態であった。

副葬品としては、墓坑の中央やや北東寄りの位置から、銭貨（1864～1869）が出土している。1864は開元通宝、1865と1866は永樂通宝、1867は景德元宝、1868は皇宋通宝、1869は乾元重宝である。薬紐等は確認されていないが、6枚重なった状態で銹着しており、總錢であった可能性が高い。

埋葬年代としては、貨錢が波來錢のみで構成されていることから、15世紀後半から17世紀前半にかけての時期でもその前半代であると推測される。

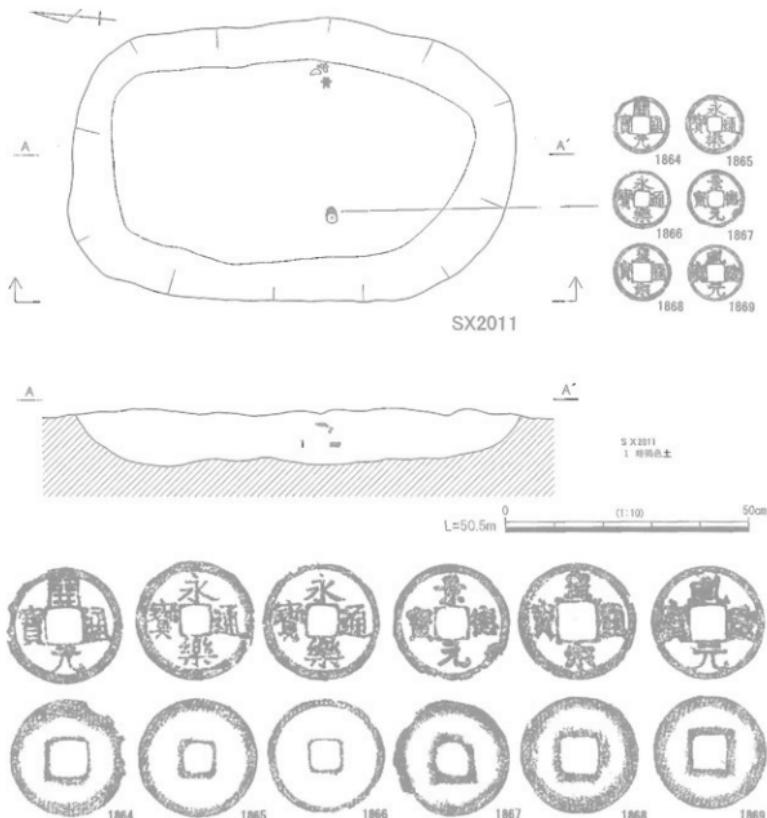


図 256 SX2011 実測図・出土遺物



図 257 埋葬遺構配置図（3区）

SX3001（図 257・258、図版 23・25・65・66・68）

3区の北東部に位置する茶毬墓である。SD3009の上面で検出されており、東側はトレンチによって失われている。南北を長軸とする径 1.1 ~ 1.3 m 程度の楕円形と推測され、深さは約 30 cm 残存した。墓坑の底面と側面には、被熱による赤化が認められる。墓坑内からは、焼土ブロックと炭化物の他に、人骨も多量に出土している。人骨は墓坑全体に散らばっており、ほとんどが細片の状態であった。

副葬品は、土師質土器皿 3 枚（1870 ~ 1872）と、銭貨 1 枚（1876）が出土している。土師質土器皿は、口縁を上に向けた状態で、墓坑の北側に副葬されている。1870 は単独で、1871 と 1872 は 2 枚重ねて置かれている。1876 は古寛永で、墓坑の南側から出土しており、表面には藻や茎の一部とみられる粗い繊維状の有機物の付着が認められる。遺物としては、他に棺に用いられたと思われる鉄釘（1873 ~ 1875）も 3 点出土している。いずれもやや小型の方頭釘で、板状に延ばした後下方に巻き込んで頭部を造り出している。

下層に存在する SD3009 の埋没年代は、17世紀前半に位置付けられており、切り合い関係から SX3001 がこれを遡ることはない。1枚だけではあるが古寛永が出土していることから、埋葬年代は、17世紀中頃から後半にかけての時期と推測される。

SX3002（図 257・259、図版 23・26・65・66・68）

SX3001 より約 7.5 m 西に位置する茶毬墓である。長径 8.7 m・短径 6.3 m の、南北方向に長軸をもつ楕円形で、深さは 80 cm 程残存している。底面は被熱により広範囲にわたって赤化しており、炭化物も出土している。人骨は、墓坑のやや西側寄りの部分で集中して発見されている。

副葬品は、土師器皿と銭貨、火打金が出土している。土師質土器皿（1877 ~ 1881）は、墓坑の北側から 5 枚まとめて出土している。いずれも立った状態で出土しており、単純に置いたとは考えにくい。布に包んだり、箱に入れて埋納された可能性がある。被熱の痕跡が認められないことから、茶毬に付した後に供献されたものとみてよい。銭貨（1883 ~ 1888）は、いずれも古寛永であり、墓坑の南側から、多少散らばった状態で発見されている。一部に被熱の痕跡が認められる。1882 は短冊形の火打金で、銭貨と近接した位置で出土している。

埋葬年代としては、古寛永のみで構成される銭種構成から、17世紀中頃から後半にかけての時期と推測される。

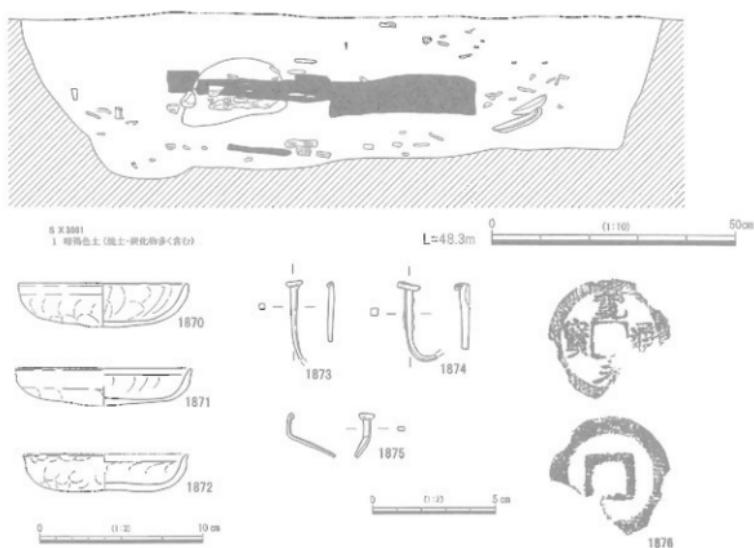
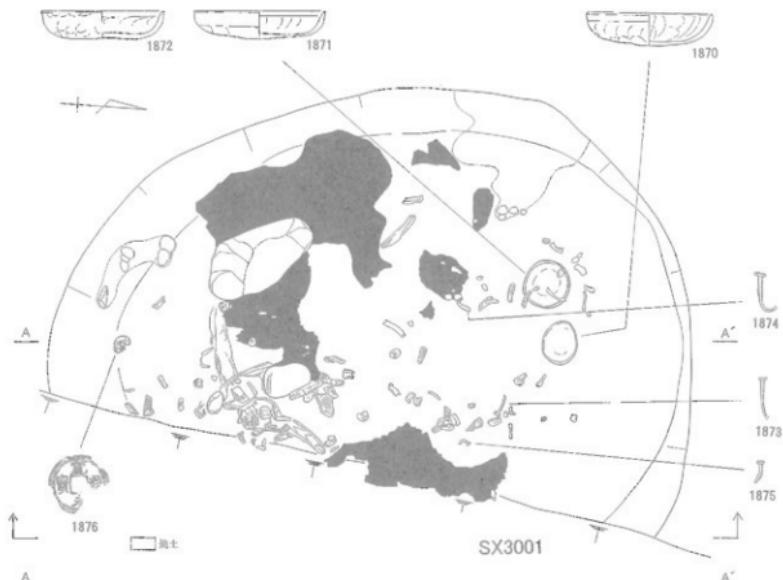


図 258 SX3001 出土遺物

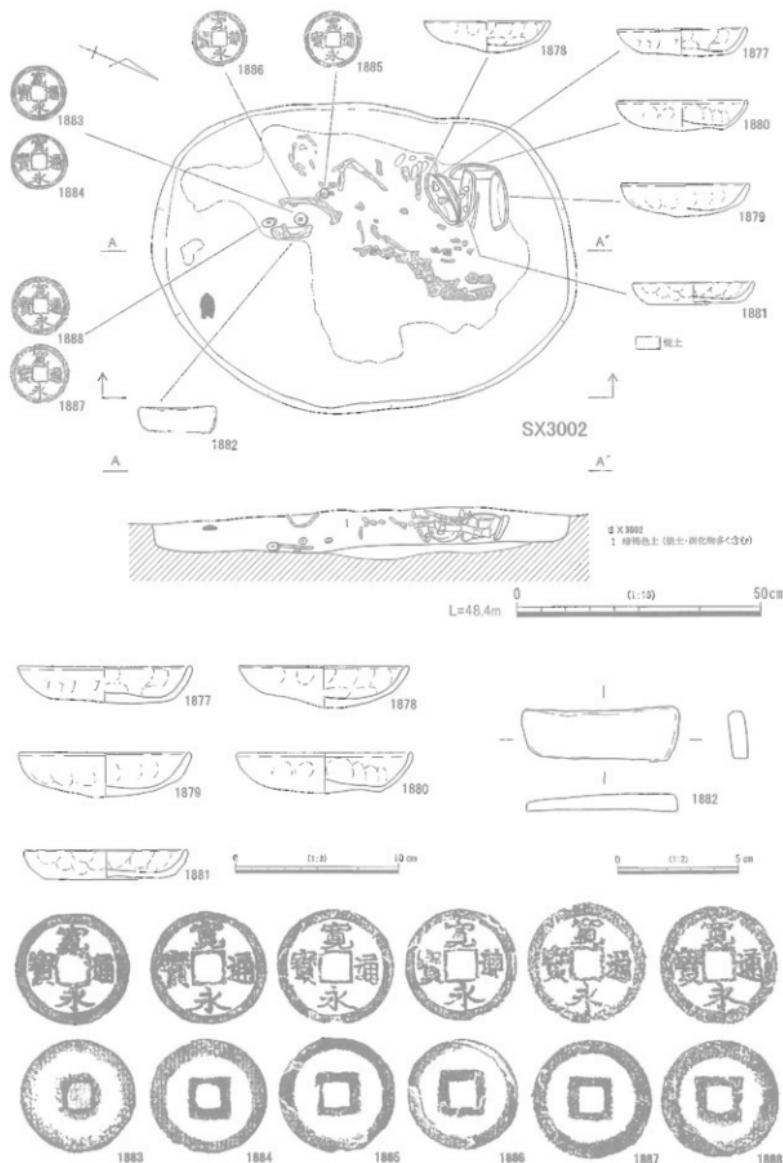


図259 SX3002 実測図・出土遺物

SX3006 (図 257・260、図版 68)

SX3002 から約 3 m 東に隣接する、桶棺墓または直幕墓である。現地では SD3014 の掘り下げ後に検出されているが、実際は SD3014 より後出する遺構である。南東部が失われているが、平面形態は、直径 65 cm 前後の円形であったものと推測される。SX2009 と同様の小型の埋葬遺構である。上面は大幅に削平されており、深さは 5 cm 程しか残存しない。底面や側面に被熱の痕跡は認められず、炭化物や人骨も発見されていない。

副葬品としては、墓坑の南側で銭貨が 6 枚発見されている。銭貨はすべて古寛永であり、1889～1891 と 1892～1894 が、3 枚ずつ重なった状態で銹着している。1889 と 1894 の表面には、全体に纏維の付着が認められる。墓坑や棺の底に敷かれていた筵等が付着しているものとみられる。

埋葬年代は、古寛永のみの銭種構成であることから、17 世紀中頃から後半にかけての時期であると推測される。

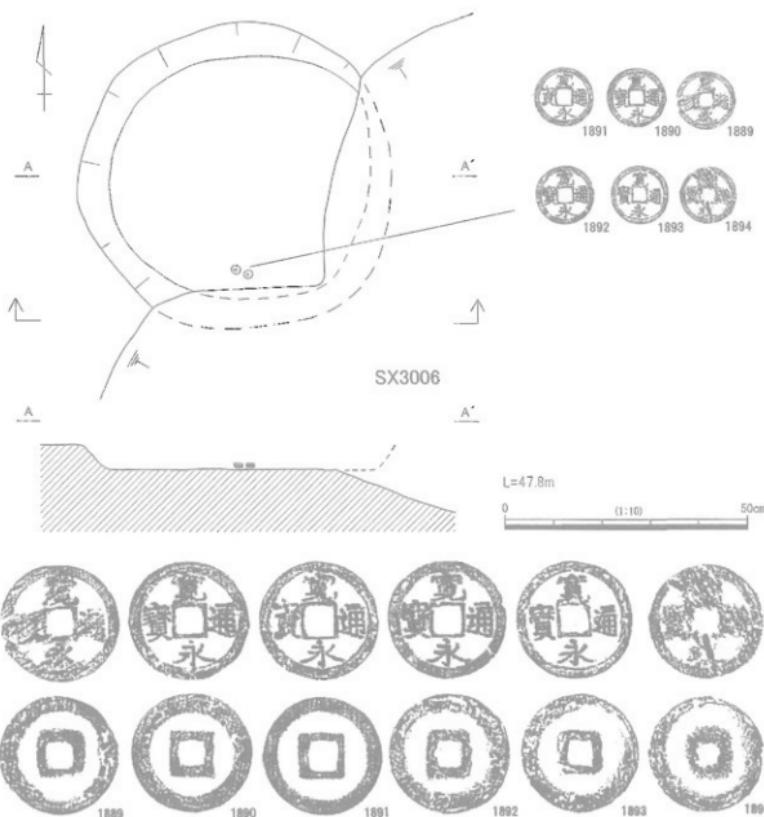


図 260 SX3006 実測図・出土遺物

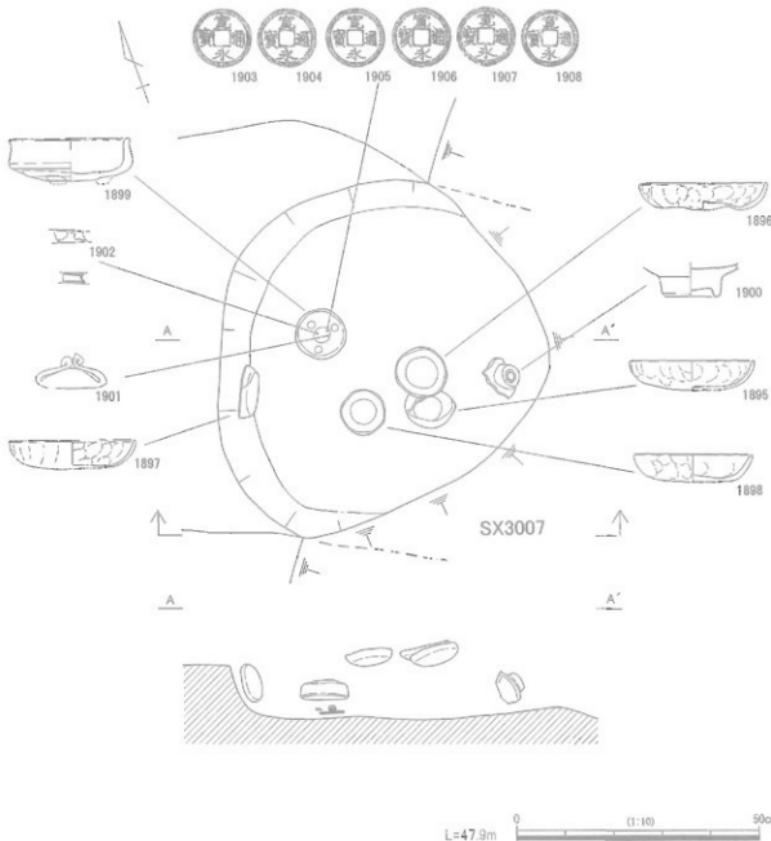


図 261 SX3007 実測図

SX3007 (図 257・261・262、図版 24・26・65・66・68)

SX3006 の北東側 50 cm に隣接する、埋葬遺構である。SX3006 と同様に、SD3014 の掘り下げ後に検出されてはいるが、実際は SD3014 より後出する遺構である。東側の大半が失われているが、墓坑の形状は直径 80 cm 前後の円形または隅丸方形と推測される。深さは現存で 15 cm 程度である。底面や側面に被熱の痕跡は認められておらず、埋土中に炭化物や人骨も確認されなかった。

副葬品は、他の埋葬遺構に比べて豊富に出土している。1895～1898 は土師質土器皿である。1897 は、墓坑の西側に立てかけるようにして、他の 3 つは口縁を上に向かって、底部より 10 cm 程浮いた状態で墓坑中央から出土している。墓坑のやや北側では、火打金 (1901) とキセル (1902)、銭貨 (1903～1908) が副葬されており、その上には脚を打ち欠いた美濃焼の盤 (1899) が設せられていた。銭貨は、すべて

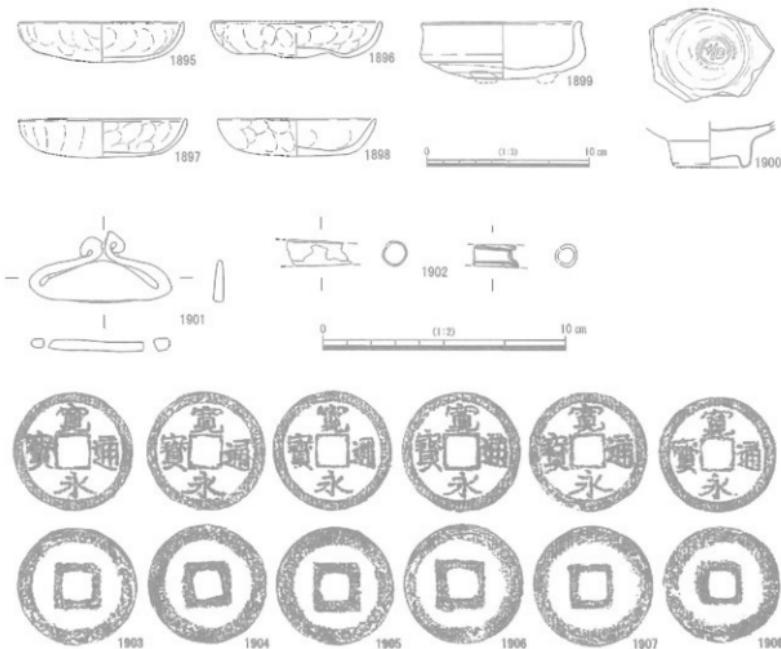


図 262 SX3007 出土遺物

古寛永であり、6枚重なった状態で銹着していた。また、墓坑の東側からは、青磁の碗（1900）が出土している。口縁部が欠損し、底部から高台部のみとなっている。出土位置や層位からみて、本遺構に伴うものであることは間違いないが、副葬品ではなく、埋土に混入した遺物の可能性もある。

副葬された美濃産の盤が17世紀後半のものであり、貨銭も古寛永のみの銭種構成であることから、埋葬年代は17世紀後半とみてよいだろう。

SX3008 (図 257・263、図版 23・68)

SX3007 から北東へ3.7 m の場所に、隣接して築かれている茶毘墓である。調査時には西側を大きく掘削しているが、残されている北壁の土層の記録や遺物の分布から、本来は東西 90 cm 程度の規模であったとみられる。深さは現存で約 20 cm あり、北側は調査範囲外のため未調査である。平面形態は、おそらく南北方向に長い梢円形であろう。底面は被熱により広範囲にわたって赤化しており、人骨や炭化物も出土している。

副葬品としては、墓坑の南東側から、銭貨（1915・1916）が2枚出土している。1915は7 cm 程浮いた高さから、1916は底部から出土している。1915は文銭、1916は古寛永であり、いずれも織維等の付着は認められなかった。墓坑の南西側からは、棺に用いられたとみられる鉄釘（1909）が1点出土している。方頭釘であり、頭部の形状は SX3001 出土のものと類似する。この他に、埋土内から土師質土器

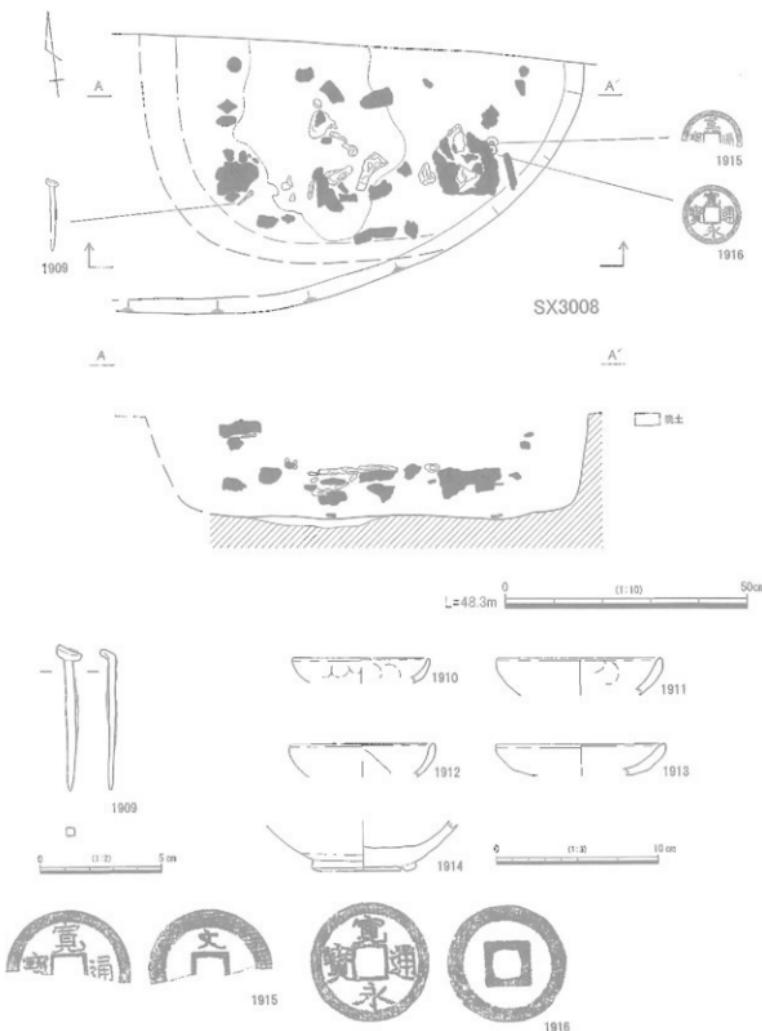


図263 SX3008 実測図・出土遺物

皿(1910～1913)や山茶碗(1914)なども出土しているが、いずれも小破片の状態であり、副葬品ではなく埋土に混入した遺物とみてよい。

埋葬年代は、古寛永と文銭という銭種構成から、17世紀後半を中心とする時期であると推測される。

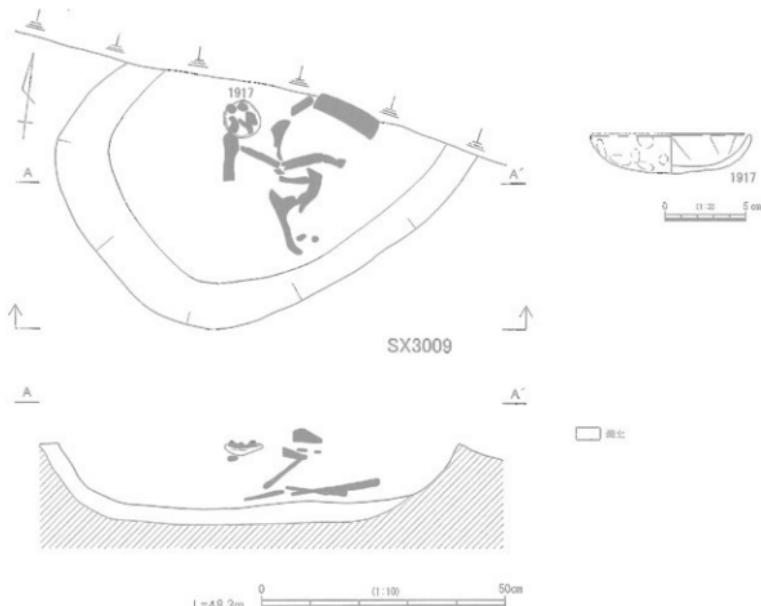


図 264 SX3009 実測図・出土遺物

SX3009 (図 257・264、図版 23・66)

SX3007 の南 15 m に隣接する茶毬墓である。北側がトレンチにより失われているが、幅 60 cm・長さ 90 cm 程度の隅丸長方形の墓坑であると推測される。長軸の方向は、基本的に南北を意識しているとみられるが、東に大きく傾いている。底面と側面は被熱によって赤化しており、炭化物が多量に出土しているが、人骨は遺存していなかった。

副葬品は、土師質土器皿が 1 点のみである。土師質土器皿 (191?) は、底面より 10 cm 程高い位置から、口縁を上に向けた状態で出土している。内外面の大部分が被熱によって変色しており、煤も広範囲に付着する。遺体とともに、茶毬に付されたものとみてよい。

遺物が土師質土器皿 1 点のみであるため、年代の特定は困難ではあるが、周辺の埋葬遺構の年代から 17 世紀代である可能性が高いと推測される。

SX3003 (図 257・265、図版 23・26・68)

SX3009 から西へ約 50 m 離れた場所に位置する、茶毬墓である。南北に長軸をもつ長径 1.1 m・短径 45 cm の指円形で、深さは 25 cm 程残存する。底面は被熱により赤化しており、埋土には焼土ブロックと炭化物が多量に含まれていた。人骨については、検出されなかつた。

副葬品は、土師質土器皿と銭貨が出土している。土師質土器皿 (1918・1919) は、割れではいるが、墓坑中央から口を伏せた形で出土している。被熱の痕跡が認められないため、遺体が茶毬に付された後

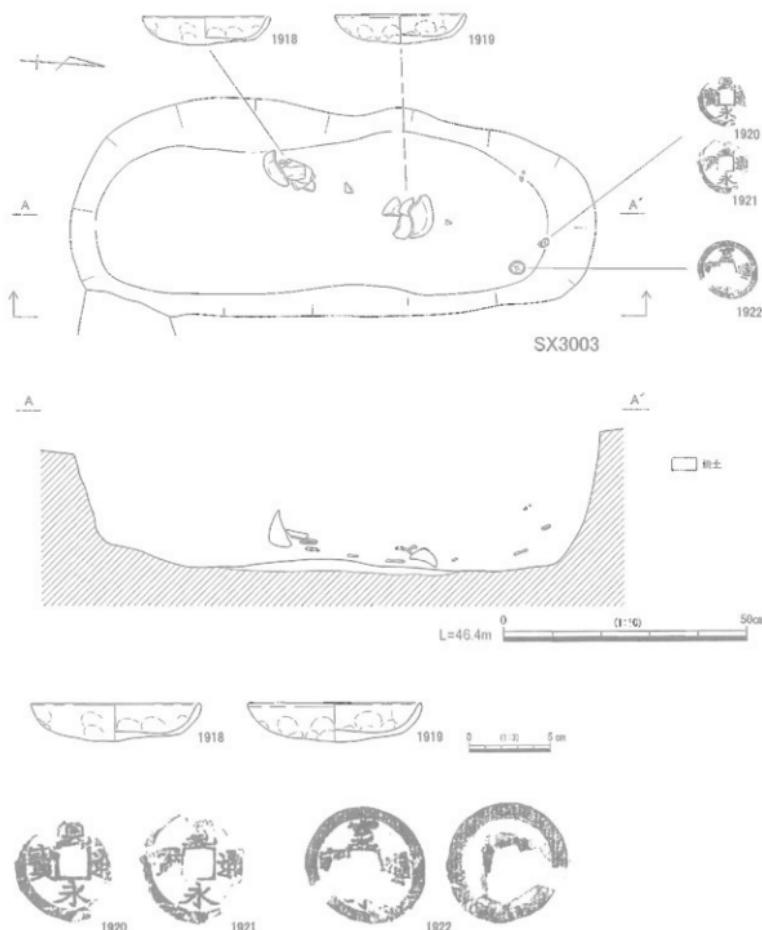


図 265 SX3003 実測図・出土遺物

に供獻されたものとみられる。銭貨（1920～1922）はすべて古寛永で、墓坑の北端から出土している。いずれも劣化が著しく、被熱の痕跡が確認できることから、遭体とともに茶毬に付したものと考えられる。1920と1921は、2枚重なった状態で銹着している。これ以外には、細片になった銭貨も2点出土している。

埋葬年代は、銭種不明の小破片を除き、すべて古寛永で構成されていることから、17世紀中頃から後半にかけての時期と推測される。

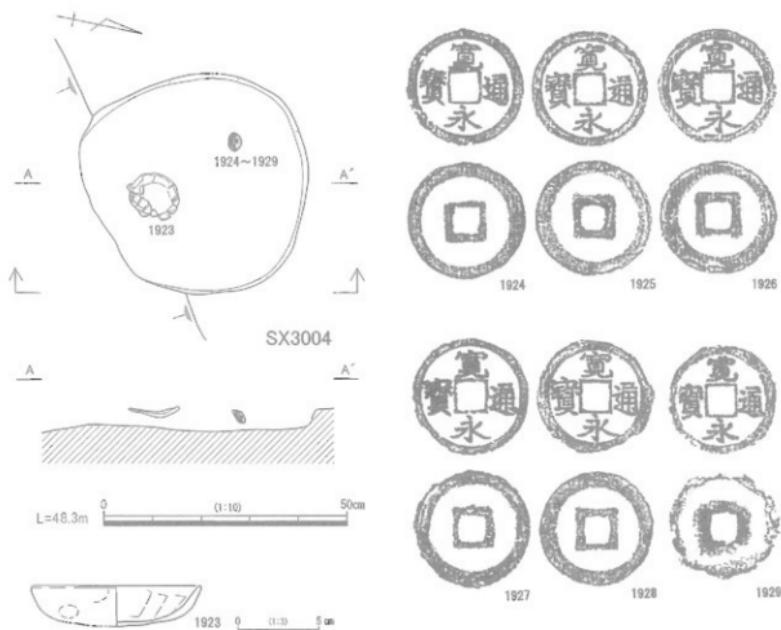


図 266 SX3004 実測図・出土遺物

SX3004 (図 257・266、図版 26・66・68)

SX3003 の 4 m 南東に位置する埋葬遺構である。底部の一部がかろうじて残存する程度であるため、墓坑の形状や規模については特定できないが、平面形は円形または楕円形と推測される。底面や側面に被熱の痕跡は認められておらず、埋土中にも焼土や炭化物は検出されていない。

副葬品としては、土師質土器皿 (1923) と銭貨 (1924 ~ 1929) が出土している。土師質土器皿は口縁を上にして埋納されている。銭貨はすべて古寛永であり、6枚重なった状態で鋸っていた。薫紐等は出土していないが、孔が通った状態で横にして置かれており、縁錢であった可能性が高い。

埋葬年代は、古寛永のみの銭種構成から、17世紀中頃から後半にかけての時期であると推測される。

SX3005 (図 257・267、図版 23・26・66)

3区の南東部に単独で検出されている茶毬墓である。南北方向に長軸をもつ、長さ 1.3 m・幅 90 cm の隅丸長方形で、深さは 10 cm 程残存する。底面は被熱により広範囲にわたって赤化している。底面付近では、多量の炭化物とともに、人骨も出土している。

副葬品は、墓坑の北側で土師質土器皿 (1930・1931) が 2 枚出土している。いずれも口縁部を下にして埋納されていた。この他に、棺に用いたとみられる鉄釘 (1932・1933) が 2 点出土しており、1933 には木質も残存していた。いずれも方頭釘で、比較的大型のものである。

年代については不明瞭ではあるが、中屋遺跡における他の茶毬墓と同様に、17世紀中頃から 18世紀にかけての時期である可能性が高い。

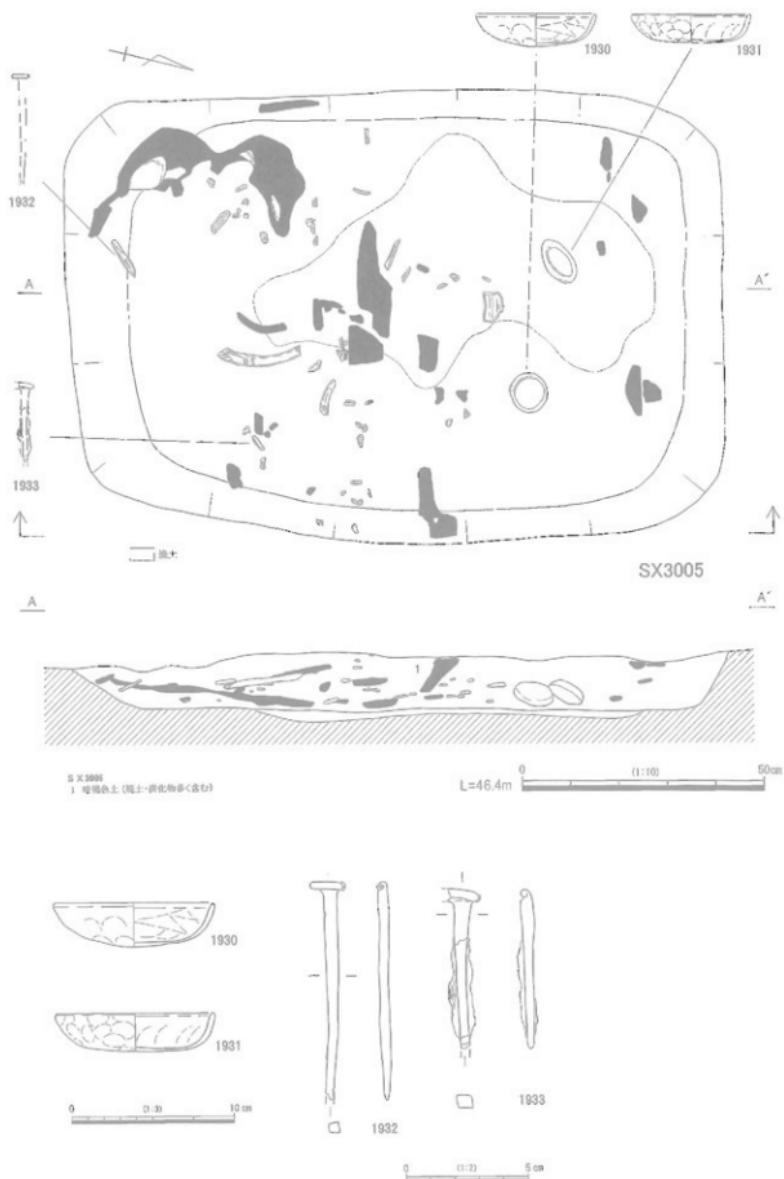


図 267 SX3005 実測図・出土遺物

表 24 埋葬遺構出土 土器・陶磁器觀察表

表 25 楚莊王墓出土 銀質鏡等器

地	通姓名	姓	種類	統計(♂)	内底(♂)	凡(♂)	量目(♂)	種類	統計(♂)	内底(♂)	凡(♂)	量目(♂)	里数(里)	備考
1786 SJ1005 賀永貴 古賀家	2.25	1.90	0.55	3	寄付種			1804 SJ2009 宮代貴 古賀家	2.35	1.65	0.65	3		
1786 SJ1005 賀永貴 古賀家	2.50	2.00	0.65	3				1855 SJ2009 寄付種	2.30	1.75	0.60	2		
1790 SJ1005 宮永貴 古賀家	2.40	2.00	0.5	3				1856 SJ2009 宮代貴 古賀家	2.40	1.90	0.85	2	贈付種	
1791 SJ1005 寄付種 古賀家	2.40	1.90	0.5	2	寄付種			1857 SJ2009 間寄種	2.60	2.05	0.79	3		
1792 SJ1005 武平貴 古賀家	2.45	1.95	0.65	1	一過久魚			1858 SJ2009 寄付種	2.40	1.95	0.65	4		
1793 SJ1005 安寄種	2.40	1.80	0.5	3				1859 SJ2009 寄付種	2.25	1.95	0.52	3		
1794 SJ1005 金屋貴 古賀家	2.50	2.10	0.55	3				1860 SJ2009 宮代貴 古賀家	2.40	1.90	0.70	3		
1795 SJ1005 武平貴 古賀家	2.20	2.05	0.65	3				1861 SJ2009 宮代貴 古賀家	2.45	2.05	0.85	3		
1796 SJ1006 天賀貴 朝倉種	2.40	2.00	0.6	2				1862 SJ2009 宮代貴 古賀家	2.45	1.95	0.70	3		
1797 SJ1006 宇佐貴 朝倉種	2.45	2.10	0.65	3				1863 SJ2009 間寄種	2.40	1.95	0.65	2		
1799 SJ1007 元賀貴 朝倉種	2.45	1.80	0.6	3	間寄種			1864 SJ2011 間寄種	2.45	2.00	0.65	3		
2000 SJ1007 手高貴 本郷	2.50	2.00	0.5	3				1865 SJ2011 余賀貴 本郷	2.45	2.00	0.55	2		
1801 SJ1007 宮代貴 本郷	2.50	1.95	0.6	3				1866 SJ2011 余賀貴 本郷	2.45	2.05	0.60	5		
1802 SJ1007 宮代貴 本郷	2.45	2.10	0.65	3				1867 SJ2011 余賀貴 本郷	2.40	2.00	0.69	2		
1803 SJ1007 天賀貴 朝倉種	2.35	1.95	0.6	4				1868 SJ2011 宮代貴 朝倉種	2.40	2.05	0.70	2		
304 SJ1007 久川貴 朝倉種	2.40	1.85	0.5	3				1869 SJ2011 級代貴 朝倉種	2.35	2.05	0.65	2		
1810 SJ1005 木山貴 古賀家	2.50	2.05	0.5	2				1870 SJ2009 寄付種 古賀家	2.50	2.00	0.80	1	贈付種	
1811 SJ1005 木山貴 古賀家	2.65	2.10	0.6	2				1883 SJ2002 寄付種 古賀家	2.35	1.25	0.59			
1812 SJ1006 元馬貴 古賀家	2.45	2.05	0.65	3				1884 SJ2002 寄付種 古賀家	2.49	2.00	0.52	4		
1813 SJ1006 元馬貴 古賀家	2.45	2.00	0.65	3				1895 SJ2003 寄付種 古賀家	2.49	1.85	0.62			
1814 SJ1006 元馬貴 古賀家	2.45	2.00	0.65	4				1896 SJ2002 寄付種 古賀家	2.39	1.90	0.55			
1815 SJ1006 元馬貴 古賀家	2.45	1.85	0.65	3				1897 SJ2003 寄付種 古賀家	2.35	2.00	0.50			
1820 SJ2004 小山貴 古賀家	2.45	1.85	0.65	3				1898 SJ2002 寄付種 古賀家	2.39	1.90	0.55			
1821 SJ2004 小山貴 古賀家	2.55	2.00	0.6	4				1904 SJ2002 寄付種 古賀家	2.50	1.90	0.50	3	贈付種	
1822 SJ2004 小山貴 古賀家	2.60	1.85	0.5	3				1899 SJ2000 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.53			
1823 SJ2004 小山貴 古賀家	2.55	2.05	0.55	3				1900 SJ2000 寄付種 古賀家	2.50	2.00	0.55	3		
1844 SJ2004 小山貴 古賀家	2.60	1.85	0.45	3				1911 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.60			
1853 SJ2004 小山貴 古賀家	2.45	2.00	0.6	1	一過久魚			1912 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.59	2		
1859 SJ2005 余賀貴 古賀家	2.50	2.00	0.6	2	間寄種			1913 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.50			
1851 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.60	1.80	0.5	2				1914 SJ2005 寄付種 古賀家	2.40	1.90	0.52			
1860 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1915 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.50			
1862 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1916 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.50			
1863 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1917 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.50			
1864 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1918 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.50			
1865 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1919 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.50			
1866 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1920 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.50			
1867 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1921 SJ2005 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.60	3	贈付種	
1868 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1922 SJ2005 寄付種 古賀家	2.50	1.95	—	1	下平次捕	
1869 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1923 SJ2003 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.65	4		
1870 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1924 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	5		
1871 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1925 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.60	3	國友次捕	
1872 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1926 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.55	3	一過久魚	
1873 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1927 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	2.05	0.55	2		
1874 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1928 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.90	0.55	4		
1875 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1929 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	2.00	0.60	3	贈付種	
1876 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1930 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1877 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1931 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1878 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1932 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1879 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1933 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1880 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1934 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1881 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1935 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1882 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1936 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1883 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1937 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1884 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1938 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1885 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1939 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1886 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1940 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1887 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1941 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1888 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1942 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1889 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1943 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1890 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1944 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1891 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1945 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1892 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1946 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1893 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1947 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1894 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1948 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1895 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1949 SJ2004 寄付種 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1896 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1950 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1897 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1951 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1898 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1952 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1899 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1953 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1900 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1954 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1901 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1955 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1902 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1956 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1903 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1957 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1904 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1958 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1905 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1959 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1906 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1960 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1907 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1961 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1908 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1962 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1909 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1963 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1910 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1964 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1911 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1965 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1912 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1966 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1913 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1967 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1914 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1968 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1915 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1969 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1916 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1970 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1917 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2				1971 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.95	0.55	2		
1918 SJ2004 余賀貴 古賀家	2.45	1.85	0.5	2			</td							

10. 包含層・攪乱出土遺物

ここでは、包含層及び攪乱から出土した多量の出土遺物のうち、特徴的なものを図示する。

山茶碗（図 268、図版 32・69）

1934～1952は山茶碗類である。1951が東遠江産である以外は全て渥美湖西産である。

1934はI-1期の山茶碗で、高台も高く体部から口縁部にかけての湾曲が顕著である。また口縁部には灰釉が漬け掛けされている。1935～1937・1939はI-2期の山茶碗である。1935・1937は口縁

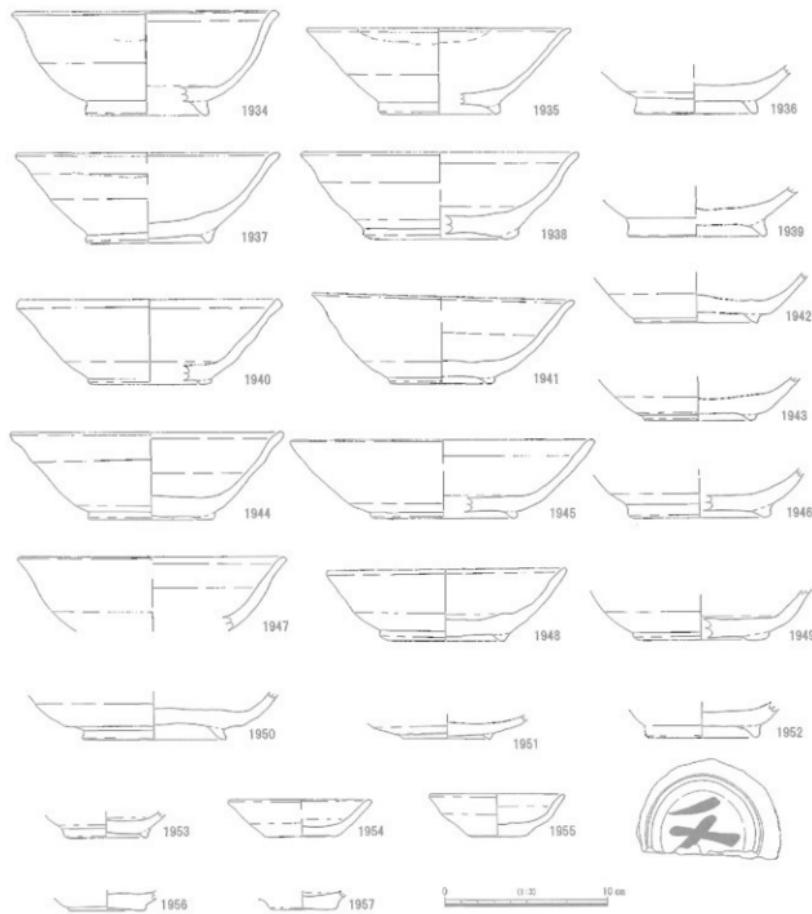


図 268 包含層・攪乱出土遺物（1）

部に三方の灰釉漬掛けが観察され、体部から口縁部にかけて直線的に開く特徴がある。1938・1940～1947・1949・1950はⅢ-1期の山茶碗である。器壁が厚くなると同時に高台の省力化が顕著となり、かなり低いものとなる。1940のように口縁端部が肥厚するものもある。1945は内面に煤が付着しており、灯明具への使用を窺わせる。1948はⅢ-2期の山茶碗で、Ⅲ-1期の製品に比べ、口径は小さくなり、高台も低くなる。

1951は東遠江産Ⅲ-1期の山茶碗である。青灰色に焼成され、高台は断面三角形となる特徴的なものである。当遺跡では東遠江産の製品はほとんど出土しておらず、その流通圏から遠く外れていることが窺われる。

1953はI-2期に位置づけられる小碗である。1954～1957は小皿で、1954・1955は器高が4cm前後と高く、Ⅱ期の製品とみられる。1956・1957は底部のみであるため明確でないが、底部から体部の様子からかなり扁平になることが想定されるため、Ⅲ-2期頃の製品と思われる。

1952は墨書き土器である。Ⅱ期の山茶碗で、「又」と読める。

片口鉢・壺・壺（図269、図版31）

1958・1959は常滑産の片口鉢である。1958は壺系の片口鉢で、口径15.8cmに復元される小型の製品である。底部には窯屑が付着したままになっている。常滑5～6a型式に位置づけられよう。1959は山茶碗系の片口鉢で、常滑5型式頃のものとみられる。

1960は渥美窯産の壺の口縁部破片で、自然釉が内外面に観察されるⅠ期の製品であろう。1961・1962は常滑産の壺の口縁部破片である。口縁部が折り返される1961は常滑10型式に位置づけられる。口縁上部外側に突帯を持つ1962は、かなり軟質に焼成される17世紀頃の製品であろう。

1963は渥美窯産の壺で、肩部に線刻文が施される。文様の詳細は明確でないが、井桁状の線刻がみられる。1964は常滑産の壺で、口縁が外に折り返される常滑10型式に位置づけられる遺物である。

土師質土器皿（図269～271、図版32・69・70）

1965～1985・1991～1997は土師質土器の皿である。

1965・1966はロクロ成形品で1965は器高が低く16世紀中～後葉に位置づけられよう。1966は胎土が橙色を呈し、器高が高く器壁が厚手である。17世紀代の製品と考えられる。

1967～1985は、非ロクロ成形の土師質土器皿である。1967～1969は厚手で、底部外面は指頭が残るオサエ調整、口縁部は横ナデ調整が施される13世紀代の製品であろう。

1970～1985は薄手のつくりで、胎土は灰白色で緻密となるので、口縁端部外側にナデによる面を作り出す特徴を持つ。16世紀中～後葉の製品であろう。1973～1985はやはり灰白色で緻密な胎土を持ち、外面は指頭の残るオサエ調整、内面はナデ調整またはヘラ状工具による調整が施されるものである。1973～1978のように体部から口縁にかけて外傾させるもの、1979～1982のように浅いもの、1983～1985のように口縁を上方に立ち上げるものがある。16世紀後葉～17世紀代にかけての製品であろう。

1991～1997は、1973～1985の皿と類似するが、胎土は橙色に近く、器壁が薄くなるもので、17～18世紀代の製品とみられる。1995～1997のように口径8cm以下となるような小型品もある。

土師質土器釜・鍋（図270・271、図版32）

1986～1990・1998～2007は土師質土器の鍋で、2001は釜である。1986・1987は伊勢鍋である。ともに使用による被熱が顕著であり、体部～口縁部外面には煤が多く付着し、内面にも内容物の痕跡とみられる変色が観察される。13世紀代のものであろう。

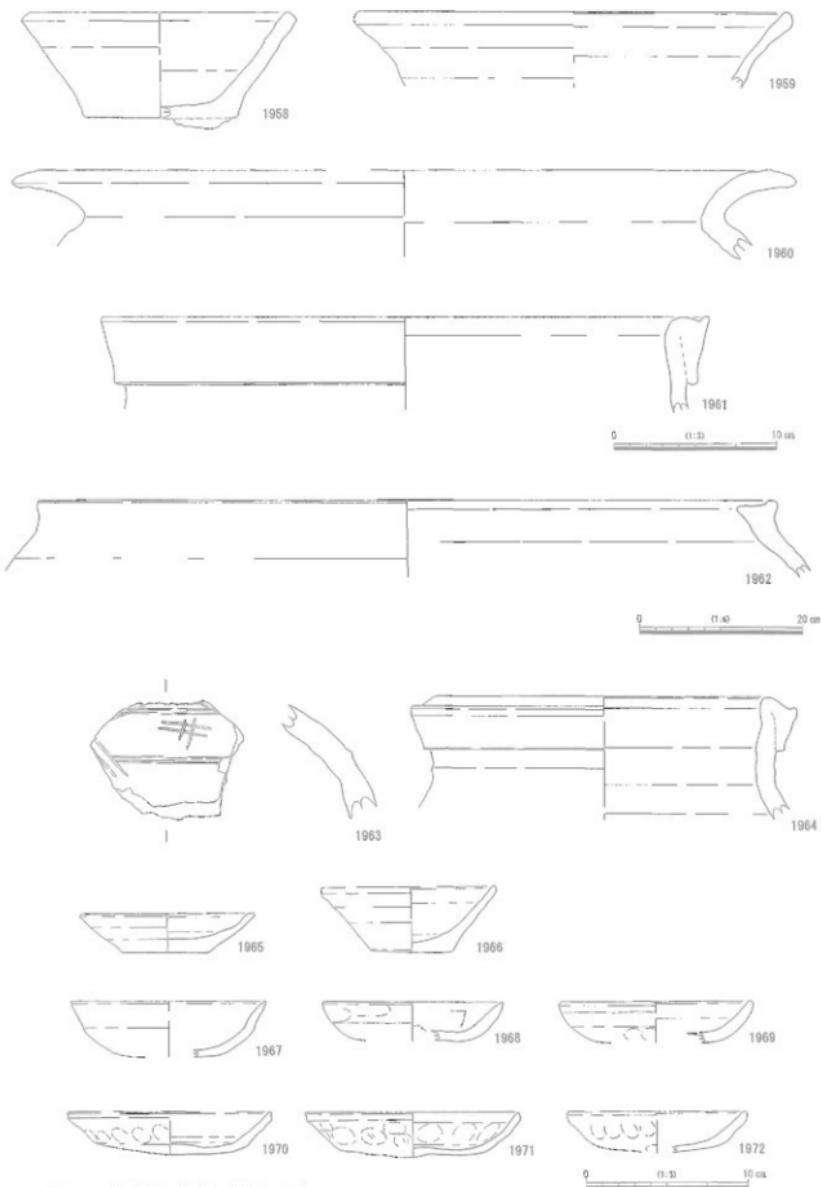


図 269 包含層・擾乱出土遺物（2）

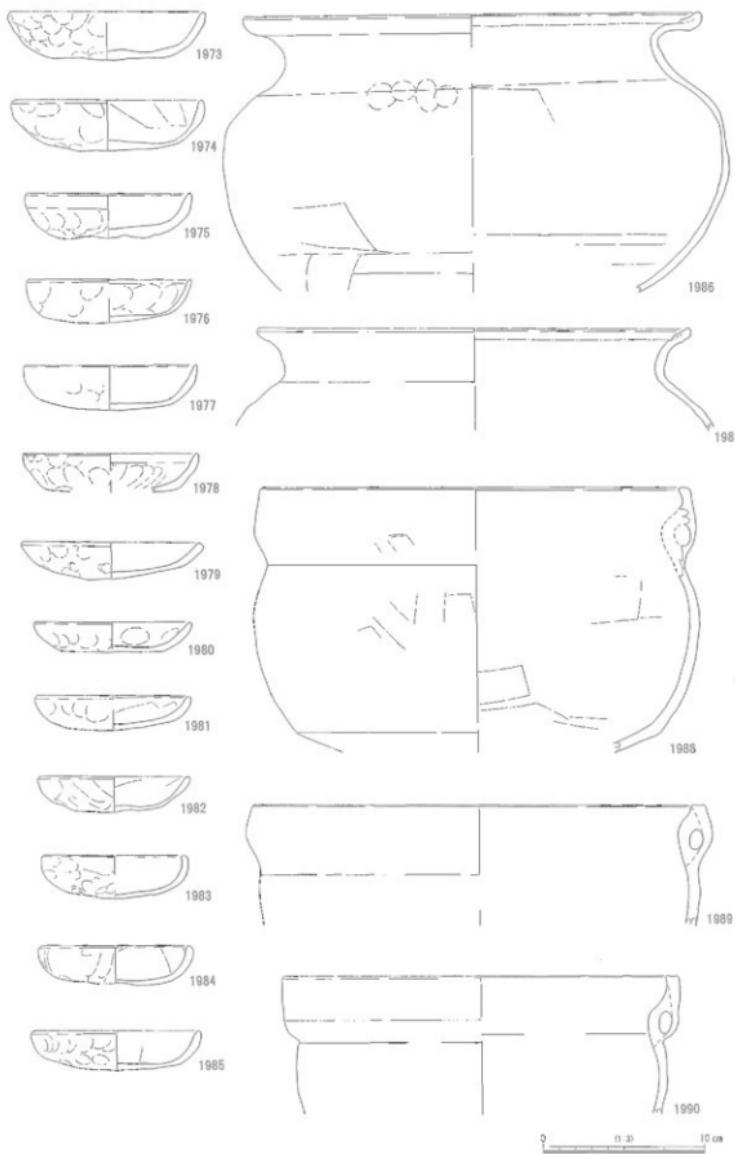


図 270 包含層・擾乱出土遺物 (3)

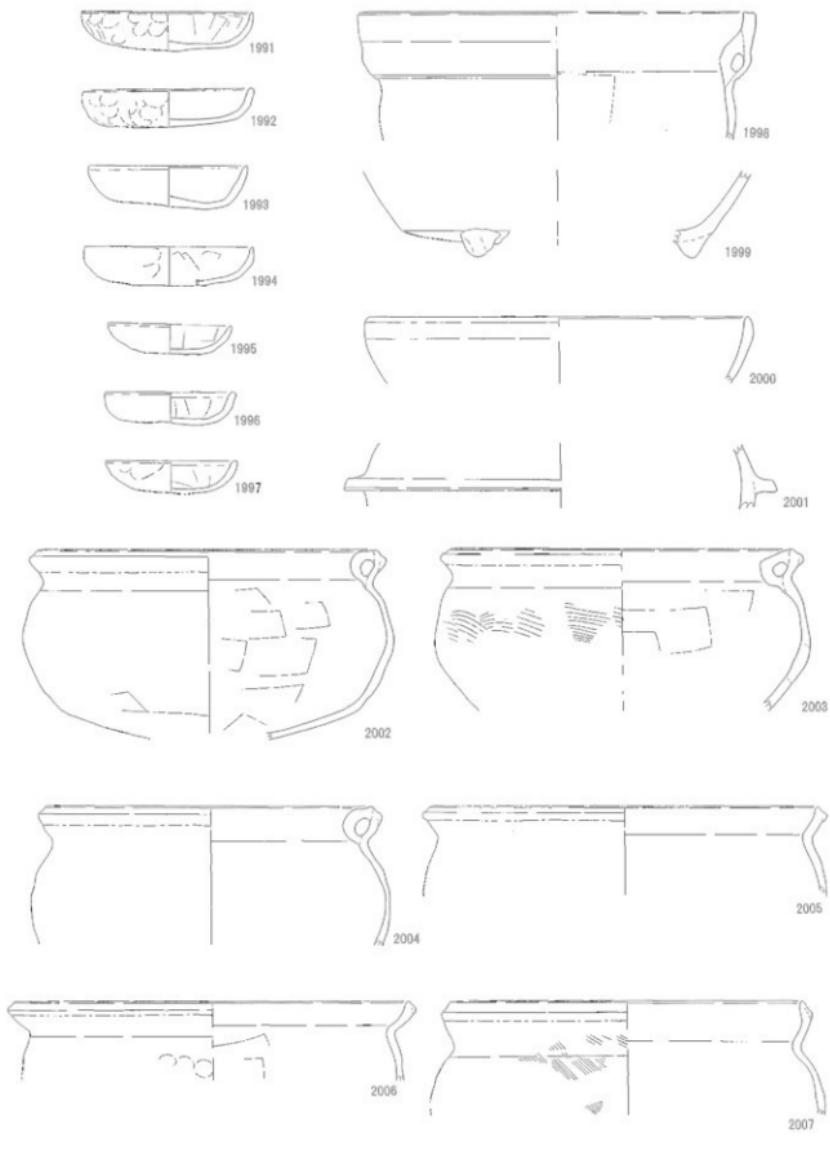


図271 包含層・擾乱出土遺物（4）

1988～1990は内輪形内耳鍋の体部及び口縁部破片である。1989は口縁部が若干短いもので、古手に位置づけられる可能性があるが、概ね16世紀代の範疇で捉えられるものであろう。1999は内輪形内耳鍋の底部で、脚が取り付けられる。おそらく三方に取り付けられていたのだろう。2000は半球形内耳鍋の口縁部破片、2001は羽釜の体部に取り付けられた羽部の破片である。2002～2007はくの字形内耳鍋である。体部外面には使用によって煤が多く付着し、わずかにハケ調整が観察される。2002～2004には内耳が残存しているが、目立った使用痕はない。15世紀中葉～16世紀代にかけての製品であろう。

貿易陶磁（図272、図版33）

2008～2021は貿易陶磁である。

2008～2017は青磁碗である。2008は底部内面に草花文とみられる文様をヘラ彫りするA2類の青磁碗であろう。2009～2017は体部外面に鑄造弁文が施されるB1類に分類される青磁碗である。2018は底部のみで判然としないが、青磁折縁皿であろう。2019は青磁盤で、口縁部が欠けているが、小型品とみられる。体部外面に蓮弁文が施されるもので、SD6002出土の881（図108）とは直接接合はしないが、同一個体とみられる。

2020・2021は白磁碗である。2020は口縁端部に釉が掛からないIX類に分類されるものである。2021は底部の破片で判然としないが、V類の碗の可能性が高い。

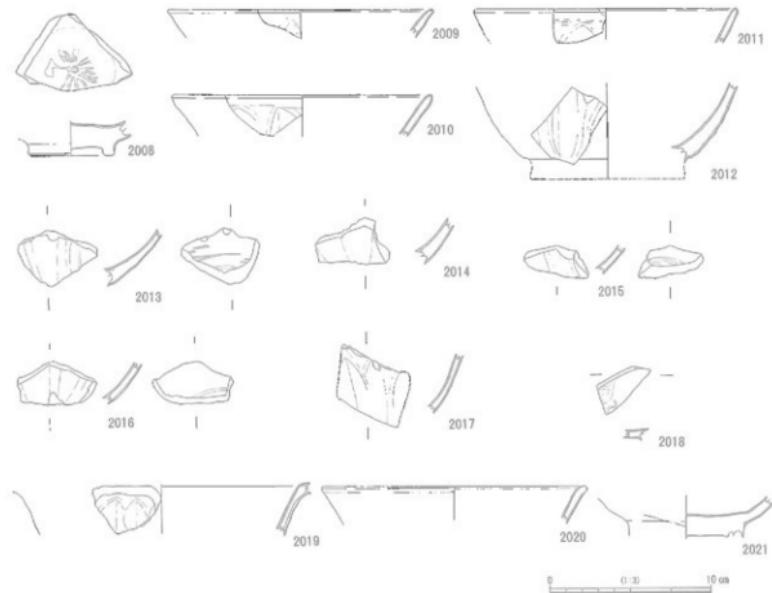


図272 包含層・擾乱出土遺物（5）

瀬戸美濃系施釉陶器（図273、図版32・70）

2022～2037は瀬戸美濃系施釉陶器である。2024・2028・2033が初山窯、2031・2034が志戸呂窯の製品である以外は瀬戸美濃窯の製品である。

2022～2025は天目茶碗で、2022は古瀬戸後I期、2025は大窯第1段階、2023は大窯第2段階、2024は大窯第3段階並行の初山窯の製品である。2025は底部から体部にかけての内面に茶筅によるとみられる縦かい傷が無数に観察される。

2026～2029は皿類である。2026は古瀬戸後I期の灰釉綠釉小皿、2027は大窯第2段階の鉄釉稜皿、2028は初山窯産の鉄釉内堀皿、2029は古瀬戸後I期の灰釉豆皿である。2028は底部内外面に重ね焼きの痕跡が付着している。2030は古瀬戸後II期の灰釉折綠深皿の口縁部破片で、二次焼成が顕著である。

2031～2034は擂鉢で、2031・2034は古瀬戸後IV期並行の古志戸呂製品、2032は大窯第2段階の製品、2033は初山窯製品である。古志戸呂製品は軟質に焼成されており、摩滅が著しい。

2035～2037は壺瓶類である。いずれも底部破片で、2035は古瀬戸前III期の鉄釉口広有耳壺、2036は古瀬戸前III～IV期の灰釉瓶子、2037は古志戸呂製品の鉄釉瓶子である。

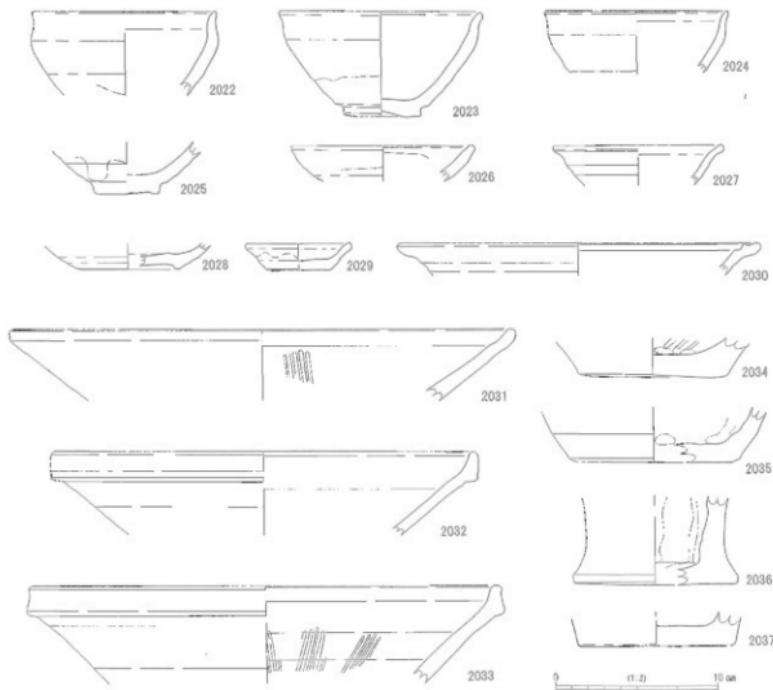


図273 包含層・擾乱出土遺物（6）

近世陶磁器（図 274～276、図版 33・70）

2038～2077は近世陶磁器である。大半は瀬戸美濃製品であるが、肥前産の磁器も少數ながら見受けられる。2038～2048は碗類である。2038は登窯5～6小期の美濃窯の尾呂茶碗である。2039～2041は腰錆茶碗で、2039は登窯5～6小期、2040は登窯6小期、2041は登窯8小期に位置づけられる、いずれも瀬戸窯の製品である。2042は登窯8小期の糸目茶碗、2043・2044は登窯6～7小期の御室茶碗である。2046～2047は小中で、2046と2047は小碗である。いずれも登窯8～9小期の瀬戸窯の製品であろう。

2048は肥前産の磁器碗の底部破片で、18世紀中頃のものであろう。2049は17世紀後葉～18世紀前葉頃の肥前産小坏であろう。

2050～2056は皿類である。2050・2051は登窯4小期の灰釉丸皿、2052は登窯4小期の志野皿である。2053は登窯8～9小期の梅文皿、2055は登窯8～9小期の染付皿、2056は登窯11小期の染付磁器皿である。

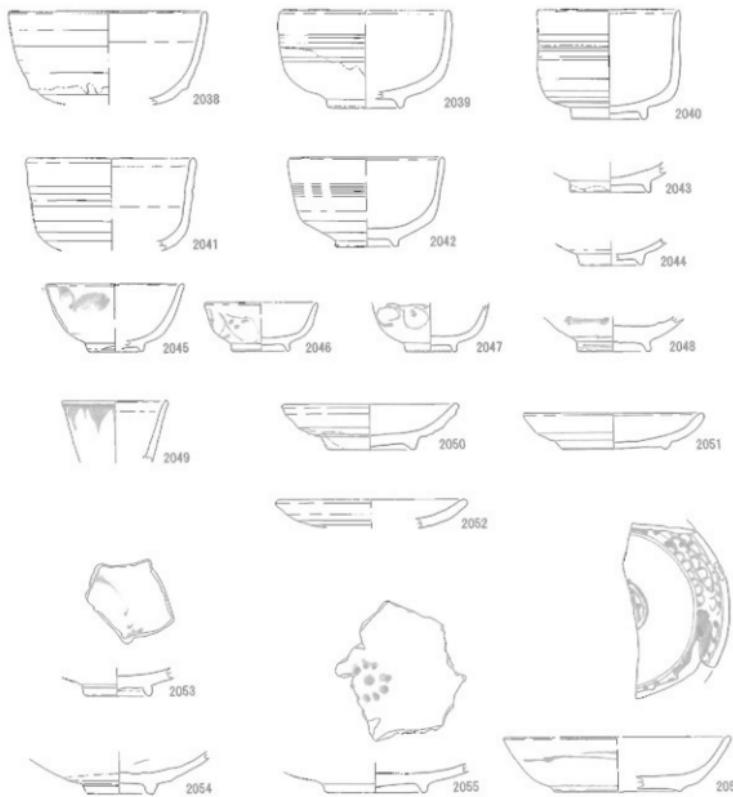


図 274 包含層・擾乱出土遺物（7）

0 10 20 cm

である。2054は肥前産の染付皿で、17世紀後葉～18世紀前葉の製品であろう。

2057～2062は片口である。2057は小型品で、登窯7小期の製品であろう。2058は登窯8小期頃の製品の底部破片であるが、底部外面に判読不明の墨書が認められる。2059、2061の口縁部破片は登窯6～7小期のものであろう。2060と2062は同一個体で、登窯8小期の美濃窯の製品である。

2063は登窯8～9小期の灰釉有耳壺の底部破片、2064は登窯8小期の黄瀬戸鉢、2065は登窯11小期の灰釉練鉢である。2066は登窯7～8小期に位置づけられる鉄釉小壺であるが、底部外面に「きん二介」と判読できそうな墨書がある。

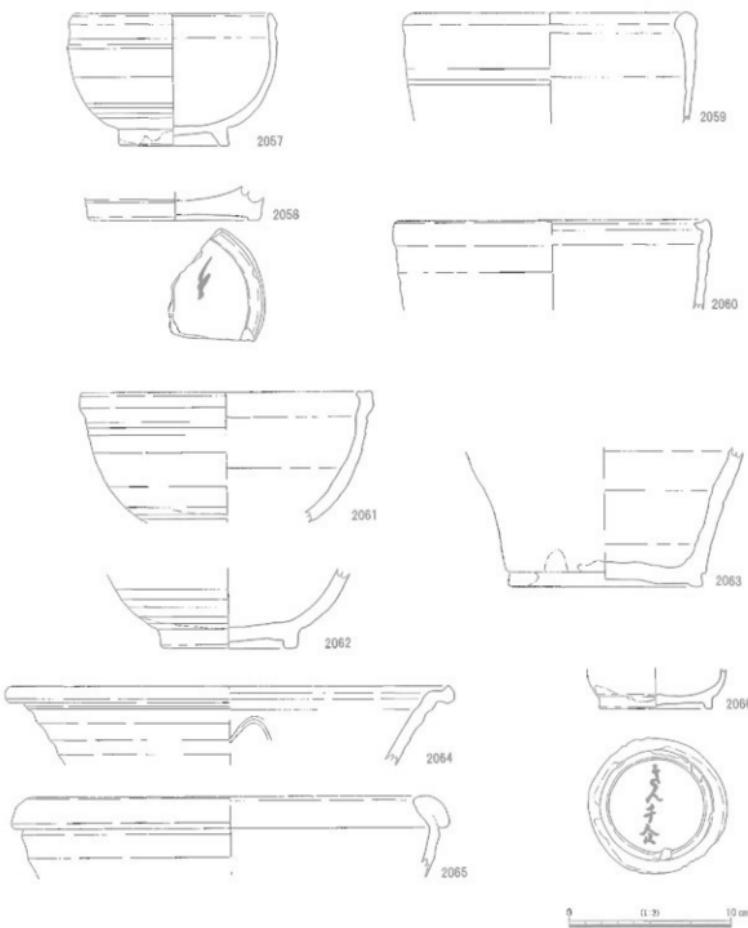


図275 包含層・擾乱出土遺物（8）

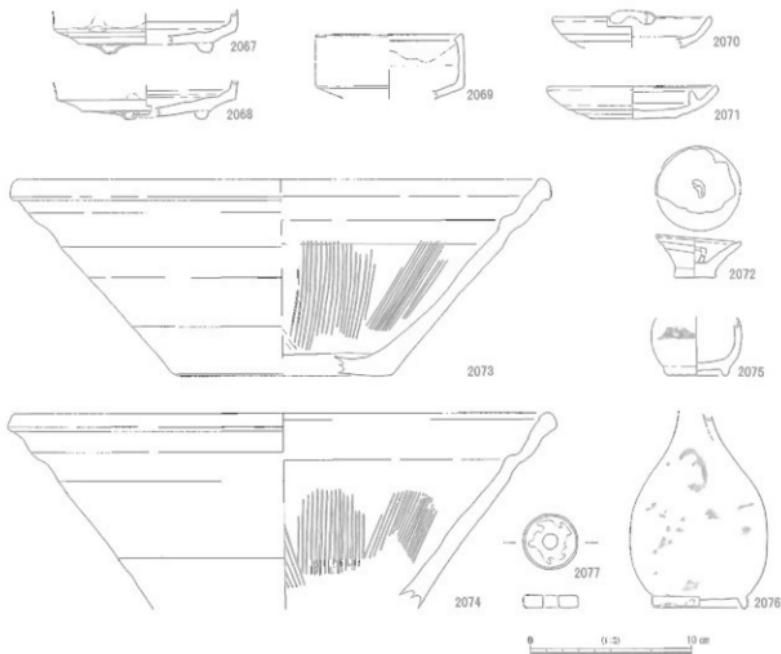


図 276 包含層・擾乱出土遺物（9）

2067～2069は香炉で、2067は登窯6小期、2068は登窯7小期、2069は登窯8小期に位置づけられる。2070・2071は灯明皿で、2070は登窯7小期、2071は登窯9～10小期の製品であろう。同じく灯明具である2072は秉擣は登窯10～11小期のものであろう。2073・2074の擂鉢は、2073が登窯8小期、2074が登窯9小期に位置づけられる製品である。

2075は肥前産の御神酒徳利で、鶴首瓶とも呼ばれる18世紀後葉～19世紀前葉頃のものであろう。2076は漸戸窯の登窯8～9小期頃に位置づけられる小瓶である。2077は磁器戸車で、肥前産とみられる。

瓦（図 277・278）

2078～2094は瓦である。2078～2086は丸瓦である。いずれも凸面はナデ調整が施され、凹面には布目と吊り紐痕が確認される。2078は狹端部の破片で、凹面の狹端には面取り調整が施されている。布に隠れている長さを1とした時の、布から出た部分の吊り紐の比率は0.8となっている。2078と2079には釘穴が認められる。2084は布目が他の丸瓦に比べて粗く、有段式である可能性が高い。2080と2086は広端部の破片であり、広端面には離れ砂の付着が認められる。2081～2083は側端部の破片である。いずれも凹面の側端には、幅の広い面取り調整が施されている。2082には被熱の痕跡が顕著に認められる。

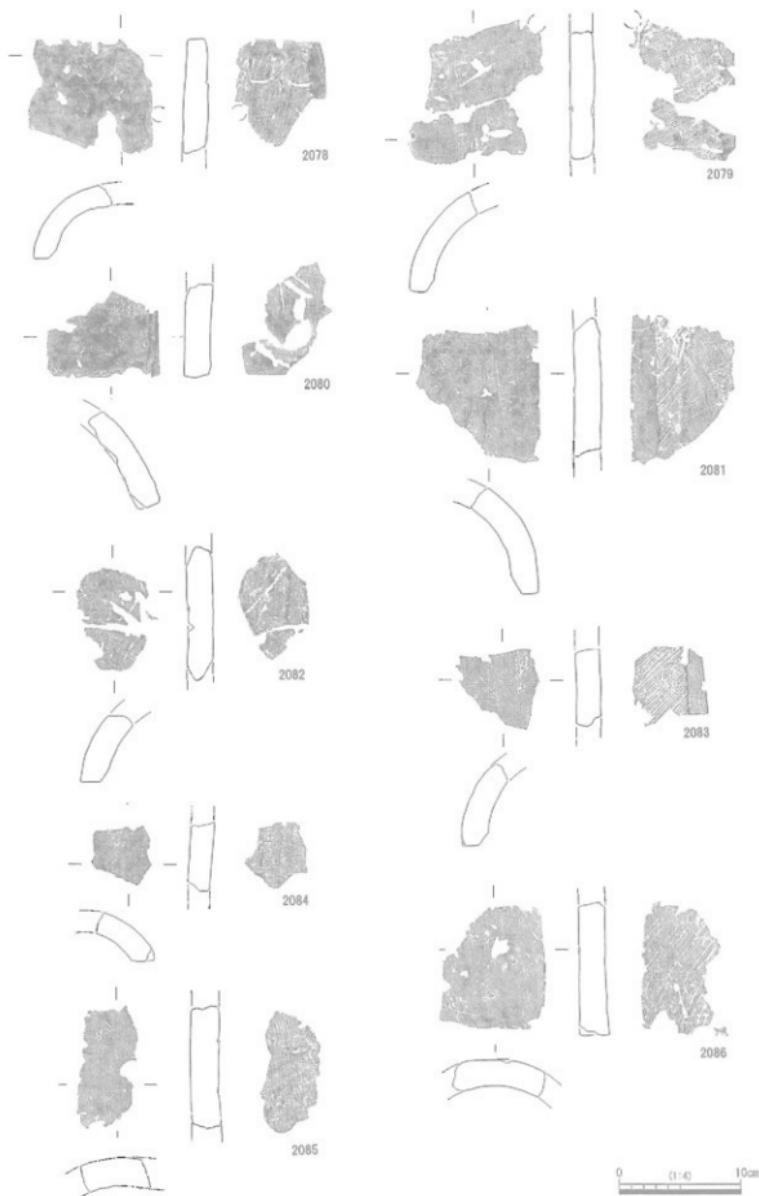


図 277 包含層・擾乱出土瓦 (1)

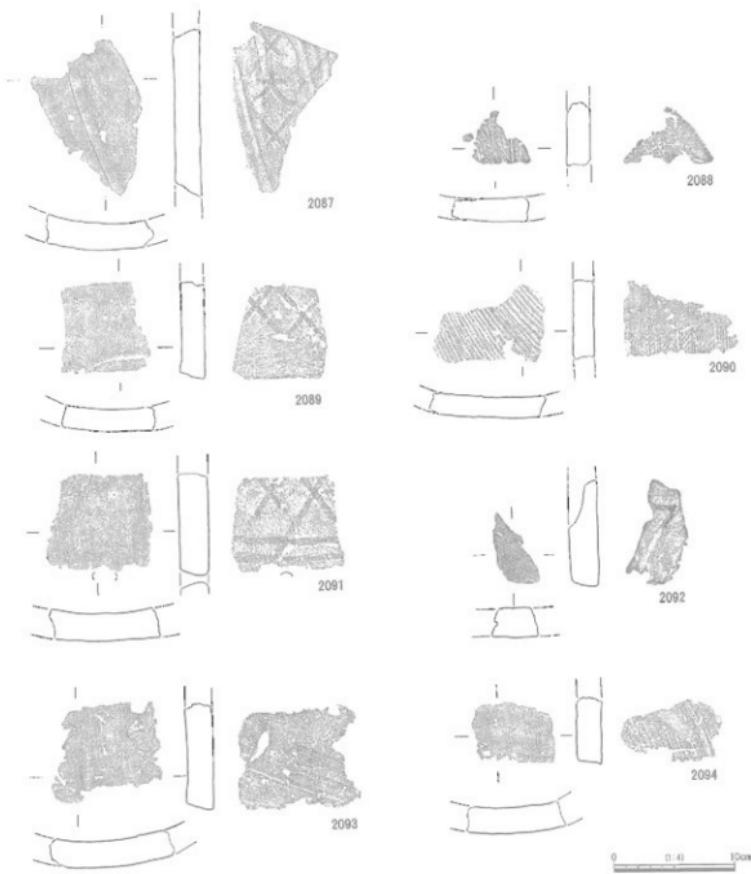


図278 包含層・擾乱出土瓦（2）

2087～2094は平瓦である。2090は全体的に薄手のつくりであり、凸面には細かい縄叩きが施される。凹凸面ともに離れ砂の使用は認められず、凹面には糸切り痕が明瞭に残る。2088は表面の摩滅が著しく、やや不明瞭ではあるが、2090と同様に縄目叩きが施されているものとみられる。2087と2089は、縦長斜格子の叩き目を残すもので、2087には「大」の字が認められる。ともに凸面には、離れ砂の付着が認められる。2087の凹面には布目が残り、離れ砂は付着していない。2089は広端部の破片であり、広端面にも離れ砂の付着が認められる。2091・2092は凸面に縦長斜格子+横線の叩き目を残すもので、凹凸面には離れ砂が付着する。2093と2094は凸面に明瞭な叩き目がみられず、凹凸面には離れ砂が付着する。いずれも広端部破片で、2094には釘穴がみられる。

土製品（図279、図版33）

2095～2099は土製品である。2095は招き猫、2096は地蔵菩薩像とみられ、型押しの土製品である。2097と2098は内面に布目が観察される中空となる製品で、不明瞭ながら2098は顔の一部で鼻と口を表現したものであろう。2099は動物等の脚部であろうか。これらは遺構外から出土しているが、近世墓に副葬されたもの一部である可能性が高い。

石製品（図279、図版32）

2100～2102は石製品である。2100は茶臼下部の端部破片である。2101と2102は磁石で、大型の2101は砂岩質でやや粗く、持ち砥石とみられる。2102は凝灰岩質で目がやや細かい。

金属製品（図280～281、図版83）

2103～2142は錢貨である。遺構外から出土しているが、重なる状態で出土したものについては、本来墓に副葬された六道銭と考えられる。

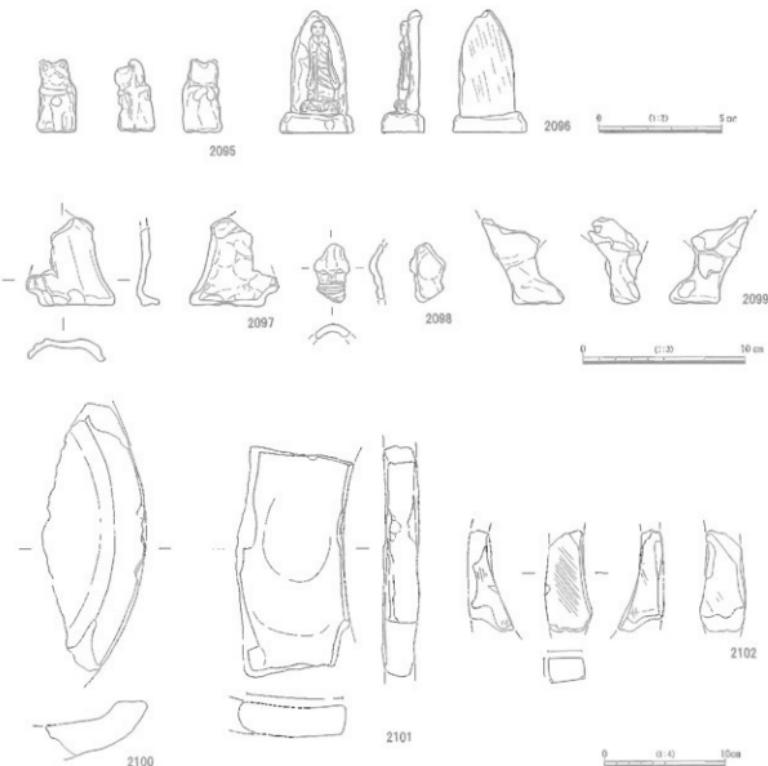


図279 包含層・擾乱出土土製品・石製品

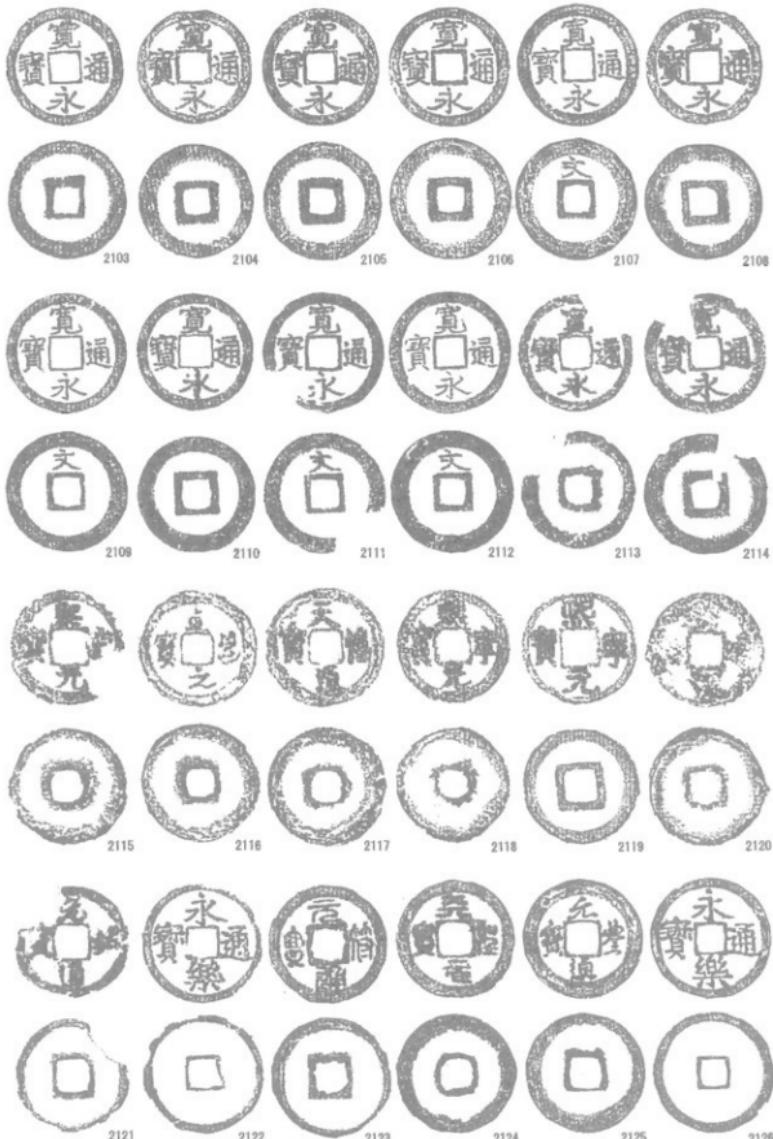


图 280 包含層・擾亂出土銭貨（1）

2103～2108は近世墓が集中する3区の残存土壙付近で6枚重なって出土したものである。2107が背文の入る新寛永である以外は古寛永である。2109～2114も3区残存土壙付近で集中して出土している。2110・2113・2114は古寛永、2109・2111・2112は背文の入る新寛永である。木片が伴出していることから、棺や容器などの木製品を伴っていたのであろう。

2115～2120は確認調査時に5区H1区西端付近で6枚重なって出土している。2115・2118・2119は熙寧元宝、2116は至道元宝、2117は天禧通宝、2120は文字が判読できず、不明である。いずれも被熱の痕跡が確認されることから、中世に帰属する火葬墓に伴う遺物と判断される。

2121～2126は6区I 14区で6枚重なって出土している。2121は元祐通宝、2122・2126は永樂通宝、2123は元符通宝、2124は天聖元宝、2125は元豐通宝である。Ⅲ群の掘立柱建物群付近であり、年代的にもほぼ合致することから、屋敷墓に伴う副葬品であった可能性が高い。

2127～2131は出土地点不明ながら5枚重なって出土しており、2132が新寛永である以外は古寛永で

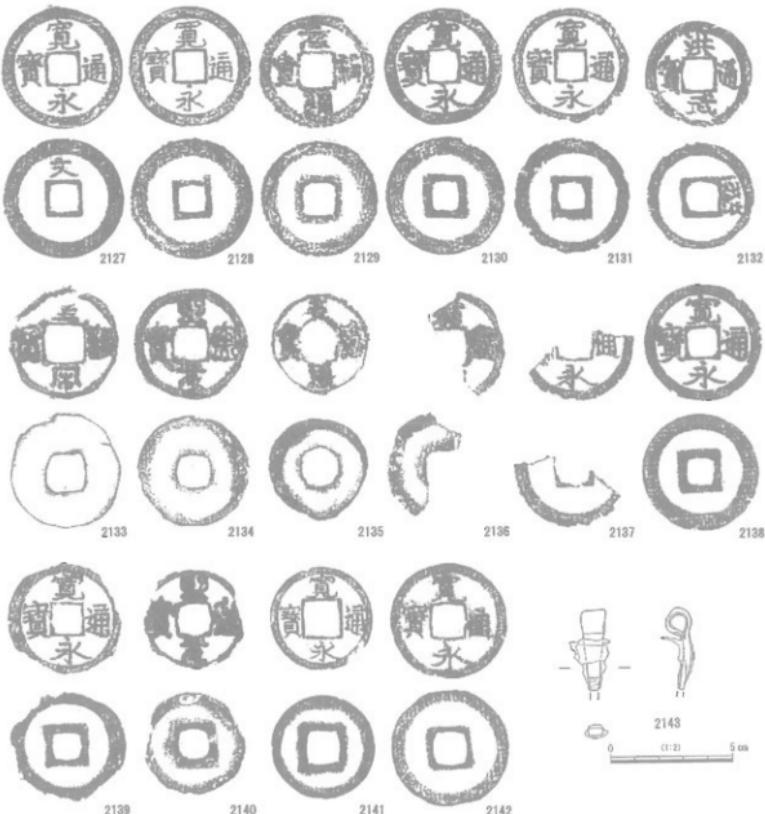


図 281 包含層・擾乱出土銭貨（2）、鉄製品

構成される近世墓に伴うものであろう。

2132～2136は3区擾乱でまとめて出土している。2132は背に「一錢」と鋳出される洪武通宝、2133は皇宋通宝、2134は熙寧元宝、2135は天聖元宝、2136は不明である。出土状況は不明ながら中世墓に伴ったものとみられる。

2137～2142は単独で包含層あるいは擾乱より出土した銭貨で、2137・2141・2142は新寛永、2138・2139は古寛永である。3140は熙寧元宝で、被然の痕跡が認められる。

2143は鉄製品であるが、用途は不明である。基部に木質が残るため、何らかの木製品の金具と考えられる。

表27 包含層擾乱出土 土器・陶磁器觀察表 (1)

番号	遺物名	グリッド	種類	断続	底地	弓脚・脚式	D値 (mm)	底径 (mm)	最高 (mm)	高さ (mm)	保存率	形状	施釉	色調	備考
1934	旗頭	土壌付近	山形瓶	破	透視開口	I-1	(15.5)	(6.4)	(7.0)	口縁～底部1/5	食器類	灰白			
1935	旗頭		山形瓶	破	透視開口	I-2	(15.2)	(6.3)	(6.0)	口縁～底部1/4	食器類	灰白			
1936	旗頭	土壌付近	山形瓶	破	透視開口	I-2			7.1	底部1/5		灰白			
1937	旗頭	G7-NW	山形瓶	破	透視開口	I-2	(15.95)	5.55	6.9	3/4	内面・自然縫	灰白			
1938	旗頭	G15-NW	山形瓶	破	透視開口	II-1	(10.71)	(5.39)	(6.0)	口縁～底部1/3	内面・自然縫	灰白			
1939	旗頭	土壌付近	山形瓶	破	透視開口	I-2			8.1	底部1/6		灰白			
1940	旗頭	F34-NW	山形瓶	破	透視開口	II-1	(10.2)	(5.25)	(6.0)	口縁～底部1/4	内面・自然縫	灰白			
1941	旗頭	F34-NW	山形瓶	破	透視開口	II-1	(10.0)	5.35	5.6	1/4		灰白			
1942	旗頭	F34-NW	山形瓶	破	透視開口	II-1			7.5	伴部～底部3/4	内面・自然縫	灰白			
1943	生糞便	G2-SE	山形瓶	破	透視開口	II-1			(5.4)	底部1/2		灰白			
1944	旗頭	F34-NW	山形瓶	破	透視開口	II-1	16.5	5.4	7.5	1/4		灰白			
1945	旗頭		山形瓶	破	透視開口	II-1	(10.4)	(4.0)	(6.0)	口縁～底部1/4	内面・自然縫	灰白			
1946	旗頭	G20-NE	山形瓶	破	透視開口	II-1	(10.0)	(4.0)	(6.0)	底部1/2		灰白			
1947	旗頭	G20-NW	山形瓶	破	透視開口	II-1			8.0	口縁～底部1/6	内面・自然縫	灰白			
1948	旗頭	B6-SE	山形瓶	破	透視開口	II-2	14.5	4.4	6.0	4/5	内面・自然縫	灰白			
1949	旗頭	土壌付近	山形瓶	破	透視開口	II-1			(5.5)	底部1/2	内面・自然縫	灰白			
1950	旗頭	F11-NE	山形瓶	破	透視開口	II-1			(5.2)	底部1/2	内面・自然縫	灰白			
1951	照葉(土上)		山形瓶	破	透視開口	II-1			5.3	底部のみ	内面・自然縫	灰白			
1952	旗頭		山形瓶	破	透視開口	II			6.6	底部1/2		灰白			
1953	旗頭	F34-NW	山形瓶	破	透視開口	I-2			4.9			灰白			
1954	旗頭	G7-NW	山形瓶	小破	透視開口	II	8.5	4.3	2.95	4/5		灰白			
1955	旗頭	G7-NW	山形瓶	小破	透視開口	II	8.2	3.7	2.6	4/5	食器類	灰白			
1956	旗頭	土壌付近	山形瓶	小破	透視開口	I-2	4.7		4.7	底部		灰白			
1957	旗頭		山形瓶	小破	透視開口	II-2			5.5	口縁～底部1/6	内面・自然縫	灰白			
1958	生糞便	F33-NW	中世開口瓶	片口	穿孔	常	5～8a	見出	(15.0)	(8.2)	(5.9)	口縁～底部1/4	灰白	にいき骨・灰灰	
1959	生糞便	H25-SW	中世開口瓶	片口	穿孔	常	5	5式	(26.4)			口縁～底部1/3	内面・自然縫	灰白	
1960	生糞便	C10-NW	中世開口瓶	片口	穿孔	常	7.0	4.0	(45.0)			口縁～底部1/10	灰白		
1961	旗頭		中世開口瓶	常	穿孔	常	10	式	(37.2)			口縁～底部1/6	内面・自然縫	灰白	
1962	大湖付近		中世開口瓶	常	穿孔	常	(60.4)					口縁～底部1/6	内面・自然縫	灰白	
1963	旗頭		中世開口瓶	常	穿孔	常						伴部付	灰白		
1964	旗頭	土壌付近	中世開口瓶	常	穿孔	常	10	式	(20.4)			口縁～底部1/4	内面・自然縫	灰白	
1965	旗頭		土壌付近	常	口フロ	(32.0)	5.2	2.45		1/6		灰白			
1966	生糞便		土壌付近	常	口フロ	(10.5)	5.1	4.0		4/5		灰白			
1967	生糞便	D6-NE	土壌付近	常	口フロ	(11.9)	(5.7)	(3.4)		口縁～底部1/10		灰白			
1968	生糞便	F33-SW	土壌付近	常	口フロ	(11.5)	(5.4)	(2.4)		口縁～底部1/4	内面・自然縫	灰白			
1969	生糞便		土壌付近	常	口フロ	(11.7)				口縁～底部1/6		灰白			
1970	旗頭		土壌付近	常	口フロ	12.5	9.0	2.6		口縁～底部1/2	内面・自然縫	灰白			
1971	生糞便	H164-NW	土壌付近	常	口フロ	13.0	5.2	2.75		1/2		灰白			
1972	旗頭	F12-NE	土壌付近	常	口フロ	13.0	7.0	(2.0)		口縁～底部1/4	内面・自然縫	灰白			
1973	旗頭		土壌付近	常	口フロ	(11.6)	(6.6)	(1.66)		1/5		灰白			
1974	罐		土壌付近	常	口フロ	11.55	5.6	3.15		2/3		灰白			
1975	生糞便		土壌付近	常	口フロ	10.1	4.65	2.79		口縁～底部欠損		灰白			
1976	旗頭		土壌付近	常	口フロ	10.0	7.7	2.65		口縁～底部		灰白			
1977	生糞便		土壌付近	常	口フロ	10.05	8.35	2.7		口縁～底部欠損		灰白			
1978	旗頭		土壌付近	常	口フロ	10.0	8.35	2.7		口縁～底部1/2		灰白			
1979	旗頭		土壌付近	常	口フロ	10.5	7.3	2.3		4/5		灰白			
1980	旗頭		土壌付近	常	口フロ	9.5	(5.6)	(1.05)		1/5		灰白			
1981	生糞便	C19-SW	土壌付近	常	口フロ	9.4	7.0	2.1		2/5		灰白			
1982	旗頭		土壌付近	常	口フロ	9.0	5.3	2.2		4/5		灰白			
1983	生糞便	E7-NE	土壌付近	常	口フロ	(8.5)	(7.2)	2.65		2/3		灰白			
1984	生糞便	E7-NE	土壌付近	常	口フロ	9.0	6.65	2.3		4/5		灰白			
1985	旗頭		土壌付近	常	口フロ	10.0	8.6	2.5		4/5		灰白			
1986	旗頭	C6-SE	土壌付近	伊豫鉢		27.75				口縁～底部7/8		灰白			
1987	旗頭	F34-SW	土壌付近	伊豫鉢		(66.6)				口縁～底部1/4		にいき骨・灰灰			
1988	旗頭		土壌付近	内耳瓶		25.8				口縁～底部1/4		灰白			
1989	旗頭		土壌付近	内耳瓶		67.0				口縁～1/4		内耳瓶			
1990	生糞便	E33-SW	土壌付近	内耳瓶		24.2				口縁～1/3		内耳瓶			
1991	生糞便		土壌付近	内耳瓶		30.0	5.7	2.4		变形		灰白			
1992	生糞便		土壌付近	内耳瓶		30.0	7.8	2.35		口縁～1/2		灰白			
1993	旗頭		土壌付近	内耳瓶		30.0	(9.7)			2.5		灰白			
1994	生糞便		土壌付近	内耳瓶		30.0	(7.4)	(2.4)		口縁～底部1/2		にいき骨・灰灰			
1995	生糞便	E30-SW	土壌付近	内耳瓶		7.4	3.5	1.7		变形		にいき骨・灰灰			
1996	生糞便	D30-SW	土壌付近	内耳瓶		7.6	6.1	1.56		口縁～1/2		灰白			
1997	生糞便	D30-SW	土壌付近	内耳瓶		30.0	5.35	1.8		变形		灰白			
1998	生糞便	E23-SW	土壌付近	内耳瓶		23.31				口縁～1/5		灰白			
1999	生糞便	G12-SE	土壌付近	内耳瓶		(19.02)				底部1/5		灰白			

表 26 包含層擾乱出土 土器・陶磁器觀察表 (2)

地	通称名	層位	埋蔵	断面	当・式	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	高台高 (cm)	斜度	地質	地質	地質	地質	
2000	御器	土壌有透	土器質土器	内側鍋	単耳型	(23.3)					口縁部 1/15		泥質		
2001	御器	土壌有透	土器質土器	煎茶器	くの字形	(20.6)					頂部 1/10		灰白		
2002	御器	土壌有透	土器質土器	内側鍋	くの字形	(20.6)					口縁～底部 1/2		灰白	外間に復付器	
2003	包合層	020-5W	土器質土器	内側鍋	くの字形	(20.0)					口縁～底部 1/4		灰白	外間に復付器	
2004	御器	土壌有透	土器質土器	内側鍋	くの字形	(20.0)					口縁～底部 1/3		灰白	外間に復付器	
2005	御器	土壌有透	土器質土器	内側鍋	くの字形	(23.6)					口縁部 1/5		灰白	外間に復付器	
2006	御器	土壌有透	土器質土器	内側鍋	くの字形	(24.0)					口縁部 1/6		灰白	外間に復付器	
2007	御器	土壌有透	土器質土器	内側鍋	くの字形	(21.6)					口縁部 1/10		灰白	外間に復付器	
2008	大内系復付器	貿易品	青磁器	建葉器皿	A2型										
2009	御器	12-ANW	貿易品	青磁器	建葉器皿	91 横	(16.2)				口縁部 1/20		青白	オリーブ波ノ復付	
2010	御器	H20-4W	貿易品	青磁器	建葉器皿	91 横	(15.0)				口縁部 1/9		青白	明治時代ノ復付	
2011	御器	G10-16W	貿易品	青磁器	建葉器皿	91 横	(15.0)				口縁部 1/16		青白	明治時代ノ復付	
2012	御器	上田	近	貿易品	青磁器	建葉器皿	91 横				底盤 1/6		青白	オリーブ波ノ復付	
2013	御器	上田	近	貿易品	青磁器	建葉器皿	91 横				底盤内		青白	明治時代ノ復付	
2014	御器	021-12W	貿易品	青磁器	建葉器皿	91 横					底盤内		青白	云マークノ復付	
2015	御器	御器	土器質土器	内側鍋	煎茶器	B1 横					底盤内		青白	明治時代ノ復付	
2016	御器	御器	土器質土器	内側鍋	煎茶器	B1 横					底盤内		青白	明治時代ノ復付	
2017	御器	H21-4W	貿易品	青磁器	建葉器皿	91 横					底盤内		青白	明治時代ノ復付	
2018	御器	Q34-6C	貿易品	青磁器	建葉器皿	91 横					底盤内		青白	明治時代ノ復付	
2019	御器					E15					底盤内		青白	明治時代ノ復付	
2020	御器	H20-5W	貿易品	白磁器		E15	(16.0)				口縁部 1/5		灰白		
2021	御器	H20-6W	貿易品	白磁器		E15	(16.0)				底盤片		灰白		
2022	御器	白磁器		施釉器皿	瓦茶器皿	芦葉商	煎茶器	(1.2)			口縁～底部 1/12		灰白	煎茶器皿	
2023	御器		施釉器皿	瓦茶器皿	芦葉商	煎茶器	大腹 2	(12.2)	6.5	3.05	1/2	灰白	煎茶器皿		
2024	御器	土器付	施釉器皿	瓦茶器皿	泡山		(11.1)				口縁～底部 1/9		灰白	煎茶器皿	
2025	御器	土器付	施釉器皿	瓦茶器皿	泡山		(11.1)				底盤		灰白	煎茶器皿	
2026	御器	土器付	H20-5W	施釉器皿	綠小器	泡山	煎茶器	煎茶器	(11.0)		口縁部 1/6		灰白	煎茶器皿	
2027	御器	土器付	施釉器皿	綠小器	泡山	煎茶器	大腹 2	(10.0)			底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2028	御器		施釉器皿	内側鍋	泡山						底盤 1/2		灰白	煎茶器皿	
2029	丸井		施釉器皿	豆皿	泡山						口縁部 1/5		灰白		
2030	丸井		施釉器皿	豆皿	泡山						底盤片		灰白		
2031	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						口縁～底部 1/12		灰白	煎茶器皿	
2032	御器	御器	G51-5W	施釉器皿	豆皿	泡山	煎茶器	煎茶器	(25.7)		口縁部 1/7		灰白	煎茶器皿	
2033	御器		施釉器皿	豆皿	泡山						口縁部 1/4		灰白	煎茶器皿	
2034	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/2		灰白		
2035	御器	H20-5W	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/10		灰白	煎茶器皿	
2036	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2037	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2038	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/3		灰白	煎茶器皿	
2039	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						口縁～底部 1/6		灰白	煎茶器皿	
2040	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/6		灰白	煎茶器皿	
2041	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/6		灰白	煎茶器皿	
2042	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/6		灰白	煎茶器皿	
2043	御器		施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/2		灰白		
2044	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2045	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2046	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2047	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2048	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2049	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2050	御器	土器付	施釉器皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白	煎茶器皿	
2051	御器		近世復付器	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白		
2052	御器		豆皿	豆皿	泡山						底盤 1/4		灰白		
2053	御器		豆皿	豆皿	泡山						底盤 1/2		灰白		
2054	御器		豆皿	豆皿	泡山						底盤 1/2		灰白		
2055	御器		豆皿	豆皿	泡山						底盤 1/2		灰白		
2056	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(11.7)		6.5	10.05	(4.1)	口縁～底部 1/4		灰白	近世復付器
2057	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.1)		6.5	10.05	(4.1)	口縁～底部 1/4		灰白	近世復付器
2058	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.4)		6.5	10.05	(4.1)	口縁～底部 1/2		灰白	近世復付器
2059	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.1)		6.5	10.05	(4.1)	口縁～底部 1/2		灰白	近世復付器
2060	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.4)		6.5	10.05	(4.1)	口縁～底部 1/2		灰白	近世復付器
2061	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.1)		6.5	10.05	(4.1)	口縁～底部 1/2		灰白	近世復付器
2062	大内系復付器	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.7)					口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2063	大内系復付器	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)					口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2064	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2065	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2066	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2067	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2068	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2069	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2070	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2071	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2072	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2073	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2074	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2075	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2076	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2077	御器	土器付	近世復付器	豆皿	泡山	笠	(10.9)				口縁～底部 1/5		灰白	近世復付器	
2143	丸井	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5	2.55				口縁～底部 1/5		灰白		
2095	御器	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5	2.55				口縁～底部 1/5		灰白		
2096	大内系復付器	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5	4.95				口縁～底部 1/5		灰白		
2097	御器	F32-4W	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5				口縁～底部 1/5		灰白		
2098	御器	智者層	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5				口縁～底部 1/5		灰白		
2099	御器	智者層	F32-5W	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5			口縁～底部 1/5		灰白		
2100	御器	智者層	E34-4W	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5	10.05	6.5	10.05	1/6	灰白		
2101	御器	智者層	E34-5W	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5	10.05	6.5	10.05	1/6	灰白		
2102	御器	智者層	E34-6W	土器付	全蓋乳頭品	泡山	笠	6.5	10.05	6.5	10.05	1/6	灰白		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第234集

中屋遺跡

第二東名IC130地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市-2

(第1分冊)

平成22年12月24日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡市駿河区谷田23-20

TEL (054) 262-4261

印刷・製本

松本印刷株式会社

〒421-0303 横原郡吉田町片岡2210

TEL (0548) 32-0851(代)

